

**2018 年度**

# **年次報告書**

アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所

2020（令和2）年1月

## まえがき

2018(平成 30)年度は、国立大学法人にとって第 3 期中期目標期間の 3 年目にあたり、アジア・アフリカ言語文化研究所も、共同利用・共同研究拠点(以下、拠点と略)制度の下、「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」としての第 2 期 3 年目に突入した。

本研究所は、拠点としての目的を「今日、人類の 7 割を超える人びと(世界総人口約 66 億人のうち 48 億人以上)が暮らすアジア・アフリカ地域の多様な言語文化のあり方を研究し、中長期的には、21 世紀の地球の見取り図を描くうえで必要不可欠な、アジア・アフリカ世界に関する新たな認識の枠組みを提供するための基盤形成に寄与する一方、この地域の多様な言語文化のあり方をモデルに、未来の多元的世界の発展可能性を追求すること」と位置づけ、目的達成のために、以下の 3 つの領域において、国内外の関連研究者コミュニティによる共同利用・共同研究を推進している。

- 1) 臨地研究(フィールドサイエンス)に基づく国際的研究拠点としての共同研究プロジェクトの実施
- 2) アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資源の収集・分析・編纂及び研究成果の発信
- 3) 研究活動及び研修・出版・広報等の活動を通じた次世代研究者養成

本研究所は 2018 年度に実施された拠点第 2 期の中間評価において総合評価 A(拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待される)を得ることができた。しかしながら、中間評価では、国際的なコミュニティへの一層の貢献を求める厳しい指摘も受けた。これを受けて、本研究所では国際共同研究の成果増大、共同利用・共同研究課題の応募数拡大、研究成果のさらなる質の向上に取り組んでいる。さらに、拠点第 1 期期末評価結果のフォローアップ状況について付されていた「アジア及びアフリカ地域に関する新たな認識や価値の創出について、今後は、更なる努力が望まれる」という助言を受け、当研究所は、2018 年度に所員の自由で柔軟な発想からなる新たな研究活動のシーズを大きく育てていくための枠組みとして 2019 年度より「共同基礎研究」を立ち上げることを決定するなど、新たな方策にも着手している。とはいえ、拠点の様々な活動の中で最も重要な活動が、公募に基づいて審査・採択される共同利用・共同研究課題であることは言を俟たない。2018 年度に本研究所は、新規採択分と継続分を合わせて、共同利用・共同研究課題 34 件(うち国際共同研究は 6 件)を実施した。

一方、本研究所では、共同利用・共同研究拠点の中間評価と同じ 2013 年度に、拠点機能以外の研究所活動全体について所外の有識者による外部評価を実施し、その結果を踏まえて、研究所の共同利用性の拡大や、共同研究の質の向上に取り組んでいる。

このように本研究所は、所外・学外の研究者コミュニティによる助言や指摘を真摯に受け止め、研究活動の改善に不断に取り組んでいるものの、全国共同利用研究所時代と比べると、拠点制度の導入によって競争的性格が強まったことは明らかなうえ、2018 年度に実施された拠点第 2 期の中間評価では、これまでの絶対評価に代わって相対評価が導入されたことから、共同利用・共同研究拠点間の競争は激化したと言わざるを得ない。加えて、国立大学や拠点を取り巻く環境は、拠点の第 1 期中間評価や研究所の外部評価が進行する前後から急激な変化を見せてきた。文部科学省は、第 3 期中期目標期間中もイノベーションを生み出す大学改革やグローバル人材の育成を重視して、大学内の資源配分の見直しや組織再編、年俸制や混合給与の導入といった人事給与システムの改革を求めており、国立大学法人東京外国語大学に附置されて

いる本研究所も、大学内の他の部局と同様、国立大学改革への対応を迫られるようになってきている。資源の限られた小規模大学の附置研という条件下で、このように困難な状況に立ち向かい、研究の継続性や高度化を担保していくためには、今後、これまで以上に所員の努力が求められることだろう。

この年次報告書は、国立大学に附置される共同利用・共同研究拠点として、107 に及ぶ共同利用・共同研究拠点(2019年4月1日現在。ネットワーク型5拠点を含む)の中での競争を経ながら、共同研究を中心とした研究所のさらなる発展を目指すべく、2018年度の本研究所の成果について自己点検を行なうものである。

星 泉

2019年10月23日

# 目次

|  |     |
|--|-----|
| まえがき .....   | i   |
| I 報告編 .....  | 1   |
| I-1 研究計画と点検評価体制 .....  | 2   |
| I-1.1 年度計画と達成状況の総括 .....   | 2   |
| I-1.1.1 年次報告書「アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題」 .....                         | 2   |
| I-1.1.2 年度計画と達成状況の総括 .....   | 2   |
| I-1.2 点検評価体制 .....   | 4   |
| I-1.2.1 概要 .....   | 4   |
| I-1.2.2 本研究所の諸般の活動に関する諮問と評価 .....                                  | 5   |
| I-1.2.3 共同利用・共同研究課題に関する評価 .....                                    | 6   |
| I-1.2.4 個人研究に関する評価 .....   | 6   |
| I-1.2.5 本研究所の活動に対する中間評価の結果について .....                               | 7   |
| I-2 研究活動 .....   | 11  |
| I-2.1 概要 .....   | 11  |
| I-2.2 基幹研究 .....   | 13  |
| I-2.2.1 概要 .....   | 13  |
| I-2.2.2 多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 .....                           | 15  |
| I-2.2.3 アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクロ—マクロ系の連関2 ..... | 17  |
| I-2.2.4 中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景 .....                       | 18  |
| I-2.3 共同利用・共同研究課題 .....  | 20  |
| I-2.3.1 概要と外部評価 .....  | 20  |
| I-2.3.2 共同利用・共同研究課題 .....  | 21  |
| I-2.3.3 共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型) .....                              | 57  |
| I-2.3.4 共同利用・共同研究課題(短期滞在型) .....                                   | 61  |
| I-2.4 センター .....   | 64  |
| I-2.4.1 情報資源利用研究センター .....   | 64  |
| I-2.4.2 フィールドサイエンス研究企画センター .....                                   | 65  |
| I-2.5 既形成研究拠点 .....  | 67  |
| I-2.5.1 アジア書字コーパス拠点(GICAS) .....                                   | 67  |
| I-2.5.2 中東イスラーム研究拠点 .....  | 68  |
| I-2.6 所員の個人別研究活動 .....   | 68  |
| I-2.6.1 概要 .....   | 68  |
| I-2.6.2 所員の研究業績一覧 .....  | 69  |
| I-2.6.3 受賞 .....   | 133 |
| I-2.6.4 人事評価 .....   | 133 |
| I-2.7 外部資金による研究活動 .....  | 135 |

|          |  |     |
|----------|--|-----|
| I-2.7.1  | 特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」                               | 135 |
| I-2.7.2  | 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」 | 135 |
| I-2.7.3  | 科学研究費等によるその他の研究活動  | 136 |
| I-2.7.4  | 寄付金  | 137 |
| I-2.7.5  | 受託研究・受託事業  | 137 |
| I-3      | 組織運営   | 138 |
| I-3.1    | センター   | 138 |
| I-3.1.1  | 情報資源利用研究センター   | 138 |
| I-3.1.2  | フィールドサイエンス研究企画センター   | 138 |
| I-3.2    | 外部委員会  | 138 |
| I-3.2.1  | 運営委員会  | 138 |
| I-3.2.2  | 共同研究専門委員会  | 139 |
| I-3.2.3  | 研修専門委員会  | 140 |
| I-3.2.4  | 海外調査専門委員会  | 140 |
| I-3.2.5  | フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会  | 142 |
| I-3.2.6  | フィールドネット運営委員会  | 143 |
| I-3.2.7  | 編集専門委員会  | 143 |
| I-3.2.8  | 国際諮問委員会  | 143 |
| I-3.2.9  | 海外拠点専門委員会  | 143 |
| I-3.2.10 | 中東研究日本センター諮問委員会  | 144 |
| I-3.3    | 内部委員会等   | 144 |
| I-3.3.1  | 企画運営委員会  | 144 |
| I-3.3.2  | 研究戦略策定委員会  | 144 |
| I-3.3.3  | 文献資料(図書)担当   | 145 |
| I-3.3.4  | 国際交流担当   | 145 |
| I-3.3.5  | 出版担当   | 146 |
| I-3.3.6  | 基礎データ担当  | 147 |
| I-3.3.7  | 広報企画担当   | 147 |
| I-3.3.8  | 地域研究コンソーシアム担当  | 148 |
| I-4      | 研究者コミュニティと一般社会に開かれたプラットフォームの構築   | 149 |
| I-4.1    | 若手研究者養成プログラム   | 149 |
| I-4.1.1  | 言語研修の実施  | 149 |
| I-4.1.2  | フィールド言語学ワークショップ  | 149 |
| I-4.1.3  | 中東☆イスラーム関連セミナー   | 149 |
| I-4.1.4  | 文化／社会人類学研究セミナー   | 150 |
| I-4.1.5  | 大学院教育の現在   | 151 |
| I-4.1.6  | 研究機関研究員／特任研究員および日本学術振興会特別研究員   | 151 |
| I-4.2    | 国内連携研究活動   | 152 |

|          |                          |     |
|----------|--------------------------|-----|
| I-4.2.1  | 地域研究コンソーシアム              | 152 |
| I-4.2.2  | 国内研究者受け入れ(フェロー等)         | 152 |
| I-4.2.3  | 海外調査専門委員会の活動             | 156 |
| I-4.2.4  | フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会の活動 | 157 |
| I-4.2.5  | フィールドネット運営委員会の活動         | 157 |
| I-4.2.6  | 四大学連合文化講演会               | 157 |
| I-4.3    | 国際連携研究活動                 | 157 |
| I-4.3.1  | 国際シンポジウム・ワークショップ・セミナー等   | 157 |
| I-4.3.2  | 海外研究拠点                   | 158 |
| I-4.3.3  | 外国人研究員招へい                | 158 |
| I-4.3.4  | 外国からの研究者受け入れ(フェロー等)      | 158 |
| I-4.3.5  | 海外学術機関との研究協力協定           | 160 |
| I-4.3.6  | 研究未開発言語文化の調査事業           | 162 |
| I-4.3.7  | その他外部資金による国際連携研究         | 162 |
| I-4.4    | 研究成果の国内外への公開             | 162 |
| I-4.4.1  | AA 研フォーラムの実施             | 162 |
| I-4.4.2  | 公開講座の実施および外部公開講座への講師派遣   | 163 |
| I-4.4.3  | 出版および広報                  | 163 |
| I-4.4.4  | 収集資料等の展示・公開              | 163 |
| I-5      | 成果と課題                    | 164 |
| I-5.1    | 2018 年度の成果               | 164 |
| I-5.2    | 課題と展望                    | 165 |
| II       | 資料編                      | 170 |
| II-1     | 年表                       | 171 |
| II-2     | 予算・組織・機構                 | 174 |
| II-2.1   | 研究所の予算                   | 174 |
| II-2.1.1 | 2018 年度予算                | 174 |
| II-2.1.2 | 運営費交付金(2018 年度)          | 174 |
| II-2.1.3 | 科学研究費補助金                 | 175 |
| II-2.1.4 | 受託研究・受託事業等               | 176 |
| II-2.1.5 | 寄付金等                     | 176 |
| II-2.2   | 外部委員リスト                  | 177 |
| II-2.2.1 | 運営委員会                    | 177 |
| II-2.2.2 | 共同研究専門委員会                | 177 |
| II-2.2.3 | 研修専門委員会                  | 178 |
| II-2.2.4 | 海外調査専門委員会                | 179 |
| II-2.2.5 | フィールドサイエンス・コロキウム運営委員     | 179 |
| II-2.2.6 | フィールドネット運営委員会            | 180 |
| II-2.2.7 | 編集専門委員会                  | 180 |

|  |     |
|--|-----|
| II-2.2.8 国際諮問委員会.....  | 181 |
| II-2.2.9 海外拠点専門委員会.....  | 181 |
| II-2.2.10 中東研究日本センター諮問委員会.....   | 182 |
| II-2.3 内部委員会・業務担当 .....  | 182 |
| II-2.3.1 内部委員一覧.....   | 182 |
| II-2.3.2 各種業務分担.....   | 182 |
| II-2.3.3 全学委員一覧.....   | 183 |
| II-3 研究活動の詳細.....  | 185 |
| II-3.1 センター .....  | 185 |
| II-3.1.1 情報資源利用研究センター.....   | 185 |
| II-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター .....  | 190 |
| II-3.2 共同利用・共同研究課題.....  | 192 |
| II-3.2.1 共同利用・共同研究課題実施状況.....  | 192 |
| II-3.2.2 共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)実施状況 .....   | 296 |
| II-3.2.3 共同利用・共同研究課題(短期滞在型)実施状況 .....  | 298 |
| II-3.3 外部資金による研究の詳細.....   | 299 |
| II-3.3.1 特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」<br>.....                           | 299 |
| II-3.3.2 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」..... | 314 |
| II-3.3.3 科学研究費等によるその他の研究活動 .....   | 315 |
| II-4 研究者コミュニティと一般社会に開かれた研究プラットフォームの構築.....   | 336 |
| II-4.1 若手研究者養成プログラム.....   | 336 |
| II-4.1.1 言語研修の実施状況.....  | 336 |
| II-4.1.2 フィールド言語学ワークショップ実施状況 .....   | 336 |
| II-4.1.3 中東☆イスラーム関連セミナー実施状況.....   | 337 |
| II-4.1.4 文化／社会人類学研究セミナー実施状況.....   | 341 |
| II-4.1.5 大学院教育の現在.....   | 342 |
| II-4.1.6 研究機関研究員／特任研究員および日本学術振興会特別研究員 .....  | 344 |
| II-4.2 国内連携研究活動.....   | 346 |
| II-4.2.1 地域研究コンソーシアム.....  | 346 |
| II-4.2.2 国内研究者の受け入れ(フェロー等) .....   | 346 |
| II-4.2.3 海外学術調査総括班の活動 .....  | 360 |
| II-4.2.4 四大学連合附置研究所長懇談会 .....  | 360 |
| II-4.2.5 シンポジウム等.....  | 361 |
| II-4.3 国際連携研究活動.....   | 368 |
| II-4.3.1 国際シンポジウム等一覧.....  | 368 |
| II-4.3.2 外国人研究員招へい.....  | 378 |
| II-4.3.3 外国からの研究者受け入れ(フェロー等) .....   | 379 |

|                                    |     |
|------------------------------------|-----|
| II-4.3.4 研究未開発言語文化の調査事業.....       | 382 |
| II-4.4 研究成果と資料の公開.....             | 382 |
| II-4.4.1 出版.....                   | 382 |
| II-4.4.2 オンライン研究資源構築・公開状況一覧.....   | 385 |
| II-4.4.3 公開講座の実施、外部公開講座への講師派遣..... | 392 |
| II-4.5 公共的利用.....                  | 395 |
| II-4.5.1 共同利用スペース等の稼働状況.....       | 395 |
| II-4.5.2 文献資料室の利用状況.....           | 402 |

## 凡例

AA 研: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

ILCAA: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies

# I 報告編

# I-1 研究計画と点検評価体制

## I-1.1 年度計画と達成状況の総括

### I-1.1.1 年次報告書「アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題」

アジア・アフリカ言語文化研究所(AA 研)は、文部科学大臣に認定された言語学・文化人類学・地域研究分野の共同利用・共同研究拠点として、アジア・アフリカの言語文化に関する総合的研究を行い、アジア・アフリカ世界に関する新たな認識枠組み提供のための基盤形成に寄与することを目的としている。

この目的を達成するために、

1. 臨地研究に基づく国際的研究拠点として共同研究プロジェクトを推進すること
2. アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資源拠点及び研究成果の発信拠点としての活動を進めること

3. 研究活動及び研修・出版・広報等の活動を通じての後継者養成を行うこと

【以上、国立大学法人東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所規程より】

を重点的活動目標としている。

この理念に沿って研究活動をいっそう充実させるため、本研究所では全国共同利用研究所時代の 1996 年度(平成 8 年度)以来、自己点検評価や第三者評価に基づいて、自己点検評価報告書「アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題」を刊行してきた。本報告書は、2018 年度における本研究所の研究体制と、それによって達成された研究および実施された活動の全体を報告するものである。

本報告書は「I 報告編」と「II 資料編」の 2 部からなり、「I 報告編」は、諸種の研究(基幹研究、両センター、共同利用・共同研究課題、既形成拠点、個人研究など)と諸種の活動(所内組織運営および共同利用・共同研究拠点としての教育・情報発信・資料構築及び公開・研究連携事業など)の概要を報告し、現状分析と今後の課題の概括を添える。「II 資料編」は、「I 報告編」において概括されている諸研究と諸活動の詳細を報告する。

### I-1.1.2 年度計画と達成状況の総括

本研究所における 2018 年度の研究活動は、文部科学省がすべての共同利用・共同研究拠点の機能強化経費(共通政策課題分)「共同利用・共同研究拠点の強化(プロジェクト分)」の予算配分額を突如、一律 26%削減したこと、またもともと著しく脆弱な財政基盤しか持たない東京外国語大学に巨額の部局予算を奪われ続けていることにより、史上最大規模の財源難に見舞われたにもかかわらず、所員と共同研究員の多方面にわたる努力によって計画どおり進捗し、本報告書に報告するとおり、充実した成果を挙げた。本年度の研究・運営計画は十分に達成されたと言える。以下は、文部科学省に提出した「共同利用・共同研究拠点平成 30 年度実施計画書」に記載した年度計画とその達成状況の概要である。【2018 年度の成果の概括は、[I-5.1 2018 年度の成果](#)の項を参照】

## 共同利用・共同研究拠点としての年度計画

1. 2016 年度および 2017 年度からの継続国内共同研究課題 20 件および外国人客員共同研究型課題 2 件と、公募および前年度中に共同研究専門委員会による審査を経て採択された国内共同利用・共同研究課題 7 件、外国人客員共同研究型課題 3 件、国内短期滞在型課題 3 件の、合わせて 35 件を招へい外国人研究員 5 名とともに実施する。これらの課題への参加を見込まれる関連研究者数は全体で延べ 423 名である。
2. 海外学術調査フォーラムを 6 月 16 日に開催するほか、海外での臨地調査に関わる手法を実践的・理論的に開発することを目的とするフィールドサイエンス・コロキウム事業の研究会を随時開催、さらに分野を越えた研究者の協力・連携関係に資するフィールドネット関連事業を行う。
3. 共同利用・共同研究課題に対する若手研究者の積極的な参加を広く募る一方、夏にヨルバ語、メエ(エカリ)語、土族語の言語研修、9 月に中東☆イスラーム教育セミナー、12 月に中東☆イスラーム研究セミナー、1 月にオスマン文書セミナーを開催する。
4. 必要な研究資料を適宜収集・整備する。
5. 研究成果 10 点程度を刊行するとともに、関連データおよび過去の共同研究プロジェクト刊行物の電子化と公開の準備を進める。また、広報誌『FIELDPLUS(フィールドプラス)』を企画・編集して刊行する一方、研究成果を紹介する資料展示を実施し、オンラインでも公開する。
6. 所外の研究者・有識者が過半数を占める運営委員会を年 2 回、共同研究専門委員会を年 1 回、海外調査専門委員会も年 1 回開催し、特に 10 月の共同研究専門委員会では、平成 31 年度から発足させる新規国内課題の審査を行う。

## 達成状況

1. 2016 年度および 2017 年度からの継続国内共同研究課題 20 件および外国人客員共同研究型課題 2 件と、公募および前年度の共同研究専門委員会による審査を経て採択された国内共同利用・共同研究課題 7 件、外国人客員共同研究型課題 2 件、国内短期滞在型課題 3 件の、合わせて 34 件を招へい外国人研究員 4 名とともに実施した。なお、2017 年度の共同研究専門委員会による審査を経て採択された外国人客員共同研究型課題 3 件のうち 1 件については、応募した外国人研究者側の都合により、残念ながら中止を余儀なくされた。
2. 海外学術調査フォーラムを 6 月 16 日に開催したほか、フィールドサイエンス・コロキウム・ワークショップを 2 回開催した(「『環境変化とインダス文明』プロジェクトから」「『地域研究からみた人道支援』をめぐって」)。さらに、分野を越えた研究者の協力・連携関係に資するフィールドネット・ラウンジ企画を公募し、「西アフリカ・イスラーム研究の新展開」「共同研究のすすめ:ブラジル地域研究における Cross-region×Collaboration の実践を通じて」を採択して実施した。
3. 共同利用・共同研究課題に若手研究者を積極的に参加させるべく、短期滞在型の共同利用・共同研究課題を公募する一方、夏にヨルバ語、メエ(エカリ)語、土族語の言語研修、9 月に中東☆イスラーム教育セミナー、11 月に文化/社会人類学セミナー、12 月には中東☆イスラーム研究セミナー、1 月にもオスマン文書セミナーを開催した。
4. 年間 1 千万円程度の予算を配分して、必要な研究資料を適宜収集・整備した。
5. 研究成果 18 点、電子出版物 5 点を刊行するとともに、関連データおよび過去の共同研究プロジェクト

刊行物の電子化と公開の準備を進めた。また、広報誌『FIELDPLUS(フィールドプラス)』20号、21号を刊行する一方、研究成果を紹介する企画展「祈りにつながるイスラーム:エチオピア西部の信仰とその歴史」を実施した。

6. 所外の研究者・有識者が過半数を占める運営委員会を年2回、共同研究専門委員会を年1回、海外調査専門委員会も年1回開催し、特に10月27日開催の共同研究専門委員会では、2019年度から発足させる新規課題の審査を行って、新規に国内共同利用・共同研究課題10件を採択した。共同研究専門委員会はほかにも、外国人客員共同研究型課題5件を採択している。

## I-1.2 点検評価体制

### I-1.2.1 概要

本研究所の研究の一層の充実を目指して、国立大学法人化後の第一期中期計画(2004～2009年度)に盛り込まれた方針、すなわち「所内に評価制度を設け、研究成果の評価基準を策定し、定期的に業績の評価を行う」に従い、2003年(平成15年)に教授会決定された自己評価書の作成手順および研究業績評価指針は次のとおりである。

1. 研究所の基幹研究プロジェクトをはじめ、研究及び研究関連業務全般にわたる年度目標とその達成状況の評価し、成果の概要及び一覧を付して年度ごとの自己評価書を作成・公開する。
2. 業績評価基準を設ける。
  - 1) 評価結果は、人事に適切に反映されるように努める。
  - 2) 実績が研究資源配分などに反映される制度を検討する。
  - 3) 多様な研究活動の必要性に相応した柔軟で効果的な勤務形態を可能にする。
3. 中期計画に従い、人事評価基準を、次の三項目に大別する。
  - 1) 学術的な個人業績に関するもの
  - 2) 学術的な共同研究に関わるもの
  - 3) AA研の活動及びその成果普及に関わるもの

本研究所における研究活動自己評価は、2010年度に本研究所が全国共同利用研究所から新設の「共同利用・共同研究拠点」に移行した後も、1年間はこの指針に従い、共同研究(4つの基幹研究、情報資源利用研究センター、フィールドサイエンス研究企画センター、2つの既形成拠点、共同研究課題/共同研究プロジェクト等とその関連業務)と、その基盤をなす個人研究という2種の研究活動について、前者に関しては外部からの評価を受け、後者に関しては自己申告する体制をとった。すなわち、(1)学外委員を中心とする運営委員会、専門委員会等による助言や評価と、(2)年度当初に所員が個別に提出した研究活動計画の翌年度当初における達成度自己申告、という2種の評価体制である。このうち、(2)に関しては、本研究所の共同利用・共同研究機能をより重視するという観点から、2010年度をもって自己評価書への掲載をとりやめ、各年度の所員の研究業績一覧だけを記載することとした。また、2013年度に自己評価書の名称も「年次報告書」に改めた。

なお、一部の例外を除いて委員の過半数を学外有識者が占める専門委員会等による助言と評価は、(1)

所の研究活動及び関連業務全般に関しては「運営委員会」(2) 共同利用・共同研究課題に関しては「共同研究専門委員会」、(3) その他の研究活動及び関連業務に関しては「研修専門委員会」「海外調査専門委員会」「編集専門委員会」「国際諮問委員会」「海外拠点専門委員会」「中東研究日本センター諮問委員会」がそれぞれ実施している。【所外委員を含む各委員会の詳細は [I-3.2 外部委員会](#)の項を参照】

年度計画の提出は、基幹研究、両センター、既形成拠点、共同利用・共同研究課題、所員個人の各レベルに義務づけられている。ただし公募による共同利用・共同研究課題は、例年 10～11 月頃に開催される審査会を経て採択されることから、審査にあつた共同研究専門委員会の評価を考慮し、場合によっては必要な修正を施した上で確定されている。

このように本研究所の自己評価体制は、一方では、所の活動全般（「運営委員会」）、主要な研究活動（「共同研究専門委員会」）、主要な業務（「研修専門委員会」「海外調査専門委員会」「編集専門委員会」「国際諮問委員会」「海外拠点専門委員会」「中東研究日本センター諮問委員会」）について外部からの評価・助言を受け、また他方では、所内諸組織の各レベルについて個別に研究活動計画の達成度を申告するという、種々の角度から幾重にも点検・評価する仕組みとなっている。

外部の意見を取り入れた自己点検・評価作業の集成として毎年作成される本報告書は、過年度をふり返り、新年度の研究の活性化と組織の柔軟性を保障する上で重要な役割を果たしている。すなわち、本報告書により、AA 研における種々のレベルの研究の全体像を所内外の研究者が共有し、所の将来を展望するための確たる基盤を形成しようとするものである。

### I-1.2.2 本研究所の諸般の活動に関する諮問と評価

共同利用・共同研究拠点である本研究所のあり方全般について学外の研究者・有識者から助言と評価を得るために、運営委員会が設置されている。【詳細は [I-3.2.1 運営委員会](#)の項を参照】

また、研究者コミュニティの意向を反映した共同利用・共同研究のあり方を維持するために、所外の研究者を加えたいくつかの委員会が設置されている。

なかでも共同研究専門委員会は、公募による共同利用・共同研究課題の質の向上を図るため、すべての共同利用・共同研究課題の審査と評価に当たっている。また、旧海外学術調査総括班の活動や、言語研修、編纂・出版事業の運営に学外からの意見を生かすため、海外調査専門委員会、研修専門委員会、編集専門委員会がそれぞれ設置されている。【詳細は [I-3.2.2 共同研究専門委員会](#)、[I-3.2.3 研修専門委員会](#)、[I-3.2.4 海外調査専門委員会](#)、[I-3.2.7 編集専門委員会](#)の項を参照】

さらに 2010 年度からは、国際的な「共同利用・共同研究拠点」としての一層の発展を目指し、国際諮問委員会と海外拠点専門委員会が設置された。後者は、バイルート海外拠点の運営のために 2007 年以来設置されてきた中東研究日本センター専門委員会を発展させたもので、コタキナバル・リエゾンオフィスの運営、さらには中東☆イスラーム研究／教育セミナーについても、併せて助言と評価の対象としている。バイルート海外拠点の運営についてはほかに、現地の有識者による中東研究日本センター諮問委員会も設置されている。【詳細は [I-3.2.8 国際諮問委員会](#)、[I-3.2.9 海外拠点専門委員会](#)、[I-3.2.10 中東研究日本センター諮問委員会](#)の項を参照】

### I-1.2.3 共同利用・共同研究課題に関する評価

本研究所の理念に沿って、2018年度には公募による共同利用・共同研究課題27件(うち14件が所外代表)が組織され、活発な共同研究事業が展開された。

人文社会系で初の全国共同利用研究所として設置されて以来、本研究所の活動の根幹を成してきた共同研究プロジェクトに対する評価は2004年度から試験的に開始され、2005年度には評価を担当する「共同利用委員会」が設置されて、2006年度より同委員会による評価が完全実施されてきた。その結果、全国共同利用研究所における最重要事業のひとつであった共同研究プロジェクトは格段に充実してきたと言える。こうした評価体制は、2010年度にAA研が「共同利用・共同研究拠点」に移行した後も基本的に変更されることはなく、新設の共同研究専門委員会が年度末に共同利用・共同研究課題の実績報告を受けて、書面審査を実施し、助言と評価を与えている。【詳細はI-2.3 共同利用・共同研究課題の項を参照】

一方、「共同利用・共同研究拠点」制度が、「募集による共同利用・共同研究の実施」と、「採択にあたって学外委員が半数を占める審査委員会の審査」を義務づけていることに鑑み、2018年度も共同利用・共同研究の2019年度開始分の新規課題を公募し、共同利用・共同研究課題審査会でプレゼンに基づき共同研究専門委員会による審査を経て、応募のあった10件の全て(うち5件が所外代表)を採択した。なお、審査に関しては、2010年度の共同研究専門委員会による指摘を受けて改善を図った結果、2011年度以降は次の4項目について審査し、5段階で評価を行っている。

- 研究の背景: 研究目的が明確で、本研究所の共同利用・共同研究拠点としての目的に合致しているかどうか。研究の意義、特に課題として展開することの意義が明確かどうか。
- 期待される研究成果: 期待される研究成果が明確、具体的で、我が国の言語学・文化人類学・歴史学・地域研究とその関連諸分野の発展に貢献できるかどうか。
- 研究の実施計画: 計画、方法が十分に練られ、かつ研究組織、研究者の構成が妥当なものかどうか。公開計画が実現性の高いものかどうか。
- 全体評価

従来の短期共同研究員制度を改革して昨年度から公募を始めた共同利用・共同研究課題(短期滞在型)については2019年度実施枠への応募はなかったものの、2016年度から募集を開始した共同利用・共同研究課題(外国人客員型)については、2019年度実施枠への応募が7件あり、過半数を学外委員が占める共同研究専門委員会の審査を経て、5件が採択された。ただし、共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)3件は2020年4月から実施のため、2019年度中に実施される新規採択課題は計12件となる。

### I-1.2.4 個人研究に関する評価

本研究所ではこれまで、「個人別達成度自己評価」という形で、所員が実施する共同研究と個人研究の両面を含む研究活動を、個人別に評価する方式を採ってきた。これは、各所員が年度当初に基幹研究、両センター、既形成拠点、公募による共同研究課題/共同研究プロジェクト等の共同研究ならびに個人研究の両研究活動に関する研究活動計画を提出し、翌年度初頭にそれがどこまで達成できたかを個別に自己申告するものである。

しかしながら、本研究所が共同利用・共同研究拠点に認定されたのみならず、基幹研究や既形成拠点、

さらには2つのセンターによる事業が展開されるに至った現在、これらの研究活動は当然、各個人の研究業績にも反映されることになる。換言するならば、共同研究、基幹研究、2つのセンターによる事業とかかわりを持たない「個人研究」は存在する余地がないと言えるだろう。したがって、2011年度からは共同研究と個人研究を別個のものにとらえる前提に立脚していた「個人別達成度自己評価」の自己評価書への記載を取りやめ、各所員の研究業績を列挙して、公開する形に変更した。【詳細は [I-2.6.2 所員の研究業績一覧](#)の項を参照】

## I-1.2.5 本研究所の活動に対する中間評価の結果について

本研究所は2010年度にそれまでの全国共同利用研究所から新設の共同利用・共同研究拠点へと移行したが、制度上、2010年4月1日に認定された共同利用・共同研究拠点の有効期間は一律、2016年3月31日までの6年間となっており、文部科学省は認定期間の半分にあたる3年が経過した2013年度に、すべての共同利用・共同研究拠点に対する初めての中間評価を実施した。加えて2016年度には、「中間評価のフォローアップを行うとともに、第3期中期目標期間における各大学における拠点の位置づけの明確化や拠点機能の向上に向け」、初の期末評価を実施。期末評価の結果に基づいて、次期認定を希望した拠点の認定更新可否が決定された。

絶対評価で行われた上記中間評価および期末評価において、本研究所はともに総合評価S(拠点としての活動が活発に行われており、共同利用・共同研究を通じて特筆すべき成果や効果が見られ、関連コミュニティへの貢献も多大であったと判断される)こそ逃したものの、総合評価A(拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待される)を獲得し、2016年4月1日からの6年間も引き続き共同利用・共同研究拠点に認定されて今日に至っている。なお、人文・社会科学系の共同利用・共同研究拠点でSと評価された拠点は中間評価・期末評価ともに4拠点(36%)、Aが中間評価5拠点(45%)、期末評価6拠点(55%)、B(拠点としての活動は行われているものの拠点の規模等と比較して低調であり、作業部会からの助言や関連コミュニティからの意見等を踏まえた適切な取組が必要と判断される)が中間評価2拠点(18%)、期末評価1拠点(9%)であった。

2016年4月1日に始まった共同利用・共同研究拠点の第2期にあっても、すべての共同利用・共同研究拠点が引き続き中間評価と期末評価を受けることになっている。もともと、第2期には中間評価の実施時期が1年前倒しとなり、拠点認定の更新から2年後の2018年度に実施された。その目的は「各拠点の活動状況や成果、研究者コミュニティの意向を踏まえた取組が適切に行われているかなどを確認し、拠点の目的が十分達成されるよう適切な助言を行うことで、今後の学術研究の基盤強化と新たな学術研究の展開に資すること」とされていたが、拠点の第2期ではそれまでの絶対評価が相対評価に変更され、共同利用・共同研究拠点は突如、厳しい生存競争にさらされることとなった。「評価区分の割合の目安」として、総合評価Sが20%程度、同Aが50%程度、同BとC(拠点としての活動が十分とは言えず、認定の基準に適合していない状況にある可能性がある)と判断される)が30%程度という数字まで提示され、C評定を受けた場合には、中間評価結果の決定後に当該拠点の認定が取り消される可能性も示唆されたのである。

中間評価は、2018年3月12日に作成依頼のあった中間評価用調書を同年5月25日までに文部科学省に提出し、省内に設置された専門委員会が書面審査を行う形で実施され、必要な場合に行われるヒアリングを本研究所も7月20日に文部科学省で受けた(飯塚所長、中山副所長、市川研究協力課長、細谷同課長補佐が出席)。

中間評価結果は10月31日に公表され、本研究所は前回の中間評価、期末評価に続いて、総合評価

A を得ることができた。ちなみに、人文・社会科学系で S と評価されたのは 1 拠点(13%)のみ、A が 4 拠点(50%)、B が 3 拠点(38%)で、社会科学系の拠点はすべて S または A 評価を受けたものの、人文系で総合評価 A を得ることができたのは本研究所だけであった。

中間評価結果にはさらに、「アジア及びアフリカ言語文化に関する言語学・文化人類学・地域研究の各分野において、共同利用・共同研究に積極的に取り組み、対象地域のみならず海外の主要な研究機関との協定に基づき、外国人研究者の受入れにも取り組んでおり評価できる」との総合コメントのほか、「海外の拠点を共同利用に供し、アジア・アフリカ言語文化に関する言語学・文化人類学・地域研究の中核的な拠点として共同利用・共同研究を展開している」(拠点としての適格性について)、「若手研究者を積極的に参加させるための新たな試みを実施されている」(拠点としての活動状況について)、「共同利用・共同研究にかかる支出割合は高く、関連研究者コミュニティへ貢献している」(関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献について)等々、肯定的な評価コメントも付されていたが、同時に「今後、海外の研究機関からの人材確保や研究課題の国際公募などによる共同利用・共同研究の国際化の一層の推進が期待される」との助言や「辞典の発刊など特色ある研究成果が上がっているものの、国際学術誌に掲載された論文は多いとは言えない」(拠点における研究活動の成果について)などの批判も寄せられていた。また、期末評価結果のフォローアップ状況については「アジア及びアフリカ地域に関する新たな認識や価値の創出について、今後は、更なる努力が望まれる」、東京外国語大学の強み・特色としての機能強化への貢献についても、「拠点を利用して学位を取得した学内の大学院生はおらず、今後の取組について検討することが望まれる」との厳しい評価が下された。これを受けて本研究所は早速、11月26日開催の運営委員会に中間評価結果への対応策を諮問するなど、2021年度に実施予定の期末評価に向けた対策の検討を始めている。もっとも、「拠点を利用して学位を取得した学内の大学院生」はたまたま今回の中間評価の対象となった2016年度・2017年度に存在しなかっただけで、2018年度にはすでに、所員が主任指導教員を務めた学位取得者が生まれている。

なお、中間評価要項によれば、本研究所に係る評価の観点は以下のとおりであった。

#### ① 拠点としての適格性

○ 研究実績、研究水準、研究環境等に照らし、当該拠点の目的たる研究の分野における中核的な研究施設であると認められるか。

・下記のような点を総合的に考慮して、各拠点が当該分野における中核的な研究施設であると認められるか。

- > 当該研究施設におけるこれまでの研究成果
- > 競争的資金等の採択状況
- > 卓越した研究者やリーダーの存在
- > 共同利用・共同研究に参加する関連研究者が利用できる研究スペースや宿泊施設等の確保

○ 共同利用・共同研究に必要な施設、設備、資料及びデータ等を備えているか。

・当該研究施設が有する、共同利用・共同研究に必要な施設、設備、資料及びデータ等の整備状況等

○ 共同利用・共同研究に参加する関連研究者に対し、施設、設備、資料及びデータの利用に関する技術的支援、必要な情報の提供その他の支援を行うための必要な体制が整備されているか。

- ・共同利用・共同研究に参加する関連研究者に対する支援業務に従事する専任職員（教員、技術職員、事務職員等）が配置されているか。
- ・技術的支援について、例えば、技術職員の配置や設備のスムーズな利用等の面で、適切な体制が整備されているか。
- ・関連研究者に対して必要な情報を継続的に提供するための体制が整備されているか。
- ・その他拠点の活動内容に応じて、例えば、事務体制や研究スペースの確保、宿泊施設の確保等が適切に行われているか。
- ・関連研究者に対する支援を行うに当たり、必要な全学的支援（予算・人員の配分等）が行われているか。

## ② 拠点としての活動状況

○ 全国の関連研究者に対し、共同利用・共同研究への参加の方法、利用可能な施設、設備、資料及びデータ等の状況、申請施設における研究の成果その他の共同利用・共同研究への参加に関する情報の提供が広く行われているか。

・下記のような情報について、例えば、ホームページやメーリングリスト、ソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)、学会誌での情報提供等により、広く情報提供が行われているか。

- > 共同利用・共同研究への参加の方法（課題の公募要領、施設の利用要領・利用資格等）
- > 共同利用・共同研究において利用可能な施設、設備、資料及びデータ等の状況
- > 拠点における研究の成果
- > その他共同利用・共同研究に参加する際に得られる支援の内容等

○ 多数の関連研究者の参加促進・関係分野への働きかけや大型プロジェクトの企画運営等、関連分野の発展への取組が行われているか。

- ・特に公私立の研究者の参加を促進するための取組が行われているか。
- ・共同利用・共同研究を活かした人材育成が行われているか。
- ・大型プロジェクトの発案、運営、ネットワークの構築等に参画し中核的な取組をしているか（日本学術会議のマスタープランの重点大型計画、科学技術・学術審議会のロードマップへの掲載等）。

○ 拠点の運営に当たり、広く外部の意見を取り入れているか、または、取り入れることができる仕組みとなっているか。

- ・例えば、全国の関連研究者の意向を反映させやすいような体制や組織構成となっているか。
- ・積極的にコミュニティからの意見を取り入れるような取組がなされているか。

○ 共同利用・共同研究に多数の関連研究者が参加しているか。

・共同利用・共同研究の実績（設備の利用状況、データベースへのアクセス数、共同研究の件数、研究集会やシンポジウムの開催数、共同研究者数等）は研究施設の規模や実績と比較して十分か。

○ 共同利用・共同研究の課題等の採択に当たり、公平な審査が可能な仕組みが整備されているか。

・共同利用・共同研究の課題等の募集方法や採択方法が適切か（広くコミュニティに開かれているか、公平に採択されているかなど）。

③ 拠点における研究活動の成果

- 拠点認定更新時の申請内容がどの程度達成されているか。
- ・拠点認定を更新した際の目的・目標に対してどの程度達成されたか。
  
- 共同利用・共同研究を通じて優れた研究成果が生み出されているか。
- ・下記のような客観的な指標から、当該拠点の共同利用・共同研究を通じて優れた研究成果が生み出されているといえるか。
  - ＞ 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数、高いインパクトファクターを持つ雑誌等への掲載、共同利用・共同研究が発展してプロジェクト研究につながったもの等。
  - ＞ 共同利用・共同研究機能でしか成し得ない研究成果が生み出されているか(異分野融合による新分野の創成等)。
  
- 研究活動の成果が地域社会や広く国際社会に対しても貢献できているか。
- ・公開講座や公開講演会等の実施状況

④ 関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献

- 関連研究分野や関連研究者コミュニティの発展に貢献できているか。

⑤ 期末評価結果のフォローアップ状況

- 期末評価結果で示した改善点にどのように対応しているのか。

⑥ 期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献

- 国際化へどのように貢献しているのか(国際化へ向けた体制の強化や国際公募の状況等)。
- 若手・女性・外国人研究者の人材育成及び博士課程学生の教育にどのように貢献しているのか。
- 企業との連携等によるイノベーションの創出にどのように貢献しているのか。
- 地域の中核拠点として地方の活性化等にどのように貢献しているのか。
- 年俸制やクロスアポイントメント制度の導入等により人材の流動化にどのように貢献しているのか。

⑦ 拠点としての今後の方向性

- 国立大学改革が進む中、第3期中期目標期間において、拠点として取り組む方向性へ向かってどのように進んでいるのか。

・重視する方向性の例:グローバル化、人材養成機能の強化、新分野創成、異分野融合研究の推進等

## I-2 研究活動

### I-2.1 概要

本研究所は、アジア・アフリカの言語文化に関する総合的研究を目的とする大学間の共同利用研究所として 1964 年に設置された。基本的に言語学、文化人類学、歴史学、地域研究の各分野の研究者から構成されている。2014 年に創立 50 周年を迎えたが、過去半世紀以上にわたって、国内外の共同研究や海外学術調査の組織化、研究資料の蓄積と公開、言語研修、辞典編纂などを通じて、この分野の研究推進に主導的な役割を果たしてきた。

2010 年度から新たな共同利用・共同研究拠点(以下、拠点と略)制度の下で、「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」(研究分野としては言語学、文化人類学、地域研究)としてのスタートを切るにあたり、本研究所は、拠点としての中長期的な目標を「今日、人類の 7 割を超える人びと(世界総人口約 66 億人のうち 48 億人以上)が暮らすアジア・アフリカ地域の多様な言語・文化のあり方を研究し、中長期的には、21 世紀の地球の見取り図を描くうえで必要不可欠な、アジア・アフリカ世界に関する新たな認識の枠組みを提供するための基盤形成に寄与する一方、この地域の多様な言語・文化のあり方をモデルに、未来の多元的世界の発展可能性を追求すること」と位置づけ、目標達成のために以下の 3 つの領域において、国内外の関連研究者コミュニティによる共同利用・共同研究を推進していくことを活動の中心に据えた。

- 1) 臨地研究(フィールドサイエンス)に基づく国際的研究拠点としての共同研究プロジェクトの実施
- 2) アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資源の収集・分析・編纂及び研究成果の発信
- 3) 研究活動及び研修・出版・広報等の活動を通じた次世代研究者養成

このような研究活動・研究事業を強力に推進するため、本研究所は 2008 年度以来所内及び運営諮問委員会(当時)において継続的な検討を行ったすえ、文部科学省の国立大学評価委員会からも高い評価を受けていた研究ユニットをより重点化する形で、2010 年度に 4 つの基幹研究(「言語ダイナミクス科学研究」「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」)を発足させた。これらの基幹研究は、本研究所が重視する研究領域を明示するとともに、共同利用・共同研究課題とも連動しながら、拠点としての活動を一層深化・充実させる機能を期待されていた。

さらに 2016 年度には、共同利用・共同研究拠点第 2 期の開始に合わせて、2004 年度以来 12 年ぶりにプロジェクト研究部をディシプリン別の 3 研究ユニット(言語学、文化人類学、地域研究・歴史学)に再編する一方、基幹研究も「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究」「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」の 3 つに組み替え、新たなスタートを切ることとなった。これと並行して、従前から設置されている 2 つのセンター(情報資源利用研究センター及びフィールドサイエンス研究企画センター)、また対外的に形成されてきた 2 つの研究拠点、すなわちアジア書字コーパス拠点(GICAS)及び中東イスラーム研究拠点も既形成拠点としての研究活動を継続している。

所員の多くは基幹研究、既形成拠点またはセンターに所属し、共同利用・共同研究拠点にふさわしい国内

外の研究者との密接な協力に基づく共同研究活動を推進しているが、2018 年度には、2022 年度から始まる共同利用・共同研究拠点の第 3 期をも見据える形で、新たな所内共同研究のシーズを育てるべく、研究戦略策定委員会を中心に検討を重ねた結果、複数の所員による研究活動のシーズを「共同基礎研究」として公的に認定することを決定。2019 年度からは新たに 3 つの共同基礎研究が発足することになっている。

こうした体制の下、2018 年度に本研究所が遂行した具体的な研究活動は次の通りである。

1. 特別経費「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同研究」に基づき、2016 年度・2017 年度からの継続共同利用・共同研究課題 20 件および外国人客員共同研究型課題 2 件と、2017 年度の公募および共同研究専門委員会による審査を経て採択された国内共同利用・共同研究課題 7 件、外国人客員共同研究型課題 2 件、国内短期滞在型課題 3 件の、合わせて 34 件を招へい外国人研究員 4 名とともに実施した。
2. 急速に複雑化・深刻化するアジア・アフリカの現代的諸問題に対応するため、本研究所がこれまで研究分野別に進めてきた研究を有機的に関連させて質的に飛躍させ、その基盤の上に国内外の研究機関・現地コミュニティと連携した問題解決のための研究体制を構築すべく、2016 年度に特別経費を得て発足させた全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」の構成主体となっている 3 つの基幹研究の合同研究集会を開催し、現代的諸問題研究の飛躍的發展を図った。これと並行して 3 つの基幹研究、すなわち「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究」「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」が活動を行い、それぞれ国際シンポジウム、公開研究会、公開セミナー、ワークショップなどを組織した。【詳細は [II-3.3.1 アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築](#)を参照】
3. 情報資源利用研究センターでは、研究資源の構築と発信を通じた共同利用を進めるため、国内外の研究者が利用可能な電子辞書の充実(モンゴル語、チュルク諸語など)および諸言語用ソフトキーボード、多言語テキスト作成補助ツールの開発などに努める一方、国内外の関連研究者の参加を得て、3 つのワークショップを開催した。【詳細は [II-3.1.1 情報資源利用研究センター](#)を参照】
4. フィールドサイエンス研究企画センターでは、当該分野の新たな研究手法の開発を目指す「フィールドサイエンス・コロキウム」および領域横断的な研究の可能性を発掘する「フィールドネット」の両事業を推進した。【詳細は [II-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター](#)を参照】
5. 海外研究拠点(ベイルートの中東研究日本センターおよびコタキナバル・リエゾンオフィス)を維持・運営し、共同研究、国際ワークショップ、講演会を実施した。【詳細は [II-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター](#)を参照】
6. アジア・アフリカ地域における現地調査研究やその他の専門的業務に役立たせることを目的に、東京会場においてヨルバ語、メエ(エカリ)語、大阪会場では土族語の言語研修を実施し、あわせて教材の開発と公開を行った。
7. 次世代研究者養成事業として「中東☆イスラーム研究セミナー」、「中東☆イスラーム教育セミナー」、「文化／社会人類学セミナー」などを引き続き実施した。
8. 基盤 B 以上の科学研究費補助金による基礎的研究 15 件をはじめ、外部資金を導入した各種研究プロジェクトを実施した。
9. 中東イスラーム研究拠点(既形成拠点)が大学共同利用機関法人人間文化研究機構(NIHU)のネット

ワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「現代中東地域研究」(中心テーマ「地球規模の変動下における中東の人間と文化ー多元的価値共創社会をめざして」)の副中心拠点として、「人間の移動・交流によるネットワークの構築と国家・社会・宗教の変容」という担当テーマの下、中心拠点である国立民族学博物館をはじめとする全国の4機関と連携しながら、中東・イスラーム研究の発展に尽力した。  
【詳細は [I-2.5.2 中東イスラーム研究拠点を参照](#)】

## I-2.2 基幹研究

### I-2.2.1 概要

本研究所において、多くの所員がそれぞれ一つの共同研究プロジェクトの主査となることは、研究の多様性という点では評価できるものの、研究所が組織全体としてどのような研究を目指し、何を達成しているのかが見えにくい。

こうした意見は 1990 年代に入ってから、研究所の内外で再三表明されてきた。すなわち、研究所として重点をおくべきテーマをより明確にすべきではないかという指摘である。当時「重点共同研究プロジェクト」というカテゴリーを設定したのは、そうした問題提起への主体的な回答に他ならない。その後、必ずしも議論が深まったとは言えなかったものの、2004 年度に国立大学の法人化を迎えるに至り、本研究所は 1 プロジェクト研究部(言語動態、情報資源戦略、コーパス、文化動態、政治文化の 5 研究ユニットから構成)、2 センター(情報資源利用研究センターとフィールドサイエンス研究企画センター)体制の下で、第 1 期中期目標期間に臨むこととなった。このうちプロジェクト研究部内の 5 つのユニットは、機械的に所員を分類するのではなく、なんらかのテーマの下に、実質的な所員同士の共同研究がなされることを目指して設置された。

このプロジェクト研究部に関しては、本研究所が共同利用・共同研究拠点に移行し、かつ第 2 期中期目標期間に突入した 2010 年 11 月 5 日付で、文部科学省の国立大学法人評価委員会から、柔軟な研究実施体制の整備の具体的取組例として、「プロジェクト研究部の中に設置した複数の研究ユニットを通じて、『小規模コーパスデータ分析のためのツール開発』『心身論』『異文化交渉がつくる歴史認識』『言語の構造的多様性と言語理論』等の機動的な研究プロジェクトを実施している【東京外国語大学】」との評価を得たものの、同時に問題点も存在していた。

まず、研究所としての重点研究領域が明示されなかったことは、研究所を代表する事業と個人研究との間の線引きや、研究事業・プロジェクト間における優先順位の設定を困難なものにした。次に、1 プロジェクト研究部・2 センター体制の下では人員の流動性を確保することも極めて困難であった。言うまでもなく、一定期間ごとに所員をユニットやセンター間で異動させても、所全体としての研究が活性化するわけではない。このような状況の中、2010 年度からの共同利用・共同研究拠点制度の導入や第 2 期中期目標期間開始を前にして、本研究所所長(当時)は所員の活力源としての各自の研究テーマを尊重するとともに、研究所として重点をおく領域を明確にすることの重要性を提起した(2009 年 4 月の教授会)。

その後、本研究所が 2009 年 6 月 25 日付で共同利用・共同研究拠点として認定された際に、期せずして「研究対象分野が広く、研究者も多岐にわたっていることから、拠点としての特徴を外部に対してより具体的に示していくことが望まれる」という拠点認定審議における意見が合わせて通達された。本研究所執行部は

この意見を真摯に受け止めるとともに、重点研究領域を明確にするプロセスの加速が必要であると考え、将来計画検討委員会(当時)とともに具体策の検討を重ねた。

その結果、所内で重点となる研究領域(テーマ)を立て、所員がその研究領域(テーマ)について研究を推進することが提起され、重点となる研究領域は「基幹研究」という名称をもって呼ぶことが定められた。そして基幹研究は、共同利用・共同研究課題と有機的に連動することによって、本研究所が主導し、外部の研究者コミュニティとともに行う重点研究を明示するものとして位置づけられることとなった。2010年度からの基幹研究発足を目指し、2010年1月から2月にかけて所員のイニシアチブにより、共同利用・共同研究拠点としての分野に応じて3件から4件の基幹研究を採択するという方針の下、「言語ダイナミクス科学」(言語学)、「人類学におけるミクローマクロ系の連関」(人類学)、「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」(歴史・地域)「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」(歴史・地域)の4件が基幹研究として採択された。基幹研究は、発足から3年目の中間評価を経たうえで継続が認められるほか、予算の配分、新規採用人事に関しても重視されることになった。本研究所における基幹研究の3年に及ぶ活動は、2012年11月7日に公表された「国立大学法人・大学共同利用機関法人の改革推進状況」において、国立大学法人評価委員会から、共同利用・共同研究に関する「特色ある取組例」として取り上げられ、「アジア・アフリカ言語文化研究所では、中期的研究戦略の共同研究軸である4つの『基幹研究』へ予算を優先的に配分するとともに、公募による共同研究課題計22件(継続分を含む)を実施している。【東京外国語大学】」と評価されるに至った。なお、人文社会系の国立大学附置研究所の中で取り上げられたのは本研究所の事例のみであったことを付言しておく。

2012年度にはさらに、前述の方針に従って、外部評価委員会による基幹研究の中間評価が実施された(2012年12月8日)。外部評価委員会委員は、佐藤源之(東北大学東北アジア研究センター・電波応用工学)、関本照夫(国立民族学博物館・人類学)、堤研二(大阪大学大学院文学研究科・人文地理学)、長野泰彦(総合研究大学院大学副学長・言語学)、林佳世子(東京外国語大学総合国際学研究院・歴史学)の5氏に委嘱し、①研究の実実施計画、②研究活動・成果の公開、③今後3年間(2013年度～2015年度)の活動計画について、各基幹研究代表から提出された書類と当日のプレゼンテーションに基づき、個々の基幹研究について評価していただいた。その結果、4つの基幹研究はいずれも2013年度以降2015年度までの活動継続が認められた。

2013年度以降は、中間評価におけるコメントを踏まえ、それぞれの基幹研究が研究内容の充実を図る一方、研究活動や成果が所外からよりいっそうアクセスしやすくなるよう、研究所ホームページの一部改修を行った。さらに4つの基幹研究は、2014年に本研究所が創立50周年を記念して開催したシンポジウムでも、現在の所の研究を代表する形で研究報告を行い、最終年度となった2015年度もそれぞれに活発な研究活動を展開した。

2010年度から2015年度にかけて活動した4つの基幹研究はこうして大きな成果を挙げたものの、第3期中期目標期間の始まった2016年度には、2004年度以来12年ぶりに改編されたプロジェクト研究部の分野別研究ユニットを代表する形で、新たに「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(言語学)、「アジア・アフリカにおけるハザードに対する「在来知」の可能性の探究」(文化人類学)、「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」(地域研究・歴史学)の3つの基幹研究が活動を始めた。3つの基幹研究はそれぞれ、国内外の研究機関や現地コミュニティと連携して研究活動を進める一方、特別経費による全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」(2016～2021年度)にも取り組んでいる。この全所プロジェクトは、アジア・アフリカ地域の直面する現

代的諸問題の解決に向けて、緊急解決すべき問題が等しく「少数派／弱者の危機」という側面を持つことから、3分野の基幹研究が有機的に連携し、合同研究集会を開催して、現代的諸問題研究の飛躍的發展を図るもので、文字どおり第3期中期目標期間の研究所の顔となることが期待されている。

なお、2018年度には、2022年度から始まる共同利用・共同研究拠点の第3期をも見据える形で、新たな所内共同研究のシーズを育てるべく、研究戦略策定委員会を中心に所内で検討を重ねた結果、研究所財政厳しき折から特別な予算を付けることはできないものの、複数の所員による研究活動のシーズを「共同基礎研究」として公的に位置づけることが決定され、2019年度から新たに3つの共同基礎研究が発足することとなっている。

## I-2.2.2 多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築

代表者: 中山俊秀

関連所員: 呉人徳司、澤田英夫、星泉、渡辺己、塩原朝子、品川大輔、山越康裕、児倉徳和、倉部慶太

ウェブサイト: <https://lingdy.aa-ken.jp/>

### 研究の概要

本基幹研究は、アジア・アフリカ地域を中心に、研究機関だけでなく現地の少数言語・方言コミュニティとも連携することで、コミュニティが言語・文化の多様性を保持するために、自ら言語記録活動に関与し、その活動を通じて諸研究機関のさらなる研究の進展を促す循環型の言語研究体制を構築することを目的としている。また、言語資源をもとにした共同研究活動などを通じて、AA研がこれまで培ってきた研究実績を日本社会に還元することをめざしている。

具体的には、以下の諸事業を統合的に実施することにより、調和のとれた多言語・多文化共生社会の実現を支援する:

- ・ 言語の記録・保存に関する共同研究
- ・ 言語記録活動に従事する次世代の研究者・現地コミュニティ人材の育成
- ・ 循環型の言語研究体制を支える技術開発
- ・ 言語資源の効果的な蓄積・利用のためのネットワーク構築
- ・ 現地コミュニティに向けたアウトリーチ
- ・ 循環型の言語研究体制モデルの普及と成果発信

### 関連プロジェクト

- ・ AA研共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」
- ・ AA研共同利用・共同研究課題「南西カラハリ・コエ語派の語彙の民族言語学的ドキュメンテーション」
- ・ AA研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究(フェーズ1)」
- ・ AA研共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて〜」
- ・ AA研共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」
- ・ AA研共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における膠着性の諸相-音韻・形態統語・意味の統合

的研究-」

- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「文法の動的体系性を探る(1):文法の多重性と分散性」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「モンゴル諸語における言語変容-外敵要因と内的要因-」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「スワヒリ語諸変種にみられる多様性とダイナミズムへのアプローチ」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「アイヌ語現地調査資料のアーカイブズ構築にかんする学際的研究」

## 研究計画

2018年度は以下の活動を計画していた。

アジア・アフリカ地域を中心に、各地の研究機関だけでなく現地の少数言語・方言コミュニティとも連携することで、コミュニティが言語・文化の多様性を保持するために、自ら言語記録活動に関与し、その活動を通じて諸研究機関のさらなる研究の進展を促す循環型の言語研究体制を構築する。また、言語資源をもとにした共同研究活動などを通じて、AA 研がこれまで培ってきた研究実績を日本社会に還元する。具体的には、以下の諸事業を統合的に実施することにより、調和のとれた多言語・多文化共生社会の実現を支援する。

- a. 言語の記録・保存に関する共同研究
- b. 言語記録活動に従事する次世代の研究者・現地コミュニティ人材の育成
- c. 循環型の言語研究体制を支える技術開発
- d. 言語資源の効果的な蓄積・利用のためのネットワーク構築
- e. 現地コミュニティに向けたアウトリーチ
- f. 循環型の言語研究体制モデルの普及と成果発信

活動の展開にあたっては、共同利用・共同研究拠点としての使命を果たすため、研究集会を通じた共同研究の推進と先導のみならず、資料の電子化、研究手法開発、研究者養成、コミュニティーアウトリーチなどの社会還元などの広がり強く意識した。

## 研究成果(2018年度)

本年度は以下の活動を軸に、共同利用・共同研究事業を活発に展開し、計画は十分に達成された。

研究面では、共同利用・共同研究課題を今年度新たに4件発足させ計10件の共同研究プロジェクトを組織し、危機言語及び言語多様性に関する学術研究ネットワークを拡充させた。国際会議・シンポジウム4回、研究集会(国際11回、国内5回)を通じて言語の構造的多様性と研究未開発言語の記録・再活性化に関する研究を多面的に推進した。また、研究資料の電子化を通じて少数言語の記録・記述研究を進めた。加えて、言語記述・言語ドキュメンテーション・言語類型論などの研究の数少ない投稿雑誌として『アジア・アフリカの言語と言語学』(AALL)の企画編集を行い、関連研究成果の公開・共同利用に寄与した。

理論的問題の議論、研究手法開発を目的とした海外研究機関との連携による国際ワークショップ6回及び国内ワークショップ2回などを提供したほか、22回にのぼる共同利用・共同研究課題研究会を通じて研究者コミュニティー内の研究の活性化および若手研究者の研究力向上に寄与した。また、共同研究企画運営インターンシップを通じた若手養成事業も計画通り進行した。

社会還元面でも、研究未開発言語の調査・研究のためにアジア・アフリカ地域を中心とした13カ国に研究者を派遣したほか、現地コミュニティなどを対象としたアウトリーチ活動(インドネシア、マレーシア、ロシアにおいて5回)、海外研究機関との共同出版など国際的事業を活発化させるとともに、国内向けにも公開映画上映会・講演会などを開催した。また、危機言語研究およびアーカイブ構築に向けた研究、技術インフラの整備などにより研究成果共有・研究交流ネットワークの形成を進めた。

また、インドネシア、中国、ロシア、イギリス、オーストラリア、アメリカ、カナダ、マレーシア、タイ、ベトナム、ミャンマー、韓国、モンゴル、モーリシャス、モロッコ、ケニア、タンザニア、チェコ、台湾、ドイツ、ベルギーなどの研究機関を訪問し、連携事業をより活発化すべく研究交流関係の構築を行った。

以上のように、本事業の活動は当初の目的を十分に達成し、昨年度構築した事業基盤を効果的に拡充することができた。

## 1-2.2.3 アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究

### —人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関2

代表者: 西井涼子

関連所員: 河合香吏、栗原浩英、高島淳、床呂郁哉、深澤秀夫、外川昌彦、佐久間寛、吉田ゆか子

ウェブサイト: <http://coe.aa.tufs.ac.jp/kikanjinrui/>

#### 研究の概要

人類学はある時期まで、小規模社会でのフィールドワークを活動の中心としてきた。しかし近年、国内外において、「上位」の政治社会にあたる国民国家や「近代世界システム」をはじめ、イスラーム文化圏、中華文化圏、インド洋海域世界といったトランスナショナルな社会・文化圏、さらにはグローバルな地球環境まで視野に入れたマクロ・パースペクティブでの研究の必要性および関心が高まってきた。

他方、その対極にむかう方向性として、個々人の身体性を分析・考察の起点とした間身体的実践、ハビトゥス、熟練と暗黙知、アフォーダンス、社会空間など、マイクロ・パースペクティブによる問題系も同時に浮上しつつある。これらをめぐる国内外の研究動向をまえに、人類学的思考として現在求められているのは、地域別の研究や個別の主題に基づく個々の調査研究をこえた次元での新たな概念化と理論化の試みである。本研究は、その点で先導的な役割をになうことを目標とする。

本年度は昨年度に引き続き、マイクロ・マクロ系の連関をめぐる人類学的考察にとっての今日的な諸主題が、フィールドで感知される人びとの情動と、当の情動のもとで流動的に編成される社会的なものとの、交叉の様態に関する共同研究からさらに焦点化して、「リスク・ハザード」に対処する人類の知の検証とそれが切り開く可能性にむけたテーマで研究を推進した。また、顔と身体表現をめぐって、ある社会・文化における在来のコミュニケーションのありようを理解するとともに、異文化が相互に行き交う場での個々の「顔」と「身体」の交錯を実証的に探ることから、トランスカルチャー状況下における新たな顔身体学を構築することを目標に研究を進めてきた。

本年度は、具体的には国際ワークショップや公開セミナー、合評会、および公開シンポジウム等を通じて共同研究をすすめた。人間の生活が不確実性や偶然性のただなかで営まれていることを今ほど痛切に感じることはない状況のもとで、アジア・アフリカにおける「在来知」の個別事例を、人類学の現場＝フィールドから個別性を越えた普遍的視野において探究することが、本基幹研究のさらなる先導的課題であることを再確認した。

#### 関連プロジェクト

- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「ダイナミズムとしての生—情動・思考・アートの方法論的接合」

- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「東・東南アジアの越境する子どもたち」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「『もの』の人類学的研究(3) (「わざ」の人類学的研究—技術、身体、環境)」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「『プレゼンス・アフリケース』研究—新たな政治=文化学のために」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「南アジアにおけるムスリム社会の民族誌的研究」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「社会性の起原:ホミニゼーションをめぐって」

#### 2018 年度の主な研究活動

本年度の主な研究活動は以下の通りである。

- ・ ウェブサイトを更新した: <http://www.aa.tufts.ac.jp/kikanjinrui/>
- ・ 公開シンポジウム 5 回(うち国際シンポジウム 1 回)、公開ワークショップ 4 回(うち国際ワークショップ 1 回)、英語による講演会 2 回、公開コロキウム 2 回、公開研究会 1 回、英語での公開研究会 1 回、非公開研究会 2 回を開催した。
- ・ 若手育成の研究セミナーを日本文化人類学会との共催により開催した。【[I-4.1.4 文化／社会人類学研究セミナー](#)を参照】

2018 年 3 月の国際ワークショップの報告書『トランスカルチャー状況下における顔・身体』、2018 年 3 月の日本文化人類学会との共催事業報告書『『日本人を演じる』の衝撃: 美術家の問い、人類学者の応答』、2018 年 3 月開催のシンポジウム報告書『情動と知性』、2018 年 6 月開催の国際ワークショップ報告書『The Oct 6 massacre and aftermath: violence and democracy』、2018 年 10 月開催の国際シンポジウムの報告書『Coping with Vertiginous Realities』の計 5 冊を刊行した。

### I-2.2.4 中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景

代表者: 黒木英充

関連所員: 飯塚正人、小田淳一、苅谷康太、熊倉和歌子、近藤信彰、高松洋一、床呂郁哉、錦田愛子、野田仁

ウェブサイト: <http://meis2.aacore.jp/?lang=ja>

#### 研究の概要

本基幹研究は、中東から東南アジアまでを含めたイスラーム圏において観察される人間移動と、諸宗教宗派・民族の織りなす社会関係とを連関させて「多であること」の問題性を追究する。多元的社会の生成過程とイスラーム的ネットワーク拡張の動態、移民・難民の政治社会空間に対する影響、個人・集団のアイデンティティ戦略と政治思想の連関などの問題に取り組む。

本基幹研究は、2005(平成 17)～2009(平成 21)年度「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の発展系である。バイルート、コタキナバル両海外拠点を管轄するフィールドサイエンス研究企画センターや、MEIS (Middle East and Islamic Studies)「中東イスラーム研究拠点」と連携しながら、バイルート拠点において共同利用・共同研究課題を国際的規模で推進する。また中東☆イスラーム研究／教育セミナー、バイルート若手

研究者報告会や歴史文書セミナーなどを通じて次世代研究者の育成に当たる。さらに歴史的画像資料などの修復やデジタル化、それを使った研究成果の社会還元を積極的に行う予定である。

### 関連プロジェクト

- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「オスマン文書史料の基礎的研究」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題(JaCMES 実施分)「Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies(中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究)」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題(KKLO 実施分)「Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究)(第3期)」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「イスラームに基づく経済活動・行為(第二期)」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「イスラーム聖者廟の財産管理に関する史料学的研究:イラン・サファヴィー朝祖廟を事例として」

### 研究計画

具体的な研究推進、次世代研究者育成、研究成果の社会還元の活動は以下を予定していた。

1. 共同利用・共同研究課題をバイルート JaCMES、コタキナバル KKLO にて国際共同研究として実施する。
2. 中東☆イスラーム研究／教育セミナーにより次世代研究者の育成に資する。
3. オスマン文書セミナーにより当該地域の歴史研究者の養成に資する。
4. 中東都市多層ベースマップシステムの充実を図る。
5. 本研究活動の全体をウェブサイト上で公開する。
6. JaCMES、コタキナバル・リエゾンオフィスにおいてラウンドテーブル型研究会や講演会を開催し、現地研究者との研究交流、研究活動の現地社会還元を図る。

### 研究成果(2018 年度)

具体的な研究推進、次世代研究者育成、研究成果の社会還元の活動は以下の通りである。

1. 海外拠点実施分の共同利用・共同研究課題「Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies(中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究)」は、本年度第1回(通算第5回)研究会を AA 研にて 2018 年 9 月 6・7 日に、本年度第2回(通算第6回、最終回)研究会をレバノンのバラマンド大学にて同大学との共催で 2019 年 3 月 1 日に実施した。2 回の研究会を通じてレバノンの共同研究員と共に、参加者全員が英語による研究報告・討議を行い、研究成果取りまとめに向けた具体的な論集内容の確認も行った。
2. 海外拠点実施分の共同利用・共同研究課題「Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究)(第3期)」は、本年度第1回研究会を 2018 年 7 月 15 日に AA 研にて、第2回研究会を 8 月 5 日に Hotel Meridien Kota Kinabalu にて、第3回研究会を 2019 年 2 月 11 日に AA 研にて開催した。
3. 共同利用・共同研究課題「オスマン文書史料の基礎的研究」は、本年度第1回研究会を 2019 年 1 月 12、13 日に AA 研にて「オスマン文書セミナー」として、第2回研究会を 2 月 27 日に開催した。
4. 共同利用・共同研究課題「イスラーム聖者廟の財産管理に関する史料学的研究:イラン・サファヴィー朝祖廟を事例として」は、本年度第1回研究会を 2018 年 6 月 2、3 日に、第2回研究会を 11 月 10、

- 11 日に、第 3 回研究会を 2019 年 2 月 9、10 日に AA 研にて開催した。
5. 次世代研究者養成のために、2018 年 9 月 13～16 日に 16 名の受講生を対象に「中東☆イスラーム教育セミナー」を、12 月 22～23 日に 2 名の受講生を対象に「中東☆イスラーム研究セミナー」を、いずれも AA 研にて実施した。
  6. 現地研究者との研究交流を目的としたラウンドテーブル (JaCMES Round Table “Migrants and Refugees Dynamics and Perception toward their Integration”) を JaCMES にて 2018 年 11 月 28 日に実施し、日本・レバノンから 4 名の報告者と 2 名のコメンテータを中心とした討議を行った (ノートルダム大学レバノン移民研究センター、KKLO 拠点との共催)。
  7. 2019 年 11 月 30 日、12 月 1 日に JaCMES にてベイルート若手研究者報告会を報告者 6 名の派遣により開催した。
  8. 2019 年 3 月 19 日にベイルート・アメリカン大学にて同大学との共催で公開講演会 “Examining Najeeb Saleeby as American Colonial Advocate and Educator” を鈴木伸隆氏 (筑波大学・共同研究員) を講師に迎えて開催した。
  9. 2019 年 1 月 12、13 日に AA 研にて「オスマン文書セミナー」を開催し、延べ 35 名の受講生を対象にオスマン帝国史を中心とした歴史研究者の養成に貢献した。
  10. 2019 年 2 月 2 日に明治大学和泉キャンパスにて国際ワークショップ “Syrian Civil War: Comparative Perspectives with Lebanese and Yugoslavian Civil Wars” を科学研究費基盤研究 (B) 「シリア内戦の比較研究」との共催で開催した。
  11. 2019 年 2 月 9 日に AA 研にて講演会 “Post-Civil War Reconciliations and Challenges in Lebanon” を科学研究費基盤研究 (B) 「シリア内戦の比較研究」との共催で開催した。
  12. 中東都市多層ベースマップシステムについて公開画像ページを新設するなど、さらなる充実を期した。
  13. 本研究活動の全体を俯瞰できるウェブサイトを維持・発展させ、研究成果の公開に資した。
  14. 2019 年 3 月 28 日に AA 研にて、転出による退所予定の錦田愛子・准教授と中東・イスラームに関係する AA 研受入れの学振特別研究員・高尾賢一郎氏の研究成果報告の研究会を開催した。

## I-2.3 共同利用・共同研究課題

### I-2.3.1 概要と外部評価

本研究所は、文部科学大臣によって言語学、文化人類学、地域研究分野の共同利用・共同研究拠点に認定された「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」であり、公募による共同利用・共同研究課題は、共同利用・共同研究拠点としての本研究所が最も重視する事業であることから、公募によらずに実施してきた従来の共同研究プロジェクトとは区別して、「課題」という新たな名称を採用している。共同利用・共同研究拠点の認定制度は、国公私立大学を通じて研究者が共同で研究を行う体制を整え、わが国全体の学術研究をさらに発展させる目的で、2008 年に文部科学省が創設したもので、大学に附置された研究施設のうち「全国の関連研究者に利用させることにより、わが国の学術研究の発展に特に資する」と認められたものだけが共同利用・共同研究拠点に認定された。

このようにして認定された共同利用・共同研究拠点に対し、文部科学省は「募集による共同利用・共同研究の実施」と「採択にあたって学外委員が半数以上を占める審査委員会の審査」を義務づけており、これに従って、本研究所では共同利用・共同研究拠点に移行する 2010 年度を前に、全国の関連研究者から新たに共同利用・共同研究課題を公募し、学外委員が過半数を占める審査委員会の厳正な審査を経て 11 件の共同利用・共同研究課題を採択した。続く 2011 年度にも同様の方式で 6 件、2012 年度に 8 件、2013 年度に 10 件、2014 年度に 8 件、2015 年度に 10 件、2016 年度に 10 件、2017 年度に 7 件の新規課題を採択し、結果として 2018 年度には計 27 件(うち所外代表課題 3 件)の共同利用・共同研究課題を実施することとなった。ちなみに、これら課題に参画するメンバーの数は 150 機関から 357 名を数え、2018 年度中に開催した課題研究会および関連イベントの総数は 172 回、参加者は延べ 5、255 名にのぼり、共同研究の直接の成果として謝辞にその旨が記された研究業績総数は論文・図書を合わせて 116 点にのぼる。

共同利用・共同研究活動をより広い形態で展開するために、2017 年度から外国人客員研究員が本研究所に一定期間滞在して所員とともに共同研究プロジェクトを推進する「外国人客員型課題」、さらに個人研究者が本研究所に短期滞在して共同研究を行う「短期滞在型課題」を 2018 年度からスタートさせている。

これら進行中の共同利用・共同研究課題に対する評価は、年度末に提出される「実施年次報告書」を共同研究専門委員会が書面審査する形で行われ、翌年度以降の研究の発展に寄与している。

他方で、本研究所は本年度も 2019 年度からスタートする新規共同利用・共同研究課題を公募した。応募のあった 10 件(うち外部代表によるもの 5 件)は共同研究専門委員会による審査を受け、その結果 10 課題全てが採択された。これにより、2019 年度には計 34 件の共同利用・共同研究課題を実施することになった。なお、公募による共同利用・共同研究課題の審査にあたっては 2010 年度の共同研究専門委員会による指摘を受け、従来の 5 項目の審査基準を 3 項目(「研究の背景」「期待される研究成果」「研究の実施計画」)に整理したうえ、それに基づいて各共同利用・共同研究課題に対する点数評価を行った。昨年度から公募を開始した「短期滞在型課題」については、応募がなかったものの、2016 年度から新たに公募を開始した「外国人客員共同研究型課題」については、7 件の応募があり 5 件を採択した。ただし、共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)3 件は 2020 年 4 月から実施のため、2019 年度中に実施される新規採択課題は計 12 件となる。

【本年度の各共同利用・共同研究課題の成果の概要等については、[I-2.3.2 共同利用・共同研究課題](#)の項を、研究会実施状況及び研究業績一覧については、[II-3.2.1 共同利用・共同研究課題実施状況](#)の項をそれぞれ参照】。

## I-2.3.2 共同利用・共同研究課題

### バントウ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究(フェーズ 1)

研究代表者名： 阿部 優子 参加者：所員 2、共同研究員 16

研究期間： 2016(平成 28)年度～2018(平成 30)年度

研究計画

2017年度は、3月に国際ワークショップで検証した142パラメターの値および例文データを精緻化するために、フォローアップ・ミーティングや各研究会で議論を重ねた。2018年度は、各研究会にて、出版のためのグロスやフォント、例文提示法の統一など、編集面での調整を行うとともに、「動詞完了相および動詞接尾辞-ile および imbrication」という具体的な文法トピックについて、各参加者の研究言語のデータを検証し、現存のパラメターよりさらに細かいバリエーションを整理し、類型化の可能性を議論する。

具体的には、第1、2回の研究会にて、「動詞完了相および動詞接尾辞-ile および imbrication」の検証、および次のトピックに向けての協議をすること、その一方で成果出版物である142パラメターの値および例文データの編集・調整を進める。また、可能であれば第3回研究会を国際シンポジウムとして開催し、国外メンバーが進めている、マイクロ・バリエーションにかかる、進行中および新規プロジェクトについて報告してもらい、理解、議論を深め、交流をはかる。

本プロジェクトは、2019年以降も、フェーズ2として継続していくことを計画しているため、第3回研究会はフェーズ2のプロジェクトの布石としたい。

### 研究実績の概要（2018年度）

2018年度は2回の研究会を実施し、研究会では基本的に本研究会の報告書作成に向けての打ち合わせ、および次期プロジェクトに向けて、様々な研究トピックのアイデアを出してもらった。2回の研究会で特に注目したトピックは、「動詞完了相および動詞接尾辞-ile および imbrication」および「主語のプロパティにおけるマイクロバリエーション」の2点である。次期プロジェクトでは、これらのトピックについて、バリエーションを出し、類型化を目指すこととした。特に「主語のプロパティにおけるマイクロバリエーション」については、すでにメンバーの米田氏と森本氏が8月の第9回アフリカ諸語会議（ムハンマドV大学、モロッコ）にて、予備的発表を行った。また、次期プロジェクトで扱うトピックの候補である、否定標示と焦点標示の連動性について、品川氏が5月の日本アフリカ学会学術大会（北海道大学）、および7月のThe 20th International Congress of Linguists（ケープタウン大学、南アフリカ）で予備的発表を行った。

一方で、報告書作成にあたり、2019年1月12-13日に大阪大学にて本プロジェクトとは別途、打ち合わせを行い、作成方針を最終的に擦り合わせた。またメール審議を重ねながら編集作業を進め、3月末に資料集 Shinagawa, Daisuke, and Yuko Abe (eds.), *Descriptive Materials of Morphosyntactic Variation in Bantu* を出版した。

### 終了報告

本研究課題は、バントゥ諸語を対象とした系統内類型論としてのマイクロ・バリエーション研究をテーマとする。先行プロジェクトの成果である142パラメターからなる包括的なバントゥ諸語類型データベースを基盤に、主題化、否定、声調といった個別トピックの研究を深化させることで新たな類型化の可能性を探るとともに、パラメター間の連動関係についての考察を進め、その成果を内外のバントゥ諸語および一般類型論研究コミュニティに発信することを目的とした。

本プロジェクト期間中は、既存のバントゥ諸語記述研究（主に形態統語論）の成果から、広く東・中央・南部アフリカのバントゥ諸語比較のために適用するための分析パラメータを精査し、類型化するものであり、2016年度よりフェーズ1として活動を開始した。フェーズ1では、ロンドン大学SOASのプロジェクト（“Morphosyntactic variation in Bantu: Typology, contact and change” Leverhulme-

funded research project 2014-2018) との連携基盤を構築するため、SOAS およびその他の国外メンバーを招へいし国際ワークショップを開催し、共通の 142 のパラメーターについて参加者の研究言語データを収集、一部をデータベース化した。また、本プロジェクトメンバーが SOAS に長期滞在したり、国際会議での発表を通じて、連携先と研究成果を情報共有してきた。最終年度には本プロジェクト終了にあたり、142 のパラメーターについて、参加者の研究言語のパラメーター値および例文をデータ集として出版した。

### 成果の公開状況、計画

メンバーの研究言語の類型 142 のパラメーターは、部分的にロンドン大学のプロジェクト (“Morphosyntactic variation in Bantu: Typology, contact and change” Leverhumle-funded research project 2014-2018) のデータベース (<http://bantu.soas.ac.uk:8080/LanguageData/login>) に提供しているが、データ公開のための諸手続きが整っておらず、一部のメンバー間でのデータ共有となっていることに鑑み、本プロジェクトメンバーの研究言語のうち 12 言語について、パラメーター値および例文をデータ集として出版することとした。出版したデータ集の書誌情報は以下の通りである。

Shinagawa, Daisuke, and Yuko Abe (eds.) *Descriptive Materials of Morphosyntactic Variation in Bantu*, Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, 2019, pp. 439+ix, ISBN 978-4-86337-297-9

所収言語は、Kikuyu (E51)、Uru (E622D)、Rombo (E623)、Bende (F12)、Normal Mbugu (G221)、Inner Mbugu (G221)、Makunduchi (G43c)、Nyoro (JE11)、Nyole (JE35)、Ganda (JE15)、Kerewe (JE24)、Matengo (N13) の 12 言語である。

成果は上記の通り公開済である。

## マレー語方言の変異の研究

研究代表者名：内海 敦子 参加者：所員 1、共同研究員 11

研究期間： 2017（平成 29）年度～2019（平成 31）年度

### 研究計画

2017 年度に定めた事項に沿って、文献調査・現地調査による情報収集を行う。その結果は随時言語地図に反映し、公開する。

現地調査が行き届かない地域に関しては、海外の研究協力者に取材を依頼して多くの地点の言語データを収集する。

言語データに関しては主に以下の 3 点に関して収集する。

- (A) 機能語を中心とした語彙リストをそれぞれの地域の変種で作成する。これによりマレー語変種の歴史的分岐の研究を深める。
- (B) 短いビデオやイラストなどの素材を利用してモノログを収集し、態の数と語順に関する変異を調査し言語地図に反映する。
- (C) 自然談話の収集を行い、自然な状況で観察できるストレスの位置、文単位のイントネーションの研究を行い、変異の種類と分布に関して考察をまとめる。

また、各地のマレー語変種と社会・文化・言語状況に関する情報をもとに、マレー語地域変種の一般向け書籍を編集する。

### 研究実績の概要（2018年度）

2017年度に引き続き、文献調査・現地調査による情報収集を行った。また、その結果をまとめ、随時言語地図作成を開始した。

現地調査は Lampung, Belitung, Pontianak, Jakarta, Bandung, Kota Kinabalu で行った。また東部インドネシアとマレーシアに関しては、海外の研究協力者に取材を依頼して多くの地点の言語データを収集した。

言語データに関しては主に以下の3点に関して収集した。

(A) 機能語を中心とした語彙リストをそれぞれの地域の変種で作成した。その一部については言語地図に反映させた。これによりマレー語変種の歴史的分岐の研究を深めることができる。

(B) 短いビデオやイラストなどの素材を利用してモノログを収集し、態の数と語順に関する変異を調査し、論文にまとめた。

(C) 自然談話の収集を行い、自然な状況で観察できるストレスの位置、文単位のイントネーションの研究を行い、変異の種類と分布に関して考察をまとめた。

第一回国内研究会（6月2日）では、各自の研究の進捗状況と夏季以降の調査について項目と方向性を確認した。第二回国際研究会（10月13日、14日）では海外の研究者と研究成果を報告しあい、今後の方向性について話し合った。

### 成果の公開状況、計画

研究会全体としては、7本の論文を執筆しており、NUSAの特集号として刊行予定である。

2019年度にはマレー語の変異に関する論文集を刊行する。また、一般向けのマレー語地域方言に関する書籍を刊行する。専門書としては、音声・語彙・形態・統語の各分野におけるマレー語変異の包括的な研究書を2020年中に刊行する。

## アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究

研究代表者名：梶 茂樹 参加者：所員 2、共同研究員 16

研究期間：2016（平成28）年度～2018（平成30）年度

### 研究計画

本年度は3年計画の最終年度である。そのため、次の2点に集中して研究会を行う。

1) 前2年度の研究会で発表できなかった言語について、できるだけ発表を行う。すでに発表されたものは、テンボ語、ハヤ語、アンコレ語、トーロ語、ニョロ語、ハウサ語、ベンデ語、スワヒリ語マクンドゥチ方言、ヘレロ語、ランバ語、ロンボ語などである。扱う言語がバンツ系に偏り、とりわけ西アフリカの言語が手薄であるので、この点に注意して研究会を計画する。

2) すでに発表した言語については、成果を論文としてまとめる。特に声調のタイプを明らかにするため、単語の音節数ごとにどのような声調のパターンがあるかをはっきりとさせる。また声調の文法的機能も明らかにする。そしてできたものから、報告書作成のために、メンバー全員に回し査読を受け

る。可能なら、年度内に報告書の完成を目指す、論文が年度内に完成しないこともありうる、報告書作成のため1年間の猶予をもって議論を継続し、作業を行うことも検討する。

### 研究実績の概要（2018年度）

今年度はガーナのアカン語とンゼマ語、ウガンダのキガ語、エチオピアのウォライタ語、そしてタンザニアのマア語の声調・アクセントについて議論した。アフリカの言語に特徴的なことは、声調・アクセントがたんに語彙的機能を表すだけでなく、アカン語などでは所有関係、ウォライタ語では名詞の格変化など様々な文法的機能に伴って現れるということである。

名詞の声調・アクセントパターンは、マア語（単位はHとLの2種類）では、1音節語幹語ではH、Lの2種類あるが、2音節語幹語ではHH、HL、LH、LL、3音節語幹語ではHHH、HHL、HLL、LLH、LHL、LLL、そして4音節語幹語ではHHHH、HHHL、LHHL、LLLLのみであり、パターンの可能性のすべてが現れるということはない。これはキガ語でも同様である。TBUがモーラであるウォライタ語では、Hによるプロミネンスがあるのは単語の中の1箇所のみである。これはキガ語においても基本的に同様であるが、キガ語は周辺言語とは異なり、単独形で2音節にHが生じるという特殊性がある。

### 終了報告

声調言語というと中国語ペキン方言など東アジアの単音節言語を思い浮かべることが多いが、アフリカには多音節語の声調言語が多く存在する。また、その機能も単に単語を区別するという語彙的機能だけでなく、様々な文法的機能を有する言語も多い。本研究プロジェクトは日本人研究者がこれまでアフリカで行ってきた調査で得られたデータをもとに、アフリカ諸語の声調・アクセント体系の特徴を明らかにすることを目的とした。

声調言語としての類型論的特徴的としては、一方では、コンゴのテンボ語（高と低の2声調）のように、そのパターン数がTBUであるモーラ数nに従って2nという風に等比級数的に増える言語がある。テンボ語は多音節語の声調言語である。また他方、ウガンダのトーロ語は一型、ニョロ語は二型という風に、日本語的タイプのものも多い。さらにスワヒリ語のように声調を失った言語もある。

声調の文法的機能としては、時制・アスペクト・ムードを声調で表すものが多いが、それ以外にもガーナのアカン語のように声調で所有関係を表したり、コンゴのテンボ語やウガンダのトーロ語、ニョロ語のように関係節を声調のみで表したり、またアンコレ語のように名詞の定・不定を区別したりする言語がある。

### 成果の公開状況、計画

当研究プロジェクト専用のウェブサイトはなく、成果の概要はAA研のHPに載せている。各研究員が現在、成果として論文をまとめており、今年度中に一冊の冊子本として刊行する予定である。

## ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容(2)ジャワのイスラーム化再考

研究代表者名：菅原 由美 参加者：所員 2、共同研究員 9

研究期間： 2016（平成28）年度～2018（平成30）年度

## 研究計画

今年度は、科研費基盤研究（B）「ジャワ語文献にみるジャワのイスラーム化再考」（研究代表者：菅原由美（大阪大学） #16H05662）との共催で、6/30～7/1 に大阪大学豊中キャンパスにおいて第二回国際シンポジウム Transformation of Religion as Reflected in Javanese Texts (2) “Rethinking the Process of Islamization”を開催する。発表者は9名で、共同研究員からは菅原、青山が発表。東長、山根がコメンテーター。海外からの発表者は7名（インドネシア、オランダ、ドイツ、オーストラリア）、コメンテーターが2名（イギリス、オーストラリア）。このシンポジウムでの発表原稿を本研究課題の成果とし、Javanese Studies Series として出版する予定。また、今年度が本研究課題第二期の最後の年になるため、さらに課題を第三期として続けるかどうかを海外からの参加者の意見を聞き、決定する。また、ジャワ語コンコーダンス JVDO に掲載するテキストを増やし、シンポジウムまでに完成させる。

## 研究実績の概要（2018年度）

昨年6/30～7/1に、本研究課題第1期目に行った国際シンポジウムに引き続き、第2回目のシンポジウムとして、Transformation of Religion as Reflected in Javanese Texts (2) “Rethinking the Process of Islamization”をおこなった。インドネシア、オランダ、ドイツ、イギリス、オーストラリアから発表者およびディスカッサントを招へいし、9本の発表を行い、ディスカッションをおこなった。宗教問答書、神秘主義詩歌、ジャワにおける聖人の伝承文学、ジャワ外のイスラーム世界の聖者伝承文学などの分析を通して、これまで詳細には扱われてこなかったジャワ・イスラーム化初期（16～17世紀）のアクターたちについての議論がかわされた。本シンポジウムで発表されたペーパーを、今年度末または来年度はじめに、Javanese Studies Series として出版するために、最後の研究会で再検討し、現在、海外の発表者のペーパーを再読中である。

## 終了報告

研究会は、計10回行い、その内、1回は国際シンポジウムである（第1期に引き続く第2回国際シンポジウムとなった）。2016-2018年度の3年間における成果は以下の通りである。

1. 上記の第1回目の国際シンポジウムの成果を Javanese Studies Series v.5 として、出版した。シリーズ開始後、初の国際シンポジウムの成果となった。
2. 2017年6/7月に第2回国際シンポジウムを開催し、インドネシア、オランダ、ドイツ、イギリス、オーストラリアから発表者およびディスカッサントを招へいし、ジャワ・イスラーム化初期のテキスト分析をメインにおいた国際シンポジウムを開催した。第1回のシンポジウムの際は、ジャワ語テキスト研究者のみを招へいしたが、今回はイスラーム化という内容に合わせ、インドネシア以外のイスラーム地域研究者を招へいし、ディスカッションをおこなった。そのため、一般参加者も、前回シンポジウムよりもだいぶ人数が増えた。
3. ジャワ語・古ジャワ語コンコーダンスの改定をおこない、より使用しやすいものに改良した。また、ウェブサイトのページを増やし、プロジェクトや出版物についての情報を掲載した。2016年にはインドネシア写本学会にて、本サイトの公開をおこなった。なお、コンコーダンスに掲載できるテキストの数は第1期時より増えたが、最終整備が終わっていないため、まだ掲載を見合わせている。今年度中に掲載する予定である。

4. ジャワ研究について、国内の次世代の研究者や他地域の研究者に関心をもってもらうために、2017年に、本課題に合わせ、ジャワ語研修を、AA 研外国人研究員 Yosephin Apriastuti Rahayu 氏とともに、AA 研語学研修として開催し、ジャワ語初級テキスト『ジャワ語の基礎』を執筆した。また、ジャワ語史料講読会を研究会の午前の部として行い、『ババッド・タナ・ジャウイ』序文の購読を終えた。この序文改題をどこかの雑誌に研究ノートとして発表することを考えている。

#### 成果の公開状況、計画

Sugahara, Yumi, and Molen, Willem van der eds. 2018. Transformation of religions as reflected in Javanese texts. Javanese Studies Series v.5. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

菅原由美・Yosephin Apriastuti Rahayu. 2017. 『ジャワ語の基礎』平成 29 年度言語研修テキスト. AA 研. ジャワ語・古ジャワ語コンコードダンス

Javanese Documents Online

<https://jvdo.aa-ken.jp/index.html>

1. 第 2 回国際シンポジウムの成果を、Javanese Studies Series として、2019 年度末か 2020 年度はじめに出版予定。
2. 今年度中に Javanese Documents Online 掲載予定テキストを全て掲載する。

## 南西カラハリ・コエ語派の語彙の民族言語学的ドキュメンテーション

研究代表者名：中川 裕 参加者：所員 1、共同研究員 7

研究期間： 2016（平成 28）年度～2018（平成 30）年度

#### 研究計画

二つの下位プロジェクトを次の要領で進める。

##### (1) 『グイ・ガナ動物事典』編纂（全員が担当）

『グイ・ガナ動物事典』の執筆・編纂を進める。各メンバーの分担項目の執筆を完了し、オンラインでの共同編纂による全体の統合・編集作業に取り掛かる。最終的にオンライン上での一般向け公開を目指す。

##### (2) 語彙意味類型論的考察（中川・菅原・田中・大野が担当）

グイ・ガナ動植物範疇の分類、特殊意味領域の類型論的特徴を考察し、論文執筆を行う。語彙意味類型論(lexical semantic typology)の分野において、前年度までの成果を統合する理論的考察を進め、考察し言語類型論への貢献を試みる。

##### (3) 研究成果の一般向け公開、社会還元

言語ドキュメンテーションの一般社会への公開、特に現地社会への還元のための手法についての応用人類学的考察を進める。これまでに蓄積してきた一次資料の分析・統合による言語民族誌としての語彙ドキュメンテーションを通して、地域・一般社会への貢献を図る。

#### 研究実績の概要(2018 年度)

学術論文 13 本（うち国際共著論文 3 本）、学会発表 23 本（うち国際学会発表 9 本）、学術書籍 2 冊（うち国際共同編集のコイサン最大級辞書 1 冊）という、この分野においては満足ゆく分量の成果物を刊行、公表することができた。特に、最後にあげた研究代表者が第 1 編者を担当したコン・ブッシュマンの辞典はアフリカ言語学刊行物で著名な専門出版社のコイサン言語学シリーズで出版されたものである。

これらに加えて、スマートフォン入力のための正書法とそのツール（具体的には Android のキーボード・アプリケーション）の作成を開始した：配列については議論済み。

## 終了報告

3 年間の研究期間を通じて遂行した研究活動と具体的成果物を以下に要約する：

(1)グイ語辞書編纂：約 3200 項目のグイ語・日本語・英語辞書。研究組織のうち、特に中川、菅原、田中のフィールド資料を集約し、言語学的妥当性を満たすカラハリ・コエ語派辞書。記載単語には、本プロジェクトの主題である狩猟採集の民族誌的な情報を多く含む。刊行前だが、コイサン言語学者の間では国際的にすでに利用され引用されている。刊行のための編集が進行中（公開計画の欄を参照）。

(2)コン語辞書の国際共同編集と刊行：コイサン言語学者 Anthony Traill の遺稿をもとに、ボツワナ大学の Andy Chebanne との共同編集で刊行した辞書。本プロジェクトに直接かかわる、動植物についての民俗知識や狩猟採集についての文化語彙要素が豊富に記述され、カラハリ狩猟採集民の言語の辞書として最も詳細で、かつ言語学的な妥当性を満たす語彙研究である。

(3)『ブッシュマン動物辞典』編纂：グイ語話者の動物分類学、民俗動物学、狩猟に関する物質文化、動物にかかわる韻文・音楽・舞踊などのトピックを扱う。動物範疇として 130 種を選定して、研究組織で分担執筆。編纂作業は進行中（公開計画の欄を参照）。

(4)スマートフォン用グイ語正書法と入力ツール開発：前の欄参照。

## 成果の公開状況、計画

研究実績の概要で触れた公表物の他には、まだ公開されているものはない。上欄の(3)の編纂が遅れている理由の一つは、2018 年度、主要メンバーのうち二人（高田と丸山）が、それぞれ、在外研究休暇と育児休暇で、執筆・編集作業にあたることができなかつたことにある。また、本プロジェクトが挑んでいる辞書編纂と民族誌執筆という活動が、予想外に時間を要する任務であることが、取り組み過程で初めて理解できたという事情もある。したがって、下欄の公開計画は、予想される編纂時間を十分に見込んで立ててある。

成果の公開は 4 種類ある：(1)参加者の各々による学術的著作物やアウトリーチ活動、(2)グイ語辞書の刊行、(3)『ブッシュマン動物辞典』の刊行、(4)スマートフォン用グイ語正書法入力アプリの配布である。(1)は各自の自発的実施に任される。(2)は中川裕・菅原和孝、田中二郎の共著で 2020 年度内に刊行の計画で、発行元としては、アフリカ関係学術出版社の Rüdiger Köppe のコイサン研究叢書の編者 Rainer Vossen から肯定的な返事もらっている。(3)は 2019 年度末までに分担するメンバー全員の原稿の執筆を完成して、出版社を探し、2020 年度に編集作業を終えて刊行する計画で、(4)は 2019 年夏までに試作版を完成して試験的に使用開始、その後、適宜更新する計画である。

## アジア文字研究基盤の構築1:文字学に関する用語・概念の研究

研究代表者名： 荒川 慎太郎 参加者：所員 2、共同研究員 11

研究期間： 2017（平成29）年度～2019（令和元）年度

### 研究計画

本課題は、古代から現代までの、アジア地域の多種多様な文字体系を対象とし、言語学諸分野の中でも研究の遅れている「文字学・文字論」を深化させることを目的とする。西夏文字、インド系文字、漢字・疑似漢字、ヒエログリフなどの専門家が共同するのが特色である。扱い文字の種類やタイプが多岐にわたるため、まずは各自の専門とする文字の共通理解を図るのが必須である。

二年度も各人の専門とする文字に関する報告から、研究会を開始する。3回の研究会（一回に3人程度が担当）において、各共同研究員が自身の専門とする文字の解説を行い、他の研究者との討議を通じて、文字学一般の見地からの一般化・特殊化ができるかを考察する。第1回研究会では、契丹文字・日本の国字などをテーマに報告と討議を行う。初年度に50人が参加した公開ワークショップから、文字に関する各方面の関心の高さがうかがえる。本年度も第3回研究会、兼ねる形で実施を検討する。

また本課題は、一般文字論、文字の字形そのものの多面的な研究のプラットフォームとなることも目指す。Web上で閲覧・編集できる「文字学述語集」の作成を継続する。

### 研究実績の概要（2018年度）

本課題は、古代から現代までの、アジア地域の多種多様な文字体系を対象とし、言語学諸分野の中でも研究の遅れている「文字学・文字論」を深化させることを目的とする。西夏文字、インド系文字、漢字・疑似漢字、ヒエログリフなどの専門家が共同するのが特色である。様々な文字を扱うため、まずは各自の専門とする文字の共通理解を図るのが必須である。

第二年度は昨年度の研究を深化させた。3回の研究会（一回に3～4人が担当）において、各共同研究員が自身の専門とする文字の解説を行い、他の研究者との討議を通じて、文字学一般の見地からの一般化・特殊化ができるかを考察した。第1回研究会では、西夏文字・契丹文字・日本製漢字を、第2回研究会では、古代エジプト聖刻文字・インド系文字を、第3回研究会では、水（スイ）文字・ロロ文字をそれぞれテーマに報告と討議を行った。一般への成果還元として公開ワークショップ「中国西南諸民族の文字学」も開催した。日本滞在中の水文字研究者もゲストとして発表・意見交換を行い、有意義なものとなった。

また本課題は、一般文字論、文字の字形そのものの多面的な研究のプラットフォームとなることも目指す。Web上で閲覧・編集できる「文字学術語集」の作成を継続している。本年度も具体的な項目の執筆を始めた。

### 成果の公開状況、計画

主査、共同研究員が個々の研究（論著、口頭発表）で本課題の研究成果を発表している。術語集については、現段階では非公開。wiki上で術語項目と記述案を集積中である。個々の研究（論著、口頭発表）で本課題の研究成果を発表するほか、術語集について進捗を報告する（最終年度末の公開ワークショップ）準備を開始している。

# チュルク諸語における膠着性の諸相 ― 音韻・形態統語・意味の統合的研究

—

研究代表者名： 佐藤 久美子 参加者：所員 1、共同研究員 17

研究期間： 2017（平成 29）年度～2019（令和元）年度

## 研究計画

2017 年度に行った研究会での議論を再検討し、データ整理や分析の手法を確立して、これまでに蓄積されたデータの整理を行う。不足しているデータを洗い出し、各自が調査による補完を行う。3 回の研究会を開き、新たなデータの共有と整理を継続し、言語間での共通点と相違点の観察を進める。また、当該年度までにまとめたデータを集約し、データ集を編纂する。

## 研究実績の概要（2018 年度）

今年度は 3 回の研究会を開催した。うち 1 回は科研費プロジェクト研究会との共催の形式で開催した。研究会では計 10 件の研究発表と討論が行われた。

研究会は初年度に引き続き、メンバーが自身の専門とする言語の文法現象の紹介が中心であったが、一部はチュルク諸語の複数の言語を対照したものであり、またさらに日本語とチュルク諸語の対照をテーマにしたものもあるなど、本研究課題で目標とするチュルク諸語内部での対照を通じたチュルク諸語の一般的特質の探求により直接的にかかわる研究発表と議論が行われた。

また、成果の発表にむけた話し合いを行い、3 年目（2019 年度）に海外の国際学会において一部のメンバーが参加してワークショップを行うことを決定し、プログラムの策定と応募を行った（本報告時点において採択済み）。

## 成果の公開状況、計画

共同研究員各自が諸媒体で論文を発表・公開し、諸研究集会において研究発表を行っている。

2019 年度 7 月に韓国・全州で開催される韓国アルタイ学会にて、ワークショップを行い、本研究課題の成果（の一部）を発表する。

また、2019 年度以降、成果論集を編集・出版する。

## 文法の動的体系性を探る (1): 文法の多重性と分散性

研究代表者名：中山 俊秀 参加者：所員 3、共同研究員 16

研究期間： 2017(平成 29)年度～2019(平成 31)年度

## 研究計画

本課題は、一言語内に含まれる構造規則や文法パターンの多重性（多様な形式の併存）と分散性（局所的な分布）に焦点を当てた共同研究であるが、ここでの問題意識の核心にあるのは、一般的構造規則に沿わず従来ジャンルに特有な特殊「文体」「語法」や「イディオム」「例外」として片付けられてきた形式・構造の取り扱いである。文法が多重的構造を持っているという主張は、こうした逸脱

的、例外的形式・構造が文法体系の本質の一部であるという前提に立ってなされているからである。そこで、本年度はこの逸脱的、例外的形式・構造の扱いに焦点を当てて議論を進める。こうした形式・構造は「容認可能(acceptable)」ではあるが、「文法的(grammatical)」ではないとされ、従来文法の考察から外されてきたが、この「容認可能」と「文法的」という区別の意味と正当性を改めて考察する。

研究会は基本的に公開で行い、理論的問題を設定したオープンディスカッション、自然談話データに基づくオープンな討論などを組合せ、ディスカッションに重点を置く。研究会と平行して、関連論文を読み進め研究リソースとしてまとめるための公開読書会・勉強会を定期的で開催し、研究会における議論を深めると同時に共同研究活動への関心を広げる。諸々の活動の報告はAA研ウェブサイトの他に、プロジェクトサイトにおいても公開する。

### 研究実績の概要（2018年度）

本年度は、従来の研究の中で「逸脱的」「例外的」と性格づけられてきた形式・構造的パターンに焦点を当てて議論を進めた。こうしたパターンは「容認可能(acceptable)」ではあるが「文法的(grammatical)」ではないなどとされ、文法体系から切り離されてきたが、最新の容認度判断の実験研究で得られた知見を踏まえると、この「容認可能性」と「文法性」という区別の正当性は改めて問い直す必要が明らかになった。また、今年度の研究会の中で集中的に事例を検討した局所的な例外的パターンと見える現象も、その規則性を使用環境の中で吟味すると、ジャンル、レジスター、談話・相互行為上のスタイル、機能的要請との連動を見て取ることができ、それらは単なる体系からの逸脱ではなく、使用環境に動機付けられたマイクロパターンであることがわかった。今年度の研究活動を通して、文法体系の中に見られる形式・構造面でのバラツキや揺れの現象を体系内の多重性の現れとして積極的に位置付け、文法の本質をなすという主張の基盤を強化することができた。

研究会は基本的に公開で行い、先行研究や事例研究報告に基づく議論、理論的問題を設定したオープンディスカッション、自然談話データに基づくオープンな討論などを組合せ、ディスカッションに重点を置いた。

本プロジェクトの活動の一環として、海外の研究者と共同して国際ワークショップを共同企画し、研究成果をより広く発表するとともにフィードバックを得ることができた。

[\[https://japanesekoreanlinguisticsconference26.wordpress.com/satellite-workshops/\]](https://japanesekoreanlinguisticsconference26.wordpress.com/satellite-workshops/)

研究会と平行して、関連論文を読み進める公開読書会・勉強会を定期的で開催し、研究会における議論を深めると同時に共同研究活動への関心を広げた。

### 成果の公開状況、計画

研究成果については、AA研ウェブサイトの他にプロジェクトサイトにおいて公開している。

AA研サイト内プロジェクトページ

[\[http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp232\]](http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp232)

プロジェクト活動サイト

[\[https://sites.google.com/site/toshinaklab/coproj/prjmultig\]](https://sites.google.com/site/toshinaklab/coproj/prjmultig)

今後も引き続き発信する内容を充実させていく。

## 青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容～ドキュメンタリー言語学の手法に

## 基づいて～

研究代表者名： 星 泉 参加者：所員 1、共同研究員 8

研究期間： 2017（平成 29）年度～2019（令和元）年度

### 研究計画

2019 年度は本課題の最終年度にあたり、年度末までに『チベット牧畜文化辞典』（日本語版および英語版）を完成させ、出版する。2019 年 7 月にはパリで開催予定の国際チベット学会において本課題が企画したチベット牧畜研究に関するパネル発表を行い、研究代表者および共同研究員がこれまでの共同研究の成果を公表する。昨年度着手し、全体の半分程度を作成した分類索引（シソーラス）の編纂を引き続き進め、完成させる。また、同様に昨年度着手した牧畜文化に関する Web 百科事典も引き続き編纂を進め、完成させる。研究会は年度内に 3 回実施予定である。これまでは比較的辞典編纂作業に重きを置いていたが、今年度は研究発表を中心とし、他の経費を用いることで可能な限り海外の共同研究員も招へいし、研究成果の取りまとめに尽力する。課題全体としては、分類語彙調査票の策定を進める。作業的な部分については、共同研究会とは別に研究代表者と一部の共同研究員が毎週一回集まって実施することにする。

### 研究実績の概要（2018 年度）

2018 年度は前年度末に評価版として公開した『チベット牧畜文化辞典（パイロット版）』の検証を主な課題として、(1)研究会の実施による新しい知見の集積、(2)辞典の記述内容の精緻化、(3)辞典の応用としての分類索引および百科事典の制作を進めた。

(1) 新しい知見の集積については、モンゴルの畜糞文化に関する専門研究者を招き、モンゴルとチベットを比較・検証することで畜糞文化に関する知見を深めた（第 2 回研究会）。また、ユーラシア各地の牧畜に関して造詣の深い専門研修者を招き、チベットの牧畜様式の位置づけについて議論をし、知見を深めた（第 3 回研究会）。さらに、AA 研外国人研究員として招へいした中国チベット学研究センターのラシャムジャ氏をコメンテーターとして招いて、牧畜地域と半農半牧地域との比較という視点で議論を行った（第 3 回研究会）。

(2) 辞典の記述内容の精緻化については、これまでの辞典編纂の手法を振り返るとともに、牧畜文化辞典（パイロット版）に対する現地ユーザーの反応の検証、および辞典を活用した研究、辞典を応用した教材作成などについて議論を行った（第 1 回研究会）。また、整理の遅れていた宗教語彙に関して整理の仕方について議論するとともに、チベット語文献に現れる牧畜関連語彙を参照することで、現状の辞典の不足している点の検証を行った（第 2 回研究会）。また、分類索引や百科事典を作るにあたり、牧畜語彙の分類をどのように行うかについて、マードックの文化項目を参考に、議論を行った（第 3 回研究会）。また、辞典の英語化も進めた。

(3) 辞典の応用としては、研究会を開催するたびに辞典編集会議を実施し、分類索引の作成、および百科事典用のテキストの執筆を進めた。また、牧畜辞典制作で得た知見をもとに現地の子どもたち向けに製作中の絵本やカードゲームなどについても意見交換を行った。いずれも 2019 年度に公開予定である。

### 成果の公開状況、計画

チベット牧畜文化辞典（パイロット版）のオンライン版を更新し、2017年度末から1,000件程度の新規語彙を追加し、公開した。英語訳も進めたが、内容の検証がまだ終了していないため、英語訳の公開は2019年3月現在停止中である。中国語訳は日本語版・英語版が確定してから進める予定で、翻訳等は停止中である。

公開 URL : <https://nomadic.aa-ken.jp>

最終年度となる2019年度には日本語版と英語版の辞典を書籍で刊行する。そこには分類索引（シソーラス）を含めるべく準備中である。また、オンライン版は2019年度中にリニューアル公開する予定で、百科事典やシソーラスの機能をもったものとなる予定である。上記ウェブサイトにて公開する。辞典の応用としての教材や絵本、書籍等も同サイトにて概要を公開する。

## アイヌ語現地調査資料のアーカイブズ構築にかんする学際的研究

研究代表者名： 奥田 統己 参加者：所員 1、共同研究員 11

研究期間： 2018（平成30）年度～2020（令和2）年度

### 研究計画

アイヌ語のようないわゆる危機言語においては、新たな現地調査を継続するだけでなく、これまでに現地調査をおこなった研究者の残した資料を適切に保存・整理しドキュメンテーションを施すとともに、当の研究者が話者・関係者と築いてきた人間関係を踏まえ、現地と協同しながら公開と利用を進めるというかたちでの「研究者アーカイブズ」の構築が、今後の大きな課題となる。

こうした課題のもと、今年度は主に保存・観察・記述に焦点をあて、以下のような具体的なテーマについて、各共同研究者がそれぞれの専門に応じた研究発表を行う。

- ・アイヌ語諸方言資料の記述言語学的特徴について
- ・音声・映像資料の複製関係の整理と系統の推定について
- ・多様なメディアを横断して特徴と関係を記載するデータベースの構造について
- ・音声・映像フォーマットの技術動向とそれぞれの特性について
- ・現地調査の日程・調査内容と記録・資料の形成過程について
- ・採録当時の各話者の居住地の状況について

ほか

### 研究実績の概要（2018年度）

3年間の研究期間の初年度にあたる2018年度は2回の研究会を開催し、AA研所蔵の資料を主な素材としながら、アイヌ語現地調査資料のアーカイブズ化にかんする報告・意見交換を行った。

第1回研究会では研究代表者が本研究課題のねらいと背景を説明した後、まずAA研所蔵のアイヌ語映像資料について、調査の時点から現在までの資料の来歴と系統を追跡した結果の報告があり、ついでアイヌ語沙流方言の会話例文調査資料、アイヌ語美幌方言の調査資料およびアイヌ語沙流方言の調査資料について、アーカイブズ化の前提としての文献学的・記述言語学的分析の進行状況の報告と討論を行った。

第2回研究会では、研究開始から現時点までの進行状況と新たな課題についての報告ののち、主にAA 研所蔵の文書・写真資料を素材として、現地調査のようすを可能なかぎり復元しながらアーカイブズ化を行う試みの報告があった。さらに第1回に引き続きアイヌ語沙流方言の会話例文調査資料、アイヌ語美幌方言の調査資料およびアイヌ語沙流方言の調査資料について、アーカイブズ化の前提としての文献学的・記述言語学的分析の進行状況の報告と討論を行った。

### 成果の公開状況、計画

本研究課題を通じて整理を進めたAA 研所蔵アイヌ語音声資料のうち、お祈り2編、口頭文芸5編を、文字化・訳注とともに公開した。

<https://ainugo.aa-ken.jp/>

引き続き、本研究課題を通じて整理を進めたAA 研所蔵アイヌ語音声資料を、文字化・訳注とともに公開する。

## スワヒリ語諸変種にみられる多様性とダイナミズムへのアプローチ

研究代表者名： 品川 大輔 参加者：所員 2、共同研究員 18

研究期間： 2018（平成30）年度～2020（令和2）年度

### 研究計画

平成30年度においては、参加する共同研究員がすでに蓄積してきた成果ないし研究資源を共有し、それらを統合した新たな研究枠組みの構築を試みることを目的に、2回の研究会を開催する。第1回は6月16日を予定し、第2回は11月以降に開催予定である。また、以下の形での研究成果発信、およびその準備を行う。

#### 1. Sintu: Workshop VARIATION IN SWAHILI Micro-typology, sociolinguistic diversification and language contact

7月9-11日に南アフリカ・ケープタウンで行われる国際バントゥ諸語学会（7th International Conference on Bantu languages, Sintu7）において、“VARIATION IN SWAHILI Micro-typology, sociolinguistic diversification and language contact”と題したワークショップを開催する。このワークショップは、本研究課題の研究枠組みにもとづいて企画されたものであり、司会は研究代表者の品川と共同研究員のNico Nassenstein氏（マインツ大学）が務める。両者を含む複数の共同研究員が同ワークショップにおいて、スワヒリ語諸変種の構造的特性および新たな分類の提案に関する発表を行う。

#### 2. Swahili Forum における特集号（special issue）の編集

スワヒリ語学における世界的な学術雑誌であるSwahili Forum誌において、本研究課題の枠組みにおける研究成果を発信するべく特集号を編集する。編集は同様に品川とNassenstein氏が担当する。上述のSintuワークショップにおける発表原稿に加え、本研究課題メンバーを含む執筆者によるスワヒリ語の諸変種に関する論考を集め、2019年3月の発行を目指し編集作業を行う。

### 研究実績の概要（2018年度）

平成30年度においては、当初計画どおり共同研究員がすでに蓄積してきた成果ないし研究資源を共有し、それらを統合した新たな研究枠組みの構築を試みることを目的に、2回の研究会を開催した。各

回の内容は上述のとおりであるが、以下にその概要を述べる。第1回においてはこの研究会で扱おうとする「スワヒリ語諸変種」が指し示す範囲の同定と、それに対する近年の研究動向の概観を提示し、本共同研究の方法論的基盤について整理した。また具体的事例としてコンゴ東部へのスワヒリ語の伝播プロセスについて、言語構造に基づくアプローチから議論した。また、第2回の2つの発表はいずれもヴァナキュラなスワヒリ語変種としてのザンジバル諸方言に関するものであった。ただしテーマはある種対照的であり、一方は言語構造自体の分析とマイクロ類型論的な検討、もう一方は自然発話データ収集の実際に焦点を当てた報告であった。これらは、本研究課題の方法論上のいわば両輪である「バントゥ諸語マイクロ類型論」と「発話実践に重きを置いた言語調査」のそれぞれに対応するものであり、これらの融合を目指す本研究課題の初年度の研究会として有意義なものであった。また、こういった本研究課題の構想に基づいた研究成果として、2つの国際学会（第9回世界アフリカ諸語会議（WOCAL9）および第7回国際バントゥ諸語学会（Sintu7））において、8件の共同研究員による発表が行われた。とりわけ後者においては、代表者の品川と共同研究者の Nico Nassenstein（マインツ大学）によって、本研究課題のテーマを主題としたパネルディスカッションが設けられ、海外の幅広いオーディエンスに向けて、本研究課題のスタンスをアピールする機会となった。

### 成果の公開状況、計画

今年度の参加者による主たる研究成果は、第9回世界アフリカ諸語会議（WOCAL9）および第7回国際バントゥ諸語学会（Sintu7）における研究発表という形で公開された。とりわけ Sintu7 においては、代表者の品川と共同研究員の Nico Nassenstein（マインツ大学）が、本研究課題の主要テーマを主題としたパネルセッションを行った。以下、本研究課題に直接関与するもののみ、発表タイトルを列記する。

#### ・ WOCAL9

- Furumoto, Makoto and Yasunori Takahashi, “Kimakunduchi: a dialect of Swahili without word-stress”

- Miyazaki, Kumiko and Keiko Takemura, “Towards a new approach to ‘Viswahili’ in Zanzibar”

- Kutsukake, Sayaka, “Language Policy in Education of Tanzania: The Gap between Globalization and Multilingualism”

・ Sintu7: Workshop “Variation in Swahili: Micro-typology, Sociolinguistic Diversification and Language Contact” (organized by Daisuke Shinagawa and Nico Nassenstein) における発表

- Furumoto, Makoto, “On the origin of the Kimakunduchi aspect marker me--”

- Miyazaki, Kumiko and Keiko Takemura, “Dialectal Variation in Swahili - on the Lexicon and Grammar -”

- Shinagawa, Daisuke, “Notes on the distribution of relative constructions in Sheng: with special reference to -enye RC”

- Shinagawa, Daisuke and Nico Nassenstein, “Toward a ‘state of the art’: Variation in Swahili, current approaches, trends and directions”

- Yoneda, Nobuko and Kumiko Miyazaki, “Exclusive particles ‘only’ in Swahili: tu and peke yake”

来年度の成果公開については、上述の Sintu7 における品川および Nassenstein によるパネルでの発表内容を発展した形での論文集を、『Swahili Forum』の特集号という形で出版の予定で、現在出版準備中である。また、7月には海外共同研究員である Nico Nassenstein 氏を招いて第1回の研究会を開催する予定であり、今後の成果公開やスピノフ的な国際共同研究プロジェクトの立ち上げについて協議する。また、11月にマインツ大学での国際WSも計画しており、これらもあわせ、広く海外のスワヒリ語研究

者コミュニティに研究成果の発信を行っていく。

## モンゴル諸語における言語変容——外的要因と内的要因——

研究代表者名： 山越 康裕 参加者：所員 3、共同研究員 16

研究期間： 2018（平成 30）年度～2020（令和 2）年度

### 研究計画

本研究課題は内陸アジア地域にひろく分布するモンゴル語族の諸言語を対象に、通時面および共時面双方から比較・対照をおこない、自律的な音変化に代表される内的変化と、周辺諸言語との接触に起因する音韻・形態・統語・語彙等における外的変化の実態を把握することをめざす。具体的には 1. 音韻・形態・統語のそれぞれに関する語族内および近隣諸言語間の類型的研究、2. 対象言語のデータベース構築および拡充の 2 点をおこなう。

初年度となる 2018 年度は、共同研究員がそれぞれ展開しているデータベースの現状把握をおこない、整理したうえで今後のデータベース拡充方針について検討するほか、研究会ではとくに音韻体系と名詞形態論に焦点をあてる。音韻体系の比較・対照は内的再構に必要なプロセスであり、また名詞形態論では格体系、複数性標示、所有者標示といった形態的手段の対照が通時変化を考えるうえで重要なポイントとなるためである。これらについて、周辺諸言語を対象とした研究に従事する共同研究員の情報提供を受けつつ内的変化・外的影響による変化双方の可能性を探る。

### 研究実績の概要（2018 年度）

初年度にあたる 2018（平成 30）年度は 2 回の研究会を開催した。第 1 回研究会では研究課題の趣旨説明をおこない、あわせてモンゴル諸語に関するデータベースの状況報告（山越）と、それに関連する文字コードとフォントの問題についての現状報告（栗林）がおこなわれた。栗林氏による報告では、伝統的モンゴル文字の Unicode 化が行き詰っている現状が報告された。Unicode にはなっているが、フォントごとに割り当てている字形が異なるため、フォント指定のないウェブサイトなどではブラウザ等の環境によって適切に表示されないという問題があり、この問題にどう対応するかがデータベース構築時の問題となることが認識された。

第 2 回研究会では、とくにトピックを絞らず、共同研究員各自の関心事に寄せた研究報告がおこなわれた。風間氏からはモンゴル語における文法の諸問題について、さらなる検証・分析が必要と思われる項目をリストアップし、報告いただいた。植田氏からはモンゴル語の破裂音における 2 系列の対立が、有気／無気によるのか、無声／有声によるのかという問題についての報告がなされ、音響音声学の観点から分析した結果、有気／無気の対立を支持する結果が出たことが報告された。大竹氏は契丹語研究の現状について報告いただいた。近年急速に進展している契丹語研究の現状を共同研究員が共有できたことは、非常に大きな貢献といえる。

### 成果の公開状況、計画

研究会の経緯を記録するため、ウェブサイト（<https://sites.google.com/view/ilcaa-mongolic/>）を開設し、共同研究員間で資料・関連情報を共有している。

モンゴル諸語の語彙および例文データベースの構築・公開を検討している。

# 東・東南アジアの越境する子どもたち ― トランスナショナル家族の子どもをめぐる文化・アイデンティティとローカル社会

研究代表者名： 石井 香世子 参加者：所員 2、共同研究員 8

研究期間： 2016（平成 28）年度～2018（平成 30）年度

## 研究計画

2018 年度は、共同研究プロジェクト全体としての最終成果物を、2つの形で取り纏める作業を行う。

1 つめは、英語による雑誌特集号の出版であり、2017 年度 12 月に実施した国際会議の際に提出・発表されたフルペーパーの中から、とくに質の高いペーパーを選び、プロジェクト成果としての英語出版を目指すものである。上述国際会議の場で、基調講演者をお願いした 2 人の研究者（Parrenas 先生、Piper 先生）に、プロジェクト責任者（石井）とともに、特集号の編者となっていただき、両先生の 2 人の協力を得て、特集号へ向けたペーパーの選別、修正指示、編集を行った。この外部査読と修正、再査読を経て、出版を目指す。

また、上記英語版特集号の選に漏れてしまった共同研究メンバーについては、英語・日本語を問わず、本研究プロジェクトの間に行った研究成果を持ち寄り、報告書を出版する予定である。この出版へ向けた原稿を、各自が執筆するのに、2018 年度を充てる予定である。

## 研究実績の概要（2018 年度）

共同研究プロジェクト全体としての最終成果物は、現在 2 つの形で取り纏め作業中である。

1 つめは、英語による雑誌特集号の出版であり、現在、2 回目の査読結果を待っている途中である。これは、2017 年度 12 月に実施した国際会議の際に提出・発表されたフルペーパーの中から、とくに質の高いペーパーを選び、プロジェクト成果としての英語出版を目指すものである。上述国際会議の場で、基調講演者をお願いした 2 人の研究者（Parrenas 先生、Piper 先生）に、プロジェクト責任者（石井）とともに、特集号の編者となってもらった。そして両先生の 2 人の協力を得て、特集号へ向けたペーパーの選別、修正指示、編集を行った。この外部査読と修正、再査読をするうちに 2018 年度が終わったが、結果的に、第 1 稿は外部査読によって出版が不可能となってしまった。そこで現在、別の雑誌への特集号の再投稿を目指し、新しいメンバーを補充のうえ、再度、原稿を修正し、外部査読に提出して結果を待っているところである。会議から出版まで長い時間を要しているが、必ずや共同研究プロジェクトの成果が、英語で、顕在性の高い形で世に送り出すことができるよう、鋭意出版準備中である。また、上記英語版特集号の選に漏れてしまった共同研究メンバーについては、英語・日本語を問わず、本研究プロジェクトの間に行った研究成果を持ち寄り、報告書を出版予定である。

## 終了報告

本共同研究は、最初の 2 年間（2016 年度から 2017 年度）をかけて、共同研究の主題を貫く共通の定義と理論枠組みとして共同研究メンバーで共有するため、連続ワークショップを実施した。具体的には、まず第 1 回研究会で「移動する子ども」という概念とその研究上の位置づけについて、当該概念の提唱者、川上郁夫先生(早稲田大学)にご講演いただき、「子ども」の定義と、「transnationality」の

理論的位置づけを共有した。つぎに、本共同研究の主な理論的視座である3つの枠組み、①Partial Citizenship, ②Ubiquitous Border in the City, ③Transnational Class について、それぞれの提唱者（Rhacel Parrenas 先生、Henrik Leuhn 先生、Nicole Constable 先生）に、公開国際ワークショップでご講演いただいた。

これらのワークショップを経て、共同研究メンバー間の概念定義と理論的フレームワークが共有化されたところで、それぞれのフィールドの事例分析を持ち寄り、研究成果を世に問い、また議論を通じて考察を深めるための国際会議を、2年目（2017年）の終わりに実施した。国際会議では、先述のワークショップでご講演いただいた講演者たちに、基調講演者・発表者として再度参加してもらうことで、より文脈に沿った、統一性のある議論を目指した。またこのとき、主題である「東・東南アジアの越境する子どもたちとトランスナショナル階層化」を議論するうえで、共同研究メンバーだけでは欠けてしまう部分を補うため、個別にそれぞれの分野で第一線の活躍をしている研究者たちを、世界各国から招へいして議論を深めた。それら発表フルペーパーの中から選んだ論文を修正し、基調講演者たちを共同編者として、本共同研究の成果を学術雑誌の特集号として出版すべく、2020年初めの出版へ向けて目下作業中である。

### 成果の公開状況、計画

本年度は、共同研究メンバー1人1人の個別の成果発表以外は、目立った出版物としての成果の公開はなかった。ただし、（同じメンバーで中心となって構成している科研費共同研究プロジェクトの最終年度となる）2019年度中に、共同研究プロジェクトの報告書の出版、2020年度初めに雑誌特集号の出版、を実現すべく鋭意準備中である。

それぞれの個別メンバーの成果については、以下の共同プロジェクトホームページにて報告している。

<https://childmigration.aa-ken.jp/>

2019年度中に、共同研究の成果報告書（共同研究メンバー全員、英語/日本語混合出版）を出版する予定である（2018/3/31締切りで全ての原稿が集まったところであり、6月末までに編集作業を終え、9月末までに原稿の確認を筆者の先生方へお願いし、12月末までに出版する予定である）。

また、2020年度中に、共同研究メンバーのうち選ばれた一部を含む、本共同研究プロジェクトの最終国際会議の発表ペーパーの中から優秀なものを選抜し、雑誌特集号として出版すべく、修正・査読・修正・編集の過程を何度か経ながら、鋭意準備中である。現在、2つめの雑誌への特集号としての投稿中で、外部査読を待っているところである。

## 「わざ」の人類学的研究 ― 技術、身体、環境（「もの」の人類学的研究（3））

研究代表者名： 床呂 郁哉 参加者：所員 4、共同研究員 13

研究期間： 2017（平成29）年度～2019（令和元）年度

### 研究計画

2018年度においては前年度における基礎的研究を踏まえて世界各地における多様な「わざ」（技術・芸）の人類学的研究の方法論的、理論的基盤に関する共同研究を実施すると同時に、先行研究

や先行する関連プロジェクトにおける知見等のレビューを実施する。またアジア、アフリカなど各地の異なる生態的ないし社会・文化的環境に応じた「わざ」の多様性についても前年度における検討を踏まえて討議を深化させる。更に近代西欧的技術観のもつ限界やリスクについて原発事故を含む事故やハザードの事例などを含めて、非西欧社会における在地的技術との比較研究を検討する。その理由は以下の通りである。現代において技術が語られる際、ともすると近代西欧的な技術観が暗黙のうちに前提とされがちである。この技術観においては、主体／客体、社会（文化）／自然といった分割に基づき、人間による自然や環境への一方的な統御可能性が前提とされる。また技術に伴う筈の身体性や（生態的、文化的環境を含む）場所性などのローカルな文脈は軽視され、技術のグローバルな適応可能性が自明視されがちである。しかしながら、地球環境問題やハザード、東日本大震災における原発事故等に端的に示されるように、通念的な技術観の持つ限界やリスクもまた如実に顕在化している。こうした状況に鑑み、本研究課題では、世界各地における技術の諸相の実態を人類学的視点から比較検討する作業を通じて、旧来の通念的な技術観を超える新たな多元的な技術観の構築を試みる。具体的には次年度の研究会では非西欧社会における在地的な技術に関する事例の検討はもちろん、いわゆる近代的技術の事例に関しても具体的な事例検討と討議を行い、多元的な技術観の構築のための準備作業を進めていく予定である。

### 研究実績の概要（2018年度）

第一回研究会では以下のように3編の報告が実施された。まず卯田は、宇治川の鵜飼を対象とし、鵜飼における生き物への人間の介入の技術について検討を行った。木村は岩手県大船渡市で戦前に地元出身の兵士に向けて送られた『銃後通信連絡部 部報』を事例としてリアルタイムな呼びかけと同時性を作る技術について考察を実施した。森下はインドネシアにおけるラマダーンの日程の決定方法を事例として宗教的慣行をめぐる技術的次元に関する考察を行った。

第二回研究会は2日間に渡って実施された。まず初日は奥野、田中、内堀による3編の報告が実施された。奥野報告はマレーシア・サラワク州のプナンとロシア・シベリアに見られる似通った狩猟実践を事例に異種間の「わざ」という主題について検討した。田中報告では第一次世界大戦後に登場したいわゆるトレンチ・アートを題材に同アートの役割の変化について論じた。内堀報告はウェンデル・H.オズワルト『食料獲得の技術誌』を取りあげて、それが技術の人類学的研究に関してもつ現代的意義に関して論じた。二日目最初の報告である丹羽報告は3.11東日本大震災の当事者を含む同災害に関するアートや表象を取りあげて、その意味に関する人類学的検討を実施した。吉田報告ではインドネシア・バリ島から日本へもたらされたガムラン音楽を担う日本人演奏者たちの活動を取り上げ、その中で、楽器がどのように作用するのかを考察した。久保報告では近年の人類学的モノ研究に影響を与えてきたアクターネットワーク論（ANT）を批判的に援用しつつ、日本における家庭料理の変容という事例を取りあげて「わざ」の人類学的研究の可能性を探求した。

第三回研究会では染谷と大村による計2編の報告が実施された。このうち染谷報告は「わざ」を日常生活を営むための行動スキルをも含むと捉え、そうした日常的行動スキルを獲得する身体の特徴を、生態学的アプローチの理論に依拠しながら提示した。大村報告は、人間や非人間の他者と関係を築くために必要なわざについて、カナダ極北圏の先住民であるイヌイトの生業活動を基に考察した。

### 成果の公開状況、計画

本研究課題のメンバーは、個別に学会や論文等で本課題に関係した研究成果を発表しているのはもちろん、英文論集 *An Anthropology of Things*(Kyoto University Press & Trans Pacific Press:2018)などにおいても本研究課題の複数のメンバーが本課題の研究主題にも関係する成果の一部を公表している。また当該年度の各研究会の概要に関しては下記の HP で公開している。

URL: [www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp233](http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp233)

前年度と同様にメンバー各自が学会や学会誌等で成果発表することはもちろん、引き続き各研究会後にはウェブサイト概要を公開・発信する。さらに最終年度の 2019 年度の課題終了後のできるだけ早い時期に成果論集を出版することを予定している。

## イスラームに基づく経済活動・行為(第二期)

研究代表者名： 福島 康博 参加者：所員 2、共同研究員 13

研究期間： 2016（平成 28）年度～2018（平成 30）年度

### 研究計画

本研究課題は、共同研究員を「イスラーム金融」「ハラール産業」「ファッション・美容」「ツーリズム」「イスラーム・グッズ」「イスラームと地域経済」という六つのサブ・グループに振り分けている。このサブ・グループは、同じ産業であっても異なる地域（例えば中東と東南アジア、南アジアと中央アジア、など）を専門とする共同研究員複数で構成している。そのため各回の研究会はサブ・グループ単位での報告を行い、このことで各産業の特徴と地域間の相違を同時に明らかにすることを可能なものとする。

2017 年度は、地域としてはマレーシアとシンガポールという東南アジア、テーマとしてはムスリムの経済に関連した行動を、非ムスリムから見た評価に関する研究会を、1 回実施するにとどまった。そこで本年度は、これまで取り上げられなかったツーリズムについて焦点を当てる。共同研究員のみならず外部者からの報告を受けることにより、より活発な議論が行われることを目指す。なお、報告者の事情等で上記サブ・グループ単位での報告が難しい場合は、近接テーマ・地域の共同研究員 2 名で研究会を実施することとする。

### 研究実績の概要（2018 年度）

平成 30 年度は、上記のように、共同研究課題としての活動、とりわけ共同研究会は開催できなかった。これに代わって、共同研究員においては、個人の資格・立場において本研究テーマに沿った研究を行ってもらった。

中でも特筆すべきは、AA 研共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究（第三期）—紛争と共存のダイナミクス」の研究代表者である富沢寿勇氏らが監修した『ハラールサイエンスの展望』（シーエムシー出版、2019 年 2 月）において、本共同研究課題の共同研究員の 4 名が個人の資格において、それぞれイスラーム金融（福島）、ハラール化粧品（大川）、ムスリム観光（安田）、ハラールと流通（藤原）という本研究課題と縁の深いテーマで論考を発表した。

上記以外にも多くの研究員が、単著、論文、口頭発表等でそれぞれの業績を公開した。

### 終了報告

本研究課題は、2013年度から15年度にかけて行われた第1期に続く第2期として、3年間研究活動を行ってきた。この3年間において開催された研究会で報告された事例とその地域は、以下の通りである。すなわち、マレーシアにおけるホテル産業でのハラール対応の実践に関する研究、マレーシアにおけるハラール食品産業における企業経営に関する研究、チュニジアにおけるイスラーム・グッズの生産・流通・消費に関する研究、シンガポールにおけるムスリム女性のベール（トゥドゥン）着用に関する研究、およびマレーシアの華人文学にみるマレー・ムスリム観に関する研究である。

研究会において報告された報告件数は、第1期と比べて、また当初の研究計画と比べても少ないものとなってしまった。しかしながら今期は、北アフリカを研究対象として加えることができたこと、文学や経営学といった第1期にはなかった学問分野からの調査研究を行えたこと、および共同研究員以外の外部からの報告者を複数名（うち1名は、マレーシア人研究者）招へいして報告を行ってもらったことが、第1期と比較した場合の特筆すべき特徴と言えよう。

本研究課題は、申請書類に「期待される研究成果」として、「（前略）イスラームに基づく経済活動・行為について、（中略）現代のムスリムやイスラーム諸国のミクロ・マクロな動向、およびこれらの相互連関の実態が明らかになることが期待できる。また、これらを明らかにすることによって、産業界を中心とする社会的ニーズにも応えられると考える」と記した。本研究課題の活動期間であった2016～2018年という3年間は、東京オリンピック・パラリンピックを目前に控えた時期であり、本研究テーマ、とりわけ外国人ムスリム観光客の急増とそれへの対応などが、社会的に注目される中、官民一体となった取り組みが現実に日本全土で実施されるタイミングと重なった。こうした現実の急速な変化に我々共同研究員自身が驚きを覚えつつも、それぞれのテーマで研究を進めることができ、またそうした成果の一部は現場での取り組みに結びつくことができた。そういう意味では、学として官民に貢献ができたと自負することはできる。

ただ、これはもっぱら研究代表者の能力の限界によるものであるが、研究会の開催回数が当初予定を満たすことができず、実現していればより広範な見識を共有でき、もって社会に還元できたのではないかと反省するところである。

## 成果の公開状況、計画

ウェブサイトを開設しており、過去の研究会の要旨や共同研究員のエッセー等を従来より継続して公開している。平成30年度は、大きな情報更新は行わなかった。

<http://islamandeconomy.web.fc2.com/aaken/index.html>

2013年度から2015年度までの第1期、および2016年から2018年度までの第2期の活動において発表された各報告と、それに基づいて報告者から提出されている論文を基に、成果論集として公表したい。可及的速やかに取りまとめた上で、出版社と交渉し形としたい。

## 東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)―共存と

### 紛争のダイナミクス

研究代表者名： 富沢 寿勇 参加者：所員 7、共同研究員 20

研究期間： 2017（平成29）年度～2019（令和元）年度

## 研究計画

本課題は複数の分野（人類学、地域研究、歴史学、政治学等）の研究者によって東南アジアにおけるイスラームとムスリム社会に関して域内での紛争/共存の動態に注目しながら共同研究を進めていくことを目的としているが、本年度は前年度までと同様に東南アジアにおけるムスリム/非ムスリム、あるいはムスリム内部での諸集団間の関係などについて各メンバーによる個別の研究報告と討論を通じて検討していく。具体的には第一回目と第二回目では東南アジア島嶼部と大陸部におけるムスリム社会をめぐる紛争/共存の動態などについての個別報告と討論を実施する。なお、研究の進め方として、前年までと同じく AA 研の海外拠点コタキナバル・リエゾンオフィス（KKLO）を中心としてこれまでに構築してきた東南アジアの研究者とのネットワークを活用しながら国際的な共同研究として実施していく。具体的には第二回研究会は在東南アジアの外国人研究者との共同によるコタキナバルでの国際ワークショップを開催する。成果に関しては前年度同様 HP へアップするのはもちろん、KKLO の実施している講演会を通じて研究者以外の聴衆へのアウトリーチ活動等も実施していく予定である。

## 研究実績の概要（2018 年度）

第一回研究会では 新井、川端、日下部による計 3 編の報告が行われた。新井報告では、インドネシアにおけるアラブ系の位置づけやその宗教と政治への役割をめぐる議論が交わされた。川端報告では政権交代を含むマレーシアの政治状況に関して報告が行われた。日下部報告 3 ではバングラデシュ国内とミャンマーのロヒンギャをめぐる情勢について報告と議論が行われた。

国際ワークショップとしてコタキナバルにて実施された第二回研究会では副代表の床呂郁哉（AA 研）の挨拶と研究課題に関する趣旨説明に始まり、メンバーの岡本、鈴木そしてゲスト・スピーカーの A. R. Abdullah (UMS) による計 3 編の報告が続いた。それぞれインドネシアのイスラームの現代的動向、マレーシアにおけるイスラーム法の歴史的背景、20 世紀前半におけるフィリピンのムスリム社会へのアメリカの植民地統治に関する研究報告が行われた。その後、Shamsul A. B. がコメンテーターをつとめ、全体討論が行われた。最後に代表の富沢から、全体のまとめ、および今後の研究会の予定等について説明が行われた。

第三回研究会ではゲスト報告者の野田仁所員（AA 研）による中央アジア、新疆ウイグルのムスリム社会に関する報告、ならびに森と床呂の両名によるフィリピン南部ムスリム社会に 2 報告を含む計 3 編の報告が行われた。報告の後には質疑応答が行われ、野田報告に関しては新疆ウイグルの最近の動向に関する質疑を含む活発な議論が交わされた。また森および床呂によるフィリピン南部ムスリム社会に関する報告をめぐるのは、フィリピン南部和平に関わる実務家を含む複数の参加者から多くの質問とコメントが寄せられ、熱心に議論が行われた。

（各研究会における個別の報告のより詳しい内容に関しては下記を参照のこと；

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp236>）

## 成果の公開状況、計画

まず各研究会の内容等に関しては AA 研のホームページ（URL は下記参照）で公開しているほか、学会・研究会等でメンバーが個別に成果発表を実施した。これに加えて研究成果発信と社会還元のため、本研究課題副代表の床呂およびメンバーの森正美は、フィリピン南部でのムスリム社会に関連した紛争やテロ事件、とくにいわゆるマラウィ市占拠事件をめぐる現地邦字紙「まにら新聞」に記事

を公表した他、フィリピンでは現地実務家向けの公開講演会（2018年9月10日）を実施した。他に床呂と吉田はインドネシアのジャカルタで邦人向け公開講演会を企画・実施するなど研究成果の一般向けの公開・発信などいわゆるアウトリーチ活動も積極的に実施した。（本課題の URL :

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp236>)

上に記したように積極的な成果公開を既に実施していることに加えて、最終年度である2019年度の終了後のできるだけ早い時期に、英文の成果論集を取り纏めることを予定し、すでに準備作業の一部に着手している。

## 南アジアにおけるムスリム社会の民族誌的研究

研究代表者名： 外川 昌彦 参加者：所員 3、共同研究員 14

研究期間： 2018（平成30）年度～2020（令和2）年度

### 研究計画

本共同研究では、南アジア文化人類学の民族誌的研究の成果を、英領期にさかのぼる民族誌的営為や1950年代以降の多様な村落調査に基づく人類学的研究の成果を振り返り、その後の人類学的研究の展開や関連領域に示唆を与える民族誌的研究の可能性を検証する。計画の初年度は、ムスリム社会の民族誌的研究に焦点を置き、特にAA研の文化人類学者・故原忠彦教授（1934-1990）のムスリム社会の民族誌を取り上げ、学際的な視点から考察する公開シンポジウムを開催する。また、研究会の課題を共有する、オリエンテーションを兼ねた研究会を開催する。

### 研究実績の概要（2018年度）

第1回研究会（6月24日）は、共同研究会のお披露目もかねて、「50年後に振り返るベンガルの農村社会—故原忠彦教授の民族誌再訪」と題した公開シンポジウムを、日本ベンガルフォーラムとの共催で開催した。

シンポジウムでは、故原忠彦教授の1960年代のパキスタン時代に実施されたゴヒラ村の農村調査に基づく民族誌的研究を取り上げて、その今日的な意義を学際的な観点から検証した。シンポジウムの登壇者は発言者順に、谷口晋吉（一橋大学名誉教授）、外川昌彦（AA研所員）、杉江あい（AA研共同研究員、東京外国語大学PD）、藤田幸一（京都大学・東南アジア地域研究研究所）、高田峰夫（AA研共同研究員、広島修道大学）、石井溥（AA研元所長、東京外大名誉教授）である。最後に、故原忠彦教授のご子息の原裕氏より挨拶を頂いた。会場では、原プロジェクトの関係者であった安藤和雄（京都大学・東南アジア地域研究研究所）よりコメントが寄せられるなど、活発な議論が行われた。東京外大の府中キャンパスで開催され、来場者は120名を数えた。

第2回研究会（2019年3月17日）では、はじめに、第一報告者として、代表者の外川昌彦が、「南アジアの民族誌的研究の課題—民族誌的概念としての「アーリヤ」・「ムレッチャ」・「ヤーヴァナ」と題し、共同研究会の趣旨について報告した。特に、英領期にさかのぼる南アジアの民族誌的研究を振り返り、いわゆる「アーリヤ人」学説が、英領インド社会の民族学研究やヒンドゥー社会研究に与えた影響を検証し、カースト社会観や、ムスリムなどのマイノリティ宗教や少数民族を捉える

視点に影響を与えた経緯など、その今日的な意味と課題について議論を行った。また、今後の研究会の計画について議論を行った。

次に、共同研究会のメンバーによる最近の文化人類学的研究の成果として、特に、インド・ヒンドゥー社会に関わる議論を振り返る報告が行われた。第二報告者の古賀万由里は、近著『南インドの芸術的儀礼をめぐる民族誌』（2018年5月刊行）に基づいて、ヒンドゥー儀礼と芸能に関わる最新の民族誌的な成果について報告した。ディスカッサントとして杉江あいが、コメントと質問を行った。また、第三報告者の澁谷俊樹は、「『一見低カースト的な文化』をめぐる」と題して、インド西ベンガル州の民衆儀礼であるガジョン祭の儀礼組織とその歴史的背景について報告し、特に、これまで「アーリヤ文化」との対比から位置づけられてきたベンガルの民衆儀礼の分析枠組みについての再検討を行った。ディスカッサントとして中谷哲弥が、コメントと質問を行った。

### 成果の公開状況、計画

公開シンポジウムの成果は、英文のドラフト原稿としてその編集を進めており、ゴヒラ村の村落社会研究を中心とした民族誌的研究を回顧する論文集として刊行の準備を進めている。その他、2018年度中に開催した研究会の概要やその成果については、AA研の本共同利用・共同研究課題のウェブサイト (<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp245>) で公開している。

## 『プレザンス・アフリケーヌ』研究(2)テキスト・思想・運動

研究代表者名： 中村 隆之 参加者：所員 2、共同研究員 15

研究期間： 2018（平成30）年度～2020（令和2）年度

### 研究計画

本共同研究は2015年度～2017年度共同利用・共同研究課題「『プレザンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治=文化学のために」の継続的課題として、雑誌・出版社・書店の名前である「プレザンス・アフリケーヌ」（以下PA）の思想と運動をテキストの組織的読解を基盤に解明する試みである。

初年度に当たる2018年度は、2018年6月開催予定の第1回研究会において本研究の目的と各共同研究員の役割を明確化し、3年間の共同研究の礎となる人的基盤を確立する。研究会で読むテキストをあわせて選定するとともに2019年度に予定する国際シンポジウムについての協議を行う。研究発表は日本アフリカ学会のPAを対象とするフォーラム発表者から選出する予定である。第2回研究会は2019年の3月を予定し、PAの関連テキストの読書会および研究報告3件を行うつもりである。あわせて第2回研究会は科研費による基盤研究(B)「世界文化〈資本〉空間の史的編成をめぐる総合的研究：アフリカ・カリブの文学を中心に」（研究代表：星埜守之）との合同開催を予定していることを付記する。

### 研究実績の概要（2018年度）

2018年度は3回の研究会を実施した。以下、研究実績を箇条書きで記す。

- ・研究共同プロジェクト第2期の意義と目的の共有：本研究は2015年度からの継続・発展課題であり、この第2期目から新たに加わる共同研究員も多い。このため第1回研究会では本研究の代表の中

村、副代表の佐久間所員から第2期の意義と目的を述べるとともに、同趣旨に沿った形で立花研究員からプレゼンス・アフリケーヌ（以下PAと略記）の基礎報告を頂いた。

・日本アフリカ学会における研究成果の公表：第1回研究会の実施に先立ち、中村、佐久間所員（代表）に加え、村田、小川両研究員によるPAのフォーラムを日本アフリカ学会第55回学術大会（5月26日）にて実施し、同発表に基づく研究論文を同学会の学術誌『アフリカ研究』94号に公表した。

・科研費との合同研究会開催による学術的な意見交換：第2回・第3回研究会は関連する科研費のプロジェクトと合同で開催し、ニューカレドニアの先住民カナクの独立運動（モカデム）、ラテンアメリカおよびアジアの雑誌研究（久野、福島）、アフリカ・ルネッサンス論（松本）といった多様かつ豊かな研究発表と意見交換が行なわれた。

・第2期の新たな試みとその成果：本研究が副題に掲げる「テキスト」の研究員間における共有のため、中村がシエク・アンタ・ジョップの基礎論文を訳出し、読書会を実施した。中尾研究員からは本研究に希薄だったイスラーム文化とPAの接点を探る研究報告を頂いた。

### 成果の公開状況、計画

本課題に参加する所員および研究員による2018年度の成果発表は、学術論文17件（うち1件は研究ノート）、口頭発表28件、図書9件、社会に向けた成果発表4件である。また本研究への謝辞を明記した学術論文は『アフリカ研究』掲載の5件である。

2019年度における成果公開としては、本年9月に実施予定の国際研究集会（ストラスブール大学）の研究報告の雑誌掲載の計画がある。それとともに第1期に行った国際研究集会の記録のPAでの特集号の実現も引き続き予定されている。また本年度より日本語における共同研究の成果公表としてPAのテキストの訳出と解説を中心とした書籍の計画を立てている（実現は2019年度以降を予定）。

## ダイナミズムとしての生——情動・思考・アートの方法論的接合

研究代表者名：西井 涼子 参加者：所員 5、共同研究員 13

研究期間：2017（平成29）年度～2019（令和元）年度

### 研究計画

本研究課題において、具体的に検討すべきテーマは2点ある。

① 身体としてその場に共在することの意義を再考し、ミクロな具体の細部にこだわる人類学の方法を中心としたこれまでのフィールド・サイエンスの手法の有効性を、異なる専門分野の知見から再検討する。

② 生命、出来事の流れを捉えるにあたり、皮膚に覆われた個々の身体を主体として一つの単位とすることを前提とせず、それらが生成するプロセスを捉える方法論を検討する。その際、認知科学、科学哲学、現象学、霊長類学、アート技法の専門家である芸術家などの間でそれぞれのアプローチの違いを比較検討し、ダイナミズムとしての生をめぐる思考の新たな可能性を模索する。

○ 【2018年度】はじめの2年間ですべてのメンバーの発表を一通り終えることをめざすため、2年目にあたる今年度は残りの半数が発表できるように研究会を実施するとともに、研究代表者が科学研究費で海外から招へいする精神分析にも造詣の深い文化人類学者のクラパンザーノ氏を囲んで国際シン

ポジウム及び国際ワークショップを開催する。また、今年度は研究会においては、なるべく文化人類学とそれ以外の分野の研究者を組み合わせるよう設定し、それぞれが上記の2点のテーマを念頭に各分野の理論的知見や研究成果を報告し、これに対してメンバー全員で議論を行う。

○ 研究成果の公開については、各研究会を行うごとにAA研ウェブサイト等において詳細に報告する。

### 研究実績の概要（2018年度）

はじめの2年間ですべてのメンバーの発表を一通り終えることをめざすため、2年目にあたる今年度は残りの半数が発表できるように研究会を3回実施した。

また、研究代表者が科学研究費で海外から招へいた精神分析にも造詣の深い文化人類学者のクラパンザーノ氏を囲んで公開で行った国際シンポジウムを1回、課題研究会及び科研プロジェクトと共催で行った国際ワークショップを1回開催した。

年度の後半には、今度の研究の方向性について議論を毎回行い、来年度の最終年度に予定している成果論集とりまとめにむけてメンバー全員で議論を行った。

ここから、研究会で検討すべき次のようないくつかの問題系が明らかとなってきた。

- 1) 個—群れ
- 2) 身体（感覚）—環境
- 3) 観察者と記述の問題
- 4) 時間性（偶然性、一回性）

これらの問題系にアプローチする“ethnographic way”—オントロジーと経験をつなぐ方法を迫及する。

### 成果の公開状況、計画

研究成果の公開については、各研究会を行うごとにAA研ウェブサイト等において詳細に報告している。<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp234>

今後1年以内の成果公開は、研究会を行うごとにAA研ウェブサイトにおいて詳細に報告するとともに、最終年度には成果論集の刊行をめざして成果とりまとめの研究会を行い、年度内には草稿発表会を行う。その次の年度における刊行をめざして科研費の出版助成金を獲得すべく準備をすすめる。

## 社会性の起原：ホミニゼーションをめぐる

研究代表者名： 河合 香吏 参加者：所員 3、共同研究員 20

研究期間： 2018（平成30）年度～2020（令和2）年度

### 研究計画

ヒトを含む霊長類は群居性動物の一員として、さまざまな様態で群れ、集い、平和的に、あるいは敵対的に、またあるいは最小限の関わりを維持しながら、他者と共に生きている。本共同研究課題では「同所的に他者と共に生きる方途」といった意味で「社会性 sociality」の語を用いる。3年計画の1年目である2018年度の共同研究会における主要テーマは、ヒトの社会性の根幹にあり、生物学的＝進化的基盤をもちながら、広く社会文化的多様性を示す「同調・共感・共同」とする。研究会では5～7

名程度が話題提供をする予定であるが、ゲストスピーカー（研究協力者）として古人類学、社会心理学、比較認知科学等、隣接学問分野の専門家も積極的に招へいする。

初回研究会で趣旨説明、および霊長類社会・生態学、生態人類学、社会文化人類学の各分野における「同調・共感・共同」をめぐる研究動向のレビューをし、問題点と問題意識を共有する。第2回（以降）は各自のフィールドデータに基づく研究報告を主とするが、年度末にはまとめと展望の時間を設けることとする。

今年度は研究計画の初年度にあたるため、共同研究課題全体としての統一的な成果公開の予定はない。

### 研究実績の概要（2018年度）

本共同研究課題は、人間を特徴づける高次の「社会性」の起原について、人間と人間以外の霊長類の社会という2側面からアプローチするものである。2018年度には上記のとおり2回の共同研究会を開催した。第1回研究会では、本共同研究課題研究会の初回に当たり、まず代表者が趣旨説明を行った。具体的には、本課題が人間に特異的な社会性の起原を具体的なホミニゼーション＝ヒト化の過程と関係づけて明らかにすることが目指されることが示された。引きつづき、全員が少し長めの自己紹介をし、本共同研究課題への抱負を述べた。さらに霊長類学、生態人類学、社会文化人類学の3分野から、それぞれの分野における社会性の起原（とくに同調・共感・共同）をめぐる近年の研究動向が紹介された。またゲストスピーカーとして自然人類学および進化心理学の専門家を招へいし、それぞれ「共同性」および「利他性」をめぐる最新の研究についてレクチャーを受けた。第2回研究会では5名の共同研究員が社会性の起原（とくに同調・共感・共同）に関する個別の研究成果を報告した。またゲストスピーカーとして比較認知科学の専門家を招へいし、「道徳性の萌芽」に関する最新の研究成果についてレクチャーを受けた。1年目にゲストスピーカーのレクチャーを含めて充実した報告が集中し、社会性の起原をめぐる研究の広がり（多様性）と普遍性を確認することができ、今後の共同研究の展開にとって大きな意義があった。

### 成果の公開状況、計画

本年度（2018年度）は本共同研究課題の初年度にあたり、本共同研究課題としての成果刊行物はない。本年度に開催した各研究会の記録については、プログラムや発表要旨等の報告書をAA研のWebサイト [<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp242>] に掲載した。

本共同研究課題が終了する年度（2020年度）の翌年度（2021年度）中に、商業出版物として成果論文集を刊行する予定である。また、共同研究員はそれぞれの所属学会の学術大会等において成果の一部を発表していくこととする。

## 中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究

研究代表者名： 近藤 洋平 参加者：所員 2、共同研究員 9

研究期間： 2016（平成28）年度～2018（平成30）年度

### 研究計画

前年度における共同研究者間の合意に従い、中東の少数派が有した「生き残り戦略」について、参加者各人が専門とする領域について考察を進める。9月にはAA研にて研究会を開催し、共同研究員の一部がその成果を報告するとともに、残りの参加者も研究の進捗状況について報告する。そして2019年3月には、プロジェクトの総括のために集い、共同研究員間の成果について確認するとともに、成果の公開について議論する。

2018年3月に、現地に住む人々と本プロジェクトの研究成果を共有することを目的としてベイルートのサンジョゼフ大学にて公開セミナーを開催したところ、多くの聴衆を得ることができ、また建設的かつ実り多い機会となった。本プロジェクトが有する学問上の意義は、我が国のみならずレバノンおよびその近隣国においても大きいとの認識を共同研究員は共有している。かかる理由から、2018年度においても、公開のセミナーとし、またAA研やJaCMES以外の場所での開催を模索し、研究会開催地の関心のある学生、研究者、一般の方が参加しやすいように努める。

### 研究実績の概要（2018年度）

本年度は、前年度に引き続いてプロジェクトの全体テーマである少数派の生き残り戦略を、共同研究員が各人の専門分野から読み解いた。例えばオマーンについて、少数派である12イマーム派がなぜその信仰を保持しながら生活できているのかが、同地の多数派であるイバード派の「寛容」思想から説明された（近藤報告）。また20世紀のレバノンにおいて、移動する選択、移動しない選択が、その後のアルメニア人コミュニティにどのような結果をもたらしたかが明らかになり（Dakessian報告）、あわせて20世紀半ばのアルメニア人のアルメニア共和国への帰還が、レバノン内戦や、ソヴィエト連邦とどのように関わっていたのかが整理された（吉村報告）。さらにトルコ内陸地におけるアレヴィーによる自集団のアイデンティティ維持の諸活動が、血族内の交差イトコ婚の実践や、各種集会の開催などから説明され（若松報告）、パレスティナ人やシリア人難民が移住のドイツでどのように中東地域とのつながりを維持しようとしているかが解明された（錦田報告）。このほかクルド人の団体の文化的諸活動が、レバノン国内に暮らすクルド人の連帯とアイデンティティ維持、さらには政治参加にどのように影響を及ぼしているかが明らかになった（Hourani報告）。そして19世紀のシリアにおいて、通訳官という地位や所属公館の移籍が、個人・集団の生き残りとはどのように関わっているのかが、理論的側面とともに解明された（黒木報告）。

中東のキリスト教徒による生き残り戦略について言えば、20世紀のオスマン帝国の崩壊とロシア革命後の、ギリシア正教会に属する商人やブルジョワジー、また知識人たちの活動が、同派の存続にいかに重要であったかが確認された（Slim報告）。また十字軍の中東進出とコプト教徒の移住の関係が、生き残り戦略から分析されたほか（辻報告）、19世紀のトリポリ・シャームにおけるキリスト教マロン派、ユダヤ教徒、そしてギリシア正教会の諸活動が、各集団の「生き残り戦略」からまとめられた（Mouawad報告）。

### 終了報告

3年のプロジェクト期間中、レバノンと日本にて合計6回の研究会を開催した。参加した共同研究員は、それぞれの専門分野において国際的に認知され、そして研究の最先端を進む11人の学者たちである。彼ら彼女らが、専門から大きく逸脱することなく、しかしながら最大限の成果をあげることができるよう、本プロジェクトでは「生き残り戦略」を共通の話題とした。歴史学・思想史的手法および政治学・社会学的手法などの手法を用いて、中東地域を把握しようとする試みは、一歩間違えば

個々人の研究の寄せ集めという性質しかもたないものにもなりかねないが、幸いにして本プロジェクトは共通の話題を設定することで、それを回避することができた。各回では、担当者の報告に対して有益な質問やコメントが出され、建設的な議論が展開された。そして研究会を通じて、生き残り戦略は、同地域の諸社会が抱える問題の一つである、人びとの平和的共存という問題に取り組むさいの有効な観点であることが確認された。プロジェクトの運営に関しては、AA 研で2回、バイルートの JaCMES で2回、そしてサンジョゼフ大学とバラマンド大学というレバノンの大学で1回ずつ公開の研究会を開催することができた。国際的な研究課題として位置づけられた本プロジェクトは、研究の成果を外部に向けて発信する点でも意義のあるものとなった。

## 成果の公開状況、計画

AA 研のウェブサイトにも、研究会で報告された内容の一部を公開している。

2019 年度中に、プロジェクトの成果物を刊行する予定である。

## 近世南アジアの社会と文化：文学・宗教テキストの通言語的比較分析

研究代表者名： 太田 信宏 参加者：所員 4、共同研究員 13

研究期間： 2016（平成 28）年度～2018（平成 30）年度

### 研究計画

本研究課題は、近世期南アジアにおける思想・宗教、文学を中心とする文化を、歴史学を含む様々な分野を専門とし、異なる言語史料を利用できる研究者が協働して、言語や分野の枠を超えた比較と連関の視点から分析する。最終年度に当たる本年度は、前年度に引き続き、近世期における思想・宗教の展開について個別報告をもとに議論を深める一方で、政治権力との関わりが特に強いテキストに着目する。ムガル朝を含む各地の政治勢力の宮廷とその周辺で記された文学作品（歴史書を含む）や、統治・行政に直接的に関わる文書（刻文など）についての報告を共同研究員に求める。これらの政治権力と緊密に結びついた諸テキストを分析するにあたっては、①テキストが成立した政治的文脈、②それぞれのテキストのジャンルの中での当該テキストの位置付けに留意するだけでなく、③テキストで用いられる語彙や形式のあり方にも配慮する。また、共同研究全体の総括として、文献を資料・分析対象とする研究において一般的に用いられる言語やジャンルなどの枠組みを超えることを志向した本共同研究の成果と課題について、総合的に議論する。研究会の報告内容を逐次、AA 研ホームページにおいて公開する。

### 研究実績の概要（2018 年度）

本研究課題の三年目にあたる本年度は、①南アジアにおけるペルシア語文献の生成とそれに対して南アジア現地諸語の文献が及ぼした影響、②統治・行政に密接にかかわる文書とその言語や書式、③近世における口承伝統と書字文学との交渉に関わる諸報告が共同研究員によって行われた。①については、フランス・パリを拠点とした国際的共同研究プロジェクト「ペルソ・インディカ」と協働し、海外の研究者からも多数の報告を得た。ムガル朝期のペルシア語文献のなかで、『アクバル大典』は

インドに関する百科全書的な内容を持ち研究史料として盛んに利用されてきたが、さまざまな視点からの諸報告により、その全体像、現地語諸文献との関係をさらに検討する必要性が明らかとなった。『アクバル大典』に集約されたインドに関する知識については、それがのちの「オリエンタリズム」に及ぼした影響を論じる報告があったが、現地諸語文献への「還流」についてもさらなる研究が必要であろう。統治・行政文書に関する諸報告からは、近世期において文書行政の重要性が増大したこと、それが文書の内容・形式の変化と連動している可能性が、再確認された。また、口承伝統と書字文学の交渉についての諸報告は、近世期におけるその深まりが文学の多様化に帰結した可能性に目を向けさせる内容であった。

## 終了報告

本研究課題は3年の期間内に5回の研究会を開催した。三年目に開催した2回の研究会は海外の研究プロジェクトとも協働し、その関係者によるものも含めて、全30本の報告が行われた。近世期の多種多様な文献・テキストを取り上げた諸報告からは、個々の文献をそれ自体で完結したものとするのではなく、その他の諸文献との関係性の網目の中で捉えることの重要性が再認識された。研究で扱う文献の言語やディシプリンが異なる研究者がひとつの文献について議論する中で、専門研究者による検討では思いつきにくい、当該文献の間テキスト的な生成に関するアイデアが得られたように思われる。その一方で、そうしたアイデアを学的知へと確立する方法論は、残念ながら、今後の課題として残った。また、様々な分野の研究者が議論を重ねる研究会は、「宗教」や「文学」といった概念を再検討する場ともなった。例えば、専門的な宗教研究は、特定宗教・宗派の教義や組織の歴史的展開を焦点化することが多いが、宗教が社会全体や個人生活の中で占める領域や役割が固定的なものではなく時代と状況によって変わるものであることが、この共同研究ではあらためて確認された。そのような意味での南アジア宗教史のなかで、宗教文献と非宗教文献の境界が曖昧化した近世はひとつの画期であった可能性がある。このような全体史的な視野をもった、個別具体の専門的研究が求められるであろう。

## 成果の公開状況、計画

研究会の報告内容を逐次、下記のAA研ホームページにおいて公開している。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp226>

研究会における報告をもとにした論集の完成稿を2019年度内にとりまとめ、できるだけ速やかにAA研プロジェクト出版物として刊行する予定である。

## アフリカ農業・農村社会史の再構築: 在来農業革命の視点から

研究代表者名： 鶴田 格 参加者： 所員 2、共同研究員 17

研究期間： 2016（平成28）年度～2018（平成30）年度

## 研究計画

研究会最終年度となる2018年度の第一回目の研究会においては、報告書出版へ向けた論点の絞り込みということを念頭におきながら、理論的な枠組みを整理するために共同研究員の池上甲一、小松かおり、安溪貴子から、それぞれ「技術論と農法論」「農耕技術の集約化に関する原理的考察」「調理

技術と農耕様式の相互作用的關係」について報告を受け、それを踏まえて具体的な執筆陣と執筆テーマの選定にはいる。第二回目の研究会においては、論点整理の軸を地域間比較というところにおき、共同研究員の石川直樹、佐藤千鶴子、石山俊から、それぞれアフリカ諸地域のなかでのエチオピアの特殊性、南アフリカの特殊性、さらにサハラ砂漠の北と南の差異、といった視点から報告をいただき、比較の視点からサハラ以南アフリカの農業・農村の特殊性に関する議論を深める。第3回目の報告者はいまのところ未定であるが、個別的な事例報告とともに、報告書の最終とりまとめに関する議論を行う予定である。

### 研究実績の概要（2018年度）

2018年度は最終年度ということもあり、次年度以降に研究成果を出版することを前提に、全員で出版内容を討議する機会を設けた。また出版を見据えて、アフリカ農業・農村の特質に関する執筆者の統一的な理解を得るために（1）在来農業革命に関する理論的な検討、（2）アフリカ以外の地域との比較によるアフリカ農業・農村の特性の検討、を行うことを念頭に研究会を企画した。（1）については、移動性、混作、粗放性などに特徴づけられるアフリカ農業の特性が、作物複合やエクステンシブな生活様式、また作物保護（害虫防除）といった観点から検討された。昆虫学の視点からは、アフリカ在来農業とりわけ混作のメリットが総合的害虫管理（IPM）の観点から評価された。次にアフリカ農業を評価する際には、スマート農業に代表されるような現在の個別的な農業技術論に対して、地域の風土、歴史、社会を考慮にいれた「農法」という視点が重要になることが論じられた。また料理法の観点から、アフリカでは主食作物が3度の革命によって大きく変化してきたが、料理法については、デンプン質食料の粉食（固粥）か、ゆでた後につきつぶす方法などごく少数の方法に限定されることが指摘された。（2）については、東南アジアおよびサハラ・オアシスに関する報告をもとに議論した。とりわけ緑の革命を受容した東南アジアと、同じく緑の革命的な技術と商品化が浸透したアフリカの水田農村における互酬性の在り方の違いを比較したところ、消費優先の規範という、アフリカ農村コミュニティにおける社会的紐帯の特徴が浮き彫りになった。このほか、サヘル地域、アンゴラ、ウガンダ、タンザニアの農村社会の変容に関する個別的な事例報告があった。

### 終了報告

2016年度から開始した本共同利用・共同研究課題は、2010年度から2015年度にかけて実施された共同利用・共同研究課題「歴史的観点から見たサハラ以南アフリカの農業と文化（1）（2）」の後継プロジェクトである。本共同利用・共同研究課題では、3年間に9回の研究会を開催した。研究会では、アフリカ農業・農村の特徴を明確にすることを目的に、さまざまな切り口から理論的、実証的な報告を行い、議論を重ねてきた。農業革命やイノベーションに関わる理論的検討を行うために、文明的な視点、農業技術のイノベーションの視点、などから理論の枠組みづくりを試みるとともに、他地域との比較に力を入れてきた。これまで東南アジアをはじめ、ニューギニア、ヨーロッパ、日本の農業・農村との比較を試み、アフリカ農業・農村の特徴を捉えるうえでいくつかの重要な論点を取り出すことができた。また主作物の種類（コメ、イモ、バナナ）や生業の形態（焼畑農耕、農牧）、個別の農業技術（農具、害虫防除）といった切り口からの報告や議論もなされ、アフリカ農業の多様性に関するメンバーの理解を深めた。一連の研究会における議論の成果は、本課題の後継プロジェクトである「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から（2）」において引き続き議論を重ねたうえで出版する予定である。

## 成果の公開状況、計画

2018年度中に開催した3回の研究会は公開とし、何名かの非メンバーが研究会に参加した。各研究会の概要については、その概要をAA研の本共同利用・共同研究課題のウェブサイト

(<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp223>) で公開している。

本共同利用・共同研究課題の成果公表については、本課題の後継プロジェクトである「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から（2）」のなかで成果出版物の刊行準備を進めることになった。

## エチオピア・ジンマ王国伝来イスラーム祈禱集研究

研究代表者名：石川 博樹 参加者：所員 2、共同研究員 6

研究期間：2017（平成29）年度～2018（平成30）年度

### 研究計画

本共同利用・共同研究課題の主たる目的は、1880年代後半にジンマ王国を訪れたフランス人旅行者ボレリが持ち帰ったイスラーム祈禱集（以下「ジンマ王国伝来イスラーム祈禱集」）の内容を解明するとともに、その結果とジンマ王国を中心とするエチオピア西部におけるイスラームに関する情報を組み合わせて検討することにより、本史料の史料的価値を明らかにすることである。

最終年度にあたる2018年度では、まずジンマ王国イスラーム祈禱集の展示を中心としてエチオピア西部のイスラーム信仰の歴史と宗教実践を解説する企画展示「祈りにつながるイスラーム：エチオピア西部の信仰とその歴史」展の開催準備を行い、4月下旬から5月中旬にかけて開催する。その後年度内に2回研究会を開催し、ジンマ王国伝来イスラーム祈禱集の内容分析を進めるとともに、関連情報の検討を行い、本祈禱集の史料的価値の考察を行う。そして本祈禱集の画像と史料解題で構成する出版物の刊行に向けた準備を進める。

### 研究実績の概要（2018年度）

2018年度の本共同利用・共同研究課題の活動としては、AA研、科学研究費補助金基盤研究（B）「エチオピアにおけるイスラーム化の史的検証：アラビア文字資料の収集・分析を通して」（代表：石原美奈子、課題番号17H04528）、東京外国語大学現代アフリカ地域研究センターとの共催による企画展示の開催準備を進め、2018年4月23日から5月25日にかけて企画展示「祈りにつながるイスラーム：エチオピア西部の信仰とその歴史」をAA研資料展示室において開催した。研究会は2018年12月1日の2019年3月3日の2回開催し、2017年度に明らかになったジンマ王国伝来イスラーム祈禱集の成立に関する情報を基にして、ジンマ王国のイスラーム化に関するこれまでの研究成果を参照・照合しながら、本祈禱集の書写地や本祈禱集がジンマ王国にもたらされた経緯についての検討を行った。またいずれの研究会においても成果公開の方法について参加者全員で検討を行った。

### 終了報告

1880年代後半にジンマ王国を訪れたフランス人旅行者ボレリが持ち帰ったイスラーム祈禱集（以下「ジンマ王国伝来イスラーム祈禱集」）の史料的価値の解明を主たる目的とする本共同利用・共同研究課題では、2017年度と2018年度に計4回の研究会を開催した。

検討の結果、ボレリがジンマ王国の王宮にて見出した 204 葉からなる本祈祷集は、複数の祈祷集・祈祷句の合冊本であり、同王国の為政者もしくはその周辺の人物が日常的な祈禱のために利用していた可能性があること、また本祈祷集が 19 世紀半ばにおそらく 1 人の人物によって書写されたことなどが判明した。本祈祷集がジンマ王国王宮にもたらされるまでの経緯については解明には至らなかったものの、同王国のアッバ・ジファル 2 世が行ったイスラーム文献の収集と王国内における配布の一環として本祈祷集が同王国にもたらされた可能性が考えられる。また本祈祷集の書写地については、アラビア半島をはじめとする西アジアのいずれかの地域である可能性とともに、現在のエチオピアのいずれかの地域である可能性も否定できない。

本共同利用・共同研究課題の成果公開としては、2018 年 4 月 23 日から同年 5 月 25 日にかけて企画展示「祈りにつながるイスラーム：エチオピア西部の信仰とその歴史」を開催し、同年 6 月 1 日には展示解説を実施した。このほかに AA 研 IRC プロジェクトを活用したジンマ王国伝来イスラーム祈祷集の画像等のウェブ公開を予定しており、また 2019 年 7 月刊行予定の AA 研広報誌『フィールドプラス』第 22 号の巻頭特集の担当、また本巻頭特集寄稿者を招いてのトークイベント「フィールドプラス・カフェ」の開催が決定している。

### 成果の公開状況、計画

成果公開の 1 つとして、企画展示「祈りにつながるイスラーム：エチオピア西部の信仰とその歴史」を開催するとともに、本企画展示のウェブサイトを作成し、公開した。URL は以下のとおりである。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/islam.ethiopia/>

2019 年度に AA 研 IRC プロジェクトを活用して、ジンマ王国伝来イスラーム祈祷集の画像等のウェブ公開を実施する予定である。また 2019 年 7 月刊行予定の AA 研広報誌『フィールドプラス』第 22 号の巻頭特集を本共同利用・共同研究課題の参加者で担当することになった。また本巻頭特集と関連して、トークイベント「フィールドプラス・カフェ」を開催し、本共同利用・共同研究課題の成果の一部を広報することが決定している。

## 簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)

### 研究(3)

研究代表者名： 陶安 あんど 参加者： 所員 1、共同研究員 13

研究期間： 2017（平成 29）年度～2019（令和元）年度

### 研究計画

本年度の史料講読は、主として里耶秦簡（秦代）と五一広場東漢簡牘（後漢）を取り上げる予定である。里耶秦簡については、『里耶秦簡博物館蔵秦簡』によって従来未公開となっていた簡牘の図版と釈文が新たに公表されたが、旧発表分との比較検討を行う。また、今までは狭義の文書簡牘に焦点を当てて講読や整理分析を進めてきたが、今年度は、記録である簿籍の様式論的整理と解説に重点を置く。五一広場東漢簡牘は、7000 枚以上と推定される全簡の中でまだわずか 200 枚弱しか公表されて

いないが、『長沙五一広場東漢簡牘選積』によって鮮明なカラー写真と赤外線図版が齎されている。出土地点は、里耶秦簡と同様に民政官衙関連の遺跡であり、地理的にも比較的近い関係にあるが、時代的には、県と郷という行政末端機構が多数の生産活動を担い成長期の古代帝国を支えていた秦代と、県・郷の行政活動が衰退し、中央直属の郡レベルに地方行政の軸足を移した古代帝国が徐々に崩壊に向かう後漢とでは、大きな差異が認められるので、国家統治機構の変遷を基層から読み取る絶好の比較材料を与えると考えられる。

### 研究実績の概要（2018年度）

2018年度の史料講読は、『里耶秦簡博物館蔵秦簡』・『里耶秦簡（貳）』・『嶽麓書院蔵秦簡（参）』という三つの図録を通じて公開された簡牘史料を中心に進めた。『里耶秦簡博物館蔵秦簡』は、一部の新史料を含むほか、訳注稿を準備してきた『里耶秦簡（壹）』所収の簡牘について、赤外線写真等、従来より鮮明な画像データを提供するので、主として訳注稿の訂正に利用した。一方、『里耶秦簡（貳）』の刊行により、図版で確認できる簡牘の総数が従来の約2500枚から約6000枚に飛躍的に増加したほか、出土地層が異なる簡牘の比較研究が可能になり、里耶秦簡という史料群の内部構造がより複合的に把握できるようになった。とりわけ、異なる地層から出土した簡牘の綴合（てつごう、断片をつなぎ合わせて元の形を復元すること）が注目を集め、簡牘ライフサイクルの終着点である廃棄の様態について理解を深める助けとなっている。また、史料拡充により、古代の里耶鎮に置かれていた「遷陵県」における下級役人の人事異動とキャリア形成、また遷陵県以外の行政機関との文書・物・人の移動、ひいては秦国における広域行政の運用についても、多くの新しい知見が得られ、今後五一広場後漢簡牘等の漢代の文書史料との比較研究が求められる。

『嶽麓書院蔵秦簡（参）』は、『為獄等状』とよばれる秦始皇帝時代の判例集を収録し、当時の実体法と手続法に関する一次史料を提供する。例えば、未成年の刑事責任に関する秦律を制定する呼び水となった事案が含まれるが、こうした個別事象に関する研究論文を公表したほか、史料講読を通じて、本研究課題特有の文書簡牘整理手法を反映した『為獄等状』のより正確なテキストを構築し、すでに中国の出版社と出版に関する取り決めを交わしたところである。

### 成果の公開状況、計画

2018年度の成果公開は、総合的な学術書籍の刊行が後述の理由で実現できず、共同研究員の個別的な研究論文の公表に止まった。訳注稿を準備していた里耶秦簡については、『里耶秦簡（貳）』の刊行により史料が飛躍的に増えたため、刊行を延期せざるを得なかったが、次年度先行して刊行するために、『里耶秦簡（壹）』の公開史料に関わる人名・官職名・地名・暦日索引の構築に努めた。また、もと2月に入稿予定だった『嶽麓秦簡《為獄等状四種》釋文注釋（修訂本）』は、摸写本の修正が遅れたため、10月と入稿予定が変更された。

2019年度は日頃公表を進めている個別の研究論文に加えて、本研究成果に基づく次の二つの書籍を刊行する予定である。

- ・『里耶秦簡（壹）索引稿』（電子書籍、2020年3月AA研より刊行予定）
- ・『嶽麓秦簡《為獄等状四種》釋文注釋（修訂本）』（上海古籍出版社、2020年3~5月刊行予定）

## オスマン文書史料の基礎的研究

研究代表者名： 高松 洋一 参加者：所員 4、共同研究員 11

研究期間： 2017（平成 29）年度～2019（令和元）年度

### 研究計画

本年度は、共同利用・共同研究課題の第2年度として昨年度の議論を踏まえ、年に2回開催が予定されている研究会のうち7月開催の第1回目において、まずオスマン文書史料の種類のうち、オスマン朝のシャリーア法（イスラーム法）に関わる文書類型を取り上げた報告をオスマン朝史の専門家におこなってもらい、他地域の歴史の専門家から比較の観点からコメントをしてもらう。

この第2回の研究会では、昨年度のオスマン文書セミナーで帳簿史料を取り上げたことを踏まえ、オスマン朝史の専門家と他の時代・地域（マムルーク朝のエジプトを予定）の税の調査に関わる帳簿史料を取り上げ、両者を比較、普遍性と特集性についての議論を行う。

また1月開催のオスマン文書セミナーでは、広く中堅・若手のオスマン史研究者、イスラーム史研究者を対象に昨年度に引き続き、帳簿史料解説・実例の講読を行なう。セミナーの講師は共同研究員の清水保尚氏と代表の高松が務める予定である。

### 研究実績の概要（2018年度）

第1回研究会は、第11回オスマン文書セミナーと共催で行なった。高松洋一が「スィヤーカト書体の含まれる文書について」というタイトルで、難解で知られるスィヤーカト書体という手書きアラビア文字を含むオスマン朝の財政文書についての概観を行なった。「イラン式簿記術」がオスマン朝でいかに独自の発展を遂げたか、スィヤーカト書体が具体的にどのような文書の中で用いられたかについて解説し、文書処理手続の中で理解すべきことを説明した。あわせてスィヤーカト書体で記されるテキストに頻出する前置詞、動詞を整理し、読解のコツを伝授した。研究会に参加した院生の中にはその後、財政文書の読解に習熟した者もあり、若手研究者の育成に大きく寄与したと言える。

第2回研究会は、岩本佳子がオスマン朝社会経済史の根本史料である「租税調査台帳」について、史料の形式と内容の具体的な概観を行なうとともに、それがどのような発展を遂げ、国家財政制度の変容にともない作成されなくなっていくかについて報告した。ついでコメンテータとして、熊倉和歌子が「中世エジプトにおける租税記録の連続性と非連続性—マムルーク朝を軸に」という報告を行ない、マムルーク朝下作成された租税記録の残存状況について解説した。本研究会は、「租税の記録」という視点からオスマン朝とマムルーク朝の史料のあり方を比較した点で、国際的にも例のない試みがなされたと言うことができる。

### 成果の公開状況、計画

現時点では成果は未公開である。研究成果は、AA研ジャーナルに各研究員が「資料紹介」として投稿する予定である。

## イスラーム聖者廟の財産管理に関する史料学的研究：イラン・サファヴィー朝祖

## 廟を事例として

研究代表者名： 渡部 良子 参加者：所員 2、共同研究員 9

研究期間： 2018（平成 30）年度～2020（令和 2）年度

### 研究計画

本年（初年）度は、本共同研究課題の主要な研究対象であるイラン・サファヴィー教団の聖者廟サフイー廟の寄進地記録 *Sarih al-Milk* の写本の読解を進め、聖者廟の寄進地の集積・維持を可能にした法・行政・経済システムを示すデータの整理を行う。サファヴィー朝初期（16 世紀）・最盛期（17 世紀）に二度にわたり編纂された 2 点の SM のうち、まず本年はサファヴィー教団・サフイー廟財産基盤の形成・発展を示す 16 世紀版の読解を進め、既刊の誤りの多い部分校訂を修正しながら仮校訂・仮訳を作成、寄進地とその所有権に関わる法・行政文書のデータを詳細に抽出する。第 1 回、第 2 回研究会では、この史料読解の確認作業とともに、寄進地記録の書式・用語法、収録された文書群の類型・書式、背景となる歴史および行財政・法社会制度などについて、共同研究員が各自の専門・役割分担に基づく調査を進め、研究報告を行う。年度末にはゲスト・スピーカーを招いた公開ワークショップを開催し、サフイー廟寄進地管理を支えた主に法・行財政文書システムについての研究成果を発表するとともに、他地域との比較も通したイスラーム聖者廟財産管理の史料に関する包括的な議論を行う。ワークショップで得られた成果・議論は、次年度の 17 世紀版 SM 研究の課題とするとともに、最終成果の一部となる SM の資料集としてまとめる。

### 研究実績の概要（2018 年度）

共同研究初年度は、本共同研究課題の研究対象であるサファヴィー教団サフイー廟（イラン北西部、14 世紀初成立、サファヴィー朝の起源）の財産管理に関する主要史料、‘Abdi Beg 編寄進地記録 *Sarih al-Milk*（16 世紀、以下 SM）の研究を行った。寄進地とその獲得記録 600 件以上を入力、検索可能にすることで、サフイー廟寄進地が 2 世紀に亘る政治・社会変動の中、寄進・購入・贈与など多様な手段で獲得され、イスラーム法慣行に基づく様々な方法を用い維持されたことを示す情報が多数集められた。サフイー廟が社会からの崇敬や政治権力との関係を通し寄進地を獲得したことは夙に指摘されてきたが、その維持のためイスラーム法制度、特に証拠としての文書をどのように活用したのかという問題について、聖者廟に留まらず広く前近代イスラーム社会の法・経済システムの研究においても有用な、実態解明を要する多くの事例の存在が明らかになった。

しかし、SM の複雑な記録情報を有効に活用するためのデータ整理法の改良が、今後の課題となった。そのため、SM 収録のイスラーム法廷文書の書式を分析する文書形式学的研究、また SM 写本欄外書き込みから寄進地管理の変化を検討する写本学的研究も開始された。そして年度末に初年度成果として公開研究会を開催し、共同研究員 4 名が研究発表で SM とサフイー廟財産管理史料研究の今後の可能性を示した。

### 成果の公開状況、計画

本研究課題の主要な成果となるサフイー廟寄進地記録 *Sarih al-Milk* データ集の基礎的な入力作業が終了した段階である。

本年度に作成したサフィー廟寄進地記録データ集は、最終年度にかけ拡充・完成する作業を進めていく。それと並行して各共同研究員が進める研究を、学会発表・論文等の形で発表していく予定である。

### I-2.3.3 共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)

#### 現代インドネシア語における社会行為と文法

研究期間： 2017.11.1～2018.6.30

研究代表者名： Michael C. Ewing 受入所員： 中山俊秀

##### 研究課題の目的・内容

本共同研究は、インドネシアの話者が複数の文法体系-標準語と口語-をどのように使い分け相互行為を形作っているのかを探求することを目指した。AA 研の研究者たちとの共同研究では、インドネシア語の自然会話コーパスを活用し、話者たちが異なった構文や文法の組み立て方をどのような機能的動機づけの下に、どのように相互行為構築のためのリソースとして活用しているのかを研究した。共同研究の成果は AA 研で開催されたセミナーやワークショップでの発表に加えて、国際ジャーナルへの投稿や書籍の執筆などを通して発表した。

##### 終了報告

8ヶ月に渡る AA 研での研究期間中、AA 研および東京外国語大学の研究者や客員研究員らと目的とした研究内容について交流を持ち、多様な知見を得ることもできた。それによって、インドネシア語における標準語文法と口語文法ということなる言語モードの分析について、認知言語学、言語地域研究、ドキュメンテーション研究、社会・文化言語学研究など、多様なアプローチ、観点からの示唆を得ることができた。そうした研究成果は、AA 研だけでなく、他の研究機関（慶應大学、南山大学、国立民族学博物館、沖縄県立芸術大学）における多くの発表や交流の中で共有することができた。また、多くの論文や書籍などの刊行物としても国際的にプロジェクトの成果を発表することができた。それには、インドネシアの若者が使う話し言葉と書き言葉の4つのテキストタイプの中での標準および非標準インドネシア語の言語使用に関する書籍の執筆と5本の論文（会話データの分析方法論；インドネシア語会話における句構造；インドネシア語における指示行為；オンラインでの談話構造；フィールドワークにおけるラポールの考察）が含まれる。

##### 成果の公開状況、計画

書籍、論文、口頭発表の形で国内外に公開した。

### 持続可能な言語・文化の再活性化のための言語ドキュメンテーションと若年層

## の参画のモデル

研究期間： 2018.1.1～2018.7.15

研究代表者名： Sumittra Suraratdecha 受入所員： 中山俊秀

### 研究課題の目的・内容

本共同研究では、消滅危機にある伝統言語の保持と再活性化活動を取り巻く社会的ダイナミクスについて、特に若者層が果たす役割を分析し、持続的な言語再活性化活動を構築する仕組みを探ることを目的とする。消滅危機言語の再活性化においては、伝統知識の記録や保持に関心が偏り、伝統知識の保有者である老年層が活動設計の中核要素として考えられがちであるが、再活性化活動の持続性の観点からは若年層の積極的な参画が重要な鍵となると思われる。そこで、若年層を取り込んだ活動が進められている2つのコミュニティータイ・ペチャブリ県の黒タイ族コミュニティーと沖縄県宮古島の池間島のコミュニティーの比較研究を通して、若年層の参画が再活性化活動にもたらす社会的効果を探るとともに、持続的再活性化を実現するモデルを探求する。

### 終了報告

本研究では、黒タイおよび池間島コミュニティーでこれまで行ってきた観察・調査に加え、今回新たに行った比較研究調査を通じて、若年層の参画が言語再活性化活動の活発化および持続性の向上に大きな役割を果たしていることがわかった。再活性化活動の中でも若年層が企画段階から関わり、計画・実行に中心的に関与しているものでは、若年層が主体的、活発に活動しているだけでなく、他のコミュニティーでは老年層に属するものと考えられがちな伝統的知識に対して「自分たちのもの」という意識を共有することができていることが見て取れた。自らが知識の正当な所有者であり継承者であるという意識を持つことができている若者たちは、再活性化活動を展開する上での困難に直面しても積極的に対応し活動を継続しようとするレジリエンスを有していることも確認できた。そうした活動の中で育てられる積極性や社会的能力によって、若者たちのコミュニティー内でのリーダー的役割も強化される。さらに重要なのは、若年層を再活性化活動に巻き込むことで異なった世代の人々が自分たちの伝統を継承するという共通の目的に向かって協働する場が作り出され、伝統が消滅に瀕するコミュニティーではたいてい失われている縦横の人のつながりが回復するという効果が観察できた。若年層の参画にはこうした肯定的な効果が多く観察されたが、コミュニティーの中には同時に、若年層の参画を阻む階層意識や価値観、また上の年齢層のエゴの存在もあるため、言語再活性化のモデルとして若年層の参画を組み込むには課題もある。

### 成果の公開状況、計画

研究成果は学会での発表や論文での公開のほか、論文集企画のテーマ作りにも生かされた。

現在共同執筆の論文を査読付きジャーナルに投稿準備中である。

トルキスタンからイスタンブルへ—自由を求めて:20 世紀初頭の中央アジアに

## おける政治運動・知識人運動の比較研究

研究期間： 2018.4.01～2018.7.31

研究代表者名： Abdirashidov Zaynabidin Sharabidinovich 受入所員： 野田 仁

### 研究課題の目的・内容

19世紀における植民地主義拡大の間に、近代イスラーム思想が出現し、植民地の影響が政治と教育の分野における新しいエリート形成に貢献したと言っても過言ではない。近代主義のビジョンとアジェンダを開拓した最も著名な近代主義者にしてトルキスタンの指導的知識人はアブドゥルラフ・フィトラト（1886-1938年）であり、まず彼は、現地のムスリム・エリートの保守的なイスラーム思想および実践と闘った。その後は、新しく設置されたソビエト政権の厳格な教義主義と闘ったのである。反植民地主義的思想の発展期のトルキスタンの啓蒙者間の自由の概念におけるフィトラトの役割は、まだ研究の余地を残している。フィトラトをはじめとする中央アジア知識人のイスタンブルへの移住が、中央アジアの改革派運動の発展に重要な役割を果たしたことにこそ留意すべきである。本共同研究は、20世紀初頭のトルキスタンにおける反植民地主義的思想と知的変化の発展の中で、イスラーム主義から無神論へと変化をとげながら、フィトラトがどのように自由の概念に貢献したかを分析するものであり、中央アジアの知識人史に対する重要な考察を提供しうる。

### 終了報告

短い滞在期間ではあったが、議論を重ねて問題意識を共有し、知識人のネットワークについて、Abdirashidovはウズベク人（とくにフィトラトのケース）、野田はカザフ人（とくに新疆のカザフ、具体例としてはアクト・ウレムジウル）に焦点を当てて、比較検討を行った。オスマン帝国、ロシア帝国、中国新疆を結ぶ知識人ネットワークは相互の情報交換により機能しており、定期刊行物の流通、展開を分析することで、今後さらに詳細を明らかにできる見通しを得た。

### 成果の公開状況、計画

成果公開として、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト現代中東地域研究との共催で国際ワークショップ“Mobility of Central Asian Intellectuals: Scholarly and religious networks between Xinjiang and Middle East”を開催し、近代における中央アジアと中東とをつなぐ知識人ネットワークについて、新疆からの視点をも交えて、分析した結果を報告することができた。

今後も、個別論文の形で、成果の公開を予定している。受入れ所員野田の成果は、Emigrants/Muhacir from Xinjiang to Middle East during 1940–60s (ILCAA, 2019)掲載の論文にも反映されている。

## 青海チベットの半農半牧民の言語・文化の研究

研究期間： 2018.10.1～2019.3.31

研究代表者名： ラシャムジャ（拉先加） 受入所員： 星 泉

### 研究課題の目的・内容

研究目的：麦を中心とした農耕を行うとともに、家畜の移動放牧による牧畜も行う半農半牧という生業は、チベット高原で2000年以上にわたって営まれ、チベット文化の基層の重要な一部をなしている。本研究は、チベットの半農半牧民が長年にわたり育んできた環境と人と家畜のつながりに根ざした生活知（日常生活の中で育まれてきた技術や知恵の総体）を明らかにすることを目的とする。本共同研究の成果となる書籍『青海チベットの半農半牧民の生活知と文化語彙の記録（仮題）』は、従来の仏教中心の視点からは見えにくかった、チベットの基層文化に対する新たな視座を提供する。

研究方法：半農半牧の暮らしが営まれている青海省海南チベット族自治州貴徳県南部のM村を対象地域とする。M村は本研究の申請者の出身地でもあり、申請者は当地の環境と生業について熟知しているとともに、当地でのフィールドワークおよび資料収集の経験がある。その蓄積をもとにチベット語で上述の書籍の執筆を行う。

## 終了報告

ラシャムジャ（拉先加）氏は6ヶ月間の滞在中に、半農半牧の暮らしが営まれている青海省海南チベット族自治州貴徳県南部のM村を対象地域とする民族誌の執筆に取り組んだ。執筆にあたっては、章の構成から内容、執筆方針に至るまで、共同研究者の星（AA 研所員）とともに何度も話し合って検討を重ねた。ラシャムジャ氏が執筆した内容に対しては星が読んでコメントをするといった地道な作業を繰り返し、必要に応じて加筆修正を依頼した。民族誌 'jam--M grong tsho'i rnam bshad 『M村の半農半牧民の暮らし（仮称）』のうち、予定していた8割程度（B5版で496頁）の執筆を滞在中に終わることができた。全4章からなり、第1章はM村の自然環境、第2章はM村における半農半牧民の人々の各種の仕事、第3章はM村の人々の人間関係と風俗習慣、第4章はM村における人々の宗教信仰について詳しく記述している。この成果が完成すれば、チベット語による初めての本格的な民族誌が誕生することになる。ラシャムジャ氏は小説家でもあることから、その豊かな筆力に支えられて、極めて魅力的に、また生き生きと、当地の自然環境から人々の暮らしの営みの細部に至るまでを描き出すことに成功している。

ラシャムジャ氏は滞在中にAA研で実施されている共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容～ドキュメンタリー言語学的手法に基づいて～」のすべての研究会に参加し、共同研究員、研究協力者とともに有益な意見交換を行った。さらに、AA研で実施された国際シンポジウム「チベット文学と映画制作の現在」には登壇こそできなかったが、企画においては中心的な役割を果たし、さらに、AA研で刊行されている冊子『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』vol. 6の巻頭特集に寄稿した。

さらに、日本大学文理学部や福岡市市民芸術祭等にも招待され、チベット文学に関する講演を行い、一般の人々のチベット文化の理解促進にも大きな役割を果たした。

## 成果の公開状況、計画

滞在期間中の共同研究の直接的な成果はまだ公刊されていないが、滞在期間中に依頼されて執筆した文章が、AA研で刊行されている冊子『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』vol. 6（チベット文学研究会編、2019年3月刊行）の巻頭特集「異界からの呼び声」に“dre”（チベット語で「魔物、妖怪」の意）寄稿し、その日本語訳も同誌に掲載された。

2020年中に中国蔵学出版社より本研究の成果本（チベット語版）を出版する予定である。なお、2021年以降より、本書の日本語訳と語彙集（チベット語—日本語—英語）の出版を進める予定である。

#### I-2.3.4 共同利用・共同研究課題(短期滞在型)

### アイヌ語沙流方言音声資料の文字化・整理およびアスペクト表現と証拠性の解明

研究期間：2018.08.01～2018.10.31

研究代表者名：吉川 佳見 受入所員：山越 康裕

#### 研究課題の目的・内容

本研究では、AA 研が所蔵している田村すゞ子氏のアイヌ語資料のうち、アイヌ語沙流方言の音声資料の文字化と日本語訳を山越所員と共同で行うとともに、アスペクト表現や証拠性に関するデータを収集し、考察することを目的とする。

沙流方言は、アイヌ語の各方言のうち最も多くの資料が残されているが、物語文に比べて会話文の資料は非常に少なく、また、近年のアイヌ語母語話者数の急激な減少により新たにそうしたデータを収集することは極めて困難な状況にある。筆者はこれまでアイヌ語のアスペクト表現や証拠性を研究テーマとし、公刊されている沙流方言の散文説話資料を中心に扱ってきたが、散文説話においては語りに人称の制限があること（一人称で語られる場合がほとんどであること）や、物語構造がある程度定まっていることなどから、収集できる例文のバリエーションに限界があった。

今回対象とするデータは、田村氏が現地で調査・収集した音声資料である。このデータはアイヌ語母語話者同士の会話ではないものの、会話中で用いられるような例文をアイヌ語母語話者が提供しており、自然発話に近い形のものである。こうしたデータを利用することで、散文説話と会話文において現れるアスペクト表現・証拠性の比較が可能となる。しかしながら当該データはこれまで文字化や日本語訳といった整理がおこなわれておらず、利用が困難な状況にあった。こうしたデータを整理・公開することは筆者自身の研究のみならず、今後のアイヌ語研究全体にとって非常に有意義な資料となると考えられる。そこで、当該データを管理する山越所員と共同で、これまでの音声資料整理の方針（遺族からの許諾等も含む）に基づきデータの整理をすすめ、公開利用できる形に整える。そのうえで、会話文におけるアスペクト表現・証拠性の分析を進め、散文説話との比較対照をおこなう。上述のとおり会話文を欠く状態でのアスペクト表現・証拠性の解明には限界があることから、この整理・分析作業を通じて得られる成果は単にアイヌ語の文法構造の解明にとどまらず、言語類型論的にも貴重なデータを提供する機会となりうる。

上記のような目的・意義をふまえ、2018年8月1日から10月31日までの滞在日程のうち、8月1日から9月30日までの2か月間は音声資料の文字化・日本語訳を行い、10月1日から31日にかけてそれらの整理と考察を進める。

## 終了報告

AA 研が所蔵している田村すゞ子氏のアイヌ語資料のうち、アイヌ語沙流方言の音声資料の文字化及び和訳と整理を山越所員と共同で行った。その上で、アスペクト表現や証拠性に関するデータの収集と考察を行った。

今回対象としたデータは、田村氏が 1969 年 8 月 20 日から 9 日 9 日にかけて現地において行った H 氏（沙流郡門別町生）からの聞き取り調査である。調査テープは全 30 本で、一本あたり約 90 分である（総時間約 45 時間）。調査形式は、基本的には田村氏が H 氏に対して、アイヌ語の意味や用例について質問し、H 氏が使用の可否を判断したうえで、アイヌ語の例文および和訳、日本語による解説を加える流れになっている。これは複数のアイヌ語母語話者による会話ではないものの、実際の日常会話中で用いられるような例文を H 氏が提供しており、自然発話に近い形のものであると言える。例文の傾向としては、「どうして～したの？」—「～だから。」などといった、夫婦・親子・友人間で行われた場合の Q&A や、H 氏自身の経験に基づいた内容が多くみられる。

この調査テープに加え、調査ノートが「上」「下」巻 2 冊（それぞれ縦 250mm、横 176mm、29 行、行幅 6mm、ファイル閉じ）と、別添で「質問資料」と題された用紙（ノートと同形のもの）が 11 枚ある。質問内容は、田村氏の卒業論文および修士論文、知里真志保(1975[1954])『分類アイヌ語辞典 第三卷 人間篇』、知里真志保(1984[1956])『地名アイヌ語小辞典』が元になっている。しかし、この中で主な材料となっているのは修士論文での未解決事項（語彙、例文の確認）である。また、『分類アイヌ語辞典 第三卷 人間篇』については親族名称の項目だけを取り上げている。質問事項は、人称接辞、動詞・副詞同形のもの、後置副詞の他動詞としての使用の可否、発音に関するものが中心である。人称接辞の確認は全体を通して行われている。発音に関しては、切れ目の確認や、母音で始まる動詞に i が付いた場合の発音（わたり音の有無）の確認が主である。

整理にあたっては田村氏・H 氏両者の発言を書き起こし、テープごとにファイルを作成した。アイヌ語の単語と文章をあわせると 1 テープあたり約 350～500 例が抽出された（言い直し等による重複を含むため、用例数は概算）。抽出したものの中には、田村氏の『沙流方言辞典』には掲載されていない語もあり、今後のさらなる整理を通し、沙流方言辞典の補遺としての活用も期待できる。整理と並行し、自身の研究テーマと関連付けて、散文説話と会話文において現れるアスペクト表現・証拠性の比較を目標として、用例を検討した。動作継続を表す kor an、結果状態を表す wa an、過去・完了に関わる助動詞 a/aan、証拠性をあらわす形式名詞 ruwe/hawe/siri/humi を中心に、会話文における使用傾向を探ったが、用例に関しては必ずしも明確な場面設定があるわけではないため、さらなる精査が必要である。また、H 氏個人の使用傾向も含め、今後の整理と分析を通して解決していきたい。

## 成果の公開状況、計画

データに関しては話者および談話内で言及される関係者等のプライバシーの問題から現状では公開を控えている。データの分析結果については、共同利用・共同研究課題「アイヌ語現地調査資料のアーカイブズ構築にかんする学際的研究」研究会にて報告をおこなうが、話者および談話内にて言及されている関係者等のプライバシーの問題が解決された後、データ・分析結果とも公開する予定である。

## 東アフリカにおける女性高齢者の民族誌的研究

研究期間： 2018.05.01～2018.07.31

研究代表者名： 宮地 歌織 受入所員： 椎野 若菜

### 研究課題の目的・内容

申請者は1998年よりケニアにて文化人類学的調査を行っているが、2014年より女性と健康に関する調査を長崎大学ケニア拠点の協力の下、実施するようになっていく。これまでは西ケニアのグシイ人の社会を中心に調査を行ってきたが、海岸部との比較研究も含めクワレ地域にもエリアを拡大し、調査研究を実施。また共同研究を行う椎野准教授は、長年にわたり寡婦やシングル女性の実践や戦術を試みていることから、女性が寡婦になったときに、どう生きていくのかについて、今後、高齢化社会（また女性の方が高齢化になることが明らかとなっている）の中で、あるいはグローバル化する社会の多様性の中で、女性の生き方について比較研究を試みる。

### 終了報告

本年はクワレ地域における調査研究を中心にとりまとめを行った。各とりまとめたデータを国際学会等で発表を行った。椎野氏との比較研究であるが、それぞれ家族の事情が重なり、時期が当初の予定から変更となったものの、年度末に各研究の比較を行い、また次年度に向けた新たな活動についての情報交換や出版作業について議論を行った。

### 成果の公開状況、計画

研究成果は、ケニアのクワレ社会における女性高齢者関係の調査結果は、国際学会や国内学会、別科での報告内などで随時発表をしている。また2019年7月には東南アジア学会にて、12月にはAPコンフェレンス（立命館アジア太平洋学会）、その他論文でも別科にて出版計画が進んでおり、S科では来年度、他の萌芽科でも出版社との調整が進んでおり、2020年12月には印刷予定となっている。

## 歴史学と言語学の連携による満洲語行政文書の研究—『内国史院檔(順治元年分)』を中心に—

研究期間： 2018.05.01～2018.07.31

研究代表者名： 綿貫 哲郎 受入所員： 児倉 徳和

### 研究課題の目的・内容

満洲語はツングース諸語の一つであり、中国の清朝(17c-20c)において公用語の一つとして行政で用いられた。そして膨大な行政文書が満洲語で書かれ、現在に至るまでアーカイブとして保存されている。

本課題で扱う内国史院檔(順治元年分)は順治元年(西暦1644年)に流通した行政文書であり、内容は行軍の記録や部隊内で発生した事件とその裁判の記録を始めとし多岐に渡り、歴史的・言語学的に大きな史料・資料的価値を有している。

申請者はこれまで満文講読会 (<http://blog.goo.ne.jp/manjugisun>) という研究グループを組織し、内国史院檔・順治元年分のうち四月から六月分の記事(合計150葉)のローマ字転写と日本語訳の作業を行ってきた。本グループには申請者をはじめとする歴史学を専門とする研究者と、AA研の児倉准教授をはじめとした言語学を専門とする研究者が参加しており、歴史学と言語学の複合的観点から研究活動を行っている。さらに2017年度からは、七月分および十月分のローマ字転写と日本語訳の作業に取り組んでいる。

本研究課題では、これまでの研究活動により得られた成果を出版物の形で公開することを目指し、申請者とAA研児倉准教授の協働により出版に向けた具体的な作業を行う。

### 終了報告

研究期間中、受け入れ担当であった児倉准教授が海外派遣で不在であったため、オンラインで通信をしながらの編集作業を週1回の頻度で行った。編集作業では、四月分から六月分の出版のための組版の確認と校正を行った。

### 成果の公開状況、計画

成果物としてAA研からの出版を予定している出版物『内国史院檔 順治元年四月～六月』を今後出版する予定である。

上記の出版物を2019年度中に出版する計画で作業を行っている。

## 1-2.4 センター

### 1-2.4.1 情報資源利用研究センター

#### 年度計画

1. アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積、加工、公開、活用に関する研究を行う。
2. IRCプロジェクトを通じて、アジア・アフリカ言語文化資料の情報資源化を行う。
3. IRCウェブサイトの充実を図り、情報資源の発信体制をより一層強化する。
4. 所内基幹研究班、特別経費プロジェクト等との連携研究を実施する。
5. IRCワークショップを開催し、研究手法の普及、発展を推進する。
6. 情報資源利用の新展開のため他の研究機関との連携、共同研究を模索する。

#### 実施状況

1. アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積、加工、公開、活用に関する研究をIRCプロジェクトとして実施した。( )内は代表者名である。
  - 1) 『浅井資料』電子公開に向けた電子データの複製(荒川慎太郎)
  - 2) アイヌ語音声資料の文字化テキスト対応付けと公開(奥田統己・山越康裕)

- 3) シャルダン『ペルシア旅行記』画像資料デジタル・ライブラリー構築(近藤信彰)
  - 4) オスマン演劇ポスター画像公開(江川ひかり)
  - 5) オスマン演劇ポスター・音楽データベース(松本菜穂子)
  - 6) Matsya プロジェクトマイクロフィルムデジタル化(置田清和・小倉智史)
  - 7) 『清文彙書』デジタル画像化(早田清冷)
  - 8) モンゴル諸語対照基本語彙データベース(山越康裕)
  - 9) チュルク諸語対照基礎語彙(第5期)(児倉徳和)
  - 10) Old Tibetan Documents Online(岩尾一史・星泉)
  - 11) マレー言語語地図の作成とその元となるデータ収集のシステム開発(塩原朝子)
  - 12) カチン・ポータルサイトの構築(倉部慶太)
  - 13) Unicode 対応多言語テキストを簡単に作成する補助ツールの作成と公開(高橋洋成)
  - 14) モンゴル語および関連諸言語用ソフトキーボード(山越康裕)
2. 上記のプロジェクトのうち、AA 研所蔵資料のデジタル化を行ったものとして 1) ~5)、所外に所蔵されている資料のデジタル化を行ったものとして 6) ~10)、AA 研所員が共同研究に基づき調査・収集した資料をデジタル化したものとして 11) 、 12) 、研究用ツール開発として 13) 、 14)がある。
  3. 公開している情報資源の検索・閲覧・利用の利便性を向上させるために前年度全面リニューアルした IRC ウェブサイトを活用し、IRC プロジェクトの紹介や研究集会の広報など、情報発信に努めた。実施したプロジェクトの成果はウェブサイトで公開済みである。
  4. 所内基幹研究班、特別経費プロジェクト等との連携研究に取り組んだ。実施した IRC プロジェクトのうち、2)、8)~14)は基幹研究「言語ダイナミクス科学研究」との、3)~5)は基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」との連携研究である。
  5. 研究手法の普及・発展を目指し、下記のワークショップを主催した。
    - 1) IRC 国際ワークショップ「多文化社会におけるアーカイブの意義」、2018年8月2日、AA 研(304)、講演者:小田淳一(AA 研)、セリア・シュルファ(パリ第10大学人文系学士課程・グランゼコール準備級)、ヤセル・ヤクビ(パリ高等職業訓練センター・エンジニア養成コース)、カンタン・ハーゲン(ストラスブール大学翻訳・国際関係研究所修士課程)
    - 2) IRC Digital Humanities ワークショップ「『30年後も使えるデータ』を目指す」、2018年12月5日、AA 研(304)、講演者:和氣愛仁(筑波大学准教授)、高橋洋成(AA 研特任研究員)
    - 3) IRC ワークショップ「危機言語アーカイブと言語ドキュメンテーション」、2019年2月20日、AA 研(304)、LingDy3 プロジェクトとの共催、講演者:木本幸憲(日本学術振興会/名古屋大学大学院)、倉部慶太(AA 研所員)
  6. 情報資源利用の新展開のため他の研究機関との連携、共同研究を模索した。特に、IRC プロジェクト14件中6件は所外の研究者との共同研究として実施されている。さらに、上記ワークショップはいずれも他機関の研究者を招いて実施したもので、うち1件は情報資源利用の新展開を目指し、人文情報学の専門家に講演を依頼して企画したものである。

## I-2.4.2 フィールドサイエンス研究企画センター

### 年度計画

1. 臨地調査の手法の実践的・理論的な洗練と、「フィールドサイエンス」という「現地学」の構築にむけた研究活動を推進する。
  2. 上記の目的のためにフィールドサイエンス・コロキウムを企画・実施する。
  3. フィールドサイエンスを専門とする異なる分野の研究者の連携を図るオンラインのフィールドネットの整備を進め、分野を超えたフィールドサイエンス創成の方向性を模索する。
  4. 研究所の有する2つの海外研究拠点である中東研究日本センター(JaCMES: レバノン共和国ベイルート) 及びコタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO: マレーシア連邦・サバ州)の運営と整備を進める。
- なお、各事業のおおまかなスケジュールは以下のとおり。

4～6月

- ・第1回フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会
- ・第1回フィールドサイエンス・コロキウム

7～9月

- ・第1回フィールドネット運営委員会
- ・KKLO「サバの少数言語に関するセミナー」

10～12月

- ・第2回フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会
- ・第2回フィールドサイエンス・コロキウム
- ・JaCMES 若手研究報告会
- ・KKLO 第1回現地講演会
- ・フィールドネットワークワークショップ
- ・フィールドネット第1回公募制ラウンジ
- ・第2回フィールドネット運営委員会

1～3月

- ・第3回フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会
- ・第3回フィールドサイエンス・コロキウム
- ・海外拠点専門委員会
- ・JaCMES 諮問委員会
- ・KKLO 第2回現地講演会
- ・フィールドネット第2回公募制ラウンジ

## 実施状況

2018年度のフィールドサイエンス研究企画センター(以下 FSC)は、近藤信彰(センター長)、太田信宏(副センター長)、床呂郁哉、外川昌彦、塩原朝子、錦田愛子、吉田ゆか子から構成された。

1. および 2. 臨地調査手法の洗練、フィールドサイエンスの構築、フィールドサイエンス・コロキウムの企画・実施
  - 2010年度発足の「フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会」の企画立案により、少人数で集中的に討議をおこなう公開研究会形式の「フィールドサイエンス・コロキウム」を2回開催した。
    - ・『『環境変化とインダス文明』プロジェクトから(第1回)』(2018年9月21日(金)開催)
    - ・『『地域研究からみた人道支援』をめぐって(第2回)』(2018年11月18日(日)開催)
  - フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会を1回(9月21日(金))開催した。

### 3. フィールドネットの整備と公募企画の開催

- 文理各専門分野の研究者が情報を交換する組織として 2008 年度に設置したフィールドネットの機能を強化する目的で、2011 年度に発足したフィールドネット運営委員会を通じ、フィールドネットの企画・運営体制の整備を継続した。
- 利便性の向上をはかるためにウェブサイト画面の改良作業と整備を続行した他、新規企画としてフォトコンテストを企画し、そのための写真の募集を開始した。
- 公募企画「フィールドネット・ラウンジ(公募形式)」2 件を開催した。
  - ・ワークショップ「西アフリカ・イスラーム研究の新展開」(2019 年 1 月 20 日(土)開催)
  - ・ワークショップ「共同研究のすすめ:ブラジル地域研究における Cross-region×Collaboration の実践を通じて」(2019 年 2 月 16 日(土)開催)
- フィールドネット運営委員会を 1 回(2019 年 3 月 22 日(金))開催し、フィールドネットの今後の活動方針を策定した。
- フィールドネットワークショップ「地理情報から読み解く歴史:イスラーム史における GIS の活用」を開催した(2019 年 3 月 21 日(木))。

### 4. 海外研究拠点の運営と整備

II-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター「3.現地研究拠点」を参照

## I-2.5 既形成研究拠点

### I-2.5.1 アジア書字コーパス拠点(GICAS)

代表: 荒川 慎太郎 副代表: 澤田 英夫

関連所員: 伊藤 智ゆき、小田 淳一、高島 淳

#### 年度計画

アジア諸文字情報資源の蓄積と公開(GICAS 図書資料・展示資料の整備と管理)

アジア諸文字情報資源に関連する研究成果の公開

#### 実施状況

2018 年度の年度計画に沿った活動成果は、以下のとおり。

#### 1. アジア諸文字情報資源の蓄積と公開(GICAS 購入図書・展示会物品等の整理・管理)

プロジェクトスペース(207)に設置されている特別書架の貴重書の整理を行い、研究者の利用の便を図った。

#### 2. 文献学ワークショップの開催

2018 年 8 月 31 日、研究所にて、ロシア・東洋文献研究所に所蔵されるアジア諸言語の文献に関する国際 WS「International Workshop: Studies of Historical Documents from Central Asia, based on IOM Collection」を開催した。

### 3. アジア諸文字情報資源に関連する研究成果の公開

2019年3月、GICASにおいて開発したインド系文字の処理技術を利用して『日本語マラヤーラム語辞典』(印刷体)を刊行した(2019年6月、2018-2019年度 Dr. Hermann Gundert Endowment Award(ヘルマン・グンデルト博士基金賞)受賞)。

## I-2.5.2 中東イスラーム研究拠点

代表: 近藤 信彰 副代表: 高松 洋一

関連所員: 飯塚 正人、錦田 愛子、野田 仁、熊倉 和歌子

特任助教: 細田 和江

### 年度計画

2005年度から5年間に渡って実施した「中東イスラーム研究教育プロジェクト」によって形成された研究拠点を、2016年度より、人間文化研究機構の「現代中東地域研究」推進事業の副中心拠点として、発展させる。パレスチナ／イスラエル研究会、政治変動研究会、「移動・交流が創る中東・イスラーム圏」研究会を立ち上げ、国内研究会を開催するとともに、一般向けの大規模講演会、国際ワークショップ等を開催する。

### 実施状況

人間文化研究機構の「現代中東地域研究」推進事業の副中心拠点として、活動を行った。国内研究会を10回開催したほか、6月にはナクバ70周年講演会、7月には公開シンポジウム「越境のダイナミズム」、国際ワークショップ”Mobility of Central Asian Intellectual”を開催した。また、2月には、イランから Ali Akbar Alikhani 氏を招へいし、国際シンポジウム “Islam with Adjectives and Islami as Adjectives”を開催した。公募による次世代共同研究「現代ムスリム知識人の地域横断ネットワークに関する研究」を開始するとともに、政治変動研究会のWEBサイトを整備し、「林銑十郎 自筆研究ノート」「シャルダン 17世紀ペルシア旅行記図録」のサイトを構築した。

## I-2.6 所員の個人別研究活動

### I-2.6.1 概要

全国共同利用研究所としての本研究所の設立理念は、アジア・アフリカ地域の言語文化に関して、現地調査に基づく総合的あるいは個別の研究を遂行してその成果を公開すること、および国内外のそれらの研究の連携と活性化を図り、基礎資料の構築と公開に努めることにあり、2010年度に新設の共同利用・共同研究拠点に移行した後も、この基本理念は変わらない。

そうした理念に立って共同利用・共同研究拠点の任務を遂行するための研究活動は本年度、4つの基幹研究、2つのセンター(情報資源利用研究、フィールドサイエンス研究企画)、2つの既形成拠点およびそ

れらと密接に連携しつつ遂行される共同利用・共同研究課題(27件)を中心に実施された。所員がこれらの多様な共同研究活動に何らかの形で参画していることは言うまでもない。

本項目は、以上のような本研究所における共同研究活動が、所員個人のレベルにおける成果としてどのように反映されているのかを、本年度の所員ごとの研究業績を列挙する方式で示したものである。

## I-2.6.2 所員の研究業績一覧

### 荒川 慎太郎(あらかわ しんたろう)

准教授、言語学研究ユニット

研究主題: 西夏語学、西夏語文献学

#### 業績

1. 著書:『プリンストン大学図書館所蔵西夏文妙法蓮華経 写真版及びテキストの研究』, 2018.11, 創価学会・東洋哲学研究所.
2. 論文(共著): 橋堂晃一, 荒川慎太郎「「観心十法界図」をめぐる新研究: 西夏とウイグルの事例を中心に」, 『國華』1477, 5-20+PL1, 2018.11.(査読有)
3. 論文: “Once again, on the “Dual” Suffix of Tangut”, *Proceedings of the 51st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (2018)* (第51回国際漢蔵語学会実行委員会・京都大学白眉センター編), 2018.9. URL: <https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/235260>
4. 論文(共著): 荒川慎太郎, 橋堂晃一「ロシア所蔵「観心十法界図」の西夏文について」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』96, 71-102, 2018.9.(査読有)
5. 論文: 「西夏文字における、いくつかの左下要素の筆画について」, 『日本言語学会第157回大会予稿集』, 442-447, 2018.11, 日本言語学会.
6. 論文: 「西夏語の使役について」, 『シナ=チベット系諸言語の文法現象 2: 使役の諸相』(池田巧編), 135-147, 2019.3, 京都大学人文科学研究所.
7. 論文: 「2017年・2018年莫高窟・榆林窟新発見の西夏文題記」, 『研究成果報告書(学術助成基金助成金 基盤研究(C)研究代表者: 佐藤貴保)「西夏王国の人名に関する研究: 多民族国家における文化交流・融合の視点から」』(佐藤貴保編), 29-45, 2019.3.
8. 総説・解説: 「環境グラフィック 世界の文字系統と分布」, 『Harmony』66, 14-15, 2018.8, 三機工業株式会社広報・IR部.
9. 口頭発表: “Linguistic Researches of Tangut, Based on IOM Collection”, GICAS International Workshop: Studies of Historical Documents from Central Asia, based on IOM Collection (GICAS: Grammatological Informatics Based on Corpora of Asian Scripts), 2018.8.31, ILCAA.
10. 口頭発表: “Once again, on the “Dual” Suffix of Tangut”, The 51st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, 2018.9.26, Kyoto University, Kyoto, Japan.
11. 口頭発表: 「西夏文字の、いくつかの左下要素の筆画」, 東京外国語大学語学研究所「東京外国語大学 Luncheon Linguistics (2018/10/10)」, 2018.10.10, 東京外国語大学語学研究所.

12. 口頭発表:「西夏文字における、いくつかの左下要素の筆画について」,日本言語学会第157回大会, 2018.11.18, 京都大学.
13. 口頭発表:“Study of the Tangut Language in the Lotus Sutra, Preserved in Princeton, USA”, Rencontre de Tangoutologie, 2018.11.23, Salle des colloques, Université d’Artois, Arras, France.
14. 口頭発表:“Linguistic Studies in the Tangut Inscriptions from Dunhuang”, Workshop on Silk Road Languages from Chang’an to Istanbul, 2018.12.15, Kistar Hotel, Cappadocia, Turkey.
15. 口頭発表:「プリンストン大学所蔵西夏文法華経と西夏文の諸特徴」, 遼金西夏史研究会第19回大会, 2019.3.9, 龍谷大学.
16. 口頭発表:「西夏文字における、特定の筆画の「係り結び」について」, 2018年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」, 2019.3.27, 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター.
17. 口頭発表:“Directional Prefixes in Tangut and Munya”, The Japan Society for the Promotion of Science, Grant-in-Aid for Scientific Research (B) “Aspects of Tibeto-Burman Languages through Analysis of the Directional Prefixes” Workshop “Directional Prefix in Tibeto-Burman Languages”, 2019.3.29, ILCAA.

### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 荒川 慎太郎

課題番号: 16H03414

課題名: 「方向接辞」からみたチベット・ビルマ語系言語の諸相

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2016-2018 科研費:

科研費:

研究代表者: 佐藤 貴保

課題番号: 15K02906

課題名: 西夏王国の人名に関する研究—多民族国家における文化交流・融合の視点から—

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2015-2018

\*研究分担者として参加

### 所属学会(役職)

日本言語学会

遼金西夏史研究会

## 飯塚 正人(いづか まさと)

教授、地域研究・歴史学研究ユニット

研究主題: イスラーム学・中東地域研究

業績

1. 学外の社会活動(講演会):「憎悪と殺戮の「聖地エルサレム」:ユダヤ教、キリスト教、イスラム教」, 第44回栃木県オリエントセミナー, 2018.5.19, 栃木県立博物館.
2. 学外の社会活動(講演会):「イスラム情勢」, 警察大学校警部任用科本課程第53期研修, 2018.6.6, 警察大学校.
3. 学外の社会活動(講演会):「イスラム世界を理解する」, 第65回法務省入国管理局関係職員特別科(難民調査官)研修, 2018.7.6, 法務省法務総合研究所.
4. 学外の社会活動(講演会):「イスラーム教徒の考え方と意思を知るために」, 東進ハイスクール「大学・学部研究会」, 2018.8.10, TKP ガーデンシティ品川.
5. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組・出演:無):「池上彰のニュース そうだったのか!!」(テレビ朝日), 2018.9.22.
6. 学外の社会活動(講演会):「イスラム情勢」, 警察大学校警部任用科本課程第54期研修, 2018.9.12, 警察大学校.
7. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組・出演:有):「報道プライムサンデー」(フジテレビ), 2018.10.28.
8. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組・出演:有):「あさチャン」(TBS), 2018.10.25.
9. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組・出演:有):「荒川強啓デイ・キャッチ」(TBS ラジオ), 2018.10.24.
10. 学外の社会活動(新聞・雑誌):「安田純平さん」手放しでは喜べない「3億円」の裏情報, 『週刊新潮』11月8日号, 25-27, 2018.10.31.
11. 学外の社会活動(講演会):「イスラム世界を理解する」, 第53回法務省入国管理局関係職員高等科研修, 2018.10.30, 法務省法務総合研究所.
12. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組・出演:無):「池上彰のニュース そうだったのか!!」(テレビ朝日), 2018.11.24.
13. 学外の社会活動(講演会):「イスラム情勢」, 警察大学校警部任用科本課程第55期研修, 2018.11.29, 警察大学校.
14. 学外の社会活動(講演会):「イスラム世界を理解する」第16回法務省入国管理局関係職員専攻科研修, 2019.1.31, 法務省法務総合研究所.
15. 学外の社会活動(講演会):「イスラム情勢」, 警察大学校警部任用科本課程第56期研修, 2019.3.8, 警察大学校.

## 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 桑原 尚子

課題番号: 16H03538

課題名: イスラーム圏における法現象の分析枠組構築に関する学際的研究

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2016-2018

\* 研究分担者として参加

## 外部団体委員

京都大学東南アジア地域研究研究所 地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点運営委員会委員長

早稲田大学イスラーム地域研究機構 共同利用・共同研究拠点運営委員会委員

#### 所属学会(役職)

地中海学会(常任委員、財務委員、事務局長補佐、学会誌編集委員)

日本イスラム協会

日本オリエント学会

日本中東学会(評議員)

## 石川 博樹(いしかわ ひろき)

准教授、地域研究・歴史学研究ユニット

研究主題:アフリカの歴史

#### 業績

1. 総説・解説:「史跡を巡り、ごちそうに会う」, 『FIELDPLUS』 21, 18-19, 2019.1.
2. 総説・解説:「古地図が語るアフリカ史」, 『地図情報』 38 (4), 14-19, 2019.2.
3. 講演:「アフリカ史から世界を見る」,河合塾みらいぶプラス「次代を担う若手研究者によるライトニングトーク:さあ、学問探しの旅に出かけよう!」, 2018.11.27, 神奈川県立多摩高校.
4. 口頭発表:「文字記録から見たエチオピアの諸王国における農業:アクスム王国とソロモン朝エチオピア王国の比較を中心に」, AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村史の再構築:在来農業革命の視点から」2018 年度第 3 回研究会, 2019.3.2, 東京外国語大学本郷サテライト.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 藤本 武

課題番号: 18H03441

課題名: アフリカ食文化研究の新展開:食料主権論のために

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2018-2021

\* 研究分担者として参加

#### 所属学会(役職)

史学会

日本アフリカ学会(関東支部運営幹事)

日本ナイル・エチオピア学会(評議員、運営幹事、学会誌編集担当幹事/第 27 回学術大会事務局長)

日本オリエント学会

日本ポルトガル・ブラジル学会

キリシタン文化研究会

#### その他研究成果

名称: 企画展「祈りにつながるイスラーム:エチオピア西部の信仰とその歴史」

期間(年度): 2018.4.23~2018.5.25

成果: AA 研共同利用・共同研究課題「エチオピア・ジンマ王国伝来イスラーム祈禱集研究」の成果の一部として、エチオピア西部におけるイスラーム信仰の歴史とこの地のムスリムの信仰生活に関する企画展示を、東京外国語大学現代アフリカ地域研究センターおよび科学研究費基盤研究(B)「エチオピアにおけるイスラーム化の史的検証:アラビア文字資料の収集・分析を通して」(研究代表者:石原美奈子、課題番号:17H04528)との共催により開催した。

## 伊藤 智ゆき(いとう ちゆき)

准教授、言語学研究ユニット

研究主題: 音韻論、中期朝鮮語、中国語中古音

### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 伊藤 智ゆき

課題番号: 15KK0041

課題名: 韓国語慶尚道方言のアクセント研究(国際共同研究強化)

研究種目: 国際共同研究加速基金

期間(年度): 2016-2018

科研費:

研究代表者: 伊藤 智ゆき

課題番号: 17K02675

課題名: 朝鮮語諸方言における複合語・派生語のアクセント研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2017-2019

### 受賞

賞名: 日本音声学会 優秀論文賞

受賞対象: “A Sociophonetic Study of the Ternary Laryngeal Contrast in Yanbian Korean”, 『音声研究』21 (2), 80-105, 2017.8.

授与機関: 日本音声学会

授与年月日: 2018年9月16日

### 所属学会(役職)

日本言語学会

朝鮮学会

日本音韻論学会(理事)

日本音声学会

## 太田 信宏(おおた のぶひろ)

准教授、フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題: インドの歴史

### 業績

1. 論文: 「南インド宮廷文学にみるムスリム表象」, 『歴史評論』 826, 43-55, 2019.2.
2. 口頭発表: 「喜びと悲しみの王国: マイスール藩王国の伝統的カンナダ語詩文学にみる感情を巡る言説」, 人間文化研究機構プログラム南アジア研究東京外国語大学拠点研究会, 2018.6.30, 東京外国語大学.
3. 口頭発表: 「マイスール藩王国の「伝統的」カンナダ語詩文学にみる王の表象」, 日本南アジア学会第31回全国大会, 2018.9.29, 金沢歌舞伎座.

### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 太田 信宏

課題番号: 16K03075

課題名: 植民地インドのマイスール藩王国における文芸と王権

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2016-2019

科研費:

研究代表者: 太田 信宏

課題番号: 18KK0013

研究課題名: 翻訳から見る近世南アジアの文化多元主義

研究種目: 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))

期間(年度): 2018-2021

科研費:

研究代表者: 水野 善文

課題番号: 16H03410

研究課題名: 南アジア多言語社会における複合文化のなかの文学伝承

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2016-2019

\* 研究分担者として参加

### 所属学会(役職)

日本南アジア学会(常務理事)

史学会

歴史科学協議会(『歴史評論』編集委員)

日本印度学仏教学会

インド考古研究会

## 小倉 智史(おぐら さとし)

助教、情報資源利用研究センター

研究主題: 南アジア地域研究・歴史学

### 業績

1. 論文: “Turning Taraṅgiṇī into Tārīḥ: A Comparative Study on Jonarāja’s Rājatarāṅgiṇī and its Persian Translation Composed at the Court of Akbar”, *Sanskrit in Relation with Regional Languages and Literatures: Select Papers from the Panel on Sanskrit in Relation with Regional Languages and Literatures at the 16th World Sanskrit Conference (28 June - 2 July 2015) Bangkok, Thailand, 2018*, 59-72, 2018.11, DK Publishers Distributors Pvt. Ltd., New Delhi, India.
2. 論文: “The Limits of the Oneness of Existence as a Medium in Translating Indic Deities’ Names: The Case of Muḥammad Šāhābādī’s Persian Translation of the Rājatarāṅgiṇīs”, *Islamic and Sufi Studies in Academia: Rethinking Methodologies* (ed. by Yasushi Tonaga and Chiaki Fujii), 189-202, 2019.3, Kenan Rifai Center for Sufi Studies, Kyoto University, Kyoto, Japan.
3. 論文: 「カシミール史料におけるミールザー・ハイダル」, 『西南アジア研究』 88, 20-49, 2018.9. (査読有)
4. 論文: “Persian Historiography of Kashmir during the Ġahāngīr Period I: The Intiḥāb-i Tārīḥ-i Kašmīr”, *Journal of Asian and African Studies* 96, 145-293, 2018.9. (査読有)
5. 論文: 「まだ見ぬ等価を求めて: ムハンマド・シャーハーバーディーの翻訳ストラテジー」, 『イスラム世界』 90, 29-60, 2018.11. (査読有)
6. 論文: 「14世紀イランに伝えられたインドの歴史」, 『歴史評論』 826, 56-68, 2019.2.
7. 総説・解説: 「転輸の西北、三日月の東」, 『FIELDPLUS』 21, 12, 2019.1.
8. 口頭発表: “Additional Annotations on Indic/Kashmiri Non-Muslim Cultures, Traditions, and Knowledge in the Persian Translation of the Rājatarāṅgiṇīs”, International Association of Sanskrit Studies: 17th World Sanskrit Conference, 2018.7.12, The University of British Columbia, Vancouver, Canada.
9. 口頭発表: 「近代以前の「ヒンドゥー」をめぐる自己・他者認識」, 日本南アジア学会 30周年記念シンポジウム「ヒンドゥイズム再考: 時代を超えた変動とその余白」, 2018.9.30, 金沢歌劇座.
10. 口頭発表: “Revisiting Sanskrit Epic-Purāṇic Elements in Rashīd al-Dīn’s History of India”, 3rd Perso-Indica Workshop: Indic Texts and Islamicate Culture from the Ghaznavid to the Sultanate Periods, 2018.10.6, Hongo Satellite, Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo, Japan.
11. 口頭発表: 「デリー・サルタナト期パンジャーブ北部の土着集団について」, 2018年度東洋史研究会大会, 2018.11.4, 京都大学文学研究科新館.
12. 口頭発表: “Between Story and History: Various Attitudes toward Kashmir’s Pre-Islamic Past by Historians of the Mughal Period”, International Conference on Persianate Literature in India and Anatolia (Academy of Persian Language and Literature), 2019.2.25, Academy of Persian Language and

Literature, Tehran, Iran.

13. 口頭発表: “The Ā’in-i Akbarī and Western Indology: With Special Reference to the Category of the Six Schools of Philosophy”, The Sixth Perso-Indica Conference The Classification of Indic Knowledge at the Mughal Court: the Ā’in-i Akbarī, 2019.3.10, ILCAA.
14. 学外の社会活動(講演会): 「イブン・バットゥータとバーブルが伝えるインドの料理」, 中世インド宮廷料理研究会「中世インド料理復元の試み」, 2018.12.23, 山食音, 京都.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 小倉 智史

課題番号: 18K12519

課題名: ムガル宮廷における翻訳活動—『ヨーガヴァーシシュタ』ペルシア語訳の研究

研究種目: 若手研究(B)

期間(年度): 2018-2020

科研費:

研究代表者: 久間 泰賢

課題番号: 18H03569

課題名: グプタ朝以降のインド仏教の僧院に関する総合的研究

研究種目: 基盤研究(A)

期間(年度): 2018-2021

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 船田 善之

課題番号: 18H00723

課題名: 前近代中央ユーラシアの南北交通システムの総合的研究

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2018-2021

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 川本 正知

課題番号: 16H05681

研究課題名: ラシード・ウッディーン『歴史集成』写本のミニアチュールの総合的研究

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2016-2018

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 太田 信宏

課題番号: 18KK0013

課題名: 翻訳から見る近世南アジアの文化多元主義

研究種目： 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))

期間(年度)： 2018-2021

\* 研究分担者として参加

#### 所属学会(役職)

内陸アジア史学会

西南アジア研究会

日本イスラム協会

インド思想史学会

駿台史学会

The Association for the Study of Persianate Societies

Deutsche Morgenländische Gesellschaft

## 小田 淳一(おだ じゅんいち)

教授、情報資源利用研究センター

研究主題: 計量文献学

#### 業績

1. 論文:「非常態的発話における音調型について」,『人工知能学会第2種研究会ことば工学研究会資料集, SIG-LSE-B803』, 9-13, 2018.12.
2. 総説・解説:「『パラダイス』: 磨赤兒の逆る想像力による楽園神話の再解釈(翻訳)」,『をどる』10, 14-15, 2018.6, 大駱駝艦.
3. 総説・解説:「『阿修羅』: 平和を庇護する戦いの象徴(翻訳)」,『をどる』10, 13-13, 2018.6, 大駱駝艦.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 小田 淳一

課題番号: 16H05671

課題名: インド洋フランス語系クレオール民話の口演の研究

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2016-2018

科研費:

研究代表者: 西尾 哲夫

課題番号: 17H02330

課題名: シンドバード航海記の成立過程と多面的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2017-2021

\* 研究分担者として参加

**所属学会(役職)**

情報処理学会

計量国語学会

人工知能学会

**苅谷 康太(かりや こうた)**

准教授、地域研究・歴史学研究ユニット

研究主題: 西アフリカ・イスラーム地域研究

**業績**

1. 論文: “*Muwālāt and Apostasy in the Early Sokoto Caliphate*”, *Islamic Africa* 9 (2), 179-208, 2018.10.  
(査読有)
2. 講演: 「イスラームの伝播と現状: 西アフリカを中心に」, 平成 30 年度めぐろシティカレッジ講座「世界は今!: 現場からの報告」(第 2 回), 2018.5.12, 東京都立桜修館中等教育学校.
3. 講演: 「西アフリカにおけるムスリムと非ムスリムの境界」, AA 研基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」2018 年度中東☆イスラーム教育セミナー, 2018.9.14, AA 研.
4. 口頭発表: 「コメント」, AA 研 2018 年度フィールドネット・ラウンジ企画「西アフリカ・イスラーム研究の新展開」, 2019.1.26, AA 研

**競争的研究資金**

科研費:

研究代表者: 苅谷 康太

課題番号: 15K16578

課題名: 18-19 世紀の西アフリカ・ハウサランドにおけるムスリムと非ムスリムの境界

研究種目: 若手研究(B)

期間(年度): 2015-2018

**所属学会(役職)**

日本アフリカ学会

日本イスラーム協会(学会誌編集委員)

日本中東学会

**河合 香吏(かわい かおり)**

教授、文化人類学研究ユニット

研究主題: 人類学、東アフリカ牧畜民研究

**業績**

1. 著書(編著): *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan and Trans Pacific Press, Melbourne, Australia.
2. 著書(共編著): *An Anthropology of Things* (ed. by Ikuya Tokoro and Kaori Kawai), 2018.4, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia.
3. 論文: “The Cicadas Drizzle of the Chamus”, *An Anthropology of Things* (ed. by Ikuya Tokoro and Kaori Kawai), 258-271, 2018.4, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia.
4. 論文: “Introduction: Why the Anthropology of Mono (Things) ?”, *An Anthropology of Things* (ed. by Ikuya Tokoro and Kaori Kawai), 18-34, 2018.4, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia.
5. 論文: “Introduction: ; Finding “Others” from an Evolutionary Perspective: The Search for the Evolutionary Historical Foundations of Human Sociality”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 1-21, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
6. 論文: “The Origins of “Consideration for One’s Enemy”: What Kind of Others Are Neighboring Groups to the Dodoth?”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 217-233, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
7. 論文: 「敵と友のはざままで: ドドスと隣接民族トゥルカナとの関係」, 『遊牧の思想: 人類学がみる激動のアフリカ』(太田至, 曾我亨編), 197-214, 2019.3, 昭和堂.
8. 口頭発表: 「牧畜民の遊動と集団間関係」, 京都大学霊長類研究所「第 48 回ホミニゼーション研究会」, 2019.3.1, 京都大学霊長類研究所.

### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 河合 香吏

課題番号: 15K03034

課題名: 共鳴する「五感」: 東アフリカ牧畜民における知覚の共同性に関する人類学的研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2015-2019

科研費:

研究代表者: 河合 香吏

課題名: Others: The Evolution of Human Sociality

研究種目: 研究成果公開促進費・学術図書

期間(年度): 2017-2018

科研費:

研究代表者: 西井 涼子

課題番号: 17H00948

課題名: 人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開: 危機を中心に

研究種目: 基盤研究(A)

期間(年度): 2017-2020

\* 研究分担者として参加

#### 所属学会(役職)

日本文化人類学会

日本アフリカ学会(評議員)

生態人類学会

日本ナイル・エチオピア学会(評議員)

日本霊長類学会

## 熊倉 和歌子(くまくら わかこ)

助教、フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題: 西アジア地域研究・歴史学

#### 業績

1. 著書:『中世エジプトの土地制度とナイル灌漑』, 2019.2, 東京大学出版会.
2. 論文:「(研究ノート)限られた史料で何が出来るか: 中世エジプト環境史を模索する」, 『お茶の水史学』 62, 189-200, 2019.3.
3. 論文: “Patterns of Women’s Landholding in the Late Mamluk Period: A Statistical Study Based on the Ottoman Land Register Daftar Jayshī”, 07-22, *Orient* 54, 2019.3.
4. 口頭発表:「歴史学×地理情報の今: 研究・ツール・課題」, AA 研フィールドネットワークショップ, 2019.3.21, AA 研.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 熊倉 和歌子

課題番号: 17K13521

課題名: 中東・北アフリカ地域における黒死病前後の環境変動と疫病流行

研究種目: 若手研究(B)

期間(年度): 2017-2019

科研費:

研究代表者: 熊倉 和歌子

課題名: 中世エジプトの土地制度とナイル灌漑

研究種目: 研究成果公開促進費

期間(年度): 2018

平和中島財団国際学術研究助成:

研究代表者: 熊倉 和歌子

課題名: 中世・イスラーム期エジプト遺跡の保護と文化遺産化に向けた実際的アプローチ: 「資源」から文化財へ

研究種目： 外国人研究者等招致助成

期間(年度)： 2018

#### 所属学会(役職)

日本中東学会

オリエント学会

アジア歴史地理情報学会 (日本)

歴史学研究会

## 倉部 慶太(くらべ けいた)

助教、情報資源利用研究センター

研究主題:ジンポー語、チベット・ビルマ諸語、ミャンマーの言語

#### 業績

1. 総説・解説:「ミャンマー北部で失われつつある口承文芸をあつめる」, 『FIELDPLUS』20, 16-17, 2018.7.
2. 論文:「ジンポー語民話資料「嘘つきのナンピャ」」, 『言語記述論集』 10, 69-80, 2018.4.
3. 論文: “The Small Closed Adjective Class in Jinghpaw”, *Proceedings of the 51st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics*, 409-419, 2018.9.
4. 論文:「ミャンマーの「姥捨山」:ジンポー語による民話テキスト」, 『京都大学言語学研究』 37, 61-77, 2018.12.(査読有)
5. 口頭発表: “A Reevaluation of the Discourse Basis of Ergativity Based on a GRAID-Annotated Jinghpaw Corpus”, 28th Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society, 2018.5.19, Wenzao Ursuline University of Languages, Kaohsiung, Taiwan.
6. 口頭発表:「東・東南アジアにおける日月食表現のタイポロジー」, AA研フォーラム, 2018.6.21, AA研.
7. 口頭発表:「ジンポー語における語頭鼻音の成節性」, 日本言語学会第 156 回大会, 2018.6.23, 東京大学.
8. 口頭発表: “The Small Closed Adjective Class in Jinghpaw”, The 51st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, 2018.9.28, Kyoto University.
9. 口頭発表:「なぜ「これやあれや」と言わないか:日本語とジンポー語の並列表現」, 東京外国語大学国際日本研究センター「外国語と日本語との対照言語学的研究」第 26 回研究会, 2018.10.16, 東京外国語大学.
10. 口頭発表: “Reported Speech and Thought in Jinghpaw”, SCOPIC (The Social Cognition Parallax Interview Corpus) Canberra Workshop 2018, 2018.10.30, The Australian National University, Canberra, Australia.
11. 口頭発表:「ジンポー語における名詞化と名詞修飾節」, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「名詞修飾構文の対照研究」2018 年第 2 回共同研究会, 2018.11.10, 神戸大学.
12. 口頭発表:「ジンポー語における動詞連続構文の制約」, 日本言語学会第 157 回大会, 2018.11.17, 京都大学.

13. 口頭発表:「ジンポー語の動詞連続:複文との対照」, AA研フィールド言語学ワークショップ第 14 回  
文法研究ワークショップ「動詞連続の諸問題」, 2019.1.12, AA 研.
14. 口頭発表:「ジンポー語の名詞修飾表現」, Prosody & Grammar Festa 3, 2019.2.17, 国立国語研究所.
15. 口頭発表:「危機文化アーカイブ PARADISEC とミャンマーにおける言語ドキュメンテーション」, AA  
研情報資源利用研究センター (IRC)ワークショップ「危機言語アーカイブと言語ドキュメンテーション」,  
2019.2.20, AA 研.
16. 口頭発表:“Reported Speech in Jinghpaw”, SCOPIC (The Social Cognition Parallax Interview Corpus)  
– TUFU (Tokyo University of Foreign Studies) 2019 Workshop, 2019.3.20, ILCAA.
17. 口頭発表:「ジンポー語における閉じたクラスとしての形容詞」, 2018 年度ユーラシア言語研究コンソ  
ーシアム年次総会 , 2019.3.27, 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター.
18. 口頭発表:“The Cis- and Translocative Prefixes in Tiddim Chin and Jinghpaw”, International Workshop  
“Directional Prefix in Tibeto-Burman Languages”, 2019.3.29, ILCAA.
19. 口頭発表:「ジンポー語ガウリ方言の声調分岐」, 科学研究費補助金基盤研究 (B)「ビルマの危機言  
語に関する緊急調査研究」2018 年度研究会, 2019.3.31, AA 研.
20. 学外の社会活動(インターネット・出演:有):「ミャンマー奥地に伝わる民話【こぶとり爺さん】を探す旅」  
(Yahoo! JAPAN クリエイターズプログラム), 2019.3.25.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 倉部 慶太

課題番号: 17H04523

課題名: ビルマの危機言語に関する緊急調査研究

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2017-2019

科研費:

研究代表者: 今村 真央

課題番号: 18H03599

研究課題名: ゾミア 2.0 :「東南アジア」と「南アジア」の境域における開発・民族・宗教

研究種目: 基盤研究(A)

期間(年度): 2018-2022

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 荒川 慎太郎

課題番号: 16H03414

課題名: 「方向接辞」からみたチベット・ビルマ語系言語の諸相

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2016-2018

\* 研究分担者として参加

#### 受賞

賞名： 日本言語学会 日本言語学会大会発表賞  
受賞対象： 「ジンポー語における語頭鼻音の成節性」（日本言語学会第156回大会，東京大学）  
授与機関： 日本言語学会  
授与年月日： 2018年11月17日

#### 所属学会（役職）

チベット=ビルマ言語学研究会  
言語記述研究会  
日本言語学会  
日本音声学会

## 栗原 浩英(くりはら ひろひで)

教授、地域研究・歴史学研究ユニット  
研究主題：ベトナム現代史

#### 業績

1. 口頭発表：「東南アジアにおける国家建設」，日本国際問題研究所「20世紀アジアを振り返る：国際関係と国家建設の視点から」，2018.7.6，国際文化会館。
2. 口頭発表：「東南アジア地域とベトナムの環境問題」，島根県立大学「北東アジアの環境問題：地域研究と地域比較の視点」，2019.2.2，島根県立大学浜田キャンパス交流センター・コンベンションホール。
3. 学外の社会活動(その他)：「岡崎嘉平太国際奨学財団」，2014.7～現在。
4. 学外の社会活動(インターネット)：“Chien tranh 1979: ‘Mat trai cua vua la dong chi, vua la anh em’”，BBC ベトナム語放送，2019.2.17. <https://www.bbc.com/vietnamese/vietnam-47265262>.

#### 競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 栗原 浩英

課題番号： 18K11775

課題名： 「同志性」からみたベトナム・中国関係の変容と展望に関する研究

研究種目： 基盤研究(C)

期間(年度)： 2018-2021

科研費：

研究代表者： 今井 昭夫

課題番号： 17H02229

課題名： 近現代ベトナムにおける中国プレゼンスの諸相ー連環人文的ベトナム地域研究

研究種目： 基盤研究(B)

期間(年度)： 2017-2020

\*研究分担者として参加

#### 外部団体委員

公益財団法人岡崎嘉平太国際奨学財団奨学生選考委員

#### 所属学会(役職)

日本ベトナム研究者会議

東方学会

歴史科学協議会

東南アジア学会

アジア政経学会

歴史学研究会

## 呉人 徳司(くれびと とくす)

教授、言語学研究ユニット

研究主題: 言語学、チュクチ語

#### 業績

1. 著書(編著): *Лымуылтэ Токэ* (ed. by Tokusu Kurebito), 2019.3, ILCAA.
2. 著書(編著): *ЛЫГЪОРАВЭТЛЬЭН ЛЫМҢҮЛТЭ БЕЛИКОВЫН* (ed. by Tokusu Kurebito), 2019.3, ILCAA.
3. 論文:「ダグル語のチチハル方言に関する現地調査の報告」, 『現代中国における言語政策と言語継承』(包聯群編) 4, 76-81, 2019.3, 三元社.(査読有)
4. 論文:「チュクチ語における使役について:強制の度合いの差異と形態統語的ふるまいの相関性」, 『北方言語研究』9, 1-12, 2019.3.(査読有)
5. 総説・解説:「外大 27 言語プロジェクト発 もっと知りたい!世界のことば チュクチ語」, 『英語教育』67 (5), 41, 2018.8.
6. 口頭発表:“One Ethnic Group Becomes Two Language Groups: Eastern Yugur and Western Yugur”, International Altay Communities Symposium: Tradition-Customs-Morals and Laws (Mongolian Academy of Sciences), 2018.8.7, Mongolian Academy of Sciences, Ulaanbaatar, Mongolia.
7. 口頭発表:“Passive Expressions in the Secret History of Mongols and Its Historical Change”, 内蒙古大学首届《蒙古秘史》研究国际学术研讨会, 2018.9.17, 内蒙古大学契丹辽文化产业化研究中心, Lindong, Inner Mongolia, PRC.
8. 口頭発表:“Христийн шашны хүмүүсийн найруулан зохиосон нэгэн сурах бичгийн хэл найруулгын тухай”, МОНГОЛ СУДЛАЛЫН ХОЛБООНЫ АЗИЙН ХУРАЛ-2018 (International Mongolian Studies Association), 2018.11.3.
9. 口頭発表:“Христийн шашны хүмүүсийн найруулан зохиосон нэгэн сурах бичгийн хэл найруулгын тухай”, МОНГОЛ СУДЛАЛЫН ХОЛБООНЫ АЗИЙН ХУРАЛ-2018 (International

Mongolian Studies Association), 2018.11.3, Showa Woman's University, Tokyo, Japan.

10. 口頭発表: "Diversity of the Valency-changing in Chukchi", International Conference on Uralic, Altaic and Paleoasiatic Languages in Memory of A. P. Volodin (Russian Academy of Sciences), 2018.12.6, Institute of Linguistics of the Russian Academy of Sciences, St. Petersburg, Russia

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 呉人 徳司

課題番号: 15H05155

課題名: 北東ユーラシア諸言語の語形成に関する地域類型的研究

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2015-2018

科研費:

研究代表者: 呉人 徳司

課題番号: 18K00569

課題名: 動詞の他動性に関するチュクチ語とモンゴル語の比較対照研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2018-2021

科研費:

研究代表者: 包 聯群

課題番号: 16K02686

課題名: 中国黒龍江省における危機に瀕するダグル語の社会言語学的研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2016-2018

\*研究分担者として参加

#### 外部団体委員

北海道立北方民族博物館 研究協力員

#### 所属学会(役職)

日本語学会

国際モンゴル学会

日本北方学会

## 黒木 英充(くろき ひでみつ)

教授、地域研究・歴史学研究ユニット

研究主題: 中東地域研究、東アラブ近代史

#### 業績

1. 著書(編著): *Human Mobility and Multiethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies 2: Tehran, Cairo, Istanbul, Aleppo and Beirut* (ed. by Hidemitsu Kuroki), ILCAA.
2. 論文(共著): Simon Payaslian, Hidemitsu Kuroki, Yousef Khasho, Vahram Shemmassian, Khatchig Mouradian, Seda Altug, Jon Armajani, Simon Payaslian, Hasmig Baran, Armenak Tokmadjian, "Armenians in 19th Century Aleppo", *Armenians of Syria: Proceedings of the Conference (24-27 May 2015)* (ed. by Antranik Dakessian), 67-75, 2018. (査読有)
3. 論文(共著): 黒木英充, 山口昭彦, 青山弘之, 酒井啓子, 「カーミシュリーのノウルーズ 民族の再生の日」, 『クルド人を知るための 55 章』(山口昭彦編), 317-321, 2019.1.10, 明石書店.
4. 総説・解説: 「世界に広がるアラブ移民」, 『歴史と地理 世界史の研究』 714, 50-53, 00-00, 2018.5, 山川出版社.
5. 総説・解説: 「歴史的背景 暴力の記憶を抱え人は和解に向き合えるのか?」, 『判決、ふたつの希望 THE INSULT』(映画プレスシート), 18-19, 2018.8, 東宝(株)映像事業部.
6. 総説・解説: 「コメント 1」, 『歴史学研究』 976, 18-20, 2018.10.
7. 総説・解説: 「ごちそうされて、ごちそうし・・・シリア・レバノンから」, 『FIELDPLUS』 21, 16-17, 2019.1..
8. 口頭発表: 「コメント」, 2018 年度歴史学研究会大会全体会「戦争を検証する: 「9.11 事件」の歴史化をめざして」, 2018.5.26, 早稲田大学.
9. 口頭発表: "Opening Ceremony Speech by the President of Japan Association for Middle East Studies", Chinese Academy of Social Sciences Forum (2018・International) "Where is the Middle East Heading?", 2018.9.8, Institute of West-Asian and African Studies, Beijing, PRC.
10. 口頭発表: "Opening Remarks", International Workshop "Nonviolence as a Strategy, Nonviolence in the Future", 2018.11.17, Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo, Tokyo, Japan.
11. 口頭発表: "Preamble", Symposium: Syrian Civil War: Comparative Perspectives with Lebanese and Yugoslavian Civil Wars, 2019.2.2, Meiji University Izumi Campus (Library Hall), Tokyo, Japan.
12. 口頭発表: 「上映前の解説」, 映画会議<アジアを知る>「この地にわが墓所あり レバノン内戦の記憶と証言」, 東京大学東洋文化研究所, 2019.2.8.
13. 口頭発表: "Dragomanity: Multiple Belonging and Multi-Faceted Strategy for Survival and Prosperity", 6th Meeting: Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies, 2019.3.1, Balamand University, Balamand, Lebanon.
14. 学外の社会活動(講演): 「シリア内戦の構造: 歴史研究の視点から」シンポジウム「シリア 殺戮と破壊を生きる : 絶望の中に紡ぐ希望」(主催: Stand with Syria Japan), 2018.4.14, 東京大学駒場キャンパス 13 号館.
15. 学外の社会活動(講演): 「シリア情勢とクルド人」公開シンポジウム「ドキュメンタリー映画「ラジオ・コバニ」上映を通じて考えるシリアの再生」(主催: 立教大学 21 世紀社会デザイン研究科・社会デザイン研究所), 2018.4.26, 立教大学池袋キャンパス 11 号館.
16. 学外の社会活動(講演): 「シリア内戦 から見える 世界」国立大学共同利用・共同研究拠点協議会 第 74 回「知の拠点セミナー」, 2018.5.18, 京都大学東京オフィス.
17. 学外の社会活動(講演): 「シリア内戦を通して中東と世界の現状と今後」, クラブ関西第 23 回定例午餐会講演, 2018.6.21, クラブ関西(大阪市).
18. 学外の社会活動(講演): "Historical Buildings and Community", Symposium Sponsored by UNDP and

Syrian Ministry of Culture: The Silk Road Friendship Project: Saving Syrian Cultural Heritage for the Next Generation, 2018.7.19, General Directorate for Antiquities and Museums, Damascus, Syria.

19. 学外の社会活動(講演):「対テロ戦争」とイスラーム, 東京外国語大学夏期世界史セミナー・世界史の最前線 10, 2018.7.25, 東京外国語大学.
20. 学外の社会活動(講演):「テロ」概念の歴史的変遷と現状の問題点, 世田谷市民大学 2018 年度後期土曜講座第 1 回「中東から見た「対テロ戦争」: 終わりなき悪循環からの脱出のために」, 2018.10.16, せたがやがやがや館.
21. 学外の社会活動(講演):「イスラーム的正義と政治的暴力の歴史的変遷」, 世田谷市民大学 2018 年度後期土曜講座第 2 回「中東から見た「対テロ戦争」: 終わりなき悪循環からの脱出のために」, 2018.10.20, せたがやがやがや館.
22. 学外の社会活動(講演):「パレスチナ問題, 9/11, イラク戦争 1」, 世田谷市民大学 2018 年度後期土曜講座第 3 回「中東から見た「対テロ戦争」: 終わりなき悪循環からの脱出のために」, 2018.11.3, せたがやがやがや館.
23. 学外の社会活動(講演):「パレスチナ問題, 9/11, イラク戦争 2」, 世田谷市民大学 2018 年度後期土曜講座第 4 回「中東から見た「対テロ戦争」: 終わりなき悪循環からの脱出のために」, 2018.11.10, せたがやがやがや館.
24. 学外の社会活動(講演):「シリア内戦と対テロ戦争」, 世田谷市民大学 2018 年度後期土曜講座第 5 回「中東から見た「対テロ戦争」: 終わりなき悪循環からの脱出のために」, 2018.11.17, せたがやがやがや館.
25. 学外の社会活動(講演):「シリア内戦と「対テロ戦争」」, 第 219 回広島大学平和センター研究会, 2018.11.22, 広島大学総合科学部.
26. 学外の社会活動(講演):「世界内戦と「テロ」の克服に向けての課題」, 世田谷市民大学 2018 年度後期土曜講座第 6 回「中東から見た「対テロ戦争」: 終わりなき悪循環からの脱出のために」, 2018.11.24, せたがやがやがや館.
27. 学外の社会活動(講演):「シリア内戦と東アラブ情勢: シリア、ヨルダン、レバノン情勢を中心に」, 笹川平和財団中東情勢研究会, 2019.3.27, 笹川平和財団.
28. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組・出演: 有):「NHK 視点・論点 シリア“化学兵器事件”と米英仏の攻撃」(NHK), 2018.4.26.
29. 学外の社会活動(新聞・雑誌):「読書 シリアの秘密図書館 絶望的な状況でも人は本を読む」, 『しんぶん赤旗』, 2018.5.13.
30. 学外の社会活動(新聞・雑誌):「なぜシリア内戦は終わらないのか? 大国の戦場になるシリア」(DAYS JAPAN) 15 (6), 16-21, 2018.5.19.
31. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組・出演: 有):「荻上チキ・Session-22 映画『判決、ふたつの希望』から知る中東レバノン: 民族・宗教対立、そして、和解への希望」(TBS ラジオ), 2018.8.29.
32. 学外の社会活動(新聞・雑誌):「コメント掲載「テロ対策準備展? イスラエル企業ら川崎で初開催」, 『東京新聞』, 2018.8.30.
33. 学外の社会活動(新聞・雑誌):「考論過激派早急に金銭得る必要?」(朝日新聞), 2018.10.25.
34. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組・出演: 有):「N スタ シリア安田純平氏解放をめぐる解説」(TBS テレビ), 2018.10.25.

35. 学外の社会活動(新聞・雑誌):「読書 わたしの町は戦場になった 「敵」を許すことのできる少女」,  
『しんぶん赤旗』, 2019.1.20.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 黒木 英充

課題番号: 18H03440

課題名: シリア内戦の比較研究—レバノン・旧ユーゴスラビアの内戦と戦後和解

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2018-2020

科研費:

研究代表者: 長澤 榮治

課題番号: 16H01899

課題名: イスラーム・ジェンダー学構築のための基礎的総合的研究

研究種目: 基盤研究(A)

期間(年度): 2016-2019

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 松里 公孝

課題番号: 18KK0036

課題名: ロシアの軍事大国化と中東、環黒海地域

研究種目: 国際共同研究加速基金

期間(年度): 2018-2021

\* 研究分担者として参加

#### 外部団体委員

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 運営委員

筑波大学北アフリカ研究センター 客員共同研究員

#### 所属学会(役職)

日本中東学会(会長)

日本オリエント学会

歴史学研究会

史学会

Middle East Studies Association(北米中東学会)

## 児倉 徳和(こぐら のりかず)

助教、言語学研究ユニット

研究主題: 記述言語学、シベ語(満洲語口語)

## 業績

1. 著書(共編著):『中国北方危機言語のドキュメンテーション』(李林静, 山越康裕, 児倉徳和編), 2018.4, 三元社.
2. 論文:「中国新疆ウイグル自治区におけるシベ語の保存と継承への取り組み」, 『現代中国における言語政策と言語継承 第四巻』(包聯群編), 137-148, 2019.3, 三元社.
3. 論文:“Finiteness in Sibe: Aspects of Finiteness and Historical Development”, *Asian and African Languages and Linguistics* 13, 81-112, 2019.3. (査読有)
4. 口頭発表:“The Perfective Verbal Noun V-Xengge in Sibe: Beyond Person, Egophoricity and Temporality”, First International Workshop on Contact Languages: The East Asia Indian Ocean Connection, 2018.5.2, University of Mauritius, Moka, Mauritius.
5. 口頭発表:““Irregular Verbs” and the Development of the Verbal Morphology in Manchu and Sibe”, 九州大学人文科学研究院国際シンポジウム「アジアにおける人の移動と人文的変容」, 2018.9.21.
6. 口頭発表:“On the ngge Verbal Noun in Written Manchu and Sibe: Beyond Person, Evidentiality and Egophoricity”, The 2nd International Conference of Sibe Studies, 2018.10.4, Charles University, Prague, Czech.
7. 口頭発表:“Reported Speech in Sibe”, The Social Cognition Parallax Interview Corpus (SCOPIC) Workshop, 2019.3.20, ILCAA.
8. 口頭発表:「シベ語のいわゆる語幹命令形について」, 2018 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2019.3.27, 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター(羽田記念館).

## 競争的研究資金

### 科研費:

研究代表者: 児倉 徳和

課題番号: 18K12364

研究課題名: 人称標示・人称標識に注目したアルタイ諸言語の機能的類型論

研究種目: 若手研究

期間(年度): 2018-2021

### 科研費:

研究代表者: 久保 智之

課題番号: 18H03578

課題名: アルタイ諸言語を対象とした環境の変化と言語の変容に関する総合的研究

研究種目: 基盤研究(A)

期間(年度): 2017-2020

\* 研究分担者として参加

### 科研費:

研究代表者: 風間 伸次郎

課題番号: 15H05153

課題名: アルタイ諸言語の語彙の総合的集成

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2015-2019

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 渡辺 己

課題番号: 16H05672

研究課題名: 語の統合度と文の相関関係に関する研究—形態法の異なる言語の比較対照をとおして—

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2016-2018

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 包 聯群

課題番号: 17H04524

課題名: 消滅危機に瀕する満洲語の記録保護・教育と継承・再活性化への取り組み及び実態の解明

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2017-2021

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 久保 智之

課題番号: 17H06182

課題名: 満洲語の歴史社会言語学的研究—言語学と歴史学からの解明—

研究種目: 挑戦的研究(開拓)

期間(年度): 2017-2021

\* 研究分担者として参加

## 受賞

賞名: 金田一京助博士記念賞

受賞対象: 『シベ語のモダリティの研究』 (勉誠出版, 2018年)

授与機関: 金田一京助博士記念会

授与年月日: 2018年12月16日

## 所属学会(役職)

満族史研究会

日本言語学会

日本中国語学会

北方言語学会

## その他研究成果

名称： 情報資源利用研究センター（IRC）プロジェクト成果物「チュルク諸語対照基礎語彙（第5期）」

期間（年度）： 2018

成果： チュルク諸語の基礎語彙の音声付きデータベース。日本語のほか英語・中国語でも利用が可能。2018年度末現在でチュルク諸語に属する13の言語について24の変種（文語の形式および口語の諸方言形式）が登録されている。

## 近藤 信彰(こんどう のぶあき)

教授、フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題:イラン近代史

### 業績

1. 著書(編著): *Dastūr al-Molūk: A Complete Edition of the Manual of Safavid Administration*, 2018.9, ILCAA.
2. 論文: “Non-Muslims at the Shari‘a Court in Qajar Tehran”, *Human Mobility and Multi-ethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies 2: Tehran, Aleppo, Istanbul, and Beirut* (ed. by Hidemitsu Kuroki), 7-21, 2018.6, ILCAA.
3. 論文: “Pishine-e Tahqiq bar «Dastur al-Muluk» va Noskhe-e Heydarabad”, *Noskheha-ye khatti* 14, 237-244, 2018.12.
4. 論文: 「アジアにおける『ハムザ物語』: イスラーム、ペルシア語、フロンティア」『歴史評論』 826, 5-16, 2019.2.
5. 口頭発表: “‘Conditional Sales’ and Other Types of Loans in Qajar Iran”, *Forms of Law in the Early Modern Persianate World, 17th-19th Centuries: Workshop “Transactions and Documentation in the Persianate World”*, 2018.7.13, Mercure Southgate Hotel, Exeter, UK.
6. 口頭発表: “Ahamiyat-e noskhe-e badal dar tashih-e matn: tajrobe-e tashih-e “Dastur al-Moluk” dast-afzari-e tashkilat-e divani-e dowlat-e safaviye”, *Pazhuheshgah-e Olum-e Ensani va motaleat-e farhangi: Hamayesh-e beynol-melali Nasakh-e khati-e farsi be-masabe-e miras-e jahani*, 2018.9.6, Pazhuheshgah-e Olum-e Ensani va motaleat-e farhangi, Tehran, Iran.
7. 口頭発表: “Confessional Minorities in Nineteenth Century Tehran” 9th Symposium, Consortium for Asian and African Studies (CAAS), 2018.10.20, INALCO: Institut National des Langues et Civilisations Orientales, Paris, France.
8. 口頭発表: 「中東における宗派紛争: 歴史と現在」, 第13回四大学連合文化講演会「環境・社会・人間における「安全・安心」を探る: 安全で安心の出来る社会」, 2018.11.22, 一橋講堂.
9. 口頭発表: “Sunni Rule over Shi‘i Population: Legitimation of Afghan Rulers in Iran, 1722–29”, *International Conference “Kingship, Ideology, Discourse: Legitimation of Islamicate Dynasties”*, 2018.12.16, ILCAA.
10. 口頭発表: “Ā’in-i akbarī as a Tazkira of Poets”, *The Sixth Perso-Indica Conference “The Classification of Indic Knowledge at the Mughal Court: The Ā’in-i Akbarī.”* 2018.3.9, ILCAA.

## 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 近藤 信彰

課題番号: 15H01895

研究課題名: イスラーム国家の王権と正統性ー近世帝国を視座として

研究種目: 基盤研究(A)

期間(年度): 2015-2019

科研費:

研究代表者: 高松 洋一

課題番号: 17H02398

研究課題名: イスラーム圏における簿記史料の通時的・共時的研究

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2017-2020

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 三浦 徹

課題番号: 17H02381

研究課題名: 寄進とワクフの国際共同比較研究:アジアから

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2018-2021

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 大沼 保昭

課題番号: 17H06187

課題名: 世界遺産の法・政治・歴史・建築学の視点からの解明:新たな学際研究への挑戦

研究種目: 挑戦的研究(開拓)

期間(年度): 2017-2020

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 太田 信宏

課題番号: 18KK0013

課題名: 翻訳から見る近世南アジアの文化多元主義

研究種目: 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)

期間(年度): 2018-2021

\* 研究分担者として参加

## 所属学会(役職)

日本中東学会(理事、編集副委員長)

西南アジア研究会

Association for Iranian Studies  
International Qajar Studies Association  
日本オリエント学会  
メトロポリタン史学会  
史学会  
都市史学会  
Association for the Study of the Persianate Societies

## 佐久間 寛(さくま ゆたか)

助教、文化人類学研究ユニット  
研究主題: 人類学、アフリカ地域研究

### 業績

1. 著書(共編著): *Disability and Affect: Proceedings of Two International Symposiums about Art* (ed. by Yutaka Sakuma and Yukako Yoshida), 2019.3, ILCAA.
2. 論文: 「序論: プレザンス・アフリケーヌとは何か」, 『アフリカ研究』 94, 21-33, 2018.12. (査読有)
3. 論文: 「黒いソクラテスは語る: 創始者アリウン・ジョップと学生組織」, 『アフリカ研究』 94, 49-59, 2018.12. (査読有)
4. 論文: 「祓えぬ負債に憑かれること: ニジェール西部における調査経験から」, 『白山人類学』 22, 59-77, 2019.3. (査読有)
5. 口頭発表: 「創始者アリウン・ジョップと黒人学生組織」, 日本アフリカ学会第55回学術大会, 2018.5.26, 北海道大学学術交流会館.

### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 佐久間 寛

課題番号: 17K18480

研究課題名: 人類学的手法を取り入れた黒人文化総合誌『プレザンス・アフリケーヌ』の複合的研究

研究種目: 挑戦的研究(萌芽)

期間(年度): 2017-2019

科研費:

研究代表者: 佐久間 寛

課題番号: 15H05385

課題名: サハラ南縁地域をめぐるモラル・エコノミー論的土地制度研究を通じた所有概念の再構築

研究種目: 若手研究(A)

期間(年度): 2015-2018

科研費:

研究代表者: 西井 涼子

課題番号: 17H00948

課題名: 人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開:危機を中心に

研究種目: 基盤研究(A)

期間(年度): 2017-2020

\*研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 星埜 守之

課題番号: 17H02328

課題名: 世界文化(資本)空間の史的編成をめぐる総合的研究:アフリカ・カリブの文学を中心に

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2017-2020

\*研究分担者として参加

**所属学会(役職)**

日本アフリカ学会

日本文化人類学会(関東地区研究懇談会運営委員、次世代育成セミナー実施運営委員)

生態人類学会

## 澤田 英夫(さわだ ひでお)

教授、情報資源利用研究センター

研究主題:ビルマ系少数言語の記述、東南アジア大陸部インド系文字の体系

**業績**

1. 口頭発表:“Enriching Notations in Mainland Southeast Asian Indic Scripts”, ASEAS (Association of Southeast Asian Studies in the United Kingdom) Conference 2018, 2018.9.6, University of Leeds, Leeds, UK.
2. 口頭発表:“Comparing a Few Grammatical Aspects of Northern Burmish Languages”, the 51st International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics, 2018.9.28, Kyoto University, Kyoto, Japan.
3. 口頭発表:「タイ=サー(マインター)語の音韻論概観」, ユーラシア言語コンソーシアム 2018 年度年次総会, 2019.3.27, 京都大学ユーラシア文化研究センター.

**競争的研究資金**

科研費:

研究代表者: 藤代 節

課題番号: 16H03417

研究課題名: 「混成言語」から見なおすユーラシアの諸言語—言語接触と言語形成の類型を探る—

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2016-2018

\*研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 倉部 慶太

課題番号: 17H04523

課題名: ビルマの危機言語に関する緊急調査研究

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2017-2019

\*研究分担者として参加

#### 外部団体委員

慶應義塾大学言語文化研究所東南アジア諸言語研究会(兼任所員)

#### 所属学会(役職)

日本語学会

## 椎野 若菜(しいの わかな)

准教授、文化人類学研究ユニット

研究主題: 社会人類学、東アフリカ民族誌

#### 業績

1. 口頭発表(代読): “‘Introduction’ for Open Panel 061. Diversification and Reorganization of ‘Family’ and Kinship in Africa: Cross-cultural Analysis on Economic Discrepancy, Conflicts and Potential of Indigenous Institutions for Social Security”, 18th IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences) World Congress, 2018.7.19, Federal University of Santa Catarina, Florianópolis, Brazil. [https://www.inscricoes.iaes2018.org/trabalho/view?ID\\_TRABALHO=495](https://www.inscricoes.iaes2018.org/trabalho/view?ID_TRABALHO=495)
2. 講演: 「村落と都市の女性: ケニアの「ハウスガール」事情」, TUFS シネマトーク, 2018年12月7日, 東京外国語大学.
3. 口頭発表: “The House Girl by Choice or the Circumstances in Kenya and Uganda”, International Symposium on African Potentials and the Future of Humanity, 2019.1.27, Kyoto University, Kyoto, Japan.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 椎野 若菜

課題番号: 17K02002

課題名: 東アフリカ都市におけるエリート・シングルとハウスガールの「同居家族」の研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2017-2019

科研費:

研究代表者： 松田 素二

課題番号： 16H06318

課題名： 「アフリカ潜在力」と現代世界の困難の克服：人類の未来を展望する総合的地域研究

研究種目： 基盤研究(S)

期間(年度)： 2016-2020

\* 研究分担者として参加

科研費：

研究代表者： 杉田 映理

課題番号： 17H04539

課題名： グローバルなアジェンダとなった月経のローカルな状況の比較研究

研究種目： 基盤研究(B)

期間(年度)： 2017-2019

\* 研究分担者として参加

科研費：

研究代表者： 野口 靖

課題番号： 16K13128

研究課題名： ケニア都市部における人々の移動史と居住環境に関する民族誌デジタルアーカイブ研究

研究種目： 挑戦的萌芽研究

期間(年度)： 2016-2018

\* 研究分担者として参加

#### 所属学会(役職)

日本文化人類学会(評議員)

日本アフリカ学会(評議員)

比較家族史学会(理事)

日本ナイル・エチオピア学会(評議員)

生態人類学会(理事)

東京都立大学社会人類学会

## 塩原 朝子(しおはら あさこ)

准教授、フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題：言語学、インドネシア諸言語の記述研究

#### 業績

1. 論文：“Recent Stylistic Changes in Indonesian Recipes Observed in Voice Selection”, *NUSA: Linguistic Studies of Language in and around Indonesia* 65, 67-80, 2018.9. (査読有)
2. 論文(共著)：Arndt Riester and Asako Shiohara, “Information Structure in Sumbawa: A QUD Analysis”, *Perspectives on Information Structure in Austronesian Languages* (ed. by Sonja Riesberg, Asako

- Shiohara, and Atsuko Utsumi), 263-286, 2018.10, Language Science Press, Berlin, Germany.
3. 論文(共著): Asako Shiohara and Anthony Jukes, "Two Definite Markers in Manado Malay", *Perspectives on Information Structure in Austronesian Languages* (ed. by Sonja Riesberg, Asako Shiohara, and Atsuko Utsumi), 117-136, 2018.10, Language Science Press, Berlin, Germany.
  4. 口頭発表: "Coding of Active References in Malay Varieties", ISMIL (International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics) 22, 2018.5.12, University of California, Los Angeles, USA.
  5. 口頭発表: "Coding of Active References in Malay Varieties", ICAL (International Conference on Austronesian Linguistics) 14, 2018.7.17, Université d'Antananarivo, Antananarivo, Madagascar.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 塩原 朝子

課題番号: 15K02472

課題名: Malayo-Sumbawan 言語における定性標示と文構造との関係に関わる研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2015-2019

科研費:

研究代表者: 加藤 重広

課題番号: 18H00661

課題名: 研究職を離れた言語研究者が保持する言語データの適正再資源化のための基盤確立研究

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2017-2020

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 野元 裕樹

課題番号: 18K00568

課題名: マレー語地域変種における受動文のマイクロ変異研究とコーパス・語彙資源開発

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2018-2021

\* 研究分担者として参加

所属学会(役職)

日本語学会

## 品川 大輔(しながわ だいすけ)

准教授、情報資源利用研究センター

研究主題: バントゥ諸語、記述言語学

## 業績

1. 著書(共編著): *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 2019.3, ILCAA.
2. 論文: “Rombo (E623)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 153-189, 2019.3, ILCAA.
3. 論文: “Uru (E622D)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 106-152, 2019.3, ILCAA.
4. 口頭発表: 「ウル語(Bantu E622D)の否定標示」, 日本アフリカ学会第55回学術大会, 2018.5.27, 北海道大学.
5. 口頭発表: 「接触スワヒリ語に見られる構造特徴」, AA 研共同利用・共同研究課題「スワヒリ語諸変種にみられる多様性とダイナミズムへのアプローチ」平成30年度第1回研究会, 2018.6.3, AA 研.
6. 口頭発表: “Typological Variation of Negative Particles in Chaga”, The 20th International Congress of Linguists 2018.7.5, Cape Town International Conference Center, Cape Town, South Africa.
7. 口頭発表: “Variation in Swahili: Micro-typology, Sociolinguistic Diversification and Language Contact”, The 7th International Conference on Bantu Languages 2018.7.9, The River Club, Cape Town, South Africa.
8. 口頭発表 (with Nico Nassenstein): “Toward a ‘State of the art’: Variation in Swahili, Current Approaches, Trends and Directions”, The 7th International Conference on Bantu Languages 2018.7.9, The River Club, Cape Town, South Africa.
9. 口頭発表: “Notes on the Distribution of Relative Constructions in Sheng: With Special Reference to -enye RC”, The 7th International Conference on Bantu Languages 2018.7.9, The River Club, Cape Town, South Africa.
10. 口頭発表: “\*-ag in Kilimanjaro Bantu: Its Diachronic Path and Implications to Micro-typology”, : The 9th World Congress of African Linguistics 2018.8.25, Mohammed V University, Rabat, Morocco.
11. 口頭発表: “Linguistic Diversity and Unity in Swahili Contact Varieties: A Shared Element not Attested in “Swahili””, SOAS, University of London and Beijing Foreign Studies University Joint Conference Diversity of Cultures and Languages in Asia and Africa, 2018.11.8 Senate House, SOAS, London.

## 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 品川 大輔

課題番号: 16K02630

課題名: 言語ドキュメンテーションに基づくバントゥ諸語のマイクロな類型的多様性の探究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2016-2018

科研費:

研究代表者: 松田 素二

課題番号: 16H06318

課題名: 「アフリカ潜在力」と現代世界の困難の克服: 人類の未来を展望する総合的地域研究

研究種目： 基盤研究(S)

期間(年度)： 2016-2020

\*研究分担者として参加

その他競争的資金：

研究代表者： 品川 大輔

資金名称： 日本学術振興会 研究拠点形成事業 B. アジア・アフリカ学術基盤形成型

課題名： アフリカにおける言語多様性とダイナミズムに迫るアフリカ諸語研究ネットワークの構築

期間(年度)： 2018-2020

所属学会(役職)

日本アフリカ学会

日本語学会

## 高島 淳(たかしま じゅん)

教授、文化人類学研究ユニット

研究主題:宗教学・インド宗教史(ヒンドゥー教)、言語情報処理

業績

1. 論文:「南インドにおける終焉期の仏教:野外石仏調査報告を中心に」『宗教研究』(日本宗教学会編) 92-別冊, 219-220, 2019.3.
2. 口頭発表:「南インドにおける終焉期の仏教:野外石仏調査報告を中心に」,日本宗教学会第 77 回 学術大会, 2018.9.8, 大谷大学.
3. 口頭発表:「ヒンドゥー教とは?」,日本南アジア学会 30 周年記念連続シンポジウム第 6 回, 2018.9.30, 金沢歌劇座.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 高島 淳

課題番号: 17K02215

研究課題名: インドにおける仏教の終焉の解明

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2017-2019

所属学会(役職)

日本宗教学会(評議員)

日本南アジア学会

「宗教と社会」学会

その他研究成果

名称: Japanese-Malayalam Dictionary

期間（年度）： 2018

成果： 電子辞書プロジェクトにおいて構築した日本語マラヤーラム語電子辞書を書籍の形態としてインドのケーララ州言語研究所から出版した。

## 高松 洋一(たかまつ よういち)

教授、情報資源利用研究センター

研究主題: オスマン朝史、古文書学、アーカイブズ学

### 業績

1. 論文: “Osmanlı Belge Yönetiminde Kesilmiş Hatt-ı Hümayunlar”, *Osmanlı Araştırmaları* 51, 115-157, 2018.4. (査読有)
2. 総説・解説: 「<辞典案内>トルコ語」, 『教養学部報』 599, 8, 2018.4, 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部.
3. 総説・解説: “Japonya’da Osmanlı Tarih Araştırmaları”, *Osmanlı Araştırmaları* 51, xiii-xviii, 2018.4, TDV İslâm Araştırmaları Merkezi / İstanbul 29 Mayıs Üniversitesi.
4. 総説・解説: 「トルコ・イスタンブル・(旧)首相府オスマン文書館(大統領府オスマン文書館)」, 『歴史学研究』 980, 38-42, 2019.2, 歴史学研究会

### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 高松 洋一

課題番号: 17H02398

課題名: イスラーム圏における簿記史料の通時的・共時的研究

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2017-2020

科研費:

研究代表者: 近藤 信彰

課題番号: 15H01895

研究課題名: イスラーム国家の王権と正統性: 近世帝国を視座として

研究種目: 基盤研究(A)

期間(年度): 2015-2019

\* 研究分担者として参加

### 所属学会(役職)

日本オリエント学会

日本アーカイブズ学会

## 外川 昌彦(とがわ まさひこ)

教授、フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題:南アジアの人類学、インド・バングラデシュ研究

### 業績

1. 論文:“The Spirit of Liberation War and the 1972 Constitution: Redefining Secularism”, *The Journal of Social Studies: Special Issue on Liberation War 1971* 158-April-June, 61-83, 2018.4.(査読有)
2. 論文:「スワミー・ヴィヴェーカーナンダにおける宗教とナショナリズム:仏教とヒンドゥー教の関係を通してみた」,『南アジア研究』29, 60-89, 2018.10.(査読有)
3. 論文:「アナガーリカ・ダルマパーラのブッダガヤ復興運動とインド:宗教的普遍主義からシンハラ仏教ナショナリズムへの軌跡」,『国立民族学博物館研究報告』43-2, 1-38, 2018.12.(査読有)
4. 論文:“Sufi-Orders and Tarikās in Bengal: A Case Study of Religious Practices at the Shāh Ālī Majār in Dhaka, Bangladesh,” in *Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies* (Kyoto Kenan Rifai Sufi Studies Series 3) (ed. by Yasushi Tonaga and Chiaki Fujii ), 217-241, 2018.6, Kenan Rifai Center for Sufi Studies, Kyoto, Japan.
5. 総説・解説:“Okakura Tenshin (Kakuzō) and Rabindranath Tagore: Beginning of Tagore’s Centre for International Exchanges,” in *An Encounter Between Two Asian Civilizations: Rabindranath Tagore and the Early Twentieth Century Indo-Japanese Cultural Confluence* (ed. by Subhas Ranjan Chakraborty and Shyam Sundar Bhattachary), 122-127, 2018.10, The Asiatic Society, Kolkata, India.
6. 総説・解説:“Banglar Sadhusanga o Dharmiya Samanbayabadi Aitijyo”, *Jahangirnagar Bishwabidyalay Bhasa-Sahityapatra* 44, 25-42, 2018.7.
7. 口頭発表:“Revisiting the Ethnography by the Late Professor Hara Tadahiko on the Gohira Village, Chittagong, Bangladesh”, 2019.1.8, Department of Anthropology, Jahangirnagar University, Savar, Bangladesh.
8. 招待講演:“The Bodh Gaya Restoration Movement by Aanagarika Dharmapala and the Japanese Department of Buddhism Studies”, 2018.8.4, The University of Calcutta, Kolkata, India.
9. 招待講演:“Two Majars in Bengal: A Sociological Perspective of Syncretistic Tradition in South Asia”, 2018.8.13, Department of Sociology, Rabindra Bharati University in Collaboration with International Society of Bengal Studies, Rabindra Bharati University, Kolkata, India.
10. 口頭発表:“The Bodhgaya Restoration Movement by Aanagarika Dharmapala and Japanese Buddhist”, *Annual Conference of Asian Studies in Asia*, 2018.7.7, Indian Habitat Center, Delhi, India.
11. 口頭発表:「ベンガル農村社会の民族誌的研究:故原忠彦教授のムスリム社会研究から見た」, *FINDAS 第2回日本ベンガルフォーラム リサーチ部門「シンポジウム:50年後に振り返るベンガルの農村社会:故原忠彦教授の民族誌再訪」*, 2018.6.24, 東京外国語大学府中キャンパス.
12. 招待講演:“Okakura Tenshin (Kakuzo) and Rabindranath Tagore in Shantiniketan: Beginning of Tagore’s Center for International Exchanges”, 2018.4.26, Department of Modern Indian Languages and Literary Studies, University of Delhi, India.

### 競争的研究資金

科研費：  
研究代表者： 外川 昌彦  
課題番号： 16K02602  
課題名： 岡倉天心とタゴールの反響するアジアへのまなざしー植民地主義をめぐる日印の比較研究  
研究種目： 基盤研究(C)  
期間(年度)： 2016-2018

科研費：  
研究代表者： 外川 昌彦  
課題番号： 18KK0024  
課題名： 現代バングラデシュの社会変動とイスラーム-地域研究の統合分析  
研究種目： 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))  
期間(年度)： 2018-2022

科研費：  
研究代表者： 櫻井 義秀  
課題番号： 16H05712  
課題名： アジアの政教関係と新しい公共宗教論構築の地域比較研究  
研究種目： 基盤研究(B)  
期間(年度)： 2016-2018  
\* 研究分担者として参加

科研費：  
研究代表者： 山中 弘  
課題番号： 16H03329  
研究課題名： ツーリズムにおける「スピリチュアル・マーケット」の展開の比較研究  
研究種目： 基盤研究(B)  
期間(年度)： 2016-2018  
\* 研究分担者として参加

#### 所属学会(役職)

日本文化人類学会(『文化人類学』編集委員)  
日本宗教学会(評議員、国際委員、『宗教研究』編集委員)  
日本南アジア学会(理事)  
「宗教と社会」学会(常任委員)  
国際ベンガル学会(ISBS)(日本支部事務局)

## 床呂 郁哉(ところ いくや)

教授、フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題: 東南アジア島嶼部の人類学

## 業績

1. 著書(共編著):『トランスカルチャー状況下における顔・身体(2018年3月国際ワークショップ・プロシーディングス)』(床呂郁哉, 吉田ゆか子, 吉田優貴編), 2019.3, AA 研.
2. 論文:「もの研究の新たな視座」, 『詳論 文化人類学』(桑山敬己・綾部真雄編), 265-278, 2018.4, ミネルヴァ書房(査読無).
3. 論文:“Muslim Cosmopolitanism: Southeast Asian Islam in Comparative Perspective. By Khairudin Aljunied”, *International Journal of Asian Studies*15 (2), 255-257, 2018.7. (査読有)
4. 論文:“The Turing Test in the Wild: When Non Human “Things” Become Others”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 407-424, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
5. 「ドゥテルテ政権の2年」(インタビュー記事), 『まにら新聞』2018年7月4日号, 1, 2018.7.
6. 総説・解説:「ミンダナオ和平の行方を読む(上)」『まにら新聞』2018年8月28日号, 3, 2018.8.
7. 総説・解説:「ミンダナオ和平の行方を読む(下):「静かな危機」の克服」『まにら新聞』2018年8月29日号, 3, 2018.8.
8. 総説・解説:「アチェから見たフィリピン南部」『まにら新聞』2019年1月5日号, 3, 2019.1.
9. 総説・解説:「ミンダナオ和平新展開(上)」『まにら新聞』2019年2月5日号, 3, 2019.2.
10. 総説・解説:「ミンダナオ和平新展開(下)」『まにら新聞』2019年2月6日号, 3, 2019.2.
11. 口頭発表:「身体的経験をめぐる人類学と現象学からのアプローチ:不完全な身体、人種と身体、妊娠期の身体の事例から(イントロダクション)」, 科研費新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」哲学班・人類学班合同公開 WS, 2018.5.18, AA 研.
12. 口頭発表:“Basic Introduction on the Muslim Society in the Philippines”, Workshop on the Muslim Society in Southern Philippines, JICA Philippine Office & Kota kinabalu Liaison Office, ILCAA), 2018.9.10, JICA Philippine Office, Makati, Metro Manila.
13. 口頭発表:「趣旨説明:顔・身体学研究に関するイントロダクション」, 科研費新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体」第3回シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」, 2018.11.25, AA 研.
14. 口頭発表:“De-centralizing Cross-Border Migration Flows in Asia”, JaCMES (Japan Center for Middle Eastern Studies) - LERC (The Lebanese Emigration Research Center) Joint Roundtable on Migrants and Refugees Dynamics and Perception toward Their Integration, 2018.11.28, JaCMES, Beirut, Lebanon.
15. 口頭発表:「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究(計画班 A01-P01:18年度後半進捗報告)」, 科研費新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体表現」第3回領域会議, 2018.12.27, 沖縄県自治会館.
16. 口頭発表:“Preliminary Study on Role of Civil Society in the Mindanao Peace Process”, International Conference on Progressive Civil Society (Uninvestiti Ahmad Dahlan), 2019.2.19, Yogyakarta, Indonesia.
17. 口頭発表:「「かわいい」をめぐる問題系:アジアにおけるカワイイ文化フィールドワーク研究の視点から(コメント)」, 発達心理学会「ラウンドテーブル「かわいい」の進化と文化」, 2019.3.17, 早稲田大学戸山キャンパス.

## 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 床呂 郁哉

課題番号: 17H06341

課題名: 顔と身体表現の文化フィールドワーク研究

研究種目: 新学術領域研究

期間(年度): 2017-2021

科研費:

研究代表者: 床呂 郁也

課題番号: 25370936

課題名: スルー海域世界を中心とする真珠のグローバリゼーションに関する文化人類学的研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2013-2018

科研費:

研究代表者: 石井 香世子

課題番号: 16H02737

研究課題名: アジアの越境する子どもたちとトランスナショナル階層社会の出現に関する実証研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2016-2019

\* 研究分担者として参加

## 所属学会(役職)

日本文化人類学会

## 中山 俊秀(なかやま としひで)

教授、情報資源利用研究センター

研究主題: ワカシュ語言語(北米北西海岸)、言語類型論、言語人類学

## 業績

1. 論文: 「言語知識はどのような形をしているのか」, 『日本認知言語学会論文集』 18, 580-585, 2018.4.  
(査読有)
2. 口頭発表: “Reflections on Working with an Endangered Language Community in Japan”, Third International Conference on Documentary Linguistics - Asian Perspectives, 2018.7.24, Mahidol University, Bangkok, Thailand.
3. 口頭発表: “Problematizing Language and Revitalization: Why Language Documentation Hits a Wall in Revitalization”, International Symposium on Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization, 2018.8.8, National Institute for Japanese Language and Linguistics, Tokyo, Japan.

4. 口頭発表：“Reframing Referentiality in Interaction: From ‘pointing’ to ‘synchronized attention’”, International Workshop on Referentiality, 2018.9.8, University of Alberta, Edmonton, Canada.
5. 口頭発表：“Multiplicity in Grammar: How Do We Need to Change the Way We Think about Grammar?”, Japanese/Korean Conference: Pre-conference Workshop on Multiplicity in Language and Multiple Grammars, 2018.11.28, University of California, Los Angeles, USA.
6. 口頭発表：“Different Ways of Contributing to Conservation and Revitalization of Language and Culture”, Workshop on Conservation and Revitalization of Community Language and Culture, 2019.2.28, Ryukyu University, Okinawa, Japan.
7. 学外の社会活動(講演会):「大学に見る壁とこれからの生き方」, 大学合格ガイダンス. 2018.4.1. 英泉予備校.
8. 学外の社会活動(講演会):「世界につながり広がっていく時代の生き方」特別講義, 2018.4.11. 布池外語専門学校.
9. 学外の社会活動(出前授業):「言葉が失われるときに何が失われるのか:言語の大量消滅問題」, 特別授業, 2018.6.1. 英泉予備校.
10. 学外の社会活動(出前授業):「研究者」というキャリアとこれからのキャリア作り」, キャリアガイダンス, 2018.6.2. 東京都立国際高等学校.
11. 学外の社会活動(講演会):「意味の伝え合いの奇跡:言葉の不思議と楽しみ」, 国際ロータリー2620地区ロータリー財団学友会富士山のふもと文化祭, 2018.8.三島市民文化会館.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 鈴木 亮子

課題番号: 17KT0061

課題名: 日常の相互行為における定型性:話し言葉を基盤とした言語構造モデルの構築

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2017-2020

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 中山 久美子

課題番号: 18K00527

研究課題名: ノートカ語アハウザット方言の自然談話データベース構築およびテキスト集の作成

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2018-2020

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 吉田 憲司

課題番号: 16H06281

研究課題名: 地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化

研究種目: 新学術領域研究

期間(年度): 2016-2018

\* 研究分担者として参加

#### 外部団体委員

国立民族学博物館 共同研究員

#### 所属学会(役職)

日本語学会

日本認知言語学会

Linguistic Society of America

Association for Linguistic Typology

International Pragmatics Association

Society for the Study of the Indigenous Languages of the Americas

## 西井 涼子(にしい りょうこ)

教授、文化人類学研究ユニット

研究主題: 東南アジア大陸部の人類学

#### 業績

1. 論文: “The “Face” and the Other: Muslim Women Behind the Veil”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 283-301, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia.
2. 書評: 『『東北タイにおける精霊と呪術師の人類学』(津村文彦著)』, 『東南アジア歴史と文化』47, 172-176, 2018.5.30, 東南アジア学会.
3. 口頭発表: 「南タイのフィールドにおけるムスリムと仏教徒の共生」, 地域研究コンソーシアム(JCAS) 運営委員会・研究報告会, 2018.4.27, 京都大学.
4. 口頭発表: “Life as a House: The Case of Na Chua: An Assemblage of phi norng (Relatives) in Southern Thailand”, The Japan Society for the Promotion of Science, Grant-in-Aide for Scientific Research (A) “New Anthropological Approach to Affective Studies through Fieldwork Focused on Critical Situations” International Workshop: Encounters in Fieldwork: The Influence of Vincent Crapanzano, 2018.10.14, ILCAA.
5. 口頭発表: 『『ダイナミズムとしての生: 情動・思考・アートの方法論的接合』今後にむけて』, AA 研所 共同利用・共同研究課題「ダイナミズムとしての生: 情動・思考・アートの方法論的接合」2018 年度第 4 回研究会, 2018.12.15, AA 研.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 西井 涼子

課題番号: 17H01648

課題名: グローバル化における権力編成の変動と新たなコミュニティ運動: 東南アジア大陸部の事

例から

研究種目： 基盤研究(A)

期間(年度)： 2017-2020

科研費：

研究代表者： 西井 涼子

課題番号： 17H00948

課題名： 人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開：危機を中心に

研究種目： 基盤研究(A)

期間(年度)： 2017-2020

科研費：

研究代表者： 床呂 郁哉

課題番号： 17H06341

研究課題名： 顔と身体表現の文化フィールドワーク研究

研究種目： 新学術領域研究(研究領域提案型)

期間(年度)： 2017-2021

\* 研究分担者として参加

#### 所属学会(役職)

日本文化人類学会

東南アジア学会(東南アジア学会賞選考委員)

## 錦田 愛子(にしきだ あいこ)

准教授、フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題：中東地域研究

#### 業績

1. 論文：「離散から 70 年：パレスチナ難民の帰還をめぐる思い」、『現代思想』2018 年 5 月号, 180-189, 2018.4.
2. 論文：“‘‘ Hamas and the Gaza War of 2014: Developments since the Arab Spring in Palestine ’’, *IDE Discussion Papers* 732, 01-21, 2018.11.
3. 論文：“‘‘ Hamas’s Ascension and Its International Relations: Literature Review ’’, *IDE Discussion Papers* 731, 1-12, 2018.11.
4. 論文：「エルサレム〈イスラエル／パレスチナ〉：聖地をめぐる静かな分断」、『地中海を旅する 62 章：歴史と文化の都市探訪』(松原康介編), 282, 2019.2, 明石書店.
5. 口頭発表：“‘‘ Comparative Study of the Dynamics of the Syrian Refugees in Jordan, Turkey and Sweden ’’, European Social Science History Conference (ESSHC): Annual Conference 2018, 2018.4.7, Queen’s University, Belfast, Northern Ireland.
6. 口頭発表：“‘‘ Subjective Choice in Refugee Preferences of the Arab Migrants-Refugees and Their

- Strategy”, BIM (Berliner Institut für empirische Integration und Migrationsforschung) Colloquium, 2018.7.2, Humboldt University, Berlin, Germany.
7. 口頭発表: “Living Strategy of Transnational Families: The Effect of the Border Control on Migration to the EU Countries”, : International Symposium "Border/Boundary Control in the Age of Transnationalization: Comparing Experiences in North America, E.U., & Japan, 2018.10.27, Josuikai Centennial Memorial Hall, Hitotsubashi University, Tokyo, Japan.
  8. 口頭発表: 「離散により乗り越える分断: パレスチナ人の再難民化と国民国家」, 日本国際政治学会 2018 年度年次大会, 2018.12.4, 大宮ソニックシティ.
  9. 口頭発表: “Prolonged Conflict and Multidimensional: Approach to the Issue of Palestinian refugees”, 科学研究費補助金新学術領域研究「グローバル関係学」International Conference “Relational Studies on Global Conflicts: Toward a New Approach to Contemporary Crises”, 2018.12.21, Hotel Zira, Belgrade, Serbia.
  10. 口頭発表: “New Boundary of Japanese Migration Governance”, Yasar University: Turkish-Japanese Joint Research Workshop, 2019.2.19, Yasar University, Izmir, Turkey.
  11. 口頭発表: “Migration Network as a Strategy of Survival: A Case study of Palestinians in Lebanon”, AA 研共同利用・共同研究課題「中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究 (Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies)」International Workshop “Minorities in the Middle East”, 2019.3.1, The University of Balamand, Balamand, Lebanon.
  12. 口頭発表: 「「難民危機」から 3 年: ドイツの移民／難民受入れ状況の変化」, AA 研基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」研究会, 2019.3.28, AA 研.
  13. 学外の社会活動(その他): 「パレスチナ人 58 人が死亡したガザでの衝突をハマースの責任に転嫁するアメリカ」『ニューズウィーク日本版』, 2018.5.17.

## 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 錦田 愛子

課題番号: 17H04504

課題名: 中東・ヨーロッパ諸国間の国際政策協調と移民／難民の移動に関する研究

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2017-2019

科研費:

研究代表者: 錦田 愛子

課題番号: 16KK0050

課題名: ドイツのアラブ系移民／難民の移動と受け入れに関する学際的研究

研究種目: 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)

期間(年度): 2017-2018

科研費:

研究代表者: 青山 弘之

課題番号: 18H03622

課題名： 東アラブ地域の非公的政治主体による国家機能の補完・篡奪に関する研究

研究種目： 基盤研究(A)

期間(年度)： 2018-2022

\* 研究分担者として参加

科研費：

研究代表者： 松永 泰行

課題番号： 16H06547

課題名： 国家と制度：固定化された関係性

研究種目： 新学術領域研究(研究領域提案型)

期間(年度)： 2016-2020

\* 研究分担者として参加

科研費：

研究代表者： 松里公孝

課題番号： 18KK0036

課題名： ロシアの軍事大国化と中東、環黒海地域

研究種目： 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)

期間(年度)： 2018-2021

\* 研究分担者として参加

#### 外部団体委員

国立民族学博物館 共同研究員

#### 所属学会(役職)

日本中東学会 評議員、編集委員

日本国際政治学会

日本比較政治学会

日本政治学会

京都ユダヤ思想学会

移民政策学会

## 野田 仁(のだ じん)

准教授、地域研究・歴史学研究ユニット

研究主題：中央アジア史、露清関係史

業績

1. 著書(共編著) : *Emigrants/Muhacir from Xinjiang to Middle East during 1940-60s* (ed. by Jin Noda and Ryosuke Ono), 2019.3, ILCAA.
2. 論文：“Japanese Spies in Inner Asia during the Early Twentieth Century”, *The Silk Road* 16, 21-29, 2018.

3. 論文(共著:Әбділәшімұлы Д., Нода Д.):“Уәли хан хаттарының тілдік сипаты”, *Әл-Фараби атындағы Қазақ ұлттық университеті, Хабаршы, Филология сериясы*, 4-172, 12-20, 2018.(査読有)
4. 論文:“Kazakh Migrants and Soviet-Chinese Relations during the 1940s: A Background of Xinjiang Refugees to the Middle East”, *Emigrants/Muhacir from Xinjiang to Middle East during 1940–60s* (ed. by Jin Noda and Ryosuke Ono), 25-42, 2019.3, ILCAA.
5. 総説・解説:「カザフをめぐる露清関係」, 『中央ユーラシア史研究入門』, 171, 2018.4, 山川出版社.
6. 総説・解説:「カザフスタンと中国の関係:現代にいたる歴史」, 『ユーラシア研究』 58, 26-31, 2018.5.
7. 書評:『「十八世紀ロシアの「探検」と変容する空間認識: キリーロフのオレンブルク遠征とヤーロフ事件』, 『ロシア史研究』 102, 137-141, 2018.
8. 書評:“Kwangmin Kim, *Borderland Capitalism: Turkestan Produce, Qing Silver, and the Birth of an Eastern Market*”, *Central Asian Survey*, 2018.8. DOI: 10.1080/02634937. 2018.1507516
9. 口頭発表:「中国西北から中東へのまなざし:移動と越境の歴史から」, AA 研中東イスラーム研究拠点, 人間文化研究機構(現代中東地域研究推進事業)シンポジウム「越境のダイナミズム」, 2018.7.8, 東京外国語大学本郷サテライト.
10. 口頭発表:“The Scope of the Kazakh intellectuals in Xinjiang: A Case of Aqit Ulemjiuli”, ILCAA Middle East and Islamic Studies (MEIS), Joint Research Projects “From Turkestan to Istanbul: In Seeking the Freedom, Comparative Studies of Political and Intellectual Trends in Early 20th-century Central Asia”: Middle East and Islamic Studies International Workshop “Mobility of Central Asian Intellectuals: Scholarly and Religious Networks between Xinjiang and Middle East”, 2018.7.21, ILCAA.
11. 口頭発表:「19 世紀後半における新疆をめぐる国際関係の再検討:1870～80 年代を中心に」, 中国ムスリム研究会第 34 回例会, 2018.8.5, 立教大学.
12. 口頭発表:「新疆維吾爾自治区へのみちのり:境界の視点から」, AA 研全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」, 2018.12.13, AA 研.
13. 口頭発表:「中国新疆における移動の歴史と現状」, AA 研共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」2018 年度第 3 回研究会, 2019.2.11, AA 研.
14. 学外の社会活動(講演会):“онлайн лекция Исторического факультета Евразийского национального университета им. Л.Н. Гумилева”, 2018.4.26, Главный корпус ЕНУ им. Л.Н. Гумилева, Astana (Kazakhstan).

### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者:野田 仁

課題番号: 15K02914

課題名: 露清帝国の西方境界における紛争と秩序形成

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度):2015-2018

科研費:

研究代表者:中見 立夫

課題番号: 16H03462

課題名: "帝国"周縁部における国勢調査・人口調査の比較研究

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度):2016-2018

\*研究分担者として参加

#### 所属学会(役職)

内陸アジア史学会

満族史研究会

日本中央アジア学会

Central Eurasian Studies Society

史学会

東洋史研究会

## 深澤 秀夫(ふかざわ ひでお)

教授、文化人類学研究ユニット

研究主題:マダガスカルを中心とするインド洋海域世界の社会人類学的研究

#### 業績

1. 総説・解説:「日本で作ろう! マダガスカル料理 34」,『マダガスカル研究懇談会ニュースレター』39, 40-41, 2018.7.
2. 総説・解説:「マダガスカルのことわざいろいろ 21」,『マダガスカル研究懇談会ニュースレター』39, 39-40, 2018.7.
3. 総説・解説:「日本で作ろう! マダガスカル料理 35」,『マダガスカル研究懇談会ニュースレター』40, 34-35, 2019.1.
4. 総説・解説:「マダガスカルのことわざいろいろ 22」,『マダガスカル研究懇談会ニュースレター』40, 33-34, 2019.1.
5. 学外の社会活動(新聞・雑誌):「TV Madagascar 記者によるインタビュー」, 2018.7.3.
6. 学外の社会活動(講演):在マダガスカル・邦人会文化講演会「ことばを通して知るマダガスカルの人びとの生活と文化」, 2018, 9.29, 在マダガスカル・日本大使館.
7. 学外の社会活動(講演):在マダガスカル・邦人会文化講演会「明治時代のマダガスカルを画像に読み解く Louis Catat, Voyage a Madagascar (1889-1890), Paris: Hachette, Administration de L'Univers Illustré. 1895 年より」, 2019. 2.23, 在マダガスカル・日本大使館.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 深澤 秀夫

課題番号: 18K01167

研究課題名: マダガスカルにおける損失の回復をめぐる観念の歴史的過程と共時的生成の統合的研究

研究種目： 基盤研究(C)

期間(年度)： 2018-2020

科研費：

研究代表者： 西井 涼子

課題番号： 17H00948

研究課題名： 人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開:危機を中心に

研究種目： 基盤研究(A)

期間(年度)： 2017-2020

\* 研究分担者として参加

所属学会(役職)

日本文化人類学会

## 星 泉(ほし いずみ)

教授、情報資源利用研究センター

研究主題:チベット文化圏の言語学

業績

1. 著書(共編著):『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』6(星泉, 海老原志穂, 岩田啓介, 大川謙作, 三浦順子編), 2019.3, AA 研.
2. 論文:「日本で収集されたチベットの怨霊物語」, 『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』6(星泉, 海老原志穂, 岩田啓介, 大川謙作, 三浦順子編), 60-71, 2019.3.
3. 総説・解説【文芸翻訳】:ツェワン・ナムジャ著「ごみ」, 『たべるのがおそい』 5, 54-72, 2018.4, 書肆侃侃房.
4. 総説・解説【文芸翻訳】:ラシャムジャ著「路上の陽光」, 『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 6(星泉, 海老原志穂, 岩田啓介, 大川謙作, 三浦順子編), 125-141, 2019.3, AA 研.
5. 総説・解説:「英語チベット文学への誘い:ツェワン・イシェ・ペンバと長編小説」, 『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 6(星泉, 海老原志穂, 岩田啓介, 大川謙作, 三浦順子編), 144-148, 2019.3, AA 研東.
6. 総説・解説【翻訳】:「チベット本土で行われた初の映画祭タミク・フィルムフェスティバル」, 『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 6(星泉, 海老原志穂, 岩田啓介, 大川謙作, 三浦順子編), 175-180, 2019.3, AA 研.
7. 総説・解説:「伝統と現代のミックスを手がけるチベット人現代美術家 白斌の世界とアニメーション「狩人と骸骨」」, 『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 6(星泉, 海老原志穂, 岩田啓介, 大川謙作, 三浦順子編), 199-204, 2019.3, AA 研.
8. 総説・解説【文芸翻訳】:キャプチェン・デルル著「立ちほだかるものへ告ぐ」, 『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 6(星泉, 海老原志穂, 岩田啓介, 大川謙作, 三浦順子編), 10-15, 2019.3, AA 研.

9. 口頭発表【ポスター／デモンストレーション】:「アジア・アフリカの研究資源を構築して20年」, 科研費基盤研究(S)「仏教学新知識基盤の構築:次世代人文学の先進的モデルの提示」国際シンポジウム「デジタル時代における人文学の学術基盤をめぐって」, 2019.7.6, 一橋講堂.
10. 口頭発表:「チベット牧畜文化辞典の編纂:青海ツェコ県での調査に基づいて」, 第55回野尻湖クルルタイ(日本アルタイ学会), 2018.7.15, 藤屋旅館.
11. 口頭発表:「チベットの怨霊物語:Texts of Tibetan Folktales III にもとづいて」, チベット文学研究会, 2018.10.15, AA 研.
12. 口頭発表:「英語チベット文学への誘い:ツェワン・イシェ・ペンバと長編小説」, 第6回チベット学情報交換会, 2018.11.16, 駒澤大学.
13. 口頭発表【パネルディスカッション】:「チベット牧畜民の世界観を捉える辞典編纂」, 第66回日本チベット学会学術大会, 2018.11.17, 駒澤大学.
14. 口頭発表:「フィールドワークとデータベースの 双方向的活用によるチベット牧畜文化辞典の編纂」, 第66回日本チベット学会学術大会, 2018.11.17, 駒澤大学.
15. 講演:「チベットの怖くないおばけの話:ヤク飼いと骸骨」(解説と朗読), 第4回キキソ チベットまつり, 2018.9.15, 小諸エコビレッジ.
16. 講演:「映画上映&アフタートーク『草原の河』」(蔵西氏, 大川謙作氏と共同講演), TUFUS Cinema, 2018.10.26, 東京外国語大学プロメテウスホール.
17. 講演:「チベットの作家ラシャムジャと話そう〜ガイブンキョウク特別編〜」(ラシャムジャ氏と共同講演), ガイブンキョウク, 2018.10.28, 本のあるところ ajiro.
18. 講演:「世界の詩を読もう」(ラシャムジャ氏と共同講演), 福岡県詩人会「福岡市民芸術祭」, 2018.10.28, 西鉄イン福岡.
19. 講演:「ラシャムジャさん、星泉さんと『雪を待つ』について語ろう」(ラシャムジャ氏と共同講演), カワチェン, 2018.12.9, カワチェン.
20. 講演:「アジア・アフリカの諸地域の言語文化をデジタル化して発信する取り組みとチベット語研究資源の二つの事例」, 島嶼地域科学研究所学内セミナー「島嶼地域科学研究所・研究資源データベースの構築に向けて」, 2019年2月1日, 琉球大学島嶼地域科学研究所.

## 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 池田 巧

課題番号: 18H05219

課題名: シナ=チベット諸語の歴史的展開と言語類型地理論

研究種目: 基盤研究(S)

期間(年度): 2018-2022

\*研究分担者として参加

## 所属学会(役職)

日本チベット学会(編集委員)

## その他研究成果

名称: 古代チベット語文献オンライン

期間(年度): 2006-2018

成果: 古チベット語のテキストデータベース。2018 年度には IRC プロジェクトとして展開し、71 件の校訂記号付き電子テキストを公開した。 <http://otdo.aa-ken.jp>

名称: チベット牧畜文化辞典(パイロット版)

期間(年度): 2014-2018

成果: 青海チベットの牧畜語彙の調査記録を公開する電子辞典。共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて〜」(2017-2019 年度)の成果。2018 年度には 800 余の新規項目を追加し、電子辞典版、PDF 版および iOS 版の改訂版を公開した。 <http://nomadic.aa-ken.jp/>

## 峰岸 真琴(みねぎし まこと)

教授、言語学研究ユニット

研究主題:タイ語学、東南アジア諸言語、オーストロアジア語族

### 業績

1. 論文:「タイ語の数量表現」『言語の類型特徴対照研究会論集』1, 115-132, 2019.1, 日中言語文化出版社.
2. 論文:「タイ語の情報構造に関わる諸表現」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』50, 189-204, 2019.3.
3. 口頭発表:「タイ語の数量表現再考」,言語の類型特徴をとらえるための対照研究会第 8 回公開発表会, 2018.8.4 大阪府立大学.
4. 学外の社会活動(その他):「NPO 地球ことば村」, 2003.4~現在.
5. 学外の社会活動(その他・出演:有):Japanese-Malayalam Dictionary 出版記念会, 2019.3.8.

### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 峰岸 真琴

課題番号: 17H02331

課題名: 形態統語論と音声学からみた東南アジア諸語における情報構造の類型論

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2017-2020

科研費:

研究代表者: 富盛 伸夫

課題番号: 18H00686

課題名: アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2018-2020

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 益子 幸江

課題番号: 17K02676

課題名: 声調言語と非声調言語のリズムに関する研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2017-2019

\* 研究分担者として参加

所属学会(役職)

日本語学会

東南アジア学会

インド言語学会

その他研究成果

名称: Japanese-Malayalam Dictionary

期間(年度): 2018

成果: 電子辞書プロジェクトにおいて構築した日本語マラヤーラム語電子辞書を書籍の形態としてインドのケーララ州言語研究所から出版するためのコーディネーターを務めた。

## 山越 康裕(やまこし やすひろ)

准教授、言語学研究ユニット

研究主題: モンゴル諸語

業績

1. 論文: “Mongol Töröl Xelnüüdijn “Insubordination” (Gishüün bus Ögüülber)”, *Mongol Sudlal ba Togvortoj Xögzhil* (ed. by S. Chuluun), 289–292, 2017. 著書(共編著): 『中国北方危機言語のドキュメンテーション: ヘジエン語/シベ語/ソロン語/ダグール語/シネヘン・ブリヤート語』(李林静, 山越康裕, 児倉徳和編), 2018.4, 三元社.
2. 論文: “Introduction: “Altaic-type” Languages”, *Asian and African Languages and Linguistics* 13, 1-5, 2019.3.
3. 総説・解説: 「[巻頭特集]「似ている言語」の多様性: アルタイ型言語の諸相」『FIELDPLUS』 21, 2-3, 2019.1.
4. 口頭発表: “Influence of Chinese on Buryat in China”, 1st International Workshop on Contact Languages: The East Asia – Indian Ocean Connection, 2018.5.2, Faculty of Social Sciences and Humanities, University of Mauritius, Moka, Mauritius.
5. 口頭発表: 「AA 研におけるモンゴル諸語関連データベースの構築状況」, AA 研共同利用・共同研究課題「モンゴル諸語における言語変容: 外的要因と内的要因」2018年度第1回研究会, 2018.6.30,

AA 研.

6. 口頭発表:“LingDyTalk: A Simple Smartphone App Applying a Numeral Recognition Technique for Audio Playback”, ILCAA and The Research Institute for Languages and Cultures of Asia (RILCA), Mahidol University: Third International Conference on Documentary Linguistics – Asian Perspectives (DLAP-3), 2018.7.24, The Research Institute for Languages and Cultures of Asia (RILCA), Mahidol University, Bangkok, Thailand.
7. 口頭発表:「少数言語コミュニティへのアウトリーチを目的としたスマホアプリ LingDyTalk の開発とその背景」, 国立国語研究所「第 97 回 NINJAL コロキウム」, 2018.9.25, 国立国語研究所.
8. 学外の社会活動(サイエンスカフェ): FIELDPLUS café『『似ている言語』の多様性:アルタイ型言語の諸相』, 2019.1.25, 東京外国語大学アゴラ・グローバル.

### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 山越 康裕

課題番号: 17K02714

研究課題名: シネヘン・ブリヤート語をはじめとしたモンゴル諸語の「文」の完結性に関する研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2017-2021

科研費:

研究代表者: 久保 智之

課題番号: 18H03578

課題名: アルタイ諸言語を対象とした環境の変化と言語の変容に関する総合的研究

研究種目: 基盤研究(A)

期間(年度): 2018-2020

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 風間 伸次郎

課題番号: 15H05153

課題名: アルタイ諸言語の語彙の総合的集成

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2015-2019

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 渡辺 己

課題番号: 16H05672

課題名: 語の統合度と文の相関関係に関する研究—形態法の異なる言語の比較対照をとおして—

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2016-2018

\*研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 奥田 統己

課題番号: 17H02336

課題名: アイヌ語現地調査資料の整理・分析および研究者アーカイブズの構築

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2017-2021

\*研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 栗林 均

課題番号: 18K00521

研究課題名: 音声データベースに基づくモンゴル系諸言語の史的変化の研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2018-2020

\*研究分担者として参加

#### 所属学会(役職)

日本言語学会(大会運営委員;2018年9月~大会運営委員長)

日本モンゴル学会

#### その他研究成果

名称: 「アイヌ語音声資料の文字化テキスト対応づけと公開」

期間(年度): 2014

成果: AA 研所蔵故田村すゞ子氏採録音声資料のうち、話者もしくはそのご遺族からの公開許諾が得られたものを順次下記 URL にて日本語訳を付し、公開している。 <http://ainugo.aa-ken.jp/>

名称: モンゴル諸語対照基本語彙データベースの構築・公開

成果: モンゴル諸語(モンゴル語、ハムニガン・モンゴル語、シネヘン・ブリヤート語、モンゴル語ウールト方言、ダグール語、東郷語、土族語、保安語、東部裕固語)の基礎語彙一覧を下記ウェブページで公開し、検索機能を付してモンゴル諸語比較研究に供する。  
<http://mongolicbv.aa-ken.jp/index.htm>

名称: モンゴル語および関連諸言語用ソフトキーボード

期間(年度): 2018

成果: モンゴル語および関連言語の入力を簡便におこなうためのソフトキーボードを開発し、オンライン上で誰でも利用できるよう公開した。

[http://mongolicbv.aa-ken.jp/list\\_of\\_webkeyboard.html](http://mongolicbv.aa-ken.jp/list_of_webkeyboard.html)

## 吉田 ゆか子(よしだ ゆかこ)

助教、フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題:文化人類学、インドネシアの芸能・宗教・仮面文化の研究

### 業績

1. 著書(共編著): *Disability and Affect: Proceedings of Two International Symposiums about Art* (ed. by Yutaka Sakuma and Yukako Yoshida), 2019.3, ILCAA.
2. 著書(共編著): 『トランスカルチャー状況下における顔・身体』(床呂郁哉, 吉田ゆか子, 吉田優貴編), 2019.3, AA 研.
3. 論文: “Masks as Performers: Topeng, a Balinese Masked Dance Drama”, *An Anthropology of Things* (ed. by Ikuya Tokoro & Kaori Kawai), 2018. 4, 155-170, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia.
4. 総説・解説: 「アルフレッド・ジェル」, 『はじめて学ぶ文化人類学: 人物・古典・名著からの誘い』(岸上伸啓編), 2018. 4, 270-275, ミネルヴァ書房.
5. 総説・解説: 「中谷和人氏の書評へのリプライ」, 『コンタクトゾーン』10, 415-417, 2018.6. ([https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/232984/1/ctz\\_10\\_415.pdf](https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/232984/1/ctz_10_415.pdf))
6. 口頭発表: 「バリ島のコメディにおける不完全な身体の表象をめぐる人類学的考察」, 科研費新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築: 多文化をつなぐ顔と身体表現」公開ワークショップ「身体的経験をめぐる人類学と現象学からのアプローチ: 不完全な身体、人種と身体、妊娠期の身体の事例から」, 2018.5.9, AA 研.
7. ポスター発表: 「トランス カルチャー状況下のバリ芸能」, 科研費新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築: 多文化をつなぐ顔と身体表現」第 2 回領域会議, 2018.6.9-10, 東京女子大学.
8. 口頭発表: “Who are the Communities Involved in Intangible Cultural Heritage”, 5th Symposium of the International Council for Traditional Music, Study Group on Performing Arts of Southeast Asia, 2018.7.21, Sabah Museum, Kota Kinabalu, Malaysia.
9. 口頭発表: 「あの世とつながるメディアとしての芸能の身体: インドネシア・バリ島の事例から」, 「メディアと社会のエスノグラフィ」2018 年度第 1 回シンポジウム, 2018.11.23, 北海道大学.
10. ポスター発表: 「バリ島のコメディにおける身体表象・表現の新潮流: モダン道化劇の調査から」, 科学研究費補助金新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築: 多文化をつなぐ顔と身体表現」第 3 回領域会議, 2018.12.26-27, 沖縄県市町村自治会館.
11. 口頭発表: “Mediation and Transformation in Balinese Masked Theater”, 科学研究費補助金新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築: 多文化をつなぐ顔と身体表現」公開シンポジウム「トランスカルチャーとは何か?: 心理学と哲学の協働」, 2019.3.3, ワテラスコモンホール.
12. 口頭発表: ““Disabled” Bodies and Humor: Two Cases of Balinese Comedy Theater”, UMS (Universiti Malaysia Sabah) – TUFS (Tokyo University of Foreign Studies) Exchange Lecture on Culture and Society of Southeast Asia, 2019.3.13, Universiti Malaysia Sabah, Kota Kinabalu.

### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 吉田 ゆか子

課題番号: 17K03277

課題名: ジャカルタにおけるバリ芸能の民族誌—宗教間・民族間の交渉と相互理解を焦点に

期間(年度): 2017-2020

研究種目: 基盤研究(C)

科研費:

研究代表者: 西井 涼子

課題番号: 17H00948

課題名: 人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開:危機を中心に

研究種目: 基盤研究(A)

期間(年度): 2017-2020

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 床呂 郁哉

課題番号: 17H06341

課題名: 顔と身体表現の文化フィールドワーク研究

期間(年度): 2017-2021

研究種目: 新学術領域研究(研究領域提案型)

\* 研究分担者として参加

#### 所属学会(役職)

「宗教と社会」学会

日本文化人類学会

国際伝統音楽評議会

障害学会

## 渡邊 己(わたなべ おのれ)

教授、言語学研究ユニット

研究主題:セイリッシュ語

#### 業績

1. 論文: “A Sliammon Text: “Birds and Rain”, as Told by Mary George”, 『北方言語研究』9, 123-130, 2019.3.(査読有)
2. 口頭発表: 「セイリッシュ語形態論の問題点: 語彙的接辞か否か」, 日本北方言語学会第 1 回研究会, 2018.12.9, AA 研.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 渡辺 己  
課題番号: 16H05672  
課題名: 語の統合度と文の相関関係に関する研究 - 形態法の異なる言語の比較対照をとおして -

研究種目: 基盤研究(B)  
期間(年度): 2016-2018

科研費:

研究代表者: 渡辺 己  
課題番号: 16K02660  
課題名: スライアモン・セイリッシュ語の焦点構文に関する研究  
研究種目: 基盤研究(C)  
期間(年度): 2016-2018

#### 所属学会(役職)

日本言語学会(常任委員会委員、夏期講座委員会委員、夏期講座実行委員会委員長)  
The Society for the Study of the Indigenous Languages of the Americas  
Linguistic Society of America

## 特任教員

### 細田 和江 (ほそだ かずえ)

特任助教

研究主題:イスラエル文学・文化、イスラエル／パレスチナ地域研究

#### 業績

1. 論文:「食の宗教規定に関する比較研究:アメリカとイスラエルにおけるコシェル(ユダヤ教の食物規定)「スシ」」, 『アサヒグループ学術振興財団 研究紀要』, 95-106, 2018.6. (査読有)
2. 論文:「想像の「ワタン」イスラエルにおける中東諸国出身ユダヤ人第2世代作家たちが描く祖国」, 『現代中東文学リブレット』(現代中東文学研究会編) 4, 263-274, 2019.3.
3. 口頭発表:「想像のワタン:イスラエルにおける中東諸国出身ユダヤ人第2世代作家たちが描く祖国」, シンポジウム「ワタンとは何か:現代中東における「ワタン(祖国)」表象をめぐって」(科研費基盤研究(B)「現代中東の「ワタン(祖国)」的心性をめぐる表象文化発展的研究」(代表:岡真理)), 2018.6.10, 東京大学東洋文化研究所.
4. 口頭発表:“From Anonymous Figure to Onymous Identity: The Representation of “Arab” in the Sayed Kashua’s Stories”, NAPH Annual Conference (The National Association of Professors of Hebrew), 2018.6.25, University of Amsterdam, Amsterdam, Netherlands.
5. 口頭発表:「越境する文化と多様性:イスラエルのなかのマイノリティ文化」, AA 研中東イスラーム研究

拠点、人間文化研究機構(現代中東地域研究推進事業)共催シンポジウム「越境のダイナミズム」, 2018.7.8, 東京外国語大学本郷サテライト.

6. 口頭発表: “Imaginary Watan: Describing Watan by the Second-Generation Writers”, WOCMES Seville 2018 (World Congress for Middle Eastern Studies), 2018.7.20, University of Seville, Sevilla, Spain.
7. 口頭発表: “Writing Historical Stories on Mediterranean World: Focusing on Two Novels, A.B. Yehoshua’s “Mr. Mani” and Alaa Hlehel’s “Au Revoir, Acre””, International Workshop on “Reconsidering the Mediterranean Literature from the Islamic Coast”, 2019.3.8, National Cheng Kung University, Tainan, Taiwan.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 福嶋 伸洋

課題番号: 15H03200

課題名: ポスト世界文学に向けた比較詩学的共同研究の基盤構築

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2015-2018

\* 研究分担者として参加

#### 外国人研究員

Abdirashidov Zaynabidin Sharabidinovich アブディラシドフ ザイナビディン

#### シャラビディノヴィチ

ウズベキスタン Republic of Uzbekistan

滞在期間: 2018.4.1~2018.7.31

研究主題: From Turkestan to Istanbul: In Seeking the Freedom, Comparative Studies of Political and Intellectual Trends in Early 20th-century Central Asia

研究成果:

1. 論文: “Mujaddid: Ismoil Gasprinskiy Turkistonlik Ziyolilar Nazarida”, *Türkiye ile Türk Dünyası Arasında Bir Köprü Yavuz Akpınar Armağanı* (ed. by Nazim Muradov, Yılmaz Özkaya), 801-813, 2018.
2. 論文: “Çarlık Rusya’sında Bir Kırımliğin Mücadelesi”, *AVRASYA Uluslararası Araştırmalar Dergisi*, Cilt 6, Sayı 13, 171-189, 2018. (査読有)
3. 論文: “Understand and Critically Discuss Sufism: ‘Abd al-Ra’uf Fitrat, Yasawi and Yasawism”, *IV. Uluslararası Alevilik ve Bektaşilik Sempozyumu Bildiriler Kitabı (18-20 Ekim 2018)* (ed. by Orhan Kurtoğlu, Ayşe Çamkara Erginer), Cilt 1, 31-37, 2018.

4. 口頭発表：“Развитие политических и интеллектуальных тенденций в Туркестане в начале XX века: Взгляд из Стамбула”, SRC Special Lecture, 2018.7.11, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター.
5. 口頭発表：“Brothers in Religion: The Image of a Chinese Muslim in the Ottoman Periodicals”, Middle East and Islamic Studies International Workshop “Mobility of Central Asian Intellectuals: Scholarly and Religious Networks between Xinjiang and Middle East”, 2018.7.21, ILCAA.

## EWING Michael Carter ユーイング, マイケル カーター

アメリカ合衆国 United States of America

滞在期間:2017.11.1～2018.6.30

研究主題: Social Action and the Grammar(s) of Contemporary Indonesian

### 研究成果：

1. 著書: Djenar, Dwi Noverini, Michael C. Ewing, and Howard Manns, *Style and Intersubjectivity in Youth Interaction*, 2018, De Gruyter, Berlin.
2. 論文: “Investigating Indonesian Conversation: Approach and Rationale”, *Wacana: Journal of the Humanities of Indonesia* (ed. by Hein Steinhauer) 19 (2), 342-374, 2018.11. (査読有)
3. 論文: Ewing, Michael C., “The Predicate as a Locus of Grammar and Interaction in Colloquial Indonesian”, *Studies in Language* 43 (2), 402-444, 2019. (査読有)
4. 論文: Ewing, Michael C. and Dwi Noverini Djenar, “Address, Reference and Sequentiality in Indonesian Conversation”, *Social Dynamics of Pronominal Systems*, ed. by Paul Bouissac, Amsterdam: John Benjamins, 253-287, 2019.
5. 書評: Laurie Margot Ross, “The Encoded Cirebon Mask: Materiality, Flow, and Meaning Along Java’s Islamic Northwest Coast”, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 175(1), 124-126, 2019.2.
6. 口頭発表: “The Indeterminacy of Clause Structures in Conversational Interaction: Examples from Colloquial Indonesian”, *LingDy Forum “Studies on Language and Grammar in the Community”*, 2018.5.24, ILCAA.
7. 講演: “Indonesian Masked Dancing”, 2018.6.8, Tokyo University of Foreign Studies.

## Suraratdecha Sumittra スララッデチャ スミットラ

タイ王国 The Kingdom of Thailand

滞在期間:2018.1.1-2018.7.15

研究主題: Language Documentation and Youth Participation in Sustainable Language and Culture Reclamation Development

### 研究成果：

1. 論文: “Thai Teachers’ Self-assessment and Student Perceptions on the Practice of Autonomy”, *Kasetsart*

*Journal of Social Sciences* 30, 1-7, 2018.9. (査読有)

2. 口頭発表: “Youth Engagement in Linguistic and Cultural Reclamation: A Case Study of Black Tai Community, Thailand”, LingDy Forum “Studies on Language and Grammar in the Community”, 2018.5.24, ILCAA.

## 拉先加(Laxianjia) ラシャムジャ

中華人民共和国 People's Republic of China

滞在期間:2018.10.1~2019.3.31

研究主題:青海チベットの半農半牧民の言語・文化の研究

### 研究成果:

1. 論文:“dre”(Tibetan Ghosts and Demons),『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA 』(星泉, 海老原志穂, 岩田啓介, 大川謙作, 三浦順子編)6, 24-28, 2019.3.
2. 講演:「チベットの現代文学と『雪を待つ』の背景」,「【トークイベント】チベットの作家ラシャムジャと話そう~ガイブンキョウク特別編~」, 2018.10.28, 本のあるところ ajiro.
3. 講演:「チベットの詩の世界:古代から現代まで」, 福岡市民芸術祭「【トークイベント】世界の詩を読もう」, 2018.19.28, 西鉄イン福岡.
4. 講演:「チベット文学の現在・過去・未来について考える」, 日本大学文理学部人文科学研究所総合研究班 2019 年度第1回定例研究会, 2018.11.22, 日本大学文理学部.
5. 講演:「チベット文学と私、そして『雪を待つ』」, カワチェン「【読書会】ラシャムジャさん、星泉さんと『雪を待つ』について語ろう」, 2018.12.9, カワチェン.

## 特任研究員

### 青井 隼人 (あおい はやと)

特任研究員

研究主題:琉球語学、音声学、音韻論

### 業績

1. 口頭発表:「フィールド言語学における音声学教育」, 日本音声学会第 337 回研究例会, 2018.6.16, 甲南大学.
2. 口頭発表:「南琉球宮古多良間方言のアクセント規則」, 日本音韻論学会 2018 年度春期研究発表会, 2018.6.22, 大東文化大学.
3. 口頭発表:「宮古語音声学音韻論の論点:舌端母音の発展と衰退」, 沖縄言語研究センター2018 年度総会, 2018.7.7, 沖縄国際大学.

4. 口頭発表：「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築を目指して：LingDy3プロジェクト活動紹介」, 日本言語学会夏期講座 2018, 2018.8.20, 東京外国語大学.
5. 口頭発表：「北琉球沖縄語伊江方言の破裂音」, 日本言語学会第 157 回大会, 2018.11.17, 京都大学.
6. 口頭発表：“Acoustic Traits of a Glottalized Consonants in the Ie Dialect of Okinawa Ryukyuan”, The 2nd NINJAL-UHM-SGRL Linguistics Workshop, 2019.1.13, University of Hawai’i at Manoa, Honolulu, USA.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 青井 隼人

課題番号: 17H06666

課題名: 声門化子音の音響特性の記述と音韻論的解釈: 北琉球沖縄語伊江方言の事例研究

研究種目: 研究活動スタート支援

期間(年度): 2017-2018

#### 受賞

賞名: 沖縄言語研究センター2018 年度仲宗根政善記念研究奨励賞

受賞対象: 「宮古多良間方言における「中舌母音」の音声的解釈」『言語研究 142』2012、「琉球宮古多良間方言の三型アクセント—その特徴と型の中和一」『音声研究 20(3)』2016、他、多良間方言を中心とした音韻関係の諸論文

授与機関: 沖縄言語研究センター

授与年月日: 2018 年 7 月 7 日

賞名: 国立国語研究所第 17 回所長賞 (若手研究者奨励賞)

受賞対象: 仲宗根政善記念研究奨励賞

授与機関: 国立国語研究所

授与年月日: 2018 年 12 月 11 日

## 石黒 芙美代 (いしぐろ ふみよ)

特任研究員

研究主題: 美術教育、アジアの文化・芸術

#### 業績

1. 論文: 「仮面の芸術性と教育的意味」, 『アジア文化造形学会誌』 16, 5-20, 2018.9. (査読有)
2. 展示: 「いのちのにぎわい」, 美術教育研究室企画実行委員会「美術教育の森 : 美術教育研究室の作家たち」, 2019.1.8-20, 東京藝術大学大学美術館.

## 小山内 優子（おさない ゆうこ）

特任研究員

研究主題: 中期朝鮮語文法、朝鮮語史

### 競争的資金

科研費:

研究代表者: 小山内 優子

課題番号: 18K12365

課題名: 日本語史・朝鮮語史研究のための日朝対訳資料研究

研究種目: 若手研究

期間(年度): 2018-2021

## 篠田 知暁(しのだ ともあき)

特任研究員

研究主題: 北アフリカ史、境域

### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 篠田 知暁

課題番号: 18K12518

課題名: 初期近世西地中海地域の「境域」における異教徒間関係の形成

研究種目: 若手研究

期間(年度): 2018-2020

科研費:

研究代表者: 篠田 知暁

課題番号: 16J06726

課題名: 法学文献から見た近世初頭のモロッコ農村社会における法的規範のイスラーム化

研究種目: 特別研究員奨励費

期間(年度): 2016-2018

## 高橋 洋成（たかはし よな）

特任研究員

研究主題: ヘブライ語、セム諸語、アフロ・アジア諸語の言語学

業績

1. 論文:「「イスラエルの子ら」と「全イスラエル」:旧約聖書に見られる2つの自己同一性」,『地球システム・倫理学会会報』13, 127-131, 2018.10.(査読有)
2. 論文:「文字資料を対象とするデータベース構築に適した言語学的記述のあり方について」,『人文科学とコンピュータ研究会報告』2019-CH-119(14), 1-7, 2019.2.
3. 論文:「アノテーション付与型画像データベースプラットフォームの IIIIF 対応」,『人文科学とコンピュータ研究会報告』2019-CH-119(15), 1-6, 2019.2.
4. 総説・解説:「エチオピア少数言語の多様な言語実態を探る」『FIELDPLUS』21, 20-22, 2019.1.
5. 講演:「イエスの時代の言語生活:イエスは何語を使ったか?」,上智大学キリスト教文化研究所 2018 年度聖書講座, 2018.11.17, 上智大学.
6. 講演:「データを公開するときのひと工夫:つながるデータを考える」,AA 研情報資源利用研究センターワークショップ「30 年後も使えるデータを目指す」, 2018.12.5, AA 研
7. 口頭発表:“Definiteness in Hamar Marked by the Feminine/Augmentative Suffix -n”, 2018 年度エチオピア諸語研究会, 2018.11.11, 大阪大学.
8. 口頭発表:「文字資料を対象とするデータベース構築に適した言語学的記述のあり方について」, 第 119 回人文科学とコンピュータ研究会, 2019.2.16, 大阪大学.
9. 口頭発表:「アノテーション付与型画像データベースプラットフォームの IIIIF 対応」, 第 119 回人文科学とコンピュータ研究会, 2019.2.16, 大阪大学.
10. 報道:「新しい日本語訳聖書」,『聖三木図書館報 みき』, 1, 2018.12.3.
11. 報道:「聖書 古代の雰囲気正確に カトリック・プロテスタントが共同新訳」,『読売新聞』, 4, 2019.2.2.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 乾 秀行

課題番号: 18KK0009

課題名: エチオピア諸語の記述とドキュメンテーション:ソーシャル・イノベーションにむけて

研究種目: 国際共同研究加速基金

期間(年度): 2018-2021

\* 研究分担者として参加

#### 中村 恭子 (なかむら きょうこ)

特任研究員(2018年10月1日よりAA研フェロー)

研究主題:美術(日本画)

\*2018年10月1日よりAA研フェロー。個人研究活動については、[II-4.2.2 国内研究者の受け入れ\(フェロー等\)](#)の「フェロー」の項を参照。

#### 早田 清冷 (はやた すずし)

特任研究員

研究主題:言語学、古典満洲語

#### 業績

1. 論文:「古典満洲語における経路の標示:『満文三国志』における deri, ci, be の交替を中心に」,『言語の研究』(寺村政男編), 133-140, 2018.12, 「水門(みなど):言葉と歴史」編集部.
2. 口頭発表:「有圈点満洲文字表記に関する幾つかの問題」, 2018 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2019.3.27, 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター(羽田記念館)

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 早田 清冷

課題番号: 16K16819

課題名: 初期満洲語の格体系の研究

研究種目: 若手研究(B)

期間(年度): 2016-2018

## 研究機関研究員

### 池田 昭光(いけだ あきみつ)

研究機関研究員

研究主題:人類学、中東地域研究(レバノン)、紛争の民族誌、高齢化、都市社会

#### 業績

1. 論文:「宗派を通じた空間の構築:バイルートを対象とする近年の都市論を素材に」,『アジア・アフリカにおける諸宗教の関係の歴史と現状(2)』(高橋圭編), 35-48, 2019.2, 上智大学イスラーム研究センター.
2. 論文:「レバノンにおける高齢社会のフィールドワークから見えてきたこと」,『FIELDPLUS』 20, 20-21, 2018.7.
3. 論文:「映画に見る地中海都市」,『地中海を旅する 62 章:歴史と文化の都市探訪』(松原康介編), 287-288, 2019.2, 明石書店.
4. 論文:「カップ・イリヤース:ハイイの消滅」,『地中海を旅する 62 章:歴史と文化の都市探訪』(松原康介編), 295-299, 2019.2, 明石書店.
5. 論文:“Sectarian Tension and Everyday Life: Case of Lebanon”, Coping with Vertiginous Realities (ed. by Ryoko Nishii), 14-18, 2019.3, ILCAA.
6. 口頭発表:「自著紹介:書かれなかった後書き」, AA 研シンポジウム『危機』にふれる:レバノンとケニアのフィールドをめぐるふたつの著作から」, 2019.1.13, AA 研.
7. 口頭発表:“Sectarian Tension and Everyday Life: Case of Lebanon”, ILCAA International Symposium “Coping with Vertiginous Realities”, 2018.10.6, ILCAA.

8. 口頭発表：“Sectarianism Within and Without: Everyday Interaction in a Lebanese Town”, World Congress for Middle Eastern Studies, 2018.7.20, University of Sevilla, Sevilla, Spain.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 池田 昭光

課題番号: 15K16895

課題名: レバノン高齢社会の人類学的研究—親族・国外移民・家事労働者

研究種目: 若手研究(B)

期間(年度): 2015-2018

## 吉田 優貴 (よしだ ゆたか)

研究機関研究員

研究主題: 身体群の共振、手話、ヴィジュアル・メソッド、ケニア

#### 業績

1. 共編著:『トランスカルチャー状況下における顔・身体』(床呂郁哉, 吉田ゆか子, 吉田優貴編), 2019.3, AA 研.
2. 論文:「探究すべき何かは向こうからやってきた:ケニアの聾の子供の『コミュニケーション』をめぐって」, 『FIELDPLUS』21, 27-29, 2019.1.
3. ポスター発表:「身体群の共振としての「互いを見ない手話会話」 ケニアを事例に」, 科研費新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体表現」第3回領域会議, 2018.12.26, 沖縄県市町村自治会館.
4. 口頭発表:「身体群の共振としての「互いを見ない手話会話」 ケニアを事例に」, 科研費新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体表現」第3回領域会議, 2018.12.27, 沖縄県市町村自治会館.
5. 口頭発表:「自著紹介: making of “躍っている”」, AA 研シンポジウム「『危機』にふれる:レバノンとケニアのフィールドをめぐるふたつの著作から」, 2019.1.13, AA 研.

## 日本学術振興会特別研究員

## 岩田 啓介(いわた けいすけ)

研究課題名: 清朝のアムド支配からみたチベット仏教世界再編

受入期間: 2017.4.1-2020.3.31

受入教員: 星 泉

#### 業績

1. 論文:「現代チベット人のアムド史の模索:チベット語村落史の刊行から」,『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』6, 161-163, 2019.3.
2. 論文:「青海モンゴル盟旗制支配をめぐる清朝の政策方針:18 世紀前半の牧地の画定からみる」,『内陸アジア史研究』34, 73-94, 2019.3.(査読有)
3. 口頭発表:「新史料『清代西藏地方档案文献選編』について」,第 6 回チベット学情報交換会, 2018.11.16, 駒澤大学.
4. 口頭発表:「チベットの歴史と呪い」,第 2 回「チベット文学と映画制作の現在」国際シンポジウム, 2019.3.17, AA 研.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 岩田 啓介

課題番号: 17J01093

課題名: 清朝のアムド支配からみたチベット仏教世界再編

研究種目: 特別研究員奨励費

期間(年度): 2017-2019

## 大竹 昌巳(おおたけ まさみ)

研究課題名: 契丹語文法の記述的研究

受入期間: 2017.4.1-2020.3.31

受入教員: 山越 康裕

#### 業績

1. 口頭発表:「契丹文字の文字組織」,AA 研共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築 1: 文字学に関する用語・概念の研究」2018 年度第 1 回研究会, 2018.5.27, AA 研.
2. 口頭発表:「契丹語與蒙古語的輔音對應規律」,第四届契丹學國際學術研討會(河北大学・赤峰学院), 2018.7.22, 中国河北省保定市卓正国際酒店.
3. 口頭発表:「契丹語を俯瞰する」,AA 研共同利用・共同研究課題「モンゴル諸語の言語変容:外的要因と内的要因」2018 年度第 2 回研究会, 2018.12.15, AA 研.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 大竹 昌巳

課題番号: 17J04094

課題名: 契丹語文法の記述的研究

研究種目: 特別研究員奨励費

期間(年度): 2017-2019

## 杉江 あい(すぎえ あい)

研究課題名: イスラームのトランスナショナル・ネットワークとバングラデシュ村落社会の変動

受入期間: 2016.4.1-2019.3.31

受入教員: 外川 昌彦

### 業績

1. 論文: 「バングラデシュにおけるロヒンギャ難民支援の現状と課題」, *E-journal GEO* 13 (1), 312–331, 2018.5. (査読有) DOI: <https://doi.org/10.4157/ejgeo.13.312>
2. 論文: “Deconstructing Financial Inclusion and Exclusion in Development Discourse: Case Studies of Microfinance Operations in Rural Bangladesh”, *Perspectives on Geographical Marginality Volume 4: Rural Areas between Regional Needs and Global Challenges* (ed. by Walter Leimgruber and Chang-yi David Chang), 97–119, 2019.1, Springer, Berlin, Germany.
3. 論文 “Disembedding Islamic Locale: The Spread and Deepening of Islamic Knowledge in Rural Bangladesh”, *Journal of Urban and Regional Studies on Contemporary India* 5 (2), 1–21. 2019.3.
4. 口頭発表: 「現代バングラデシュ村落社会の多面性: 故原忠彦教授の民族誌と後続の村落研究より」, 第 2 回日本ベンガル・フォーラム「シンポジウム: 50 年後に振り返るベンガルの農村社会: 故原忠彦教授の民族誌再訪」, 2018.6.24, 東京外国語大学.
5. 口頭発表: “Do Islamic Norms Impede Inclusive Development of Women?: A Case Study of Islamic Education for Women in Rural Bangladesh”, 10th INDAS-South Asia International Conference, 2018.12.14, 東京外国語大学.
6. 口頭発表: “Fertility Transition and Female Roles in Rural Bangladesh”, 歴史人口学セミナー 第 74 回研究会, 2019.1.30, 麗澤大学.
7. ポスター発表(共同発表): 杉江あい, 日下部尚徳, 海津正倫, 「バングラデシュロヒンギャ難民キャンプにおける地下水資源と水利用」, 日本地理学会 2019 年春季学術大会, 2019.3.20-21, 専修大学.

### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 杉江 あい

課題番号: 16J05363

課題名: イスラームのトランスナショナル・ネットワークとバングラデシュ村落社会の変動

研究種目: 特別研究員奨励費

期間(年度): 2016-2018

クリタ水環境科学振興財団研究助成:

研究代表者: 杉江 あい

課題名: バングラデシュロヒンギャ難民キャンプ地帯における水資源問題

期間(年度): 2018

### 受賞

賞名: 2018 年度日本地理学会賞 (論文発信部門)

受賞対象： 「バングラデシュにおけるロヒンギヤ難民支援の現状と課題」, E-journal GEO 13  
(1), 312-331, 2018.5.

授与機関： 日本地理学会

授与年月日： 2019年3月20日

## 高尾 賢一郎(たかお けんいちろう)

研究課題名：イスラームと社会統治に関する研究：ヒスバ制度を事例に

受入期間：2016.4.1-2019.3.31

受入教員：飯塚 正人

### 業績

1. 著書：『イスラーム宗教警察』, 2018.9, 亜紀書房.
2. 論文：「シリアにおけるイスラーム主義の栄枯盛衰：「今世紀最大の人道危機」を遡る」『「アラブの春」以後のイスラーム主義運動』(高岡豊, 溝渕正季編), 229-259, 2019.3, ミネルヴァ書房.
3. 論文：「サウジアラビアにおけるイスラーム主義の競合：「公式」イスラーム主義による「非公式」イスラーム主義の封じ込め」『「アラブの春」以後のイスラーム主義運動』(高岡豊, 溝渕正季編), 153-179, 2019.3, ミネルヴァ書房.
4. 論文：「サウジアラビアにおける「変革」と宗教界」, 『中東研究』 534, 33-44, 2019.1.
5. 論文：「建国思想としての勸善懲悪：サウジアラビアとイランを事例に」, 『宗教研究』(第77回学術大会紀要特集) 92(別冊), 258-259, 2019.3.
6. 論文：“Sufism between Politics and Spirituality: Shaykh Aḥmad Kuftārū and Syrian Ba’th”, *Islamic Studies and Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies (Kyoto Kenan Rifai Sufi Studies Series)*, 3, 203-216, 2019.3.
7. 論文：“Promotion of Virtue and Prevention of Vice as the Founding Ideology for Saudi Arabia and Iran”, 『学習院女子大学紀要』 21, 69-81, 2019.3.
8. 論文：“Policing Public Morality in Modern Muslim Societies: ‘Religious Police’ in Saudi Arabia, ‘Islamic State’ and Aceh”, 『早稲田大学イスラーム地域研究ジャーナル』 11, 3-28, 2019.3.
9. 書評：ナディア・ムラド著, 吉井智津訳『The Last Girl: イスラム国に囚われ、闘い続ける女性の物語』(東洋館出版社, 2018.11), 『しんぶん赤旗』, 9, 2019.2.9.
10. 口頭発表：「サウジアラビアにおける宣教の射程とワッハーブ主義」, 上智大学イスラーム研究センター・早稲田大学イスラーム地域研究機構連携事業共同研究「アジア・アフリカにおける諸宗教の関係の歴史と現状」2018年度第1回研究会, 2018.7.7, 上智大学.
11. 口頭発表：「建国思想としての勸善懲悪：サウジアラビアとイランを事例に」, 日本宗教学会第77回学術大会, 2018.9.9, 大谷大学.
12. 口頭発表：「これまでのアチェ州調査の概要」, 2018年度第4回災害人文学研究会, 2018.10.30, 東北大学東北アジア研究センター.
13. 口頭発表：「現代シリアのウラマー・スーフィーによるウズベキスタン・リビアとの交流：アフマド・クフターローとラマダーン・ブーティーの事例」, 人間文化研究機構「現代中東地域研究」推進事業 AA 研

中東イスラーム研究拠点／国立民族学博物館現代中東地域研究拠点平成 30 年度若手研究公募事業「現代ムスリム知識人の地域横断ネットワークに関する研究:ウズベキスタン・シリア・リビアのウラマー・スーフィーの交流を中心に」第 2 回研究会, 2019.1.28, 日本エネルギー経済研究所.

14. 口頭発表:「今日のムスリム社会に見るヒスバ: 風紀取締り活動を事例に」, AA 研基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」研究会, 2019.3.28, AA 研.

15. 報道:しんぶん赤旗「シリーズ 学問は面白い: 服装まで取り締まる宗教警察の存在なぜ」(インタビュー), 2018.12.5.

### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 高尾 賢一郎

課題番号: 16J01130

課題名: イスラームと社会統治に関する研究:ヒスバ制度を事例に

研究種目: 特別研究員奨励費

期間(年度): 2016-2018

科研費:

研究代表者: 高尾 賢一郎

課題番号: 18H00613

課題名: 現代ムスリム社会における風紀・暴力・統治に関する地域横断的研究

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2018-2020

## 竹村 和朗(たけむら かずあき)

研究課題名: 現代エジプトのワクフに関する人類学的研究

受入期間: 2017.4.1-2020.3.31

受入教員: 近藤信彰

### 業績

1. 著書:『現代エジプトの沙漠開発: 土地の所有と利用をめぐる民族誌』, 2019.2, 風響社.
2. 口頭発表:「「期間の定めのあるワクフ」を作り出す論理: 1946 年法律第 48 号の第 5 条に関する議会論議の読解から」, 日本中東学会第 34 回年次大会, 2018.5.13, 上智大学.
3. 口頭発表:「ワクフは寄進か? : イスラーム的財産法制度の人類学的研究に関する予備的考察」, 日本文化人類学会第 52 回研究大会, 2018.6.3, 弘前大学.
4. ポスター発表:「現代エジプトのワクフに関する人類学的研究」, AA 研海外学術調査フォーラム海外学術調査フェスタ, 2018.6.16, 東京外国語大学.
5. 口頭発表:“Reclaiming State Lands: The Latest Egyptian Move to Shift Land Ownership between the State and Individuals”, The 12th Conference of AFMA (Asian Federation of Middle East Studies Associations), 2018.9.8, Chinese Academy of Social Science, Beijing, PRC.

6. 口頭発表:「現代エジプトにおけるワクフ(宗教寄進)の制度と実践:国家管理の拡大と個人の対応」,TINDAS(南アジア地域研究東京大学拠点)2018年度ワークショップ「トラスト・エコノミー:宗教と開発のダイナミズム」,2019.1.27,東京大学.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 竹村 和朗

課題番号: 17J02475

課題名: 現代エジプトのワクフに関する人類学的研究

研究種目: 特別研究員奨励費

期間(年度): 2017-2019

科研費:

研究代表者: 竹村 和朗

課題名: 現代エジプトの沙漠開発

研究種目: 研究成果公開促進費

期間(年度): 2018

#### I-2.6.3 受賞

青井隼人(特任研究員)

仲宗根政善研究奨励賞(2018年7月7日、沖縄言語文化研究センター)

伊藤智ゆき(准教授)

日本音声学会優秀論文賞(2018年9月16日、日本音声学会)

倉部慶太(助教)

日本言語学会大会発表賞(2018年11月18日、日本言語学会)

児倉徳和(准教授)

金田一京助博士記念賞(2018年12月16日、金田一京助博士記念会)

杉江あい(日本学術振興会特別研究員/受入教員: 外川 昌彦)

2018年度日本地理学会賞(論文発信部門)(2019年3月20日、日本地理学会)

#### I-2.6.4 人事評価

国立大学法人東京外国語大学では、2006年度から(1)教員の教育研究活動の実態を把握し、本学における教育研究の質の向上を図る、(2)教員の潜在的可能性を掘り起こし、大学の価値と競争力を高める、(3)年功序列型の給与制度の弊害を正し、教育・研究・大学運営への参画など広い意味での大学業務への貢献を給与に適正に反映させる、といった目的で、年に一度「人事評価」を実施することになった。評価項目や方法などは部局の事情を考慮し、部局ごとに独自に作成することになった。

これを受けて本研究所では、人事評価の方針および評価項目案を決定した。基本方針の概略は以下の

通りである。

- ・ 教育実績、研究業績、組織運営への参画と貢献、社会貢献・国際貢献、その他の5つの大項目を設定する。
- ・ 大項目それぞれに対し、研究所の活動を可能な限り網羅した小項目を定め、それにチェックボックスをつける。
- ・ このように設計されたチェックリストを電子情報化して所内からチェックを書き込むことができるようにし、所員は一定の期間内にチェックリストにアクセスし、当該年度の活動を自己申告する。
- ・ 「基本要件」を満たしたか否かの判断は「研究業績」と「組織運営への参画と貢献」の2つの大項目に含まれる小項目のみを対象とし、10以上のチェックがつけられれば満たしたものと考える。
- ・ それ以外の3つの大項目に含まれた小項目へのチェックは、参考資料として活用する。

また、病気等による休職、長期研修、在外研究、長期にわたる海外での調査・研究などの特殊事情を抱える所員は、例外として個別に評価することも確認された。

2008年度には大学執行部から全学的に人事評価方式の再検討が求められたが、本研究所では自己評価委員会(当時)における審議の結果、従来の人事評価システムの内容ならびに運用には問題がなかったと判断した。その結果、2008年度以降2013年度まで、従来通りの方法で人事評価を行ってきた。しかしながら、2012年度に大学執行部が新たに全学的な人事評価実施規程案等の検討結果を示し、各部局においてそれぞれの特性を踏まえた評価方法の検討を行うように要請された。これを受けて、本研究所でも全学における枠組みを踏まえ、上記評価項目、評価システムの見直しを行うこととなった。

2013年度に入ると、新しい人事評価システムの導入に関する検討が全学的に本格化した。しかしながら、本研究所における人事評価の方針や、自己申告方式で評価を行う評価項目については、基本的に従前のそれらを基礎とすることで問題がないと判断されたため、大きな変更は加えられていない。とはいえ全学的には、自己申告以外に、部局長による総合評価についての基準がより明確化される方針が打ち出された。すなわち、教育業績、研究業績、大学運営組織への参画・貢献、社会貢献・国際貢献、その他、の5つの大項目について特に顕著な貢献があるかどうか、また、所員として、あるいは本学の教員として不適切な行為がなかったかどうか、所長が評価したうえで、学長が最終的に決定するという案が作成されたのである。このような新しい評価システム案は全学的な協議の中で位置づけられ、2014年度に細部の詰めを行った上で運用されているが、本研究所の所員については運用開始以来2018年度に至るまで、東京外国語大学の教員として不適切な行為があったと評価されたことは一度もない。

ちなみに2018年度には、「国立大学が教育研究力の強化・発展を目指し、社会からの要請を自覚しながら、自律的に人事制度を見直し、合理性・実効性・魅力ある人事給与制度の実現を図る」人事給与マネジメント改革のガイドラインを国が公表し、すべての国立大学法人に実施を求めるに至ったが、当該ガイドラインのなかでも「国立大学法人」であることの社会的意義や責務を十分に踏まえ、教員個々人の研究者・教育者としての業績を公正・適切に評価すること、また「大学や学部等のミッションに応じた教員の目標設定、研究分野や職位の特性を反映した公平・公正な評価を実施」することが求められているため、人事評価システムの適否は今後も全学的な検討課題となり続けることが予想される。

## 1-2.7 外部資金による研究活動

### 1-2.7.1 特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」

本研究所は言語学、文化人類学、地域研究の3つの分野で共同利用・共同研究拠点に認定されているが、本事業では特別経費により、これまで研究分野毎に進めてきた現代的諸問題の研究を有機的に関連させて一気に飛躍させ、その基盤の上に国内外の研究機関・現地コミュニティと連携した、問題解決のための研究体制を構築する。具体的には、3分野が緊急に解決すべきと考える問題が等しく「少数派／弱者の危機」という側面を持つことから、このテーマを始めとする異分野間連携の国内合同研究集会を実施して、研究の飛躍的發展を図る。そこで得られた研究成果は、3分野の基幹研究がそれぞれ国内外の研究機関や現地コミュニティと連携して実施する国際共同事業「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」「アジア・アフリカにおけるハザードに対する「在来知」の可能性の探究」に反映され、問題解決のための新たな国際連携研究体制の構築に資する一方、各事業の成果を異分野間の連携研究にフィードバックするサイクルを確立することで、持続的な現代諸問題研究の進化を図る。

2018年度はこの新たな特別経費プロジェクトの3年目にあたり、3分野がそれぞれ緊急に解決すべきと考える問題の国際共同研究に引き続き取り組む一方、各分野の取組に関する相互理解をさらに深めるべく、2018年12月13日に国内合同研究集会1回を実施した。活動の詳細については [II-3.3.1 特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」](#)を参照のこと。

### 1-2.7.2 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」

#### 年度計画

学内と連携機関(名古屋大学)から3名の若手研究者を海外連携機関(オーストラリア国立大学、ナンヤン工科大学 (NTU)、ロンドン大学 SOAS)に派遣するとともに、海外連携機関(オーストラリア国立大学、メルボルン大学、ナンヤン工科大学(NTU)、ロンドン大学 SOAS)から計7名の研究者を招へいし、以下の事業を推進する。

- (1) データアーカイブ
- (2) 言語コーパス構築
- (3) 言語の通時的変化・分岐に関する研究
- (4) 言語コーパスを用いた理論的研究

## 実施状況

派遣と招へいを年度計画通り行い、以下の事業活動を実現した。招へいた研究者が関わった研究会の情報については II-3.3.2 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数民族言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」を参照のこと。

### (1) データアーカイブ

一次データの公開: 以下の項目(4)で言及した SCOPIC プロジェクトの一環として収集した3言語の一次データ(会話・ナラティブ)をオーストラリアの言語アーカイブ PARADISEC に提出した。このデータは近日中に公開予定である。また、派遣を受けた倉部所員は昨年度自身が PARADISEC より行ったアーカイブについて研究発表を行った。

(2) 言語コーパス構築: 以下の項目(4)で言及した SCOPIC プロジェクトの一環として(1)で収集したデータに対して、社会認知に関する現象を示す情報に関するコーディングを行い、コーパスを構築した。

マレー語・インドネシア語のコーパス検索システム MALINDO CONC に対して NTU との共同研究により得られたマレー語・インドネシア語のデータを追加した。

(3) 言語の通時的変化に関する研究: チベット語・西夏語に関して SOAS との共同研究を行った。その成果として担当研究者荒川は『プリンストン大学所蔵西夏文妙法蓮華経』を刊行した。

バントゥ諸語の分岐と通時的変化に関する SOAS との共同研究に関しては、担当研究者品川の出張により共同研究を継続し、成果刊行物 SHINAGAWA Daisuke and and ABE Yuko, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu*. 2019.3.29 を AA 研より刊行した。

(4) 言語コーパスを用いた理論的研究: ANU の Nicholas Evans 教授と Danielle Barth 博士を招へいし、準パラレルコーパス SCOPIC に関するプロジェクトを開始した。

また、児倉所員はソウル大学への派遣を受け、ソウル大学の Juwon Kim 教授とともに自身が構築したシベ語の言語コーパスとソウル大学に蓄積のある満州語コーパスを用いて、満州語の通時的変化・分岐に関する研究を行い、成果を国際学会で発表した。

## I-2.7.3 科学研究費等によるその他の研究活動

本年度は、次の 66 件の科学研究費補助金による研究活動を実施した。

| 研究種目             | 金額(単位: 円) / 件数    |
|------------------|-------------------|
| 基盤研究 A (海外、一般含む) | 24,500,000 / 3 件  |
| 基盤研究 B (海外、一般含む) | 41,570,000 / 12 件 |
| 基盤研究 C           | 15,700,000 / 20 件 |
| 挑戦的研究(萌芽)        | 3,700,000 / 2 件   |
| 若手研究 A           | 1,000,000 / 1 件   |
| 若手研究 B           | 3,251,040 / 6 件   |
| 若手研究             | 4,555,187 / 5 件   |
| 研究活動スタート支援       | 800,000 / 1 件     |
| 研究成果公開促進費        | 9,900,000 / 6 件   |
| 新学術領域研究(研究領域提案型) | 11,200,000 / 1 件  |

|                         |                      |
|-------------------------|----------------------|
| 国際共同研究加速基金*             | 0 / 2 件              |
| 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)) | 4,400,000 / 2 件      |
| 特別研究員奨励費                | 5,400,000 / 5 件      |
|                         | 計 125,976,227 / 66 件 |

(国際共同研究加速基金\*は、初年度に全額が支払われるため本年度の支払いはない。)

#### I-2.7.4 寄付金

熊倉 和歌子

平和中島財団 国際学術研究助成

金額 997,000 円(直接経費 997,000 円;間接経費 0 円;一般管理費 0 円)

熊倉 和歌子

JFE21 世紀財団 アジア歴史研究助成

金額 714,046 円(直接経費 714,046 円;間接経費 0 円;一般管理費 0 円)

#### I-2.7.5 受託研究・受託事業

近藤 信彰

人間文化研究機構 【現代中東地域研究推進事業】人間の移動・交流によるネットワークの構築

金額 7,100,000 円(直接経費 7,100,000 円;間接経費 0 円;一般管理費 0 円)

品川 大輔

日本学術振興会【研究拠点形成事業(B. アジア・アフリカ学術基盤形成型)】アフリカにおける言語多様性とダイナミズムに迫るアフリカ諸語研究ネットワークの構築

金額 7,480,000 円(直接経費 6,800,000 円;間接経費 0 円;一般管理費 680,000 円)

外川 昌彦

日本学術振興会【二国間交流事業】ブッダガヤへの日本の巡礼者ーインドにおける仏教復興運動と日印交流

金額 196,000 円(直接経費 196,000 円;間接経費 0 円;一般管理費 0 円)

中山 俊秀

日本学術振興会【国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業】国際ネットワークを活かした危機言語・少数言語の調査研究を主体的にリードする研究者の育成

金額 32,140,000 円(直接経費 32,140,000 円;間接経費 0 円;一般管理費 0 円)

## I-3 組織運営

### I-3.1 センター

#### I-3.1.1 情報資源利用研究センター

情報資源利用に関する研究を推進するために、IRC プロジェクトを組織し、本研究所が所蔵・収集しているアジア・アフリカの言語データ、言語文化に関する多様な研究資料の電子化と公開や、アジア・アフリカの言語文化に関する研究用データベース、電子辞書、映像資料体などの構築・公開・共同利用を進めるための連携活動などを進めた。また、東京大学主催のデジタル・ヒューマニティーズにかかわる国際シンポジウムに参加し、他の研究拠点との交流を行った。

IRC 内の運営については、原則として毎月定例会議を開催し、予算執行状況の点検、IRC プロジェクトの進行状況の点検、事業改革や IRC ワークショップの開催計画などを主たる議題として討議を行なった。また、所内の情報体制の円滑化・充実のため、IRC の管理するサーバーの管理運営を行なった。また、IRC の活動と構築した情報資源を公開するためのウェブサイトの一部リニューアルを行なった。具体的にはメニューの英語化を進め、トップページからのアクセスのしやすさを考慮したデザインを考案し、情報資源の検索・閲覧・利用の利便性を向上させた。

所内の情報システムの安定的な運用及び IRC 関連研究事業の推進のために、情報処理に関する専門知識を有した2名の特任研究員を、事務管理関係業務のために1名の業務補佐を雇用する体制を継続した。

#### I-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター

2018年度は前年度同様、センター担当所員には臨地調査手法の洗練とフィールドサイエンスの構築、海外研究拠点の維持・運営多岐にわたるセンター業務を効率よく遂行した。また2017年度に引き続き、海外調査専門委員会のもとに設置した「フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会」(2010年度設置)、「フィールドネット運営委員会」(2011年度設置)に、学内外の委員を委嘱して、コロキウムの企画・運営の円滑な遂行と、相互に研究情報を交換するフィールドネットの機能を強化するための企画・運営を諮問した。

### I-3.2 外部委員会

#### I-3.2.1 運営委員会

本研究所には2009年度まで、所外の経験豊かな学識者による運営諮問委員会が設置されていた。運営

諮問委員会は、所長からの諮問に応えることで、全国共同利用研究所としての AA 研の研究や運営のあり方に関する基本的・長期的な方向性を示してきた。しかしながら、共同利用・共同研究拠点への移行にともない、2010 年度からは学外委員が過半数を占める運営委員会を設置することとなり、運営諮問委員会は 2009 年度をもって活動を終了した。

2018 年度の運営委員会は学外委員 9 名を含んでおり、その多くは言語学、民族学、地域研究、歴史学の研究者で、本研究所が共同利用・共同研究拠点として認定されている学問分野の研究者コミュニティを代表する形で、さまざまな意見を得ている。さらに社会的に開かれた研究所のあり方を検討するため、研究機構、研究所、センターなどの運営に携わっている研究者にも参画を依頼している。委員長は渡邊興亜名誉教授(総合研究大学院大学)、副委員長は西尾哲夫教授(人間文化機構国立民族学博物館)である。

2018 年度の運営委員会は 2 回開催された。第 1 回運営委員会(2018 年 11 月 26 日開催)では、AA 研の共同利用・共同研究拠点に係る中間評価結果における指摘事項等に対する対応について諮問し、研究者コミュニティの視点からの意見を得た。また、新たに創設される国際共同利用・共同研究拠点制度への応募結果、平成 31 年度概算要求内容、平成 31 年度共同利用・研究課題の採択結果について、などについて報告し、意見が交わされた。

第 2 回運営委員会(2019 年 3 月 11 日開催)においては、AA 研において課題であると考えられる事項を研究体制から運営体制まで幅広く提示し、意見を求めた。さらに、平成 31 年度概算要求の結果、新たな研究シーズを育てる試みとしての共同基礎研究制度の発足、次期執行部体制に関する報告がなされた。【2018 年度の委員氏名等は、資料編 II-2.2.1 運営委員会の項を参照】

### I-3.2.2 共同研究専門委員会

本研究所が共同利用・共同研究拠点に認定されたことにともない、2010 年度以降に発足した共同利用・共同研究課題はすべて、公募を経て新設の共同研究専門委員会が採否の審査を行うことになった。共同研究専門委員会の委員は、AA 研が共同利用・共同研究拠点として認定されている三分野(言語学・文化人類学・地域研究)の研究者コミュニティを代表する学外委員が過半数を占めている。2018 年度の共同利用・共同研究課題審査会は 10 月 27 日(土)に開催され、2019 年度発足分に応募のあった 10 件の共同利用・共同研究課題に関する審査が行われた。審査会には共同研究専門委員会を構成する学外および所内選出委員が出席し、各共同利用・共同研究課題の応募書類と代表者によるプレゼンテーションをもとに審査にあたった。審査会終了後は所長、副所長、情報資源利用研究センター長、フィールドサイエンス研究企画センター長も加わって共同研究専門委員会を開催し、応募のあった共同利用・共同研究課題に対する順位付けを行う一方、最終評価点を附して各課題代表者への審査結果通知を行うことを承認した。なお、共同利用・共同研究課題の最終的な採否は、共同研究専門委員会の付した順位に従って、企画運営委員会が決定するが、来年度予算の如何にかかわらず 11 月下旬には各課題代表者に審査結果を通知することが認められた。最終的には応募のあった 10 件のうち 10 件全てが採択された(うち 5 件が所外代表)。共同研究専門委員会は、年度末に提出された実績報告書をもとに、本年度実施された共同研究課題 27 件の書面審査・評価を行い、共同研究の質の向上に寄与している。

また、共同研究専門委員会は、共同利用・共同研究活動をより広い形態で展開するために 2017 年度から順次スタートした新制度-共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)および共同利用・共同研究課題(短期滞在型)-における応募課題の審査と成果の評価にもあたっている。「外国人客員型課題」は外国人

客員研究員が本研究所に一定期間滞在して所員とともに共同研究プロジェクトを推進するために 2017 年度から、「短期滞在型課題」は個人研究者が本研究所に短期滞在して共同研究を行うために 2018 年から制度化されたものである。2019 年度発足分については、共同利用・共同研究課題(短期滞在型)への応募はなかったものの、共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)には 7 件の応募があり、共同研究専門委員会の審査を経て、5 件が採択された。【委員氏名等は、資料編 II-2.2.2 共同研究専門委員会 の項を参照】

### I-3.2.3 研修専門委員会

2019 年度研修言語としてゾンカ語、ジンポー語(東京会場)の開講を決定した。なお、2019 年度研修言語として予定されていたブリヤート語(東京会場)は 2020 年度に開講することになった。この他、2020 年度研修言語としてベトナム語(大阪会場)、ムンダ語(東京会場)の開講も決定した。【委員氏名等は、資料編 II-2.2.3 研修専門委員会 の項を参照】

### I-3.2.4 海外調査専門委員会

1. 海外学術調査フォーラム(旧称: ~2004 年度「海外学術調査総括班研究連絡会」、~2010 年度「海外学術調査総括班フォーラム」)の企画・開催準備を案件として、海外調査専門委員会を 2018 年度中に 1 回(11 月)開催した。
2. 全体会議、地域別分科会および情報交換会からなる海外学術調査フォーラムを、6 月 16 日(土)に開催した。フォーラムでは、全国の科研・研究代表者をまじえ、海外学術調査の研究ネットワークをめぐる活発な議論の場を提供した。また海外学術調査フェスタという文理融合型の共同研究についてのポスター発表の場を設けた。
3. 上記、海外学術調査フォーラムのなかで、「フィールドサイエンスにおける生物・文化的多様性の危機と保護」と題して、下記海外学術調査ワークショップを開催した。  
講演 1: 鈴木 睦昭(国立遺伝学研究所 知財室室長)  
「フィールドサイエンスにおける生物多様性の保全と名古屋議定書への取り組み」  
講演 2: 安倍 雅史(国立文化財機構東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター)  
「中東における文化遺産の危機と保護に向けた国際的な動向」
4. 2018 年度後半以降は、次年度海外学術調査フォーラムの企画・開催に向けた準備作業に着手した。
5. フォーラム当日には、日本学術振興会研究事業部研究助成第一課長による AA 研所長、およびフォーラム関係者との意見交換の機会が設けられ、文部科学省で進められている科学研究費補助金事業の制度の見直しや、新たな国際共同研究強化(B)の創設への対応などについての協議が行われた。

海外学術調査フォーラム

平成 30 年度フォーラムプログラム(敬称略)

日時: 2018 年 6 月 16 日(土) 10:30-19:30

場所: AA 研

10:30-12:30 海外学術調査ワークショップ

会場: AA 研 3 階大会議室(303)

「フィールドサイエンスにおける生物・文化的多様性の危機と保護」

司会 外川昌彦(AA 研 海外学術調査フォーラム担当長)

挨拶 飯塚正人(AA 研所長)

講演 1 鈴木睦昭(国立遺伝学研究所知財室室長)

「フィールドサイエンスにおける生物多様性の保全と名古屋議定書への取り組み」

講演 2 安倍雅史(国立文化財機構東京文化財研究所/文化遺産国際協力センター)、「中東における文化遺産の危機と保護に向けた国際的な動向」

12:30-12:35 海外学術調査フェスタ展示内容の案内

外川昌彦(AA 研海外学術調査フォーラム担当長)

12:35-14:00 ----- 昼食・休憩 -----

12:35-17:30 AA 研 3 階にて海外学術調査フェスタ開催

(うち、コアタイム:13:10-13:50)

14:00-15:50 地域別分科会 会場: AA 研各会議室

I 大陸部東南アジア 会場: 3 階マルチメディアセミナー室(306)

座長:伊藤元己(東京大学大学院総合文化研究科)、小林知(京都大学東南アジア地域研究研究所)

情報提供講師:中口義次(石川県立大学生物資源環境学部)

タイトル「東南アジアで展開するフィールド型感染症研究:人・食・病原体」

書記:塩原朝子(AA 研)

II 島嶼部東南アジア・太平洋 会場: 3 階セミナー室(301)

座長:高樋さち子(秋田大学教育文化学部)、田所聖志(秋田大学大学院国際資源学研究所)

情報提供講師:安藤勝彦(元・製品評価技術基盤機構 バイオテクノロジーセンター 技監)

タイトル「アジアにおける微生物調査と収集微生物の輸入などの取扱について」

書記:吉田ゆか子(AA 研)

III 東アジア 会場: 3 階小会議室(302)

座長:窪田順平(人間文化研究機構)、蓮井和久(鹿児島大学)

情報提供講師:大塚健司(JETRO アジア経済研究所)

タイトル「中国の環境・地域社会の持続可能性をめぐる諸問題の協働解決に向けたフィールドワークの試み」

書記:倉部慶太(AA 研)

IV 南アジア・西アジア・中央アジア・北アフリカ 会場: 3 階マルチメディア会議室(304)

座長:黒木英充(AA 研)、太田信宏(AA 研)

情報提供講師:小西 公大(東京学芸大学)

タイトル「意志を紡ぐフィールド:インド・タール沙漠の周縁からみる開発の未来」

書記:小倉 智史(AA 研)

V 北米・中南米 会場: 7 階企画作業室(705)

座長:鈴木紀(国立民族学博物館)、渡辺己(AA 研)  
情報提供講師:米延仁志(鳴門教育大学大学院学校教育研究科)  
タイトル「中南米での湖沼・年輪調査ーグアテマラとペルーの事例から」  
書記:品川大輔(AA 研)

VI 極地・北ユーラシア・ヨーロッパ 会場:2 階コモンルーム(203)

座長:藤田耕史(名古屋大学大学院環境学研究科)  
三浦英樹(国立極地研究所)  
情報提供講師:斉藤和之(海洋研究開発機構)  
タイトル「ロシア・シベリアでの永久凍土調査」  
書記:山越康裕(AA 研)

VII サハラ以南アフリカ 会場:4 階研修室(405)

座長:曾我亨(弘前大学人文社会科学部)、河合香吏(AA 研)  
情報提供講師:安田章人(九州大学基幹教育院)  
タイトル「カメルーン北部におけるスポーツハンティング観光と地域社会の関係」  
書記:苅谷康太(AA 研)

16:00-17:00 全体会議 会場:AA 研 3 階大会議室(303 室)

司会: 外川昌彦(AA 研海外学術調査フォーラム担当長)  
挨拶: 近藤信彰(AA 研フィールドサイエンス研究企画センター長)  
質問取りまとめ:深澤秀夫(AA 研海外学術調査フォーラム担当)  
講師: 吉田正男((独)日本学術振興会研究事業部研究助成第一課長)  
「科学研究費の執行についての説明と質疑応答」

17:30-19:30 情報交換会 会場:生協 1 階ホールダイニング

司会 床呂郁哉(AA 研)

【委員氏名等は、資料編 II-2.2.4 海外調査専門委員会の項を参照】

### I-3.2.5 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会

1. フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会を 2018 年度中に 1 回(9 月 21 日(金))実施し、2018 年度及び 2019 年度のフィールドサイエンス・コロキウム事業の運営に関わる企画・策定作業等を実施した。
2. 同運営委員会と同日開催でフィールドサイエンス・コロキウムの連続ワークショップを AA 研基幹研究人類学班「人類学におけるミクローマクロ系の連関」との共催により下記のように 2 回実施した。
  - 1) 『環境変化とインダス文明』プロジェクトから」日時: 2018 年 9 月 21 日(金)開催
  - 2) 『地域研究からみた人道支援』をめぐって(第 2 回)」日時:2018 年 11 月 18 日(日)開催

【委員氏名等は、資料編 II-2.2.5 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会の項を参照】

### I-3.2.6 フィールドネット運営委員会

1. フィールドネット運営委員会を 1 回(2019 年 3 月 22 日(金))開催し、フィールドネット事業の 2018 年度の活動を総括し、2019 年度以降の活動方針を策定した。
2. 公募企画「フィールドネット・ラウンジ」1 件を下記の通り開催した。
  - ・ワークショップ「西アフリカ・イスラーム研究の新展開」日時 2019 年 1 月 20 日(土)
  - ・ワークショップ「共同研究のすすめ:ブラジル地域研究における Cross-region×Collaboration の実践を通じて」日時:2019 年 2 月 16 日(土)開催
3. フィールドネットワークショップ「地理情報から読み解く歴史:イスラーム史における GIS の活用」を開催した。日時:2019 年 3 月 21 日(木)

【委員氏名等は、[資料編 II-2.2.6 フィールドネット運営委員会](#)の項を参照】

### I-3.2.7 編集専門委員会

2018 年 12 月 10 日(月曜日)に編集専門委員会を開催した。『アジア・アフリカ言語文化研究』の投稿論文のうち「論文」に、「執筆要領」で定める書式で A4 判 30 枚までという枚数制限を設けることが決定された。なお 2018 年度においては予定どおり 96・97 号の 2 冊を発行した。

1. 2018 年 9 月 30 日発行『アジア・アフリカ言語文化研究』96 号では、国内外より総数 21 件(うち論文 19 件、資料 2 件、国内 13 件、海外 8 件)の投稿があり、審査の結果、論文 4 件、資料 1 件を掲載した。
2. 2019 年 3 月 31 日発行『アジア・アフリカ言語文化研究』97 号では、国内外より総数 15 件(うち論文 13 件、資料 2 件、国内 8 件、海外 7 件)の投稿があり、審査の結果、論文 2 件、資料 1 件を掲載した。

【委員氏名等は、[資料編 II-2.2.7 編集専門委員会](#)の項を参照】

### I-3.2.8 国際諮問委員会

国際諮問委員会は、国際的な視点から共同利用・共同研究に関し、所長が必要と認める事項について所長の諮問に応じることを目的に、共同利用・共同研究拠点への移行に伴って 2010 年度より設置された。本委員会は本研究所の外国人研究員と所長・所員(国際交流担当)とで構成される。2018 年度も、必要に応じて所長が委員との個別懇談を行い、研究所の研究等について意見交換を行ったものの、緊急に諮問を必要とするような案件はなかったことから、本委員会は開催されなかった。【委員氏名等は、[資料編 II-2.2.8 国際諮問委員会](#)の項を参照】

### I-3.2.9 海外拠点専門委員会

2019 年 3 月 29 日(金)に第 1 回専門委員会を開催した。JaCMES, KKLO 両拠点の 2018 年度の活動報告、2019 年度活動計画を報告するとともに、現地情勢の変化と拠点の役割・機能の位置づけなどについて

て専門委員から助言・意見を受けた。【委員氏名等は、資料編 II-2.2.9 海外拠点専門委員会の項を参照】

### I-3.2.10 中東研究日本センター諮問委員会

2019年3月4日(月)に第1回中東研究日本センター(JaCMES)国際諮問委員会を JaCMES にて在レバノン3委員と黒木教授、錦田センター長との計5人で開催した。【委員氏名等は、資料編 II-2.2.10 中東研究日本センター諮問委員会の項を参照】

## I-3.3 内部委員会等

### I-3.3.1 企画運営委員会

企画運営委員会は原則として月に一度、教授会に先立つ1週間前に開催され、教授会に提出される諸々の案件に関し、所内規程に基づき原案を審議するほか、必要に応じて原案作成を行なう。委員会の構成メンバーは言語学、歴史学、民族学の3分野からの選出委員各1名、情報資源利用研究センター長、フィールドサイエンス研究企画センター長、研究戦略策定委員会委員長、副所長および所長である。委員会の議長は所長が務める。

2018年度も従来と同様、適宜委員会のメーリングリストを通じた審議を行ったが、企画運営委員会のこうした審議は、教授会における論点の明確化と整理、さらには会議時間の短縮に大いに貢献している。また、2009年度からは3分野からの選出委員3名を共同利用委員会・共同研究専門委員会(2010年度以降は共同研究専門委員会)の所内委員としている。さらに2010年度からは同じく選出委員3名を運営委員会の所内委員に充て、企画運営委員会による研究所の重要事業への関与を強化している。こうした体制のもと、2018年度の企画運営委員会も本研究所の共同利用・共同研究拠点としての機能強化に向けて積極的に取り組んだ。

### I-3.3.2 研究戦略策定委員会

自己評価委員会と将来計画検討委員会が改組され、2015年度より新たに研究戦略策定委員会が発足した。

#### 1) 年次計画の策定

2019年度計画(素案)の策定を行った。

#### 2) 年次報告書の作成

年度初めに、2センター、各共同研究課題などが過年度の実績報告を提出し、共同研究については外部委員会の評価を受け、所内業務等については担当責任者が達成度を自己申告した内容に基づき、過年度の年次報告書を作成した。

### 3) 経年教授業績の外部評価

2018年度は、経年教授業績の外部評価に該当する教授がいなかったため、これを実施しなかった。

### 4) 東京外国語大学点検・評価室への所員の研究・教育業績の報告

所員に大学情報データベースへの個人研究事業等の入力を要請し、年次報告書作成のためのデータを収集するとともに、全学の教育研究活動に関するデータ収集に協力した。また全学点検・評価室の活動には太田信宏所員が室員として参加した。

### 5) 拡大研究戦略策定委員会の開催

共同利用・共同研究拠点に認定された 2010 年度以降の研究所の活動を長期的な視点で検証し、問題点を抽出する一方、第四期中期目標期間(2022年度～2027年度)を見据えて、今後 10 年の将来構想を描くため、広く所員の参加を求めて、4月19日と7月12日、及び11月15日の3回、拡大研究戦略策定委員会を開催した。なお、9月には、所内の各事業・業務見直しについて、所内でアンケートを実施し、その結果、今後の新規人事採用や基幹研究の交代も視野に入れつつ、新たな研究プロジェクト「共同基礎研究」を発足させた。

## I-3.3.3 文献資料(図書)担当

2018年度の事業計画は以下のとおりだった。

1. 雑誌類の購入・整備(継続・新規)を行う。
2. 研究所として揃えるべき基本資料の充実をはかる。
3. 雑誌の整理作業を継続する。
4. カビ対策を含む、図書の適正な維持・管理を行う。
5. 修理製本対象文献の修理を行う。
6. マイクロフィルムの劣化対策を行う。

2018年度に下記の事業を行った。

1. 雑誌類について、従来からの継続分の購入・整備を行った。
2. 貴重書、辞典類、参考図書を中心に基本資料を拡充した。
3. 雑誌の配架整理(製本を含む)を行った。
4. 除湿器の稼働、除湿剤の交換等により図書を適正に維持・管理した。
5. 修理製本対象文献の修理を行った。
6. マイクロ室所蔵マイクロフィルムを適宜チェックした。
7. 年度当初の予定には無かったが、2018年度東京外国語大学附属図書館第19回特別展示「台湾フィールド言語学：浅井恵倫の調査資料から」に、資料調査・展示品選定などで協力した。

## I-3.3.4 国際交流担当

1. 2018年度着任の外国人研究員の受入れにあたりガイダンス等を行った。
2. 2019年度(2019年9月以降)着任予定の共同利用・共同研究課題(外国人客員研究型の募集を行

った。

3. AA 研フォーラムを企画・開催した。詳細は [I-4.4.1 AA 研フォーラムの実施](#)の項を参照。

### I-3.3.5 出版担当

#### 2018 年度当初の活動計画

1. 下記の年 3 回、共同研究利用・共同研究課題、ユニット研究、外国人研究員招請に基づく研究成果を募集し、紙媒体として印刷・刊行すると共に、電子的に複製・保存する。
  - ・ 2018 年 4 月末日：第 1 回原稿募集締め切り
  - ・ 2018 年 7 月末日：第 2 回原稿募集締め切り
  - ・ 2018 年 10 月末日：第 3 回原稿募集締め切り
2. AA 研の出版物リストの更新と電子的公開の作業を進める。

#### 2018 年度の活動実績

1. 刊行物一覧については、[資料編 II-4.4.1 出版](#)の項を参照のこと。  
資料編 II-4.4.1 にあるように、共同研究利用・共同研究課題、外国人研究員招請に基づく研究成果等、24 点を刊行した。また既刊行物を電子的に複製し、保存・公開を進めた。  
「AA 研 出版物目録 2019」の刊行にあたって  
「AA 研 出版物目録」の紙媒体は「AA 研要覧 2019」に挿入刊行するとともに、下記 URL にて公開した。  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/documents/publ/ILCAApubl2019.pdf>
2. 既刊行物の電子的公開について  
既に刊行された共同研究成果物等について、著作権者の許諾を得たものを、以下の URL にて公開した。<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/4>
3. 2019 年度出版刊行ルールについて  
AA 研の予算による出版物に関する刊行手続は、「出版刊行ルール」(2016 年度作成)に従っている。その主な内容は以下の通りである。
  - ・ 基礎語彙集は電子出版を原則とする。
  - ・ 基礎語彙集は一般公募とし、応募にあたっては、在職中の任期つきでない所員を通じて行う。
  - ・ 応募された原稿は二名以上の査読者によって査読し、出版の可否を判断する。
  - ・ 原稿は、東京外国語大学図書館成果公開コレクション(リポジトリ)を通して電子的に公開する。同時に紙媒体による出版を希望する場合、装丁は原則としてペーパーバックとする。
  - ・ 共同利用・共同研究課題出版物の刊行については、応募資格者を原則として常勤所員および任期つき所員としたが、離任した者も可能とする。
4. 電子出版について  
既に本学リポジトリを通じて、新規刊行物および一部の既刊行物の電子的公開を行っている。2016 年度からは言語研修のテキストも電子出版として公開している。

<https://publication.aa-ken.jp/>

電子書籍は、従来の出版と同様の水準の書籍としての品質を維持し、独自の ISBN の付与を行う。

公開は当面 PDF 形式に限り、検索やテキストのコピーは自由な形式で公開している。AA 研の出版物では多言語が用いられるものも多いため、Unicode に準拠した検索を最大限可能にするなど、ファイルの編集に工夫を重ねている。

なお、本学学術成果に関するオープンアクセス宣言(2016 年 2 月)に従い、従来の「出版物の電子的複製・公衆送信に関する許諾」に代わり、クリエイティブ・コモンズの CC-BY ライセンスを原則付与することとしている。なお、電子公開と著作権許諾に関する理解は、現状では国や地域で異なっており、公開された成果が不法にコピーされたりして悪用されることもありうる。このため、CC-BY ライセンスの許諾範囲については、著作権者の意向を尊重して付与している。

### I-3.3.6 基礎データ担当

2018 年度の基礎データ担当の活動は下記の通りである。

#### 要覧

- ・2018 年度の要覧(和英対訳版)を編集、刊行した。
- ・要覧付録の関連資料について、日本語版及び英語版を編集、刊行した。
- ・要覧付属の出版物目録について、2018 年度刊行分を中心に校正を行った。

#### ウェブサイト

- ・2018 年度要覧の内容をウェブサイト(和文及び英文)にフィードバックする作業を行った。
- ・ウェブサイトの更新に際して、正確さを期すためにテストページを活用した。

#### 年次報告書の編集

- ・2017 年度年次報告書の作成に際して協力を行った。

### I-3.3.7 広報企画担当

2018 年度も昨年度同様、広報活動のうち『FIELDPLUS』の企画・編集および企画展実施を広報企画担当が行った。

2018 年度の事業の詳細は下記の通りである。

#### 『FIELDPLUS』

AA 研の雑誌『FIELDPLUS』の企画・編集を行った。この雑誌は、言語学、人類学、歴史学・地域研究を専門とする AA 研の所員や特任研究員、研究機関研究員、共同利用・共同研究課題をともに運営する共同研究員をはじめ、各アカデミズムで活躍する新しい発想をもった研究者などを執筆陣に迎え、研究の最前線を一般向けにわかりやすく伝えていこうという趣旨の雑誌である。所員 7 名を中心に構成される編集部が企画・編集を担当し、プロの編集者とグラフィックデザイナーと協力して誌面作りを行っている。2018 年度は第 20 号(巻頭特集「アジアの越境する子どもたち」、第 21 号(巻頭特集「似ている言語」の多様性:アルタイプ言語の諸相))を制作した。

また、第 20 号と第 21 号の巻頭特集にそれぞれ関連して、責任編集者らによるトークイベントを以下のよう

に実施した。

FIELDPLUS café 「アジアの越境する子どもたち」(第 20 号)

出演: 石井香代子(立教大学)

進行: 高松洋一(AA 研所員)

日時: 2018 年 7 月 28 日(土)午後 2 時～3 時半

会場: ブックハウスカフェ(東京都千代田区神田神保町 2 丁目 5 北沢ビル 1 階)

FIELDPLUS café 「「似ている言語」の多様性:アルタイ型言語の諸相」(第 21 号)

出演: 山越康裕(AA 研所員)、風間伸次郎(東京外国語大学)

進行: 高松洋一(AA 研所員)

日時: 2019 年 1 月 25 日(金)午後 6 時～8 時

会場: 東京外国語大学アゴラ・グローバル カフェスペース

### 企画展

AA 研において行われているアジア・アフリカの言語と文化に関する研究の成果を広く一般に公開するために、以下の企画展を実施した。

企画展「祈りにつながるイスラーム:エチオピア西部の信仰とその歴史」

会期: 2018 年 4 月 23 日(月)～2018 年 5 月 25 日(金)(午後 0 時半より午後 4 時半まで。土日祝日は休場)

会場: AA 研 1 階資料展示室

協力: AA 研共同利用・共同研究課題「エチオピア・ジンマ王国伝来イスラーム祈祷集研究」

共催: 東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター、科学研究費基盤研究(B)「エチオピアにおけるイスラーム化の史的検証:アラビア文字資料の収集・分析を通して」(研究代表者:石原美奈子(南山大学)、課題番号 17H04528)

### I-3.3.8 地域研究コンソーシアム担当

2018 年度の事業計画は以下のとおりだった。

1. 地域研究コンソーシアム(JCAS)の運営委員会(年 2 回開催)に参加し、適宜 JCAS の運営に協力する。

2. JCAS 年次集会に参加する。

2018 年度に下記の事業を行った。

1. 2018 年 4 月 27 日および 11 月 2 日に開催された地域研究コンソーシアムの運営委員会に参加し、運営に協力した。

2. 2018 年 11 月 1 日～2 日に大阪大学吹田キャンパスにおいて開催された JCAS 年次集会に参加した。

## Ⅰ-4 研究者コミュニティと一般社会に開かれたプラットフォームの構築

### Ⅰ-4.1 若手研究者養成プログラム

#### Ⅰ-4.1.1 言語研修の実施

【実施の詳細については、資料編 Ⅱ-4.1.1 言語研修の実施状況、Ⅱ-4.3.4 研究未開発言語文化の調査事業の項をそれぞれ参照】

言語研修は 1962 年から実施されてきた短期集中プログラムである。これまで実施した言語はのべ 137 言語、修了者数はのべ 1,259 人である。当研究所以外では扱うことのできない希少言語の運用能力・知識を身につける機会を提供することは、国内外に開かれた共同利用・共同研究拠点として行う研究者養成事業として意義あるものといえる。2018 年度は、ヨルバ語、フィールドメソッド メエ語(エカリ語)(ともに東京会場)、土族語(大阪会場)の研修を開講した。

研修担当では、過去の研修教材のウェブ上での公開も進めている。

#### Ⅰ-4.1.2 フィールド言語学ワークショップ

フィールド言語学ワークショップは、研究の進んでいない言語のドキュメンテーションと記述に必要なスキルを主として実習形式で学ぶ機会を提供するものである。次世代研究者育成の一環として、主に大学院生・ポスドクなどの若手研究者を対象に開催しており、日本の大学では、通常教えられていない内容を扱っているという点で、AA 研の重要な事業の一つであるといえる。

以下のワークショップを提供している。

1. 文法研究ワークショップ: フィールド調査で得る言語データに現れる、さまざまな文法事象に関して若手研究者が研究発表を行い議論を行うワークショップである。
2. テクニカル・ワークショップ: 若手研究者が、フィールドで得た言語データの管理や加工に関するスキルを実習形式で学ぶワークショップである。
3. 言語フィールド調査ワークショップ@宮古島: 言語ドキュメンテーション研究に関心のある若手研究者を対象に沖縄県宮古島市で開催する実地研修である。

#### Ⅰ-4.1.3 中東☆イスラーム関連セミナー

2005 年度から始まった中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として、AA 研が推進してきた事業を、2010 年度より基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」が担うに当たり、「中東」と

「イスラーム」とをより明確に区別すべく、「中東☆イスラーム研究セミナー」「同教育セミナー」と改称した。中東もしくはイスラーム世界に知的・学問的関心を持ち、調査・研究を進めようとしている若手研究者(大学院生以上)を対象に、この研究領域に関する最新の学問的情報を提供して知識の幅を広げ、問題意識にあふれた研究発表を通して研究会などにおけるプレゼンテーションやディスカッションのスキルを向上させることを目的としている。人文・社会科学分野が中心になるが、受講者の専門分野は特に限定していない。

中東☆イスラーム教育セミナーは大学院生を対象に、AA 研スタッフと招へい講師による講義、そして希望者による研究発表から構成されている。学部段階からこの研究領域に関心を持ち続けてきた院生はもとより、専門分野の基礎はできているが中東やイスラームにそれほど深い知識を持たない院生も受け入れ、中東・イスラーム世界とさまざまな専門分野の基礎的な知識の提供、そして受講者の間の討論を通じた意見・知識の交換の場を作ることを目指している。年に1回の開催は従来通りである。

中東☆イスラーム研究セミナーは、それよりも一段高度なレベルの研究者、すなわち大学院博士課程後期(博士課程)および博士論文の準備をしている若手研究者を対象にしている。ここでは講義は行わず、共同研究プロジェクト型の研究会形式を採用し、研究発表とそれに基づく質疑応答・討論に十分な時間を確保した機会を提供する。これを通して博士論文執筆のヒントを得たり、異なる研究分野や地域の研究者との意見交換から知識の幅を拡充したりすることが期待される。教育セミナーと同様、年に1回の開催である。

2018年度においては、研究セミナーが12月22～23日に実施され、2名の受講生が参加した。教育セミナーは9月13～16日に実施され、6名の教員の報告と、16名の受講者のうち6名の発表がなされた。詳細に関しては基幹研究「中東・イスラーム圏」のウェブサイトを参照していただきたい。そこには、受講生の感想・評価も掲載されている。なお、2006年度より東京外国語大学大学院在学中の院生を対象に両セミナーを単位認定可能な科目として開放しているが、本年度は教育セミナー受講生の4名がこれに該当した。また、教育セミナーにおいては試行的に受講生のうち希望者4名によるポスター発表(掲示のみ)が実施された。

これら「研究セミナー」「教育セミナー」とは別に、オスマン帝国史研究を専門とする若手研究者を中心とした研究者コミュニティに対する還元事業の一環として、2008年度以来毎年1回2日間にわたってオスマン文書の解読・解説を行う実習型の「オスマン文書セミナー」を開催している。毎回高松洋一教授が中心となって組織しているが、2018年度は2019年1月12・13日に開催し、のべ35名の参加を得た。【日程や詳細については資料編 II-4.1.3 中東☆イスラーム関連セミナー実施状況の項を参照】

#### I-4.1.4 文化／社会人類学研究セミナー

2010年度から始まった基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」における若手研究者育成事業として新たに文化／社会人類学研究セミナーを企画し、2011年度から実施してきた。文化人類学／社会人類学／生態人類学を専門とする博士後期課程大学院生を主たる対象とし、博士論文を執筆するために必要な本研究領域に関する最新の学問的情報を提供して知識の幅を広げると共に、所属大学院とは異なる発表の場を提供することにより論文構想を具体化させることを目的としている。また、本研究セミナーは、受講生が同じレベルの若手研究者の発表を聴き、第三のコメンテーターの役割を果たすことによる自らの論文執筆および研究の活性化、さらには所属大学院をこえた若手研究者同士の交流の機会の提供をも目指している。2015年度からは、日本文化人類学会の「次世代育成セミナー」との共催で実施している。2018年度は11月17日に開催された。日本文化人類学会の本セミナー担当による挨拶の後、2つの会場に分かれた若手学会員6名に対し、それぞれ各1名によるコメントとフロアからの質疑応答が行われた。その後、1つの会場

に参集して所員および日本文化人類学会員による講評が行われた。つづいて、特別企画として「(日本文化人類学会誌)『文化人類学』および *Japanese Review of Cultural Anthropology* の編集委員に聞く」を行い、若手研究者に役立つノウハウや情報の共有と意見交換を行うという目的の下、執筆や投稿、査読に関する情報提供と質疑応答が行われた。最後に、所員による閉会の挨拶をもって締めくくられた。参加者の合計は 59 名(うち外国人 12 名)であり、全プログラムを通してフロアからの質疑も活発に行われた。

#### I-4.1.5 大学院教育の現在

2008 年度までは原則として東京外国語大学大学院の 1 研究科 1 専攻体制のもと、博士後期課程にのみ AA 研コースが学内措置として認められ、AA 研所員はそのコース内で大学院教育に関与してきた。しかしながら、2009 年度の東京外国語大学大学院重点化により、総合国際学研究科が発足し、2 専攻(言語文化専攻・国際社会専攻)体制へと移行すると同時に、大学院博士後期課程を兼担する AA 研所員はどちらかの専攻に所属することとなった。

この改組にともない、大学院博士後期課程を兼担する AA 研所員は、院生を指導するほか、総合国際学研究科教授会に出席し、教務の一部に参加することとなったが、博士後期課程の在学者あるいは志願者で、AA 研所員を主指導教員に希望する者はきわめて少ないのが現状である。AA 研所員の大学院教育に対する関与のあり方としては、個別の院生指導を行うだけでなく、本学大学院の教育の在り方と併せて、AA 研がこれまで実施してきた下記の若手研究者育成事業の総体として考えてきた。

- ・ 言語研修
- ・ フィールド言語学ワークショップ: 研修事業の一環として基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」が主催する文法研究ワークショップ、テクニカル・ワークショップ、言語フィールド調査ワークショップ@宮古島
- ・ 中東・イスラーム関連セミナー: 中東☆イスラーム研究セミナー、中東☆イスラーム教育セミナー、ペイルート若手研究者報告会、オスマン文書セミナーなど
- ・ 文化/社会人類学研究セミナー

#### I-4.1.6 研究機関研究員／特任研究員および日本学術振興会特別研究員

研究機関研究員(旧称: 非常勤研究員)および特任研究員は、各自の研究テーマに沿った個人研究を行うとともに、その専門分野に応じて、異なる所内組織の共同研究活動に配属され参加している。これらは AA 研の若手研究者養成事業の重要な一部であり、両センターと文部科学省特別経費による「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」のほか、広報担当にも配置されてきた。2018 年度は、特任助教 1 名(人間文化研究機構・総合人間文化研究推進センターとのクロスアポイントメント)、特任研究員 5 名(うち1名は人間文化研究機構・国立国語研究所とのクロスアポイントメント)、研究機関研究員 3 名の体制により、所内組織の多様な共同研究活動に参画させた。

また、2018 年度には日本学術振興会特別研究員 5 名を受け入れた。【研究機関研究員、特任研究員、日本学術振興会特別研究員の業績については [I-2.6.2 所員の研究業績一覧の研究機関研究員／特任研究員および日本学術振興会特別研究員](#)の項を参照】

## I-4.2 国内連携研究活動

### I-4.2.1 地域研究コンソーシアム

地域研究コンソーシアム(JCAS)は、世界諸地域の研究に関わる研究組織、教育組織、学会、さらには地域研究と密接に関わる民間組織などから成る、新しい型の組織連携で、多くの大学や研究機関などに散らばっていた地域研究の組織や研究者の団体をつなぎ、組織の枠を超えた情報交換や研究活動を進めるため、2004年4月に発足した。AA研は北海道大学スラブ研究センター(当時)、京都大学東南アジア研究所(当時)、国立民族学博物館地域研究企画交流センター(当時)とともに拠点組織として地域研究コンソーシアムの設立に貢献しただけでなく、2018年10月現在102の組織が加盟するに至った同コンソーシアムの幹事組織の一つであり、飯塚所長が理事を、石川・西井の両所員が運営委員を務めて、組織運営の中心的役割を担っている。地域研究コンソーシアムでは運営体制・活動内容の見直しを行い、2018年度から事務局は幹事組織の2年ごとの輪番制となり、活動を年次集会の開催・JCAS賞の審査および授与・オンラインジャーナル『地域研究』の刊行の3事業に絞ることになった。2018年度は京都大学東南アジア地域研究研究所が事務局を担当し、2018年11月1日～2日に大阪大学で年次集会を開催してJCAS賞を授与し、『地域研究』第19巻第1号を刊行した。また理事会2回、運営委員会3回を開催した。

### I-4.2.2 国内研究者受け入れ(フェロー等)

共同利用・共同研究拠点としてのAA研は、フェロー制度をいっそう充実させて国内外の研究者に開かれた研究の場を提供すると共に、研究プロジェクトの推進を図る方針である。

2018年度は、下記の国内研究者をフェローとして16名、ジュニア・フェローとして16名受け入れた。

【詳細・業績は資料編 II-4.2.2 国内研究者の受け入れ(フェロー等)の項を参照】

#### フェロー

梅川 通久(うめかわ みちひさ)

研究主題: 定量的手法による東南アジア大陸部における社会的多階層構造の総合的分析法の確立

研究期間: 2015.9.1-2018.8.31

受入教員: 中山 俊秀

岡崎 彰(おかざき あきら)

研究主題: 夢・笑い・分身・情動・想像に関する社会人類学的研究

研究期間: 2015.4.1-2021.3.31

受入教員: 西井 涼子

奥田 統己(おくだ おさみ)

研究主題: アイヌ語資料のアーカイブス化準備およびアイヌ語の記述的研究

研究期間: 2016.4.1-2019.3.31

受入教員:山越 康裕

木俣 美樹男(きまた みきお)

研究主題:信仰環境とエコロジズムに関する比較研究

研究期間:2014.4.1-2020.3.31

受入教員:太田 信宏

古谷 伸子(こや のぶこ)

研究主題:タイにおける民間治療の社会的役割と潜在力に関する人類学的研究

研究期間:2014.5.1-2020.4.30

受入教員:西井 涼子

清水 昭俊(しみず あきとし)

研究主題:日本における人類学の歴史的展開:時代状況との応答

研究期間:2015.11.5-2021.11.4

受入教員:西井 涼子

新谷 忠彦(しんたに ただひこ)

研究主題:ビルマの危機言語に関する緊急調査研究

研究期間:2016.4.1-2020.3.31

受入教員:澤田 英夫

福島 康博(ふくしま やすひろ)

研究主題:イスラームに基づく商品・サービスの規格化と地域・産業間比較研究

研究期間:2014.5.1-2020.4.30

受入教員:床呂 郁哉

細谷 幸子(ほそや さちこ)

研究主題:イラン・イスラーム共和国における選択的人工妊娠中絶:障害者の生きる権利をめぐる

研究期間:2016.4.1-2019.3.31

受入教員:飯塚 正人

中見 立夫(なかみ たつお)

研究主題:清朝およびロシア帝国による内陸アジアにおける人口調査事業の研究

研究期間:2017.4.1-2020.3.31

受入教員:野田 仁

宮崎 恒二(みやざき こうじ)

研究主題:Javanese Recognition of Time and Space: An Analysis of Calendar and Myth

研究期間:2017.4.1-2020.3.31

受入教員:床呂 郁哉

芝野 耕司(しばの こうじ)

研究主題:大規模字幕コーパスによる日本語話し言葉研究と深層学習研究とを基盤とする革新的日本語  
eラーニングシステムの研究開発

研究期間:2018.4.1-2020.3.31

受入教員:黒木 英充

佐藤 公彦(さとう きみひこ)

研究主題:近現代の内モンゴルの民族主義と日本:徳王の生涯とその漢族に対する自治運動を中心に

研究期間:2018.4.1-2021.3.31

受入教員:栗原 浩英

林 徹(はやし とおる)

研究主題:ダイクシス表現における社会・文化的コンテクスト

研究期間:2018.4.1-2021.3.31

受入教員:児倉 徳和

海老原 志穂(えびはら しほ)

研究主題:現代方言と文献を用いたチベット語の通時的研究

研究期間:2018.4.1-2021.3.31

受入教員:星 泉

中村 恭子(なかむら きょうこ)

研究主題:芸術に基盤を求める創造性志向型意識理論の構築

研究期間:2018.10.1-2021.9.30

受入教員:西井 涼子

#### ジュニア・フェロー

池田 昭光(いけだ あきみつ)

研究主題:レバノン高齢社会の人類学的研究:親族・国外移民・家事労働者

研究期間:2016.4.1-2019.3.31

受入教員:黒木 英充

勝畑 冬実(かつはた ふゆみ)

研究主題:エジプト映画におけるイスラーム表象の変遷

研究期間:2014.4.1-2019.3.31

受入教員:飯塚 正人

小池 まり子(こいけ まりこ)

研究主題:現代バリの社会・宗教改革運動:バリヒンドゥー教徒の親族集団組織を事例として

研究期間:2016.4.1-2019.3.31

受入教員:西井 涼子

四條 真也(しじょう まさや)

研究主題: 島嶼地域における伝統の再解釈: 米国制度下のハワイにおける伝統的養取慣行に関する文化人類学的研究

研究期間: 2016.4.1-2019.3.31

受入教員: 深澤 秀夫

澁谷 俊樹(しぶや としき)

研究主題:ベンガルの市場の生活世界をめぐる歴史人類学的研究

研究期間:2016.4.1-2019.3.31

受入教員:外川 昌彦

東風谷 太一(こちや たいち)

研究主題:初期工業化時代ドイツの都市におけるビールと民衆の文化史的考察

研究期間:2017.4.1-2019.3.31

受入教員:佐久間 寛

生駒 美樹(いこま みき)

研究主題:負債の民族誌:茶をめぐる生産者間の関係

研究期間:2017.4.1-2019.3.31

受入教員:西井 涼子

西川 和孝(にしかわ かずたか)

研究主題: 西南中国における漢族移民と経済活動の歴史について

研究期間: 2017.4.1-2019.3.31

受入教員:澤田 英夫

小森 真樹(こもり まさき)

研究主題:現代アメリカ合衆国における科学館の再定義:博物館展覧会の利用実態の分析から

研究期間:2017.4.1-2019.3.31

受入教員:椎野 若菜

岩本 佳子(いわもと けいこ)

研究主題:公文書史料によるオスマン朝の遊牧民政策の研究

研究期間:2018.4.1-2019.3.31

受入教員:高松 洋一

後藤 健志(ごとう たけし)

研究主題:財産所有をめぐる政治・経済／生態に関する人類学的研究

研究期間:2018.4.1-2019.3.31

受入教員:吉田 ゆか子

合地 幸子(ごうち さちこ)

研究主題: インドネシア・ジャワにおける高齢者ケアをめぐる家族・親族関係に関する研究

研究期間: 2018.4.1-2019.3.31

受入教員: 西井 涼子

松井(金子) 生子(まつい(かねこ) なるこ)

研究主題: カンボジアにおける結婚制度と人的つながりの形成:ベトナム人とクメール人の関係を中心に

研究期間: 2018.4.1-2019.3.31

受入教員: 椎野 若菜

太田(塚田) 絵里奈(おおた(つかだ) えりな)

研究主題:前近代アラブ社会における文民エリートと生存戦略:マムルーク朝末期官僚ザイン・アッ=ディーン・イブン・ムズヒルを例に

研究期間:2018.4.1-2019.3.31

受入教員:黒木 英充

武田 祥英(たけだ よしひで)

研究主題: 英国の中東委任統治政策再検討:19世紀以後の中東政策との連続性の観点から

研究期間: 2018.4.1-2019.3.31

受入教員: 錦田 愛子

平田 晶子(ひらた あきこ)

研究主題:境域における地域芸能の所有と共有をめぐる法の人類学的研究:タイ・ラオスの事例

研究期間:2018.4.1-2019.3.31

受入教員:吉田 ゆか子

### I-4.2.3 海外調査専門委員会の活動

I-3.2.4 海外調査専門委員会の項を参照

## I-4.2.4 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会の活動

I-3.2.5 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会の項を参照

## I-4.2.5 フィールドネット運営委員会の活動

I-3.2.6 フィールドネット運営委員会の項を参照

## I-4.2.6 四大学連合文化講演会

2018年11月22日(金)、第13回四大学連合文化講演会が「環境・社会・人間における『安全・安心』を探るー安全で安心の出来る社会～学術研究の最前線をやさしく解説する～」をテーマに、一橋講堂学術総合センターにて開催された。今回世話役として同講演会の組織にあたったのは東京工業大学科学技術創成研究院化学生命科学研究所である。

AA研からは「中東における宗派紛争:歴史と現在」と題して近藤信彰所員が講演を行った。本年度も昨年同様、日本経済新聞を通して広報を行い、260名(申込数481)の聴衆を集めて、好評のうちに幕を閉じた。講演会を記録した動画は四大学連合のホームページ(<http://www.tokyo-4univ.jp/info/20190201-1533/>)にて公開されている。

なお、2019年度は東京医科歯科大学生体材料工学研究所が世話役となり、テーマも装い新たに「学術研究の最前線 環境・社会・人間」に変更のうえ、文化講演会を行う予定である。

## I-4.3 国際連携研究活動

### I-4.3.1 国際シンポジウム・ワークショップ・セミナー等

AA研は、国際的高水準にある所内共同研究の成果を国内外に発信し、海外の研究成果を迅速に取り入れ、あるいは重要な学術的課題や社会的要請の強いテーマに関する国際共同研究の場を創出することを目的として、海外の研究者を招へいする国際シンポジウム、ワークショップ、公開講演会等を積極的に開催している。2018年度においても、国際シンポジウム、国際ワークショップ、公開講演会のいずれも、著名な研究者の講演に多数の参加者を得て活発な討論を行った。【詳細は資料編 II-4.3.1 国際シンポジウム等一覧の項を参照】

これら国際研究連携を目指す研究・教育活動の成果は、AA研の刊行している『アジア・アフリカ言語文化研究』や、プロジェクト出版物等の形で順次公開している。

## I-4.3.2 海外研究拠点

I-2.4.2 フィールドサイエンス研究企画センターの項を参照

## I-4.3.3 外国人研究員招へい

2018年4月から2019年3月までの期間、以下の2名を招へいた。【2018年度中に招へい期間を終えた外国人研究員の業績は [I-2.6.2 所員の研究業績一覧](#)の外国人研究員の項を参照】

アブディラシドフ ザイナビディン シャラビディノヴィチ Abdirashidov Zaynabidin Sharabidinovich  
無国籍(ウズベキスタンの永住権保持)

滞在時間: 2018(平成30)年4月1日～2018(平成30)7月31日

研究主題: 「トルキスタンからイスタンブルへー自由を求めて:20世紀初頭の中央アジアにおける政治運動・知識人運動の比較研究」

From Turkestan to Istanbul: In Seeking the Freedom. Comparative Studies of Political and Intellectual Trends in Early 20th-century Central Asia

拉先加 Laxianjia

中華人民共和国 People's Republic of China

滞在期間: 2018(平成30)年10月1日～2019(平成31)年3月31日

研究主題: 「青海チベットの半農半牧民の言語・文化の研究」

Cultural and Linguistic Study of the Agrico-pastoral People in Qinghai Tibet

## I-4.3.4 外国からの研究者受け入れ(フェロー等)

2018年度は次の外国研究者のうち、7名をフェローとして、また3名をジュニア・フェローとして受け入れた。【詳細は、[資料編 II-4.3.3 外国研究者受け入れ\(フェロー等\)](#)を参照】

フェロー

ティモシー ブリッケル Timothy Brickell

研究主題: A Collaborative Investigation of Annotation Methods for Analyzing Multimedia Linguistic Corpora

研究期間: 2018.10.1-2019.3.31

受入教員: 塩原 朝子

スニサー・ウィタヤーパンヤーノン(齋藤)

研究主題: タイ語会話の分析にもとづく日本人向けタイ語教材開発に関する研究

研究期間: 2018.4.1-2021.3.31

受入教員:峰岸 真琴

モハメド ソリマン Mohamed Soliman

研究主題:中世・イスラーム期エジプト遺跡の保護と文化遺産化に向けた実際的アプローチ——「資源」から文化財へ

研究期間:2018.10.1-2018.11.30

受入教員:熊倉 和歌子

ジア・ユエ 賈越

研究主題:満洲・ツングース諸語のケースシステムの比較研究

研究期間:2018.10.1-2019.9.30

受入教員:山越 康裕

チベルハス 其布□ 哈斯

研究主題:ダグル語方言とその変容に関する研究

研究期間:2018.11.1-2019.10.31

受入教員:呉人 徳司

ムー インイン MU, Yingying

研究主題:ペラ語及びロンウォー語の形態統語構造の比較研究

研究期間:2018.9.1-2019.8.31

受入教員:中山 俊秀

ルツ マーティン Lutz Marten

研究主題:バントゥ諸語の形態統語論的マイクロバリエーション

研究期間:2019.1.21-2019.3.12

受入教員:品川 大輔

ジュニア・フェロー

烏雲高娃 Wuyungaowa

研究主題:近代内モンゴル知識人の文化活動

研究期間:2016.4.1-2019.3.31

受入教員:山越 康裕

アルベルトゥス=トーマス・モリ Albertus-Thomas Mori

研究主題:東南アジアの華人キリスト者を巡る人類学的研究

研究期間:2018.4.1-2019.3.31

受入教員:吉田 ゆか子

アンドリュー・デイビッド・ハーヴィー Andrew David Harvey

研究主題: インサズ語(バントゥ系)の記述

研究期間: 2018.10.1-2019.9.30

受入教員: 品川 大輔

共同利用・共同研究拠点としての AA 研は、国際的な共同研究拠点として更なる充実を目指しており、外国人フェロー、ジュニア・フェローや短期招へい研究者を通して、国際共同研究をいっそう発展させてゆく必要がある。その点において本年度は、おおむねその目的を達成したと考えられる。

### I-4.3.5 海外学術機関との研究協力協定

**オランダ王立言語・地理・民族学研究所(KITLV) Royal Netherlands Institute of Southeast Asian and Caribbean Studies**

2014年に学術協力に関する協定を締結し、ジャワ文書研究等を中心とするインドネシア研究の共同研究を進めている。2018年度には共同利用・共同研究課題「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容(2):ジャワのイスラーム化再考」において KITLV 所属の Willem van der Molen 博士を共同研究員に迎え共同研究を行った。

**アトマ・ジャヤ・インドネシア・カソリック大学 Atma Jaya Catholic University of Indonesia**

2014年に学術協力に関する協定と共同編集による学術雑誌 NUSA に関する協定を締結している。その協定に基づき、学術雑誌 NUSA の第 64 号を 2017 年 9 月付けで刊行した。編集委員会は東京外国語大学(AA 研所員も含む)3 名、AA 研共同研究員 4 名、アトマ・ジャヤ・インドネシア・カソリック大学教員 4 名他からなる。また、2017年にはインドネシアの言語ドキュメンテーションに関する協定を結んでおり、その協定に基づき、インドネシアのアーサ・ワチャナ・カトリック大学(クーパーン)で AA 研が主催した言語ドキュメンテーションに関する国際ワークショップにアトマ・ジャヤ大学の教員 Yanti 氏を招へいし講師を依頼するなどして研究交流を行った。さらに、Yanti 博士を AA 研に招へいし、所員との共同研究・共同利用および AA 研共同研究が主催するワークショップでの研究発表を行った。また、AA 研と国立国語研究所が共催した NINJAL 国際シンポジウム「日本と北東アジアの消滅危機言語 ―記述・ドキュメンテーション・復興―」(2018/8/07~2018/8/08)に招へいし、所員と共同発表を行った。

**マナド国立大学言語芸術学部**

2015年に学術協力に関する協定を締結し、マナド周辺の言語に関する共同研究を行ってきたが、2018年度の実績はない。

**レバノン大学人文科学部第 1 部 (FHS-I-LU) Faculty of Human Sciences, Branch I, Lebanese University**

同大学名誉教授 Massoud Daher 博士からは、JaCMES 諮問委員の一人として JaCMES の活動全般についての助言を受け、他の同大学教授らと交えた非公式の懇談会の場でも研究活動全般に関して情報と助言を受けた。

**ベイルート・アメリカン大学 American University of Beirut (AUB)**

同大学教授 Abdul-Rahim Abu-Husayn 教授には JaCMES 諮問委員を委嘱し、JaCMES の活動全般についての助言を受けた。また同大学の Livia Celine Wick 教授、Samir Seikaly 教授、Yusuf Sidani 教授には、JaCMES 若手研究者報告会(2018年11月30日-12月1日)にてコメンテーターの担当を依頼した。また同大学教養学部との共催で2019年3月19日に、筑波大学の鈴木伸隆教授の講演会“Examining Najeeb Saleeby as American Colonial Advocate and Educator”を開催した。

#### ベイルート・オリент研究所(ドイツ研究所) Orient Institut-Beirut

所員のレバノン出張時に同研究所の図書資料部を利用した。

#### サバ開発研究所(IDS) Institute For Development Studies (SABAH)

サバ開発研究所(IDS)との MoU に基づき設置されたコタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO)の主催により日本人研究者による現地講演会 1 件、ならびに日本人と海外の研究機関所属の研究者らによる国際ワークショップ 2 件と交換講演会 1 件をコタキナバルやジャカルタなどで実施した。

<http://www.ids.org.my/current/index.htm>

#### ゾンカ語発展委員会(DDC) the Dzongkha Development Commission

2013年8月に DDC と AA 研との間で学術協力に関する申し合わせ覚書(MoU)を取り交わした。2017年度には実質的な共同研究活動は実施されなかったが、DDC が 2011 年に出版したゾンカ語・英語辞典をもとにした電子辞典を町田和彦所員が中心となって開発し、現在 IRC のサーバを利用して公開中である。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/2011/Dzongkha2011.htm>

また、DDC の研究員 1 名を AA 研に招へいして 2019 年度にゾンカ語言語研修を行うことが決定している。

なお、本協定は 2018 年 8 月をもって満期修了した。

#### 中国チベット学研究所(CTRC) China Tibetology Research Center

2017年10月に CTRC と AA 研との間で学術協力に関する申し合わせ覚書(MoU)を取り交わした。この協定に基づき、CTRC 所属の研究員 1 名(ラシャムジャ氏)を 2018 年 10 月から 2019 年 3 月まで AA 研に招へいし、所員とともに外国人客員型の共同利用・共同研究課題「青海チベットの半農半牧民の言語・文化の研究」を実施した。

#### インドネシア科学院社会文化研究センター (PMB-LIPI) Pusat Penelitian Kemasyarakatan dan Kebudayaan

2017 年度から引き続き、PMB-LIPI に所属する Ahmad Najib Burhani 研究員が共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)―紛争と共存のダイナミクス」の共同研究員となって、コタキナバル・リエゾン・オフィス(KKLO)を活用した国際共同研究を進める一方、所員 1 名を派遣した。

#### ケルン大学アフリカ学研究所 Institute for African Studies, University of Cologne

前年に続いて 2018 年度も研究協力の実がなかったことから、協定の廃止も検討したものの、当研究所におけるアフリカ研究の今後を考えたとき、ケルン大学との協力には大きな可能性を見出し得るため、協定を継続して、相互の研究協力のあり方からあらためて企画・検討し直すこととした。

### I-4.3.6 研究未開発言語文化の調査事業

アジア・アフリカを中心とした基礎研究を推進し、研究未開発言語文化に関する研究資源の構築および現地研究機関との共同研究体制を整備することを目的とする事業であった「助手投入制度」を 2005 年度に見直し、発展的に継承した事業である。派遣対象を助手(現助教)に限定せず、所員、特任研究員、研究機関研究員、共同研究員等へと拡大し、研究所の事業計画に基づき柔軟に対応できる態勢にして、2009 年度には 4 名を海外調査に派遣した。2011 年度からは「言語研修のための資料収集を目的とした派遣」と「言語ダイナミクス科学研究プロジェクト」(2016 年度からはその後継事業である基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」)の活動の一環としての派遣の二者に特化して実施することになった。前者に関しては状況に応じて海外からの招へいも行うこととした。2018 年度には「言語研修のための資料収集を目的とした招へい」に関しては派遣がなかったが、基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」に関しては延べ 9 名の派遣を実施した。【派遣実施の詳細について「言語研修のための資料収集を目的とした派遣・招へい」は資料編 [II-4.3.4 研究未開発言語文化の調査事業](#)、基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」に関する派遣については [II-3.3.1](#) の項を参照】

### I-4.3.7 その他外部資金による国際連携研究

実施の詳細については [I-2.7.1 特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」](#)および [I-2.7.2 国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業「国際ネットワークを活かした危機言語・少数言語の調査研究を主体的にリードする研究者の育成」](#)の項を参照

## I-4.4 研究成果の国内外への公開

### I-4.4.1 AA 研フォーラムの実施

本研究所では設立以来、所員および外国人客員研究員がそれぞれの研究成果を口頭で発表する「所内研究会」を開催してきた。その目的は、所員・客員研究員の個人研究に関する所内での相互理解を深め、新たな共同研究の芽を育てていくこと、また質疑応答を通じて研究の一層の深化・発展を図ることにあった。2003 年度には研究所改革の一環として、名称を所内研究会から AA 研フォーラムに変更した。発表者を非常勤研究員、内地留学者、フェロー、短期訪問者などにも広げる一方、フォーラム自体を所外に開放し、公開性を高めて今日に至っている。また、2011 年度からの新しい試みとして、複数の所員が最新の自身の研究成果および知見を他分野の研究者にもわかりやすい形で紹介する企画も行っている。本年度は所員 3 名、AA 研共同研究員 2 名(言語研修の一環としてのフォーラムでの講演)、計 4 回のフォーラムを開催した。【詳細は、資料編 [II-4.2.5 シンポジウム等](#)の項を参照。12 月に開催した AA 研フォーラム・全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」に関しては同じく資料編 [II-3.3.1](#) を参照】

#### I-4.4.2 公開講座の実施および外部公開講座への講師派遣

グローバル化の進展やアジアの著しい経済成長、またアジア・アフリカにおける民族・宗教対立の深刻化など、社会環境や国際情勢の変化にともなって、本研究所の研究蓄積の公開に対して一般社会から寄せられる期待は、年々高まっている。このような期待に応えるために、2018年度も、学会、法務省や警察庁などの各種官公庁、府中市、調布市等の主催する公開セミナー、講演会、公開講座等に所員が出講し、さらに東京外国語大学連携講座、調布市内・近隣大学等公開講座にも所員が出講した。また、AA 研自ら主催したのもとして、各種の基幹研究公開講演、フィールドネット・ラウンジ、FIELDPLUS caféなどを開催した一方、東京四大学連合文化講演会「環境・社会・人間における『安全・安心』を探る ―安全で安心の出来る社会― ～学術研究の最前線をやさしく解説する～」(一橋講堂 2018年11月22日)を共催して、所員が講演を行った。【詳細は、[I-4.2.6 四大学連合文化講演会](#)および、資料編 [II-4.4.3 公開講座の実施および外部公開講座への講師派遣](#)の項を参照】

#### I-4.4.3 出版および広報

- ・ 出版については、[I-3.3.5 出版担当](#)を参照。
- ・ 広報については、[I-3.3.7 広報企画担当](#)を参照。

#### I-4.4.4 収集資料等の展示・公開

企画展「祈りにつながるイスラーム:エチオピア西部の信仰とその歴史」

2018年4月23日(月)～5月25日(金)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/islam.ethiopia/index.html>

上記については、[I-3.3.7 広報企画担当](#)を参照。

## I-5 成果と課題

### I-5.1 2018 年度の成果

本研究所における本年度の主な成果は以下の通りである。

1. 本研究所では、研究所として重点をおく領域を明確にすることの重要性を幾度か議論してきたが、共同利用・共同研究拠点として認定された際に通達された「研究対象分野が広く、研究者も多岐にわたっていることから、拠点としての特徴を外部に対してより具体的に示していくことが望まれる」という意見(2009年6月25日付)にも応えるべく、第2期中期目標期間の始まった2010年度に4つの基幹研究を発足させた(基幹研究の立ち上げに至る経緯の詳細については、[I-2.2.1 概要](#)の項を参照)。さらに、2016年度から始まった第3期中期目標期間を前に、所内の研究戦略策定委員会を中心に将来構想を練り直した結果、第3期中期目標期間の開始と同時に、プロジェクト研究部をこれまでの5研究ユニットから言語学、文化人類学、地域研究・歴史学の3研究ユニットに再編のうえ、基幹研究も各研究ユニットの重点研究テーマを明確にする形で「多言語多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(言語学)、「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロマクロ系の連関2」(人類学)、「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」(歴史・地域)の3つに再編した。併せて2016年度には、急速に複雑化・深刻化するアジア・アフリカの現代的諸問題に対応するため、本研究所がこれまで研究分野別に進めてきた研究を有機的に関連させて質的に飛躍させ、その基盤の上に国内外の研究機関・現地コミュニティと連携した問題解決のための研究体制を構築すべく、特別経費による全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」を新たに始動。2018年度も前年度同様、年度当初の計画に則った基幹研究事業、全所プロジェクト事業を順調に展開した。
2. 本研究所の2つの海外研究拠点、中東研究日本センター(バイルート)及びコタキナバル・リエゾンオフィスにおいて、臨地共同研究が順調に推進され、よりいっそう国際共同利用・共同研究機能が強化された。シリア内戦のゆくすえや悪化を続ける米国・イラン関係など、中東情勢が相変わらず予断を許さないなかでも、2018年度には新たに公募で採用した特任研究員1名を3月以降バイルートに常駐させ、中東研究日本センターの管理・研究・調査に当たらせた。
3. 2016年度に新規採択された頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」が3年目を迎え、国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業「国際ネットワークを活かした危機言語・少数言語の調査研究を主体的にリードする研究者の育成」に衣替えのうえ、学内および連携機関の名古屋大学から3名の若手研究者を海外連携機関(ソウル大学、メルボルン大学、オーストラリア国立大学、ロンドン大学 SOAS)に派遣するとともに、海外連携機関(メルボルン大学、オーストラリア国立大学、ロンドン大学 SOAS、ナンヤン工科大学)から8名の研究者を招へい。(1)データアーカイブ、(2)言語コーパス構築、(3)言語の通時的変化・分岐に関する研究、(4)言語コーパスを用いた理論的研究を推進した。
4. 共同利用・共同研究課題34件が総計357名(延べ数)の共同研究員の参画を得て、活発に展開された。

なお、本年度も研究所が著しい財源難を脱し得なかったことから、それぞれの共同利用・共同研究課題が研究会を開催するための旅費に上限を設けざるを得なかったが、所員・共同研究員の絶大な尽力・協力を得て、いずれの研究課題も計画どおりに遂行された。また、旅費が年度途中で不足した4つの共同利用・共同研究課題については、秋の補正予算で要求額の予算を追加配分している。

5. 2019年度から新規に開始する共同利用・共同研究課題の公募を行った。応募のあった共同利用・共同研究課題10件の研究代表が10月27日に開催された共同利用・共同研究課題審査会でプレゼンを行い、共同研究専門委員会による審査の結果、10件すべてが採択された。また、従来の短期共同研究員制度を改革して昨年度から公募を始めた共同利用・共同研究課題(短期滞在型)への応募はなかったものの、2016年度から新たに公募を開始した共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)に7件の応募があり、共同研究専門委員会の審査を経て、5件が採択された。ただし、共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)3件は2020年4月から実施のため、2019年度中に実施される新規採択課題は計12件となる。
6. これまでに対外的に形成されてきた二つの研究拠点、すなわちアジア書字コーパス拠点及び中東イスラーム研究拠点は既形成拠点として、それぞれの研究活動を継続している。特に中東イスラーム研究拠点は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構(NIHU)が2016年度以来取り組んでいるネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「現代中東地域研究」(中心テーマ「地球規模の変動下における中東の人間と文化—多面的価値共創社会をめざして」)の副中心拠点として、「人間の移動・交流によるネットワークの構築と国家・社会・宗教の変容」という担当テーマの下、中心拠点である国立民族学博物館をはじめとする全国の4機関と連携しながら、引き続き中東・イスラーム研究の発展に貢献した。
7. 言語研修事業など、運営費交付金に基づく研究・研修事業が順調に進められた。
8. 東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士前期課程の改組にともない、本研究所が2016年度から提供し始めた「アジア・アフリカ・フィールドサイエンス・プログラム」を今年度も継続した。併せて、春学期に学部学生向けのイントロダクション「アジア・アフリカ・フィールドサイエンス研究基礎」(リレー講義)を提供した。
9. 2022年度から始まる共同利用・共同研究拠点の第3期をも見据え、所内で共同研究の新たなシーズを育てるべく、研究戦略策定委員会を中心に所内で検討を重ねた結果、研究所財政厳しき折から特別な予算を付けることはできないものの、複数の所員による研究活動のシーズを「共同基礎研究」として公的に位置づけることを決定した。2019年度からは新たに3つの共同基礎研究が発足する。

## I-5.2 課題と展望

本研究所は1964年の創設以来、アジア・アフリカの言語・文化・歴史を調査・研究する先端的な研究機関として、また人文・社会系では唯一の全国共同利用研究所として、揺らぐことのない一連の重要な研究活動を展開してきた。しかし、2009年度をもって全国共同利用制度が終わりを告げ、2010年度以降は本研究所も他の多数の共同利用・共同研究拠点との競争にさらされている。そのうえ、2013年11月には文部科学省から「国立大学改革プラン」が提示され、2016年度の第3期中期目標期間開始を前に、2013～2015年度が「改革加速期間」と位置付けられるなか、共同利用・共同研究体制についても、科学技術・学術審議会研究環境基盤部会が今後のあるべき姿を探り、改革に向けた体制の見直しを再検討した審議の報告書「共同利用・共同研究体制の強化

に向けて」が 2014 年度末に公表された。

そこでは、「最先端の研究動向を踏まえる観点から、時限を設けて組織・体制の全面的見直しを検討すること」「IR(インスティテューショナル・リサーチ)機能の強化」「広報体制(専門部署の設置、人員の適切な配置)の整備を進めるとともに、自ら研究機関が情報発信を行う意義や目的を、研究機関の基本方針として明確に定めること」「体制整備に当たっては、研究成果を魅力的に、かつ等身大に発信するマネジメントができる人材を配置することや、各機関等の長が主導し組織としての広報体制を整備すること」「国際公募を実施し、待遇面等について柔軟な人事制度を整えることにより、国内外から卓越した研究者を集め、国際的な研究環境を目指すこと」「特に、海外の研究者向けの国際広報(報道発表や研究所の成果の英語での時宜に適った発信、海外の有力な学術誌等に対し研究成果をアピールできる人材の確保など)を充実させ、国際共同研究の萌芽を着実に育てること」「共同利用・共同研究体制を構成する人事制度(具体的には、内部昇格の制限、シニアポストへの任期制の導入、若手研究者確保に向けたテニュアトラック制度の導入、女性研究者支援のための育児施設の確保、外国人研究者に対するソフト面での支援充実、クロスアポイントメント制度の活用、寄付講座の導入など)を、オープンかつ各機関等の実態に適合した形で、自らルール化し、導入すること」等々、極めて広範な「改革」が求められており、財源の制約はあるにせよ、本研究所としても可能なかぎり、こうした提言に対応して行かなくてはならない。

本研究所は、2015 年度に実施された過去 6 年分の期末評価を経て、2016 年度から始まった国立大学法人第 3 期も共同利用・共同研究拠点に認定されたが、その際に提出を求められた期末評価用調書では、「第 3 期中期目標期間に向けた評価」として、「拠点を置く大学(法人)の機能強化・特色化への関わり」を記載することが義務づけられており、本研究所も国際化や大学院教育、人材の流動化などの側面で東京外国語大学の機能強化・特色化への貢献を明白に求められるようになっている。これにより、大学の垣根を越えた共同利用・共同研究拠点としての本研究所の活動がいささかも揺らぐことはないものの、他方でそれらもまた共同利用・共同研究拠点の条件とされ始めた以上、本研究所も東京外国語大学の機能強化・特色化のために一定の貢献をしなくてはならない。

2018 年度に再び実施された共同利用・共同研究拠点の中間評価では、これまでの絶対評価に代わって、S=20%、A=50%、B・C=30%を目安にした相対評価が導入されており、共同利用・共同研究拠点間の競争は否応なくいっそう激化せざるを得ないが、その中間評価用調書でも、「拠点を置く大学(法人)の機能強化・特色化への関わり」の記載は引き続き求められており(2018 年度に実施された中間評価の詳細については、[I-1.2.6 本研究所の活動に対する中間評価の結果についての項](#)を参照)、この点は、国立大学法人第 3 期における本研究所の大きな課題となっている。

とはいえ、こうした外部環境の劇的な変化を別にしても、今日、本研究所はさらなる発展のために、真剣に検討すべきいくつかの課題を抱えている。

1. 本研究所では、基幹研究を立ち上げてから、それまで以上に新規採用にあたって、必要とする人材のプロフィールについて所内での議論、合意を経て、慎重に優れた人材が確保されるように努力を積み重ねてきた。また、任期付きとなった助教職にはテニュアトラック制度を導入し、2009 年度から実施するとともに、制度の改善にも努めている。しかしながら法人化以後、国立大学法人の人件費削減状況は年々厳しさを増していることから、人事採用が行われる機会は従前より減少しており、必要な人材の確保に関して所内合意を形成することも困難になりつつある。2013 年度に大学執行部が人件費をポイントに換算して各部局に割り当てる制度を導入したことで、他部局との人件費の切り分けはクリアになり、研究所として長期的な人事配置方針を策定することが可能になったものの、2018 年の初めには、大学財政が極めて深刻化

する3年後を睨んで、大学当局が各部局に人件費ポイントの大幅な圧縮を要請。当研究所も2019年度からの3年間で教授2名分に相当する2000ポイントを削減されるため、今後はますます人事採用をめぐる難しい判断を迫られるだろう。もちろん、本研究所にとって、いかなる状況にあっても優れた研究者の確保と研究環境の改善が極めて重要な課題であることに変わりはなく、少ない採用機会を有効に使って優秀な人材を確保するために、目先の利益の追求に走ることなく、より大局的な視点に立って所内合意を形成していくことがますます重要になる。このため、本研究所では2017年10月以来、所内の研究戦略策定委員会に全所員が参加する形の拡大研究戦略策定委員会において、今後10年単位の長期的な将来計画を検討してきたが、今後も引き続き、研究所の長期的な人事配置方針に関する所内合意を形成して行かなくてはなるまい。

2. 国立大学法人の第1期中期目標期間および第2期中期目標期間における本研究所の財政基盤は、文部科学省の特別経費に依存するところが大きかった。第3期中期目標期間以降も、この構図は基本的に変わりようがないものの、2018年度の特別経費(プロジェクト分)が突如すべての共同利用・共同研究拠点で一律、前年度比26%の削減を受けるなど、今後も予算の先細りが予想されるなかで、より明確かつ具体的な研究の方向性と重点領域を設定して、競争的経費の獲得に挑み続けなくてはならないだろう。本研究所が附置されている東京外国語大学はもともと単独で生き残れるだけの財政的な基盤を備えておらず、法人化以来すべての国立大学法人が毎年1%ずつ運営費交付金を削減されるなか、本研究所の法人化時の予算の6割を大学に移す/奪うことで、なんとか経営破綻を免れてきた。そうである以上、本研究所が東京外国語大学に財政的な支援を期待するのは非現実的であり、これ以上大学に搾取されない努力は不可欠であるにしても、自らの財政的苦境を脱する手段は競争的経費の獲得に尽きると思われる。
3. 本研究所が2009年6月25日付で「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」として認定された際に通達された「研究対象分野が広く、研究者も多岐にわたっていることから、拠点としての特徴を外部に対してより具体的に示していくことが望まれる」という、拠点認定の審議における意見を真摯に受け止めなければならない。2010年2月に本研究所が基幹研究を策定したことは、この意見に対する一つの回答であったが、本研究所は2015年度に文部科学省から通知された共同利用・共同研究拠点の期末評価結果でも、「今後は、研究所全体としての特徴を明確にすることが期待される」とのコメントを通達された。これを受けて本研究所では早速、所内の研究戦略策定委員会を中心に研究戦略を見直し、外から見て研究所の「顔」がわかるような研究体制を構築するための所内組織改編に取り組んだ結果、2016年度以降はプロジェクト研究部をこれまでの5研究ユニットから言語学、文化人類学、地域研究・歴史学の3研究ユニットに再編し、基幹研究も各研究ユニットの重点研究テーマを明らかにするような形で設定し直した。その結果、2018年度に実施された中間評価では同様の指摘を受けずに済んだものの、研究所の組織・体制に関しては、今後も不断に見直す努力が不可欠である。
4. 研究所の直面している極めて厳しい予算状況を踏まえ、外国人研究員のあり方についても不断の見直しが必要となろう。2010年に共同利用・共同研究拠点に移行したのを機に、2011年度以降は採択済みの共同利用・共同研究課題に貢献できる外国人研究員を公募する方針を採ってきたが、2015年度に文部科学省から通知された共同利用・共同研究拠点の期末評価における「今後は、国外研究者の受入に止まらず国際共同研究として研究成果を増加させるための取組を検討することが期待される」とのコメントを踏まえ、2016年度には外国人研究員と共同利用・共同研究課題との関係を再検討して、新たに「共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)」の公募に踏み切った。この方針転換が国際共同研究の研究成果増大に直結するかどうかは予断を許さず、2018年度に実施された中間評価でも「今後、海外の

研究機関からの人材確保や研究課題の国際公募などによる共同利用・共同研究の国際化の一層の推進が期待される」とのコメントを受けているが、2017 年度に発足した「共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)」の成果を現段階で論じるのは時期尚早と思われ、改革が実を結ぶことを期待し続けたい。

5. 本研究所が「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」として国際連携を推進するのは当然であり、二つの海外拠点(ベイルート、コタキナバル)の強化・発展はもとより、アジア・アフリカ地域の研究機関との交流、連携の模索や協力の可能性を常に追求してきてはいるものの、すでに述べたように、共同利用・共同研究拠点の期末評価結果では「今後は、国外研究者の受入に止まらず国際共同研究として研究成果を増加させるための取組を検討する……ことが期待される」、2018 年度に実施された中間評価でも「今後、海外の研究機関からの人材確保や研究課題の国際公募などによる共同利用・共同研究の国際化の一層の推進が期待される」とのコメントを受けた。そうである以上、今後はこうした国際連携もまた、優れた研究成果につなげるべく、国際公募の実施も含め、いっそう意識的な取組を推進しなくてはならない。2018 年度には文部科学省が新たに、国際的にも有用かつ質の高い研究資源等を最大限活用し、国際的な共同利用・共同研究を行う拠点を「国際共同利用・共同研究拠点」として認定のうえ、重点支援する制度を導入したため、本研究所も認定を申請したが、最終的に認定された 6 拠点はすべて理工学系、医学・生物学系で占められ、人文・社会系の「国際共同利用・共同研究拠点」が誕生することはなかった。この事実象徴される人文・社会系共同利用・共同研究拠点に対する逆風のなか、本研究所の国際的なプレゼンスをいっそう向上させるために何をどうすればいいのか、戦略・構想の根本的な練り直しが必要かもしれない。
6. 2015 年度に文部科学省から通知された共同利用・共同研究拠点の期末評価結果において、本研究所は 2013 年度に行われた中間評価結果のフォローアップ状況について「具体的な改善措置が取られている点は一定の評価が出来るが、応募件数が大きく伸びているとは言い難く、引き続き、更なる質の向上に努めることが望まれる」との厳しい評価を受けた。この期末評価のコメントを踏まえ、本研究所では共同研究課題の応募を増やすべく、制度の改編に取り組んだ結果、2016 年度には前年(15 件)の 1.5 倍にあたる 22 件の応募を得ることができたことから、2018 年度に行われた中間評価では同種の指摘を受けずに済んだものの、その後の応募件数は 2017 年度が 16 件、2018 年度も 17 件とやや低迷しているため、今後も共同研究課題制度が研究者コミュニティのニーズをよりいっそう反映し得るような方策を検討し、共同研究が質量ともに充実していくように努めていく必要がある。
7. 2013 年度に研究所全体の活動を見直すべく実施した外部評価で指摘された「修士課程・博士課程を一貫した大学院教育の実施、研究所の特色を生かした、東京外国語大学の大学院教育への参加、あるいは AA 研でしか教育できない特徴を打ち出し、独自の「学位プログラム」の構築等、主体的関与の方策」を検討すべし、という提言を真摯に受け止め、今後の大学院教育との関わりを深化させて行く必要もある。本研究所はこれまでも、言語研修や中東☆イスラーム関係セミナーを学部・大学院科目として開講することで東京外国語大学の人材育成に貢献してきたが、2016 年度に実施された大学院博士前期課程の改組以降は、それまで博士後期課程にだけ関わってきた本研究所が新たに「アジア・アフリカ・フィールドサイエンスプログラム」を提供して、東京外国語大学の人材育成に貢献している。また、2018 年度に改組された大学院博士後期課程でも、所員の有資格者全員が博士後期課程を担当するに至った。しかしながら、東京外国語大学大学院の枠内で AA 研が独自の修士課程・博士課程一貫コースや「学位プログラム」を持つことは事実上不可能なこともすでに明らかになっており、研究所の特色を生かした大学院教育

を今後いかに展開して行くべきか、引き続き検討しなくてはならないだろう。

## II 資料編

## II-1 年表

- 1961年(昭和36年) 日本学術会議が本研究所を設置するよう勧告
- 1964年(昭和39年) 4月 東京外国語大学附置の共同利用研究所として発足  
言語文化第一、インドシナ第一、アフリカ第一部門設置
- 1965年(昭和40年) インド第一部門設置
- 1966年(昭和41年) 東北アジア、アラビア部門設置
- 1967年(昭和42年) 4月 『通信』第1号発刊  
2号館竣工(西側半分)AA研4、5、6階に入る  
言語文化第二、インドネシア・オセアニア部門設置  
共同研究プロジェクトを組織  
研究未開発地域の言語文化修得のための助手等のアジア・アフリカへの派遣開始  
この年から1973年まで「実験的言語研修」実施  
『叢書』第1冊発行
- 1968年(昭和43年) 4月 2号館増築完成  
中国第一部門設置  
『アジア・アフリカ言語文化研究』(通称『ジャーナル』)発刊  
AA研教授会規程制定(教授会正式発足)
- 1969年(昭和44年) インドシナ第二部門設置
- 1971年(昭和46年) トルコ・ウラル部門設置
- 1972年(昭和47年) イラン部門設置
- 1974年(昭和49年) 言語研修事業費が予算化、東京会場で二言語開始  
創立10周年記念式典、講演会開催
- 1976年(昭和51年) 言語研修、関西会場で1言語の研修開始
- 1978年(昭和53年) 1月 メインフレーム・コンピュータ(HITAC M-150)を導入  
インド第二部門設置

|              |   |
|--------------|---|
| 1979年(昭和54年) | 言語文化第三、中国第二部門設置<br>公募による短期共同研究員受け入れ開始   |
| 1981年(昭和56年) | 言語研修、この年以降226時間から150時間に変更   |
| 1982年(昭和57年) | モンゴル・シベリア部門設置   |
| 1987年(昭和62年) | アフリカ第二部門設置  |
| 1991年(平成3年)  | 4月4日大部門制への改組  |
| 1992年(平成4年)  | 4月 大学院地域文化研究科博士後期課程設置、所員15名が兼担  |
| 1993年(平成5年)  | UNIXワークステーションのサブシステムをメインフレームに付加する形で導入<br>インターネットの利用開始   |
| 1994年(平成6年)  | 創立30周年記念式典、講演会、シンポジウム、公開セミナー開催  |
| 1995年(平成7年)  | 4月 「中核的研究機関支援プログラム」による卓越した研究拠点(COE)に指定<br>創立30周年記念公開講座開催  |
| 1997年(平成9年)  | 4月 情報資源利用研究センター、AA研に付属する形で設置(教官、客員教官純増各1名、教官振替増4名)  |
| 1998年(平成10年) | 4月 情報資源利用研究センター運営費予算化   |
| 2000年(平成12年) | 4月 事務一元化により事務部が廃止され、事務局研究協力課が事務を担当  |
| 2001年(平成13年) | 6月 中核的研究拠点形成(COE)プログラムとして「アジア書字コーパス拠点」が認定(～2005年度)  |
| 2002年(平成14年) | 2月 西ヶ原から府中キャンパスへ移転<br>7月 科学研究費特定領域研究「資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築」(文化資源学)採択(～2006年度)                 |
| 2004年(平成16年) | 4月 東京外国語大学、国立大学法人になる  |
| 2005年(平成17年) | 4月 複数の研究ユニットからなるプロジェクト研究部を設置<br>4月 フィールドサイエンス研究企画センターを設置<br>4月 中東イスラーム研究教育プロジェクトを開始(～2009年度)    |
| 2006年(平成18年) | 2月 中東研究日本センターをレバノン共和国のベイルートに開設<br>10月 文部科学省委託研究・世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業「東南アジアのイスラーム」を開始(～2010年度) |

|              |   |
|--------------|---|
| 2007年(平成19年) | 4月 副所長職を設置  |
| 2008年(平成20年) | 3月 コタキナバル・リエゾンオフィスをマレーシア・サバ州のコタキナバルに開設<br>4月 文部科学省特別経費によるプロジェクト「急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築」を開始(～2012年度)   |
| 2009年(平成21年) | 6月 共同利用・共同研究拠点として認定される(2010年4月から6年間)。2009年度をもってこれまで55年間続いた「全国共同利用」という制度が廃止される   |
| 2010年(平成22年) | 4月 文部科学省により認定された共同利用・共同研究拠点(拠点名: アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同研究拠点)に移行   |
| 2012年(平成24年) | 4月 国立大学附置研究所・センター長会議会長機関を担当(～2013年3月)   |
| 2013年(平成25年) | 文部科学省特別経費により「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開: プロジェクト(LingDy2)」を開始   |
| 2014年(平成26年) | 10月 創立50周年記念講演・シンポジウム・記念式典、関連諸事業を実施   |
| 2016年(平成28年) | 研究組織のうちプロジェクト研究部を3研究ユニット(言語学研究ユニット、地域研究・歴史学研究ユニット、文化人類学研究ユニット)に改編<br>全所プロジェクトとして特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」(2016—21年度)を開始<br>下記3基幹研究プロジェクトを開始<br>・基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(Linguistic Dynamics Science 3: LingDy3 Project)<br>・基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクローマクロ系の連関2」<br>・基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」<br>『頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム』「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」採択(～2018年度)<br>「中東イスラーム研究拠点」にて人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「現代中東地域研究」を開始 |
| 2018年(平成30年) | 東京外国語大学大学院の改組において、博士後期課程に、アジア・アフリカフィールド研究プログラムを設ける  |
| 2019年(平成31年) | 新たな共同研究のシーズを見つけるための共同基礎研究を制度化   |

## II-2 予算・組織・機構

### II-2.1 研究所の予算

#### II-2.1.1 2018 年度予算

| 項目         | 金額(単位: 千円) | 備考         |
|------------|------------|------------|
| 運営費交付金     | 154,289    | 常勤職員人件費を除く |
| 科学研究費補助金   | 125,976    | 間接経費を除く    |
| 受託研究・受託事業等 | 46,236     | 間接経費を除く    |
| 寄付金等       | 1,711      |            |

#### II-2.1.2 運営費交付金(2018 年度)

2018(平成 30)年度 運営費交付金予算額(常勤職員人件費を除く)

| 区分        | 予算額<br>(千円)                        |        |
|-----------|------------------------------------|--------|
| 一般経費(研究費) | 64,986                             |        |
| 特別経費      | アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同研究           | 14,127 |
|           | アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築 | 48,981 |
| 学長裁量経費    | 26,195                             |        |
| 計         | 154,289                            |        |

2018(平成 30)年度 運営費交付金予算額配分状況

| 経費名   | 配分額(千円)  |                  |
|-------|--|------------------|
| 個人研究費 | 10,070   |                  |
| 客員研究費 | 690  |                  |
| 基幹研究  | 多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築<br>同上(学長裁量経費)                               | *29,940<br>5,694 |
|       | アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の<br>探求ー人類学におけるミクローマクロ系の関連2<br>同上(学長裁量経費) | *5,411<br>2,193  |
|       | 中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景   | *13,630          |

|                       |                    |         |
|-----------------------|--------------------|---------|
|                       | 同上(学長裁量経費)         | 6,394   |
| 既形成拠点                 | アジア書字コーパス拠点(GICAS) | 375     |
| IRC 経費                |                    | 5,725   |
| FSC 経費                |                    | 1,825   |
| 言語研修経費(学長裁量経費)        |                    | 7,998   |
| 成果等刊行経費               |                    | *7,006  |
| 広報企画経費                |                    | 4,066   |
| 基礎データ経費               |                    | 1,125   |
| 共同利用・共同研究課題経費         |                    | *5,600  |
| 文献資料経費                |                    | 10,250  |
| 共通経費                  |                    | 1,500   |
| 国際研究集会(学長裁量経費)        |                    | 3,916   |
| 海外学術調査フォーラム経費         |                    | 990     |
| 地域研究コンソーシアム           |                    | 210     |
| 外部委員経費                |                    | *1,675  |
| 会議等経費                 |                    | 400     |
| 所長裁量経費                |                    | 1,500   |
| 研究機関研究員／特任研究員人件費      |                    | *12,600 |
| 外国人研究員人件費(招へい・帰国旅費含む) |                    | *15,910 |
| 派遣職員／非常勤職員経費          |                    | 20,560  |
| 予備費                   |                    | 0       |
| 計                     |                    | 177,253 |

補足:「\*」を付した項目は、その一部あるいはすべてを特別経費により実施する。

### II-2.1.3 科学研究費補助金

以下の金額は、直接経費のみ(間接経費は除く)。

|          | 研究種目                  | 予算額(千円) |
|----------|-----------------------|---------|
| 科学研究費補助金 | 基盤研究(A)(海外、一般含む)(3件)  | 24,500  |
|          | 基盤研究(B)(海外、一般含む)(12件) | 41,570  |
|          | 基盤研究(C)(20件)          | 15,700  |
|          | 挑戦的研究(萌芽)(2件)         | 3,700   |
|          | 若手研究(A)(1件)           | 1,000   |
|          | 若手研究(B)(6件)           | 3,251   |
|          | 若手研究(5件)              | 4,555   |
|          | 研究活動スタート支援(1件)        | 800     |
|          | 研究成果公開促進費(6件)         | 9,900   |

|  |                             |         |
|--|-----------------------------|---------|
|  | 新学術領域研究(研究領域提案型)(1件)        | 11,200  |
|  | 国際共同研究加速基金(2件)              | 0       |
|  | 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))(2件) | 4,400   |
|  | 特別研究員奨励費(5件)                | 5,400   |
|  | 計 66 件                      | 125,976 |

## II-2.1.4 受託研究・受託事業等

以下の金額は、直接経費のみ(間接経費除く)。

| 代表者氏名 | 機関       | 研究テーマ  | 実施期間                                  | 受入金額<br>(千円) |
|-------|----------|--|---------------------------------------|--------------|
| 近藤信彰  | 人間文化研究機構 | 【現代中東地域研究推進事業】人間の移動・交流によるネットワークの構築                                     | H28(2016).4.1<br>～<br>R4(2022).3.31   | 7,100        |
| 品川大輔  | 日本学術振興会  | 【研究拠点形成事業(B. アジア・アフリカ学術基盤形成型)】アフリカにおける言語多様性とダイナミズムに迫るアフリカ諸語研究ネットワークの構築 | H30(2018).4.1<br>～<br>R3(2021).3.31   | 6,800        |
| 外川昌彦  | 日本学術振興会  | 【二国間交流事業】ブッダガヤへの日本の巡礼者ーインドにおける仏教復興運動と日印交流                              | H28(2016).9.1<br>～<br>H30(2018).8.31  | 196          |
| 中山俊秀  | 日本学術振興会  | 【国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業】国際ネットワークを活かした危機言語・少数言語の調査研究を主体的にリードする研究者の育成      | H28(2016).10.1<br>～<br>H31(2019).3.31 | 32,140       |
|       |          |  | 計                                     | 46,236       |

## II-2.1.5 寄付金等

代表者名： 熊倉和歌子 助教

機関： 公益財団法人平和中島財団 国際学術研究助成(外国人研究者等招致助成)

研究テーマ： 「中世・イスラーム期エジプト遺跡の保護と文化遺産化に向けた実際的アプローチー「資源」から文化財へ(人)」

受入金額： 997,000 円

代表者名： 熊倉和歌子 助教  
 機関： 公益財団法人 JFE21 世紀財団 アジア歴史研究助成  
 研究テーマ： 「環境・農業生産・記録管理—文書史料に基づくエジプト環境史の構築—」  
 受入金額： 714,046 円

## II-2.2 外部委員リスト

### II-2.2.1 運営委員会

(任期:2018年4月1日～2020年3月31日)

| 氏名      | 所属                   | 職名                     |
|---------|----------------------|------------------------|
| 井野瀬 久美恵 | 甲南大学文学部              | 教授                     |
| 宇山 智彦   | 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター | 教授                     |
| 梶 茂樹    | 京都産業大学現代社会学部         | 教授                     |
| 小林 正人   | 東京大学大学院人文社会系研究科      | 准教授                    |
| 佐藤 洋一郎  | 京都府立大学和食文化研究センター     | 特任教授                   |
| 清水 展    | 関西大学政策創造学部           | 名誉教授                   |
| 棚橋 訓    | お茶の水女子大学教育学部         | 教授                     |
| 西尾 哲夫   | 国立民族学博物館             | 教授                     |
| 渡邊 興亜   | 総合研究大学院大学            | 名誉教授                   |
| 飯塚 正人   | AA 研                 | 教授・所長                  |
| 中山 俊秀   | AA 研                 | 教授・副所長                 |
| 星 泉     | AA 研                 | 教授・情報資源利用研究センター長       |
| 近藤 信彰   | AA 研                 | 教授・フィールドサイエンス研究企画センター長 |
| 黒木 英充   | AA 研                 | 教授                     |
| 澤田 英夫   | AA 研                 | 教授                     |
| 床呂 郁哉   | AA 研                 | 教授                     |

### II-2.2.2 共同研究専門委員会

(任期:2018年4月1日～2020年3月31日)

| 氏名    | 所属              | 職名                     |
|-------|-----------------|------------------------|
| 井上 優  | 麗澤大学外国語学部       | 教授                     |
| 窪田 幸子 | 神戸大学大学院国際文化学研究科 | 教授                     |
| 倉沢 愛子 | 慶應義塾大学          | 名誉教授                   |
| 黒田 卓  | 東北大学大学院国際文化研究科  | 教授                     |
| 杉山 祐子 | 弘前大学人文学部        | 教授                     |
| 藤代 節  | 神戸市看護大学看護学部     | 准教授                    |
| 米田 信子 | 大阪大学大学院言語文化研究科  | 教授                     |
| 飯塚 正人 | AA 研            | 教授・所長                  |
| 中山 俊秀 | AA 研            | 教授・副所長                 |
| 星 泉   | AA 研            | 教授・情報資源利用研究センター長       |
| 近藤 信彰 | AA 研            | 教授・フィールドサイエンス研究企画センター長 |
| 黒木 英充 | AA 研            | 教授                     |
| 澤田 英夫 | AA 研            | 教授                     |
| 床呂 郁哉 | AA 研            | 教授                     |

### II-2.2.3 研修専門委員会

(任期:2018年4月1日～2020年3月31日)

| 氏名     | 所属              | 職名   |
|--------|-----------------|------|
| 岸田 文隆  | 大阪大学大学院言語文化研究科  | 教授   |
| 久保 智之  | 九州大学大学院人文科学府    | 教授   |
| 小林 正人  | 東京大学大学院人文社会系研究科 | 准教授  |
| 南田 みどり | 大阪大学            | 名誉教授 |
| 吉田 和彦  | 京都大学大学院文学研究科    | 教授   |
| 塩原 朝子  | AA 研            | 准教授  |
| 呉人 徳司  | AA 研            | 教授   |
| 中山 俊秀  | AA 研            | 教授   |
| 伊藤 智ゆき | AA 研            | 准教授  |
| 椎野 若菜  | AA 研            | 准教授  |
| 倉部 慶太  | AA 研            | 助教   |

## II-2.2.4 海外調査専門委員会

(任期:2018年4月1日～2020年3月31日)

| 氏名     | 所属                 | 職名    |
|--------|--------------------|-------|
| 伊藤 元己  | 東京大学大学院総合文化研究科     | 教授    |
| 小林 知   | 京都大学東南アジア地域研究研究所   | 准教授   |
| 鈴木 紀   | 国立民族学博物館           | 准教授   |
| 田所 聖志  | 秋田大学大学院国際資源学研究科    | 准教授   |
| 窪田 順平  | 大学共同利用機関法人人間文化研究機構 | 理事    |
| 曾我 亨   | 弘前大学人文学部           | 教授    |
| 高樋 さち子 | 秋田大学教育文化学部         | 准教授   |
| 藤田 耕史  | 名古屋大学大学院環境学研究科     | 教授    |
| 三浦 英樹  | 国立極地研究所            | 准教授   |
| 蓮井 和久  | 鹿児島大学医歯学総合研究科      | 客員研究員 |
| 外川 昌彦  | AA 研               | 教授    |
| 深澤 秀夫  | AA 研               | 教授    |
| 床呂 郁哉  | AA 研               | 教授    |
| 呉人 徳司  | AA 研               | 教授    |
| 近藤 信彰  | AA 研               | 教授    |
| 野田 仁   | AA 研               | 准教授   |
| 佐久間 寛  | AA 研               | 助教    |

## II-2.2.5 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員

(任期:2017年4月1日～2019年3月31日)

| 氏名    | 所属                  | 職名   |
|-------|---------------------|------|
| 大村 敬一 | 大阪大学大学院言語文化研究科      | 准教授  |
| 長田 俊樹 | 総合地球環境学研究所          | 名誉教授 |
| 川田 牧人 | 成城大学文芸学部            | 教授   |
| 木村 大治 | 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科 | 教授   |
| 黒田 末寿 | 滋賀県立大学              | 名誉教授 |
| 湖中 真哉 | 静岡県立大学国際関係学部        | 教授   |

|        |                 |     |
|--------|-----------------|-----|
| 長沼 毅   | 広島大学大学院生物圏科学研究科 | 教授  |
| 野林 厚志  | 国立民族学博物館        | 教授  |
| 外川 昌彦  | AA 研            | 教授  |
| 塩原 朝子  | AA 研            | 准教授 |
| 熊倉 和歌子 | AA 研            | 助教  |

## II-2.2.6 フィールドネット運営委員会

(任期:2017年4月1日～2019年3月31日)

| 氏名     | 所属                  | 職名   |
|--------|---------------------|------|
| 海老原 淳  | 国立科学博物館植物研究部        | 研究主幹 |
| 塩谷 哲史  | 筑波大学人文社会系           | 助教   |
| 竹ノ下 祐二 | 中部学院大学看護リハビリテーション学部 | 教授   |
| 川邊 優貴子 | 国立極地研究所             | 助教   |
| 津田 浩司  | 東京大学大学院総合文化研究科      | 准教授  |
| 長野 宇規  | 神戸大学大学院農学研究科        | 准教授  |
| 太田 信宏  | AA 研                | 准教授  |
| 吉田 ゆか子 | AA 研                | 助教   |

## II-2.2.7 編集専門委員会

(任期:2018年4月1日～2020年3月31日)

| 区分  | 氏名     | 所属               | 職名   |
|-----|--------|------------------|------|
| 言語学 | 岩田 礼   | 小松大学国際文化交流学部     | 教授   |
| 言語学 | 森口 恒一  | 静岡大学             | 名誉教授 |
| 人類学 | 和崎 春日  | 中部大学国際関係学部       | 教授   |
| 人類学 | 石川 登   | 京都大学東南アジア地域研究研究所 | 教授   |
| 歴史学 | 永原 陽子  | 京都大学大学院文学研究科     | 教授   |
| 歴史学 | 吉澤 誠一郎 | 東京大学大学院人文社会研究科   | 教授   |
| 人類学 | 河合 香吏  | AA 研             | 教授   |
| 人類学 | 西井 涼子  | AA 研             | 教授   |
| 歴史学 | 黒木 英充  | AA 研             | 教授   |
| 歴史学 | 苅谷 康太  | AA 研             | 准教授  |

|     |       |      |     |
|-----|-------|------|-----|
| 言語学 | 澤田 英夫 | AA 研 | 教授  |
| 言語学 | 山越 康裕 | AA 研 | 准教授 |

## II-2.2.8 国際諮問委員会

(任期:2018年4月1日～2019年3月31日)

| 氏名                                       | 所属   | 職名                     |
|--|--|------------------------|
| EWING, Michael Carter                    | University of Melbourne                                    | Senior Lecturer        |
| SURARATDECHA, Sumittra                   | Mahidol University   | Lecturer               |
| ABDIRASHIDOV, Zaynabidin Sharabidinovich | Tashkent State University of Uzbek Language and Literature | Vice Rector of Science |
| SCHNELL, Stefan                          | University of Melbourne                                    | Postdoctoral Fellow    |
| 拉先加 (Laxianjia)                          | China Tibetology Research Center                           | Associate Researcher   |
| 渡辺 己                                     | AA 研   | 教授                     |
| 栗原 浩英                                    | AA 研   | 教授                     |
| 黒木 英充                                    | AA 研   | 教授                     |

## II-2.2.9 海外拠点専門委員会

(任期:2018年4月1日～2020年3月31日)

| 氏名    | 所属                           | 職名          |
|-------|------------------------------|-------------|
| 鈴木 信隆 | 筑波大学人文社会系                    | 准教授         |
| 大稔 哲也 | 早稲田大学文化学術院                   | 教授          |
| 酒井 啓子 | 千葉大学法経学部                     | 教授          |
| 長澤 榮治 | 東京大学東洋文化研究所                  | 教授          |
| 保坂 修司 | 財団法人日本エネルギー経済研究所<br>中東研究センター | 研究理事／副センター長 |
| 黒木 英充 | AA 研                         | 教授          |
| 床呂 郁哉 | AA 研                         | 教授          |
| 錦田 愛子 | AA 研                         | 准教授         |
| 吉田ゆか子 | AA 研                         | 助教          |

## II-2.2.10 中東研究日本センター諮問委員会

(任期:2018年4月1日～2020年3月31日)

| 氏名                      | 所属   | 職名        |
|-------------------------|--|-----------|
| ABU-HUSAYN, Abdul-Rahim | Faculty of Arts and Sciences,<br>American University of Beirut   | Professor |
| AZAR, Pierre            | Saint-Joseph University  | Professor |
| DAHER, Massoud          | Faculty of Literature and Human Sciences,<br>Lebanese University | Professor |
| 錦田 愛子                   | AA 研   | 准教授       |

## II-2.3 内部委員会・業務担当

### II-2.3.1 内部委員一覧

**企画運営委員会** 2017.4.1 - 2019.3.31(2カ年)

(選出) 澤田英夫、黒木英充、床呂郁哉

(指定) 飯塚正人所長(委員長)、中山俊秀副所長、星泉 IRC 長、近藤信彰 FSC 長、  
西井凉子研究戦略策定委員会委員長

**研究戦略策定委員会** 2017.4.1 - 2019.3.31(2カ年)

(選出) 西井凉子(委員長)、太田信宏、高松洋一、外川昌彦、山越康裕、渡辺己

(指定) 飯塚所長、中山副所長、星 IRC 長、近藤 FSC 長

**共同研究専門委員会** 2017.4.1 - 2019.3.31(2カ年)

飯塚所長、中山副所長、星 IRC 長、近藤 FSC 長、澤田英夫、黒木英充、床呂郁哉

### II-2.3.2 各種業務分担

(任期:2018.4.1～2019.3.31(1カ年))

**文献資料(図書)担当**

荒川慎太郎(担当長)、床呂郁哉、熊倉和歌子

**国際交流・フォーラム担当**

渡辺己(担当長)、栗原浩英、黒木英充

## 編集担当

河合香吏(担当長)、西井涼子、黒木英充、苺谷康太、澤田英夫、山越康裕

## 出版担当

峰岸真琴(担当長)、高島淳、苺谷康太、児倉徳和

## 広報企画担当(『FIELDPLUS』・広報物制作・企画展担当)

太田信宏(担当長)、高松洋一(『FIELDPLUS』編集長)、星泉、伊藤智ゆき、錦田愛子、野田仁、児倉徳和、吉田ゆか子

## 基礎データ担当(要覧・ウェブサイト・年次報告書)

品川大輔(担当長/Web 管理者)、澤田英夫(要覧・Web 担当長)、小田淳一(要覧)、小倉智史(要覧)、椎野若菜(要覧)、山越康裕(年次報告書担当長)、栗原浩英(年次報告書)、錦田愛子(年次報告書)

\* 要覧と Website の改訂に関しては、基礎データ担当全員で携わる。

## 研修担当

塩原朝子(担当長)、呉人徳司、伊藤智ゆき、椎野若菜、倉部慶太

## 海外学術フォーラム担当

外川昌彦(担当長)、深澤秀夫、床呂郁哉、呉人徳司、近藤信彰、野田仁、佐久間寛

## 地域研究コンソーシアム担当

石川博樹(担当長)、西井涼子

## II-2.3.3 全学委員一覧

### <全学委員会等>

| 会議・委員会等名           | 氏名   | 委員の別           | 任期                  |
|--------------------|------|----------------|---------------------|
| 経営協議会              | 飯塚正人 | 役職指定委員         | 2017.4.1-2019.3.31  |
| 総合戦略会議             | 飯塚正人 | 役職指定委員         | 2017.4.1-2019.3.31  |
| 教育研究評議会            | 飯塚正人 | 役職指定委員         | 2017.4.1-2019.3.31  |
|                    | 中山俊秀 | 役職指定委員         | 2017.4.1-2019.3.31  |
| 研究活動に関わる不正防止計画推進本部 | 飯塚正人 | 役職指定委員         | 2017.4.1-2019.3.31  |
| 情報公開・個人情報保護委員会     | 飯塚正人 | 役職指定委員         | 2017.4.1-2019.3.31  |
| ハラスメント防止委員会        | 飯塚正人 | 役職指定委員         | 2017.4.1-2019.3.31  |
|                    | 塩原朝子 | AA 研所長の推薦による委員 | 2017.5.21-2019.5.20 |
| 情報マネジメント委員会        | 飯塚正人 | 役職指定委員         | 2017.4.1-2019.3.31  |
|                    | 星 泉  | 委員(指名選任、IRC 長) | 2017.4.1-2019.3.31  |
| 基金委員会              | 飯塚正人 | 役職指定委員         | 2017.4.1-2019.3.31  |

|                      |       |                |                    |
|----------------------|-------|----------------|--------------------|
| 苦情処理委員会<br>(苦情処理相談員) | 高松洋一  | AA 研所長の推薦による委員 | 2017.4.1-2019.3.31 |
| 危機管理委員会              | 飯塚正人  | 役職指定委員         | 2017.4.1-2019.3.31 |
| 図書館委員会               | 荒川慎太郎 | 文献資料担当長を選任     | 2017.4.1-2019.3.31 |
| 文書館運営委員会             | 飯塚正人  | 役職指定委員         | 2017.4.1-2019.3.31 |
| 国際交流会館運営委員会          | 石川博樹  | 選出委員           | 2018.4.1-2020.3.31 |
|                      | 野田 仁  | 選出委員           | 2018.4.1-2020.3.31 |
| 保健管理センター運営委員会        | 飯塚正人  | 役職指定委員         | 2017.4.1-2019.3.31 |
|                      | 荒川慎太郎 | AA 研所長の推薦による委員 | 2018.4.1-2020.3.31 |
| 建学 150 周年記念事業委員会     | 河合香吏  | 学長指名による委員      | 2017.4.1-2019.3.31 |

#### <全学本部>

| 名称                              | 氏名   | 委員の別            | 任期                 |
|---------------------------------|------|-----------------|--------------------|
| 広報マネジメント・オフィス                   | 太田信宏 | オフィス長指名による委員    | 2017.4.1-2019.3.31 |
| 財務・施設マネジメント・オフィス<br>(施設有効活用 WG) | 飯塚正人 | 役職指定委員          | 2017.4.1-2019.3.31 |
| 財務・施設マネジメント・オフィ<br>ス (環境向上 WG)  | 苅谷康太 | オフィス長指名による委員    | 2017.4.1-2019.3.31 |
| 社会連携マネジメント・オフィス                 | 栗原浩英 | オフィス長指名による委員    | 2017.4.1-2019.3.31 |
| 全学点検・評価委員会                      | 太田信宏 | IR 委員会副委員長を指名選任 | 2017.4.1-2019.3.31 |
| 男女共同参画部会(人事マネジ<br>メント・オフィス)     | 椎野若菜 | オフィス長指名による委員    | 2017.4.1-2019.3.31 |

#### <その他>

| 名称        | 氏名   | 委員の別           | 任期                  |
|-----------|------|----------------|---------------------|
| ハラスメント相談員 | 山越康裕 | AA 研所長の推薦による委員 | 2017.5.21-2019.5.20 |
|           | 西井凉子 | AA 研所長の推薦による委員 | 2017.5.21-2019.5.20 |
| 研究科協議会    | 渡辺己  | AA 研所長の推薦による委員 | 2017.4.1-2019.3.31  |

#### <研究アドミニストレーションに置くワーキング・グループ>

| 名称           | 氏名   | 任期                 |
|--------------|------|--------------------|
| 学内学会立ち上げ WG  | 飯塚正人 | 2016.4.1-2019.3.31 |
| オープンアクセス化 WG | 飯塚正人 | 2016.4.1-2019.3.31 |
|              | 峰岸真琴 | 2016 年度～           |
| 知的財産 WG      | 山越康裕 | 2016 年度～           |

## II-3 研究活動の詳細

### II-3.1 センター

#### II-3.1.1 情報資源利用研究センター

センター長: 星泉

副センター長: 澤田英夫

センター員: 倉部慶太、小倉智史、小田淳一、高松洋一、品川大輔、中山俊秀

##### 1. アジア・アフリカ言語文化資料の情報資源化の推進

本年度は以下のプロジェクトを支援し、アジア・アフリカ言語文化資料の情報資源化を引き続き推進した。

###### 1) 『浅井資料』電子公開に向けた電子データの複製(新規プロジェクト)

代表者: 荒川慎太郎

公開 URL: <http://www.tufs.ac.jp/library/etc/AAshiryoshitsu.html#asai>

コンテンツの主要言語: 日本語

内容の説明: AA 研に所蔵される、故浅井恵倫教授の研究ノート・手稿を電子化。DVD-R の複製を作製し、研究所文献資料室の端末(のみ)で閲覧可能にした(将来的には web での閲覧を計画中)。

今年度の活動: IRC の設備、室員の協力のもと、正副の複製を DVD-R で作製し、研究所文献資料室に収めた(資料室の端末で閲覧を開始した)。

###### 2) アイヌ語音声資料の文字化テキスト対応づけと公開

代表者: 奥田統己、山越康裕

プロジェクト参加者: 小林美紀、深澤美香、吉川佳見、欠ヶ端和也、阪口諒、唐柏炎、喜多直人、山田慎太郎

公開 URL: <https://ainugo.aa-ken.jp>

公開 URL: <http://ainugo.mond.jp/>

コンテンツの主要言語: アイヌ語、日本語

内容の説明: 田村すゞ子氏により採録されたアイヌ語資料のオンライン版。対応する日本語訳が付されたアイヌ語(カタカナ表記・ローマ字表記)を見ながら、ポーズによる切れ目ごとに音声聞くことができる。

今年度の活動: 昨年度までに公開した 17 編の資料に加え、新たに 7 編のテキスト(口承文芸 5 編、お祈り 2 編)を追加した。昨年度追加した検索機能に、「語」単位の検索、AND 検索における語の出現順序指定を追加した。

### 3) シャルダン『ペルシア旅行記』画像資料デジタル・ライブラリー構築(新規プロジェクト)

代表者: 近藤信彰

公開 URL: <http://chardinperse.aa-ken.jp/>

コンテンツの主要言語: 日本語

内容の説明: 17世紀にイランを旅行したジャン・シャルダンの旅行記の図録(AA 研所蔵)のデジタル・ライブラリー。

今年度の活動: 画像資料のデジタル化を行い、それらをダウンロードできるウェブサイトを構築した。

### 4) オスマン演劇ポスター画像公開

代表者: 江川ひかり

公開 URL: <https://osmanlitiyatiro.aa-ken.jp/>

コンテンツの主要言語: トルコ語、英語

内容の説明: AA 研所蔵のオスマン帝国末期の演劇ポスター・プログラム 170 点の画像を、劇団名、演目、上演年月日、劇場などの基本情報を含んだ「劇団別基本表」とともにデータベース化したもの。

今年度の活動: ポスターを印刷した印刷所名と住所、ポスターに広告を出した会社名、広告の製品名、会社住所をデータベースに加えた。検索画面のポップアップがアルフェベット順に配列されるように改良した。また劇団名や演目などの表記ヴァリエントを名寄せし、オリジナルのポスターで表記上の差異があっても、検索結果に反映するようにした。

### 5) オスマン演劇ポスター・音楽データベース

代表者: 松本菜穂子

公開 URL: <http://osmanlitiyatiro-musik.aa-ken.jp>

コンテンツの主要言語: トルコ語

内容の説明: AA 研所蔵のオスマン演劇ポスター・プログラムに掲載されている音楽に関する情報を抽出して、昨年度に公開されたオスマン演劇ポスター・プログラムの画像データベースと連動した新たなデータベースを公開する。

今年度の活動: 条件絞り込み検索を改善し、条件該当するポスターの全情報ではなく、該当する演目のみを表示するように改善しました。データベースの項目を「演目」単位に構造化して表示するように改善した(情報のない項目は非表示)。あわせて項目の見直し、整理を行なった。

### 6) Matsya プロジェクトマイクロフィルムデジタル化

代表者: 小倉智史

プロジェクト参加者: 置田清和

公開 URL: <http://www.aa.tufts.ac.jp/~ogura/project/matsya/index.html>

コンテンツの主要言語: サンスクリット、ヒンディー語、テルグ語、タミル語

内容の説明: インドの各写本図書館、寺院に収蔵されていたヴィシュヌ教関連作品 1679 点の写本を、アメリカのスミソニアン博物館が Matsya Project という企画のもと 1980 年代にマイクロフィルム化した。マイクロフィルムの経年劣化によって利用できなくなることが心配されたため、この度写本の画像を jpg ファイル形式でデジタル化したもの。

今年度の活動: 2018 年度事業では、作品総数 1,679 点のうち、南インドのシュリー・ヴァイシュナヴァ派に関連した作品を中心に 294 点を jpg 形式でデジタル化した。画像自体の公開にあたっては、元の写本を所蔵している機関から許諾を得る必要があるため、ひとまずはデジタル化した作品のタイトルを、次いでメタデータを公開する。今後写本の所蔵機関から許諾が取れ次第、順次画像を公開していく。なお、科研費国際共同研究強化 (B) の予算で 2019 年度にデカン地方の調査を予定しており、その際に Sanskrit College Melkote (カルナータカ州)等を訪れる予定。

#### 7) 『清文彙書』デジタル画像化(新規プロジェクト)

代表者: 早田清冷

公開 URL: <https://manjuisabuhabithe.aa-ken.jp/>

コンテンツの主要言語: 満洲語、漢語、日本語

内容の説明: 本 IRC プロジェクトでは、満洲語漢語辞典である『清文彙書』(1751)の個人蔵本をデジタル画像化した。将来的に、オンラインにて公開することを目指す。

今年度の活動: 将来的なオンライン公開に向けて、他のプロジェクトで作成公開するデータベースの一部として使用するために 18 世紀の辞典『清文彙書』を 3,600 万画素デジタル撮影にてデジタル画像化した。

#### 8) モンゴル諸語対照基本語彙データベース

代表者: 山越康裕

公開 URL: <https://mongolicbv.aa-ken.jp/index.htm>

コンテンツの主要言語: モンゴル諸語、日本語、英語、中国語

内容の説明: モンゴル諸語間の基本語彙を検索・対照するためのデータベース。

今年度の活動: 過年度に開発されたツールを使い、新たにモンゴル語チャハル方言のデータを追加公開した。

#### 9) チュルク諸語対照基礎語彙(第 5 期)

代表者: 児倉徳和

公開 URL: <https://turkbv.aa-ken.jp/turkbv2018/index.html>

コンテンツの主要言語: チュルク系諸言語

内容の説明: チュルク諸語の基礎語彙の音声付きデータベース。インターフェースは日本語のほか英語・中国語も利用可能。現在、13 の言語の 24 の変種(文語等文字資料も含む)が利用可能。

今年度の活動: 過年度に開発した音声切り貼りツールを利用し、既に登録されている音声の調整をおこなったほか、新たにトルクメン語のデータ(1 方言 1 話者)を登録した。

#### 10) Old Tibetan Documents Online

代表者: 岩尾一史、星泉

公開 URL: <https://otdo.aa-ken.jp/>

コンテンツの主要言語: 英語

内容の説明: 古チベット語文献のテキストデータベースです。碑文史料と中央アジアの出土文書に書

かれている古チベット文を収集してデータベース化しており、Key Word in Context による検索を行うことができる。また各文献の主要な研究の情報も提供している。

今年度の活動: すでに構築済みである Old Tibetan Documents Online のウェブサイト、新たなテキストデータを加えてデータベースを充実させることを目的とした。新たなテキストの入力と検証作業を進め、合計 72 件のテキストデータと関係データをデータベースにアップした。

#### 11) マレー言語語地図の作成とその元となるデータ収集のシステム開発(新規プロジェクト)

代表者: 塩原朝子

公開 URL: [https://malayvarieties.aa-ken.jp/?page\\_id=136](https://malayvarieties.aa-ken.jp/?page_id=136)

コンテンツの主要言語: 英語

内容の説明: 共同利用・共同研究課題「マレー語の変異の研究」でメンバーが調査を行なっている地点とそこで話されている変種名を示す地図を作成。地図からは各変種のページへとリンクしている。(2019 年度に各ページに内容を入れる予定。)

今年度の活動: (1)スマートフォン、タブレット、パソコンなどで調査が可能な社会言語学調査システムの開発、および(2)上記の地図の作成を行った。しかし、(1)は実践面で必ずしもうまくいかなかった。

#### 12) 「カチン・ポータルサイトの構築」(新規プロジェクト)

代表者: 倉部慶太

プロジェクト参加者: 澤田英夫、今村真央

公開 URL: <http://kachin.lagoinst.info>

コンテンツの主要言語: 日本語、英語

内容の説明: カチン人の言語文化に関する情報資源を効率的に探し出すための玄関口となるポータルサイト。カチンの言語・文化・社会・宗教の紹介、カチン諸語の音韻・形態・文法・語彙の紹介、カチンに関する検索可能な文献目録などを公開する。

今年度の活動: 本年度はカチン・ポータルサイトと題する日英語対応のウェブサイトを構築した。カチンの言語文化を紹介したページ、カチン諸語の概要を紹介したページ、および、カチンに関する検索可能な文献目録を作成した。

#### 13) Unicode 対応多言語テキストを簡単に作成する補助ツールの作成と公開(新規プロジェクト)

代表者: 高橋洋成

公開 URL: <https://easy-multiscript.aa-ken.jp/>

コンテンツの主要言語: 日本語

内容の説明: テキストに埋め込まれた LaTeX ライクなコマンドを、Unicode 文字列に変換するシンプルなウェブツールです(たとえば、 $\text{\textipa{/d\!da:\!b\!x\{i\}d\!x\{i\}/}}$  → /d̥aːb̥i̯di̯/)。コマンドは利用者からも自由に定義できる。

今年度の活動: すでに作成済みであった Unicode テキスト変換ツールの公開を目指し、操作性に優れたウェブサイトのデザインを専門業者に依頼した。本ツールはウェブを通じて、デスクトップ端末や携帯端末など多様な機器から利用することが可能になった。

#### 14) モンゴル語および関連諸言語用ソフトキーボード(新規プロジェクト)

代表者: 山越康裕

公開 URL: [https://mongolicbv.aa-ken.jp/list\\_of\\_webkeyboard.html](https://mongolicbv.aa-ken.jp/list_of_webkeyboard.html)

コンテンツの主要言語: 日本語、英語、モンゴル語

内容の説明: モンゴル語および関連諸言語の入力をブラウザ上で簡便におこなうためのソフトキーボードです。現在、キリル文字正書法のあるモンゴル語、ブリヤート語、カルムイク語、モンゴル文字、モンゴル文字ラテン字転写をブラウザ上で入力し、入力することができる。

今年度の活動: 現在展開中の共同利用・共同研究課題「モンゴル諸語の言語変容—外的要因と内的要因—」ではモンゴル語・モンゴル諸語のデータベース拡充を目的の一つに掲げているが、そのデータベース利用時に、関連する文字の入力を支援するツールがあることが望まれている。モンゴル語用キリル文字キーボードは配列がロシア語とも異なり、また **ө**, **ү** という特殊な文字を含むことから、キーボードに慣れない者にとっては非常に入力が困難である。同じくキリル文字を用いるブリヤート語、カルムイク語に関しても、**ж**, **н**, **h**, **ә** といった特殊な文字が、モンゴル文字ラテン字転写も **ö**, **ü**, **č**, **γ**, **j** という文字がそれぞれあり、研究者にとってはこれらの文字の入力は非常に煩瑣な作業となっている。さらにモンゴル文字は入力方式が統一されておらず、OS 等環境に依存するところが大きく、環境による制限がある。

こうした背景から、森企画にソフトキーボードの開発を依頼した。今回公開したソフトキーボードはブラウザ上で動作するうえ、Windows8 以降のタッチパネルではタッチによる入力も可能なため、入力が非常に簡便化された。

さらに今回開発したソフトキーボード設定ツールは、csv ファイルによってキー割り当てをおこなう設計になっており、単にモンゴル諸語だけでなく他の言語を対象としたソフトキーボードも容易に設定できることから、とくに入力環境の整っていないマイナー言語の入力支援ツールとして活用することが可能である。

## 2. IRC ワークショップの開催

IRC ワークショップは、所内外の主に若手研究者を対象に、蓄積した研究成果・手法を発信し、普及させることを目的とするもので、このワークショップによって発信される研究成果・手法に関心を持つ参加者自身の研究を促進し、そうした研究者を募って共同研究を組織し、ひいては、その研究成果を核とした研究分野の形成・発展を促すことが期待されている。2018 年度に開催したワークショップは以下の通り。

### 1) IRC 国際ワークショップ「多文化社会におけるアーカイビングの意義」

日時:2018 年 8 月 2 日、AA 研(304)

講演者:セリア・シュルファ(パリ日本文化会館プロジェクトコンクール(2018)入賞者)、ヤセル・ヤクビ(パリ日本文化会館プロジェクトコンクール(2018)入賞者)、カンタン・ハーゲン(パリ日本文化会館プロジェクトコンクール(2018)入賞者)

企画・進行:小田淳一(AA 研)

内容の説明: パリ日本文化会館が青少年の日仏文化交流を目的として毎年開催している短期派遣事業「プロジェクト・コンクール」の 2018 年度入賞者のうち、アジア・アフリカ地域に起源を持つ三人の学生を招き、IRC が公開している当該地域の情報資源が彼らの民族的アイデンティティ擁護にどのような意義を持つか等について意見交換を行った。

### 2) IRC Digital Humanities ワークショップ「『30 年後も使えるデータ』を目指す」

日時: 2018年12月5日、AA研(304)

講演者: 和氣愛仁(筑波大学准教授)、高橋洋成(AA研特任研究員)

企画・進行: 高橋洋成

内容の説明: 近年のデジタル・ヒューマニティーズの動向を踏まえ、データの長期的な保存と利用を両立させるための工夫について情報交換を行った。

3) IRC ワークショップ「危機言語アーカイブと言語ドキュメンテーション」(LingDy3 プロジェクトとの共催)

日時: 2019年2月20日、AA研(304)

講演者: 木本幸憲(日本学術振興会/名古屋大学大学院)、倉部慶太(AA研)

企画・進行: 倉部慶太

内容の説明: フィールドワークにより蒐集した一次資料の保存と公開を目的とした言語・文化のデジタルアーカイブに関心が高まっている。この状況をふまえ、実際にロンドン大学 SOAS の危機言語アーカイブ(ELAR)およびオーストラリア研究カウンシル(ARC)ほかの危機文化アーカイブ(PARADISEC)にデータを登録している研究者を招き、言語ドキュメンテーションに関する議論を行った。

### 3. デジタル・ヒューマニティーズに関する国際シンポジウムへの参加

2018年7月6日に一橋講堂にて開催された東京大学主催のデジタル・ヒューマニティーズにかかわる国際シンポジウム「デジタル時代における人文学の学術基盤をめぐって」に参加し、IRCの活動を振り返り、現在の活動を広報する「アジア・アフリカの研究資源を構築して20年」というパネル発表を行うとともに、他の研究拠点との交流を行った。

## II-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター

センター長: 近藤信彰

副センター長: 太田信宏

コロキウム担当: 外川昌彦、塩原朝子、熊倉和歌子

フィールドネット担当: 太田信宏、吉田ゆか子

JacMES 担当: 錦田愛子

KKLO 担当: 床呂郁哉、吉田ゆか子

### 1. 研究手法の開発

フィールドサイエンスの研究手法を開発し、洗練させるべく、公開研究会形式の「フィールドサイエンス・コロキウム」について、2010年度組織面・制度面での整備を進めて海外調査専門委員会のもとに設置した「フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会」を中心に、コロキウムの企画・運営体制を強化した。2018年9月21日(金)及び2018年11月18日(日)にそれぞれ「『環境変化とインダス文明』プロジェクトから」と「『地域研究からみた人道支援』をめぐって」と題したワークショップを基幹研究人類学班との共催で開催した。

### 2. 新たな研究ネットワークの形成

フィールドネットでは学術連携および交流を目的とするウェブ上における所属や研究分野を超えた交流の場を提供すると共に、公募の結果採択した「フィールドネット・ラウンジ」を次のように2回開催した。

・ワークショップ「西アフリカ・イスラーム研究の新展開」(2019年1月20日(土)開催)

・ワークショップ「共同研究のすすめ:ブラジル地域研究における Cross-region×Collaboration の実践を通じて」(2019年2月16日(土)開催)

また、研究手法の開発および共有のための、フィールドネットワークワークショップ「地理情報から読み解く歴史:イスラーム史におけるGISの活用」を開催した(2019年3月21日(木))。

### 3. 現地研究拠点

本研究所では、アジア・アフリカをめぐる研究状況と学術的戦略構想に鑑み、ベイルート(レバノン)とコタキナバル(マレーシア)に研究拠点を設置して国際共同研究などの活動を続けている。ベイルートについては、レバノン政府の閣議決定による認可を得て2006年2月に正式に中東研究日本センター Japan Center for Middle Eastern Studies(略称 JaCMES)を発足させ、コタキナバルについても2008年3月にコタキナバル・リエゾンオフィス Kota Kinabalu Liaison Office(略称 KKLO)を設置して活動を開始した。現在はフィールドサイエンス研究企画センターが両拠点の維持・運営にあたっている。

#### 中東研究日本センター(JaCMES)

- ・ 2018年9月6日(木)にAA研にて共同研究課題 JaCMES 実施分 “Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies” 第5回研究会を実施した。
- ・ 2018年11月28日(水)にJaCMESにてKKLOとの共催のラウンドテーブル JaCMES – LERC – KKLO Joint Roundtable “Migrants and Refugees Dynamics and Perception toward their Integration”を開催した。
- ・ 2018年11月30日(金)–12月1日(土)にJaCMESにて第11回若手研究者報告会を開催した。
- ・ 2019年3月1日(金)にレバノン、バラマンド大学で共同研究課題 “Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies” 第6回研究会を実施した。
- ・ 2019年3月19日(火)にベイルートのアメリカン大学で、JaCMES-AUB Lecture Meeting: Examining Najeeb Saleeby as American Colonial Advocate and Educator を開催した。

#### コタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO)

- ・ 2018年7月15日(日)にAA研にて共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)」の第4回研究会を開催した。
- ・ 2018年8月5日(日)にコタキナバルにおいて、共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)」の第5回研究会を開催した。
- ・ 2018年8月13日(月)–17日(金)にマレーシア・コタキナバルにおいて、サバ州における会話言語の研究に関するワークショップを開催した。
- ・ 2018年9月10日(月)にJICA フィリピン事務所にてフィリピン南部ムスリム社会に関する実務者・専門家ワークショップを開催した。
- ・ 2018年11月28日(水)にJaCMESにて共催のラウンドテーブル JaCMES – LERC – KKLO Joint Roundtable “Migrants and Refugees Dynamics and Perception toward their Integration”を開催した。
- ・ 2019年2月11日(月)にAA研にて共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)」の第6回研究会を開催した。

- ・ 2019年2月17日(日)に国際交流基金ジャカルタ日本文化センターにて邦人向け講演会を開催し、中村光男氏(千葉大学)が東南アジアのムスリムに関する講演を行った。
- ・ 2019年2月19日(火)にインドネシアのアフマド・ダーラン大学で、Progressive Civil Societyに関する国際会議を開催した。
- ・ 2019年3月13日(水)にコタキナバルのマレーシア・サバ大学(UMS)において東南アジアの社会と文化に関する講演会を開催した。

## II-3.2 共同利用・共同研究課題

### II-3.2.1 共同利用・共同研究課題実施状況

#### バントウ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究(フェーズ 1)

研究期間: 2016-2018 (代表: 阿部優子/所員 2、共同研究員 16)

所員: 渡辺己、品川大輔

共同研究員: 阿部優子、安部麻矢、梶茂樹、角谷征昭、神谷俊郎、小森淳子、塩田勝彦、古本真、牧野友香、森本雪子、米田信子、若狭基道、Koen Boston, Nancy C. Kula, Seunghun Lee, Lutz Marten

#### 研究会等の内容

2018年度第1回研究会(2018年7月22日、AA研小会議室)

角谷征昭(AA研共同研究員、上智大学)

「ニハ語(M.23)における動詞語尾のインブリケーションとその構造」

阿部優子(AA研共同研究員、東京女子大学)

「マイクロバリエーション・パラメターのマッピング No.68 -ile の分布を中心に」

全員

「成果物編集・出版に関する打ち合わせ、および次期プロジェクトの目標設定に関する打ち合わせ」

2018年度第2回研究会(2018年12月22日、AA研小会議室)

米田信子(AA研共同研究員、大阪大学)

「主語のプロパティにおけるマイクロバリエーション」

全員

「メンバー研究言語について、主語のプロパティ質問票データ提供、類型に関する議論」

全員

「成果物編集・出版、および次期プロジェクトに関する打ち合わせ」

#### 研究成果一覧

[学術論文]計 16 件

1. Shinagawa, Daisuke, “Uru (E622D)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 106–152, 2019.3, ILCAA. (査読有)
2. Shinagawa, Daisuke, “Rombo (E623)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 153–189, 2019.3, ILCAA. (査読有)
3. Nakayiza, Judith, and Nobuko Yoneda, “Ganda (JE15)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 357–393, 2019.3, ILCAA
4. Yoneda, Nobuko, “Matengo (N13)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 418–439, 2019.3, ILCAA.
5. 梶茂樹「ニョロ語の人名」, 『一般言語学論叢』21, 1–31, 2018.12. (査読有)
6. 梶茂樹「ニョロ語のタブー表現: その記述と分析」, 『京都産業大学論集. 人文科学系列』52, 3–28, 2019.3. (査読有)
7. Kaji, Shigeki, “Nyoro (JE11)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 308–331, 2019.3, ILCAA.
8. 安部麻矢「マア語における TA 標識の文法化」, 『スワヒリ&アフリカ研究』30, 1–13, 2019.3. (査読有)
9. Abe, Maya, “Normal mbugu (G221)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 224–255, 2019.3, ILCAA.
10. Abe, Maya, “Inner Mbugu (G221)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 256–286, 2019.3, ILCAA.
11. Komori, Junko, “Kerewe (JE24)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 394–417, 2019.3, ILCAA.
12. 小森淳子「バンバラ語の自他交替と自動詞の特徴について: 「受動文」から考察する」, 『スワヒリ&アフリカ研究』30, 33–48, 2019.3.
13. Abe, Yuko, “Bende (F12)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 190–223, 2019.3, ILCAA.
14. Furumoto, Makoto, “Makunduchi (G43c)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic microvariation in Bantu*, 287–307, ILCAA, 2019.
15. 牧野友香「ランバ語のテンス・アスペクト体系の再検討」, 『スワヒリ&アフリカ研究』30, 14–32, 2019.3. (査読有)
16. 若狭基道「カンバタ語のテキスト」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』97, 45–76, 2019.3. (査読有)

[口頭発表等]計 27 件

1. Shinagawa, Daisuke, “Linguistic Diversity and Unity in Swahili Contact Varieties: A Shared Element not Attested in “Swahili””, SOAS and Beijing Foreign Studies University Joint Conference Diversity of Cultures and Languages in Asia and Africa, 2018.11.8, SOAS University of London, London, UK.
2. Shinagawa, Daisuke, “\*-ag in Kilimanjaro Bantu: Its Diachronic Path and Implications to Microtypology”, the 9th World Congress of African Linguistics (WOCAL9), 2018.8.25, Mohammed V University, Rabat, Morocco.
3. Shinagawa, Daisuke, “Notes on the Distribution of Relative Constructions in Sheng: With Special

- Reference to -enye RC”, The 7th International Conference of Bantu Languages (Sintu7), 2018.7.9, The River Club, Cape Town, South Africa.
4. Shinagawa, Daisuke, and Nico Nassenstein, “Toward a ‘State of the Art’: Variation in Swahili, Current Approaches, Trends and Directions”, The 7th International Conference of Bantu Languages (Sintu7), 2018.7.9, The River Club, Cape Town, South Africa.
  5. Shinagawa, Daisuke, “Typological Variation of Negative Particles in Chaga”, The 20th International Congress of Linguists, 2018.7.2, Cape Town International Congress Centre, Cape Town, South Africa.
  6. 品川大輔「ウル語(Bantu E622D)の否定標示」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.26, 北海道大学.
  7. Yoneda, Nobuko, and Yukiko Morimoto, “Proto-Bantu Subject and Topic”, International Conference on Reconstructing Proto-Bantu Grammar, 2018.11.22, University of Ghent, Ghent, Belgium.
  8. Yoneda, Nobuko, and Judith Nakayiza, “Multiple Object Constructions in Ganda”, The 9th World Congress of African Linguistics, 2018.8.26, Mohammed V University of Rabat. Rabat, Morocco.
  9. Morimoto, Yukiko, and Nobuko Yoneda, “Cross-Bantu Variation in the Properties of Subject”, The 9th World Congress of African Linguistics, 2018.8.25, Mohammed V University, Rabat, Morocco.
  10. Yoneda, Nobuko, and Yukiko Morimoto, “Degrees of Topicality in Bantu Subjects”, The 7th International Conference on Bantu Languages, 2018.7.10, The River Club, Cape Town, Cape Town, South Africa.
  11. Kaji, Shigeki, “A Comparative View of Tone of West-Ugandan Bantu Languages through Field Research”, ReNeLDA 言語ドキュメンテーションセミナー, 2019.2.22, University of Dar es Salaam, Dar es Salaam, Tanzania.
  12. 梶茂樹「ニョロ語のタブー表現」, 日本アフリカ学会, 2018.5.27, 北海道大学.
  13. 梶茂樹「ニョロ語のタブー表現:その記述と分析」, 日本アフリカ学会関西支部例会, 2018.5.19, 龍谷大学.
  14. 梶茂樹「アフリカにおける多言語使用:特にコンゴ民主共和国とウガンダの例を中心に」, 日本フランス語学会 2018 年度談話会, 2018.10.21, 青山学院大学.
  15. Kaji, Shigeki, “On the Homology of the Object Relative Construction and the Subordinate 1 Form in Nyoro Verb Conjugation”, The 7th International Conference on Bantu Languages, 2018.7.10, University of Cape Town, Cape Town, South Africa.
  16. Abe, Maya, “The Present-day Linguistic/sociolinguistic Situation in Mbugu/Ma’a”, 9th World Congress of African Linguistics, 2018.8.26, Mohammed V University, Rabat, Morocco.
  17. 小森淳子「バンバラ語の動詞の「他動性」に関する考察:他動詞と自動詞を分けるもの」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.27, 北海道大学.
  18. Abe, Yuko, “Verb Categories in Bende (F.12)”, The 7th International Conference on Bantu Languages, 2018.7.10, University of Cape Town, Cape town, South Africa.
  19. 古本真「スワヒリ語マクンドゥチ方言のコピュラの強調形 njo について:背景標識としての分析」, 日本アフリカ学会第 55 回大会, 2018.5.27, 北海道大学.
  20. Furumoto, Makoto, “The Contracted Demonstrative as a Topic-marking Particle in Kimakunduchi”, The 20th international congress of linguistics, 2018.7.5, The Cape Town International Convention Centre, Cape Town, South Africa.

21. Furumoto, Makoto, “On the origin of the Kimakunduchi aspect marker -me-”, The 7th international conference on Bantu languages, 2018.7.9, The River Club, Cape Town, South Africa.
22. Furumoto, Makoto, and Takahashi, Yasunori, “Kimakunduchi: A Dialect of Swahili without Word-stress”, The 9th world congress of African Linguistics, 2018.8.27, Mohammed V University, Rabat, Morocco.
23. Furumoto, Makoto, “Perfective and Perfect in Kimakunduchi”, Kongamano la pili la kimataifa la Kiswahili, 2018.12.13, Ukumbi wa Sheikh Idris Abdul Wakil, Zanzibar, Tanzania.
24. 牧野友香「ランバ語の TA 形態素-a についての一考察」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.27, 北海道大学.
25. 牧野友香「ランバ語(M54)の Anterior と属性叙述」, 日本言語学会第 156 回大会, 2018.6.23, 東京大学.
26. Makino, Yuka, “Three ‘Anterior-like’ Forms in Lamba”, 7th International Conference on Bantu Languages, 2018.7.10, University of Cape Town, Cape Town, South Africa.
27. Makino, Yuka, “The Distinction of Three ‘Near Past’ Forms in Lamba”, The 9th Word Congress of African Linguistics, 2018.8.27, Mohammed V University, Rabat, Morocco.

[図書]計 1 件

1. Shinagawa, Daisuke, and Yuko Abe, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu*, 2019.3, ILCAA.

[社会に向けた成果発表]計 3 件

1. 梶茂樹「第 20 回国際言語学者会議」報告, 『言語研究』154, 228–230, 2018.
2. 小森淳子「アフリカ研究の現場から:大阪大学外国語学部 スワヒリ語専攻の研究と教育」, 『アフリカ』58, 28–31, 2018.
3. 古本真「フィールド言語学への誘い:ザンジバル編」, 三省堂ワードワイズ・ウェブ (URL: [https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/field\\_linguistics\\_swahili07](https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/field_linguistics_swahili07) (2018 年 4 月の記事へのリンク))

## マレー語方言の変異の研究

研究期間: 2017–2019 (代表: 内海敦子/所員 1、共同研究員 11)

所員: 塩原朝子

共同研究員: 内海敦子、稲垣和也、スリ・ブディ・レストリ、長屋尚典、野元裕樹、降幡正志、三宅良美、Karl Alexander Adelaar, Antonia Soriente, Sonja Riesberg, Yanti

### 研究会等の内容

2018 年度第 1 回研究会 (2018 年 6 月 2 日、AA 研マルチメディアセミナー室)

2017 年度の実績と 2018 年度の計画について (全員)

長屋尚典 (AA 研共同研究員、東京外国語大学)

「Larantuka Malay の語彙」

野元裕樹(AA 研共同研究員、東京外国語大学)

「サバ州のマレー語の談話分析」

塩原朝子(AA 研)

「マレー語諸変種における active referent の現れ方」

スリ・ブディ・レストリ(AA 研共同研究員、立命館アジア太平洋大学)

「ランブン州バンダル・ランブンにおける人称代名詞の構造および社会言語学的背景」

稲垣和也(AA 研共同研究員、南山大学)

「マレー語ポンティアナッ方言を記述するための予備的考察」

三宅良美(AA 研共同研究員、秋田大学)

「ジャワ語話者のインドネシア語に見られる特徴」

野元裕樹(AA 研共同研究員、東京外国語大学)

「コーパス検索システム MALINDO Conc のデモンストレーション」

2018 年度第 2 回研究会(2018 年 10 月 13 日～14 日、AA 研マルチメディア会議室)

10 月 13 日

Yanti (ILCAA Joint Researcher, Atma Jaya Catholic University of Indonesia), Asako Shiohara (ILCAA)

“Standard Indonesian and Informal Indonesian: How do they differ?”

Thomas J. Connors (University of Maryland)

“Javanese Influenced Indonesian”

Yoshimi Miyake (ILCAA Joint Researcher, Akita University)

“A Preliminary Study on Mixing and Switching of Indonesian and Javanese”

Michael C. Ewing (University of Melbourne)

“Features of Indonesian as Spoken in Bandung”

Naonori Nagaya (ILCAA Joint Researcher, Tokyo University of Foreign Studies)

“Flores Malay: A Preliminary Description”

Atsuko Utsumi (ILCAA Joint Researcher, Meisei University)

“Stress in Manado Malay and Lampung Malay”

Timothy Charles Brickell (Fellow of ILCAA, University of Melbourne)

“Manado Malay: Features, Contact, and Contrasts”

10 月 14 日

Nazarudin (University of Indonesia)

“The Use of Melayu Tenggara Jauh in the Social Media among the Oirata Community on Facebook Group Putra Putri Oirata”

June Jacob (Artha Wacana Christian University), Charles E. Grimes (Artha Wacana Christian University)

“Aspect and Directionality in Kupang Malay Serial Verb Constructions”

Sri Budi Lestari (ILCAA Joint Researcher, Ritsumeikan Asia Pacific University)

“Some Features of Colloquial Indonesian Seen on Native Javanese and Lampungese Speakers in Lampung”

Kazuya Inagaki (ILCAA Joint Researcher, Nanzan University)

“Word Prominence in Pontianak Malay”

Antonia Soriente (ILCAA Joint Researcher, University of Naples ‘L’Orientale’)

“Towards a Characterization of the Language Spoken in Kalimantan Utara: Middle Indonesian, Common Indonesian or Regional Indonesian? Notes on Morphosyntax”

Asako Shiohara (ILCAA), Yanti (ILCAA Joint Researcher, Atma Jaya Catholic University of Indonesia)

“Discourse Function of Di-clauses in Narratives”

Bradley McDonnell (University of Hawai’i at Mānoa)

“Focus Restrictions on Grammatical Relations in Besemah”

## 研究成果一覧

[学術論文]計 8 件

1. Nomoto, Hiroki, Shiro Akasegawa, and Asako Shiohara, “Reclassification of the Leipzig Corpora Collection for Malay and Indonesian”, *NUSA: Linguistic Studies of Languages in and around Indonesia* 65, 47–66, 2018.9. (査読有)
2. Nomoto, Hiroki, “The Development of the English-type Passive in Balinese”, *Language and Culture on Java and Its Environs*, 122–148, 2018, Universitas Indonesia, Depok, Indonesia. (査読有)
3. Nomoto, Hiroki, Kenji Okano, Sunisa Wittayapanyanon and Junta Nomura, “Interpersonal Meaning Annotation for Asian Language Corpora: The Case of TUFS Asian Language Parallel Corpus (TALPCo)”, 846–849, 2019.3, 『言語処理学会 第 24 回年次大会 発表論文集』.
4. Nagaya, Naonori, “Focus and Prosody in Tagalog”, *Perspectives on Information Structure in Austronesian Languages* (ed. by Sonja Riesberg, Asako Shiohara, and Atsuko Utsumi), 375–388, 2018.8. (査読有)
5. 三宅良美「悲劇的経験を語るナラティブについての言語学的研究: アイデンティフィケーションと一人称」, 『インドネシア言語と文化』24, 73–86, 2018.5.
6. Shiohara, Asako, and Anthony Jukes, “Two Definite Markers in Manado Malay”, *Perspectives on Information Structure in Austronesian Languages* (ed. by Sonja Riesberg, Asako Shiohara, and Atsuko Utsumi), 117–136, 2018.8, Language Science Press, Berlin, Germany. (査読有)
7. Shiohara, Asako, “Recent Stylistic Changes in Indonesian Recipes Observed in Voice Selection”, *NUSA: Linguistic Studies of Languages in and around Indonesia* 65, 67–80, 2018.9. (査読有)
8. 内海敦子「茨城県大洗町のインドネシア人: 日系三世と「研修生」のケーススタディ」, 『明星大学研究紀要—人文学部—日本文化学科』27, 87–106, 2019.3.

[口頭発表等]計 24 件

1. 稲垣和也「方言から言語記述を模索する: ドホイ語の音韻を事例として」, 京都大学言語学懇話会第 106 回例会, 2018.4.7, 京都大学文学部.
2. 稲垣和也「マレー語ポンティアナッ方言を記述するための予備的考察」, マレー語方言の変異の研究 第 4 回研究会, 2018.6.2, AA 研.
3. 稲垣和也「言語的な近接化と差異化について: インドネシア、カリマンタンにおけるドホイ語の音韻から」, 2018 年度南山学会文学・語学系列第 1 回研究例会, 2018.7.18, 南山大学.
4. 稲垣和也「(非)オーストロネシア諸語の辞書作り」, AA 研フォーラム: 言語研修(メエ語)文化講演, 2018.9.6, AA 研.

5. Inagaki, Kazuya, “Word Prominence in Pontianak Malay”, The Second International Workshop on Malay Varieties “A Research on Varieties of Malayic Languages”, The 5th meeting, 2018.10.14, ILCAA.
6. Lestari, Sri Budi and Atsuko Utsumi, “Address Terms in Indonesia”, Fourth International Conference on Asian Geolinguistics: Universitas Indonesia, Jakarta, 2018.5.4, University of Indonesia, Depok, Indonesia.
7. Miyake, Yoshimi, “Linguistic Features of Javanese-Indonesian Narratives of Trauma”, SEALS (Southeast Asian Linguistic Society), 2018.5.17, Wenzao Ursuline University of Languages, Kaohsiung, Taiwan.
8. Miyake, Yoshimi, “Talking about Tragic Experiences of September 30th 1965 Incident in Indonesia”, Israel Asian Studies Association, 2018.5.22, Hebrew University of Jerusalem, Jerusalem, Israel.
9. Miyake, Yoshimi, and Atsuko Utsumi, “Different Styles and Registers of Bahasa Indonesia Spoken by Javanese People”, ICAL: International Conference on Austronesian Linguistics, 2018.7.19, University of Antananarivo, Antananarivo, Madagascar.
10. Miyake, Yoshimi, “A Lingo-cultural Observation on Savanajaya in Buru Island”, An annual meeting of Japan Association for Indonesian Studies 2018, 2018.11.17, Nanzan University.
11. Miyake, Yoshimi, “Japanese and Westerners in Endo Shusaku’s Novels”, IAJS (Israeli Association of Japanese Studies), 2018.12.18, University of Tel Aviv, Tel Aviv, Israel.
12. Miyake, Yoshimi and Utsumi Atsuko, “Different Styles and Registers of Bahasa Indonesia Spoken by Javanese People”, 14th International Conference on Austronesian Linguistics, 2018.7.19, University of Antananarivo, Antananarivo, Madagascar.
13. Nomoto, Hiroki, and Hannah Choi, “The Apparent Lack of a Complementizer-trace Effect in Indonesian Supaya Complements”, The 22nd International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL), 2018.5.11, University of California, Los Angeles, Los Angeles, USA.
14. Nomoto, Hiroki, Shiro Akasegawa, and Asako Shiohara, “Building an Open Online Concordancer for Malay/Indonesian”, The 22nd International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL), 2018.5.12, University of California, Los Angeles, Los Angeles, USA.
15. 野元裕樹, 大久保弥「ペルシア語の焦点構文におけるコンピュータの生起制限」, 第 157 回日本語学会大会, 2018.11.17, 京都大学.
16. Nomoto, Hiroki, and Faridah Mohamed, “Factors Affecting Japanese University Students’ Choice of their Major Second Foreign Languages”, Asia-Pacific Symposium for the Teaching of Asian Languages, the Eighth CLS International Conference (CLaSIC 2018), 2018.12.6. National University of Singapore, Singapore.
17. 野元裕樹, 川村よし子「マレー語学習者を対象にした読解学習支援システムの開発について」, 外国語教育学会第 22 回研究報告大会, 2018.12.15, 東京外国語大学.
18. Nomoto, Hiroki, “Anti-classifier Contexts”, 言語学セミナー, 2019.2.21, Vietnam Academy of Social Sciences, Institute of Linguistics, Hanoi, Vietnam.
19. Nomoto, Hiroki, Kenji Okano, Sunisa Wittayapanyanon, and Junta Nomura, “Interpersonal Meaning Annotation for Asian Language Corpora: The Case of TUFS Asian Language Parallel Corpus (TALPCo)”, 言語処理学会第 25 回年次大会, 2019.3.14, 名古屋大学.

20. Shiohara, Asako, “Coding of Active References in Malay Varieties”, The 22nd International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL), 2018.5.12, University of California, Los Angeles, Los Angeles, USA.
21. Shiohara, Asako, “Coding of Active References in Malay Varieties”, The 14th International Conference of Austronesian Linguistics (ICAL14), 2018.7.18, University of Antananarivo, Antananarivo, Madagascar.
22. Utsumi, Atsuko, “Research on Stress and Intonation in Varieties of Malay: The Case of Manado Malay and Lampung Malay”, 2nd International Workshop on Varieties of Malayic Languages, 2018.10.13. ILCAA.
23. Utsumi, Atsuko, “The Tonsawang Language’s Basic Morphology and Syntactic Features”, 28th Meeting of Southeast Asian Linguistics Society, 2018.5.19, Wenzao Ursuline University of Languages, Kaohsiung, Taiwan.
24. Utsumi, Atsuko, “Discourse Functions of the Aspectual Clitics in Bantik”, 14th International Conference on Austronesian Linguistics, 2018.7.17, University of Antananarivo, Antananarivo, Madagascar.

[図書]計3件

1. 森山幹弘, 柏村彰夫, 稲垣和也『ワークブック インドネシア語 第1巻』, 2018.4, 三元社.
2. 森山幹弘, 柏村彰夫, 稲垣和也『ワークブック インドネシア語 第2巻』, 2018.8, 三元社.
3. 森山幹弘, 柏村彰夫, 稲垣和也『ワークブック インドネシア語 第3巻』, 2018.9, 三元社.

[社会に向けた成果発表]計1件

1. 内海敦子「新しい敬語と方言: 語用論と方言学の発展」, 明星大学日本文化学科公開講演会, 明星大学.

## アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究

研究期間: 2016–2018 (代表: 梶茂樹/所員 2、共同研究員 16)

所員: 品川大輔、澤田英夫

共同研究員: 梶茂樹、安部麻矢、阿部優子、角谷征昭、神谷俊郎、河内一博、古閑恭子、小森淳子、塩田勝彦、高村美也子、仲尾周一郎、古本真、牧野友香、米田信子、若狭基道、Seunghun Lee

### 研究会等の内容

2018年度第1回研究会(2018年6月9日、AA研小会議室)

古閑恭子(AA研共同研究員、高知大学)

「アカン語とンゼマ語の可譲渡/不可譲渡名詞」

梶茂樹(AA研共同研究員、京都産業大学)

「キガ語の声調」

2018年度第2回研究会(2018年10月20日、AA研小会議室)

若狭基道(AA研共同研究員、跡見学園女子大学)

「ウォライタ語普通名詞のアクセント」

安部麻矢(AA研共同研究員、大阪大学)

「マア語の名詞のトーンについて」

## 研究成果一覧

[学術論文]計17件

1. 梶茂樹「ニョロ語の人名」, 『一般言語学論叢』21, 1-31, 2018.12. (査読有)
2. 梶茂樹「ニョロ語のタブー表現: その記述と分析」, 『京都産業大学論集 人文科学系列』52, 3-28, 2019.3. (査読有)
3. Kaji, Shigeki, “Nyoro (JE11)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 308-331, 2019.3, ILCAA.
4. 若狭基道「カンバタ語のテキスト」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』97, 45-76, 2019.3. (査読有)
5. Nakao, Shuichiro, “Mountains do not Meet, but Men Do: Music and Sociocultural Networks among Arabic Creole-speaking Communities across East Africa”, *Arabic in Contact* (ed. by Stefano Manfredi and Mauro Tosco), 275-294, 2018, John Benjamins, Amsterdam, Netherlands. (査読有)
6. 仲尾周一郎「周縁アラビア語における喉頭化音: アラビア祖語強調音の再建に向けて」, 『アラブ・イスラム研究』16, 71-92, 2018. (査読有)
7. Komori, Junko, “Kerewe (JE24)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 394-417, 2018, ILCAA.
8. 小森淳子「バンバラ語の自他交替と自動詞の特徴について: 「受動文」から考察する」, 『スワヒリ&アフリカ研究』30, 33-48, 2019.3.
9. Shinagawa, Daisuke, “Uru (E622D)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 106-152, 2019.3, ILCAA.
10. Shinagawa, Daisuke, “Rombo (E623)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 153-189, 2019.3, ILCAA.
11. Abe, Yuko, “Bende (F12)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 190-223, 2019.3, ILCAA. (査読有)
12. 高村美也子「結婚式におけるキシミカントウイ儀礼: タンザニア、ボンデイ社会のエスニシティ」, 『アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究』7, 119-124, 2019. (査読有)
13. 高村美也子「ボンデイ社会における女性の死後の移動」, 『人類学研究所 研究論集第7号 定着／非定着の人類学: 「ホーム」とは何か』9, 141-153, 2019.
14. 高村美也子「女性の笑顔が弾ける子宝祈願儀礼: フィールドワーカー、踊り手の見習いになる?」『ラウンド・アバウト: フィールドワークという交差点』(神本秀爾, 岡本圭史編), 174-185, 2019.1, 集広舎.
15. 古閑恭子「ンゼマ語の可譲渡／不可譲渡名詞」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』97, 5-18, 2019.3. (査読有)
16. 牧野友香「ランバ語のテンス・アスペクト体系の再検討」, 『スワヒリ&アフリカ研究』30, 14-32, 2019.3. (査読有)
17. Furumoto, Makoto, “Makunduchi (G43c)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in*

〔口頭発表等〕計 31 件

1. Kaji, Shigeki, “A Comparative View of Tone of West-Ugandan Bantu Languages through Field Research”, ReNeLDA 言語ドキュメンテーションセミナー, 2019.2.22, University of Dar es Salaam, Dar es Salaam, Tanzania.
2. 梶茂樹「ニョロ語のタブー表現」, 日本アフリカ学会, 2018.5.27, 北海道大学.
3. 梶茂樹「ニョロ語のタブー表現:その記述と分析」, 日本アフリカ学会関西支部例会, 2018.5.19, 龍谷大学.
4. 梶茂樹「アフリカにおける多言語使用:特にコンゴ民主共和国とウガンダの例を中心に」, 日本フランス語学会 2018 年度談話会, 2018.10.21, 青山学院大学.
5. Kaji, Shigeki, “On the Homology of the Object Relative Construction and the Subordinate 1 Form in Nyoro Verb Conjugation”, The 7th International Conference on Bantu Languages, 2018.7.10, University of Cape Town, Cape Town, South Africa.
6. 仲尾周一郎「北東アフリカにおけるアラビア語の動態:コンヴィヴィアル・マルチリンガリズム」, 科研費基盤研究(S)「アフリカ潜在力」と現代世界の困難の克服 人類の未来を展望する総合的地域研究」第9回全体会議, 2018.6.16, 京都大学.
7. 仲尾周一郎「ベニシャングル・アラビア語における放出音:アラビア祖語への示唆」, 平成30年度第1回エチオピア諸語研究会, 2018.11.10, 大阪大学.
8. 仲尾周一郎「アラビア語諸変種と動詞連続」, フィールド言語学ワークショップ:第14回文法研究ワークショップ「動詞連続の諸問題」, 2019.1.12, AA 研.
9. Nakao, Shuichiro, “African Plurilingual Tradition and Conviviality: Lessons from Non-Arab Arabic-Speaking Communities in Eastern Africa”, International Symposium on African Potentials and the Future of Humanity, 2019.1.27, Kyoto University, Kyoto, Japan.
10. 小森淳子「バンバラ語の動詞の「他動性」に関する考察:他動詞と自動詞を分けるもの」, 日本アフリカ学会第55回学術大会, 2018.5.27, 北海道大学.
11. 米田信子「フィールドワークから見るアフリカの魅力:未知の言語の調査とともに」, Handai-Asahi 中之島塾, 2018.9.22, 大阪大学中之島センター.
12. Shinagawa, Daisuke, “Linguistic Diversity and Unity in Swahili Contact Varieties: A Shared Element not Attested in “Swahili””, SOAS and Beijing Foreign Studies University Joint Conference Diversity of Cultures and Languages in Asia and Africa, 2018.11.8, SOAS, University of London, London, UK.
13. Shinagawa, Daisuke, “\*-ag in Kilimanjaro Bantu: Its Diachronic Path and Implications to Microtypology”, the 9th World Congress of African Linguistics (WOCAL9), 2018.8.25, Mohammed V University, Rabat, Morocco.
14. Shinagawa, Daisuke, “Notes on the Distribution of Relative Constructions in Sheng: With Special Reference to -enye RC”, The 7th International Conference of Bantu Languages (Sintu7), 2018.7.9, The River Club, Cape Town, South Africa.
15. Shinagawa, Daisuke, and Nico Nassenstein, “Toward a ‘State of the Art’: Variation in Swahili, Current Approaches, Trends and Directions”, The 7th International Conference of Bantu Languages (Sintu7),

- 2018.7.9, The River Club, Cape Town, South Africa.
16. Shinagawa, Daisuke, “Typological Variation of Negative Particles in Chaga”, the 20th International Congress of Linguists, 2018.7.2, Cape Town International Congress Centre, Cape Town, South Africa.
  17. 品川大輔「ウル語 (Bantu E622D) の否定標示」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.26, 北海道大学.
  18. Abe, Yuko, “Verb Categories in Bende (F.12)”, The 7th International Conference on Bantu Languages, 2018.7.10, University of Cape Town, Cape Town, South Africa.
  19. 高村美也子「タンザニア・ボンデイ社会における埋葬地」, 第 55 回アフリカ学会, 2018.5.26, 北海道大学.
  20. 高村美也子「東アフリカ・スワヒリ文化ボンデイ社会の埋葬文化」, 第 4 回アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の近代動態シンポジウム, 2018.7.23, 中部大学.
  21. 高村美也子「スワヒリ文化と墓制度」, 『アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明』第 2 回国際シンポジウム「アフロ・ユーラシアの現代動態」, 第 2 回国際シンポジウム, 2019.2.18, 中部大学.
  22. Amponsah, Samuel, and Kyoko Koga, “Akan Literacy and Earnings in Ghana”, Western Economic Association International 15th International Conference, 2019.3.23, Keio University, Tokyo, Japan.
  23. 牧野友香「ランバ語の TA 形態素 -a についての一考察」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.27, 北海道大学.
  24. 牧野友香「ランバ語(M54)の Anterior と属性叙述」, 日本言語学会第 156 回大会, 2018.6.23, 東京大学.
  25. Makino, Yuka, “Three ‘Anterior-like’ Forms in Lamba”, 7th International Conference on Bantu Languages, 2018.7.10, University of Cape Town, Cape Town, South Africa.
  26. Makino, Yuka, “The Distinction of Three ‘Near Past’ Forms in Lamba”, The 9th Word Congress of African Linguistics, 2018.8.27, Mohammed V University, Rabat, Morocco.
  27. 古本真「スワヒリ語マクンドゥチ方言のコピュラの強調形 njo について: 背景標識としての分析」, 日本アフリカ学会第 55 回大会, 2018.5.27, 北海道大学.
  28. Furumoto, Makoto, “The Contracted Demonstrative as a Topic-marking Particle in Kimakunduchi”, The 20th International Congress of Linguistics, 2018.7.5, The Cape Town International Convention Centre, Cape Town, South Africa.
  29. Furumoto, Makoto, “On the Origin of the Kimakunduchi Aspect Marker -me-”, The 7th International Conference on Bantu Languages, 2018.7.9, The River Club, Cape Town, South Africa.
  30. Furumoto, Makoto, and Takahashi, Yasunori, “Kimakunduchi: A Dialect of Swahili without Word-stress”, The 9th World Congress of African Linguistics, 2018.8.27, Mohammed V University, Rabat, Morocco.
  31. Furumoto, Makoto, “Perfective and Perfect in Kimakunduchi”, Kongamano la pili la kimataifa la Kiswahili, 2018.12.13, Ukumbi wa Sheikh Idris Abdul Wakil, Zanzibar, Tanzania.

[図書]計 2 件

1. Shinagawa, Daisuke, and Yuko Abe (eds.), *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu*, 2019.3, ILCAA.
2. Koga, Kyoko, *An Akan Vocabulary*, 2019, ILCAA.

[社会に向けた成果発表]計3件

1. 梶茂樹「第20回国際言語学会議」報告、『言語研究』154, 228–230, 2018.
2. 小森淳子「アフリカ研究の現場から:大阪大学外国語学部 スワヒリ語専攻の研究と教育」、『アフリカ』58, 28–31, 2018.
3. 古本真「フィールド言語学への誘い:ザンジバル編」,三省堂ワードワイズ・ウェブ (URL: [https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/field\\_linguistics\\_swahili07](https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/field_linguistics_swahili07) (2018年4月の記事へのリンク))

## ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容(2)ジャワのイスラーム化再考

研究期間: 2016–2018 (代表:菅原由美/所員 2、共同研究員 9)

所員: 塩原朝子、澤田英夫

共同研究員: 菅原由美、青山亨、東長靖、深見純生、宮崎恒二、山崎美保、山根聡、Oman Fathurahman, Willem van der Molen

### 研究会等の内容

2018年度第1回研究会(AA研マルチメディア会議室)

菅原由美(AA研共同研究員、大阪大学)

国際シンポジウム発表論文予備報告

青山亨(AA研共同研究員、東京外国語大学)

国際シンポジウム発表論文予備報告

国際シンポジウム準備会合(全員)

2018年度第2回研究会(2018年6月30日~7月1日、大阪大学豊中キャンパス)

6月30日

Yumi Sugahara (ILCAA Joint Researcher, Osaka University)

“Sunan Bonan’s Teaching: Theology and Sufism in the 16th Century Java”

Discussant: Yasushi Tonaga (ILCAA Joint Researcher, Kyoto University)

Toru Aoyama (ILCAA Joint Researcher, Tokyo University of Foreign Studies)

“Imaginary of the Seafaring Ship in the Process of Islamization in Java”

Discussant: Michael Feener (Oxford University)

Stuart Robson (Emeritus Professor, Monash University)

“Serat Manik Maya: Javanese Mythology”

Discussant: Julian Millie (Monash University)

Sri Ratna Saktimulya (Gadjah Mada University)

“Following the Footsteps of Sunan Kalijaga through the Illuminations in the Pakualaman Scriptorium”

Discussant: Michael Feener (Oxford University)

7月1日

Willem van der Molen (ILCAA Joint Researcher, KITLV: Royal Netherlands Institute of Southeast Asian and Caribbean Studies)

“Religious change in Java as reflected in the Suluk Panĕpen”

Discussant: Mitsuo Nakamura (Emeritus Professor, Chiba University)

Edwin Wieringa (University of Cologne)

“Not by the sword? Some Notes on the Contemporary Sanitized Myth of Java’s Early Islamisation”

Discussant: So Yamane (ILCAA Joint Researcher, Osaka University)

Ben Arps (Leiden University)

““If You Desire to Live, Follow My Prophet, Ibrahim the Friend of God” Conversion to Islam and the Epic of Amir Hamza in Malay and Javanese Literature”

Discussant: Nobuaki Kondo (ILCAA)

Aditia Gunawan (National Library of Indonesia)

“The Islamization Process in West Java: A Review of ‘Old Sundanese’ Islamic Manuscripts from Kabuyutan”

Discussant: Julian Millie (Monash University)

Oman Fathurahman (ILCAA Joint Researcher, Syarif Hiidayatullah State Islamic University)

“The Javanese-influenced Islamic Manuscripts in the Malay Speaking Area of the Philippines: Southeast Asian Muslim Mobility?”

Discussant: Midori Kawashima (Sophia University)

2018 年度第 3 回研究会 (2019 年 2 月 16 日、AA 研小会議室)

菅原由美 (AA 研共同研究員、大阪大学)

「スナン・ボナンの教え: 16 世紀のジャワの神学と神秘主義」

青山亨 (AA 研共同研究員、東京外国語大学)

「マレーおよびジャワ文学にみるイスラーム流入に対する王家の反応」

深見純生 (AA 研共同研究員)

「イスラーム・ジャワ暦 (AJ: Anno Javanico) の導入 (1633) に関するノート」

## 研究成果一覧

[学術論文] 計 10 件

1. 菅原由美「東南アジアにおけるイスラームの展開とキターブ文献の成立」, 『史苑』79 (1), 97–119, 2019.3.
2. 深見純生「バンバッド・タナ・ジャウイ研究序説」, 『人間文化研究』10, 175–208, 2019.2.
3. 深見純生「7 世紀の東西回廊を行く: 玄奘・那提・義浄」, 『アジア仏教美術論集 東南アジア』(肥塚隆編), 63–88, 2019.2, 中央公論美術出版.
4. 青山亨「プランバナナ寺院ラーマーヤナ浮彫が語る「死」の諸相: テクスト伝承との比較から」, 『アジア仏教美術論集 東南アジア』(肥塚隆編), 113–137, 2019.2, 中央公論美術出版.
5. Tonaga, Yasushi, “The General Propensity of Islamic and Sufi Studies in Japan”, *Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies (Kyoto Kenan Rifai Sufi Studies Series 3)* (ed. by Yasushi Tonaga and Chiaki Fujii), 3–22, 2018, Kyoto Kenan Rifai Center for Sufi Studies, Kyoto University, Kyoto, Japan.

6. 山根聡「第10章 東西パキスタンの政治・経済・社会」第11章 現代パキスタンの政治・経済・社会, 『南アジア史4 近代・現代』, 326–380, 2019, 山川出版社.
7. 山根聡「三章 イクバルのロンドン」, 『1905年 革命のうねりと連帯の夢(歴史の転換期10)』, 146–201, 2019.3, 山川出版社.)
8. 山根聡「2018年のパキスタン: イムラーン新政権誕生は「静かなクーデター」か」, 『紀要 国際情勢』 89, 103–113, 2019.3.
9. 山根聡「19世紀後半の北インドにおけるムスリム文人と食: 郷愁と動揺」, 『食から描くインド: 近現代の社会変容とアイデンティティ』(井坂理穂, 山根聡編), 53–86, 2019.2, 春風社.
10. 山崎美保「10世紀以前の古ジャワ語刻文に見られる宗教関連事項の検討: 寺院・神・儀礼」, 『アジア仏教美術論集 東南アジア』(肥塚隆編), 139–160, 2019.2, 中央公論美術出版.

[口頭発表等]計12件

1. Aoyama, Toru, “Imaginary of the Seafaring Ship in the Process of Islamization in Java”, International Symposium “Transformation of Religion as Reflected in Javanese Texts (2) Rethinking the Process of Islamization”, 2018.6.30, Osaka University, Osaka, Japan.
2. Fathurahman, Oman, “The Javanese-influenced Islamic Manuscripts in the Malay Speaking Area of the Philippines: Southeast Asian Muslim Mobility?”, International Symposium “Transformation of Religion as Reflected in Javanese Texts (2) Rethinking the Process of Islamization”, 2018.7.1, Osaka University, Osaka, Japan.
3. 深見純生「10～14世紀海域東南アジア史研究をふりかえる」, 東南アジア古代史研究会, 2018.12.5, 早稲田大学.
4. Sugahara, Yumi, “Sunan Bonan’s Teaching: Theology and Sufism in 16th Java”, International Symposium “Transformation of Religion as Reflected in Javanese Texts (2) Rethinking the Process of Islamization”, 2018.6.30, Osaka University, Osaka, Japan.
5. 菅原由美「東南アジアにおけるイスラームの展開とキターブ文献の成立」, 「東南アジアのキターブ比較研究」2018年度研究会 科研費基盤研究(C)「キターブの地域間比較と時代的変容からみる東南アジア・ムスリムの思想・社会の動態」, 2019.1.13, 上智大学.
6. Sugahara, Yumi, “The Admonitions of Seh Bari”, Research Group “New Directions in the Study of Javanese Literature: Reassessing Ideas, Methods and Theories in the Study of the Literature of Java, Indonesia”, 2019.3.8, Israel Institute for Advanced Studies, Hebrew University of Jerusalem, Jerusalem, Israel.
7. Tonaga, Yasushi, “Theoretical Basis for the Visit to the Saints’ Places in the Islamic Thought”, 5th World Congress of Middle Eastern Studies (WOCMES)2018, 2018.7.19, Sophia University, Tokyo, Japan.
8. Tonaga, Yasushi, “The Choice of Languages in the Ottoman Sufism”, The 2nd. International Conference of the Asian Federation of Mediterranean Studies Institutes (AFOMEDI), 2018.12.23, Kyoto University Inamori Hall, Kyoto, Japan.
9. 東長靖「イスラームのとらえ方: 穏健イスラームにみる共生」, 2018年度 立命館西園寺塾, 2018.12.15, 立命館 西園寺塾.
10. Van der Molen, Willem, “Religious Change in Java as Reflected in the Suluk Panēpen”, International

Symposium “Transformation of Religion as Reflected in Javanese Texts (2) Rethinking the Process of Islamization”, 2018.7.1, Osaka University, Osaka, Japan.

11. 山根聡「「静かなクーデター」による新政権樹立:パキスタン外交や治安の課題」, 中東情勢研究会, 2018.10.19, 中東情勢研究会.
12. 山根聡「マウドゥーディー著作の翻訳をめぐる現代イスラーム復興思想の拡散について」, 科学研究費補助金基盤研究(B)「暴力による民主主義の 20 世紀:トランスナショナルヒストリーの試み」研究会, 2019.2.23, 明治大学グローバルフロント 16 階国際武器移転史研究所会議室.

[図書]計 2 件

1. Tonaga, Yasushi, and Chiaki Fujii (eds.), *Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies (Kyoto Kenan Rifai Sufi Studies Series 3)*, 2018, Kyoto Kenan Rifai Center for Sufi Studies, Kyoto University, Kyoto, Japan.
2. 山根聡(井坂理穂と共編)『食から描くインド:近現代の社会変容とアイデンティティ』, 2019.2, 春風社.

[社会に向けた成果発表]計 2 件

1. 山根聡「パキスタン」, 『NHK データブック世界の放送 2019』, 70–73, 2019.2, NHK 放送文化研究所.
2. 山根聡 解説「解「国」新書 債務対策が急務のパキスタン:イムラン新首相への期待と課題」, 『国際開発ジャーナル』745, 68–69, 2019.1.

## 南西カラハリ・コエ語派の語彙の民族言語学的ドキュメンテーション

研究期間: 2016–2018 (代表: 中川裕 / 所員 1、共同研究員 7)

所員: 中山俊秀

共同研究員: 中川裕、大野仁美、菅原和孝、高田明、田中二郎、丸山淳子、Christfried Naumann

### 研究会等の内容

2018 年度第 1 回研究会 (2018 年 5 月 27 日、北大マルシェ Café & Labo)

高田明 (AA 研共同研究員、京都大学)

「地域研究画像デジタルライブラリ」の利用・ボツワナへの研究成果報告書提出

中川裕 (AA 研共同研究員、東京外国語大学)

ボツワナへの研究成果報告書提出

中川裕 (AA 研共同研究員、東京外国語大学)

新規ボツワナ調査許可申請手続の進捗

科研申請・採択状況の把握 (全員)

『ブッシュマン動物事典』編纂の今年度計画 (全員)

2018 年度第 2 回研究会 (2018 年 11 月 11 日、東京外国語大学音声学実験室)

中川裕 (AA 研共同研究員、東京外国語大学)

「グイ語食感動詞がもつ音素配列論的な音象徴的装置」

松平勇二(兵庫県立大学)

「ショナの祭祀楽器ンピラの音楽的構造」

カラハリ動物事典編纂のリスケジュールリング(全員)

2018年度第3回研究会(2019年1月26日、東京外国語大学音声学実験室)

中川裕(AA研共同研究員、東京外国語大学)

「歌と詩に表現される動物」

グイ音韻表記法ワークショップ(全員)

## 研究成果一覧

[学術論文]計10件

1. Bajić, Vladimir, Chiara Barbieri, Alexander Hübner, Tom Güldemann, Christfried Naumann, Linda Gerlach, Falko Berthold, Hiroshi Nakagawa, Sununguko W. Mpoloka, Lutz Roewer, Josephine Purps, Mark Stoneking, and Brigitte Pakendorf, “Genetic Structure and Sex-biased Gene Flow in the History of Southern African Populations”, *American Journal of Physical Anthropology* 167 (3), 656–671, 2018.11. (査読有)
2. Güldemann, Tom, and Hiroshi Nakagawa, “Anthony Traill and the Holistic Approach to Kalahari Basin Sound Design”, *Africana Linguistica* 24, 45–73, 2018. (査読有)
3. 田中二郎「多文化共生時代の可能性と未来」, 『共生社会システム研究』12(1), 1–21, 2018.9. (査読有)
4. 菅原和孝 “On the G|ui Experiences of ‘Being Hunted’: Analysis of Oral Discourses on the Man-killing by Lions”, *Senri Ethnological Studies* 99, 65–82, 2018.7. (査読有)
5. 菅原和孝「境界を歩く犬たち: 人類学と文学のあいだ」, 『生態人類学会ニューズレター』24, 8–12, 2018.12.
6. 菅原和孝「南部アフリカ狩猟採集民グイ・ブッシュマンにおける〈病〉と〈治療〉」, 『N: ナラティブとケア』10, 55–62, 2019.1.
7. Sugawara, Kazuyoshi, “The Situationality of Animal Borders: From Phenomenology to Natural History of Evolution”, *The Situationality of Human–Animal Relations: Perspectives from Anthropology and Philosophy* (ed. by Thiemo Breyer and Thomas Widlok), 29–49, 2018.8, Transcript Verlag, Bielefeld, Germany.
8. 高田明, 片桐恭弘, 片岡邦好「20周年記念パネル・ディスカッション「相互行為エンジン仮説」の妥当性と未来: 多分野からの検証と提言」, 『社会言語科学』21(1), 407–420, 2018.9.
9. Maruyama, Junko, “Keeping a Distance: ‘Bushman Tourism’ in Botswana”, *Global-E* 11(46), 2018.9.11.
10. Cornelissen, Scarlett and Junko Maruyama, “Tourism, Capital, and Livelihoods in Africa”, *Global-E* 11 (34), 2018.6.26.

[口頭発表等]計21件

1. 中川裕「カラハリ狩猟採集民の言語における飲食動詞の類型論的特徴」, 日本アフリカ学会第55回学術大会, 2018.5.27, 北海道大学.
2. 中川裕「声調交替のパラダイグマティックな説明: グイ語における2つの豊語パラダイムの相互作用音

- 韻史」, 日本言語学会第 156 回大会, 2018.6.23, 東京大学本郷キャンパス.
3. 中川裕「くちあたりの音象徴の言語相対性と普遍性: コイサン事例研究」, 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 25 回研究会, 2018.7.7, 東京外国語大学語学研究所.
  4. Nakagawa, Hiroshi, “Click acquisition in G|ui”, The 9th World Congress of African Linguistics, 2018.8.25, Mohammed V University, Rabat, Morocco.
  5. 菅原和孝「動物と感応する身体: 南部アフリカ狩猟採集民グイの場合」, 第 50 回中四国人類学談話会, 2019.2.16, 広島大学東千田キャンパス未来創生センター.
  6. Ono, Hitomi, “Is ki a focus marker in G|ui?”, Seminar, Department of African Language and Literature, University of Botswana, 2019.2.15. Department of African Language and Literature, University of Botswana, Gaborone, Botswana.
  7. Ono, Hitomi, “Focus Marking and Identification in G|ui”, The 9th World Congress of African Linguistics, 2018.8.25, Mohammed V University, Rabat, Morocco.
  8. 大野仁美「カラハリ・コエ語派における姿勢動詞の文法化」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.27, 北海道大学.
  9. Takada, Akira, and Yuriko Sugiyama, “Re-establishing a Good Life: Abnormal Delivery, Rehabilitation Treatments, and Funerals among the G|ui and G||ana of Botswana”, Department of Social Anthropology, 2019.2.22, University of St Andrews, St Andrews, UK.
  10. Takada, Akira, “Discussant of Session 3: Conviviality & African Potentials”, 3rd Kyoto Symposium: African Potentials 2019: International Symposium on African Potentials and the Future of Humanity, 2019.1.27, Kyoto University, Kyoto, Japan.
  11. Takada, Akira, “Folk Knowledge and Wayfinding Practices among the San of the Central Kalahari”, Contribution of Area Studies to Global Challenges in Africa, 2018.12.4, BULAC 10 rue des Grands Moulins, Paris, France.
  12. Takada, Akira, “Crying, Caregiving and Embodied Organization of Emotion Socialization: A Tribute to the Lifework of M. H. Goodwin”, The 117th Annual Meeting of American Anthropological Association, 2018.11.17, San Jose Convention Center, San Jose, USA.
  13. Takada, Akira, “Environmental Perception and Wayfinding Practices among the San of the Central Kalahari”, UCL Anthropology, 2018.10.18, University College London, London, UK.
  14. Takada, Akira, “Play-to-work Transition among the !Xun of North-central Namibia”, The 12th Conference on Hunting and Gathering Societies, 2018.7.24, School of Social Sciences, Universiti Sains Malaysia, Penang, Malaysia.
  15. Takada, Akira, and Xiaojie Tian, “Reconsidering Play-to-work Transition in (Post-) Hunter-gatherer Communities”, The 12th Conference on Hunting and Gathering Societies, 2018.7.24, School of Social Sciences, Universiti Sains Malaysia, Penang, Malaysia.
  16. Takada, Akira, “Features of the Participation Framework in Play and Work Activities among the !Xun of North-central Namibia”, The 12th Conference on Hunting and Gathering Societies, 2018.7.24, School of Social Sciences, Universiti Sains Malaysia, Penang, Malaysia.
  17. Takada, Akira, and Masaki Shimada, “Movies from the Field: Play-to-work Transitions in (Post-) Hunter-gatherer Communities”, The 12th Conference on Hunting and Gathering Societies, 2018.7.24, School of

Social Sciences, Universiti Sains Malaysia, Penang, Malaysia.

18. 丸山淳子「いま、なぜ「先住民」か」、『先住民からみる現代世界』出版記念ワークショップ, 2018.4.28, 津田塾大学.
19. 丸山淳子「観光はアフリカを救うのか? :南部アフリカにおける民族文化観光の最前線」, 立教大学観光光学部主催アカデミックアドバイザー企画講演会, 2018.11.20, 立教大学.
20. 丸山淳子「分けあうことは疲れる、分けあわないことも疲れる:現代の狩猟採集社会から考えるシェアリング」, 日本文化人類学会主催公開シンポジウム「現在・未来の経済社会に向けた人類学的知の再構築:ブロックチェーンからシェアリング経済まで」, 2018.12.23, 立命館大学.
21. 丸山淳子「「自然保護」が生み出す格差:ボツワナにおけるサンの土地問題」, 研究会「自然保護という名の土地収奪」, 2019.1.12, 東洋大学.

[図書]計2件

1. Nakagawa, Hiroshi, and Andy Chebanne (eds.), *[Anthony Traill's Posthumous Manuscript] A Trilingual !Xóõ Dictionary: !Xóõ-English-Setswana*, 2018, Rüdiger Köppe Verlag, Cologne, Germany.
2. 高田明『相互行為の人類学:「心」と「文化」が出会う場所』, 2019.1, 新曜社.

## アジア文字研究基盤の構築1:文字学に関する用語・概念の研究

研究期間: 2017-2019 (代表: 荒川慎太郎/所員 2、共同研究員 11)

所員: 荒川慎太郎、澤田英夫

共同研究員: 大竹昌巳、岡田一祐、岡野賢二、落合淳思、黒澤直道、笹原宏之、清水政明、永井正勝、町田和彦、森若葉、吉川雅之

### 研究会等の内容

2018年度第1回研究会(2018年5月26日~27日、AA研マルチメディア会議室)

落合淳思(AA研共同研究員、立命館大学)

「甲骨文字の特殊性」

荒川慎太郎(AA研)

「西夏文字研究からみた文字学用語」

大竹昌巳(AA研共同研究員、日本学術振興会/東京外国語大学)

「契丹文字の文字組織」

笹原宏之(AA研共同研究員、早稲田大学)

「日本製漢字の変遷と位相」

2018年度第2回研究会(2018年10月6日~7日、AA研マルチメディア会議室)

永井正勝(AA研共同研究員、東京大学)

「改行が語るもの:古代エジプト語文書を利用した文献言語における単位の再考」

荒川慎太郎(AA研)

「アジアの文字研究からみた文字学用語(1)」

澤田英夫(AA 研)

「東南アジアにおけるインド系文字の革新」

2018 年度第 3 回研究会(2019 年 2 月 16 日～17 日、AA 研セミナー室)

荒川慎太郎(AA 研)

「西田龍雄先生と中国西南諸民族の文字研究」(公開ワークショップ)

韋述啓(貴州民族大学)

「水(スイ)文字」(公開ワークショップ)

福田和展(東洋大学)

「彝(ロロ)文字」(公開ワークショップ)

韋述啓(貴州民族大学)

「水(スイ)文字研究の現在」(研究会)

鈴木俊哉(広島大学)

「水(スイ)文字のコード化」(研究会)

## 研究成果一覧

[学術論文]計 7 件

1. 荒川慎太郎「2017 年・2018 年莫高窟・榆林窟新発見の西夏文題記」,『研究成果報告書(学術助成基金助成金 基盤研究(C)研究代表者:佐藤貴保)「西夏王国の人名に関する研究:多民族国家における文化交流・融合の視点から」』, 29-45, 2019.3, 盛岡大学.
2. 荒川慎太郎「西夏文字における、いくつかの左下要素の筆画について」,『日本言語学会第 157 回大会予稿集』, 442-447, 2018.11, 日本言語学会.
3. 荒川慎太郎「ロシア所蔵「観心十法界図」の西夏文について」,『アジア・アフリカ言語文化研究』96, 71-102, 2018.9. (査読有)
4. 笹原宏之「書きことばにおける敬語的表現」,『日本語学』38(2), 2-13, 2019.2.
5. Sasahara, Hiroyuki, “Yícún Wénzì (“Extant Characters”) in Japanese Lexicon: Exploring Characters of Historically Chinese Origin with Evidence from Six Dynasties, Sui and Tang Dynasties China”, *Journal of Chinese Writing Systems*, 2019.3. DOI: <https://doi.org/10.1177/2513850219828186> (査読有)
6. 笹原宏之「上代における国字の出現と表記の変化」,『歴史言語学の射程』(沖森 卓也 編), 三省堂, 51-74, 2018.11.
7. 笹原宏之「漢字研究の広がり可能性」,『漢字学ことはじめ』(日本漢字学会編), 66-84, 2018.12, 日本漢字能力検定協会.

[口頭発表等]計 6 件

1. 荒川慎太郎「西夏文字における、特定の筆画の「係り結び」について」,「ユーラシア言語研究 最新の報告」2018 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2019.3.27, 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター.
2. 荒川慎太郎「プリンストン大学所蔵西夏文法華経と西夏文の諸特徴」, 遼金西夏史研究会第 19 回大会, 2019.3.9, 龍谷大学瀬田キャンパス.

3. 荒川慎太郎「西夏文字における、いくつかの左下要素の筆画について」, 日本言語学会第 157 回大会, 2018.11.18, 京都大学吉田キャンパス.
4. 笹原宏之「表現京都名勝”天橋立”的和制漢字」, 首届跨文化漢字国際研討会 東亜碑刻漢字及文献研究, 2018.10.20, 鄭州大学, 鄭州, 中華人民共和国.
5. 笹原宏之「六朝・隋・唐で造られて日本に使用の痕跡が残った「佚存文字」」, 中日古典学ワークショップ(早稲田大学日本古典籍研究所・北京大学中国語言文学系・北京大学中国古典学中心), 2018.11.10, 早稲田大学.
6. 吉川雅之「中華圏の漢字系文字と変形漢字」, 東洋文庫アカデミア講座「漢字研究最前線: 漢検漢字文化研究所東京講座」, 2018.5.26, 東洋文庫.

〔図書〕計 4 件

1. 荒川慎太郎『プリンストン大学図書館所蔵西夏文妙法蓮華経: 写真版及びテキストの研究』, 2018.11, 創価学会・東洋哲学研究所.
2. 笹原宏之(丁曼訳)『日本的漢字』, 2019.1, 新星出版.
3. 笹原宏之(李健相・仁川大日本漢字文化研究会訳)『漢字で見た日本』, 2018.12, 図書出版 モンシメンサラムドゥル.
4. 落合淳思『漢字の字形: 甲骨文字から篆書、楷書へ』, 2019.3, 中央公論新社.

〔社会に向けた成果発表〕計 7 件

1. 荒川慎太郎「環境グラフィック 世界の文字系統と分布」, 『Harmony』66, 14–15, 2018.8, 三機工業株式会社(広報・IR 部).
2. 笹原宏之「異体字」, 『日本語学大辞典』(日本語学会編), 33–34, 2018.10, 東京堂出版.
3. 笹原宏之「異体字弁」, 『日本語学大辞典』(日本語学会編), 34–35, 2018.10, 東京堂出版.
4. 笹原宏之「漢字字体」, 『日本語学大辞典』(日本語学会編), 184–186, 2018.10, 東京堂出版.
5. 笹原宏之「国字」, 『日本語学大辞典』(日本語学会編), 399–400, 2018.10, 東京堂出版.
6. 笹原宏之「人名用漢字」, 『日本語学大辞典』(日本語学会編), 553–554, 2018.10, 東京堂出版.
7. 笹原宏之「字彙」, 『日本語学大辞典』(日本語学会編), 450–451, 2018.10, 東京堂出版.

## チュルク諸語における膠着性の諸相 —音韻・形態統語・意味の統合的研究—

研究期間: 2017–2019 (代表: 佐藤久美子/所員 1、共同研究員 17)

所員: 児倉徳和

共同研究員: 佐藤久美子、青山和輝、江畑冬生、大崎紀子、奥真裕、栗林裕、菅沼健太郎、新田志穂、林徹、菱山湧人、日高晋介、吉村大樹、Jakshylyk Akmatallieva, Aydın Özbek, Ayşe Nur Tekmen, Nazgul Shamshieva, Arzhaana Syuryun

### 研究会等の内容

2018 年度第 1 回研究会(2018 年 7 月 7 日、AA 研マルチメディア会議室)

シャミシエワ・ナズグリ(AA 研共同研究員、大阪大学大学院)

「キルギス語における動詞 bol-について」

青山和輝(AA 研共同研究員、東京大学大学院)

「チュルク系言語の後置詞およびトルコ語のあらたな「後置詞」について」

児倉徳和(AA 研)

「現代ウイグル語の文末詞」

佐藤久美子(AA 研共同研究員、国立国語研究所)

「今後の成果公開に向けての打ち合わせ」

2018 年度第 2 回研究会(2018 年 12 月 15 日、AA 研セミナー室(301))

菱山湧人(AA 研共同研究員、東京外国語大学大学院)

「タタール語の非動詞述語文における主語人称標示」

吉村大樹(AA 研共同研究員、Ankara University)

「疑問接語の位置と疑問の焦点、およびスコープについて:トルコ語を中心に」

Aydın Özbek(AA 研共同研究員、Çanakkale Onsekiz Mart University)

「非人称受動構文における時間的限定に関する一考察 -日本語とトルコ語の対照分析-」

成果公開に向けた打ち合わせ(全員)

※コメンテーター塚本秀樹(愛媛大学)、藤代節(神戸市看護大学)、久保智之(九州大学)

2018 年度第 3 回研究会(2019 年 3 月 9 日、九州大学伊都キャンパス)

次年度開催のワークショップの企画打ち合わせ(全員)

Aydın Özbek(AA 研共同研究員、Çanakkale Onsekiz Mart University)

「トルコ語と日本語におけるミラティビティ現象についての一考察」

シャミシエワ・ナズグリ(AA 研共同研究員、大阪大学大学院)

「移動の意味から変化の意味へ:補助動詞 ket-を中心に」

バルシュ カブラマン(駐日トルコ共和国大使館)

「トルコ語の主語関係節及び目的語関係節の処理における格助詞の影響」

久保智之(九州大学)

「シベ語における活用形とイントネーション」

総合討論(全員)

## 研究成果一覧

[学術論文]計 8 件

1. 菱山湧人「タタール語の所有名詞句における所有人称標示」、『言語・地域文化研究(東京外国語大学大学院)』25, 93-114, 2019.1.(査読有)
2. 菱山湧人「タタール語の形動詞を含む複合述語構文における主語人称標示」、『思言:東京外国語大学記述言語学論集』14, 27-43, 2018.12.(査読有)
3. 江畑冬生「トゥバ語の証拠性を表すとされる接辞-dir の機能:話し手・聞き手の認識からの説明」、『北方言語研究』9, 31-39, 2019.3.(査読有)
4. Ebata, Fuyuki, “Regularity and Obligatoriness in Sakha (Yakut). A Contrastive Analysis with Tyvan”, *Asian and African Languages and Linguistics* 13, 67-80, 2019.3.(査読有)

5. Kuribayashi, Yuu, “Verb-Verb Compounding in Turkish”, *The Rouen Meeting: Studies on Turkic Structures and Language Contacts (Series Turcologica Band 114)* (ed. by Mehmet Ali Akinci and Kutlay Yagmur), 155–164, 2018.6, Harrassowitz, Wiesbaden, Germany. (査読有)
6. Kuribayashi, Yuu, “Topic Marking in Iranian Turkic”, *Proceedings of the 13th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFLL13) (MIT working papers in linguistics 88)* (ed. by Céleste Guillemot, Tomoyuki Yoshida and Seunghun J. Lee), 179–192, 2018, MIT Press, Cambridge, UK. (査読有)
7. 栗林裕「「ナル表現」をめぐる通言語学的研究 : 日本とユーラシアの「ナル表現」:トルコ語」, 『日本認知言語学会論文集』18, 621–626, 2018. (査読有)
8. 栗林裕「バルト・スラヴ語世界におけるチュルク系少数言語:カラライム語とガガウズ語」, 『スラヴ学論集』21, 39–54, 2018.6. (査読有)

[口頭発表等]計 17 件

1. 菱山湧人「タタール語における『～するにはしたが』表現」, 2018 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2019.3.27, 京都大学羽田記念館.
2. Xisijama, Juto, and G.A. Nabiullina, “Japonskij lingvist Siro Hattori i ego dejatel’nost’ v sfere tatarskogo jazykoznanija”, *Soxranenie i Razvitie Rodnyx Jazykov v Uslovijax Mnogonacional’nogo Gosudarstva: Problemy i Perspektivy*, 2018.10.12, Kazanskij Federal’nyj Universitet, Kazan, Russia.
3. Xisijama, Juto, and G.A. Nabiullina, “Japonskij lingvist Siro Hattori i ego dejatel’nost’ v sfere tataristiki”, *Rossija – Japonija: Politika, Istorija i Kul’tura*, 2018.11.1, Kazanskij Federal’nyj Universitet, Kazan, Russia.
4. Xisijama, Juto, “Bašqort telenej eyälek konstruksiyahı”, *Aktual’nye Problemy Dialektologii Jazykov Narodov Rossii*, 2018.5.24, Institut istorii, jazyka i literatury, Ufa, Russia.
5. Xisijama, Juto, “Čuwaš telenej tartım formaları”, *Tjurkskaja Lingvokul’turologija: Problemy i Perspektivy*, 2019.2.20, Kazanskij Federal’nyj Universitet, Kazan, Russia.
6. 江畑冬生「トゥバ語における疑問詞疑問接辞の否定文での用法: egophoricity からの説明」, 日本語学会第 157 回大会, 2018.11.17, 京都大学.
7. 江畑冬生「トゥバ語の証拠性を表すとされる接辞-dir の機能:話し手・聞き手の認識からの説明」, 日本語学会第 156 回大会, 2018.6.24, 東京大学.
8. Ebata, Fuyuki, “The So-called Evidential suffix -dir in Tyvan: Explanation from the Perspective of the Speaker’s and the Hearer’s Knowledge”, (sa) hankuk enehakhoy 2018 nyen yerumhaksultayhoy, 2018.6.9, Chungnam National University, Daejeon, South Korea.
9. Ebata, Fuyuki, “Regularity and Obligatoriness in Sakha (Yakut): A Contrastive Analysis with Tyvan”, *International Workshop “Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia 2”*, 2018.11.24, Niigata University, Niigata, Japan.
10. Ohsaki, Noriko, and Jakshylyk Akmatallieva, “Reduction of Volitionality and Auxiliary Verbs in Kyrgyz”, *19th International Conference on Turkish Linguistics*, 2018.8.19, Nazarbayev University, Nur-Sultan, Kazakhstan.
11. 大崎紀子「キルギス語の位置関係を表す語」, 2018 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2019.3.27, 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター.

12. 栗林裕「チュルク語の主題の構造と機能」, 言語の類型的特徴をとらえる対照研究会第7回公開発表会, 2018.4.15, 大阪府立大学.
13. Kuribayashi, Yuu, “Numeral Quantifier Floating in Turkish and Uyghur”, 19th International Conference on Turkish Linguistics, 2018.8.17, Nazarbayev University, Nur-Sultan, Kazakhstan.
14. 栗林裕「トルコ語のナル表現:トルコ語版 創世記から」, 日本認知言語学会第19回全国大会, 2018.9.8, 静岡大学.
15. 栗林裕「チュルク諸語の動詞複合体のタイポロジー」, 2018年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」, 2019.3.27, 京都大学.
16. Aoyama, Kazuki, “About Turkish N-N Compound ‘Adjectives’”, 19th International Conference on Turkic Linguistics, 2018.8.18, Nazarbayev University, Astana, Kazakhstan.
17. 青山和輝「トルコ語の可能と時制」, ユーラシア言語研究コンソーシアム 2018年度年次総会, 2019.3.27, 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター(羽田記念館).

[社会に向けた成果発表]計1件

1. 江畑冬生「部分格から見るサハ語の位置と歴史」, 『FIELDPLUS』21, 7, 2019.1.

## 文法の動的体系性を探る (1): 文法の多重性と分散性

研究期間: 2017–2019 (代表: 中山俊秀/所員 3、共同研究員 16)

所員: 中山俊秀、峰岸真琴、呉人徳司

共同研究員: 青井隼人、大谷直輝、加藤昌彦、加藤重広、呉唯、下地理則、鈴木亮子、高梨博子、高橋康徳、中山久美子、浜田啓志、堀内ふみ野、柳村裕、山下里香、吉岡乾、Tsuyoshi Ono

### 研究会等の内容

2018年度第1回研究会(2018年12月9日、マルチメディアセミナー室)

大谷直輝(AA研共同研究員、東京外国語大学)

「英語の better off 構文が持つ統語的・意味的・談話的特性の記述の試み」

黒田航(杏林大学)

「そもそもヒトは逸脱文にどう反応するのか?—日本語文の容認度評定データベース (ARDJ) 構築の研究(第一期)から、容認度(評定)の実態についてわかって来た幾つかの事柄」

加藤重広(AA研共同研究員、北海道大学)

「日本語における構造規則と運用規則の衝突」

吉川正人(慶應義塾大学)

「“The funny this is …”: 誤表記が物語る慣習と創造の最適配合としての文生成」

オープンディスカッション

2018年度第2回研究会(2019年2月9日、AA研セミナー室)

山下里香(AA研共同研究員、関東学院大学)

『話題提供するなのです』: 文法と文末」

大谷直輝(AA 研共同研究員、東京外国語大学)

「前置詞の補語句に現れる前置詞句」

松本善子(スタンフォード大学)

「名詞修飾節構文が示す文法知識の多重性」

オープンディスカッション

2018 年度第 3 回研究会(2019 年 3 月 10 日、AA 研マルチメディア会議室)

高梨博子(AA 研共同研究員、日本女子大学)

「文法、スタイル、スタンス: IU 末の 2 人称代名詞の直接・間接指標性」

加藤昌彦(AA 研共同研究員、慶應義塾大学)

「ポー・カレン語の「文語体」について」

オープンディスカッション

## 研究成果一覧

[学術論文]計 8 件

1. 峰岸真琴「タイ語の数量表現」, 『言語の類型特徴対照研究会論集』1, 115–132, 2019.1.
2. 峰岸真琴「タイ語の情報構造に関わる諸表現」, 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』50, 189–204, 2019.3.
3. 加藤昌彦「ポー・カレン語の使役と逆使役」, 『シナ=チベット系諸言語の文法現象 2 使役の諸相』(池田巧編), 181–203, 2019.3, 京都大学人文科学研究所.
4. Kato, Atsuhiko, “The Middle Marker in Pwo Karen”, *Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies* 50, 21–62, 2019.3.
5. Takanashi, Hiroko, “Stance”, *Handbook of Pragmatics: 21st Annual Installment* (ed. by Jan-Ola Östman and Jef Verschueren), 173–200, 2018.12, John Benjamins, Amsterdam, Netherlands. (査読有)
6. 中野宏幸, 高梨博子「日米アジアの観光都市におけるインバウンド旅行者との対話的交流による地域アイデンティティの形成に関する研究」, 『交通学研究』62, 69–76, 2019.3. (査読有)
7. 堀内ふみ野「親子のやりとりにおける前置詞の使用: 対話統語論のアプローチ」, 『認知言語学論考』14, 291–327, 2018.9, ひつじ書房.
8. 中山俊秀「言語知識はどのような形をしているのか」, 『日本認知言語学会論文集』18, 580–585, 2018.4.27.

[口頭発表等]計 23 件

1. 峰岸真琴「タイ語の数量表現再考 第 8 回公开发表会」, 言語の類型特徴をとらえるための対照研究会第 8 回研究発表会, 2018.8.4, 大阪府立大学.
2. Suzuki, Ryoko, “Referentiality in Predicate Nominals in Japanese Conversation”, Referentiality Workshop, 2018.9.11, University of Alberta, Alberta, Canada.
3. 鈴木亮子「反応表現の様々な姿」, シンポジウム「日常会話コーパス IV」, 2019.3.4, 国立国語研究所.
4. Suzuki, Ryoko, “Question Tags and Response Particles in Japanese Interactions are Quite Regular... or

- are They?”, DFG Scientific Network Meeting “Interactional Linguistics- Discourse Particles from a Cross-linguistic Perspective.”, 2019.3.20, Freiburg Institute for Advanced Studies (FRIAS), Freiburg, Germany.
5. 加藤昌彦「ポー・カレン語の数量詞遊離」, メコン川中流域を中心とした諸言語の言語実態と変容プロセスの研究 2018 年度第 1 回研究会, 2018.7.21, 慶應義塾大学.
  6. Kato, Atsuhiko, “The Anticausative in Pwo Karen”, 51st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, 2018.9.28, Kyoto University, Kyoto, Japan.
  7. 加藤昌彦「ポー・カレン語の事象キャンセル」, 東南アジア諸言語研究会, 2019.3.1, 慶應義塾大学.
  8. Takanashi, Hiroko, “Dialogic Engagement in Tourism: The Constitution of Hybrid identities”, The 22nd Sociolinguistics Symposium, 2018.6.27, University of Auckland, Auckland, New Zealand.
  9. Takanashi, Hiroko, “Stance as Dialogic Practice of Chronotope in Tourism”, The 2nd International Conference on Sociolinguistics, 2018.9.8, Eötvös Loránd University, Budapest, Hungary.
  10. 中野宏幸, 高梨博子「日米アジアの観光都市におけるインバウンド旅行者との対話的交流による地域アイデンティティの形成に関する研究」, 日本交通学会第 77 回研究報告会, 2018.10.7, 青山学院大学.
  11. 高梨博子「インバウンド旅行者との authentic な対話的交流に向けて」, 日本国際観光学会第 22 回全国大会, 2018.10.27, 江戸川大学.
  12. 中野宏幸, 高梨博子「対話から見た「観光地のアイデンティティ」: インバウンド旅行者とのウォーキングツアーからのメッセージ」, 第 59 回運輸政策セミナー, 2019.3.7, 運輸総合研究所.
  13. 堀内ふみ野「対話から文法へ: Over の習得を支える多層的な文脈」, 日本認知言語学会第 19 回全国大会, 2018.9.9, 静岡大学.
  14. Otani, Naoki, “A Usage-based Analysis of Low-level Constructions: The Case of Synonymous Verb-particle Constructions”, The 10th International Conference on Construction Grammar, 2018.7.18, the Sorbonne Nouvelle University-Paris 3, Paris, France.
  15. Ishii, Yasutake, Yoshihito Kamakura, and Naoki Otani, “Describing Semantics of English Prepositions in English-Japanese Bilingual Dictionaries Based on Cognitive Semantic Approaches”, RaAM – The Association for Researching and Applying Metaphor 12, 2018.6.28, Hong Kong Polytechnic University, Hong Kong, PRC.
  16. 大谷直輝「From に後続する前置詞句の補語句用法について: BNC の調査を通じて」, 第 36 回日本英語学会, 2018.11.25, 横浜国立大学.
  17. 大谷直輝「英語の better off 構文について」, 第 157 回日本言語学会, 2018.11.17, 京都大学.
  18. Yamashita, Rika, “Indexing Geekiness and Performing Greetings on Tweets: The Emerging Ungrammatical Use of a Sentence-final Form”, Sociolinguistics Symposium 22, 2018.6.29, University of Auckland, Auckland, New Zealand.
  19. Nakayama, Toshihide, “Reflections on Working with an Endangered Language Community in Japan”, Third International Conference on Documentary Linguistics - Asian Perspectives, 2018.7.24, Research Institute for Languages and Cultures of Asia, Mahidol University, Nakhon Pathom, Thailand.
  20. Nakayama, Toshihide, “Problematizing Language and Revitalization: Why Language Documentation Hits a Wall in Revitalization”, International Symposium on Approaches to Endangered Languages in

Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization, 2018.8.5, National Institute for Japanese Language and Linguistics, Tokyo, Japan.

21. Nakayama, Toshihide, “Reframing Referentiality in Interaction: From ‘Pointing’ to ‘Synchronized Attention’”, International Workshop on Referentiality, 2018.9.9, University of Alberta, Alberta, Canada.
22. Nakayama, Toshihide, “Multiplicity in Grammar: How do We Need to Change the Way We Think about Grammar?”, Japanese/Korean Conference: Pre-conference Workshop on Multiplicity in Language and Multiple Grammars, 2018.11.28, University of California, Los Angeles, Los Angeles, USA.
23. Nakayama, Toshihide, “Different Ways of Contributing to Conservation and Revitalization of Language and Culture”, Workshop on Conservation and Revitalization of Community Language and Culture, 2019.2.28, University of the Ryukyus, Okinawa, Japan.

[図書]計1件

1. 加藤昌彦『ニューエクスプレス プラス ビルマ語』, 2019.2, 白水社.

## 青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容～ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて～

研究期間: 2017–2019 (代表: 星泉/所員 1、共同研究員 8)

所員: 星泉

共同研究員: 岩田啓介、海老原志穂、ジャブ(扎布)、ジュ・カザン(居格桑)、ナムタルジャ(南太加)、平田昌弘、別所裕介、山口哲由

### 研究会等の内容

2018年度第1回研究会(2018年5月20日～21日、AA研小会議室)

5月20日

星泉(AA研所員)

「共同編集データベースを活用したチベット牧畜文化語彙の辞典編纂」

別所裕介(AA研共同研究員、駒澤大学)

「チベット牧畜文化辞典の現地における実用性:ユーザー目線からの省察」

山口哲由(AA研共同研究員、京都大学)

「チベット牧畜文化辞典を活用した牧畜知識調査」

5月21日

海老原志穂(AA研共同研究員、AA研フェロー)

「チベット牧畜文化辞典の現地還元としてのヤクの絵本製作」

平田昌弘(AA研共同研究員、帯広畜産大学)

「事典をも内包した新しい牧畜文化辞典の試み:アムド系チベット牧畜民の乳文化の事例から」

岩田啓介(AA研共同研究員、日本学術振興会/JSPS)

「近年刊行のアムド・チベット部族志の特徴」

2018年度第2回研究会(2018年7月25日～26日、AA研小会議室)

7月25日

包海岩(内モンゴル科学技術大学)

「モンゴルの畜糞文化」

コメンテーター: ラシャムジャ(AA研外国人研究員、中国チベット学研究センター)

別所裕介(AA研共同研究員、駒澤大学)

「三江源牧畜民の宗教語彙をめぐる新たな整理手法に関する報告」

7月26日

星泉(AA研)

「チベット牧畜文化辞典を自己評価する」

全員「チベット牧畜文化辞典編集会議(全員)」

2018年度第3回研究会(2018年10月13日～14日、AA研セミナー室)

10月13日

ナムタルジャ(AA研共同研究員、青海民族大学民族学社会学学院)

「動物と牧畜民の関係」

海老原志穂(AA研共同研究員、AA研フェロー)

「ヤク絵本の作成:『チベット牧畜文化辞典』のアウトリーチとして」

岩田啓介(AA研共同研究員、日本学術振興会)

「近年のアムド・チベット人の歴史書からみる牧畜観」

山口哲由(AA研共同研究員、京都大学)

「モノグラフの目次分析に基づく牧畜文化の構成要素」

月原敏博(福井大学)

「チベットの牧畜様式の多様性と牧法論の可能性」

コメンテーター: ラシャムジャ(AA研外国人研究員、中国チベット学研究センター)

10月14日

星泉(AA研)

「2018年夏の調査報告」

全員「チベット牧畜文化辞典編集会議(全員)」

## 研究成果一覧

[学術論文]計8件

1. 星泉「日本で収集されたチベットの怨霊物語」,『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』(星泉, 海老原志穂, 岩田啓介, 大川謙作, 三浦順子編)6, 60-71, 2019.3, AA研.
2. 星泉「伝統と現代のミックスを手がけるチベット人現代美術家:白斌の世界とアニメーション「狩人と骸骨」」,『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』(星泉, 海老原志穂, 岩田啓介, 大川謙作, 三浦順子編)』6, 199-204, 2019.3, AA研.
3. 別所裕介「チベットの憑きもの:「テウラン」についての覚書」,『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』(星泉, 海老原志穂, 岩田啓介, 大川謙作, 三浦順子編)6, 44-50, 2019.3, AA研.

4. 岩田啓介「青海モンゴル盟旗制支配をめぐる清朝の政策方針:18 世紀前半の牧地の画定からみる」, 『内陸アジア史研究』34, 73-94, 2019.3. (査読有).
5. 岩田啓介「現代チベット人のアムド史の模索:チベット語村落史の刊行から」, 『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』(星泉, 海老原志穂, 岩田啓介, 大川謙作, 三浦順子編)6, 161-163, 2019.3, AA 研.(査読有)
6. Ebihara, Shiho, “Linguistic Features of Tibetan Proverbs with a Focus on Amdo”, *Journal of Chiba University Eurasian Society* 20, 47-70, 2018.12.
7. 海老原志穂「アムド・チベット語の使役」, 『シナ=チベット系諸言語の文法現象 2 使役の諸相』(池田巧編), 1-14, 2019.3, 京都大学人文科学研究所. (査読有)
8. 平田昌弘「生乳と乳製品、肉、麦類で厳寒の冬を生き抜く:ヤクと生きる、チベット牧畜民の食生活」, 『デーリイマン』Nov-68, 52-55, 2019.2, デーリイマン社.

[口頭発表等]計 13 件

1. 星泉「チベットの磁力・魅力・魔力:チベットの現代文学と牧畜文化をめぐる」, 第 470 回地平線報告会, 2018.6.22, 新宿スポーツセンター.
2. 星泉「チベット牧畜文化辞典の編纂:青海ツェコ県での調査に基づいて」, , 第 55 回野尻湖クリルタイ (日本アルタイ学会), 2018.7.15, 藤屋旅館.
3. 星泉「チベットの怖くないおばけの話:ヤク飼いと骸骨」, 第 4 回キキソ チベットまつり, 2018.9.15, 小諸エコビレッジ.
4. 星泉「チベットの怨霊物語:Texts of Tibetan Folktales III にもとづいて」, チベット文学研究会, 2018.10.15, AA 研.
5. 星泉, 別所裕介, 海老原志穂「パネルディスカッション:チベット牧畜民の世界観を捉える辞典編纂」, 第 66 回日本チベット学会「パネルディスカッション:チベット牧畜民の世界観を捉える辞典編纂」, 2018.11.17, 駒澤大学.
6. 星泉「フィールドワークとデータベースの 双方向的活用によるチベット牧畜文化辞典の編纂」, 第 66 回日本チベット学会「パネルディスカッション:チベット牧畜民の世界観を捉える辞典編纂」, 2018.11.17, 駒澤大学.
7. 別所裕介「現代中国の『生態文化』言説とチベット人の『環境主義』的实践」, 第 77 回日本宗教学会学術大会, 2018.9.9, 大谷大学.
8. 別所裕介「岐路に立つ牧畜民:三江源自然保護区における牧畜の処遇をめぐる」, 第 66 回日本チベット学会, 2018.11.17, 駒澤大学.
9. 岩田啓介「チベットの歴史と呪い」, 第 2 回「チベット文学と映画制作の現在」国際シンポジウム, 2019.3.17, AA 研.
10. 海老原志穂「チベット牧畜文化辞典の活用・応用の事例」, 第 66 回日本チベット学会「パネルディスカッション:チベット牧畜民の世界観を捉える辞典編纂」, 2018.11.16, 駒澤大学.
11. Ebihara, Shiho, “Reconsideration on Tibetan Word List Described by Nikolai Prejevalsky”, Workshop on Silk Road Languages from Chang’an to Istanbul, 2018.12.17, Uçhisar / Nevşehir, Cappadocia, Turkey.
12. 海老原志穂「『チベット語圏文学』の周辺 :シッキム、ラダック、ブータン におけるチベット語文学」, 第 2 回「チベット文学と映画制作の現在」国際シンポジウム, 2019.3.17, AA 研.

13. 南太加(ナムタルジャ) “a mdo'i 'brog las rig gnas gleng ba/ --rig gnas tshig mdzod gzhir bzung nas”(アムドの牧畜文化について:『チベット牧畜文化辞典』に基づいて), 青海民族大学民族学社会学学院講演会, 2018.11.17, 青海民族大学民族学社会学学院, 西寧, 中華人民共和国.

[図書]計3件

1. 星泉, 海老原志穂, 岩田啓介, 大川謙作, 三浦順子編『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』6, 2019.3, AA 研.
2. 海老原志穂『アムド・チベット語文法』, 2019.2, ひつじ書房.
3. 南太加(ナムタルジャ)『変わりゆく青海チベット牧畜社会:草原のフィールドワークから』, 2018.10, はる書房.

[その他]計1件

1. 星泉(主編), 別所裕介, 海老原志穂, ナムタルジャ(副編)「チベット牧畜文化辞典(パイロット版)」5年間かけて収集した牧畜語彙を辞書の形にまとめ, 『チベット牧畜文化辞典』のパイロット版としてオンラインで公開したもの。 <http://nomadic.aa-ken.jp/search/> (2018年3月公開)4,360件(2019年3月現在の収録項目数)

## アイヌ語現地調査資料のアーカイブズ構築にかんする学際的研究

研究期間: 2018-2020 (代表: 奥田統己/所員 1、共同研究員 11)

所員: 山越康裕

共同研究員: 奥田統己、阿部佳恵、菊池英明、児島恭子、小林美紀、志賀雪湖、高橋靖以、直川礼緒、中川裕、深澤美香、吉川佳見

### 研究会等の内容

2018年度第1回研究会(2018年6月10日、札幌学院大学)

奥田統己(AA研共同研究員、札幌学院大学)

「本プロジェクトのねらいと背景」

阿部佳恵(AA研共同研究員、北方言語・文化研究所)

「AA研所蔵アイヌ語映像資料の来歴と系統」

吉川佳見(AA研共同研究員、千葉大学大学院)

「AA研所蔵のアイヌ語フィールドノートの整理に向けて:沙流方言会話例文資料について」

深澤美香(AA研共同研究員、国立アイヌ民族博物館設立準備室)

「AA研所蔵のアイヌ語フィールドノートの整理に向けて:美幌方言調査を中心に」

小林美紀(AA研共同研究員、国立アイヌ民族博物館設立準備室)

「AA研所蔵のアイヌ語フィールドノートの整理に向けて:沙流方言調査資料を中心に」

奥田統己(AA研共同研究員、札幌学院大学)

「今後の予定についてほか」

2018年度第2回研究会(2018年12月22日、AA研)

奥田統己(AA研共同研究員、札幌学院大学)

「現時点までの整理状況、おもな成果および新たな問題について」

児島恭子(AA研共同研究員、札幌学院大学)

「アーカイブズ資料としてのアイヌ語合宿記録」

吉川佳見(AA研共同研究員、千葉大学大学院)

「AA研所蔵のアイヌ語フィールドノートの整理に向けて:沙流方言会話例文資料について(2)」

深澤美香(AA研共同研究員、国立アイヌ民族博物館設立準備室)

「AA研所蔵のアイヌ語フィールドノートの整理に向けて:美幌方言調査を中心に(2)」

小林美紀(AA研共同研究員、国立アイヌ民族博物館設立準備室)

「AA研所蔵アイヌ語資料の整理に向けて:沙流方言調査を中心に(2)」

奥田統己(AA研共同研究員、札幌学院大学)

「今後の予定についてほか」

## 研究成果一覧

[学術論文]計3件

1. 中川裕「アイヌ口承文芸テキスト集 17 白沢ナベ口述 カムイユカラ アテヤテンナ:六つ首の狐」, 『千葉大学ユーラシア言語文化論集』20, 309-322, 2018.12.
2. 奥田統己「“地鎮祭”のアイヌ語:呼称および祈詞の事例について」, 『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』4, 61-71, 2019.3. (査読有)
3. 奥田統己「千歳地方の神謡の韻律的志向性」, 『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』4, 73-78, 2019.3. (査読有)

[口頭発表等]計2件

1. 奥田統己「千歳地方の神謡の韻律:アイヌ語における アクセント志向の韻律の地域的広がり」, 日本北方言語学会第1回研究会, 2018.12.9, AA研.
2. 奥田統己「アイヌ語の韻律:周辺諸民族との歴史的関係を見通して」, 第3回叙事詩研究会, 2019.3.25, 千葉大学.

[その他]計1件

1. 奥田統己, 山越康裕「東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所アイヌ語資料公開プロジェクト」, AA研収蔵のアイヌ語音声資料のうち, 公開許諾が得られたものを2014年度以降順次公開している。テキスト・日本語訳つきで音声を聴くことができる。<https://ainugo.aa-ken.jp/>

## スワヒリ語諸変種にみられる多様性とダイナミズムへのアプローチ

研究期間: 2018-2020 (代表: 品川大輔/所員 2、共同研究員 18)

所員: 品川大輔、椎野若菜

共同研究員: 安部麻矢、阿部優子、梶茂樹、角谷征昭、沓掛沙弥香、小森淳子、竹村景子、仲尾周一

郎、古本真、宮崎久美子、米田信子、Rose Marie Beck, Chege Githiora, Andrea Hollington, Georges Mulumbwa Mutambwa, Nico Nassenstein, Shani Omari, Maren Rüsç

## 研究会等の内容

2018年度第1回研究会(2018年6月3日、AA研小会議室)

品川大輔(AA研所員)

「趣旨説明:スワヒリ語変種に関する近年の研究動向」

品川大輔(AA研所員)

「接触スワヒリ語に見られる構造特徴」

梶茂樹(AA研共同研究員、京都産業大学)

「スワヒリ語はなぜコンゴ東部にまで広まったのか:その構造から探る」

全体討論:今後のスケジュールと成果発信について(全員)

2018年度第2回研究会(2018年10月13日、AA研小会議室)

宮崎久美子(AA研共同研究員、ザンジバル国立大学)、竹村景子(AA研共同研究員、大阪大学)

「ザンジバルにおけるスワヒリ語諸変種の間係を探る新たな試み」

古本真(AA研共同研究員、日本学術振興会/大阪大学)

「おしゃべりを聞きに行こう:スワヒリ語マクドゥチ方言における自然談話の収集」

今後のスケジュール(全員)

## 研究成果一覧

[学術論文]計16件

1. Shinagawa, Daisuke, “Uru (E622D)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 106–152, 2019.3, ILCAA.
2. Shinagawa, Daisuke, “Rombo (E623)”, *Descriptive materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 153–189, 2019.3, ILCAA.
3. Abe, Yuko, “Bende (F12)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 190–223, 2019.3, ILCAA.
4. Takemura, Keiko, and Kumiko Miyazaki, “Utofauti wa Kilahaja wa Kiswahili - Kutokana na Data Zilizokusanywa Kisiwani Unguja -”, 『スワヒリ&アフリカ研究』30, 67–80, 2019.3.(査読有)
5. Gibson, Hannah, and Nobuko Yoneda, “Functions of Verb Reduplication and Verb Doubling in Swahili”, *The Journal of Asian and African Studies* 96, 5–25, 2018.9.(査読有)
6. Nakao, Shuichiro, “Mountains Do not Meet, but Men Do: Music and Sociocultural Networks among Arabic creole-speaking communities across East Africa”, *Arabic in Contact* (ed. by Stefano Manfredi and Mauro Tosco), 275–294, 2018.7, John Benjamins, Amsterdam, Netherlands. (査読有)
7. 仲尾周一郎「周縁アラビア語における喉頭化音:アラビア祖語強調音の再建に向けて」, 『アラブ・イスラム研究』16, 71–92, 2018.(査読有)
8. Komori, Junko, “Kerewe (JE24)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 394–417, 2019.3, ILCAA.
9. 小森淳子「バンバラ語の自他交替と自動詞の特徴について:「受動文」から考察する」, 『スワヒリ&ア

フリカ研究』30, 33–48, 2019.3.

10. 梶茂樹「ニョロ語の人名」, 『一般言語学論叢』21, 1–31, 2018. (査読有)
11. 梶茂樹「ニョロ語のタブー表現: その記述と分析」, 『京都産業大学論集 人文科学系列』52, 3–28, 2019.3. (査読有)
12. Kaji, Shigeki, “Nyoro (JE11)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 308–331, 2019.3, ILCAA.
13. 安部麻矢「マア語における TA 標識の文法化」, 『スワヒリ&アフリカ研究』30, 1–13, 2019. 3. (査読有)
14. Abe, Maya, “Normal mbugu”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 224–255, 2019.3, ILCAA.
15. Abe, Maya, “Inner Mbugu”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 256–286, 2019.3, ILCAA.
16. Furumoto, Makoto, “Makunduchi (G43c)”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), 288–307, 2019.3, ILCAA.

〔口頭発表等〕計 26 件

1. Shinagawa, Daisuke, “Linguistic Diversity and Unity in Swahili Contact Varieties: A Shared Element not Attested in “Swahili””, SOAS and Beijing Foreign Studies University Joint Conference Diversity of Cultures and Languages in Asia and Africa, 2018.11.8, SOAS University of London, London, UK.
2. Shinagawa, Daisuke, “\*-ag in Kilimanjaro Bantu: its diachronic path and implications to micro-typology”, The 9th World Congress of African Linguistics (WOCAL9), 2018.8.25, Mohammed V University, Rabat, Morocco.
3. Shinagawa, Daisuke, “Notes on the Distribution of Relative Constructions in Sheng: with Special Reference to -enye RC”, The 7th International Conference of Bantu Languages (Sintu7), 2018.7.9, The River Club, Cape Town, South Africa.
4. Shinagawa, Daisuke, and Nico Nassenstein, “Toward a ‘State of the Art’: Variation in Swahili, Current Approaches, Trends and Directions”, The 7th International Conference of Bantu Languages (Sintu7), 2018.7.9, The River Club, Cape Town, South Africa.
5. Shinagawa, Daisuke, “Typological Variation of Negative Particles in Chaga”, The 20th International Congress of Linguists, 2018.7.2, Cape Town International Congress Centre, Cape Town, South Africa.
6. 品川大輔「ウル語 (Bantu E622D) の否定標示」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.26, 北海道大学.
7. Abe, Yuko, “Verb Categories in Bende (F.12)”, The 7th International Conference on Bantu Languages, 2018.7.10, The River Club, Cape Town, South Africa.
8. Miyazaki, Kuimko, and Keiko Takemura, “Dialectal Variation in Swahili - on the Lexicon and Grammar -”, The 7th International Conference on Bantu Languages, 2018.7.9, The River Club, Cape Town, South Africa.
9. Miyazaki, Kuimko, and Keiko Takemura, “Towards a new approach to ‘Viswahili’ in Zanzibar”, The 9th World Congress of African Linguistics (WOCAL9), 2018.8.26, Mohammed V University, Rabat, Morocco.

10. Yoneda, Nobuko, and Kumiko Miyazaki, “Exclusive particles ‘only’ in Swahili - tu and peke yake-”, The 7th International Conference on Bantu Languages., 2018.7.10, The River Club, Cape Town, South Africa.
11. 仲尾周一郎「北東アフリカにおけるアラビア語の動態:コンヴィヴィアル・マルチリンガリズム」, 「アフリカ潜在力」と現代世界の困難の克服 人類の未来を展望する総合的地域研究, 第 9 回全体会議, 2018.6.16, 京都大学.
12. 仲尾周一郎「ベニシャングル・アラビア語における放出音:アラビア祖語への示唆」, 平成 30 年度第 1 回エチオピア諸語研究会, 2018.11.10, 大阪大学.
13. 仲尾周一郎「アラビア語諸変種と動詞連続」, フィールド言語学ワークショップ: 第 14 回文法研究ワークショップ「動詞連続の諸問題」, 2019.1.12, AA 研.
14. Nakao, Shuichiro, “African Plurilingual Tradition and Conviviality: Lessons from Non-Arab Arabic-Speaking Communities in Eastern Africa”, International Symposium on African Potentials and the Future of Humanity, 2019.1.27, Kyoto University, Kyoto, Japan.
15. 小森淳子「バンバラ語の動詞の「他動性」に関する考察:他動詞と自動詞を分けるもの」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.27, 北海道大学.
16. Kaji, Shigeki, “A Comparative View of Tone of West-Ugandan Bantu Languages through Field Research”, ReNeLDA 言語ドキュメンテーションセミナー, 2019.2.22, University of Dar es Salaam, Dar es Salaam Tanzania.
17. 梶茂樹「ニョロ語のタブー表現」, 日本アフリカ学会, 2018.5.27, 北海道大学.
18. 梶茂樹「ニョロ語のタブー表現:その記述と分析」, 日本アフリカ学会関西支部例会, 2018.5.19, 龍谷大学.
19. 梶茂樹「アフリカにおける多言語使用:特にコンゴ民主共和国とウガンダの例を中心に」, 日本フランス語学会 2018 年度談話会, 2018.10.21, 青山学院大学.
20. Kaji, Shigeki, “On the Homology of the Object Relative Construction and the Subordinate 1 Form in Nyoro Verb Conjugation”, The 7th International Conference on Bantu Languages, 2018.7.10, University of Cape Town, Cape Town, South Africa.
21. Abe, Maya, “The Present-day Linguistic/sociolinguistic Situation in Mbugu/Ma’a”, 9th World Congress of African Linguistics, 2018.08.26, Mohammed V University, Rabat, Morocco.
22. 古本真「スワヒリ語マクンドゥチ方言のコピュラの強調形 njo について:背景標識としての分析」, 日本アフリカ学会第 55 回大会, 2018.5.27, 北海道大学.
23. Furumoto, Makoto, “The Contracted Demonstrative as a Topic-marking Particle in Kimakunduchi”, The 20th International Congress of Linguistics, 2018.7.5, The Cape Town International Convention Centre, Cape Town, South Africa.
24. Furumoto, Makoto, “On the Origin of the Kimakunduchi Aspect marker -me-”, The 7th International Conference on Bantu Languages, 2018.7.9, The River Club, Cape Town, South Africa.
25. Furumoto, Makoto, and Takahashi, Yasunori, “Kimakunduchi: A Dialect of Swahili without Word-stress”, The 9th World Congress of African Linguistics, 2018.8.27, Mohammed V University, Rabat, Morocco.
26. Furumoto, Makoto, “Perfective and Perfect in Kimakunduchi”, Kongamano la pili la kimataifa la Kiswahili, 2018.12.13, Ukumbi wa Sheikh Idris Abdul Wakil, Zanzibar, Tanzania.

[図書]計2件

1. Shinagawa, Daisuke, and Yuko Abe, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu*, 2019.3, ILCAA.
2. 竹村景子『ニューエクスプレスプラス スワヒリ語』, 2018.12, 白水社.

[社会に向けた成果発表]計3件

1. 学外の社会活動(新聞・雑誌):小森淳子「アフリカ研究の現場から:大阪大学外国語学部 スワヒリ語専攻の研究と教育」,『アフリカ』58, 28-31, 2018, 一般社団法人アフリカ協会.
2. 学外の社会活動(新聞・雑誌):梶茂樹「第20回国際言語学会報告」,『言語研究』154, 228-230, 2018.9.
3. 古本真「フィールド言語学への誘い:ザンジバル編」,三省堂ワードワイズ・ウェブ(URL:[https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/field\\_linguistics\\_swahili07](https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/field_linguistics_swahili07)(2018年4月の記事へのリンク)).

## モンゴル諸語における言語変容—外的要因と内的要因—

研究期間: 2018-2020 (代表: 山越康裕/所員 3、共同研究員 16)

所員: 山越康裕、児倉徳和、呉人徳司

共同研究員: 植田尚樹、梅谷博之、海老原志穂、大竹昌巳、角道正佳、風間伸次郎、川澄哲也、栗林均、佐藤暢治、早田清冷、白尚燁、郝日樂、松岡雄太、山田洋平、Erika Sandman, Julie P. M. Lefort

### 研究会等の内容

2018年度第1回研究会(2018年6月30日、AA研マルチメディア会議室)

山越康裕(AA研所員)

趣旨説明

栗林均(AA研共同研究員、東北大学)

「モンゴル語データベースにおけるモンゴル文語の扱いについて」

山越康裕(AA研所員)・児倉徳和(AA研所員)

「AA研におけるモンゴル諸語関連データベースの構築状況」

総合討論および今後の方針についての検討(全員)

2018年度第2回研究会(2018年12月15日、AA研研修室)

風間伸次郎(AA研共同研究員、東京外国語大学)

「モンゴル語における文法の諸問題」

植田尚樹(AA研共同研究員、大阪大学)

「モンゴル語における有気性の対立と音響的特徴」

大竹昌巳(AA研共同研究員、日本学術振興会/東京外国語大学)

「契丹語を俯瞰する」

## 研究成果一覧

[学術論文]計 9 件

1. 角道正佳「モンゴル諸語の数量詞句」, 『言語の類型的特徴対照研究会論集』1, 53–95, 2019.1, 日中言語文化出版社。(査読有)
2. 風間伸次郎「アルタイ諸言語の場所表現における名詞的性格について」, 『北方言語研究』9, 41–65, 2019.3。(査読有)
3. Yamakoshi, Yasuhiro, “Introduction: “Altaic-type” Languages”, *Asia African Languages and Linguistics* 13, 1–5, 2019.3.
4. 海老原志穂「アムド・チベット語の使役」, 『シナ＝チベット系諸言語の文法現象 2 使役の諸相』, 1–14, 2019.3。(査読有)
5. Ebihara, Shiho, “Linguistic Features of Tibetan Proverbs with a Focus on Amdo”, *Journal of Chiba University Eurasian Society* 20, 47–70, 2018.12.
6. 植田尚樹「モンゴル語ハルハ方言の語頭阻害音の対立における F0 と F1 の特徴」, 『言語記述論集』10, 81–95, 2018.4.
7. Ueta, Naoki, “Voice Onset Time of Word-Initial Stops and Affricates in Khalkha Mongolian”, *Journal of the Phonetic Society of Japan* 22 (2), 131–140, 2018.8。(査読有)
8. Baek, Sangyub, “Continuous Aspects in Tungusic from the Perspective of Areal Linguistics: Progressive vs. Resultative”, *Asian and African Languages and Linguistics* 13, 47–65, 2019.3。(査読有)
9. 早田清冷「古典満洲語における経路の標示:『満文三国志』における deri, ci, be の交替を中心に」, 『言語の研究』, 133–140, 2018.12, 「水門(みなと):言葉と歴史」編集部。

[口頭発表等]計 15 件

1. Yamakoshi, Yasuhiro, “Influence of Chinese on Buryat in China”, The 1st International Workshop on Contact Languages: The East Asia – Indian Ocean Connection, 2018.5.1, Faculty of Social Sciences and Humanities, University of Mauritius, Reduit, Mauritius.
2. Yamakoshi, Yasuhiro, “LingDyTalk: A Simple Smartphone App Applying a Numeral Recognition Technique for Audio Playback”, Third International Conference on Documentary Linguistics – Asian Perspectives, 2018.7.24, Research Institute for Languages and Cultures of Asia (RILCA), Mahidol University, Nakhon Pathom, Thailand.
3. 山越康裕「少数言語コミュニティへのアウトリーチを目的としたスマホアプリ LingDyTalk の開発とその背景」, 第 97 回 NINJAL コロキウム, 2018.9.25, 国立国語研究所。
4. 海老原志穂「『チベット語圏文学』の周辺:シッキム、ラダック、ブータン におけるチベット語文学」, 第 2 回「チベット文学と映画制作の現在」国際シンポジウム, 2019.3.17, AA 研。
5. Ebihara, Shiho, “Reconsideration on Tibetan Word List Described by Nikolai Prejevalsky”, Workshop on Silk Road Languages from Chang’an to Istanbul, 2018.12.17, Kistar Hotel, Uçhisar/Neveşehir, Turkey.
6. 海老原志穂「チベット牧畜文化辞典の活用・応用の事例」, 第 66 回日本チベット学会, 2018.11.16, 駒澤大学。
7. Kuribayashi, Hitoshi, “On “chagan tologai”, or the Syllabary of the Traditional Mongolian Letters”, 第

- 三届蒙古語族語言国際研討会, 2018.8.1, 中国赤鋒市契丹遼文化産業化研究中心, 赤鋒, 中華人民共和国.
8. 植田尚樹「内蒙古語および中国語の語頭阻害音の音響的諸特徴」, 関西音韻論研究会, 2018.7.21, 大阪大学豊中キャンパス.
  9. 植田尚樹「語頭阻害音の有気性の対立と インテンシティーに関する一考察 : モンゴル語と中国語を例に」, 関西音韻論研究会, 2018.9.8, 大阪大学豊中キャンパス.
  10. 植田尚樹「中国語・内蒙古語・モンゴル語の語頭閉鎖音における VOT の差異」, 日本言語学会第 157 回大会, 2018.11.17, 京都大学吉田キャンパス.
  11. 植田尚樹「帯気性の対立におけるインテンシティーの特徴: モンゴル語ハルハ方言のデータをもとに」, 第 14 回音韻論フェスタ, 2019.3.5, 明海大学浦安キャンパス.
  12. 植田尚樹「土族語民和方言における阻害音の帯気性」, 2018 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会(ユーラシア言語研究 最新の報告), 2019.3.27, 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター(羽田記念館).
  13. Baek, Sangyub, “Similarities between Tungusic and Kolyma Yukaghir”, International Workshop: Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia 2, 2018.11.23, Niigata University, Niigata, Japan.
  14. 早田清冷「有圈点満洲文字表記に関する幾つかの問題」, 2018 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」, 2019.3.27, 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター(羽田記念館).
  15. Baek, Sangyub, “Ainu and Tungusic from the Perspective of Linguistic Typology and Language Contact”, International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and North East Asia: Description, Documentation and Revitalization, 2018.8.6, National Institute for Japanese Language and Linguistics, Tokyo, Japan.

[図書]計 3 件

1. 李林静, 山越康裕, 児倉徳和(編)『中国北方危機言語のドキュメンテーション』, 2018.4, 三元社.
2. 海老原志穂『アムド・チベット語文法』, 2019.2, ひつじ書房.
3. 植田尚樹『モンゴル語の母音: 実験音声学と借用語音韻論からのアプローチ』, 2019.3, 京都大学学術出版会.

[社会に向けた成果発表]計 4 件

1. 風間伸次郎「ロシアへ中国へ、「アルタイ型」言語の正体を探る」, 『FIELDPLUS』21, 4, 2019.1.
2. 風間伸次郎「アルタイ諸言語」, 『中国北方危機言語のドキュメンテーション』, 3-6, 2018.4.
3. 山越康裕「巻頭特集「似ている言語」の多様性: アルタイ型言語の諸相」, 『FIELDPLUS』21, 2-3, 2019.1.
4. 山越康裕「シネヘン・ブリヤート語」, 『中国北方危機言語のドキュメンテーション』(李林静, 山越康裕, 児倉徳和編著), 205-249, 2018.4, 三元社.

[その他]計 3 件

1. 山越康裕「モンゴル諸語対照基本語彙データベース」, 既刊の各モンゴル諸語基本語彙を対照・検索可能としたデータベース (URL: <https://mongolicbv.aa-ken.jp/index.htm>)
2. 山越康裕「モンゴル語および関連諸言語用ソフトキーボード」, モンゴル語および関連諸言語の入力をブラウザ上で簡便におこなうためのソフトキーボード (URL: [https://mongolicbv.aa-ken.jp/list\\_of\\_webkeyboard.html](https://mongolicbv.aa-ken.jp/list_of_webkeyboard.html))
3. 早田清冷「『清文彙書』デジタル画像化」, AA 研 IRC のプロジェクトとして, 清代の満漢辞典『清文彙書』の個人蔵本をデジタル画像化した。(今後のオンライン公開を目指しているが, 現在はサンプル画像のみ公開) (URL: <https://manjuisabuhabithe.aa-ken.jp/index.html>)

## 東・東南アジアの越境する子どもたち—トランスナショナル家族の子どもをめぐる文化・アイデンティティとローカル社会

研究期間: 2016–2018 (代表: 石井香世子/所員 2、共同研究員 8)

所員: 床呂郁哉、錦田愛子

共同研究員: 石井香世子、岩井美佐紀、萩巣崇世、工藤正子、酒井千絵、陳天璽、横田祥子、Hsiao-Chuan Hsia

### 研究会等の内容

2018 年度第 1 回研究会 (2018 年 6 月 23 日、AA 研マルチメディア会議室)

床呂郁哉 (AA 研)

「フィールド調査の成果と最終成果物の論点: サバ州を中心とした調査から」

岩井美佐紀 (AA 研共同研究員、神田外国語大学)

「フィールド調査の成果と最終成果物の論点: ベトナムにおける調査から」

石井香世子 (AA 研共同研究員、立教大学)

「フィールド調査の成果と最終成果物の論点: 日本におけるアジア系無国籍児童への調査から」

最終成果物の出版へ向けて (全員)

### 研究成果一覧

[学術論文] 計 7 件

1. 萩巣崇世「「ボーダー」に生きる人々の教育戦略: 在カンボジア・ベトナム系住民と学校」, 『国際教育協力論集』21(1), 17–32, 2018.
2. 陳天璽「アジアにおける結婚移住の多方向性」, 『新鐘』84, 56–57, 2018.
3. 酒井千絵「移動する人々のライフストーリーとグローバル化する「アジア」の変容: 香港・上海就職ブームという対象から」, 『関西大学社会学部紀要』50(1), 25–47, 2018.
4. 岩井美佐紀「アジアにおける子どもの越境移動: 外国にルーツのある子どもたちの市民権を考える」, 『グローバル・コミュニケーション研究』(神田外語大学, グローバル・コミュニケーション研究所) 7 号, 145–154, 2019.
5. Tokoro, Ikuya, “The Turing Test in the Wild: When Non-Human “Things” Become Others”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 407–424, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto

Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)

6. Tokoro, Ikuya, “Muslim Cosmopolitanism: Southeast Asian Islam in Comparative Perspective. By Khairudin Aljunied” (書評論文), *International Journal of Asian Studies* 15(2), 255–257, 2018, Cambridge University Press. (査読有)
7. Ponpongrat, Kannapa and Kayoko Ishii, “Social Vulnerability of Marginalized People in Times of Disaster: A Case Study of The Great East Japan Earthquake and Tsunami”, *International Journal of Disaster Risk Reduction (UK)* 27, 133–141, 2018. (査読有)

[口頭発表等]計 11 件

1. 床呂郁哉「身体的経験をめぐる人類学と現象学からのアプローチ:不完全な身体、人種と身体、妊娠期の身体の事例から(イントロダクション)」, 科研費新学術領域研究「顔身体学の構築」哲学班・人類学班合同公開ワークショップ, 2018.5.19, AA 研.
2. Sakai, Chie, “Japanese Expatriates in China since the 1990s: Gender, Nationalism, and the Changing Status as a Migrant”, XIX ISA World Congress Sociology, 2018.7.19, Metro Toronto Convention Center, Toronto, Canada.
3. Sakai, Chie, “Family as a Buffer between Multicultural Individuals and Single Citizenship Nations: Cross-border Marriages between Japan and China”, Marriage Migration, Family and Citizenship in Asia, 2019.1.31, Asia Research Institute, National University of Singapore, Singapore.
4. 工藤正子「トランスナショナルな生活世界と混雑的なアイデンティティの形成:日本人の母親とパキスタン人の父親をもつ若者たちの事例から」, 第 52 回日本文化人類学会, 2018.6.2, 弘前大学.
5. 工藤正子「日本人ムスリムの若者たち:トランスナショナルな生活世界とことば」, ひと・ことばフォーラム (第 25 回)「モビリティーズ:移動する人々のリアリティを熟視する」, 2018.6.30, 東洋大学白山キャンパス.
6. 工藤正子「南アジア系ディアスポラにおける文化変容:日本人の母とパキスタン人の父をもつ若者たちのアイデンティティ交渉」, NIHU プロジェクト「南アジア地域研究」主催 2018 年度南アジアセミナー:南アジア地域研究のフロンティア—「流動する人、モノ、文化を捉える」, 2018.8.1, 国立民族学博物館.
7. 工藤正子「トランスナショナルな生活世界と帰属の感覚:アラブ首長国連邦に暮らす日本人ムスリムの若者たち」, 移民とシティズンシップ研究会 2018 年度第 2 回研究会, 2018.10.20, 甲南大学.
8. Kudo, Masako, “Intimacy, Power, and Emotions in Evolving Transnational Families: The Case of Japanese-Pakistani Couples and Their Children”, Intimacy, Sexuality and Family in the Process of Migration: European / Asian Experiences Compared', 2018.12.18, Universite libre de Bruxelles, Brussels, Belgium.
9. Kudo, Masako, “Negotiating Citizenship in Transnational Spaces: Young Japanese Muslim Women Born to Japanese Mothers and Pakistani Fathers”, Marriage Migration, Family and Citizenship in Asia, 2019.1.31, Asia Research Institute, National University of Singapore, Singapore.
10. 床呂郁哉「他者とつながる」, 慶應義塾大学文学部公開講座, 2018.7.14, 慶應義塾大学.
11. 床呂郁哉「スーロー諸島のムスリムの現況:—マレーシア・サバとの関係を中心に」, フィリピン南部ムスリム社会に関する実務家ワークショップ, 2018.9.10, JICA Philippines Office, Makati City, Philippines.

[図書]計2件

1. 床呂郁哉, 吉田ゆか子, 吉田優貴編『トランスカルチャー状況下における顔・身体(2018年3月国際ワークショップ・プロシーディングス)』, 2019.3, AA 研.
2. 石井香世子, 小豆澤史絵『外国につながる子どもと無国籍:児童養護施設への調査結果と具体的対応例』, 2019.3, 明石書店.

[社会に向けた成果発表]計5件

1. 石井香世子「アジアの越境する子どもたち」, 『FIELDPLUS』20, 2-3, 2018.7, AA 研.
2. 荻巣崇世「カンボジアにおけるベトナム系住民の子どもと学校」, 『FIELDPLUS』20, 4-5, 2018.7, AA 研.
3. 酒井千絵「日本と中国を移動する子どもたち:複数の文化間での葛藤を乗り越える」, 『FIELDPLUS』20, 6-7, 2018.7, AA 研.
4. 横田祥子「「東南アジア人材」という表象を泳ぐ子供たち:台湾・結婚移民の第二世代」, 『FIELDPLUS』20, 8-9, 2018.7, AA 研.
5. 陳天璽「無国籍者の居場所とアイデンティティ:在日ロヒンギャ族の子ども」, 『FIELDPLUS』20, 10-11, 2018.7, AA 研.

[その他]計2件

1. 石井香世子「無国籍研究会 集会報告」, 調査報告: 2017年 児童養護施設における外国につながる子どもと無国籍に関する実態調査  
(<https://mukokusekikenkyukai.jimdo.com/%E9%9B%86%E4%BC%9A-1/>)
2. 石井香世子「Stateless Network トーク・イベント」, 「児童養護施設における”無国籍”調査報告」のレポート (<https://stateless-network.com/?p=1936>)

## 「わざ」の人類学的研究—技術, 身体, 環境(「もの」の人類学的研究(3))

研究期間: 2017-2019 (代表: 床呂郁哉/所員 4、共同研究員 13)

所員: 床呂郁哉、河合香吏、西井涼子、吉田ゆか子

共同研究員: 卯田宗平、内堀基光、大村敬一、奥野克巳、金子守恵、木村周平、久保明教、黒田末寿、  
祖田亮次、田中雅一、丹羽朋子、檜垣立哉、森下翔

### 研究会等の内容

2018年度第1回研究会(2018年7月8日、AA研マルチメディアセミナー室)

卯田宗平(AA研共同研究員、国立民族学博物館)

「なぜ日本の鶴匠はウ類をドメスティケートしないのか」

木村周平(AA研共同研究員、筑波大学)

「わざわいとわざ:リアルタイムな呼びかけと同時性を作る技術について」

森下翔(AA研共同研究員、大阪大学)

「宗教的慣習をめぐる「科学的」な「わざ」の構築:インドネシア・ボスカ天文台の実践について」

2018年度第2回研究会(2019年1月11日~12日、AA研マルチメディアセミナー室)

1月11日

奥野克巳(AA研共同研究員、立教大学)

「異種間のあいだの『わざ』」

田中雅一(AA研共同研究員、京都大学)

「戦場で生まれたアート、トレンチ・アート」

内堀基光(AA研共同研究員、放送大学)

「ウェンデル・オズワルト『食料獲得の技術誌(1983)』を読む」

1月12日

丹羽朋子(AA研共同研究員、人間文化研究機構)

「生を数え、「再現」する技法:3.11以降の記録と表現のかたち」

久保明教(AA研共同研究員、一橋大学)

「ブルーノ・ラトゥール再考: ANT 存在様態論におけるマテリアリティの変遷」

吉田ゆか子(AA研所員)

「文化的他者の「わざ」を引き寄せる:日本におけるバリ・ガムラン音楽演奏」

2018年度第3回研究会(2019年3月4日、AA研マルチメディアセミナー室)

染谷昌義(高千穂大学)

「生態学的身体論:日常を生きるスキルを支える身体の仕組み」

大村敬一(AA研共同研究員、放送大学)

「誘惑のわざ:イヌイトの倫理にみる「黄泉新世」時代の社交術」

## 研究成果一覧

[学術論文]計25件

1. Tokoro, Ikuya, “The Turing Test in the Wild: When Non Human “Things” Become Others”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 407–424, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
2. 床呂郁哉「「もの」研究の新たな視座」, 『詳論 文化人類学』(桑山敬己・綾部真雄編), 265–278, 2018.4, ミネルヴァ書房.
3. 奥野克巳「人類学の現在、絡まりあう種たち、不安定な『種』」, 『たぐい.』1, 4–15, 2019.3.
4. 奥野克巳「〈共異体〉でワルツを踊るネコと写真家」, 『ユリイカ』51 (4), (4), 147–156, 2019.2.
5. 奥野克巳「考える、生きる:『森は考える』と人類学のこれから」, 『福音と世界』2019年4月号, 22–27, 2019.3.
6. Uchibori, Motomitsu, “The Spirit as the Other: From the Iban Ethnography”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kawai Kaori), 325–346, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia.
7. Niwa, Tomoko, “Between Form, Word and Materiality: Shanbei Paper-Cuts”, *An Anthropology of Things* (ed. by Kaori Kawai and Ikuya Tokoro), 37–57, 2018.4, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans

Pacific Press, Melbourne, Australia.

8. 卯田宗平「カワウの人工繁殖をめぐる漁師の技法と生殖介入の動機: 中国雲南省洱海における鵜飼  
い漁師たちの繁殖技術の事例から」, 『国立民族学博物館研究報告』43 (4), 555–668, 2019.3. (査読  
有)
9. 卯田宗平「鵜飼のウミウの繁殖生態と鵜匠による技術の安定化: 宇治川の鵜飼における4年間の記録  
から」, 『生き物文化誌学会ビオストーリー』29, 96–105, 2018.5, 生き物文化誌学会. (査読有)
10. 大村敬一「社会性の条件としてのトラウマ: イヌイトの子どもへのからかいを通じた他者からの呼びか  
け」, 『トラウマを生きる』, 173–206, 2018.11, 京都大学学術出版会.
11. Omura, Keiichi, “The Ontology of the Other: The Evolutionary Basis of Human Sociality and Ethics in  
the Formation and Continuation of Inuit Society”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by  
Kaori Kawai), 225–244, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne,  
Australia.
12. Omura, Keiichi, “Maps in Action: Quotidian Politics through Boundary Translational Matrix for World  
Multiple in Contemporary Inuit Everyday Life”, *The World Multiple: The Quotidian Politics of Knowing  
and Generating Entangled Worlds*, 68–82, 2018.11, Routledge, London, UK. (査読有)
13. Omura, Keiichi, “Preface and Acknowledgement”, *The World Multiple: The Quotidian Politics of  
Knowing and Generating Entangled Worlds*, xiv–xviii, 2018.11, Routledge, London, UK. (査読有)
14. Otsuki, Grant, Shiho Satsuka, Keiichi Omura, and Atsuro Morita, “Introduction”, *The World Multiple:  
The Quotidian Politics of Knowing and Generating Entangled Worlds*, 1–17, 2018.11, Routledge, London,  
UK. (査読有)
15. Kawai, Kaori, “Introduction: Finding “Others” from an Evolutionary Perspective: The Search for the  
Evolutionary Historical Foundations of Human Sociality”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed.  
by Kaori Kawai), 1–21, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne,  
Australia. (査読有)
16. Kawai, Kaori, “The Origins of “Consideration for One's Enemy”: What Kind of Others Are Neighboring  
Groups to the Dodoth?”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 217–233,  
2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
17. 河合香吏「敵と友のはざままで: ドドスと隣接民族トゥルカナとの関係」, 『遊牧の思想: 人類学がみる激  
動のアフリカ』(太田至, 曾我亨編), 197–214, 2019.3, 昭和堂.
18. Tanaka, Masakazu, “Morality and Instrumentality: A Practical Approach to Theorizing the Other”,  
*Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 303–321, 2019.2, Kyoto University  
Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia.
19. 田中雅一「アウシュヴィッツにてホロコーストの生存者に会うということ」, 『日本オーラル・ヒストリー研  
究』14, 43–54, 2018.9. (査読有)
20. Tanaka, Masakazu, “Grids, Waves and Nationalism: Some Thoughts by Listening to “Good Vibrations”  
in a Big Morgue”, *Japanese Review of Cultural Anthropology*, 19 (1), 5–50, 2018.6. (査読有)
21. Higaki, Tatsuya, “Japan as Thousand Plateau”, *Deleuze and Guattari Studies*. 12 (2), 240–251, 2018.5.  
(査読有)
22. 檜垣立哉「賭博の論理・賭博の現場」, 『賭博の記号論 叢書セミオトポス』13, 14–17, 2018.8, 新曜社.

23. 檜垣立哉「助けることの哲学」, 『助ける』人間科学叢書, 2019.3. 大阪大学出版会.
24. Kuroda, Suehisa, “Approving Others and Incomprehensive Others in Primate Society”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 25–46, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
25. Kuroda, Suehisa, ““Things” and Their Emergent Sociality in the Primates’ World”, *An Anthropology of Things* (ed. by Kaori Kawai and Ikuya Tokoro), 222–240, 2018.4, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)

[口頭発表等]計 30 件

1. 床呂郁哉「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究(計画班 A01-P01:18 年度後半進捗報告)」, 科研費新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体表現」, 第 3 回領域会議, 2018.12.27, 沖縄県自治会館.
2. 床呂郁哉「趣旨説明:顔・身体学研究に関するイントロダクション」, 科研費新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体表現」第 3 回シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」, 2018.11.25, AA 研.
3. 床呂郁哉「身体的経験をめぐる人類学と現象学からのアプローチ—不完全な身体、人種と身体、妊娠期の身体の事例から(イントロダクション)」, 科研費新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体表現」, 哲学班・人類学班合同公開ワークショップ, 2018.5.19, AA 研.
4. 床呂郁哉「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究(計画班 A01-P01:18 年度前半進捗報告)」, 科研費新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体表現」第 2 回領域会議, 2018.6.10, 東京女子大学.
5. 床呂郁哉「他者とつながる」, 慶應義塾大学文学部公開講座, 2018.7.14, 慶應義塾大学.
6. 宇川直宏, 奥野克巳「文化人類学と現在性からみる「ありうる共同体」の形とは?」, METACITY, 2019.1.19, 幕張メッセ.
7. Uchibori, Motomitsu, “Characteristics of Community of Care: Hunter-gatherers in the Light of Swidden Cultivators”, The Twelfth International Conference on Hunting and Gathering Societies, 2018.07.25, Unsiversiti Sains Malyasia, Penang, Malaysia.
8. 丹羽朋子「「探求の技術」を手探りする人類学的「実験場」をつくる:「映像のフィールドワーク・ラボ」の試みから」, 第 112 回現代人類学研究会「つくること・あらわすこと:インゴルド『メイキング』再考」, 2018.4.15, 東京大学.
9. 丹羽朋子「記録映像をフィールドワークする:他者経験の変換装置としての上映・制作表現ワークショップ」, 第 52 回日本文化人類学会研究大会, 2018.6.2, 弘前大学.
10. 丹羽朋子「3.11 以後の日常を記録・分有する技法:映像・演劇・展示の事例から」, シンポジウム「東日本大震災と生のかたち」(科研費基盤研究(A)「人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開:危機を中心に」, AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求:人類学におけるミクローマクロ系の連関 2」共催), 2018.10.20, AA 研.
11. 丹羽朋子「中国黄土高原の暮らしを彩る窓花を訪ねて」, 堺市博物館第 24 回無形文化遺産理解セミナー, 2018.12.16, 堺市博物館.

12. 卯田宗平「中国の鵜飼について: 日本と中国の鵜飼技術の違いから背景文化の違いを知る」, 第 32 回特別展示『中国の鵜飼: 卯田宗平フォトコレクションから』関連岐阜市民講座, 2018.9.15, 岐阜市長良川うかいミュージアム会議室.
13. 卯田宗平「ウ類に対する働きかけの違いとその要因: 日本と中国の鵜飼をめぐる事例から」, 第 70 回日本民俗学会年会, 2018.10.14, 駒澤大学.
14. 卯田宗平「なぜ中国の鵜飼ではカワウをドメスティケートするのか: 日本の鵜飼との事例比較から」, 大学共同利用法人人間文化研究機構 (NIHU) ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業」東北大学東北アジア研究センター拠点「日中交流セミナー・動物資源をめぐる文化のデザイン」国際シンポジウム, 2018.11.23, 東北大学東北アジア研究センター.
15. 卯田宗平「鵜飼からみた中国と日本: 方法としての漁撈研究」, 名古屋大学環境学研究科特別講義, 2018.12.13, 名古屋大学環境総合館.
16. 卯田宗平「失われつつあるものを、かき集めた: 日本展示資料の紹介」開館 40 周年記念特別展「太陽の塔からみんなへ: 70 年万博収集資料」, 国立民族学博物館ウィークエンドサロン, 2018.5.27, 国立民族学博物館.
17. Omura, Keiichi, “Session 4. Adapting to Arctic realities: Bringing Knowledge to Action”, On Land, Water and Ice: Indigenous Societies and the Changing Arctic (Slavic-Eurasian Research Center 2018 Summer International Symposium), 2018.7.6, Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University, Sapporo, Japan.
18. Omura, Keiichi, “Life-course as an Autopoietic System: Considering Mechanisms of Social Reproduction in Inuit Shared Care-giving for Children and Elders”, CHAGSXII P29 “Caring Systems for the Aged within the Framework of Life-courses (Stages of Life) among Hunter-gatherer Communities.”, 2018.7.25, Universiti Sains Malaysia, Penang, Malaysia.
19. 大村敬一「イヌイトの知識と近代科学: カナダ・イヌイトの「野生の科学」から人類の未来を問う」, 第 10 回人間と文化コース懇話会, 2018.10.10, 放送大学・自然と環境コース・セミナー室.
20. 大村敬一「「ファースト・コンタクト」(極限)の使い方: 相互行為論から世界生成機械論へ」(『見知らぬものと出会う: ファースト・コンタクトの相互行為論』(木村大治、2018)へのコメント), コミュニケーションの自然誌研究会, 2018.12.17, 京都大学吉田泉殿.
21. 大村敬一「「ファースト・コンタクト」(極限)の使い方: 相互行為論から世界生成機械論へ」(『見知らぬものと出会う: ファースト・コンタクトの相互行為論』(木村大治、2018)へのコメント), 民族藝術学会第 151 回研究例会, 2018.12.22, 大阪大学文学研究科・芸術研究棟.
22. 大村敬一「シンポイエーシスのメカニズムをさぐる試み: 多重に生きるイヌイトの世界のつなげ方」, 第 26 回マルチスピーシーズ人類学研究会「種社会の記述法をめぐって」, 2019.1.18, 立教大学池袋キャンパス.
23. 河合香吏「牧畜民の遊動と集団間関係」, 第 48 回ホミニゼーション研究会, 2019.3.1, 京都大学霊長類研究所.
24. Kaneko, Morie, “Development of Local Knowledge of Trash in Southwestern Ethiopia with Special Reference to Used School Notebooks”, 20th International Conference of Ethiopian Studies, 2018.10.1, Mekelle University, Mekelle, Ethiopia.
25. Kaneko, Morie, “Formation of Local Knowledge and Emerging New Livelihoods in Ethiopia”, Kyoto-

EHESS International Symposium, 2018.12.4, Institut National des Langues et Civilisations Orientales, Paris, France.

26. 金子守恵「廃棄物をめぐるマテリアリティ:エチオピア西南部における使い終えたノートのあつかわれ方に注目して」, 日本ナイル・エチオピア学会第 27 回学術大会, 2018.4.22. 東京外国語大学.
27. 久保明教「「手作り」という幻想: 家庭料理のネットワーク論」, 日本記号学会第 38 回研究大会, 2018.5.19, 名古屋大学.
28. 田中雅一「身近なものや出来事から異なる 民族・文化を考える」, 京大オリジナル講演会, 2018.11.29, IHI 横浜エンジニアリングセンター.
29. 田中雅一「アートから遺品、そしておみやげへ:トレンチアートをめぐって」, 国立民族学博物館研究プロジェクト「人類学/民俗学の学知と国民国家の関係:20 世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」研究会, 2018.12.27, 国立民族学博物館.
30. 祖田亮次, 大谷真樹, 横林泰宏「東・東南アジアにおける治水・利水技術の歴史的展開:日本を中心とする河川の 150 年史」, 2018 年人文地理学会大会, 2018.11.24-25, 奈良大学.

[図書]計 9 件

1. 床呂郁哉, 吉田ゆか子, 吉田優貴(編)『トランスカルチャー状況下における顔・身体(2018 年 3 月国際ワークショップ・プロシーディングス)』, 2019.3, AA 研.
2. 奥野克巳『ありがとうもごめんなさいもいらない森の民と暮らして人類学者が考えたこと』, 2018.5, 亜紀書房.
3. 奥野克巳, シンジルト, 近藤祉秋編『たぐい』1, 2019.3, 亜紀書房.
4. Omura, Keiichi, Atsuro Morita, Shiho Satsuka, and Grant Otsuki (eds.), *The World Multiple: The Quotidian Politics of Knowing and Generating Entangled Worlds*, 2018.11, Routledge, London, UK.
5. Kawai, Kaori, *Others: The Evolution of Human Sociality*, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan and Trans Pacific Press, Melbourne, Australia.
6. 久保明教『機械カニバリズム:人間なきあとの人類学へ』, 2018.9, 講談社.
7. 田中雅一『誘惑する文化人類学:コンタクト・ゾーンの世界へ』, 2018.6, 世界思想社.
8. 檜垣立哉『食ることの哲学』, 2018.4, 世界思想社.
9. 檜垣立哉, 小泉義之, 合田正人編集『ドゥルーズの 21 世紀』, 2019.1, 河出書房新社.

[社会に向けた成果発表]計 10 件

1. 奥野克巳「対談＝奥野克巳×高野秀行「辺境」の知の運動はいま」, 『週刊読書人』3248 (URL: <http://dokushojin.com/article.html?n=3782>)
2. 奥野克巳「上妻世海×奥野克巳×古谷利裕 別の身体を、新しい『製作』を」, 『週刊読書人』3267 (URL: <http://dokushojin.com/article.html?n=4618>)
3. 奥野克巳「書評 水原涼『蹴爪(ボラン)』」, 『文藝』2018 年冬号, 671, 2018.10.
4. 奥野克巳「書評 渡辺公三『批判的人類学のために』」, 『図書新聞』3379, 8, 2018.12.
5. 奥野克巳「書評 浅井優一(著)『儀礼のセミオティクス:メラネシア・フィジーにおける神話／詩的テキストの言語人類学的研究』」, 『社会言語科学』21 (1), 388-391, 2018.9.
6. 丹羽朋子「EC フィルム活用プロジェクト」, 『美術手帖』70 (1067), 76, 2018.6.

7. 卯田宗平「ドメスティケーションが生起する条件:しない／できない事例から考える」,『民博通信』163, 14-15, 2018.12.
8. 卯田宗平「想像界の生物相:カワウソ老いて河童になる?」,『月刊みんぱく』42 (10), 14-15, 2018.10, 国立民族学博物館.
9. 卯田宗平「持ち運びが便利な双胴船」,『文部科学教育通信』436, 1, 2018.5.
10. 大村敬一「イッカククジラ鯨の思い出:北極とイヌイトの未来に学ぶ旅」,『まほら』97, 44-45, 2018.10.

[その他]計 3 件

1. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組・出演:有):内堀基光「総合人類学の構想」(放送大学第 2BS), 2018 年下半期, 放送大学特別講演を 45 分に編集したもの。文化人類学と自然人類学を総合的に俯瞰し, あらたな人類研究の可能性を論じた。
2. 丹羽朋子「無形文化遺産シリーズ展「中国と日本の切り紙:一新年を迎える紙の花」」, 堺市博物館の無形文化遺産関連事業と連携して開催した, 研究展示の制作(主催・会場:堺市博物館, 会期:2018.11.20-2019.1.20).  
URL: <http://www.city.sakai.lg.jp/kanko/hakubutsukan/unesco/renkei/renkei2018.files/paper-cut.pdf>
3. 丹羽朋子「映像のフィールドワーク展:—20 世紀の映像百科事典をひらく」, ドイツの学術映像アーカイブ「エンサイクロペディア・シネマとグラフィカ」および, その活用プロジェクトを紹介する展覧会の企画・制作(主催・会場:せたがや文化財団生活工房, 会期:2019.3.16-2019.4.7).  
URL: <http://www.setagaya-ldc.net/program/441/>

## イスラームに基づく経済活動・行為(第二期)

研究期間: 2016-2018 (代表: 福島康博/所員 2、共同研究員 13)

所員: 床呂郁哉、黒木英充

共同研究員: 福島康博、赤堀雅幸、今堀恵美、大川真由子、上山一、川端隆史、小牧幸代、砂井紫里、佐竹弘靖、塩谷もも、藤原達也、舛谷鋭、安田慎

### 研究会等の内容

平成 29 年度の研究計画においては、平成 30 年度は研究会を複数回開催する予定である旨記載したが、年間を通じて適切な報告者に報告を依頼することができず研究会の開催を行うことができなかった。よって、当初の研究計画を全うすることができなかった。このような状況であったため共同研究員においては、共同研究会の開催の代わりに各人の研究を進めてもらうこととなった。

### 研究成果一覧

[学術論文]計 15 件

1. 安田慎「共有されない空間、参照されるリズム:デジタル空間における宗教経験のリズム・フローをめぐる観光的考察」,『観光学評論』7(1), 21-36, 2019.3. (査読有)
2. 安田慎「信仰と余暇の狭間で—イスラミック・レジャーとしての宗教観光市場から現代イスラームの社会的心性をまなざす」,『四国遍路と世界の巡礼』4, 49-57, 2019.3.
3. 安田慎「ハラル・ツーリズムを展望する:情報の非対称性をめぐるソーシャル・イノベーション」,『ハラルサイエンスの展望』(民谷栄一, 富沢寿勇編), 181-188, 2019.2, シーエムシー出版.

4. Raj, Razaq, Kevin Griffin, Kevin & Shin Yasuda, “Religious Tourism and Sacred Sites in Asia”, *Religious Tourism in Asia: Tradition and Change through Case Studies and Narratives* (ed. by Shin Yasuda, Razaq Raj, Kevin Griffin), 1–9, 2018.11, CAB International, Oxfordshire, UK.
5. Yasuda, Shin, “Entrepreneurship for Religious Tourism in Mumbai, India”, *Religious Tourism in Asia: Tradition and Change through Case Studies and Narratives* (ed. by Shin Yasuda, Razaq Raj, Kevin Griffin), 21–29, 2018.12, CAB International, Oxfordshire, UK.
6. Yasuda, Shin, “Religious Practices and Performance in Syrian Shi’ite Religious Tourism”, *Islamic Tourism: Management of Travel Destinations* (ed. by Ahmad Jamal, Razaq Raj, Kevin Griffin), 201–213, 2018.12, CAB International, Oxfordshire, UK.
7. 大川真由子「ハラル化粧品の実状」, 『ハラルサイエンスの展望』(民谷栄一, 富沢寿勇編), 151–158, 2019.2, シーエムシー出版.
8. 大川真由子「イスラームはエコ・フレンドリーか: オマーンの学校教科書および説教集にみる環境言説」, 『自然・人間・神々: 時代と地域の交差する場』(上原雅文編), 213–249, 2019.3, 御茶の水書房.
9. 塩谷もも「国際交流科目を通じた異文化理解とは: 「アジア文化交流」から考える」, 『人間と文化』2, 178–189, 2019.3.
10. Tokoro, Ikuya, “The Turing Test in the Wild: When NonHuman “Things” Become Others”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 407–424, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
11. 床呂郁哉「「もの」研究の新たな視座」, 『詳論 文化人類学: 基本と最新のトピックを深く学ぶ』(桑山敬己, 綾部真雄編), 265–278, 2018.4, ミネルヴァ書房)
12. Tokoro, Ikuya, “Muslim Cosmopolitanism: Southeast Asian Islam in Comparative Perspective. By Khairudin Aljunied.”, *International Journal of Asian Studies* 15 (2), 255–257, 2018.7. (査読有)
13. Komaki, Sachiyo, “Islam and the Self-Representation of Punjabi Muslims in Pakistan: A Case Study of the Exhibition of Holy Relics in the Badshahi Masjid, Lahore”, *Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies (Kyoto Kenan Rifai Sufi Studies Series 3)*, 243–262, 2019, Kenan Rifai Center for Sufi Studies, Kyoto University, Kyoto, Japan.
14. 福島康博「イスラームと金融」, 『ハラルサイエンスの展望』(民谷栄一, 富沢寿勇編), 169–180, 2019.2, シーエムシー出版.
15. 藤原達也「ハラルサプライチェーン管理の研究動向」, 『ハラルサイエンスの展望』(民谷栄一, 富沢寿勇編), 199–208, 2019.2, シーエムシー出版.

[口頭発表等]計 22 件

1. Yasuda, Shin, “Contextualising Islam in a Non-Muslim Country: Tokyo Camii and Mosque Tourism in Japan”, 10th Annual International Religious Tourism and Pilgrimage Conference, 2018.6.28, Santiago De Compostela University, Galicia, Spain.
2. 安田慎「共有されない時間、参照されるリズム: イスラームから見るデジタル・デバイスのパフォーマンス」, 観光学術学会 第7回年次大会, 2018.7.7, 二松学舎大学.
3. 安田慎「「ウスターズ」たちの宗教市場: インドネシアにおける. イスラーム旅行会社とスピリチュアル・マーケット試論」, 宗教とツーリズム研究会, 2018.7.14, 立教大学.

4. Yasuda, Shin, “Remembrance of Holy Places: Religious Capital and Syrian Shi’ite Religious Sites in the Era of Crisis”, World Congress for Middle Eastern Studies Seville 2018, 2018.7.20, Seville University of Seville, Seville, Spain.
5. Yasuda, Shin, “Making Pilgrimage in the Marketplace: Reviewing Bisnis Hajj dan Umroh in Indonesia”, International Conference on Future of the Past: Tourism and Cultural Heritage in Asia, 2018.8.7, Ritsumeikan University, Kyoto, Japan.
6. 安田慎「信仰とレジャーの狭間で:イスラームにおける参詣から社会的心性をまなざす」, 愛媛大学 四国遍路・世界の巡礼研究センター 公開シンポジウム・研究集会, 2018.10.28, 愛媛大学.
7. Yasuda, Shin, “Mapping Islamic Leisure Travel in Non-Islamic Countries: Discussion of Halal Tourism from an East Asian Perspective and Beyond”, EHESS International Workshop on Global Islamic Market: Asian Perspectives on the Diversity of Capitalism, 2018.11.22, Université PSL, Paris, France.
8. Shioya, Momo, “The Meaning of Veiling in Contemporary Indonesia”, シンポジウム「ムスリム女性のヴェールをめぐる学際研究」, 2018.8.21, 立教大学.
9. Tokoro, Ikuya, “Preliminary Study on Role of Civil Society in the Mindanao Peace Process”, International Conference on Progressive Civil Society, 2019.2.19, Universiti Ahmad Dahlan, Yogyakarta, Indonesia.
10. 床呂郁哉「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究(計画班 A01-P01:18年度後半進捗報告)」, 科研費新学術領域研究(研究領域提案型)「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体表現」第3回領域会議, 2018.12.27, 沖縄県自治会館.
11. Tokoro, Ikuya, “De-centralizing Cross-Border Migration Flows in Asia: A Case Study on Transnational Migration in/around Japan and the Philippines”, JaCMES-LERC Joint Roundtable on Migrants and Refugees Dynamics and Perception toward their Integration, 2018.11.28, Japan Center for Middle Eastern Studies, Beirut, Lebanon.
12. 床呂郁哉「趣旨説明:顔・身体学研究に関するイントロダクション」, 科研費新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体表現」第3回公開シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」, 2018.11.25, AA 研.
13. 床呂郁哉「身体的経験をめぐる人類学と現象学からのアプローチ:不完全な身体、人種と身体、妊娠期の身体の事例から(イントロダクション)」, 科研費新学術領域研究「顔身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体表現」哲学班・人類学班合同公開ワークショップ, 2018.5.19, AA 研.
14. 床呂郁哉「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究(計画班 A01-P01:18年度前半進捗報告)」, 科研費新学術領域研究(研究領域提案型)「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体表現」, 第2回領域会議, 2018.6.10, 東京女子大学.
15. 床呂郁哉「他者とつながる」, 慶應義塾大学文学部公開講座, 2018.7.14, 慶應義塾大学.
16. Tokoro, Ikuya, “Introduction on the Muslim Society in the Philippines”, フィリピン南部ムスリム社会に関する実務家ワークショップ, 2018.9.10, JICA Philippines Office, Makati City, Philippines.
17. 床呂郁哉「スルー諸島のムスリムの現況:マレーシア・サバとの関係を中心に」, フィリピン南部ムスリム社会に関する実務家ワークショップ, 2018.9.10, JICA Philippines Office, Makati City, Philippines.
18. 藤原達也「ハラール調達の成熟度モデルの再構築」, 日本経営倫理学会第26回研究発表大会, 2018.6.24, 山梨学院大学.

19. 藤原達也「ハラール調達成熟度モデルの再構築:組織間関係論の観点から」, 日本経営倫理学会部会第5回 Emerging Scholars Workshop, 2018.9.8, 慶応義塾大学.
20. Komaki, Sachiyo, “PA-187. Religious Practices Using Commodities in Consumer Societies. The Cult of Islamic Relics and the Religious Goods in Contemporary India” World Congress for Middle Eastern Studies Seville, 2018.7.18, University of Seville, Seville, Spain.
21. Sai, Yukari, “Influence of Malaysian Concepts of Modern Halal upon Asian Countries: The Cases of Japan and Taiwan”, International Conference on Rethinking Halal: Genealogy, Current trends, and New Interpretations, 2018.6.19, Universite Catholique de Louvain, Brussels, Belgium.
22. 上山一「中東産油国における石油政策と政策評価」, 日本国際経済学会第77回全国大会, 2018.10.14, 関西学院大学.

[図書]計3件

1. Yasuda, Shin, *Religious Tourism in Asia: Tradition and Change through Case Studies and Narratives*, 2018, CAB International, Oxfordshire, UK.
2. 床呂郁哉, 吉田ゆか子, 吉田優貴(編)『トランスカルチャー状況下における顔・身体(2018年3月国際ワークショップ・プロシーディングス)』, 2019, 科研費「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」.
3. 福島康博『Q&A ハラールを知る101問: ムスリムおもてなしガイド』, 2018.5, 解放出版社.

[社会に向けた成果発表]計7件

1. 学外の社会活動(新聞・雑誌):床呂郁哉「ミンダナオ和平の行方を読む(上)」, 『まにら新聞』2018年8月28日号, 3, 2018.8.
2. 学外の社会活動(新聞・雑誌):床呂郁哉「ミンダナオ和平の行方を読む(下):『静かな危機』の克服」, 『まにら新聞』2018年8月29日号, 3, 2018.8.
3. 学外の社会活動(新聞・雑誌):床呂郁哉「アチェから見たフィリピン南部」, 『まにら新聞』2019年1月5日号, 3, 2019.1.
4. 学外の社会活動(新聞・雑誌):床呂郁哉「ミンダナオ和平新展開(上)」, 『まにら新聞』2019年2月5日号, 3, 2019.2.
5. 学外の社会活動(新聞・雑誌):床呂郁哉「ミンダナオ和平新展開(下)」, 『まにら新聞』2019年2月6日号, 3, 2019.2.
6. 学外の社会活動(新聞・雑誌):床呂郁哉「ドゥテルテ政権の2年」(インタビュー記事), 『まにら新聞』2018年7月4日号, 1, 2018.7.
7. 砂井紫里「ヌールさんの里帰り: 分かち合う家族の食卓」, 『FIELDPLUS』21, 14-15, 2019.1.

[その他]計2件

1. 安田慎「写真展「等身大のアジアに生きる」」, アジアをフィールドとする文化人類学者・地域研究者で一般向けの写真展を行い, シリアのフィールド写真を数点提供した。2018.12.3-14, 育英短期大学.
2. 塩谷もも「インドネシアにおけるムスリムファッションに関する人類学的研究」, 科研費新学術領域研究

「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体表現」第2回領域会議におけるポスター発表, 2018.6.9-10, 東京女子大学.

## 東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)—共存と

### 紛争のダイナミクス

研究期間: 2017-2019 (代表: 富沢寿勇/所員 7、共同研究員 20)

所員: 床呂郁哉、飯塚正人、黒木英充、外川昌彦、西井涼子、錦田愛子、吉田ゆか子

共同研究員: 富沢寿勇、新井和広、今泉慎也、岡本正明、小河久志、奥島美夏、金子奈央、川端隆史、黒田景子、菅原由美、鈴木伸隆、辰巳頼子、坪井祐司、福島康博、見市建、森正美、Shamsul Amri Baharuddin, Ahmad Najib Burhani, Azizah Binti Kassim, Omar Farouk Sheikh Ahmad

### 研究会等の内容

2018年度第1回研究会(2018年7月15日、AA研マルチメディアセミナー室)

新井和広(AA研共同研究員、慶應義塾大学)

「最近のインドネシアにおけるイスラームと「アラブ」:宗教と政治の現場から」

川端隆史(AA研共同研究員、UZABASE)

「マレーシア総選挙:歴史的な政権交代から何を讀むか」

日下部尚徳(東京外国語大学)

「バングラデシュのイスラームとロヒンギャ問題:ダッカ襲撃テロ事件から2年」

2018年度第2回研究会(2018年8月5日、Hotel Meridien Kota Kinabalu, Kota Kinabalu, Malaysia)

Masaaki Okamoto (Kyoto University)

“Moderate and Tolerant Discourse in Indonesian Islam and Beyond”

A. Rahman Tang Abdulla (Universiti Malaysia Sabah)

“The Origins of Islam and Diversity in the Malay Society: Conceptualising Islamic Laws in Selected Malay Legal Text”

Nobutaka Suzui (University of Tsukuba)

“The Muslims between Two Empires: John Finley and His Colonial Experiments in the Southern Philippines”

2018年度第3回研究会(2019年2月11日、AA研マルチメディアセミナー室)

野田仁(AA研所員)

「中国新疆における移動の歴史と現状」

森正美(AA研共同研究員、京都文教大)

「バンサモロ基本法とフィリピン南部の今後:マラナオ社会からの視点を中心に」

床呂郁哉(AA研所員)

「周辺国から見たミンダナオ紛争:マレーシア、インドネシアとの関連で」

## 研究成果一覧

[学術論文]計 16 件

1. 富沢寿勇「ハラール産業と監査文化研究」, 『文化人類学』83(4), 613–630, 2019.3. (査読有)
2. 富沢寿勇「ハラールの定義、認証制度と日本の取り組み」, 『ハラールサイエンスの展望』(民谷栄一, 富沢寿勇編), 3–9, 2019.2, シーエムシー出版.
3. 富沢寿勇「ハラールサイエンスの射程: その現状と展望」, 『ハラールサイエンスの展望』(民谷栄一, 富沢寿勇編), 10–17, 2019.2, シーエムシー出版.
4. Tokoro, Ikuya, “Muslim Cosmopolitanism: Southeast Asian Islam in Comparative Perspective. By Khairudin Aljunied”, *International Journal of Asian Studies*. 15 (2), 255–257, 2018.7. (査読有)
5. 黒田景子「コタムクアンのシャリフ・アブ・バカルル・シャー伝承と「シヤム語 1」話者たち: クダー史の再検討」, 『南方文化』45, 43–78, 2019.3. (査読有)
6. 黒田景子「1911 年英領マラヤ下センサスにおけるクダー(Kedah)像」, 『鹿大史学』2, 19–36, 2019.3.
7. 見市建「インドネシアにおける「イスラームの位置付け」をめぐる闘争」, 『国際問題』675, 29–37, 2018.10.
8. 見市建「インドネシアの「イスラーム化」とハラール認証」, 『明日の食品産業』平成 30 年度 3 月号, 3–4, 2019.3.
9. 見市建「「英雄の街」スラバヤの宗教と市民社会」, 『アジアに生きるイスラーム』(笹川平和財団編), 63–81, 2018.4, イースト・プレス.
10. 坪井祐司「マラヤの脱植民地化と歴史の見直し: マレー・ムスリムの視点から」, 『マレーシア研究』7, 65–78, 2019.3. (査読有)
11. 坪井祐司「一九三〇年代のマレー・ナショナリズムからみたインドネシア」, 『史苑』79(1), 77–96, 2019.3.
12. 小河久志, 鈴木佑記「多文化共生の島プーケット」, 『アジアに生きるイスラーム』(笹川平和財団編), イースト・プレス, 113–132, 2018.4.
13. 菅原由美「東南アジアにおけるイスラームの展開とキターブ文献の成立」, 『史苑』79 (1), 97–119, 2019.3.
14. Nishii, Ryoko, “The “Face” and the other: Muslim Women Behind the Veil”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 283–301, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
15. 福島康博「イスラームと金融」, 『ハラールサイエンスの展望』(民谷栄一, 富沢寿勇編), 169–180, 2019.2, シーエムシー出版.

[口頭発表等]計 27 件

1. 富沢寿勇「イスラーム文明と観光」, 比較文明学会第 36 回大会, 2018.10.13, 静岡県立大学大講堂.
2. Tokoro, Ikuya, “Preliminary Study on Role of Civil Society in the Mindanao Peace Process”, International Conference on Progressive Civil Society, 2019.2.19, Universiti Ahmad Dahlan, Yogyakarta, Indonesia.
3. Tokoro, Ikuya, “De-centralizing Cross-Border Migration Flows in Asia”, JaCMES-LERC Joint Roundtable on Migrants and Refugees Dynamics and Perception toward their Integration, 2018.11.28,

Japan Center for Middle Eastern Studies, Beirut, Lebanon.

4. 床呂郁哉「スルー諸島のムスリムの現況：マレーシア・サバとの関係を中心に」、フィリピン南部ムスリム社会に関する実務者・専門家ワークショップ, 2018.9.10, JICA Philippines Office, Makati City, Philippines.
5. Tokoro, Ikuya, “Introduction on the Muslim Society in the Philippines”, フィリピン南部ムスリム社会に関する実務者・専門家ワークショップ, 2018.9.10, JICA Philippines Office, Makati City, Philippines.
6. Okamoto, Masaaki, “The (Re-) Rise of Military-backed Private Security Providers in Indonesia”, International Workshop on Changing Political Dynamics of Military, Police and Militia in Indonesia, Thailand and Myanmar, 2018.6.2, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, Kyoto, Japan.
7. 黒田景子「コタ・ムンクアンの主は何者か? : 「仏教国」タイと「イスラーム国家」マレーシアの歴史認識の差、あるいは、村落伝承情報の可能性とその限界」, 東南アジア学会第 99 回研究大会, 2018.5.26, 北九州市立大学.
8. 岡本正明「インドネシアにおける汚職撲滅の政治性と非政治性: 汚職撲滅委員会(KPK)を事例として」, 日本比較政治学会自由企画 4, 2018.6.24, 東北大学.
9. 岡本正明「東南アジアにおける性の多様性をめぐる政治: インドネシアを中心に」, 大同生命国際文化基金ミニ・フォーラム, 2018.10.23, 大同生命ビル.
10. 岡本正明「ポスト・トゥルース時代の東南アジアにおける情報収集」, 「平成 30 年度アジア情報研修: 東南アジア諸国の政府情報」, 2018.11.8, 国立国会図書館関西館.
11. 岡本正明「インドネシア総選挙: 民主主義は後退してしまうのか」, 『ビジネスにも役立つ「アジア・アフリカ塾」春季講座』, 2019.3.13, 京都アカデミーフォーラム in 丸の内.
12. Okamoto, Masaaki, “Politics of Re-Pathologizing LGBT in Indonesia”, Workshop on Moral Politics of Nationhood: Constructions of Sexual, Political, and Religious Others in Contemporary Indonesia, 2018.11.1, Leiden University, Leiden, Netherlands.
13. Miichi, Ken, “Beyond Dichotomy between Salafism and Sufism”, The 18th Annual International Conference on Islamic Studies 2018, 2018.9.18, State Institute for Islamic Studies Palu, Palu, Indonesia.
14. Tsuboi, Yuji, “Politics around the Malay Sultanate in British Malaya during the 1930s: Multilingual Media Space as Political Arena”, 11th Malaysian Studies Conference, 2018.8.14, Adya Hotel, Langkawi, Malaysia.
15. Tsuboi, Yuji, “The Perception of Disaster of Malay Muslim Intellectuals in Singapore during the 1950s and 1960s”, International Workshop on “Human Response to Disaster in Southeast Asia”, 2019.1.14, Kyoto University, Kyoto, Japan.
16. 小河久志「自己のためか、他者のためか: タイ南部インド洋津波被災地におけるタブリーグの「開発」活動をめぐって」, 日本文化人類学会第 52 回研究大会, 2018.6.3, 弘前大学.
17. Sugahara, Yumi, “Sunan Bonan’s Teaching: Theology and Sufism in 16th Java”, International Symposium “Transformation of Religion as Reflected in Javanese Texts (2) Rethinking the Process of Islamization”, 2018.6.30, Osaka School of International Public Policy (OSIPP), Osaka University, Osaka, Japan.
18. 菅原由美「東南アジアにおけるイスラームの展開とキターブ文献の成立」, 「東南アジアのキターブ比較研究」2018 年度研究会 科学研究費・基盤研究(C)「キターブの地域間比較と時代的変容からみ

- る東南アジア・ムスリムの思想・社会の動態」, 2019.1.13, 上智大学.
19. 西井凉子「南タイのフィールドにおけるムスリムと仏教徒の共生」, 地域研究コンソーシアム(JCAS)運営委員会・研究報告会, 2018.4.27, 京都大学.
  20. Nishii, Ryoko, “Life as a House: The Case of Na Chua: An Assemblage of phi norng (Relatives) in Southern Thailand”, International Workshop: Encounters in Fieldwork : The Influence of Vincent Crapanzano, 2018.10.14, ILCAA.
  21. 新井和広「史料紹介:「護送船団」としての血統:アッターズ家マンサブのジャワ訪問の事例から」, 東京大学東洋文化研究所研究班「ムハンマド一族をめぐる諸言説の研究」, 2018 年度第 1 回研究会, 2018.9.23, 東京大学東洋文化研究所.
  22. 新井和広「インド洋沿岸地域におけるアラウィー・タリーカ:民衆の指導者の系譜」, 早稲田大学特定課題研究助成「海のコモンズ」2018 年度第 1 回研究会, 2018.10.21, 早稲田大学.
  23. 新井和広「歴史的ハドラマウト(南アラビア)内の地域区分:グーグル・アースを用いた研究の可能性」, フィールドネット・ワークショップ「地理情報から読み解く歴史:イスラーム史における GIS の活用」, 2019.3.21, AA 研.
  24. Suzuki, Nobutaka, “Examaing Najeeb Saleeby as Colonial Advocate and Educator”, AA 研中東研究日本センター(JaCMES), AA 研基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」, ベイルート・アメリカン大学, 2019.3.19, Auditorium A, West Hall, American University of Beirut, Beirut, Lebanon.
  25. 森正美「フィリピン・ムスリムの法、ジェンダー:今のラナオからみえること」, フィリピン南部ムスリム社会に関する実務者・専門家ワークショップ, 2018.9.19, JICA Philippines Office, Makati City, Philippines.
  26. Mori, Masami, “Legal Pluralism and Gender in Muslim Society in the Philippines: Based on the Experiences in Lanao del Sur”, フィリピン南部ムスリム社会に関する実務者・専門家ワークショップ, 2018.9.19, JICA Philippines Office, Makati City, Philippines.
  27. Yoshida, Yukako, “Who Are the Communities Involved in Intangible Cultural Heritage?: A Consideration of the “Beautiful Indonesia Miniature Park” Proposal as Best Practice”, 5th Symposium of the International Council for Traditional Music, Study Group on Performing Arts of Southeast Asia, 2018.7.21, Sabah Museum, Sabah, Indonesia.

〔図書〕計 5 件

1. 民谷栄一, 富沢寿勇監修『ハラールサイエンスの展望』, 2019.2, シーエムシー出版.
2. 永井史男, 岡本正明, 小林盾編『東南アジア地方ガバナンスの計量分析:タイ、フィリピン、インドネシアの地方エリートサーベイから』, 2019.7, 晃洋書房.
3. 金子奈央『アジア動向年報 2018』, 2018.5, アジア経済研究所.
4. 福島康博『Q&A ハラールを知る 101 問:ムスリムおもてなしガイド』, 2018.5, 解放出版社.
5. Kuroki, Hidemitsu (ed.), *Human Mobility and Multiethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies 2: Tehran, Cairo, Istanbul, Aleppo and Beirut*, 2018.8, ILCAA.

〔社会に向けた成果発表〕計 6 件

1. 学外の社会活動(新聞・雑誌):床呂郁哉「ミンダナオ和平の行方を読む(上)」, まにら新聞 2018 年 8

- 月 28 日号, 3, 2018.8.
2. 学外の社会活動(新聞・雑誌): 床呂郁哉「ミンダナオ和平の行方を読む(下):『静かな危機』の克服」, 『まにら新聞』2018年8月29日号, 3, 2018.8.
  3. 学外の社会活動(新聞・雑誌): 床呂郁哉「アチェから見たフィリピン南部」, 『まにら新聞』2019年1月5日号, 3, 2019.1.
  4. 学外の社会活動(新聞・雑誌): 床呂郁哉「ミンダナオ和平新展開(上)」, 『まにら新聞』2019年2月5日号, 3, 2019.2.
  5. 学外の社会活動(新聞・雑誌): 床呂郁哉「ミンダナオ和平新展開(下)」, 『まにら新聞』2019年2月6日号, 3, 2019.2.
  6. 学外の社会活動(新聞・雑誌): 富沢寿勇「広がる食の多様性: ハラル、イスラム教の戒律食」, 『静岡新聞』2019年2月28日号, 4-5, 2019.2.

## 南アジアにおけるムスリム社会の民族誌的研究

研究期間: 2018-2020 (代表: 外川昌彦/所員 3、共同研究員 15)

所員: 外川昌彦、西井涼子、小倉智史

共同研究員: 小磯千尋、小牧幸代、澁谷俊樹、杉江あい、高田峰夫、橘健一、田中雅一、田辺明生、常田夕美子、中谷純江、中谷哲弥、南出和余、八木祐子、Abhijit Dasgupta, Ranjan Sahaparth

### 研究会等の内容

2018年度第1回研究会(2018年6月24日、東京外国語大学)

公開シンポジウム: 「50年後に振り返るベンガルの農村社会—故原忠彦教授の民族誌再訪」

谷口晋吉(一橋大学名誉教授)

開会の挨拶

外川昌彦(AA 研所員)

「ベンガル農村社会の民族誌的研究: 故原忠彦教授のムスリム社会研究から見た」

杉江あい(AA 研共同研究員、東京外国語大学/日本学術振興会)

「現代バングラデシュ村落社会の多面性: 故原忠彦教授の民族誌と後続の村落研究より」

藤田幸一(京都大学・東南アジア研究研究所)

「バングラデシュ農業・農村開発の社会的基盤: 故原忠彦教授の議論に寄せて」

高田峰夫(AA 研共同研究員、広島修道大学)

「原忠彦先生の研究を最初のバングラデシュ調査から考える: 生涯にわたる調査と業績との関連を念頭に置きつつ」

ディスカッサント: 石井溥(AA 研元所長、東京外国語大学名誉教授)

全体討論

2018年度第2回研究会(2019年3月17日、AA 研小会議室)

外川昌彦(AA 研所員)

「南アジアの民族誌的研究の課題—民族誌的概念としての「アーリヤ」・「ムレッチャ」・「ヤーヴァナ」」  
古賀万由里(開智国際大学)

「ヒンドゥーイムズに関する概念の検討と『南インドの芸能的儀礼をめぐる民族誌』の前後」

ディスカッサント: 杉江あい(AA 研共同研究員、東京外国語大学/日本学術振興会):

澁谷俊樹(関東学院大学)

「『一見低カースト的な文化』をめぐる」

ディスカッサント: 中谷哲弥(AA 研共同研究員、奈良県立大学)

全体討論

## 研究成果一覧

[学術論文]計 17 件

1. 外川昌彦「アナガーリカ・ダルマパーラのブッダガヤ復興運動とインド: 宗教的普遍主義からシンハラ 仏教ナショナリズムへの軌跡」, 『国立民族学博物館研究報告 43 (2), 1–38, 2018.10. (査読有)
2. 外川昌彦「スワミー・ヴィヴェーカーナンダにおける宗教とナショナリズム: 仏教とヒンドゥー教の関係を通して見た」, 『南アジア研究』29, 60–89, 2018.10. (査読有)
3. Togawa, Masahiko, “The Spirit of Liberation War and the 1972 Constitution: Redefining Secularism”, *The Journal of Social Studies* 158, 61–83, 2018 .6. (査読有)
4. Togawa, Masahiko, “Okakura Tenshin (Kakuzo) and Rabindranath Tagore: Beginning of Tagore’s Centre for International Exchanges”, *An Encounter between Two Asian Civilizations: Rabindranath Tagore and the Early Twentieth Century Indo-Japanese Cultural Confluence* (ed. by Subhas Ranjan Chakraborty, Shyam Sundar Bhattacharya), 122–127, 2018.9, Asiatic Society, Kolkata, India.
5. Togawa, Masahiko, “Banglar Sadhusanga o Dharmiya Samanbayabadi Aitijyo, Jahangirnagar Bishwabidyalay Bhasa-Sahityapatra”, *Jahangirnagar Bishwabidyalay Bhasa-Sahityapatra* 44, 25–42, 2018.7.
6. Togawa, Masahiko, “Sufi-Orders and Tarikās in Bengal: A Case Study of Religious Practices at the Shāh Ālī Majār in Dhaka, Bangladesh”, *Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies (Kyoto Kenan Rifai Sufi Studies Series 3)* (ed. by Yasushi Tonaga and Chiaki Fujii), 217–241, 2018.5, Kyoto Kenan Rifai Sufi Studies Center, University, Kyoto, Japan.
7. 杉江あい「バングラデシュにおけるロヒンギャ難民支援の現状と課題」, *E-journal GEO* 13 (1), 312–331, 2018.5. (査読有) DOI: <https://doi.org/10.4157/ejgeo.13.312>
8. Sugie, Ai, “Deconstructing Financial Inclusion and Exclusion in Development Discourse: Case Studies of Microfinance Operations in Rural Bangladesh”, *Perspectives on Geographical Marginality Volume 4: Rural Areas between Regional Needs and Global Challenges* (ed. by Walter Leimgruber and Chang-yi David Chang), 97–119, 2019.1, Springer, Berlin, Germany.
9. Sugie, Ai, “Disembedding Islamic Locale: The Spread and Deepening of Islamic Knowledge in Rural Bangladesh”, *Journal of Urban and Regional Studies on Contemporary India* 5 (2), 1–21. 2019.3.
10. Komaki, Sachiyo, “Islam and the Self-Representation of Punjabi Muslims in Pakistan: A Case Study of the Exhibition of Holy Relics in the Badshahi Masjid, Lahore”, *Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies (Kyoto Kenan Rifai Sufi Studies Series 3)* (ed. by Yasushi Tonaga and Chiaki Fujii), 243–262, 2018.5, Kenan Rifai Center for Sufi Studies, Kyoto, University,

Kyoto, Japan.

11. 八木祐子「ジャイトウア儀礼にみる社会変化:ボージブリー文化圏の事例から,『多民族社会における宗教と文化』22, 宮城学院女子大学付属キリスト教文化研究所, 3-18, 2019.3.
12. Tanaka, Masakazu, “Morality and Instrumentality: A Practical Approach to Theorizing the Other”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kawai Kaori), 303-321, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia.
13. 田中雅一「アウシュヴィッツにてホロコーストの生存者に会うということ」,『日本オーラル・ヒストリー研究』14, 43-54, 2018.9.(査読有)
14. Tanaka, Masakazu, “Grids, Waves and Nationalism: Some Thoughts by Listening to “Good Vibrations” in a Big Morgue”, *Japanese Review of Cultural Anthropology*, 19 (1), 5-50, 2019.1.(査読有)
15. Nishii, Ryoko, “The “Face” and the Other: Muslim Women Behind the Veil”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 283-301, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
16. 田辺明生「インド・オリッサ州におけるトライブとダリット:マイノリティ集団間関係を考える」,『マイノリティ研究会ニュース』83, 24-40, 2018.
17. 田辺明生「幸福追求の支えとしてのダルマ:秩序の再構築過程に注目して」,『変貌と伝統の現代インド:アンベードカルと再定義されるダルマ』(嵩満也編), 255-276, 2018.4, 法蔵館.

[口頭発表等]計 41 件

1. 外川昌彦「戦争犯罪者をめぐる今日の歴史問題:バングラデシュの独立戦争と国際戦争犯罪法廷の裁判記録から」, 科研費国際共同研究強化(B)「現代バングラディッシュの社会変動とイスラーム:地域研究の総合分析」研究会, 2018.12.26, 名古屋大学東山キャンパス環境総合館.
2. Togawa, Masahiko, “The Bodh Gaya Restoration Movement by Anagarika Dharmapala, Kripasharan Mahāsthavir, and the Japanese”, International Workshop of Department of Buddhism Studies, 2018.8.14, The University of Calcutta, Kolkata, India.
3. Togawa, Masahiko, “Two Majars in Bengal: A Sociological Perspective of Syncretistic Tradition in South Asia”, Seminar of International Society of Bengal Studies, 2018.8.13, Rabindra Bharati University, Kolkata, India.
4. Togawa, Masahiko, “The Bodhgaya Restoration Movement by Anagarika Dharmapala and Japanese”, Annual Conference of Asian Studies in Asia, 2018.7.7, Indian Habitat Center, New Delhi, India.
5. Togawa, Masahiko, “Okakura Tenshin (Kakuzo) and Rabindranath Tagore in Shantiniketan: Beginning of Tagore’s Center for International Exchanges”, Seminar of Department of Modern Indian Languages and Literary Studies, 2018.4.26, University of Delhi, Delhi, India.
6. 外川昌彦「ベンガル農村社会の民族誌的研究:故原忠彦教授のムスリム社会研究から見た」, 第2回日本ベンガルフォーラム「シンポジウム:50年後に振り返るベンガルの農村社会:故原忠彦教授の民族誌再訪」, 2018.6.24, 東京外国語大学.
7. 澁谷俊樹「19世紀の『ヒンドウイズム』から後景化されたもの:ベンガルの祭祀から」, 日本南アジア学会第31回全国大会, 2018.9.30, 金沢歌劇座.
8. 杉江あい「現代バングラデシュ村落社会の多面性:故原忠彦教授の民族誌と後続の村落研究より」,

- 第 2 回ベンガルフォーラム「シンポジウム:50 年後に振り返るベンガルの農村社会:故原忠彦教授の民族誌再訪」, 2018.6.24, 東京外国語大学.
9. Sugie, Ai, “Do Islamic Norms Impede Inclusive Development of Women?: A Case Study of Islamic Education for Women in Rural Bangladesh”, 10th INDAS-South Asia International Conference, 2018.12.14, 東京外国語大学.
  10. Sugie, Ai, “Fertility Transition and Female Roles in Rural Bangladesh”, 歴史人口学セミナー 第 74 回研究会, 2019.1.30, 麗澤大学.
  11. 杉江あい, 日下部尚徳, 海津正倫「バングラデシュロヒンギャ難民キャンプにおける地下水資源と水利用」, 日本地理学会 2019 年春季学術大会, 2019.3.20-21, 専修大学(ポスター発表).
  12. Komaki, Sachiyo, “PA-187. Religious Practices Using Commodities in Consumer Societies. The Cult of Islamic Relics and the Religious Goods in Contemporary India”, World Congress for Middle Eastern Studies Seville, 2018.7.18, University of Seville, Sevilla, Spain.
  13. 橘健一「チェパン山村の被災・復興状況:チトワン・ダーディン・マクワンプールの比較から」, 2015 年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究第 4 回研究会, 2018.8.4, 国立民族学博物館.
  14. Tachibana, Kenichi, “Livelihood and Life of Indigenous People of Nepal: A Case of Chepang Village”, Haji Abul Hossain Institute of Technology, 2019.3.3, Haji Abul Hossain Institute of Technology, Tangail, Bangladesh.
  15. 橘健一「震災後の家屋の再建とライフスタイルの分岐:チェパン山村の事例から」, 2015 年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究第 4 回研究会, 2019.3.21, 国立民族学博物館.
  16. 八木祐子「ブラタ儀礼にみる社会変化と女性:ボージプリー文化圏の事例から」, 共同研究「多民族社会における宗教と文化」主催公開研究会『インドにおける女性と家族』, 2018.6.16, 宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所.
  17. 田中雅一「現代インド世界における売春・宗教・ジェンダー暴力」, 21 世紀科学プロジェクト環境平和学主催公開講演会, 2018.7.30, 広島大学.
  18. 田中雅一「ムンバイの売春街に見る 女性の自己管理、家族関係、女神との結婚」, 南アジア研究集会, 2018.8.4, 伊東市山喜温泉.
  19. Tanaka, Masakazu, “Fetishism and its Social Significance”, 中国芸術人類学会, 2018.9.25, China Society for Anthropology of Arts, South East University, Nanjing, PRC.
  20. 田中雅一「身近なものや出来事から異なる民族・文化を考える」, 京大オリジナル講演会, 2018.11.29, IHI 横浜エンジニアリングセンター.
  21. 田中雅一「天気図に想像された共同体」, 国立民族学博物館研究プロジェクト「人類学/民俗学の学知と国民国家の関係:20 世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」研究会, 2018.12.27, 国立民族学博物館.
  22. 田中雅一「貞淑な女性とふしだらな女性」, シンポジウム「アジアの女性」, 2019.1.22, 成均館大学東アジア学術院, ソウル, 大韓民国.
  23. 中谷純江「インド社会における婚姻変化とジェンダー含意」, 神戸大学 RIEB セミナー, 2018.7.5, 神戸大学経済経営研究所.
  24. Nakatani, Sumie, “The Economy of Water: Changes in the Agrarian Relations of a Rajasthan Village”,

- Toward Sustainable Development of Semi-arid Area in India: From the View Point of Food-Water-Energy Nexus, 2018.12.21, Aoyamagakuin University, Tokyo, Japan.
25. 中谷純江「マールワリー資本の隆盛: 聖地ガヤーにおける祖霊供養とパトロネッジ」, 2018 年度 TINDAS ワークショップ「トラスト・エコノミー: 宗教と開発のダイナミズム」, 2019.1.27, 東京大学東洋文化研究所.
  26. Tokita-Tanabe, Yumiko, “A House of One’s Own: Fiction of New Kinship Narratives in Emerging Opportunities for Women in Rurban Odisha”, 日本南アジア学会第 31 回全国大会, 2018.9.30, 金沢歌劇座.
  27. Nakatani, Tetsuya, “Potential of Rural Tourism Promotion in India and Japan”, International Conference on Development of Cultural Tourism in and around Santiniketan & Birbhum, 2018.11.18, Visva-Bharati University, Santiniketan, India.
  28. Nakatani, Tetsuya, “Rural Tourism in India: Development Initiative and Community Participation in West Bengal and Kerala”, International Conference on Future of the Past: Tourism and Cultural Heritage in Asia 2018, 2018.8.8, Ritsumeikan University, Kyoto, Japan.
  29. 中谷哲弥「南アジアにおける農村観光の理念と実践: バングラデシュ、インド・西ベンガル州及びケララ州の事例から」, 南アジア地域研究・民博拠点 (MINDAS) 【移民・移動】班 第 3 回研究会, 2018.7.28, 国立民族学博物館.
  30. 西井涼子「南タイのフィールドにおけるムスリムと仏教徒の共生」, 地域研究コンソーシアム (JCAS) 運営委員会・研究報告会, 2018.4.27, 京都大学.
  31. Nishii, Ryoko, “Life as a House: The Case of Na Chua: An Assemblage of phi norng (Relatives) in Southern Thailand”, International workshop: Encounters in Fieldwork: the Influence of Vincent Crapanzano, 2018.10.14, ILCAA.
  32. Tanabe, Akio, “Democracy and Development in Tension: Predicament of Politico-economic Stalemate among the Dongria Khonds in Odisha, India”, International Workshop “Rethinking Development: Network, Brokers and Devotion, 2019.3.29, National University of Singapore, Singapore.
  33. Tanabe, Akio, “Recent Socio-economic Changes in Niyamgiri Region in Odisha, India: With Special Attention to Scheduled Tribes and Scheduled Castes”, International Workshop “New Stage of South Asian Agriculture and Rural Economies”, 2018.12.22, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.
  34. 田辺明生「日印知的交流の歴史と現代的意義」, 文部科学省「大学の世界展開力強化事業 (インドタイプ B)」第 1 回シンポジウム「日印交流の現状と展望: プラットフォーム構築に向けて」, 2018.12.20, 東京大学伊藤国際学術交流センター.
  35. 田辺明生「インド文明とアフロユーラシア: エジプトとの比較」, 講演会「エジプトと“環ユーラシア文明”」, 2018.11.14, 東日本国際大学.
  36. 田辺明生「多様性社会としてのインド: 南アジア型発展径路を考える」, シンポジウム「インドの価値観と社会構造: 日本と西洋との比較研究」, 2018.11.10, 同志社大学今出川キャンパス.
  37. 田辺明生「部族民と不可触民: インドにおける差別の諸形態」, 人文研アカデミー2018「人種神話を解体する: 可視性と不可視性のはざままで (In) Visibility」, 2018.10.12, 東京新丸の内ビル.
  38. 田辺明生「インド史への視座: 多様性の統合」, 川崎市民アカデミー, 2018.4.27, 川崎市民アカデミー.

39. Takada, Mineo, “A Small Episode on the Cow Trade between Myanmar and Thailand”, Grant-in-aid “New Stage of South Asian Agriculture and Rural Economies”, Mid-term Workshop, 2018.12.23, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, Inamori Building, Kyoto, Japan.
40. 高田峰夫「自称と他称の間:“Rohingya”と“Bangalee”をめぐって」, 東南アジア学会北海道・東北地区主催特別例会シンポジウム「境界からみるアジア:宗教の中心と周縁」2018.6.10, 北海道大学.
41. 高田峰夫「原忠彦先生の研究を最初のバングラデシュ調査から考える:生涯にわたる調査と業績との関連を念頭に置きつつ」, 第2回日本・ベンガルフォーラム「シンポジウム:50年後に振り返るベンガルの農村社会:故原忠彦教授の民族誌再訪」, 2018.6.24, 東京外国語大学.

[社会に向けた成果発表]計3件

1. 田中雅一「セクシュアリティの文化人類学が面白いわけ」, トイ人 学問する人のポータルサイト(URL: [https://www.toibito.com/column/humanities/ethnology/1457?fbclid=IwAR3ZziLSGDRC\\_k1XeH5aTX9UeEp762-0-qYkijDx62m23ZXVwZl0WXuWORw](https://www.toibito.com/column/humanities/ethnology/1457?fbclid=IwAR3ZziLSGDRC_k1XeH5aTX9UeEp762-0-qYkijDx62m23ZXVwZl0WXuWORw))
2. 中谷哲弥「デリー首都圏における市街地の形成と変化」, 『地理』63 (7), 16–23, 2018.7.
3. ゴウリ・ヴィシュワナートン著, 田辺 明生, 三原芳秋, 常田夕美子, 新部亨子(共訳)『異議申し立てとしての宗教』, 2018.7, みすず書房.

[その他]計2件

1. 西井涼子「書評 津村文彦著『東北タイにおける精霊と呪術師の人類学』」, 『東南アジア 歴史と文化』47, 172–176, 2018.6.
2. 西井涼子「共生を起動するもの」, 『Pieria』(東京外国語大学広報誌)2018年春号, 34–35, 2018.4.

## 『プレザンス・アフリケーヌ』研究(2)テキスト・思想・運動

研究期間: 2018–2020 (代表: 中村隆之/所員 2、共同研究員 15)

所員: 佐久間寛、西井涼子

共同研究員: 中村隆之、青木敬、小川了、久野量一、崎山政毅、佐藤幸男、関谷雄一、立花英裕、中尾世治、福島亮、福田邦夫、星埜守之、松本尚之、村田はるせ、林裕哲

### 研究会等の内容

2018年度第1回研究会(2018年6月24日、東京外国語大学本郷サテライト)

中村隆之(AA研共同研究員、早稲田大学)

趣旨説明

佐久間寛(AA研所員)

「今後の研究会の方針・スケジュールについて」

立花英裕(AA研共同研究員、早稲田大学)

「『プレザンス・アフリケーヌ』と文化の概念」

総合討論(全員)

2018年度第2回研究会(2019年1月27日、東京大学駒場キャンパス)

アミド・モカデム(ニューカレドニア教員養成学院)

「ニューカレドニアにおける独立／相互依存／主権」(フランス語、通訳付)

総合討論(全員)

2018年度第3回研究会(2019年3月23日～3月24日、AA研マルチメディア会議室)

3月24日

中村隆之(AA研共同研究員、早稲田大学)

「『プレザンス・アフリケーヌ』誌の論説を読む」

中尾世治(AA研共同研究員、総合地球環境学研究所)

「西アフリカにおける文字言語間の競合と『プレザンス・アフリケーヌ』:アマドゥ・ハンパテ・バにおける文字・印刷物／手稿書・転写」

久野量一(AA研共同研究員、東京外国語大学)

「キューバ文芸誌にみるアフリカ:「アバンセ」から「カリブ年報」まで」

3月24日

松本尚之(AA研共同研究員、横浜国立大学)

「アフリカン・ルネサンスと伝統的権威者」

小川了(AA研共同研究員、東京外国語大学名誉教授)

「Boilat と Senghor における「同化」とナショナリズム」

福島亮(AA研共同研究員、東京大学大学院)

「水牛楽団と文化資本:電子アーカイブプロジェクトと分析」

総合討論(全員)

## 研究成果一覧

[学術論文]計15件

1. 佐久間寛「序論:プレザンス・アフリケーヌとは何か」,『アフリカ研究』94, 21-33, 2018.12.(査読有)
2. 佐久間寛「黒いソクラテスは語る:創始者アリウン・ジョップと学生組織」,『アフリカ研究』94, 49-59, 2018.12.(査読有)
3. 佐久間寛「祓えぬ負債に憑かれること:ニジェール西部における調査経験から」,『白山人類学』22, 59-77, 2019.3.(査読有)
4. 久野量一「陸のユートピア、海賊小説、ムラート:小笠原博樹氏の報告から導かれて」,『立命館言語文化研究』30(1), 23-28, 2018.10.(査読有)
5. 中尾世治, 斉藤尚文「斉藤尚文さんとの対話:ある人類学者の半生について(2)」,『南山考人』47, 35-56, 2019.3.
6. 中尾世治「地格 場所の「人格」について」,『ラウンド・アバウト フィールドワークという交差点』(神本秀爾, 岡本圭史編), 116-128, 2019.1, 集広舎.
7. 中村隆之「ダヴィッド・ジョップの〈アフリカ〉」,『アフリカ研究』94, 61-72, 2018.12.(査読有)
8. 村田はるせ「文学としてジェノサイドを書く」,『アフリカ研究』94, 73-83, 2018.12.(査読有)
9. 小川了「『黒人世界評論』から『プレザンス・アフリケーヌ』へ」,『アフリカ研究』94, 35-46, 2018.12.(査読有)

10. 青木敬「カーボヴェルデのなかのアフリカ: 文化的抵抗としての舞踏バトゥクから歌謡モルナへ」, 『アメリカ研究』23, 205–213, 2018.11. (査読有)
11. 崎山政毅, 井上康『『資本論』冒頭商品論の、出だし部分と価値形態論における諸商品の直接対比的考察』, 『立命館文学』658, 70–90, 2018.7. (査読有)
12. 崎山政毅, 井上康「わが著書を語る: 井上康・崎山政毅『マルクスと商品語』」, 『変革のアソシエ』32, 90–95, 2018.4.
13. Tachibana, Hidehiro, “Aimé Césaire ou résistance archipélique”, Buata B. Malela, Andrzej Rabsztyń et Linda Rasoamanana (dir.), *Les représentations sociales des îles dans les discours littéraires francophones*, 303–317, 2018.10, Éditions du Cerf, Paris, France. (査読有)
14. 立花英裕「マルティニクにおける文学言語の形成: 詩と小説の間」, 『人文論集』57, 178–165, 2019.3.

〔口頭発表等〕計 25 件

1. 佐久間寛「創始者アリウン・ジョップと黒人学生組織」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.26, 北海道大学.
2. 中尾世治「西アフリカ・イスラーム研究の新展開」, 2018 年度 AA 研フィールドネット・ラウンジ企画「西アフリカ・イスラーム研究の新展開」, 2019.1.26, AA 研.
3. 中尾世治「イスラーム改革主義運動の新しさとは何か: 1950 年代のボボ・ジュラソにおけるメデルサ設立運動」, 2018 年度 AA 研フィールドネット・ラウンジ企画「西アフリカ・イスラーム研究の新展開」, 2019.1.26, AA 研.
4. Hayashi, Koji, Seiji Nakao, and Taro Yamauchi, “Defecation without Toilets: Toward the Study of Sanitation Activities in the Hunter-gatherers”, The Twelfth International Conference on Hunting and Gathering Societies (CHAGS 12), 2018.7.25, Universiti Sains Malaysia, Penang, Malaysia.
5. 中尾世治「ブルキナファソにおけるサニテーション改善の歴史と現状」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.26, 北海道大学.
6. 清水貴夫, 中尾世治「サハラ以南アフリカのし尿処理業者の社会経済的役割の解明に向けた予備的考察: ブルキナファソの事例より」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.26, 北海道大学.
7. 中尾世治「住まうことと死ぬこと」, 第 36 回まるはち人類学研究会, 2018.4.21, 南山大学人類学研究所.
8. 中尾世治「ブルキナファソとブルキナベ: ブルキナベからみたトイレのこと」, 文部科学省エントランス企画展示「トイレからひろがる幸せな暮らしのデザイン」公開セミナー, 2018.5.21, 文部科学省情報ひろばラウンジ.
9. 中村隆之「20 世紀の黒人詩人ダヴィッド・ジョップにおける〈現前するアフリカ〉」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.26, 北海道大学.
10. 村田はるせ「文学としてジェノサイドを書く: 第 1 回国際作家芸術家会議からヴェロニク・タジヨの『イマナの影 ルワンダの果てまでの旅』へ」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.26, 北海道大学.
11. 村田はるせ「ベナンの児童文学: 現代アフリカで生きるわたし」, 「第 2 回アフリカ潜在力セミナー」(2018 年度次世代調査支援報告会), 2019.3.9, 京都大学稲盛財団記念館.
12. 村田はるせ「絵本にみる西アフリカ女性の生活」, 共立アフリカンフェスティバル 2018 「ベナンを発見しよう 2」, 2018.7.7, 共立大学.

13. 小川了「“ネグリチュード、あれはもともとわたしのアイデアなのよ”:ポーレット・ナルダルと『黒人世界評論』, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.26, 北海道大学.
14. 星埜守之「ムウ、どこへ行くの:デウエ・ゴロデーとニューカレドニアの文学場の生成を巡って」, 科研費基盤研究(B)「世界文化〈資本〉空間の史的編成をめぐる総合的研究:アフリカ・カリブの文学を中心に」2018 年度第 1 回研究会, 2018.7.29, 東京大学.
15. 佐藤幸男「周縁からの平和学」, 早稲田大学社会科学部平和学講座記念シンポ, 2018.7.21, 早稲田大学社会科学部.
16. 関谷雄一「市民の協働と公共人類学」, 日本地域創生学会第 3 分科会「社会」, 2018.8.25, 東海市芸術劇場.
17. 関谷雄一「災害に抗する市民の協働」, 北京大学医学部医学人文研究所主催「第 2 回北京大学医学人文国際シンポジウム-生・老・死を語る」, 2018.11.16. 北京大学, 北京, 中華人民共和国.
18. 松本尚之「政治参加の公平性をめぐる期待と実践」, 日本文化人類学会第 52 回研究大会, 2018.6.2, 弘前大学.
19. 松本尚之「アフリカから考えるグローバル化」, 亜細亜大学現代教養特講, 2019.1.16, 亜細亜大学.
20. 福島亮「想像の地理学という仮説:1960 年代のエメ・セゼールとアメリカスをめぐって」, マグレブ研究会, 2018.9.1, 筑波大学東京キャンパス.
21. Fukushima, Ryo, “Aimé Césaire et le Paris créole des années 1940-1970, ou l'époque du colonialisme au quotidien”, Paris créole: son histoire, ses écrivains, ses artistes, XVIIIe-XXe siècle, 2019.2.27, Sorbonne Université, Paris, France.
22. Tachibana, Hidehiro, “Questions de langage chez Édouard Glissant”, Colloque “Archipels Glissant”, 2018.6.1, Bibliothèque Nationale de France, Paris, France.
23. Tachibana, Hidehiro, “Le Paris des années folles et la Négritude”, Colloque “Paris créole: son histoire, ses écrivains, ses artistes XVIIIe-XXe siècle”, 2019.2.27, Sorbonne Université, Salle des Actes, Paris, France.
24. 崎山政毅『『マルクスと商品語』をめぐって』, 東京外国語大学・学際シンポジウム, 2018.6.30, 東京外国語大学.
25. 林裕哲「朝鮮民主主義人民共和国と第三世界:バンドン会議から第五回非同盟諸国首脳会議における」, 同志社大学日朝関係史講座, 2018.10.26, 同志社大学

[図書]計 9 件

1. Sakuma, Yutaka, and Yukako Yoshida (eds.), *Disability and Affect: Proceedings of Two International Symposiums about Art*, 2019.3, ILCAA.
2. 久野量一『島の「重さ」をめぐって:キューバの文学を読む』, 2018.5, 松籟社.
3. カルラ・スアレス著, 久野量一訳『ハバナ零年』, 2019. 2, 共和国.
4. Ibrahim Kalil Mangane, and Seiji Nakao, *La mémoire de El-Hadji Beinke Souleymane Mangane de l'école coranique, de l'Union Culturelle Musulmane et à la Communauté Musulmane (1946-1960) Bobo-Dioulasso – Burkina Faso*, 2018.11, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, Japan.
5. 中村隆之『ダヴィッド・ジョップ詩集』, 2019.3, 夜光社.
6. 村田はるせ『アヤンダ おおきくなりたくなかったおんなのこ』, 2018.4, 風濤社.

7. 関谷雄一, 高倉浩樹編『震災復興の公共人類学:福島原発事故被災者と津波被災者との協働』, 2019.1, 東京大学出版会.
8. ルネ・ドゥペストル著, 立花英裕, 後藤美和子, 中野茂訳『ハイチ女へのハレルヤ』, 2018.6, 水声社.
9. ダニー・ラフェリエール著, 立花英裕訳『エロシマ』, 2018.7, 藤原書店.

[社会に向けた成果発表]計4件

1. 学外の社会活動(新聞・雑誌):村田はるせ「特集西アフリカ・ベナンの挿絵画家 夢をかなえたロジェさん」, 『マグちゃん通信』54, 2019.3.
2. 佐藤幸男「植民地主義と学知の調査権力」, 『大学による盗骨』(松島泰勝, 木村朗編), 134-151, 2019.2, 耕文社.
3. 学外の社会活動(新聞・雑誌):立花英裕「我々はみなアフリカ人である」, 『機』324, 14-15, 2019.3, 藤原書店.
4. 学外の社会活動(新聞・雑誌):立花英裕「(インタビュー)世界に広がるフランス語」, 『ふらんす』94(3), 2019.3, 12-15, 白水社.

[その他]計5件

1. 中尾世治「カタストロフをいかに表象するか:書評「寺田匡宏著『カタストロフと時間:記憶/語りと歴史の生成』(2018)」」, 『Humanity & Nature Newsletter 地球研ニュース』75, 14-14, 2019.2.
2. 吉田丈人, 太田和彦, 中尾世治「災害リスクと可視化の意味 風土論の現代的展開の可能性と Eco-DRR」, 『Humanity & Nature Newsletter 地球研ニュース』76, 4-8, 2019.3, Eco-DRR を可視化のひとつとして把握し, 風土論と結びつけて論じた対談の司会とまとめ.
3. 青木敬「サンヴィセンテ島民と日本人漁師の文化接触:カーボヴェルデの『サイコー』な人たちは誰だったのか」, 『国際言語文化』5, 65-78, 2019.3.(査読有)
4. 青木敬「ニカラグアのカリブ海沿岸地域、ブルーフィールドズにおける文化再生:芸術活動の空間と音楽に秘められたメッセージ性」, 『京都外国語大学ラテンアメリカ研究所紀要』18, 47-66, 2018.12.(査読有)
5. 立花英裕「世界文学から見た〈静かな革命〉」, 『ケベック研究』10, 70-84, 2018.9, 日本ケベック学会, 日本ケベック学会全国大会(2017年10月7日開催)でのシンポジウムの報告.

## ダイナミズムとしての生—情動・思考・アートの方法論的接合

研究期間: 2016-2018 (代表: 西井涼子/所員 5、共同研究員 13)

所員: 西井涼子、河合香吏、床呂郁哉、吉田ゆか子、佐久間寛

共同研究員: 岩谷彩子、内海健、春日直樹、久保明教、黒田末寿、郡司ペギオ幸夫、近藤和敬、佐藤知久、塩谷賢、高木光太郎、中村恭子、名和克郎、箭内匡

### 研究会等の内容

2018年度第1回研究会(2018年5月12日、AA研マルチメディアセミナー室)

箭内匡(AA研共同研究員、東京大学)

「スピノザの自然論・情動論・政治論における affectus の概念: 哲学と人類学の間で」  
佐久間寛(AA 研)

「生を産むことのダイナミズム: ニジェール農村地帯における情動の社会保障」

2018 年度第 2 回研究会 (2018 年 10 月 6 日、AA 研大会議室)

International Symposium: “Coping with Vertiginous Realities”

Vincent Crapanzano (New York City University)

Keynote Lecture “Affective Responses to Manufactured Anomie”

Akimitsu Ikeda (ILCAA)

“Sectarian Tension and Everyday Life : Case of Lebanon”

Kazuyoshi Sugawara (Kyoto University)

“Enacting the Past Incidents in a Non-literate Society: Tripartite Interaction among the G|ui Narrators, Research Assistants, and an Anthropologist in Central Kalahari”

Akira Okazaki (ILCAA)

“Accommodating Nightmares: How to Cope with Anxieties in a Sudanese Refugee Community”

Yanai Tadashi (The University of Tokyo)

Comments

2018 年度第 3 回研究会 (2018 年 10 月 14 日、AA 研マルチメディアセミナー室)

Encounters in Fieldwork: Under the Influence of Vincent Crapanzano

Vincent Crapanzano (New York City University)

“Transference and Countertransference: On the Transfer of Emotions and Its Moral Implications”

Junko Kitanaka (Keio University)

“Knowing Oneself via the Data: Epidemiological Subjects and the Datafication of Health”

Takeshi Matsushima (Hiroshima University)

“Repetition and Redundancy”

Kazuto Nakatani (Kyoto University)

“Following the Drawn Lines: On Contrapuntal Relationships between Observer and Subject”

Naoki Kasuga (Hitotsubashi University)

“Reality and Infinity from Melanesian Cases”

Ryoko Nishii (ILCAA)

“Life as a House: The Case of Na Chua”

Tadashi Yanai (The University of Tokyo)

“Affects and Psychoanalysis of Nature: Preliminary Thoughts”

2018 年度第 4 回研究会 (2018 年 12 月 15 日、東京外国語大学本郷サテライト)

西井涼子(AA 研)

『『ダイナミズムとしての生: 情動・思考・アートの方法論的接合』今後に向けて』

春日直樹(AA 研共同研究員、一橋大学)

「無限集合へ向かう呪術」

高木光太郎(AA 研共同研究員、青山学院大学)

「スキーマ・アプローチによる供述信用性評価」

2018 年度第 5 回研究会(2019 年 3 月 24 日、AA 研マルチメディア会議室)

中村恭子(AA 研フェロー)

「花喰鳥を待つ」

吉田ゆか子(AA 研)

「「障害」のある身体をめぐる笑いについて:バリ島の演劇とその後につづく日常から」

## 研究成果一覧

[学術論文]計 25 件

1. Kawai, Kaori, “Introduction: Finding “Others” from an Evolutionary Perspective: The Search for the Evolutionary Historical Foundations of Human Sociality”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 1–21, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
2. Kawai, Kaori, “The Origins of “Consideration for One's Enemy”: What Kind of Others Are Neighboring Groups to the Dodoth?”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 217–233, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
3. 河合香吏「敵と友のはざままで:ドドスと隣接民族トゥルカナとの関係」,『遊牧の思想:人類学がみる激動のアフリカ』(太田至, 曾我亨編), 197–214, 2019.3, 昭和堂.
4. Kuroda, Suehisa, “Approving Others and Incomprehensive Others in Primate Society”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 25–46, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有).
5. Sakiyama, Tomoko, and Yukio Pegio Gunji, “Optimal Random Search Using Limited Spatial Memory”, *Open Science*, 2018, The Royal Society, London, UK. (査読有)
6. Vallverdú, Jordi, Oscar Castro, Richard Mayne, Max Talanov, Michael Levin, Frantisek Baluška, Yukio Pegio Gunji, Audrey Dussutour, Hector Zenil, Andrew Adamatzky, “Slime Mould: The Fundamental Mechanisms of Biological Cognition”, *BioSystems* 165, 57–70, 2018. (査読有)
7. Horry, Youichi, Ai Yoshinari, Yurina Nakamoto, and Yukio Pegio Gunji, “Modeling of Decision-making Process for Moving Straight Using Inverse Bayesian Inference”, *BioSystems* 163, 70–81, 2018. (査読有)
8. Murakami, Hisahi, Takenori Tomaru, and Yukio Pegio Gunji, “Exclusive Shift from Path Integration to Visual Cues during the Rapid Escape Run of Fiddler Crabs”, *Animal Behaviour* 144, 147–152, 2018. (査読有)
9. Gunji, Yukio Pegio, and Igor Balaz, “Embryogenetic Remodeling of Global Chromatin and its Role on Structure of Corresponding Lattice Representation”, *Biosystems* 173, 273–280, 2018.9. (査読有)
10. Gunji, Yukio Pegio, Hisahi Murakami, Takenori Tomaru, and Vasileios Basios, “Inverse Bayesian Inference in Swarming Behavior of Soldier Crabs”, *Philosophical Transaction of the Royal Society A* 376, 2018.11. DOI: <https://doi.org/10.1098/rsta.2017.0370> (査読有)
11. Urakami, Daisuke, and Yukio Pegio Gunji, “Universal Emergence of 1/f Noise in Asynchronously Tuned Elementary Cellular Automata”, *Complex Systems* 27 (4), 399–414, 2018.12. (査読有)

12. Gunji, Yukio Pegio, and Kyoko Nakamura, “Dancing Chief in the Brain or Consciousness as an Entanglement”, *Foundations of Science*, Springer Nature, 2019.2,  
DOI: <https://doi.org/10.1007/s10699-019-09585-9> (査読有)
13. Haruna, Taich, and Yukio Pegio Gunji, “Ordinal Preferential Attachment: A Self-Organizing Principle Generating Dense Scale-Free Networks”, *Scientific Reports* 9, 2019.3.  
DOI: <https://doi.org/10.1038/s41598-019-40716-1> (査読有)
14. Minoura, Mai, Iori Tani, Takahiro Ishii, and Yukio Pegio Gunji, “Observing the Transformation of Bodily Self-consciousness in the Squeeze-Machine Experiment”, *Journal of Visualized Experiment* 145, 2019.3.  
DOI: <https://doi.org/10.3791/59263> (2019). (査読有)
15. 近藤和敬「メイヤスーとバディウ」, 『現代思想』47(1), 87–102, 2019.1.
16. 近藤和敬「思考-生-存在」, 『ドゥルーズの 21 世紀』(檜垣立哉, 小泉義之, 合田正人編), 446–492, 2019.1, 河出書房新社.
17. 佐久間寛「序論:プレザンス・アフリケーヌとは何か」, 『アフリカ研究』94, 21–33, 2018.12. (査読有)
18. 佐久間寛「黒いソクラテスは語る:創始者アリウン・ジョップと学生組織」, 『アフリカ研究』94, 49–59, 2018.12. (査読有)
19. 佐久間寛「祓えぬ負債に憑かれること:ニジェール西部における調査経験から」, 『白山人類学』22, 59–77, 2019.3. (査読有)
20. Tokoro, Ikuya, “The Turing Test in the Wild: When Non Human “Things” Become Others”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 407–424, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
21. 床呂郁哉「もの」研究の新たな視座」, 『詳論 文化人類学:基本と最新のトピックを深く学ぶ』(桑山敬己, 綾部真雄編), 265–278, 2018.4, ミネルヴァ書房.
22. Tokoro, Ikuya, “Muslim Cosmopolitanism: Southeast Asian Islam in Comparative Perspective. By Khairudin Aljunied”, *International Journal of Asian Studies* 15 (2), 255–257, 2018.7, Cambridge University Press. (査読有)
23. Nakamura, Kyoko, and Yukio Pegio Gunji, “Entanglement of Art Coefficient, or Creativity”, *Foundations of Science*, Springer Nature, 2019.2. DOI: <https://doi.org/10.1007/s10699-019-09586-8> (査読有)
24. 名和克郎「「東京」のことばと都市の統合的把握のために」, 『ことばと社会:多言語社会研究』20, 73–94, 2019.1. (査読有)
25. Nishii, Ryoko, “The “Face” and the Other: Muslim Women Behind the Veil”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 283–301, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)

[口頭発表等]計 27 件

1. 岩谷彩子「『ジブシー』の可視化と新人種主義」, 人文研アカデミー2018「人種神話を解体する:可視性と不可視性のはざままで」出版記念連続セミナー第3回<新人種主義の現在>, 2018.6.16, 京都大学.
2. Iwatani, Ayako, “Beyond the Life for the Present: Search for Belonging in Romani Palaces in Romania”,

- Annual Meeting of the Gypsylore Society, 2018.9.5, The National Library of Romania, Bucharest, Romania.
3. 岩谷彩子「ヘビがもたらす感覚変容:カールベリヤーの旋回舞踊とその生活世界より」, 日本南アジア学会 30 周年記念連続シンポジウム, 2018.10.28, 京都大学.
  4. 岩谷彩子「女性と仕事:ロマ/「ジプシー」研究と私」, 京都大学女子高生・車座フォーラム, 2018.12.22, 京都大学.
  5. 岩谷彩子「ヴァーチャルな居住空間:ルーマニアのロマ御殿における想像力と桎梏」, 現代人類学研究会, 2019.2.19, 東京大学.
  6. 岩谷彩子「ジプシー芸能と女性」, ロマフェスト第 8 回ロマ・ジプシーシンポジウム&コンサート, 2019.2.21, 鶴見区民文化センター.
  7. 河合香吏「牧畜民の遊動と集団間関係」, 第 48 回ホミニゼーション研究会, 2019.3.1, 京都大学霊長類研究所.
  8. 久保明教「「手作り」という幻想: 家庭料理のネットワーク論」, 日本記号学会第 38 回研究大会, 2018.5.19, 名古屋大学.
  9. Nakamura, Kyoko, and Yukio Pegio Gunji, “Entanglement of Vision and the Outside, its Painting Expression”, Worlds of Entanglement, 2019.3.8, IFICC - Instituto de Filosofía y Ciencias de la Complejidad, Santiago, Chile.
  10. Gunji, Yukio Pegio, and Kyoko Nakamura, “Subjective Non-locality in Cognitive System”, Worlds of Entanglement, 2019.3.8, IFICC - Instituto de Filosofía y Ciencias de la Complejidad, Santiago, Chile.
  11. Sakuma, Yutaka, “The Potential of Debts that Cannot Be Paid”, 8th African Forum in Accra: Futurity in African Realities, 2018.12.7, Erata Hotel, Accra, Ghana.
  12. 佐久間寛「創始者アリウン・ジョップと黒人学生組織」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.26, 北海道大学.
  13. Tokoro, Ikuya, “Preliminary Study on Role of Civil Society in the Mindanao Peace Process”, International Conference on Progressive Civil Society, 2019.2.19, Universiti Ahmad Dahlan, Yogyakarta, Indonesia.
  14. 床呂郁哉「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究(計画班 A01-P01:18 年度後半進捗報告)」, 科研費科学研究費補助金事業「新学術領域研究(研究領域提案型)」「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築:一多文化をつなぐ顔と身体表現」, 第 3 回領域会議, 2018.12.27, 沖縄県自治会館.
  15. Tokoro, Ikuya, “De-centralizing Cross-Border Migration Flows in Asia: A Case Study on Transnational Migration in/around Japan and the Philippines”, JaCMES-LERC Joint Roundtable on Migrants and Refugees Dynamics and Perception toward their Integration, 2018.11.28, Japan Center for Middle East Studies, Beirut, Lebanon.
  16. 床呂郁哉「趣旨説明:顔・身体学研究に関するイントロダクション」, 科研費新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体表現」, 第 3 回シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」, 2018.11.25, AA 研.
  17. 床呂郁哉「身体的経験をめぐる人類学と現象学からのアプローチ-不完全な身体、人種と身体、妊娠期の身体の事例から(イントロダクション)」, 科研費新学術領域研究「トランスカルチャー状況下に

- おける顔身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体表現」哲学班・人類学班合同公開ワークショップ, 2018.5.19, AA 研.
18. 床呂郁哉「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究(計画班 A01-P01:18 年度前半進捗報告)」, 科研費新学術領域研究(研究領域提案型)「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体表現」, 第 2 回領域会議, 2018.6.10, 東京女子大学.
  19. 床呂郁哉「他者とつながる」, 慶應義塾大学文学部公開講座, 2018.7.14, 慶應義塾大学.
  20. Tokoro, Ikuya, “Introduction on the Muslim Society in the Philippines”, フィリピン南部ムスリム社会に関する実務家ワークショップ, 2018.9.10, JICA Philippines Office, Makati City, Philippines.
  21. 床呂郁哉「スールー諸島のムスリムの現況:マレーシア・サバとの関係を中心に」, フィリピン南部ムスリム社会に関する実務家ワークショップ, 2018.9.10, JICA Philippines Office, Makati City, Philippines.
  22. 中村恭子「花喰鳥を待つ」, 第 13 回内部観測研究会, 2019.3.15, 早稲田大学.
  23. Nawa, Katsuo, “Ambivalence Denied or Unrecognized? A Preliminary Study on Some Governmental Brochures in the Early Panchayat Period”, Annual Kathmandu Conference on Nepal and the Himalaya 2018, 2018.7.25, Hotel Shanker, Kathmandu, Nepal.
  24. Nawa, Katsuo, “Imaginary Journeys across Himalayas through Words: On Some Ritual Recitations in Byans, Far Western Nepal”, Traditions and Changes: The Second International Symposium on Himalayan Studies, 2018.10.23, Sheke Boyuan Hotel, Beijing, PRC.
  25. Nawa, Katsuo, “Why There Has Been No U-Tokyo School of Cultural Anthropology in Post-World War II Japan: Focusing on Two 1.5 Generation U-Tokyo Anthropologists Working on Asia”, Conference “Global Asian in Interdisciplinary Perspectives: Sustainability, Security, and Governance”, 2018.11.16, Nanyang Technological University, Singapore.
  26. 西井涼子「南タイのフィールドにおけるムスリムと仏教徒の共生」, 地域研究コンソーシアム(JCAS)運営委員会・研究報告会, 2018.4.27, 京都大学.
  27. Nishii, Ryoko, “Life as a House: The Case of Na Chua: An Assemblage of phi norng (Relatives) in Southern Thailand”, International workshop: Encounters in Fieldwork: The Influence of Vincent Crapanzano, 2018.10.14, ILCAA.

[図書]計 7 件

1. Kawai, Kaori (ed.), “*Others: The Evolution of Human Sociality*”, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan and Trans Pacific Press, Melbourne, Australia.
2. 久保明教『機械カニバリズム:人間なきあとの人類学へ』, 2018.9, 講談社.
3. 中村恭子, 郡司ペギオ幸夫『TANKURI :創造性を撃つ』, 2018.12, 水声社.
4. 郡司ペギオ幸夫『天然知能:意識の向こう側』, 2019.1, 講談社.
5. Sakuma, Yutaka, and Yukako Yoshida (eds.), “Disability and Affect: Proceedings of Two International Symposiums about Art”, 2019, ILCAA.
6. 床呂郁哉, 吉田ゆか子, 吉田優貴編『トランスカルチャー状況下における顔・身体(2018 年 3 月国際ワークショップ・プロシーディングス)』, 2019.3, AA 研.
7. 箭内匡『イメージの人類学』, 2018.4, せりか書房.

[社会に向けた成果発表]計 8 件

1. 学外の社会活動(新聞・雑誌):床呂郁哉「ドゥテルテ政権の 2 年」(インタビュー記事),『まにら新聞』2018 年 7 月 4 日号, 1, 2018.7.
2. 学外の社会活動(新聞・雑誌):床呂郁哉「ミンダナオ和平の行方を読む(上)」,『まにら新聞』2018 年 8 月 28 日号, 3, 2018.8.
3. 学外の社会活動(新聞・雑誌):床呂郁哉「ミンダナオ和平の行方を読む(下):『静かな危機』の克服」,『まにら新聞』2018 年 8 月 29 日号, 3, 2018.8.
4. 学外の社会活動(新聞・雑誌):床呂郁哉「アチェから見たフィリピン南部」,『まにら新聞』2019 年 1 月 5 日号, 3, 2019.1.
5. 学外の社会活動(新聞・雑誌):床呂郁哉「ミンダナオ和平新展開(上)」,『まにら新聞』2019 年 2 月 5 日号, 3, 2019.2.
6. 学外の社会活動(新聞・雑誌):床呂郁哉「ミンダナオ和平新展開(下)」,『まにら新聞』2019 年 2 月 6 日号, 3, 2019.2.
7. Nawa, Katsuo, and Mitsuru Niwa (comp.), “*Academic Books Related to Nepal Written in Japanese in the 21st Century*”, 2018.6, Martin Chautari, Kathmandu, Nepal (URL: <http://www.martinchautari.org.np/files/bibliography/Academic-Books-Related-to-Nepal-Written-in-Japanese-in-the-21st-Century.pdf>)
8. 名和克郎「言語人類学」,『詳説 文化人類学:基本と最新のトピックを深く学ぶ』(桑山敬己, 綾部真雄編), 17–30, 2018.4, ミネルヴァ書房.

[その他]計 4 件

1. 西井涼子「書評 津村文彦著『東北タイにおける精霊と呪術師の人類学』」,『東南アジア 歴史と文化』47 号, 172–176, 2018.6.
2. 西井涼子「共生を起動するもの」,『Pieria』(東京外国語大学広報誌)』2018 年春号, 34–35, 2018.4.
3. Nishii, Ryoko (ed.), *International Workshop: The Oct 6 Massacre and Aftermath-violence and Democracy*, 2019.3, ILCAA.
4. Nishii, Ryoko (ed.), *International Symposium: Coping with Vertiginous Realities, 6 October 2018*, 2019.3, ILCAA.

## 社会性の起原:ホミニゼーションをめぐって

研究期間: 2018–2020 (代表: 河合香吏/所員 3、共同研究員 20)

所員: 河合香吏、床呂郁哉、西井涼子

共同研究員: 足立薫、伊藤詞子、内堀基光、大村敬一、春日直樹、北村光二、杉山祐子、デイビッド・スプレイグ、曾我亨、竹ノ下祐二、田中雅一、蔦谷匠、寺嶋秀明、中川尚史、中村美知夫、西江仁徳、花村俊吉、藤井真一、船曳建夫、山越言

### 研究会等の内容

2018 年度第 1 回研究会(2018 年 6 月 23 日～6 月 24 日、AA 研マルチメディアセミナー室)

6 月 23 日

河合香吏(AA 研)

趣旨説明

足立薫(AA 研共同研究員、京都産業大学)

「霊長類学:「社会性の起原 Sussman から Fuentes へ」

北村光二(AA 研共同研究員、岡山大学名誉教授)

「生態人類学:「社会性の起源」を巡る研究動向」

内堀基光(AA 研共同研究員、一橋大学／放送大学名誉教授)

「社会文化人類学:「社会文化人類学」から」

6月24日

五十嵐由里子(日本大学)

「出産・育児から見る人類進化」

小田亮(名古屋工業大学)

「利他性の進化認知的基盤」

2018年度第2回研究会(2019年2月16日～2月17日、AA研マルチメディアセミナー室)

2月16日

蔦谷匠(AA 研共同研究員、海洋研究開発機構)

「自己紹介 & 現代日本における共同保育の実践の調査」

中川尚史(AA 研共同研究員、京都大学)

「ヒト以外の霊長類における寛容性社会とその関連行動形質の進化」

ゲストスピーカーによるレクチャー:瀧本彩加(北海道大学)

「フサオマキザルにおける道德性の萌芽:向社会行動・不公平忌避・社会的評価に着目して」

2月17日

デイビッド・スプレイグ(AA 研共同研究員、農業・食品産業技術総合研究機構)

「ヒトとサルにとっての空間的な「位置」の論理は計測可能か」

大村敬一(AA 研共同研究員、放送大学)

「協力のオントロジー:イヌイトの世界生成での社会性を支える演出法」

花村俊吉(AA 研共同研究員、京都大学)

「待つ力・応答をひきだす力:チンパンジーの遊動をともにするやり方と病気個体のふるまいに着目して」

## 研究成果一覧

[学術論文]計39件

1. Kawai, Kaori, "Introduction: ; Finding "Others" from an Evolutionary Perspective: The Search for the Evolutionary Historical Foundations of Human Sociality", *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 1–21, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
2. Kawai, Kaori, "The Origins of "Consideration for One's Enemy": What Kind of Others Are Neighboring Groups to the Dodoth?", *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 217–233, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
3. 河合香吏「敵と友のはざまで:ドドスと隣接民族トゥルカナとの関係」,『遊牧の思想:人類学がみる激

- 動のアフリカ』(太田至, 曾我亨編), 197–214, 2019.3, 昭和堂.
4. Nakamura, Michio, “Are Animals “Others” or Are There “Others” to Animals?”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 47–67, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
  5. Nakamura, Michio, “Nishida, Toshisada”, *The International Encyclopedia of Biological Anthropology*, 2018.10, John Wiley and Sons, Inc., New Jersey, USA. DOI: 10.1002/9781118584538.ieba0343.
  6. Nakamura, Michio, “Masturbation with a Tool by an Infant Male Chimpanzee”, *Pan Africa News* 25, 2–4, 2018.6. (査読有)
  7. Nishie, Hitonaru, “Who is the Alpha Male?: The Appearance of the “Other” in Chimpanzee Society”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 127–148, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
  8. Nishie, Hitonaru, “Leopards Attempted to Hunt Wild Chimpanzees at Mahale”, *Pan Africa News* 25(2), 25–26, 2018.12. (査読有)
  9. Soga, Toru, “When Others Appear”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 67–88, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
  10. 曾我亨, 太田至「遊牧の思想とは何か」, 『遊牧の思想: 人類学がみる激動のアフリカ』(太田至, 曾我亨編), 1–14, 2019.3, 昭和堂.
  11. 曾我亨「難民を支えたラクダ交易」, 『遊牧の思想: 人類学がみる激動のアフリカ』(太田至, 曾我亨編), 91–115, 2019.3, 昭和堂.
  12. Tsutaya, Takumi, Tomonari Takahashi, Rick J. Schulting, Takao Sato, Minoru Yoneda, Hirofumi Kato, and Andrzej Weber, “Effects of Lipid Extraction and Different Collagen Extraction Methods on Archaeological Fish Bones and its Implications for Fish Bone Diagenesis”, *Journal of Archaeological Science: Reports* 20, 626–633, 2018.8. (査読有)
  13. 葛谷匠, 久保麦野, 三河内彰子「博物館の人類学・先史考古学展示における Twitter とブログを利用した展示解説拡充の試み」, *Anthropological Science (Japanese Series)* 126, 55–62, 2018.6. (査読有)
  14. Tsutaya, Takumi, Natsumi Aruga, Hodaka Matsuo, and Chie Hashimoto, “Four Cases of Grooming Sessions between Chimpanzees and Guenons at the Kalinzu Forest Reserve, Uganda”, *Pan Africa News* 25, 5–7, 2018. (査読有)
  15. 葛谷匠「安定同位体分析を用いた霊長類生態学」, 『霊長類研究』34, 17–30, 2018.6. (査読有)
  16. 葛谷匠, 本郷峻「霊長類学における行動・生態研究手法の現在」, 『霊長類研究』34, 3–4, 2018.6. (査読有)
  17. Itoh, Noriko, “Encountering the “Other”: How Chimpanzees Face Indeterminacy”, *Others: The Evolution of Human Sociality*, 149–176, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan and Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
  18. Nishii, Ryoko, “The “Face” and the Other: Muslim Women Behind the Veil”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 283–301, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan and Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
  19. Tokoro, Ikuya, “The Turing Test in the Wild: When Non Human “Things” Become Others”, *Others: The*

- Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 407–424, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
20. 床呂郁哉「もの」研究の新たな視座, 『詳論 文化人類学: 基本と最新のトピックを深く学ぶ』(桑山敬己, 綾部真雄編), 265–278, 2018.4, ミネルヴァ書房.
  21. Tokoro, Ikuya, “Muslim Cosmopolitanism: Southeast Asian Islam in Comparative Perspective. By Khairudin Aljunied”, *International Journal of Asian Studies* 15 (2), 255–257, 2018.7. (査読有)
  22. 杉山祐子「もめごとを祖霊の世界に托して: 焼畑農耕民ベンバの「考えかた」, 『遊牧の思想: 人類学がみる激動のアフリカ』(太田至, 曾我亨編), 117–139, 2019.3, 昭和堂.
  23. Sugiyama, Yuko, “Ancestral Spirits, Witchcraft and Phases of the Other in Everyday Life: The Case of the Agricultural Bemba People of Zambia”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 245–271, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan & Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
  24. 白石壮一郎, 杉山祐子, 近藤史「人類学の挑戦」, 『ポスト地方創生: 大学と地域が組んでどこまでできるか』124–160, 2019.3, 弘前大学出版会. (査読有)
  25. Uchibori, Motomitsu, “The Spirit as the Other: From the Iban Ethnography”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 325–346, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan and Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
  26. Funabiki, Takeo, “Future Agenda, Others as an Affliction: Tripartite Relationships and the Tetrahedral Model”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 425–442, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan and Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
  27. Kitamura, Koji, ““The Other Who Can Refuse”: A Precondition for Transition to Human Society”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 91–108, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan and Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
  28. Tanaka, Masakazu, “Morality and Instrumentality: A Practical Approach to Theorizing the Other”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 303–321, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan and Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
  29. 田中雅一「アウシュヴィッツにてホロコーストの生存者に会うということ」, 『日本オーラル・ヒストリー研究』14, 43–54, 2018.9. (査読有)
  30. Tanaka, Masakazu, “Grids, Waves and Nationalism: Some Thoughts by Listening to “Good Vibrations” in a Big Morgue”, *Japanese Review of Cultural Anthropology* 19 (1), 5–50, 2019.6. (査読有)
  31. Hanamura, Shunkichi, “When Pricking up One’s Ears for the Voices of Strangers: Others in Chimpanzee society”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 177–216, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan and Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
  32. Adachi, Kaoru, “Toward the Environmental Others: An Ethological Essay on Equilibrium and Coexistence”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 365–386, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan and Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
  33. 大村敬一「社会性の条件としてのトラウマ: イヌイトの子どもへのからかいを通じた他者からの呼びかけ」, 『トラウマを生きる』(田中雅一, 松嶋健編), 173–206, 2018.11, 京都大学学術出版会.
  34. Omura, Keiichi, “The Ontology of the Other: The Evolutionary Basis of Human Sociality and Ethics in

- the Formation and Continuation of Inuit Society”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 225–244, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan and Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
35. Omura, Keiichi, “Maps in Action: Quotidian Politics through Boundary Translational Matrix for World Multiple in Contemporary Inuit Everyday Life”, *The World Multiple: The Quotidian Politics of Knowing and Generating Entangled Worlds*, 68–82, 2018.11, Routledge, London, UK. (査読有)
  36. Omura, Keiichi, “Preface and Acknowledgement”, *The World Multiple: The Quotidian Politics of Knowing and Generating Entangled Worlds*, xiv–xviii, 2018.11, Routledge, London, UK. (査読有)
  37. Otsuki, Grant, Shiho Satsuka, Keiichi Omura, and Atsuro Morita, “Introduction”, *The World Multiple: The Quotidian Politics of Knowing and Generating Entangled Worlds*, 1–17, 2018.11, Routledge, London, UK. (査読有)
  38. Takenoshita, Yuji, “Society as a “Story”: Work Sharing, Cooperative Breeding and the Evolution of Otherness”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 387–406, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan and Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)
  39. Yamakoshi, Gen, “A History of the Distance between Humans and Wildlife”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 347–364, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan and Trans Pacific Press, Melbourne, Australia. (査読有)

〔口頭発表等〕計 58 件

1. 河合香吏「牧畜民の遊動と集団間関係」, 第 48 回ホミニゼーション研究会, 2019.3.1, 京都大学霊長類研究所.
2. 中村美知夫「霊長類の社会集団: その規模・構造・継承性」, 「国家の規模とガバナンスの学際的分析」研究会, 2018.12.27, 京都大学.
3. Nakamura, Michio, “Association and Social Relationships among Female Chimpanzees of Mahale.”, 27th Congress of the International Primatological Society, 2018.8.22, United Nations, Nairobi, Kenya.
4. 中村美知夫「たかだか 50 数年で私たちはチンパンジーのことをどこまで『分かった』と言えるのだろうか?」, 第 47 回 京大モンキー日曜サロン, 2018.5.13, 日本モンキーセンター.
5. 中川尚史「ニホンザルの抱擁行動-Updated by outdated data-」, 第 10 回遺伝子の窓から研究会, 2018.6.16, 国民宿舎波戸岬.
6. 中川尚史「金華山島のニホンザルにおける抱擁行動パタンの変異とその代替行動」, 日本霊長類学会第 34 回大会, 2018.7.15, 武蔵大学.
7. 沢田晶子, 西川真理, 中川尚史「屋久島におけるニホンザルとニホンジカの異種間交渉」, 日本霊長類学会第 34 回大会, 2018.7.15, 武蔵大学.
8. 井上英治, 小島梨紗, 山田一憲, 大西賢治, 中川尚史, 村山美穂「マカカ属の寛容性と COMT 遺伝子の変異の関連」, 日本霊長類学会第 34 回大会, 2018.7.15, 武蔵大学.
9. 白井啓ほか, 和歌山タイワンザルワーキンググループ「和歌山におけるタイワンザルの群れ根絶の達成」, 日本霊長類学会第 34 回大会, 2018.7.15, 武蔵大学.
10. Nakagawa, Naofumi, and Kenichiro Hikida, “Changes Observed across Generations in the Frequency of a Social Customary Behavior in Japanese Macaques (*Macaca fuscata*)”, XXXVIIth Congress of the

- International Primatological Society, 2018.8.22, United Nations in Nairobi, Nairobi, Kenya.
11. 中川尚史「金華山島のニホンザルで見られる複合感覚信号としての抱擁行動」, 第 37 回日本動物行動学会大会, 2018.9.29, 京都大学.
  12. 中川尚史「サルの変容から人類の起源と進化を語る」, 第 72 回国立病院総合医学会特別講演, 2018.11.9, 神戸国際展示場・神戸国際会議場.
  13. 西井涼子「南タイのフィールドにおけるムスリムと仏教徒の共生」, 地域研究コンソーシアム(JCAS)運営委員会・研究報告会, 2018.4.27, 京都大学.
  14. Nishii, Ryoko, “Life as a house- the Case of Na Chua: An Assemblage of phi norng (Relatives) in Southern Thailand”, International workshop: Encounters in Fieldwork: The Influence of Vincent Crapanzano, 2018.10.14, ILCAA.
  15. Tokoro, Ikuya, “Preliminary Study on Role of Civil Society in the Mindanao Peace Process”, International Conference on Progressive Civil Society, 2019.2.19, Universiti Ahmad Dahlan, Yogyakarta, Indonesia.
  16. 床呂郁哉「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究(計画班 A01-P01:18 年度後半進捗報告)」, 科研費新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体表現」第 3 回領域会議, 2018.12.27, 沖縄県自治会館.
  17. Tokoro, Ikuya, “De-centralizing Cross-Border Migration Flows in Asia: A Case Study on Transnational Migration in/around Japan and the Philippines”, JaCMES-LERC Joint Roundtable on Migrants and Refugees Dynamics and Perception toward their Integration, 2018.11.28, Japan Center for Middle Eastern Studies, Beirut, Lebanon.
  18. 床呂郁哉「趣旨説明:顔・身体学研究に関するイントロダクション」, 科研費新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体表現」第 3 回シンポジウム, 2018.11.25, AA 研.
  19. 床呂郁哉「身体的経験をめぐる人類学と現象学からのアプローチ:不完全な身体、人種と身体、妊娠期の身体の事例から(イントロダクション)」, 科研費新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体表現」哲学班・人類学班合同公開ワークショップ, 2018.5.19, AA 研.
  20. 床呂郁哉「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究(計画班 A01-P01:18 年度前半進捗報告)」, 科研費新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築:多文化をつなぐ顔と身体表現」第 2 回領域会議, 2018.6.10, 東京女子大学.
  21. 床呂郁哉「他者とつながる」, 慶應義塾大学文学部公開講座, 2018.7.14, 慶應義塾大学.
  22. Tokoro, Ikuya, “Introduction on the Muslim Society in the Philippines”, フィリピン南部ムスリム社会に関する実務家ワークショップ, 2018.9.10, JICA Philippines Office, Makati City, Philippines.
  23. 床呂郁哉「スラール諸島のムスリムの現況:マレーシア・サバとの関係を中心に」, フィリピン南部ムスリム社会に関する実務家ワークショップ, 2018.9.10, JICA Philippines Office, Makati City, Philippines.
  24. 杉山祐子「農村における小規模な現金獲得活動の現代的諸相」, 日本アフリカ学会代 55 回学術大会, 2018.5.26, 北海道大学.
  25. D. S. スプレイグ, 西川真里, 鈴木真里子「ニホンザルの同時追跡による個体間距離と活動マッピング」, 日本霊長類学会, 2018.7.13, 武蔵大学.

26. Sprague, David S., 「関東地方における谷津田の分布変化と残存率の推定」, 地理情報システム学会, 2018.10.20, 首都大学東京.
27. Okubo, Satoru, and David S. Sprague, “New Strategies for Developing Biodiversity Indicators with the Help of Big Data in Japan”, OECD Workshop on the Use of New Technologies for Agri-Environmental Indicators to support effective Policy Monitoring, Evaluation and Design, 2018.5.31, House of the Estates (Säätytalo), Helsinki, Finland.
28. Sprague, David. S., 「歴史 GIS からリモートセンシングで見る農業環境の変遷」, GIS コミュニティーフォーラム 2018, 2018.5.25, 東京ミッドタウン.
29. Uchibori, Motomitsu, “Characteristics of Community of Care: Hunter-gatherers in the Light of Swidden Cultivators”, The Twelfth International Conference on Hunting and Gathering Societies, 2018.07.25, Universitas Sains Malaysia, Penang, Malaysia.
30. 田中雅一「現代インド世界における売春・宗教・ジェンダー暴力」, 21 世紀科学プロジェクト環境平和学主催公開講演会, 2018.7.30, 広島大学.
31. 田中雅一「ムンバイの売春街に見る 女性の自己管理、家族関係、女神との結婚」, 南アジア研究集会, 2018.8.4, 伊東市山喜温泉.
32. Tanaka, Masakazu, “Fetishism and its Social Significance”, Chinese Association of Anthropology of Art, 2018.9.25, Southeast University, Nanjing, PRC.
33. 田中雅一「身近なものや出来事から異なる 民族・文化を考える」, 京大オリジナル講演会, 2018.11.29, IHI 横浜エンジニアリングセンター.
34. 田中雅一「アートから遺品、そしておみやげへ:トレンチアートをめぐって」, 国立民族学博物館研究プロジェクト「人類学/民俗学の学知と国民国家の関係:20 世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」, 2018.12.27, 国立民族学博物館.
35. 田中雅一「貞淑な女性とふしだらな女性」, シンポジウム「アジアの女性」, 2019.1.22, 成均館大学東アジア学術院, ソウル, 大韓民国.
36. 花村俊吉「野生チンパンジーの『間合い』:長距離音声を介した非対面下の相互行為から」, 日本認知科学会研究分科会「間合い:時空間インタラクション」, 2019.3.2, 京都大学.
37. Fujii, Shinichi, “Truth Commission and Conventional Conflict Resolution in the Solomon Islands: Strained Relations between Global and Local Norms Relating to the Statement-Taking of Experiences under the Conflict”, International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, 18th World Congress, 2018.7.20, Universidade Federal de Santa Catarina, Santa Catarina, Brazil.
38. Fujii, Shinichi, “Avoidance from the Conflict: Everyday Life in the Northeastern Guadalcanal, Solomon Islands”, World Social Science Forum 2018, 2018.9.28, Fukuoka International Congress Center, Fukuoka, Japan.
39. 藤井真一「平和の所在:ソロモン諸島ガダルカナル島における日常生活の民族誌」, 第 887 回首都大学東京・東京都立大学社会人類学研究会, 2018.11.16, 首都大学東京.
40. 藤井真一「儀礼や饗宴において重要な価値付けがなされるものについての覚書」, 経済/政治人類学研究会, 2019.2.15, 愛知県知多郡日間賀島西港 民宿「まりん」
41. 藤井真一「貝貨の現在:ソロモン諸島ガダルカナル島の調査から」, 生態人類学会第 24 回研究大会, 2019.3.21, 鴨川グランドホテル, 千葉県鴨川市.

42. 藤井真一「ブタと貝貨:ソロモン諸島ガダルカナル島における交換財の調査報告」, 日本オセアニア学会第 36 回研究大会, 2019.3.26, 首都大学東京.
43. 足立薫「香港、新界地域のマカク属のサルと人間の活動」, 日本霊長類学会, 2018.7.14, 武蔵大学.
44. 足立薫「餌やる人々:香港の野生マカクザルと人間の関係」, 中部人類学談話会, 2019.1.13, 南山大学.
45. 足立薫「異種への関心:霊長類混群の生態と社会」, マルチスピーシーズ人類学研究会, 2019.1.18, 立教大学.
46. Omura, Keiichi, “Discussant. “Session 4. Adapting to Arctic Realities: Bringing Knowledge to Action””, On Land, Water and Ice: Indigenous Societies and the Changing Arctic (Slavic-Eurasian Research Center 2018 Summer International Symposium), 2018.7.6, Slavic-Eurasian Research Center (SRC), Hokkaido University, Sapporo, Japan.
47. Omura, Keiichi, “Life-course as an Autopoietic System: Considering Mechanisms of Social Reproduction in Inuit Shared Care-giving for Children and Elders”, CHAGSXII P29 “Caring Systems for the Aged within the Framework of Life-courses (Stages of Life) among Hunter-gatherer Communities”, 2018.7.25, Universiti Sains Malaysia, Penang, Malaysia.
48. 大村敬一「イヌイトの知識と近代科学:カナダ・イヌイトの「野生の科学」から人類の未来を問う」, 第 10 回人間と文化コース懇話会, 2018.10.10, 放送大学・自然と環境コース・セミナー室.
49. 大村敬一「「ファースト・コンタクト」(極限)の使い方:相互行為論から世界生成機械論へ (『見知らぬものと出会う:ファースト・コンタクトの相互行為論』(木村大治、2018)へのコメント)」, コミュニケーションの自然誌研究会, 2018.12.17, 京都大学吉田泉殿.
50. 大村敬一「「ファースト・コンタクト」(極限)の使い方:相互行為論から世界生成機械論へ (『見知らぬものと出会う:ファースト・コンタクトの相互行為論』(木村大治、2018)へのコメント)」, 民族芸術学会第 151 回研究例会, 2018.12.22, 大阪大学文学研究科・芸術研究棟 1 階芸 3 教室.
51. 大村敬一「シンポイエーシスのメカニズムをさぐる試み:多重に生きるイヌイトの世界のつなげ方」, 第 26 回マルチスピーシーズ人類学研究会「種社会の記述法をめぐって」, 2019.01.18, 立教大学池袋キャンパス 12 号館.
52. 竹ノ下祐二「生物多様性保全は「生業」たりうるのか? ガボン、ムカラバードウドゥ国立公園におけるゴリラの保護と子どもの暮らし」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.27, 北海道大学.
53. 竹ノ下祐二, Etienne François Akomo-Okoué, 坪川桂子, 藤田志歩, Ghislain Wilfried Ebang-Ella, 田村大也, Lilian Brice Mangama-Koumba, Patrice Makouloutou, Paul Yannick Bitome-Esso, 山極寿一「ガボン、ムカラバードウドゥ国立公園のニシローランドゴリラにおける、核オスの消失後の社会変動」, 第 34 回日本霊長類学会大会, 2018.7.14, 武蔵大学.
54. 藤田志歩, シメヌ・ンゼ・ンコグ, 井上英治, 竹ノ下祐二「ニシローランドゴリラのオスの生活史:ストレスは出自集団からの移出を誘発するか」, 第 34 回日本霊長類学会大会, 2018.7.14, 武蔵大学.
55. Takenoshita, Yuji, Etienne François Akomo-Okoué, Keiko Tsubokawa, Shiho Fujita, Ghislain Wilfried Ebang Ella, Masaya Tamura, Lilian Brice Mangama-Koumba, Patrice Makouloutou, Paul Yannick Bitome Esso, and Juichi. Yamagiwa, “Loss of a Leading Silverback Male and Resulting Group Dispersion of Western Lowland Gorillas (Goriilla Gorilla Gorilla) in Moukalaba-Doudou National Park, Gabon”, XXVII Congress of International Primatological Society, 2018.8.26, United Nations, Nairobi, Kenya.

56. Fujita, Shiho, Chimene Nze Nkogue, Eiji Inoue, and Yuji Takenoshita, “Life-history Strategies in Wild Male Western Lowland Gorillas (*Gorilla Gorilla Gorilla*): Does Stress Trigger Emigration from Natal Group?”, XXVII Congress of International Primatological Society, 2018.8.23, United Nations, Nairobi, Kenya.
57. Yamakoshi, Gen, “Conservation and Community-based Wise Use of African Useful Plants: Current Status and Possibility of Ancestor Species of Oil Palm in a Guinean Anthropogenic Landscape”, Kyoto University-EHESS International Symposium 2018 “Contribution of Area Studies to Global Challenges in Africa”, 2018.12.4, Room RJ 24, Bibliothèque universitaire des langues et civilisations, Paris, France.
58. Yamakoshi, Gen, “Conservation of the Bush of Ghosts: Conviviality in Guinean Anthropogenic Landscape”, 8th African Forum: Accra “Futurity in African Realities”, 2018.12.9, Erata Hotel, Accra, Ghana.

[図書]計6件

1. Kawai, Kaori (ed.), *Others: The Evolution of Human Sociality*, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan and Trans Pacific Press, Melbourne, Australia.
2. 床呂郁哉・吉田ゆか子・吉田優貴編『トランスカルチャー状況下における顔・身体(2018年3月国際ワークショップ・プロシーディングス)』, 2019, AA 研.
3. Funabiki, Takeo, *Exploring the Anxiety of Being Japanese*, 2018.3, Cam Rivers Publishing. Cambridge, UK.
4. 田中雅一『誘惑する文化人類学:コンタクト・ゾーンの世界へ』, 2018.6, 世界思想社.
5. 田中雅一, 松嶋健編『トラウマ研究 2 ト라우マを共有する』, 2018.4, 京都大学学術出版会.
6. Omura, Keiichi, Atsuro Morita, Shiho Satsuka, and Grant Otsuki (eds.), *The World Multiple: The Quotidian Politics of Knowing and Generating Entangled Worlds*, 2018.11, Routledge, London, UK.

[社会に向けた成果発表]計25件

1. 中村美知夫「動物の名前と地元の知識」, 『野生動物:追いかけて、見つめて知りたい キミのこと』, 148-149, 2018.6, 京都通信社.
2. 学外の社会活動(新聞・雑誌):中村美知夫「マハレのきのこ:第13回 イロンボから生えるキノコーマメザヤタケの仲間」, 『マハレ珍聞』32, 5, 2018.12.
3. 学外の社会活動(新聞・雑誌):中村美知夫「マハレのきのこ:第12回 至極の逸品:マフンブイ」, 『マハレ珍聞』31, 6, 2018.6.
4. 学外の社会活動(新聞・雑誌):葛谷匠「古人骨集団における授乳・離乳パターンの推定」, 『季刊考古学』143, 57-59, 2018.4. (URL: [http://www.yuzankaku.co.jp/products/detail.php?product\\_id=8450](http://www.yuzankaku.co.jp/products/detail.php?product_id=8450))
5. 学外の社会活動(新聞・雑誌):床呂郁哉「ミンダナオ和平の行方を読む(上)」, 『まにら新聞』2018年8月28日号, 3, 2018.8.
6. 学外の社会活動(新聞・雑誌):床呂郁哉「ミンダナオ和平の行方を読む(下):『静かな危機』の克服」, 『まにら新聞』2018年8月29日号, 3, 2018.8.
7. 学外の社会活動(新聞・雑誌):床呂郁哉「アチェから見たフィリピン南部」, 『まにら新聞』2019年1月5日号, 3, 2019.1.

8. 学外の社会活動(新聞・雑誌):床呂郁哉「ミンダナオ和平新展開(上)」,『まにら新聞』2019年2月5日号,3,2019.2.
9. 学外の社会活動(新聞・雑誌):床呂郁哉「ミンダナオ和平新展開(下)」,『まにら新聞』2019年2月6日号,3,2019.2.
10. 学外の社会活動(新聞・雑誌):床呂郁哉「ドゥテルテ政権の2年(インタビュー記事)」,『まにら新聞』2018年7月4日号,1,2018.7.
11. 杉山祐子「鋸と鋏とりんご栽培」,『大学的青森ガイド』(弘前大学人社会科学部編),188-207,2019.4,昭和堂.
12. 学外の社会活動(新聞・雑誌):杉山祐子「書評:『カンボジア農村に暮らすメマーイ:貧困に陥らない社会の仕組み』」,『アジア経済』59(3),58-63,2018.9.(URL: [https://ir.ide.go.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=50592&item\\_no=1&page\\_id=39&block\\_id=158](https://ir.ide.go.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=50592&item_no=1&page_id=39&block_id=158))
13. 田中雅一「セクシュアリティの文化人類学が面白いわけ」,トイ人 学問する人のポータルサイト (URL: <https://www.toibito.com/column/humanities/ethnology/1457>)
14. 藤井真一「自惚れと自信喪失と失敗を重ねて:言語習得と紛争調査」,『ラウンド・アバウト:フィールドワークという交差点』(神本秀爾,岡本圭史編),73-83,2019.1,集広舎.
15. 大村敬一「イッカククジラ鯨の思い出:北極とイヌイトの未来に学ぶ旅」,『まほら』97,44-45,2018.10.
16. 大村敬一「人新世(アンソロポシーン:Anthropocene)」,『Lexicon:現代人類学』(奥野克己,石倉敏明編),46-49,2018.2,以文社.
17. 山越言「知・究・学 人類のふるさとから⑫:道具を使い食事」,『信濃毎日新聞』2018年4月2日朝刊.
18. 山越言「知・究・学 人類のふるさとから⑬:生き延びるための手段」,『信濃毎日新聞』2018年4月16日朝刊.
19. 山越言「知・究・学 人類のふるさとから⑭:野生動物もたしなむ」,『信濃毎日新聞』2018年4月23日朝刊.
20. 山越言「知・究・学 人類のふるさとから⑮:水生チンパンジー」,『信濃毎日新聞』2018年4月30日朝刊.
21. 山越言「知・究・学 人類のふるさとから⑯:「在来知」の究明」,『信濃毎日新聞』2018年5月14日朝刊.
22. 山越言「知・究・学 人類のふるさとから⑰:二つの文化の間で」,『信濃毎日新聞』2018年5月21日朝刊.
23. 山越言「知・究・学 人類のふるさとから⑱:文化的要石種」,『信濃毎日新聞』2018年5月28日朝刊.
24. 山越言「知・究・学 人類のふるさとから⑲:精霊の森と戦争」,『信濃毎日新聞』2018年6月4日朝刊.
25. 山越言「知・究・学 人類のふるさとから⑳:地域主体の保全」,『信濃毎日新聞』2018年6月18日朝刊.

[その他]計3件

1. 西井涼子「書評 津村文彦著『東北タイにおける精霊と呪術師の人類学』」,『東南アジア 歴史と文化』47,172-176,2018.6.
2. 西井涼子「共在を起動するもの」,『Pieria』(東京外国語大学広報誌)2018年春号,34-35,2018.4.

3. 内堀基光「総合人類学の構想」(放送大学第2BS), 2018年下半期, 放送大学特別講演を45分に編集したもの。文化人類学と自然人類学を総合的に俯瞰し, あらたな人類研究の可能性を論じた。

## 中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究

研究期間: 2016-2018 (代表: 近藤洋平/所員 2、共同研究員 9)

所員: 黒木英充、錦田愛子

共同研究員: 近藤洋平、高橋英海、辻明日香、吉村貴之、若松大樹、Antranig Dakessian, Guita Hourani, Ray Mouawad, Souad Slim

### 研究会等の内容

2018年度第1回研究会(2018年9月6日~7日、AA研大会議室)

9月6日

Yohei Kondo (ILCAA Joint Researcher, The University of Tokyo)

“Minority Groups in Oman and their Surviving Strategies”

Antranig Dakessian (ILCAA Joint Researcher, Haigazian University)

“Surviving Strategies of Armenians in Lebanon”

Guita Hourani (ILCAA Joint Researcher, Notre Dame University)

“Surviving Strategies of the Kurds in the M.E.”

9月7日

Souad Slim (ILCAA Joint Researcher, University of Balamand)

“Surviving Strategies of Orthodox Christians in Lebanon”

Takayuki Yoshimura (ILCAA Joint Researcher, Waseda University)

“Surviving Strategies of Armenians”

Hiroki Wakamatsu (ILCAA Joint Researcher, Toros University)

“Surviving Strategies of Alevis”

2018年度第2回研究会(2019年3月1日、レバノン共和国バラマンド大学)

Yohei Kondo (ILCAA Joint Researcher, The University of Tokyo)

“Surviving Strategies of Minority Groups in Oman”

Hidemitsu Kuroki (ILCAA)

“Surviving Strategies of Minority Groups in Syria”

Aiko Nishikida (ILCAA)

“Surviving Strategies of the Palestinians in Lebanon”

Takayuki Yoshimura (ILCAA Joint Researcher, Waseda University)

“Surviving Strategies of the Armenians”

Ray Mouawad (ILCAA Joint Researcher, Saint Joseph University)

“Surviving Strategies of Minority Groups in Lebanon”

## 研究成果一覧

[学術論文]計 20 件

1. 黒木英充「世界に広がるアラブ移民」, 『歴史と地理 世界史の研究』714, 50–53, 2018.5, 山川出版社.
2. 黒木英充「なぜシリア内戦は終わらないのか: 大国の戦場になるシリア」, 『DAYS JAPAN』15(6), 16–21, 2018.6.
3. 黒木英充「54 カーミシュリーのノウルーズ 民族の再生の日」, 『クルド人を知るための 55 章』, 317–321, 2019.1, 明石書店.
4. Kuroki, Hidemitsu, “Armenians in 19th Century Aleppo”, *Armenians of Syria: Proceedings of the Conference (24-27 May 2015)*, 67–75, 2018, Haigazian University Press, Beirut, Lebanon. (査読有)
5. 黒木英充「コメント1」, 『歴史学研究』976, 18–20, 2018.10. (査読有)
6. 黒木英充「ごちそうされて、ごちそうし…シリア・レバノンから」, 『FIELDPLUS』21, 16–17, 2019.1.
7. Takahashi, Hidemi, “Syriac Christianity in China”, *The Syriac World* (ed. by Daniel King), 625–652, 2019, Routledge, London, UK.
8. 高橋英海「イラク領クルディスタンを歩く: 40 年前の記憶から」, 『クルド人を知るための 56 章』(山口昭彦編), 24–28, 2018, 明石書店.
9. 高橋英海「シリア典礼キリスト教(アッシリア人): クルディスタンの先住民族としてのキリスト教徒」, 『クルド人を知るための 56 章』(山口昭彦編), 115–119, 2018, 明石書店.
10. 辻明日香「十字軍と中東のキリスト教徒(特集 宗教的「他者」化と共存のポリティクス)」, 『史潮』83, 4–16, 2018.
11. Kondo, Yohei, “Ibādī Policy on Education and Learning in the Premodern Period”, *Oman, Ibadism and Modernity*, 221–234, 2018, Georg Olms Verlagsbuchhandlung, Hildesheim, Germany.
12. Slim, Souad, “The Impact of the Greek Renaissance on the Patriarchate of Antioch during the Ottoman period”, *Between the Cross and the Crescent, Studies in Honor of Samir Khalil Samir s.j.* (ed. by Željko Paša), 2018, Pontificio Istituto Orientale, Rome, Italy.
13. Slim, Souad, “Un poeme de Hanna Issa Uwayssat: “Un modele de dialogue Islamo Chretien au XVIIeme siecle””, *Parole de l’Orient*, 2018.
14. Hourani, Guita, “State Security and Refugees: Operationalizing the ‘Ladder of Options’ by the Government of Lebanon”, *Middle East Journal of Refugee Studies*, 3 (2), 101–120, 2018.6. (査読有)
15. Hourani, Guita, and Jasmin Diab, “An Integrated Approach to Syrian Refugees’ Healthcare in Lebanon”, *Journal of Health Science* 6, 163–170, 2018. (査読有)
16. Hourani, Guita, “Ambassadors’ Personal Papers as Valuable Archival Sources: Diplomatic Collections at the NDU/LERC”, *La Revue Diplomatique* 44, 2018.
17. Hourani, Guita, “Lebanon Dialogue Initiative (LDI) Track-3 Diplomacy to Establish a United Nations Universal Center for Dialogue and Conflict Resolution in Lebanon”, *La Revue Diplomatique* 42, 11–15, 2018.
18. Mouawad, Ray, “Les Juifs et le Temple dans des icônes melkites de Tripoli – Liban”, *Between the Cross*

*and the Crescent, Studies in Honor of Samir Khalil Samir s.j.* (ed. by Željko Paša), 157–173, 2018, Pontificio Istituto Orientale, Rome, Italy.

19. Mouawad, Ray, “Trois inscriptions de Wardié de Zakrit”, *Tempora USJ* 22, 167–172, 2018.
20. Mouawad, Ray, “La violence dans les icônes melkites de l’époque ottomane”, *Parole de l’Orient*, 1–14, 2018.

〔口頭発表等〕計 21 件

1. 吉村貴之「「祖国帰還」運動とシリア・レバノンのアルメニア人」, 第 5 回中東研究世界大会 (WOCMES), 2018.7.20, Sevilla, Spain.
2. 吉村貴之「ソヴィエト・アルメニア政府は、なぜ 1965 年にアルメニア人虐殺追悼集会を開催したか」, 第 2 回アルメニア学研究大会, 2018.9.28, Tabriz, Iran.
3. 吉村貴之「現代アルメニア系在外同胞と本国政治」, 日本国際政治学会 2018 年度研究大会, 2018.11.3, 大宮ソニックホール.
4. Kuroki, Hidemitsu, “Preamble”, Workshop “Syrian Civil War: Comparative Perspectives with Lebanese and Yugoslavian Civil Wars”, 2019.2.2, 明治大学和泉キャンパス.
5. Kuroki, Hidemitsu, “Historical Buildings and Community”, Symposium “The Silk Road Friendship Project: Saving Syrian Cultural Heritage for the Next Generation”, 2018.7.19. Damascus Museum, Damascus, Syria.
6. 黒木英充「シリア内戦と「対テロ戦争」」, 第 219 回広島大学平和センター研究会, 2018.11.22, 広島大学総合科学部.
7. 黒木英充「オスマン後期・騒乱頻発期のアレppoの都市構造と都市民」, 第 1 回合同研究会「都市アレppoの歴史と現在」, 2018.10.7, 東京大学本郷キャンパス.
8. 黒木英充「「対テロ戦争」とイスラーム」, 東京外国語大学夏期世界史セミナー・世界史の最前線, 2018.7.25, 東京外国語大学.
9. 黒木英充「コメント」, 2018 年度歴史学研究会大会全体会「戦争を検証する:「9.11 事件」の歴史化をめざして」, 2018.5.26, 早稲田大学.
10. 黒木英充「シリア内戦から見える世界」, 第 74 回「知の拠点セミナー」, 2018.5.18, 京都大学東京オフィス.
11. Takahashi, Hidemi, “Barhebraeus comme philosophe: « la philosophie de Barhebraeus » ou « les œuvres philosophiques de Barhebraeus »?”, 16e Table ronde internationale de la Société d’études syriaques, 2018.11.16, Institut protestant de théologie, Paris, France.
12. Takahashi, Hidemi, “Barhebraeus and the Church of the East”, Syriac Christianity at the Crossroads of Cultures: A Conference Commemorating the 700th Anniversary of ‘Abdīshō‘ of Nisibis, 2018.11.8, Pontificio Istituto Orientale, Rome, Italy.
13. Takahashi, Hidemi, “The Chinese Manichaean Prayer of St. George and Other Traces of the Descendants of Syriac Christians in China”, 9th World Syriac Conference, 2018.9.8, St. Ephrem Ecumenical Research Institute, Kottayam, India.
14. Takahashi, Hidemi, “Topics in Science in Syriac Transmission”, Workshop: Late Antique Science and Religion, 2018.5.6, Princeton University, Princeton, USA.

15. Wakamatsu, Hiroki, "Considering Syrian Refugee Problems in Turkey: Anthropological Approach on Case in Mersin", TARAS SHEVCHENKO II. International Congress on Social Sciences, 2019.2.2, Ankara, Turkey.
16. Wakamatsu, Hiroki, "Sosyal Antropoloji açısından Alevilik'te Evliyâ İnancı", Uluslararası Geçmişten Geleceğe Alevilik Sempozyumu, 2018.12.9, Ankara, Turkey.
17. Wakamatsu, Hiroki, "Indigenusness of Yörük: An Anthropological Analysis on Identity Seeking Process", 1. Uluslararası Akdeniz Sempozyumu, 2018.11.2, Mersin, Turkey.
18. Wakamatsu, Hiroki, "Anthropological Approach on Consanguineous Marriage in Alevi Communities of Rural Anatolia", 1st. International Congress on Sports, Anthropology, Nutrition, Anatomy and Radiology, 2018.5.4, Nevsehir, Turkey.
19. Kondo, Yohei, "Rashid b. 'Umayra al-Rastaqi and Medical Treatment in Sixteenth-Century Oman", The 9th Conference on Ibadi Studies: China and the World: Development and Cooperation from the Perspective of the Belt and Road Initiative. Diachronic and Cross-Border Transmission of Ibadi Knowledge, 2018.9.18, Beijing, PRC.
20. Slim, Souad, "The History and the Importance of the Russian Schools 1882-1916 in Palestin Syria and Lebanon", 2018.7.10, University of Balamand, Balamand, Lebanon.
21. Hourani, Guita, "Why Lebanon Disapprove of any Form of Syrian Refugees 'Asylum'?", Transitional Committee for the Rescue of the Lebanese Cultural Union WLCU, 2018.7.10, Lebanon.

[図書]計 2 件

1. Hourani, Guita, *Understanding Socioeconomic and Political Mobility of Naturalized Kurds in Lebanon*, 2018, Grin Verlag, Munich, Germany.
2. Hourani, Guita, *Post-War Return Migration to Lebanon: Reintegration and Development Challenges*, 2019, Lebanese University, Beirut, Lebanon.

[社会に向けた成果発表]計 4 件

1. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組・出演:有):黒木英充「視点・論点 シリア“化学兵器事件”と米英仏の攻撃」(NHK テレビ総合), 2018.4.26.
2. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組・出演:有):黒木英充「荻上チキ・Session-22 映画『判決、ふたつの希望』から知る中東レバノン～民族・宗教対立、そして、和解への希望」(TBS ラジオ), 2018.8.29.
3. 学外の社会活動(新聞・雑誌):黒木英充「考論 過激派早急に金銭得る必要?」(朝日新聞), 2018.10.25.
4. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組・出演:有):黒木英充「N スタ シリア安田純平氏解放をめぐる解説」(TBS テレビ), 2018.10.25.

## 近世南アジアの社会と文化:文学・宗教テキストの通言語的比較分析

研究期間: 2016-2018(代表: 太田信宏/所員 4、共同研究員 13)

所員: 太田信宏、高島淳、近藤信彰、小倉智史

共同研究員： 石田友梨、井田克征、小川道大、置田清和、小磯千尋、榊和良、長崎広子、二宮文子、橋本泰元、真下裕之、水野善文、三田昌彦、和田郁子

### 研究会等の内容

2018年度第1回研究会(2018年10月6日～7日、東京外国語大学本郷サテライト5階セミナールーム)  
10月6日

Noémie Verdon (Swiss National Science Foundation)

“Al-Bīrūnī’s Kitāb Pātānḡal and Kitāb Sānk: Methods and Strategies of Translation”

Satoshi Ogura (ILCAA)

“Revisiting Sanskrit Epic-Purāṇic Elements in Rashīd al-Dīn’s History of India”

Fabrizio Spezial (School for Advanced Studies in the Social Sciences, Center for South Asian Studies, Paris)

“Šihāb al-Dīn Nāḡawrī’s Šifā al-marāḡ: Reconsidering Greco-Arabic and Ayurvedic Theories of the Humours in 14th century India”

Kazuyo Sakaki (ILCAA Joint Researcher, Hokkaido Musashi Women’s College)

“Ways for liberation: The Early Textual Transmission of Indian Traditional Science in Persian Works”

Michio Yano (Kyoto Sangyo University)

General Comments

10月7日

三田昌彦(AA 研共同研究員、名古屋大学)

「15-17世紀ラージャスターンの銅板施与勅書の様式と語法: 中世初期からの転換」

長崎広子(AA 研共同研究員、名古屋大学)

「15-6世紀のヒンディー・バクティ文学の思想と時代」

2018年度第2回研究会(2019年3月9日～11日、AA 研大会議室(3月9日～10日)、東京外国語大学本郷サテライト8階会議室(3月11日))

3月9日

Conference: The Classification of Indic Knowledge at the Mughal Court: The Ā’īn-i Akbarī

Fabrizio Speciale (Ecole des hautes études en sciences sociales), Satoshi Ogura (ILCAA)

Introduction

Richard Maxwell Eaton (University of Arizona)

“The Ā’īn and Modernity: Should We Reconsider the Akbar-‘Alamgir Binary?”

Hiroyuki Mashita (ILCAA Joint Researcher, Kobe University)

“Contextualizing the So-called Ā’īn-i Akbarī in the Mughal Historiography”

Syed Najaf Haider (Jawaharlal Nehru University)

“Money and Monetary Economy in the Ā’īn-i Akbarī”

Eva Orthmann (Georg-August-Universität Göttingen)

“Statecraft and Kingship in the Ā’īn-i Akbarī”

Carl W. Ernst (University of North Carolina at Chapel Hill)

“Persianate Concepts of Religion in the Ā’īn-i Akbarī”

Kazuyo Sakaki (ILCAA Joint Researcher, Hokkaido Musashi Women’s College)

“The Doctrine of Karma in the Ā’in-i Akbarī”

Prashant Keshavmurthy (McGill University)

“Akhlaq and the Sequence of Topics in the Ā’in-i Akbarī”

3月10日

Conference: The Classification of Indic Knowledge at the Mughal Court: The Ā’in-i Akbarī

Chander Shekhar (University of Delhi)

“Indic Ornamental Flowers of Essence: Ā’in-i Akbarī A Guide Book of Continuity”

Sheikh Mohammad Razaullah Ansari (Aligarh Muslim University Emeritus Professor)

“An Analytical Presentation of Astrological-astronomical Knowledge of Abul Fazl 'Allāmī in his Ā’in-i Akbarī”

Nobuaki Kondo (ILCAA)

“Ā’in-i Akbarī as a Tazkira of Poets”

Haruo Inoue (Institute for Research in Humanities, Kyoto University)

“Descriptions of the Court Music in the Ā’in-i Akbarī in Terms of the Cultural Interaction between the Persia and the Indian Music”

Ayako Ninomiya (ILCAA Joint Researcher, Aoyama Gakuin University)

“Analyzing Intellectual Milieu of Ā’in-i Akbarī”

Maryam Moazzen (University of Louisville)

“Religious Absolutism and Religious Pluralism: Akbar’s Religious Experimentations in Safavid Sources”

Satoshi Ogura (ILCAA)

“The Ā’in-i Akbarī and Western Indology: With Special Reference to the Category of the Six Schools of Philosophy”

3月11日

水野善文(AA 研共同研究員、金沢大学)

「説話と説話集: Simhāsanadvatrimśikā (or Vikrama-carita) をめぐって」

小川道大(AA 研共同研究員、金沢大学)

「マラーター王国・同盟における公文書の様式とその変化」

和田郁子(AA 研共同研究員、岡山大学)

「近世南アジアの欧文史料と旅のテキスト」

## 研究成果一覧

[学術論文]計15件

1. 太田信宏「南インド宮廷文学にみるムスリム表象」, 『歴史評論』826, 43-55, 2019.2
2. Okita, Kiyokazu, “Ethics and Aesthetics in Early Modern South Asia: A Controversy surrounding the Bhāgavata Purāṇa Book X”, *International Journal of Hindu Studies*. 22 (-1), 25–43, 2018.4.
3. Okita, Kiyokazu, “Bitextuality in Bhāgavata Purāṇa X.29”, *The Journal of Indian and Buddhist Studies*. 67 (-3), 1043–1048, 2019.3. (査読有)
4. Ogura, Satoshi, “Turning Taraṅgiṇī into Tārīḥ: A Comparative Study on Jonarāja’s Rājatarāṅgiṇī and its Persian Translation Composed at the Court of Akbar”, *Sanskrit in Relation with Regional Languages and literatures: Select Papers from the Panel on Sanskrit in Relation with Regional Languages and*

*Literatures at the 16th World Sanskrit Conference (28 June - 2 July 2015) Bangkok, Thailand, Delhi: DK Publishers Distributors, 59–72, 2018.11.*

5. Ogura, Satoshi, “Persian Historiography of Kashmir during the Ġahāngīr Period I: The Intihāb-i Tārīḥ-i Kašmīr”, 『アジア・アフリカ言語文化研究』 86, 145–293, 2018.9.
6. 小倉智史「まだ見ぬ等価を求めて:ムハンマド・シャーハーバーディーの翻訳ストラテジー」, 『イスラム世界』88, 29–60, 2018.11.
7. 小倉智史「カシミール史料におけるミールザー・ハイダル」, 『西南アジア研究』88, 20–49, 2018.9.(査読有)
8. 小倉智史「14世紀イランに伝えられたインドの歴史」, 『歴史評論』826, 56–68, 2019.2.1.
9. Ogura, Satoshi, “The Limits of the Oneness of Existence as a Medium in Translating Indic Deities’ Names: The Case of Muḥammad Šāhābādī’s Persian Translation of the Rājatarāngiṇīs”, *Islamic and Sufi Studies in Academia: Rethinking Methodologies: Kyoto Kenan Rifai Sufi Studies Series 3*, 189–202, 2019.3.
10. 小磯千尋「インドのガネーシャ祭礼の歴史にみる祭りの力:公共祭礼がもたらした可能性について」, 『祭りから読み解く世界』(山田 孝子, 小西 賢吾編), 83–96, 2018.6, 英明企画.
11. 近藤信彰「アジアにおける『ハムザ物語』:イスラーム、ペルシア語、フロンティア」, 『歴史評論』826, 8–16, 2019.2.
12. 高島淳「南インドにおける終焉期の仏教:野外石仏調査報告を中心に」, 『宗教研究』92, 219–220, 2019.3.
13. 長崎広子「太鼓と女は叩くべし:『ラームチャリットマーナス』の女性観」, 『印度民俗研究』18, 49–59, 2019.3.
14. 真下裕之監修(二宮文子, 真下裕之, 和田郁子訳)「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』訳注(7)」, 『紀要』(神戸大学文学部)46, 27–61, 2019.
15. 水野善文「インドの響きを読み解く試み:音と情操」, 『総合文化研究』22, 73–85, 2019.2.

[口頭発表等]計 26 件

1. 石田友梨「イスラーム神秘主義をめぐる文献と疑義と人文情報学」, 大阪経済法科大学経法学会教養部会 2018 年度第 2 回定例研究会, 2018.7.18, 大阪経済法科大学.
2. 井田克征「出家の理由:マハーラーシュトラのバクティ教団の今と昔」, 2018 年度 MINDAS 合同研究会「南アジアにおける社会的レジリエンス」, 2018.6.30, 国立民族学博物館.
3. 井田克征「石と唾:マラーティー・バクティズムにおけるフェティッシュな儀礼について」, 第 51 回南アジア研究集会, 2018.8.5, 山喜温泉.
4. Ida, Katsuyuki, “Sannyasis and the Village Community According to the Early Mahanubhav Scriptures”, 日本南アジア学会第 31 回全国大会, 2018.9.29, 金沢歌劇座.
5. 井田克征「神々は聖地をめぐる」, 2018 年度マハーラーシュトラ研究会例会・共催 2018 年度 RINDAS 第 4 回研究会, 2019.3.23, 東京外国語大学本郷サテライト.
6. 太田信宏「喜びと悲しみの王国:マイスール藩王国の伝統的カンナダ語詩文学にみる感情を巡る言説」, 2018 年度第 1 回 FINDAS 研究会「情動・感情の歴史的考察」, 2018.6.30, 東京外国語大学本郷サテライト.

7. 太田信宏「マイルール藩王国の「伝統的」カンナダ語詩文学にみる王の表象」, 日本南アジア学会第 31 回全国大会, 2018.9.29, 金沢歌劇座.
8. Ogawa, Michihiro, “Reconsidering the Village Community in the 18-19th Century Western India”, 日本南アジア学会第 31 回全国大会, 2018.9.29, 金沢歌劇座.
9. Okita, Kiyokazu, “Bitextuality in Bhāgavata Purāṇa X.29”, The 69th Annual Conference of the Japanese Association of Indian and Buddhist Studies, 2018.9.1, 東京大学.
10. Okita, Kiyokazu, “Rejecting Absolute Monism: The Commentaries of Madhva and Vijayadhvaṅga on Bhāgavatapurāṇa 1.1.1”, The 17th World Sanskrit Conference, 2018.7.11, University of British Columbia, Vancouver, Canada.
11. Ogura, Satoshi, “Additional Annotations on Indic/Kashmiri Non-Muslim Cultures, Traditions, and Knowledge in the Persian Translation of the Rājatarāṅgiṅīś”, The 17th World Sanskrit Conference, 2018.7.12, University of British Columbia, Vancouver, Canada.
12. 小倉智史「近代以前の「ヒンドゥー」をめぐる自己・他者認識」, 日本南アジア学会 30 周年記念シンポジウム第 6 回「ヒンドゥイズム再考:時代を超えた変動とその余白」, 2018.9.30, 金沢歌劇座.
13. 小倉智史「デリー・サルタナト期パンジャーブ北部の土着集団について」, 平成 30 年度東洋史研究会大会, 2018.11.4, 京都大学文学研究科.
14. Ogura, Satoshi, “Between Story and History: Various Attitudes toward Kashmir’s Pre-Islamic Past by Historians of the Mughal Period”, International Conference on Persianate Literature in India and Anatolia, 2019.2.25, Academy of Persian Language and Literature, Tehran, Iran.
15. Sakaki, Kazuyo, “Native Translators and Vernacular Readers: Situating Persian in Vernacular Culture”, Workshop on the Translation in Early Modern South Asia, 2018.5.4, Yale University, New Haven, USA.
16. Sakaki, Kazuyo, “Philosophical Dialogue through translation: Brahmavidyā in Islamic Terminology”, The 17th World Sanskrit Conference, 2018.7.12, University of British Columbia, Vancouver, Canada.
17. 榊和良「スーフィーの読み解く「ラヴァナ王物語」」, 日本南アジア学会第 31 回全国大会, 2018.9.29, 金沢歌劇座.
18. 高島淳「南インドにおける終焉期の仏教:野外石仏調査報告を中心に」, 日本宗教学会第 77 回学術大会, 2018.9.8, 大谷大学.
19. 高島淳「ヒンドゥー教とは?」, 日本南アジア学会 30 周年記念シンポジウム第 6 回「ヒンドゥイズム再考:時代を超えた変動とその余白」, 2018.9.30, 金沢歌劇座.
20. Nagasaki, Hiroko, “The Rhythm of Early Hindi Poetry as Reflected in the Piṅgala Literature”, 13th International Conference on Early Modern Literatures in North India, 2018.7.18, University of Warsaw, Warsaw, Poland.
21. Nagasaki, Hiroko, “Braj bhasha: Language and Literature”, Seminar on “The Dialects and Literature of Hindi”, 2018.12.16, 大阪大学中之島センター.
22. Nagasaki, Hiroko, “The Historical Development of Hindi Metrical Rhythm”, Talk, 2019.2.19, The University of Chicago, Center in Delhi, New Delhi, India.
23. 三田昌彦「ラージプートの歴史叙述とムスリム支配:多元的文化世界における正統性の模索」, 日本南アジア学会 30 周年記念シンポジウム第 2 回「インド政治の過去と現在:支配の正統性をめぐって」, 2018.5.19, 東京大学駒場キャンパス.

24. 三田昌彦「最近の高校教科書および大学入試の世界史・日本史用語精選の動きについて」, 名古屋歴史科学研究会・愛知県歴史教育者協議会合同例会, 2018.8.29, 名古屋大学.
25. 三田昌彦「アジア古代の歴史地理について」, 2018 年度 KINDAS 研究グループ 1-A「南アジアの長期発展径路」第 1 回研究会, 2019.2.10, 京都大学本部構内.
26. 和田郁子「近世コロマンデル海岸の港町:海上交易と内陸社会」, 第 20 回洛北史学会大会, 2018.6.2, 京都府立大学.

[図書]計 1 件

1. 小川道大『帝国後のインド:近世的展開のなかの植民地化』, 名古屋大学出版会, 2019.

[社会に向けた成果発表]計 3 件

1. 太田信宏, 小倉智史, 三田昌彦(伊豆原月絵他と共著)『時空をこえる本の旅 21 マハトマ・ガンディー 一生誕 150 周年記念 インドの叡智展』, 東洋文庫, 2019.1.
2. 真下裕之「建築物に込められたさまざまな物語の意味をたどってみよう:タージ・マハルの歴史と物語」, 『歴史の見方・考え方:大学で学ぶ「考える歴史」』, 山川出版社, 118-131, 2018.6.
3. 水野善文「通説の裏側:文献を読み解く醍醐味」, 『佛教学セミナー』107, 21-41, 2018.6.

[その他]計 3 件

1. 石田友梨(澤井真との共著)「近代イスラームにおける知の再編成に関する研究:神秘思想を中心に」, 『東アジア研究』69. (URL: [http://www.keiho-u.ac.jp/research/asia/bulletin/pdf/asia\\_69\\_p0.pdf](http://www.keiho-u.ac.jp/research/asia/bulletin/pdf/asia_69_p0.pdf))
2. Takashima, Jun, “「Japanese-Malayalam Dictionary」”, 電子辞書プロジェクトにおいて構築した日本語マラヤーラム語電子辞書を書籍の形態としてインドのケーララ州言語研究所から出版した.
3. 長崎広子「Resources on Hindi and other Indian Languages」, ヒンディー, サンスクリット, ベンガル, ウルドゥー, ペルシヤ語の電子テキストの公開. (URL: <http://hin.minoh.osaka-u.ac.jp/>)

## アフリカ農業・農村社会史の再構築:在来農業革命の視点から

研究期間: 2016-2018 (代表: 鶴田格/所員 2、共同研究員 17)

所員: 石川博樹、深澤秀夫

共同研究員: 安溪貴子、池上甲一、石山俊、大山修一、小松かおり、坂梨健太、佐藤千鶴子、佐藤靖明、末原達郎、杉村和彦、杉山祐子、田中利和、藤岡悠一郎、藤本武、松田正彦、村尾るみこ

### 研究会等の内容

2018 年度第 1 回研究会(2018 年 6 月 30 日~7 月 1 日、東京外国語大学本郷サテライト 5 階セミナールーム)

6 月 30 日

足達太郎(東京農業大学)

「昆虫学者からみたアフリカ農業」

石山俊(AA 研共同研究員、国立民族学博物館)

「サハラ南縁の農業、サハラ・オアシスの農業:サーヘル・スーダン農耕文化とサハラ・オアシス農耕文化の現代的様相」

7月1日

小松かおり(AA 研共同研究員、北海学園大学)

「インターナル・フロンティアの農文化」

出版構想に関する検討(全員)

2018年度第2回研究会(2018年12月15日~16日、大阪産業大学)

12月15日

伊藤紀子(農林水産省農林水産政策研究所)

「東南アジアにおける商業的農業開発と農村の慣行・社会関係の変容:ケニアの国家灌漑事業区との比較」

池上甲一(AA 研共同研究員、近畿大学)

「個別農業技術論から農法論へ その1:農業技術の変遷と農法論の必要性に向けて」

12月16日

安溪貴子(AA 研共同研究員、山口大学)

「料理が語るアフリカの歴史」

村尾るみこ(AA 研共同研究員、立教大学)

「強制移住がもたらす技術の変化と<革命>:アンゴラとザンビアの国境地帯の事例」

2018年度第3回研究会(2019年3月2日~3日、東京外国語大学本郷サテライト5階セミナールーム)

3月2日

原子壮太(日本森林技術協会)

「多様性を担うもの:タンザニア・ルフィジ河上流域のベナの稲作」

石川博樹(AA 研)

「文字記録に見るエチオピア諸王国の農業:アクスム王国とソロモン朝エチオピア王国の比較を中心に」

3月3日

佐藤靖明(AA 研共同研究員、大阪産業大学)

「ウガンダにおけるバナナを基盤とする農耕社会の現状と課題」

将来の出版構想について(全員)

## 研究成果一覧

[学術論文]計28件

1. Tsuruta, Tadasu, “The Impasse of Contemporary Agro-pastoralism in Central Tanzania: Environmental Pressures in the Face of Land Scarcity and Commercial Agricultural Investment”, *The Environmental Crunch in Africa: Growth Narratives vs. Local Realities* (ed. by J. Abbink), 207–240, 2018.5, Palgrave Macmillan, London, UK.
2. 杉村和彦「第3章 コンゴ川世界」, 『改訂新版 新書アフリカ史』(宮本正興, 松田素二 編), 80-111, 2018.11, 講談社.

3. 石山俊「石油経済下 50 年間のサウジアラビア農業動態」, 『アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明』7, 55–69, 2019.3. (査読有)
4. Matsuda, Masahiko, “Cheroots in Myanmar: Rural Development behind the Government Policy”, *Japan-ASEAN Transdisciplinary Studies Working Paper 4*, 1–10, 2019 .1.
5. 池上甲一「SDGs 時代におけるサステナビリティと日本農業: 農業・農村のサステナビリティ科学に向けて」, 『村落社会研究ジャーナル』25 (1), 17–34, 2018.10.
6. 池上甲一「農業における知的財産権をめぐる世界的動向と日本農業にとっての課題」, 『農業と経済』84 (11), 6–20, 2018.11.
7. 池上甲一「ICT・AI 技術は農法たりえているか: 農業技術と農法論の視点から」, 『農業と経済』85 (3), 72–86, 2019.3.
8. 池上甲一「書評: 西川芳昭著『種子が消えればあなたも消える』」, 『国際開発研究』27 (1), 125–129, 2018.6.
9. 池上甲一「書評: 秋津元輝, 佐藤洋一郎, 竹之内裕文編著『農と食の新しい倫理』」, 『農林業問題研究』55 (1), 71–72, 2019.3.
10. 安溪遊地, 安溪貴子「國分直一先生の足跡を追って(1) 高雄の幼年時代の家」, 『榕樹文化』63, 21–26, 2019.3.
11. 杉山祐子「焼畑農耕民の「考えかた」: もめごとを祖霊の世界に托して」, 『遊牧の思想: 人類学がみる激動のアフリカ』(太田至, 曾我亨編), 117–139, 2019.3, 昭和堂.
12. Sugiyama, Yuko, “Ancestral Spirits, Witchcraft and Phases of the Other in Everyday Life: The Case of the Agricultural Bemba People of Zambia”, *Others: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kaori Kawai), 245–271, 2019.2, Kyoto University Press, Kyoto, Japan. (査読有)
13. 白石壮一郎, 杉山祐子, 近藤史「人類学の挑戦」, 『ポスト地方創生: 大学と地域が組んでどこまでできるか』(平井太郎編), 124–160, 2019.3, 弘前大学出版会. (査読有)
14. 坂梨健太「食料安全保障」, 『アフリカ安全保障論入門』(落合雄彦編), 267–279, 2019.3, 晃洋書房. (査読有)
15. Oyama, Shuichi, “Reverse Thinking and “African Potentials” to Combat Desertification in the West African Sahel: Applying Local Greening Techniques Born from Drought and Famine in the 1970s”, *African Study Monographs 57*, 95–120, 2018.6. (査読有)
16. 大山修一「西アフリカ・サヘルにおける自然の摂理: 緑化を目的とした都市ゴミと家畜の利用、樹木伐採」, 『ビオストーリー』30, 67–71, 2018.11. (査読有)
17. 大山修一「農耕文化圏と熱帯各地の農業: アフリカ」, 『熱帯農学概論』(江原宏, 樋口浩和編), 75–82, 2019.2, 培風館.
18. 大山修一「エチオピア高地のどこに文明が開化したのか?: 盆地のもつ場所の力学」, 『熱帯高地の世界: 高地文明の発見に向けて』(山本紀夫編), 287–332, 2019.3, ナカニシヤ出版.
19. 大山修一「アフリカの資源と経済活動: 将来性ある巨大市場の光と陰」, 『地図情報』148, 24–29, 2019.2. (査読有)
20. Fujioka, Yuuichiro, Yoshinori Watanabe, Hiroki Mizuochi, Fisseha Itanna, Shou Ruben, Morio Iijim., “Classification of Small Seasonal Ponds Based on Soil-Water Environments in the Cuvelai Seasonal Wetland System, North-Central Namibia”, *Wetlands 38*(5), 1045–1057, 2018 .9. (査読有)

21. 藤岡悠一郎「第 2 章 アフリカ昆虫学とエスノサイエンス」, 『アフリカ昆虫学: 生物多様性とエスノサイエンス』(田付貞洋, 佐藤宏明, 足達太郎編), 21-33, 2019.3, 海游舎.
22. 藤岡悠一郎「第 4 章 ナミビア農牧社会における昆虫食をめぐるエスノサイエンス」, 『アフリカ昆虫学: 生物多様性とエスノサイエンス』(田付貞洋, 佐藤宏明, 足達太郎編), 52-69, 2019.3, 海游舎.
23. 藤岡悠一郎「コラム 2 南部アフリカのモバネワーム」, 『アフリカ昆虫学: 生物多様性とエスノサイエンス』(田付貞洋, 佐藤宏明, 足達太郎編), 69-70, 2019.3, 海游舎.
24. Sato, Chizuko, “Opportunities and Constraints for Black Farming in a Former South African Homeland: A Case Study of the Mooi River Irrigation Scheme, Msinga, KwaZulu-Natal, South Africa”, *Land, Agriculture, and Unfinished Decolonization in Africa: Essays in Honour of Sam Moyo, African Studies Monographs, Supplementary Issue 57*, 147-174, 2018.6. (査読有)
25. Sato, Chizuko, “Land Tenure Reform in South Africa: Traditional Leadership, CLaRA, and ‘Living’ Customary Law”, *ASC-TUFS Working Papers 2018 “Development, Migration and Resources in Africa”*, 103-121, 2019.3.
26. Sato, Yasuaki, Kaori Komatsu, Koichi Kitanishi, Kagari Shikata = Yasuoka, and Shingo Odani, “Banana Farming, Cultivars, Uses, and Marketing of Nkore in Southwestern Uganda”, *Tropical Agriculture and Development Mar-62*, 141-149, 2018.9. (査読有)
27. 藤本武「エチオピアにおける有毒イモ利用の諸相: テンナンショウ類を中心に」, 『とやま民俗』90, 1-8, 2018.
28. 藤本武「テフとインジェラ: エチオピアにおける食と農の展開に関する事例分析」, 『農業史研究』53, 27-38, 2019.3. (査読有)

[口頭発表等]計 52 件

1. 松田正彦「ミャンマー半乾燥地域における天水畑作システムの動態」, 日本熱帯農業学会第 125 回講演会, 2019.3.17, 千葉大学.
2. 松田正彦「東南アジアの在来農業と近代技術と「在地の技術」」, 日本熱帯農業学会第 124 回講演会・シンポジウム, 2018.9.29, 京都大学.
3. Ikegami, Koichi, “Towards Sustainability Science of Agriculture and Rural Community in the Era of SDGs”, ASEAN Way Forward for SDGs and COP21 through Social and Sustainability Sciences (Phase 2), 2018.8.20, Berkeley Hotel, Bangkok, Thailand.
4. Ikegami, Koichi, “Building Sustainable Agri-Food Systems under the Divided World”, The Sixth International Conference of Asian Rural Sociology Association, 2018.8.27, Swiss-bel Hotel, Makassar, Indonesia.
5. Ikegami, Koichi, “Transformation of Agriculture to New Forms”, Agricultural Socioeconomic Department, Faculty of Agriculture, Andalas University, 2018.9.3, Andalas University, Padang, Indonesia.
6. Ikegami, Koichi, “Agri-Food System Era 4.0: Dream and Reality of Current Digital Agri-Food System”, Agrifood System International Conference (ASIC) 2018, 2018.9.4, Kyriad Hotel Bumi Minang, Padang, Indonesia.
7. Ikegami, Koichi, “Introductory Remarks for Round Table on Food, Agriculture and Power in the 21st Century: Challenges and Futures of Critical Agrarian and Peasant Studies”, 29th Annual Conference of

- Japan Society for International Development, 2018.11.24, Tsukuba University, Tsukuba, Japan.
8. 池上甲一「事業マネジメントおよびサプライチェーンマネジメントにおける品質評価:環境品質と倫理品質」, Special Lecture on Global food & Agricultural Futures, 2018.11.24, アジア経済研究所.
  9. 杉山祐子「農村における小規模な現金獲得活動の現代的諸相」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.26, 北海道大学.
  10. 大山修一「ザンビア北部ベンバ社会の慣習地におけるチーフ主導の土地登記」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.27, 北海道大学.
  11. 大山修一, 桐越仁美, 原将也, 堀光順, 青池歌子, イブラヒム マンマン「西アフリカ・サヘル地域における都市ゴミを活用した緑化実験と9年間にわたる植物種の構成変化」, 第28回日本熱帯生態学会年次大会, 2018.6.9, 静岡大学.
  12. Oyama, Shuichi, “Reverse Thinking for Tackling Desertification in the Sahel of West Africa: The Different View between Local Residents and Foreigners”, Kyoto University-EHESS International Symposium “Contribution of Area Studies to Global Challenges in Africa”, 2018.12.4, INALCO (Institut National des Langues et Civilisations Orientales), Paris, France.
  13. 大山修一「アンデス山脈のジャガイモ」, 阪神シニアカレッジ 国際理解学科 4 年生(午前), 2018.6.26, 阪神シニアカレッジ尼崎学習室.
  14. 大山修一「アンデス山脈のジャガイモ」, 阪神シニアカレッジ 国際理解学科 3 年生(午後), 2018.6.26, 阪神シニアカレッジ尼崎学習室.
  15. 大山修一「アンデス山脈のジャガイモ」, 阪神シニアカレッジ 国際理解学科 2 年生(午前), 2018.6.29, 阪神シニアカレッジ尼崎学習室.
  16. 大山修一「アフリカにおける砂漠化の問題とその対処法」, 阪神シニアカレッジ 国際理解学科 1 年生(午後), 2018.6.29, 阪神シニアカレッジ尼崎学習室.
  17. 大山修一「平和と暴力:アフリカでの経験をとおして」, 差別をなくす町民集会, 2018.7.10, 奈良県斑鳩町中央公民館.
  18. 大山修一「ゴミを使う:アフリカの砂漠化と緑地化」, ゴールデン・エイジ・アカデミー『たのしく歩もう 特別企画<環境問題を考える>』(第1712回), 2018.7.20, 京都市生涯学習総合センター.
  19. 大山修一「ニジェールの最新情報とゴミをまく! ?新しい緑化について」, ニジェール Day(一般社団法人 コモン・ニジェール), 2018.10.7, カフェ テネレの木.
  20. 大山修一「都市のゴミと家畜で森をつくる:西アフリカ・サヘルにおける住民生活に根ざした緑化と紛争予防」, 「アフリカへ行こう2018」アフリカ地域研究専攻第2回オープンキャンパス, 2018.7.21, 京都大学稲盛記念館.
  21. 大山修一「2種類の砂漠緑化:東アフリカ・ジブチ報告」, 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ専攻水曜ゼミ, 2018.10.24, 京都大学稲盛記念館.
  22. 大山修一「京都大学における研究活動:アフリカ研究者の取り組み」, 大阪星光学院 京都大学オープンキャンパス, 2018.11.10, 京都大学農学部.
  23. 大山修一「ゴミで地球を救う! 砂漠を緑に変える日本人」, 『世界一受けたい授業』(日本テレビ系列), 2018.6.16. (スタジオ出演)
  24. 大山修一「アフリカ・砂漠の緑化活動:都市ゴミと家畜を使って」, 探検! 京都大学/京大先生シアター. YouTube: <https://www.youtube.com/watch?v=p11ImHj8RRE>

25. 大山修一「ビクーニャ」(写真展示), 京都市動物公園展示企画『この世は不思議!』Conserv'Session, 2019.3.19-4.14, 京都市動物公園.
26. 藤岡悠一郎「南アフリカにおけるマルルーラの商品化と資源利用」, 日本アフリカ学会第55回学術大会, 2018.5.26, 北海道大学.
27. Fujioka, Yuuichiro, “Formation of Anthropogenic Biomes and Sociocultural Changes”, JGFoS (14th Japanese-German Frontier of Science Symposium, JSPS), 2018.9.7, Kyoto Brighton Hotel, Kyoto, Japan.
28. Fujioka, Yuuichiro, and Gen Shoji, “Responses to Food Shortage & Resilience after Flood & Drought Disasters in Agro-Pastoral Society of North-central Namibia”, WSSF (World Social Science Forum), 2018.9.27, Fukuoka International Congress Center, Fukuoka, Japan.
29. 佐藤千鶴子「南アフリカへのコンゴ人の混在移動:複合的な移動目的と移動経路」, 日本アフリカ学会第55回大会, 2018.5.26, 北海道大学.
30. Chizuko Sato, “Land Tenure Reform in South Africa: Traditional Leadership, CLaRA, and ‘Living’ Customary Law”, Africa-Asia: a New Axis of Knowledge Conference (Second Edition), 2018.9.20, University of Dar es Salaam, Dar es Salaam, Tanzania.
31. Yasuaki Sato, Kaori Komatsu, Shingo Odani, Kagari Shikata = Yasuoka, and Koichi Kitanishi, “Comparative Study on the Banana-Farming Complex in Uganda and Papua New Guinea”, 16th Congress of the International Society of Ethnobiology, 2018.8.8, Hangar Convention Center, Belém, Brazil.
32. 佐藤靖明「東アフリカ大湖地方の食と農:ウガンダにおけるバナナの過去と現在」, 第27回日本ナイル・エチオピア学会学術大会公開シンポジウム『食と農が支えたナイル・エチオピア地域の歴史と文化』, 2018.4.21, 東京外国語大学.
33. 田中利和「Ethio-Tabi の創造に関する実践的地域研究②:ウォリソにおける地下足袋製作に関する課題」, 第27回日本ナイル・エチオピア学会, 2018.4.22, 東京外国語大学.
34. 八下田佳恵, 田中利和, 菅野均志「共によい土にする:エチオピア中央高原ウォリソにおける有畜農耕民の民族土壌学的研究」, 第27回日本ナイル・エチオピア学会, 2018.4.23, 東京外国語大学.
35. 田中利和「越境する地下足袋:フィールドワーカーとアフリカによる新たな履物文化協創の試み」, NIHU UBRJ Seminar, 2018.4.27, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター.
36. 田中利和「地下足袋をともにつくる:エチオピアにおける新たな労働履物文化の創造に関する実践的地域研究」, 第55回日本アフリカ学会, 2018.5.26, 北海道大学.
37. 藤岡悠一郎, 田中利和, 高倉浩樹, Vanda Ignatyeva, 「サハ共和国チュラブチャにおける環境変化に関する住民の認識」, 第4回日本シベリア学会, 2018.6.17, 三重大学.
38. 田中利和「現代エチオピアにおける牛耕の農耕文化複合」, 日本文化人類学会東北地区研究懇話会, 2018.6.29, 東北大学.
39. 田中利和「エチオピアでの地下足袋プロジェクト:農村でのアントレプレナーシップを目指して」, ジェトロ・アジア経済研究所夏期公開講座コース3「エチオピアの社会を知る:急激な経済成長のなかで変わる社会」, 2018.8.1, ジェトロ本部.
40. 藤本武「エチオピアの食と農:ユニークな作物とその発酵食を中心に」, 第27回日本ナイル・エチオピア学会学術大会公開シンポジウム「食と農が支えたナイル・エチオピア地域の歴史と文化」, 2018.4.21, 東京外国語大学.

41. 藤本武「エチオピア西南部の山地農耕民マロにおけるヤムイモの栽培利用:ギニアヤムを中心に」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.27, 北海道大学.
42. Fujimoto, Takeshi, “Diversity, Cultivation and Utilization of Yams (*Dioscorea* spp.) among the Malo Mountain Farmers in Southwestern Ethiopia”, 16th Congress of International Society of Ethnobiology, 2018.8.9, Hangar Convention Center, Belém, Brazil.
43. Fujimoto, Takeshi, “Why is Teff Uniquely Important in Ethiopia? A Consideration from a Southwestern Society”, International Workshop on “Millets and Maize: Dynamics around Ethiopia’s Competing Grains”, 2018.9.30, AtseYohannes Hotel, Mekelle, Ethiopia.
44. Fujimoto, Takeshi, “People-Made Landscapes of Cropping, Managed Fertility, and Cosmology: The Case of Malo Farmers in Southwest Ethiopia”, 20th International Conference of Ethiopian Studies, 2018.10.5, Mekelle University, Mekelle, Ethiopia.
45. 石山俊, 宮寄英寿, 安田裕「ミャンマー中央乾燥地における生計向上と村落開発の研究」, 日本沙漠学会第 29 回学術大会, 2018.5.26, 石巻専修大学.
46. 石山俊, 宮寄英寿, 安田裕「ミャンマー中央乾燥地における生計向上と村落開発の研究」, 鳥取大学乾燥地研究所共同研究発表会, 2018.12.1, 鳥取大学.
47. 石山俊「サハラ・オアシスの文化:灌漑とナツメヤシ」, 2018 年度日本沙漠学会乾燥地農学分科会講演会, 2018.12.3, 東京大学.
48. 石山俊「オアシス農耕の現在:食への農学的アプローチ」, 2018 年度人間文化研究機構 現代中東地域研究 国立民族学博物館拠点・秋田大学拠点シンポジウム, 2019.2.22, 国立民族学博物館.
49. 深澤秀夫「ことばを通して知るマダガスカルの人びとの生活と文化」, 在マダガスカル・邦人会文化講演会, 2018.9.29, 在マダガスカル・日本大使館.
50. 深澤秀夫「明治時代のマダガスカルを画像に読み解く」, 在マダガスカル・邦人会文化講演会, 2019.2.23, 在マダガスカル・日本大使館.
51. Murao, Rumiko, “Reconstruction of Local Livelihood and Development in Post-conflict Society: Stability, Fluidity, and Mobility in Eastern Angola”, Panel entitled Rethinking Development in Angola’s Rural Localities”, Fifth Conference of the Association for African Studies in Italy, 2018.9.6, University of Bologna, Bologna, Italy.
52. 村尾るみこ「「帰還」と「庇護国での定住」の境界」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会フォーラム「なゼルワンダ難民は帰還を拒むのか」, 2018.5.26, 北海道大学.

〔図書〕計 1 件

1. 杉村和彦, 石原一成, 塚本利明『三世代近居の健康長寿学:福井・北陸・日本・世界』, 2019.3, 晃洋書房.

〔社会に向けた成果発表〕計 22 件

1. 池上甲一「灌漑農業の歴史と発展」, 『国際開発学辞典』(国際開発学会編), 128–129. 2018.12, 丸善出版.
2. 池上甲一「農を通じた持続可能な社会構築への貢献」, 『地域農業と農協』48 (3), 28–32, 2018.11.

3. 安溪貴子「リオハワインの故郷を訪ねて」, 『地中海食と和食の出会い:バスク人サビエルと大内氏の遺産を生かして』(安溪遊池監修), 172-178, 2019.3, 南方新社.
4. 安溪貴子, 安溪遊地「バスクのおもてなし:泊まり歩いてみた農家民宿の魅力」, 『地中海食と和食の出会い:バスク人サビエルと大内氏の遺産を生かして』(安溪遊池監修), 155-171, 2019.3, 南方新社.
5. 安溪遊地, 安溪貴子「サビエルの心をわが心として:ナバラ自治州の持続可能な暮らしへの挑戦」, 『地中海食と和食の出会い:バスク人サビエルと大内氏の遺産を生かして』(安溪遊池監修), 105-154, 2019.3, 南方新社.
6. 杉山祐子「鋸と鋏とりんご栽培」, 『大学的青森ガイド』(弘前大学人文社会科学部編), 188-207, 2019.3, 昭和堂.
7. 杉山祐子「書評:佐藤奈穂『カンボジア農村に暮らすメマーイ:貧困に陥らない社会の仕組み』」, 『アジア経済』59 (3), 58-63, 2018.9.
8. 石川博樹「史跡を巡り、ごちそうに出会う」, 『FIELDPLUS』21, 18-19, 2019.1.
9. 大山修一「ニジェールでゴミを集める日本人:政治化するニアメ市のゴミ問題」, 『JICA ニジェール支所便り』2018年4月号, 6-11, 2018.4.  
(URL: <https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/ku57pq000020tcwd-att/201804.pdf>)
10. 大山修一「ニジェールでゴミを集める日本人:都市のごみに含まれる大量の砂の正体」, 『JICA ニジェール支所便り』2018年6月号, 7-10, 2018.6.  
(URL: <https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/ku57pq000020tcwd-att/201806.pdf>)
11. 大山修一「ニジェールでゴミを集める日本人:国際ニュースの背後で起きていること」, 『JICA ニジェール支所便り』2018年7月号, 5-8, 2018.7.  
(URL: <https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/ku57pq000020tcwd-att/201807.pdf>)
12. 大山修一「ニジェールでゴミを集める日本人:ボコハラム掃討作戦」, 『JICA ニジェール支所便り』2019年2月号, 7-9, 2019.2.  
(URL: <https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/ku57pq000020tcwd-att/201902.pdf>)
13. 大山修一「ニジェールでゴミを集める日本人:2019年、ニジェール情勢をどう見るか」, 『JICA ニジェール支所便り』2019年3月号, 6-8, 2019.3.  
(URL: <https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/ku57pq000020tcwd-att/201903.pdf>)
14. 大山修一「家庭ごみを使って砂漠化した荒廃地の緑化にいとむ!」, 『図説地理資料 世界の諸地域 NOW2019』(高校 地理 資料集), 105, 2019.3, 帝国書院.
15. 大山修一「焼畑でのひえの収穫(ザンビア)」, 『新詳地理資料 COMPLETE2019』(高校 地理 資料集), 111, 2019.3, 帝国書院.
16. 大山修一「環境問題 サヘルの砂漠化 砂漠化が進み地面がひび割れたようす」, 『図説地理資料 世界の諸地域 NOW2019』(高校 地理 資料集), 101, 2019.3, 帝国書院.
17. 田中利和「エチオピアの牛耕」, 『ビオストーリー』30, 74-75, 2018.12.
18. 八下田佳恵, 田中利和, 菅野均志「よい土とは何か?:エチオピア中央高原における有畜農耕の有機物移動に着目して」, 『生態人類学会ニュースレター』24, 38-41, 2018.12.
19. 田中利和「耕牛皮で農民の足を護る:エチオピアにおける地下足袋の協創に関する実践的研究」, 『生態人類学会ニュースレター』24, 121-125, 2018.12.

20. 田中利和「書評:高倉浩樹編『寒冷アジアの文化生態史(シリーズ 東北アジアの社会と環境)』,『アジア・アフリカ地域研究』18 (2), 197–200, 2019.3.
21. 藤本武「富山の祭り:地域の人に愛され、地域の人々が主役の祭り」,『トムズプレス』46, 6–7, 2018.10.  
(URL: <https://www.u-toyama.ac.jp/outline/toms-press/index.html>)
22. 石山俊「オアシスからの便り:サウジアラビア、ワーディ・ファーティマ」,『フィールドで出会う風と人と土4』(田中樹, 宮寄英寿, 石本雄大編), 84–91, 2019.3, 総合地球環境学研究所.

## エチオピア・ジンマ王国伝来イスラーム祈禱集研究

研究期間: 2017–2018 (代表: 石川博樹/所員 2、共同研究員 6)

所員: 石川博樹、荻谷康太

共同研究員: 新谷崇、石原美奈子、馬場多聞、松波康男、吉田早悠里、若狭基道

### 研究会等の内容

2018年度第1回研究会(2018年12月1日、東京外国語大学本郷サテライト7階セミナールーム)

吉田早悠里(AA研共同研究員、南山大学)

「F. J. ビーバー資料群の公開にむけたアーカイブ研究」

成果出版に関する討議(全員)

2018年度第2回研究(2019年3月3日、東京外国語大学本郷サテライト5階セミナールーム)

成果公開に関する討議(全員)

### 研究成果一覧

[学術論文]計4件

1. Baba, Tamon, “Notes on Migration between Yemen and Northeast Africa during the 13-15th Centuries”, *Chroniques du manuscrit au Yémen, Numéro spécial*. 1, 69–86, 2018. (査読有)
2. Ishihara, Minako, “A Muslim Holywoman in a Christian Empire: Textual Analysis of the Hagiography of Sitti Mumina”, *Sophia Journal of Asian, African, and Middle Eastern Studies*. 36, 109–130, 2018.12. (査読有)
3. Kariya, Kota, “*Muwālāt* and Apostasy in the Early Sokoto Caliphate”, *Islamic Africa*. 9 (2), 179–208, 2018.10. (査読有)
4. 吉田早悠里「F. J. ビーバーの絵葉書:1904年、1905年、1909年のエチオピア訪問」,『南山アーカイブズ』13, 17–55, 2018.11. (査読有)

[口頭発表等]計13件

1. 石川博樹「エチオピア史の中のオロモとジンマ王国」, AA研企画展示「祈りにつながるイスラーム:エチオピア西部の信仰とその世界」展示解説, 2018.6.1, AA研.
2. 石川博樹「アフリカ史から世界を見る」, 河合塾みらいぷラス「次代を担う若手研究者によるライトニングトーク:さあ、学問さがしの旅に出よう!」, 2018.11.27, 神奈川県立多摩高校.
3. 荻谷康太「イスラームの伝播と現状:西アフリカを中心に」, 平成30年度めぐろシティカレッジ講座「世

- 界は今！:現場からの報告」第2回, 2018.5.12, 東京都立桜修館中等教育学校.
4. 荻谷康太「サハラ以南アフリカのアラビア語写本について」, AA研企画展示「祈りにつながるイスラーム:エチオピア西部の信仰とその世界」展示解説, 2018.6.1, AA 研.
  5. 石原美奈子「エチオピアのイスラーム:文化と歴史」, アジア経済研究所研究会「アフリカの政治・社会変動とイスラーム」, 2018.12.8, アジア経済研究所.
  6. Ishihara, Minako, “Contextualizing Books among the Muslim Oromo in Southwestern Ethiopia”, 21st International Conference of Ethiopian Studies, 2018.10.2, Mekelle University, Mekelle, Ethiopia.
  7. 松波康男「エチオピア西部におけるムスリム・オロモの宗教実践」, AA研企画展示「祈りにつながるイスラーム:エチオピア西部の信仰とその世界」展示解説, 2018.6.1, AA 研.
  8. Matsunami, Yasuo, “Oromo Nationalism and the “Heritagisation” in Ethiopia”, UP-TUFS セミナー, 2018.9.14, University of Pretoria, Pretoria, South Africa.
  9. 吉田早悠里「絵葉書に描かれた 20 世紀初頭エチオピア:F. J. ビーバーの絵葉書コレクションを通して」, 日本アフリカ学会第 55 回学術大会, 2018.5.26, 北海道大学.
  10. 吉田早悠里「過去と現在をつなぐ:民族誌とアーカイヴズ」, PI 育成セミナー・第 18 回 YLC セミナー「高等研究院時代を振り返って」, 2019.2.28, 名古屋大学.
  11. Yoshida, Sayuri, “The Collection of F. J. Bieber and Kafa Society at the Beginning of the 20th Century”, 20th International Conference of Ethiopian Studies, 2018.10.2, Mekelle University, Mekelle, Ethiopia.
  12. Yoshida, Sayuri, “Friedrich Julius Bieber and the Kafa in Southwest Ethiopia”, Integration Event AES V9, Österreichisch-Äthiopische Gesellschaft, 2018.6.18, Bezirksmuseum Hietzing, Wien, Austria.
  13. 若狭基道「ウォライタ語普通名詞のアクセント」, 「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」研究会, 2018.10.20, AA 研.

## 簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究

### 研究(3)

研究期間: 2017–2019 (代表: 陶安あんど/所員 1、共同研究員 13)

所員: 高松洋一

共同研究員: 陶安あんど、青木俊介、飯田祥子、石原遼平、片野竜太郎、鈴木直美、角谷常子、高村武幸、村上陽子、目黒杏子、靱山明、鷺尾祐子、渡邊英幸

#### 研究会等の内容

2018 年度第 1 回研究会 (2018 年 5 月 18 日、AA 研セミナー室および京都大学)

青木俊介 (AA 研共同研究員、学習院大学)

里耶秦簡博物館蔵秦簡講読 20 (前半)

青木俊介 (AA 研共同研究員、学習院大学)

里耶秦簡博物館蔵秦簡講読 20 (後半)

2018 年度第 2 回研究会 (2018 年 6 月 1 日、AA 研セミナー室および京都大学)

青木俊介(AA 研共同研究員、学習院大学)

里耶秦簡博物館蔵秦簡講読 21(前半)

青木俊介(AA 研共同研究員、学習院大学)

里耶秦簡博物館蔵秦簡講読 21(後半)

2018 年度第 3 回研究会(2018 年 6 月 23 日、AA 研セミナー室)

角谷常子(AA 研共同研究員、奈良大学)

里耶秦簡博物館蔵秦簡講読 22(前半)

角谷常子(AA 研共同研究員、奈良大学)

里耶秦簡博物館蔵秦簡講読 22(後半)

『里耶秦簡(二)』の講読計画に関する協議と共同の準備作業(全員)

2018 年度第 4 回研究会(2018 年 7 月 6 日、AA 研セミナー室)

角谷常子(AA 研共同研究員、奈良大学)

里耶秦簡博物館蔵秦簡講読 23(前半)

角谷常子(AA 研共同研究員、奈良大学)

里耶秦簡博物館蔵秦簡講読 23(後半)

2018 年度第 5 回研究会(2018 年 7 月 20 日～21 日、AA 研セミナー室)

7 月 20 日

目黒杏子(AA 研共同研究員、京都大学)

里耶秦簡博物館蔵秦簡講読 24(前半)

目黒杏子(AA 研共同研究員、京都大学)

里耶秦簡博物館蔵秦簡講読 24(後半)

7 月 21 日

角谷常子(AA 研共同研究員、奈良大学)

里耶秦簡博物館蔵秦簡講読 25(前半)

角谷常子(AA 研共同研究員、奈良大学)

里耶秦簡博物館蔵秦簡講読 25(後半)

『里耶秦簡(二)』の講読計画に関する協議と共同の準備作業(全員)

2018 年度第 6 回研究会(2018 年 9 月 22 日～23 日、AA 研セミナー室)

9 月 22 日

鈴木直美(AA 研共同研究員、明治大学)

「里耶秦簡にみる物品生産と調達:漆の利用に着目して」

目黒杏子(AA 研共同研究員、京都大学)

「里耶秦簡博物館蔵秦簡第 12 層簡牘積読の諸問題について」

榎山明(AA 研共同研究員、東洋文庫)

「鈴木報告に対するコメント」・ディスカッション

石原遼平(AA 研共同研究員)

「目黒報告に対するコメント」・ディスカッション

9月23日

陶安あんど(AA 研共同研究員、明治大学)

「未成年と成年との境界に跨る犯罪：嶽麓秦簡『為獄等状』事案5を手がかりに」

糸山明(AA 研共同研究員、東洋文庫)・目黒杏子(AA 研共同研究員、京都大学)

「陶安報告に対するコメント」・ディスカッション

渡邊英幸(AA 研共同研究員、愛知教育大学)

「里耶秦簡博物館蔵秦簡第16層簡牘積読の諸問題について」

石原遼平(AA 研共同研究員)

「渡邊報告に対するコメント」・ディスカッション

2018年度第7回研究会(2018年10月5日～10月6日、AA 研セミナー室)

10月5日

石原遼平(AA 研共同研究員)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘01(前半)

石原遼平(AA 研共同研究員)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘01(後半)

10月6日

渡邊英幸(AA 研共同研究員、愛知教育大学)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘02(前半)

渡邊英幸(AA 研共同研究員、愛知教育大学)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘02(後半)

里耶秦簡訳注稿共同検討会(全員)

2018年度第8回研究会(2018年11月9日～11月10日、AA 研セミナー室)

11月9日

渡邊英幸(AA 研共同研究員、愛知教育大学)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘03(前半)

渡邊英幸(AA 研共同研究員、愛知教育大学)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘03(後半)

11月10日

石原遼平(AA 研共同研究員)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘04(前半)

石原遼平(AA 研共同研究員)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘04(後半)

里耶秦簡訳注稿共同検討会(全員)

2018年度第9回研究会(2018年11月24日、AA 研セミナー室)

陶安あんど(AA 研共同研究員、明治大学)

「嶽麓秦簡『為獄等状四種』积文と注釈の再検討」

石原遼平(AA 研共同研究員)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘05(前半)

石原遼平(AA 研共同研究員)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘05(後半)

2018年度第10回研究会(2018年12月7日、AA研セミナー室)

目黒杏子(AA 研共同研究員、京都大学)

「漢代における後宮女性の生き方」(前半)

目黒杏子(AA 研共同研究員、京都大学)

「漢代における後宮女性の生き方」(後半)

2018年度第11回研究会(2018年12月21日～22日、AA研セミナー室)

12月21日

石原遼平(AA 研共同研究員)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘06(前半)

石原遼平(AA 研共同研究員)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘06(後半)

12月22日

鈴木直美(AA 研共同研究員、明治大学)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘07(前半)

鈴木直美(AA 研共同研究員、明治大学)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘07(後半)

里耶秦簡訳注稿共同検討会(全員)

2018年度第12回研究会(2019年1月11日～13日、AA研セミナー室)

1月11日

鈴木直美(AA 研共同研究員、明治大学)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘08(前半)

鈴木直美(AA 研共同研究員、明治大学)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘08(後半)

1月12日

靱山明(AA 研共同研究員、東洋文庫)

里耶秦簡博物館蔵秦簡講読26(前半)

靱山明(AA 研共同研究員、東洋文庫)

里耶秦簡博物館蔵秦簡講読26(後半)

陶安あんど(AA 研共同研究員、明治大学)

「再び嶽麓秦簡『為獄等状四種』积文と注釈について」

1月13日

里耶秦簡訳注稿編集会議(全員)

鈴木直美(AA 研共同研究員、明治大学)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘09(前半)

鈴木直美(AA 研共同研究員、明治大学)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘09(後半)

2018年度第13回研究会(2019年2月1日～2月2日、AA 研セミナー室)

2月1日

石原遼平(AA 研共同研究員)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘10(前半)

石原遼平(AA 研共同研究員)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘10(後半)

2月2日

鈴木直美(AA 研共同研究員、明治大学)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘11(前半)

鈴木直美(AA 研共同研究員、明治大学)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘11(後半)

里耶秦簡訳注稿共同検討会(全員)

2018年度第14回研究会(2019年3月1日～3月2日、AA 研セミナー室)

3月1日

飯田祥子(AA 研共同研究員、龍谷大学)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘12(前半)

飯田祥子(AA 研共同研究員、龍谷大学)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘12(後半)

3月2日

目黒杏子(AA 研共同研究員、京都大学)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘13(前半)

目黒杏子(AA 研共同研究員、京都大学)

『里耶秦簡(二)』第9層簡牘13(後半)

陶安あんど(AA 研共同研究員、明治大学)

「嶽麓秦簡『為獄等状四種』积文と注积について(三)」

## 研究成果一覧

[学術論文]計9件

1. 青木俊介「西北漢簡研究の沿革と新段階」, 『古代文化』70(3), 40-49, 2018.12.
2. 飯田祥子「近二十年の日本における後漢時代史研究の論点」, 『中国史学』28, 117-134, 2018.(査読有)
3. 石原遼平「秦漢時代の「徭」」, 『東洋文化』99, 57-90, 2019.3. (査読有)

4. 陶安「嶽麓秦簡《爲獄等狀四種》案例五〈多小未能與謀案〉史議窺見：秦律未成年刑事責任能力與受刑能力」,『簡帛研究二〇一八』秋冬卷, 129-141, 2019. (査読有)
5. 陶安「試釋里耶秦簡“資購當”」,『簡帛』17, 101-116, 2018.11. (査読有)
6. 陶安あんど「嶽麓秦簡司法文書集成『爲獄等狀四種』譯注稿一事案七」,『法史学研究会会報』22, 2019.3.
7. 鈴木直美「秦代遷陵県における漆の調達と利用」,『明大アジア史論集』23, 43-58, 2019.3.
8. 鷲尾祐子「長沙走馬樓吳簡中的“限佃”名籍」,『簡帛研究二〇一七』秋冬卷, 315-333, 2018.1.
9. 渡邊英幸「戦国秦の「邦」と畿内」,『東洋史研究』77 (3), 39-78, 2018.12. (査読有)

[口頭発表等]計3件

1. 飯田祥子「劉秀政権の再検討：王侯封建事例からの考察」, 日本秦漢史学会, 2018.11.17, 京都佛教大学.
2. 陶安「嶽麓秦簡《爲獄等狀四種》案例五〈多小未能與謀案〉史議窺見：秦律未成年刑事責任能力與受刑能力」, 国際シンポジウム「第四屆簡帛學國際學術研討會」, 2018.10.20, 重慶師範大學歴史與社會學院, 重慶, 中華人民共和國.
3. 渡邊英幸「秦人の自他認識：統一以前の秩序観の諸相」, 東方学国際会議シンポジウム「秦帝国の誕生：英語圏の研究者との対話」, 2018.5.19, 日本教育会館.

## オスマン文書史料の基礎的研究

研究期間： 2017-2019 (代表：高松洋一／所員 4、共同研究員 11)

所員： 高松洋一、黒木英充、近藤信彰、熊倉和歌子

共同研究員：秋葉淳、阿部尚史、磯貝健一、岩本佳子、大河原知樹、木村暁、齋藤久美子、澤井一彰、清水保尚、多田守、守田まどか

### 研究会等の内容

2018年度第1回研究会(2019年1月12日～13日、AA研大会議室)

高松洋一(AA研所員)

「スィヤークト書体の含まれる文書について」

2018年度第2回研究会(2019年2月27日、AA研マルチメディア会議室)

岩本佳子(AA研ジュニア・フェロー)

「租税調査台帳 Tahrir Defteri はいつ消滅したのか：オスマン朝における租税調査台帳の発展と衰退の研究」

熊倉和歌子(AA研所員)

「中世エジプトにおける租税記録の連続性と非連続性：マムルーク朝を軸に」

### 研究成果一覧

[学術論文]計14件

1. Takamatsu, Yoichi, “Osmanlı Belge Yönetiminde Kesilmiş Hatt-ı Humayunlar”, *Osmanlı Araştırmaları*

- / *The Journal of Ottoman Studies* 51, 115–157, 2018.4. (査読有)
2. Takamatsu, Yoichi, “Japonya’da OsmanlıTarih Araştırmaları”, *Osmanlı Araştırmaları / The Journal of Ottoman Studies* 51, xii–xvii, 2018.4. (査読有)
  3. 高松洋一「トルコ・イスタンブル・(旧)首相府オスマン文書館(大統領府オスマン文書館)」, 『歴史学研究』980, 38–42, 2018.9.2.
  4. Kondo, Nobukai, “Non-Muslims at the Shari‘a Court in Qajar Tehran”, *Human Mobility and Multiethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies 2* (ed. by Hidemitsu Kuroki), 7–21, 2018, ILCAA.
  5. Kuroki, Hidemitsu, “Armenians in 19th Century Aleppo”, *Armenians of Syria: Proceedings of the Conference (24-27 May 2015)*, Haigazian University Press, 67–75, 2018, Haigazian University Press, Beirut, Lebanon. (査読有)
  6. 熊倉和歌子「限られた史料で何が出来るか: 中世エジプト環境史を模索する」, 『お茶の水史学』62, 189–200, 2019.3.
  7. Kumakura, Wakako, “Patterns of Women’s Landholding in the Late Mamluk Period: A Statistical Study Based on the Ottoman Land Register *Daftar Jayshī*”, *Orient* 54, 7–22, 2019.3.
  8. Akiba, Jun, “Sharia Judges in the Ottoman Nizamiye Courts, 1864–1908”, *Osmanlı Araştırmaları / The Journal of Ottoman Studies* 51, 209–237, 2018.4. (査読有)
  9. 齋藤久美子「トプカプ宮殿文書館の三冊の帳簿と 1560 年頃のアディルジェヴァズ県」, 『お茶の水史学』62, 201–213, 2019.3.
  10. 澤井一彰「16 世紀後半におけるイスタンブルの人口規模」, 『歴史学研究』977, 55–66, 2018.11. (査読有)
  11. 澤井一彰「イスタンブルの「イスラーム化」と「教会」のモスクへの転用」, 『ヨーロッパ文化史研究』20, 35–75, 2019.3. (査読有)
  12. Shimizu, Yasuhisa, “16.yüzyılın ikinci yarısında Halep defterdarlığı”, *Osmanlı Araştırmaları / The Journal of Ottoman Studies* 51, 29–61, 2018.4. (査読有)
  13. 多田守「ディルリク制度からディルリク・カザー制度へ: 18 世紀のオスマン朝およびヨーロッパ諸国における近世国家体制をめぐって」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』96, 103–143, 2018.9. (査読有)
  14. Morita, Madoka, “From Confusion to Tranquility: Public Space and Re-demarcating Social Boundaries in Istanbul (1730-54)”, *Human Mobility and Multiethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies 2* (ed. by Hidemitsu Kuroki), 65–88, 2018, ILCAA.

[口頭発表等]計 18 件

1. Kondo, Nobuaki, “Ahamiyat-e noskhe-e badal dar tashih-e matn: tajrobe-e tashih-e dastur al-moluk dast-afzari-e bara-ye tashkilat-e divani-e dowre-e safaviye”, International conference Nasakh-e khatti-e farsi be-masabe-e miras-e jahani, 2018.9.6, Institute for Humanities and Cultural Studies, Tehran, Iran.
2. Kondo, Nobuaki, “Pishine-e tahqiq bar dastur al-mokuk”, Special Lecture, Academy of Persian Language and Literature, 2018.9.8, Academy of Persian Language and Literature, Iran.
3. 熊倉和歌子「歴史学×地理情報の今: 研究・ツール・課題」, AA 研フィールドネットワークワークショップ, 2019.3.21, AA 研.
4. Akiba, Jun, “Writing History, Writing Documents: Self-representation of an Eighteenth-Century Ottoman

- Historian-cum-Judge”, The CMES Sohbet-i Osmani Lecture Series, 2018.4.23, Harvard University, Boston, USA.
5. Akiba, Jun, “The Judiciary and Fiscal Transformation in the Ottoman Empire, 1700-1839”, Seminar Talk at Department of History, Stanford University, 2018.5.29, Stanford University, Stanford, USA.
  6. Akiba, Jun, “The Historian Şemdanizade Süleyman (d. 1780): A Deputy Judge and Intellectual in the Ottoman Empire”, Research Talk at Department of History, University of California, Davis, 2018.5.31, University of California, Davis, USA.
  7. Akiba, Jun, “Seeking Selves in Ottoman Archival Documents: Şemdanizade Fındıklılı Süleyman and His Court Records”, the Fifth World Congress for Middle Eastern Studies (WOCMES), 2018.7.19, University of Seville, Seville, Spain.
  8. Akiba, Jun, “Muallimhane-i Nüvvab’dan Mekteb-i Kuzat’a: Osmanlı Kadı Okulunun Yarım Yüzyıllık Serüveni”, Sahn-ı Semân’dan Dârülfünûn’a Osmanlı’da İlim ve Fikir Dünyası: 19. Yüzyıl, Âlimler, Müesseseler ve Fikrî Eserler, 2018.12.20, Zeytinburnu Kültür ve Sanat Merkezi, İstanbul, Turkey.
  9. 磯貝健一「法廷に持ち込まれた「家族」の問題、または、「家族」内の紛争:ロシア帝国領中央アジアのファトワー文書を材料とした試論」, 第 10 回近代中央ユーラシア比較法制度史研究会, 2018.7.29, 奈良女子大学.
  10. Iwamoto, Keiko, “Tax Survey as a Reference Material: A Study on Tahrir Defteri Utilization in the Post-Classical Ottoman Empire”, 2nd International Congress on Ottoman Studies (OSARK), 2018.10.8, Tirana International Hotel, Tirana, Albania.
  11. Okawara, Tomoki, “Brief Introduction of the Pproject ‘Japanese Ttranslation of Mecelle’”, Second Workshop on Legal Translations in 19th and Early 20th Century Japan, China, and the Ottoman Empire, 2019.3.29, Max-Planck-Institut für Europäische Rechtsgeschichte, Frankfurt am Main, Germany.
  12. 木村暁「近現代中央アジアのイラン人移民:その信仰を中心に」, Tsukuba Global Science Week 2018, 2018.9.21, つくば国際会議場.
  13. 齋藤久美子「16 世紀中葉アナトリア南東部におけるディルリク制の運用実態:トプカプ宮殿博物館附属文書館所蔵の三冊の帳簿を手がかりに」, 九州史学会, 2018.12.9, 九州大学.
  14. 齋藤久美子「アルバニアにおけるベクターシュ教団の歴史:現地調査のための予備的考察」, アレヴィー/ベクタシ研究会, 2018.8.4, 東北大学東京分室.
  15. 澤井一彰「1660 年のイスタンブル大火とその歴史的評価」, 東洋史研究会大会, 2018.11.4, 京都大学.
  16. 澤井一彰「1719 年のイスタンブル地震と『地震の書』:Risale-i Zelzele」, 「自然と人間の相互関係史としての近世都市災害研究」研究会, 2019.2.27, 国文学研究資料館.
  17. 澤井一彰「イスタンブルの「イスラーム化」と「教会」のモスクへの転用」, 拡大地中海史研究会, 2019.3.17, 学習院大学.
  18. Morita, Madoka, “Neighborhoods and Communal Dynamics in Eighteenth Century Istanbul”, The 23rd conference of the Comité international des études pré ottomanes et ottomanes, 2018.9.12, New Bulgarian University, Sofia, Bulgaria.

[図書]計 5 件

1. Kuroki, Hidemitsu (ed.), *Human Mobility and Multiethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies 2: Tehran, Cairo, Istanbul, Aleppo and Beirut*, 2018.3, ILCAA.
2. Kondo, Nobuaki, *Mīrzā Mohammad Raft' Ansārī. Dastūr al-Molūk: A Complete Edition of the Manual of Safavid Administration*, 2018.6, ILCAA.
3. 熊倉和歌子『中世エジプトの土地制度とナイル灌漑』, 東京大学出版会, 2019.2.
4. 岩本佳子『帝国と遊牧民:近世期オスマン朝の視座より』, 京都大学学術出版会, 2019.2.
5. 大河原知樹, 堀井聡江, シヤリーアと近代研究会(共編)『オスマン民法典(メジェッレ)の研究: 保証編・債務引受編』, 2019.3, 東北大学大学院国際文化研究科大河原研究室.

[社会に向けた成果発表]計9件

1. 黒木英充「世界に広がるアラブ移民」, 『歴史と地理 世界史の研究』714, 50-53, 2018.5.
2. 黒木英充「ごちそうされて、ごちそうし・・・シリア・レバノンから」, 『FIELDPLUS』21, 16-17, 2019.1.
3. 岩本佳子「トプカプ宮殿博物館附属図書館・文書館」, 『世界の図書館から:アジア研究のための図書館・公文書館ガイド』(東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門編), 173-179, 2019.3, 勉誠出版.
4. 大河原知樹「[討論]大河原知樹(東北大学):討論に対するコメント(鄭尚秀)」, 『第18回日韓・韓日歴史家会議報告書「国際関係:その歴史的考察」』, 131-134, 2019.3, 日韓文化交流基金.
5. 木村暁「ウズベク諸ハン国とカザフ」, 『中央ユーラシア史研究入門』(小松久男, 荒川正晴, 岡洋樹編), 123-143, 2018.4, 山川出版社.
6. 齋藤久美子「アナトリア南東部を歩く:一つの道がつなぐさまざまな過去と現在」, 『クルド人を知るための55章』, 明石書店, 29-34, 2019.1, 明石書店.
7. 齋藤久美子「オスマン朝治下のアナトリア南東部」, 『クルド人を知るための55章』, 明石書店 44-48, 2019.1, 明石書店.
8. 齋藤久美子「シャラフ・ハーン・ビドリィー:あるクルド系地方領主の生涯」, 『クルド人を知るための55章』(山口昭彦編), 49-51, 2019.1, 明石書店.
9. 齋藤久美子「クルド人とスーフィー教団:カーディリー教団とナクシュバンディィー教団」, 『クルド人を知るための55章』(山口昭彦編), 105-109, 2019.1, 明石書店.

## イスラーム聖者廟の財産管理に関する史料学的研究:イラン・サファヴィー朝祖廟を事例として

研究期間: 2018-2020 (代表: 渡部良子/所員 2、共同研究員 9)

所員: 近藤信彰、高松洋一

共同研究員: 渡部良子、阿部尚史、小野浩、後藤裕加子、杉山隆一、杉山雅樹、高木小苗、守川知子、矢島洋一

### 研究会等の内容

2018年度第1回研究会(2018年6月2日~3日、AA研マルチメディア会議室)

6月2日

渡部良子(AA 研共同研究員、東京大学)

「サファイア廟寄進地記録 Sarih al-Milk:その成立, 機能, 研究史」

「共同研究の構想・計画」

阿部尚史(AA 研共同研究員、お茶の水女子大学)、近藤信彰(AA 研所員)

「コメント:Sarih al-Milk の史料的可能性」

総合討論、研究計画(全員)

6月3日

「Sarih al-Milk 諸写本の全容」(全員)

「Sarih al-Milk = 'Abdi Beg 版の読解とデータ抽出方法の検討・作業計画」(全員)

2018年度第2回研究会(2018年11月10日～11日、AA 研小会議室)

11月10日(土)「サファイア廟寄進地記録 Sarih al-Milk(16世紀, 'Abdi Beg 版) のデータ化と研究」

渡部良子(AA 研共同研究員、東京大学)

「'Abdi Beg 版 Sarih al-Milk 3写本に関する調査報告:寄進地記録写本の作成と管理」

「'Abdi Beg 版 Sarih al-Milk データ化作業結果報告」(全員)

総合討論「Sarih al-Milk のデータ分析・研究計画」(全員)

11月11日

矢島洋一(AA 研共同研究員、奈良女子大学)

「Sarih al-Milk における法廷文書書式について」

総合討論「文書集成としての Sarih al-Milk とその研究方法」(全員)

打ち合わせ「今後の作業計画・第3回研究会の準備」(全員)

2018年度第3回研究会(2019年2月9日～10日、AA 研マルチメディア会議室)

2月9日

渡部良子(AA 研共同研究員、東京大学)

「イスラーム社会史史料としてのサファイア廟寄進地記録の重要性の再検討:アブディー・ベク編 Sarih al-Milk 2 写本(17世紀～18世紀初)に注目して」

後藤裕加子(AA 研共同研究員、関西学院大学)

「サファヴィー朝前期の文人官僚 アブディー・ベクとその著作」

小野浩(AA 研共同研究員、京都橘大学)

「サファヴィー家に関わる君主勅令」

高木小苗(AA 研共同研究員、早稲田大学)

「14世紀アルダビール地方の一村落の変遷:Sarih al-Milk と関連文書の比較検討を通して」

阿部尚史(AA 研共同研究員、お茶の水女子大学)

「19世紀の Sarih al-Milk」

高松洋一

コメント

2月10日

渡部良子(AA 研共同研究員、東京大学)

「『Abdi Beg 版 Sarih al-Millk データ化作業の課題』

総合討論「サファヴィー朝期 Sarih al-Milk の研究」(全員)

打ち合わせ「第2年次の計画」(全員)

#### 研究成果一覧

[口頭発表等]計1件

1. 渡部良子「モンゴル支配期イランのインシャー術(文書・書簡術)とインシャー作品」, 「13-14世紀波斯文史料及蒙古史研究」学术研讨会, 2018.8.25, 内蒙古大学, 呼和浩特, 中華人民共和国.

## II-3.2.2 共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)実施状況

### 現代インドネシア語における社会行為と文法

研究期間: 2017.11.1–2018.6.30 (代表: Michael C. Ewing / 所員: 中山俊秀)

#### 研究成果一覧

[学術論文]計4件

1. Ewing, Michael C., “Investigating Indonesian Conversation: Approach and Rationale”, *Wacana: Journal of the Humanities of Indonesia* 19 (2), 342–374, 2018.11. (査読有)
2. Ewing, Michael C., “The Predicate as a Locus of Grammar and Interaction in Colloquial Indonesian”, *Studies in Language* 43 (2), 402–444, 2019. (査読有)
3. Ewing, Michael C., and Dwi Noverini Djenar, “Address, Reference and Sequentiality in Indonesian Conversation”, *Social Dynamics of Pronominal Systems*, ed. by Paul Bouissac, Amsterdam: John Benjamins, 253–287, 2019.
4. Ewing, Michael C., Book Review: Laurie Margot Ross, “The Encoded Cirebon Mask: Materiality, Flow, and Meaning Along Java’s Islamic Northwest Coast”, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 175 (1), 124–126, 2019.2. (査読有)

[口頭発表等]計2件

1. Ewing, Michael C., “The Indeterminacy of Clause Structures in Conversational Interaction: Examples from Colloquial Indonesian”, *LingDy Forum “Studies on Language and Grammar in the Community”*, 2018.5.24, ILCAA.
2. Ewing, Michael C., “Indonesian Masked Dancing”, 2018.6.8, Tokyo University of Foreign Studies.

[図書]計1件

1. Djenar, Dwi Noverini, Michael C. Ewing, and Howard Manns, *Style and Intersubjectivity in Youth Interaction*, 2018, De Gruyter, Berlin.

# 持続可能な言語・文化の再活性化のための言語ドキュメンテーションと若 年層の参画のモデル

研究期間: 2018.1.1–2018.7.5 (代表: Sumittra Suraratdecha/所員: 中山俊秀)

## 研究成果一覧

[学術論文]計1件

1. Suraratdecha, S., and C. Tayjasanant, “Thai Teachers’ Self-assessment and Student Perceptions on the Practice of Autonomy”, *Kasetsart Journal of Social Sciences*, 1–7, 2018.9. (査読有)

[口頭発表等]計1件

1. Suraratdecha, Sumittra, “Youth Engagement in Linguistic and Cultural Reclamation: A Case Study of Black Tai Community, Thailand”, LingDy Forum “Studies on Language and Grammar in the Community”, 2018.5.24, ILCAA.

# トルキスタンからイスタンブルへ—自由を求めて:20 世紀初頭の中央アジアに おける政治運動・知識人運動の比較研究

研究期間: 2018.4.1–2018.7.31 (代表: Abdirashidov Zaynabidin Sharabidinovich/所員: 野田仁)

## 研究成果一覧

[学術論文]計3件

1. Abdirashidov, Zaynabidin Sharabidinovich, “Mujaddid: Ismoil Gasprinskiy Turkistonlik Ziyolilar Nazarida”, *Türkiye ile Türk Dünyası Arasında Bir Köprü Yavuz Akpınar Armağanı* (ed. by Nazim Muradov and Yilmaz Özkaya), 801–813, 2018, Bengü, Ankara.
2. Abdirashidov, Zaynabidin Sharabidinovich, and V. S. Yelok, “Çarlık Rusya’sında Bir Kırımliğin Mücadelesi”, *AVRASYA Uluslararası Araştırmalar Dergisi*, Cilt 6, Sayı 13, 171–189, 2018. (査読有)
3. Abdirashidov, Zaynabidin Sharabidinovich, “Understand and Critically Discuss Sufism: ‘Abd al-Ra’uf Fitrat, Yasawi and Yasawism”, *IV. Uluslararası Alevilik ve Bektaşilik Sempozyumu Bildiriler Kitabı* (18-20 Ekim 2018), Cilt 1, Ankara: HBV, 31–37, 2018.

[口頭発表等]計2件

1. Абдирашидов, Зайнабидин, “Развитие политических и интеллектуальных тенденций в Туркестане в начале XX века: Взгляд из Стамбула”, SRC Special Lecture, 2018.7.11, Slavic Eurasian Research Center, Hokkaido University, Sapporo, Japan.
2. Abdirashidov, Zaynabidin Sharabidinovich, “Brothers in Religion: The Image of a Chinese Muslim in the Ottoman Periodicals”, Middle East and Islamic Studies International Workshop “Mobility of Central

Asian Intellectuals: Scholarly and Religious Networks between Xinjiang and Middle East”, 2018.7.21, ILCAA.

## 青海チベットの半農半牧民の言語・文化の研究

研究期間： 2018.10.1–2019.3.31（代表：ラシャムジャ(拉先加)／所員：星泉）

### 研究成果一覧

[学術論文]計1件

1. Laxianjia, “dre” (Tibetan Ghosts and Demons)”, 『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』6(星泉, 海老原志穂, 岩田啓介, 大川謙作, 三浦順子編), 24–28, 2019.3, AA 研.

[口頭発表等]計4件

1. ラシャムジャ「チベットの現代文学と『雪を待つ』の背景」, ガイブンキョウク, 2018.10.28, 本のあるところ ajiro.
2. ラシャムジャ「チベットの詩の世界: 古代から現代まで」, 福岡県詩人会「福岡市民芸術祭」, 2018.10.28, 西鉄イン福岡.
3. ラシャムジャ「チベット文学の現在・過去・未来について考える」, 2018.11.22, 日本大学文理学部人文科学研究所.
4. ラシャムジャ「チベット文学と私、そして『雪を待つ』」, カワチェン「【読書会】ラシャムジャさん、星泉さんと『雪を待つ』について語ろう」, 2018.12.9, カワチェン.

## II-3.2.3 共同利用・共同研究課題(短期滞在型)実施状況

### アイヌ語沙流方言音声資料の文字化・整理およびアスペクト表現と証拠性の解明

研究期間： 2018.8.1–2018.10.31（代表：吉川 佳見／所員：山越 康裕）

## 東アフリカにおける女性高齢者の民族誌的研究

研究期間： 2018.12.1–2019.3.24（代表：宮地 歌織／所員：椎野 若菜）

### 研究成果一覧

[口頭発表等]計3件

1. Miyachi, Kaori, “Medicalization of “Female Circumcision” and Anti-FGM Activities in Gusii Community, Kenya”, 16th Asia Pacific Conference, 2018.12.1, Ritsumeikan Asia Pacific University, Oita,

Japan.

2. 宮地歌織「ケニア・クワレ地区の高齢者女性への聞き取り調査について」, 第 33 回日本国際保健医療学会自由集会, 2018.12.2, 津田塾大学.
3. 宮地歌織「HelpAge International Regional Conference (2018) 報告」, 科研費基盤研究(A)「アフリカにおける未来の人口高齢化を見据えた福祉とケア空間の学際的探求」平成 30 年度第 2 回研究会, 2019.3.1, 長崎大学.

[社会に向けた成果発表]計 1 件

1. 宮地歌織「研究活動紹介」, 『佐賀大学ジェンダー・イクオリティ研究所報告書』1 号(上野景三, 吉住磨子, 吉岡剛彦, 後藤英俊, 宮地歌織編), 8, 2019.3.

## 歴史学と言語学の連携による満洲語行政文書の研究—『内国史院檔(順治元年分)』を中心に—

研究期間: 2018.5.1–2018.7.31 (代表: 綿貫哲郎/所員: 児倉徳和)

### 研究成果一覧

[学術論文]計 2 件

1. 綿貫哲郎『「降清漢人」から「漢軍旗人」へ: 「盛京生まれ」を中心に』, 2019.2, 志学社.
2. 綿貫哲郎『祖大寿と「祖家将」再論』, 2019.2, 志学社.

## II-3.3 外部資金による研究の詳細

### II-3.3.1 特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」

本研究所は言語学、文化人類学、地域研究の 3 つの分野で共同利用・共同研究拠点に認定されているが、本事業では特別経費により、これまで研究分野毎に進めてきた現代的諸問題の研究を有機的に連関させて一気に飛躍させ、その基盤の上に国内外の研究機関・現地コミュニティと連携した、問題解決のための研究体制を構築中である。言い換えれば、本研究所が現在進めている上記 3 分野の研究はすべてが本事業に直結しており、研究成果も膨大な数にのぼるものの、ここではそれを逐一列挙することはせず、総括的な性格をもつ異分野間連携の合同研究集会のみを挙げるに留めておく。

#### 異分野間連携の国内合同研究集会

日時: 2018 年 12 月 13 日(木) 14:30-17:00

会場: AA 研マルチメディアセミナー室(306)

14:30-14:35 飯塚正人(AA 研所長) 趣旨説明

**【各分野報告】14:35-16:05**

14:35-15:05 河合香吏(AA 研所員)

「牧畜民の遊動とホミニゼーション」

15:05-15:35 野田仁(AA 研所員)

「新疆維吾爾自治区へのみちのり:境界の視点から」

15:35-16:05 塩原朝子(AA 研所員)

「多様な言語の話されている国での言語ドキュメンテーションの試み:様々な利害関係者との連携体制の確立」

16:05-16:20 休憩

16:20-17:00 質疑応答・討論

「多言語・多文化共生社会に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

**【研究集会・ワークショップ】**

以下の言語ドキュメンテーションと言語多様性に関する研究集会およびワークショップを開催した。

**<国際>**

- ・ リンディフォーラム:インドネシアの言語と文化に関する講演(2018/4/16)
- ・ リンディフォーラム:コミュニティーの中での言語と文法の研究(2018/5/24)
- ・ インドネシア NTT 州の言語のドキュメンテーションに関するセミナーとワークショップ(インドネシア・Hotel on the Rock)(2018/7/2-7/6)
- ・ 国際会議「言語ドキュメンテーション研究:アジアの視点から」(Documentary Linguistics – Asian Perspectives 3 (DLAP-3))(タイ・マヒドン大学との共催)(2018/7/23-7/25)
- ・ NINJAL 国際シンポジウム「日本と北東アジアの消滅危機言語 —記述・ドキュメンテーション・復興—」(国立国語研究所との共催)(2018/8/5-8/8)
- ・ サバ州の言語に関する共同研究ワークショップ(マレーシア・The Loft Imago)(2018/8/13-17)
- ・ リンディフォーラム:Justin Watkins 教授講演会(2018/9/29)
- ・ 言語ドキュメンテーションに関するセミナー(モンゴル・モンゴル国立大学)(2018/10/1-10/5)
- ・ 第2回国際ワークショップ“Varieties of Malayic Languages”/AA 研共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」第5回研究会(2018/10/13-10/14)
- ・ チベット文学研究会(2018/10/15)
- ・ インドネシア NTT 州の言語のドキュメンテーションに関するワークショップ(インドネシア・アーサ ワチャナ カトリック大学)(2018/11/1-11/3)
- ・ AA 研フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「言語ドキュメンテーションのためのコンピューターソフトウェア」第1回 ELAN の使い方(2018/12/12)
- ・ リンディフォーラム:イランおよびモンゴルにおける少数言語フィールドワーク(2018/12/14)
- ・ リンディフォーラム:言語ドキュメンテーションのアウトプットを再考する(2018/12/19)

- ・ AA 研フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「言語ドキュメンテーションのためのコンピューターソフトウェア」第2回 FLEx の使い方(2019/1/9)
- ・ みんなく言語学サークル第6回研究会(国立民族学博物館)(2019/1/29)
- ・ 東京アフリカ言語学研究会(Tokyo African Linguistics Knot (TALK))2018 年度第3回研究会(2019/1/29)
- ・ 国際ワークショップ「言語研究の社会的インパクトについて考える」(2019/2/2-2/3)
- ・ 言語研修メエ語(エカリ語)フォローアップミーティング(2019/2/5-2/8)
- ・ AA 研フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「言語ドキュメンテーションのためのコンピューターソフトウェア」第3回 ELAN と FLEx 両方の利用(2019/2/15)
- ・ 国際シンポジウム “Immigrant and Host Languages in Asia, Pacific and Europe: Facts behind Tidy Theoretical Constructs” / 第20回東京移民言語フォーラム(2019/2/28-3/1)
- ・ 言語ドキュメンテーションセミナー(ロシア・イルクーツク大学)(2019/3/4-3/8)
- ・ リンディフォーラム:バントゥ諸語マイクロ・バリエーション研究の最前線(2019/3/6)
- ・ 第2回「チベット文学と映画制作の現在」国際シンポジウム(2019/3/15-3/17)
- ・ SCOPIC ワークショップ(2019/3/18-3/22)

#### <国内>

- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」第6回研究会(2018/6/9)、第7回研究会(2018/10/20)
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「南西カラハリ・コエ語派の語彙の民族言語学的ドキュメンテーション」第3回研究会(2018/5/27)、第4回研究会(2018/11/11)、第5回研究会(2019/1/26)
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究(フェーズ1)」第7回研究会(2018/7/22)、第8回研究会(2018/12/22)
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学的手法に基づいて〜」第4回研究会(2018/5/20-5/21)、第5回研究会(2018/7/25-7/26)、第6回研究会(2018/10/13-10/14)
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」第4回研究会(2018/6/2)
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における膠着性の諸相 —音韻・形態統語・意味の統合的研究—」第4回研究会(2018/7/7)、第5回研究会(2018/12/15)、第6回研究会(2019/3/9)
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「文法の動的体系性を探る(1):文法の多重性と分散性」第3回研究会(2018/12/9)、第4回研究会(2019/2/9)、第5回研究会(2019/3/10)
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「モンゴル諸語における言語変容—外的要因と内的要因—」第1回研究会(2018/6/30)、第2回研究会(2018/12/15)
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「スワヒリ語諸変種にみられる多様性とダイナミズムへのアプローチ」第1回研究会(2018/6/3)、第2回研究会(2018/10/13)
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「アイヌ語現地調査資料のアーカイブズ構築にかんする学際的研究」第1回研究会(札幌学院大学)(2018/6/10)、第2回研究会(2018/12/22)
- ・ 連携授業「地域文化振興実習」(弘前大学)(2018/5/28)
- ・ TUFUS Cinema チベット映画特集『草原の河』(2018/10/26)
- ・ 第5回「言語フィールド調査ワークショップ@宮古島」(2018/12/16-12/22)

- ・ AA 研フィールド言語学ワークショップ:第 14 回文法研究ワークショップ:動詞連続の諸問題 (2019/1/12)
- ・ フィールドプラスカフェ(2019/1/25)
- ・ リンディフォーラム:何が文法知識を構成するか(2019/2/8)
- ・ 情報資源利用研究センター (IRC)ワークショップ「危機言語アーカイブと言語ドキュメンテーション」 (2019/2/20)
- ・ 『シリーズ記述文法 1 南琉球宮古語伊良部島方言』刊行記念イベント:これから記述文法を執筆する人のために(2019/3/8)
- ・ 『シリーズ記述文法 1 南琉球宮古語伊良部島方言』刊行記念イベント:「文法を記述する」とは(六次元) (2019/3/8)
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における膠着性の諸相 ―音韻・形態統語・意味の統合的研究―」第 6 回研究会／科学研究費補助金プロジェクト「アルタイ諸言語を対象とした環境の変化と言語の変容に関する総合的研究」第 1 回研究会 (九州大学) (2019/3/9)
- ・ AA 研フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「研究をみせる:科学コミュニケーションの理念と技」(2019/3/15)

#### 【オンライン研究交流環境】

- ・ アイヌ語音声資料の文字化テキスト対応づけと公開 (IRC プロジェクトの成果として公開)
- ・ チュルク諸語対照基礎語彙 (IRC プロジェクトの成果として公開)
- ・ マレー語言語地図の作成とその元となるデータ収集のシステム開発 (IRC プロジェクトの成果として公開)
- ・ モンゴル諸語対照基本語彙データベース (IRC プロジェクトの成果として公開)
- ・ カチン・ポータルサイトの構築 (IRC プロジェクトの成果として公開)

#### 【研究連携】

##### <海外視察・関係構築>

連携事業をより活発に展開するために以下の海外研究機関を訪問し、研究交流関係の構築を行った。

- ・ University of California, Los Angeles (アメリカ)
- ・ University of Florida (アメリカ)
- ・ University of Hawai'i at Mānoa (アメリカ)
- ・ SOAS, University of London (イギリス)
- ・ University of Leeds (イギリス)
- ・ Artha Wacana Christian University (インドネシア)
- ・ Atma Jaya Catholic University of Indonesia (インドネシア)
- ・ Udayana University (インドネシア)
- ・ ウィディヤマンディラカトリック大学 (インドネシア)
- ・ スンバワ文学協会 (インドネシア)
- ・ Australian National University (オーストラリア)
- ・ University of Alberta (カナダ)
- ・ University of British Columbia (カナダ)

- Seoul National University (韓国)
- 日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター (ケニア)
- Mahidol University (タイ)
- Wenzao Ursuline University of Languages (台湾)
- 国立成功大学越南研究中心 (台湾)
- University of Dar es Salaam (タンザニア)
- Charles University (チェコ)
- 上海外国語大学 (中国)
- 青海師範大学 (中国)
- 青海民族大学 (中国)
- 西北民族大学 (中国)
- University of Cologne (ドイツ)
- Ton Duc Thang University (ベトナム)
- ハノイ国家大学付属ベトナム学開発学院 (ベトナム)
- ホーチミン人文社会大学 (ベトナム)
- Ghent University (ベルギー)
- シュウェボー王宮碑文庫 (ミャンマー)
- タイ=サー言語文化協会 (ミャンマー)
- チャウセー市碑文庫 (ミャンマー)
- ハリン博物館 (ミャンマー)
- ラチッ言語文化協会 (ミャンマー)
- University of Mauritius (モーリシャス)
- Mohammed V University in Rabat (モロッコ)
- 内モンゴル大学 (モンゴル)
- モンゴル科学アカデミー言語文学研究所 (モンゴル)
- モンゴル国立大学 (モンゴル)
- Irkutsk University (ロシア)
- ロシア科学アカデミー (ロシア)

### < 研究交流 >

国際シンポジウム、国際ワークショップ開催に合わせて、以下の海外研究機関から研究者を招き、研究交流を行った。

- Stanford University (アメリカ)
- University of Hawai'i at Mānoa (アメリカ)
- University of Maryland Center for Advanced Study of Language (アメリカ)
- SOAS, University of London (イギリス)
- University of Oxford (イギリス)
- Ca' Foscari University of Venice (イタリア)
- University of Naples "L'Orientale" (イタリア)
- Amity University, Madhya Pradesh (インド)

- Jharkhand Rai University (インド)
- Tezpur University (インド)
- University of Lucknow (インド)
- Visva-Bharati University in Santiniketan (インド)
- ジャヤプラ第4高校 (インドネシア)
- Artha Wacana Christian University (インドネシア)
- Atma Jaya Catholic University of Indonesia (インドネシア)
- Sekolah Tinggi Bahasa Asing (STIBA) Saraswati Denpasar (College of Foreign Languages Saraswati Denpasar) (インドネシア)
- STIBA Cakrawala Nusantara Kupang (インドネシア)
- University of Indonesia (インドネシア)
- Australian National University (オーストラリア)
- University of Melbourne (オーストラリア)
- University of Alberta (カナダ)
- Ewha Womans University (韓国)
- Kodrah Kristang (シンガポール)
- Nanyang Technological University (シンガポール)
- National University of Singapore (シンガポール)
- Mahidol University (タイ)
- University of Dar es Salaam (タンザニア)
- Jinan University (中国)
- 内モンゴル科学技術大学 (中国)
- 甘肅省瑪曲県蔵族中学 (中国)
- 青海民族大学 (中国)
- 中国チベット学研究センター (中国)
- 中央民族大学 (中国)
- Free University of Berlin (ドイツ)
- Heidelberg University (ドイツ)
- Sprach- und Integrationsschule e.V. (SIS e.V.) (ドイツ)
- Tribhuvan University (ネパール)
- Forum for Language Initiatives (パキスタン)
- University of Helsinki (フィンランド)
- National University of Malaysia (マレーシア)
- University of Malaya (マレーシア)
- The University of Free State (南アフリカ共和国)
- Buryat State University (ロシア)

#### 【現地コミュニティーへのアウトリーチ】

危機・少数言語コミュニティーへの支援・共同研究活動展開に向け関係構築と予備調査・企画を行った。

- 青井隼人 ワークショップ企画運営・講師(青森) 期間:2018/5/27-5/28

- ・ 品川大輔 ワークショップ企画運営・講師(青森) 期間:2018/5/27-5/28
- ・ 中山俊秀 ワークショップ(CoLang 2018) 企画運営協力・講師(アメリカ) 期間:2018/6/17-6/29
- ・ 塩原朝子 ワークショップ企画運営・講師(インドネシア) 期間:2018/6/29-7/7
- ・ 中山俊秀 国際シンポジウム企画運営(タイ) 期間:2018/7/20-7/27
- ・ 青井隼人 ワークショップ企画運営・司会(沖縄) 期間:2018/9/15-9/17
- ・ 呉人徳司 ワークショップ企画運営・講師(モンゴル) 期間:2018/9/28-10/6
- ・ Jargal Badagarov ワークショップ企画運営協力・講師(モンゴル) 期間:2018/9/29-10/9
- ・ 中山俊秀 ワークショップ企画運営・講師(タイ) 期間:2018/9/24-10/8
- ・ Nazarudin ワークショップ運営協力・講師(インドネシア) 期間:2018/10/31-11/4
- ・ Yanti ワークショップ企画運営協力・講師(インドネシア) 期間:2018/10/31-11/5
- ・ Jermy Balukh ワークショップ運営協力・講師(インドネシア) 期間:2018/11/1-11/3
- ・ June Jacob ワークショップ企画運営協力・講師(インドネシア) 期間:2018/11/1-11/3
- ・ 大野剛 ワークショップ企画運営協力・講師(宮古島) 期間:2018/12/14-12/26
- ・ 中山俊秀 ワークショップ企画運営・講師(宮古島) 期間:2018/12/16-12/23
- ・ 品川大輔 ワークショップ企画運営・講師(タンザニア) 期間:2019/2/20-3/1
- ・ Jargal Badagarov ワークショップ企画運営協力・講師(ロシア) 期間:2019/2/28-3/8
- ・ 呉人徳司 ワークショップ企画運営・講師(ロシア) 期間:2019/3/3-3/8
- ・ Dugvema Vasilyeva ワークショップ企画運営協力・講師(ロシア) 期間:2019/3/4-3/8
- ・ 呉人徳司 ワークショップ企画打ち合わせ(モンゴル) 期間:2019/3/8-3/12

研究未開発言語の調査・研究のために以下の通り研究者を派遣した。

- ・ 塩原朝子 スンバワ語の調査(インドネシア) 期間:2018/4/22-4/29
- ・ 呉人徳司 チュクチ語の調査(ロシア) 期間:2018/8/4-8/30
- ・ 品川大輔 スワヒリ語都市変種(Sheng)に関する調査、およびウル語・ロンボ語調査(ケニア・タンザニア) 期間:2018/7/24-8/19
- ・ 塩原朝子 サバ州で話されている言語(ドゥスン及びマレー語変種)の成果共有ワークショップに参加(マレーシア) 期間:2018/8/9-8/20
- ・ 塩原朝子 スンバワ語の調査(インドネシア) 期間:2018/8/20-8/25
- ・ 安達真弓 ベトナム語の調査(ベトナム) 期間:2018/8/14-9/6
- ・ 星泉 チベット牧畜文化辞典のための調査(中国) 期間:2018/8/16-8/29
- ・ 青井隼人 国立国語研究所「危機言語」プロジェクト合同調査 期間:2018/8/29-9/1
- ・ 渡辺己 スライアモン語の調査(カナダ) 期間:2018/9/5-10/5
- ・ 青井隼人 研究課題に関わる言語資料の収集(伊江島) 期間:2018/9/8-9/14
- ・ 中山俊秀 黒タイコミュニティでの共同研究事業構築(タイ) 期間:2018/9/24-10/8
- ・ 青井隼人 多良間村現地調査(多良間島) 期間:2018/11/26-11/30
- ・ 倉部慶太 チベット・ビルマ系少数言語の調査(ミャンマー) 期間:2018/11/30-12/21
- ・ 山越康裕 モンゴル語文献資料収集、モンゴル語オイラト方言調査(モンゴル) 期間:2018/12/2-12/6
- ・ 澤田英夫 ミャンマー連邦マンダレー管区・ザガイン管区に現存する碑文の調査(ミャンマー) 期

間:2018/12/14-12/25

- ・ 澤田英夫 カチン州で話されるビルマ語群北部下位語群の言語の記述研究(ミャンマー) 期間:2018/12/26-2019/1/9
- ・ 児倉徳和 シベ語の調査(台湾) 期間:2018/12/18-21
- ・ 児倉徳和 シベ語の調査(オーストラリア) 期間:2018.10.22-25, 2018.11.05-08, 2018.11.19-22, 2018.12.26-2019.01.05, 2019.01.12-15, 2019.02.18-23
- ・ 呉人徳司 チュクチ語の民話資料の収集(ロシア) 期間:2019/1/11-1/19
- ・ 澤田英夫 カチン州で話されるビルマ語群北部下位語群の言語の記述研究(ミャンマー) 期間:2019/1/20-2/13
- ・ 渡辺己 スライアモン語の調査(カナダ) 期間:2019/1/23-2/11
- ・ 倉部慶太 チベット・ビルマ系少数言語の調査(ミャンマー) 期間:2019/1/24-2/10
- ・ 安達真弓 ベトナム語の調査(オーストラリア) 期間:2019/2/18-2/24
- ・ 呉人徳司 チュクチ語の調査、資料収集(ロシア) 期間:2019/2/20-2/26
- ・ 倉部慶太 チベット・ビルマ系少数言語の調査(ミャンマー) 期間:2019/2/25-3/9
- ・ Sumittra Suraratdecha 沖縄・奄美地域における言語記録・再活性化に関する調査と共同研究に向けた打ち合わせ(沖縄) 期間:2019/2/25-3/7
- ・ 中山俊秀 沖縄・奄美地域における言語記録・再活性化に関する調査と共同研究に向けた打ち合わせ(沖縄) 期間:2019/2/26-3/6

#### 【若手研究者養成】

- (1) 特任研究員 2 名を雇用し、特に若手研究者を対象とした言語ドキュメンテーションと言語多様性に関する共同研究の展開において指導的な役割を負う機会を与えた。
- (2) 若手研究者にむけて以下のワークショップを開催した。
  - ・ 連携授業「地域文化振興実習」(弘前大学)(2018/5/28)
  - ・ インドネシア NTT 州の言語のドキュメンテーションに関するセミナーとワークショップ(インドネシア・Hotel on the Rock)(2018/7/2-7/6)
  - ・ サバ州の言語に関する共同研究ワークショップ(マレーシア・The Loft Imago)(2018/8/13-17)
  - ・ 言語ドキュメンテーションに関するセミナー(モンゴル・モンゴル国立大学)(2018/10/1-10/5)
  - ・ インドネシア NTT 州の言語のドキュメンテーションに関するワークショップ(インドネシア・アーサ ワチャナ カトリック大学)(2018/11/1-11/3)
  - ・ AA 研フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「言語ドキュメンテーションのためのコンピューターソフトウェア」第 1 回 ELAN の使い方(2018/12/12)
  - ・ 第 5 回「言語フィールド調査ワークショップ@宮古島」(2018/12/16-12/22)
  - ・ AA 研フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「言語ドキュメンテーションのためのコンピューターソフトウェア」第 2 回 FLEx の使い方(2019/1/9)
  - ・ AA 研フィールド言語学ワークショップ:第 14 回文法研究ワークショップ:動詞連続の諸問題(2019/1/12)
  - ・ 言語研修メエ語(エカリ語)フォローアップミーティング(2019/2/5-2/8)
  - ・ AA 研フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「言語ドキュメンテーションのためのコンピューターソフトウェア」第 3 回 ELAN と FLEx 両方の利用(2019/2/15)

- ・ 言語ドキュメンテーションセミナー(ロシア・イルクーツク大学)(2019/3/4-3/8)
- ・ 『シリーズ記述文法 1 南琉球宮古語伊良部島方言』刊行記念イベント:これから記述文法を執筆する人のために(2019/3/8)
- ・ AA 研フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「研究をみせる:科学コミュニケーションの理念と技」(2019/3/15)

## 【成果公開・還元】

### ＜学会発表・講演＞

以下の通り学会・研究集会等で学術成果の発表を行った。

- ・ 塩原朝子 “The Sixteen Annual Linguistic Conference of Atma Jaya (KOLITA 16)” (インドネシア)(2018/4/10)
- ・ 呉人徳司 言語調査に関する講演(中国)(2018/4/下旬)
- ・ 児倉徳和 “First International Workshop on Contact Languages: the East Asia – Indian Ocean Connection” (モーリシャス)(2018/5/2)
- ・ 山越康裕 “First International Workshop on Contact Languages: the East Asia – Indian Ocean Connection” (モーリシャス)(2018/5/2)
- ・ 塩原朝子 “2018 International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics” (アメリカ)(2018/5/12)
- ・ 倉部慶太 “The 28th Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society (SEALS28)” (台湾)(2018/5/19)
- ・ 星泉 AA 研共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容～ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて～」第4回研究会(東京)(2018/5/20)
- ・ 品川大輔 第55回日本アフリカ学会学術大会(北海道)(2018/5/27)
- ・ 青井隼人 連携授業「地域文化振興実習」(青森)(2018/5/28)
- ・ 品川大輔 連携授業「地域文化振興実習」(青森)(2018/5/28)
- ・ 塩原朝子 AA 研共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」第4回研究会(東京)(2018/6/2)
- ・ 品川大輔 AA 研共同利用・共同研究課題「スワヒリ語諸変種にみられる多様性とダイナミズムへのアプローチ」第1回研究会(東京)(2018/6/3)
- ・ 青井隼人 日本音声学学会第337回研究例会シンポジウム「音声学の教え方を考える:フィールド言語学、言語教育、言語聴覚士養成での取り組みと課題」(兵庫)(2018/6/16)
- ・ 倉部慶太 AA 研フォーラム(東京)(2018/6/21)
- ・ 青井隼人 日本音韻論学会 2018 年度春期研究発表会(東京)(2018/6/22)
- ・ 星泉 第470回地平線報告会(東京)(2018/6/22)
- ・ 倉部慶太 日本言語学会第156回大会(東京)(2018/06/23)
- ・ 山越康裕 AA 研共同利用・共同研究課題「モンゴル諸語における言語変容—外的要因と内的要因—」第1回研究会(東京)(2018/6/30)
- ・ 児倉徳和 AA 研共同利用・共同研究課題「モンゴル諸語における言語変容—外的要因と内的要因—」第1回研究会(東京)(2018/6/30)
- ・ 塩原朝子 インドネシア NTT 州の言語のドキュメンテーションに関するセミナーとワークショップ(イン

ドネシア) (2018/7/2-7/6)

- 品川大輔 “The 20th International Congress of Linguists (ICL20)” (南アフリカ共和国) (2018/7/5)
- 品川大輔 “7th International Conference on Bantu Languages (Sintu7)” (南アフリカ共和国) (2018/7/9)
- 青井隼人 沖縄言語研究センター2018年度定例研究会(沖縄) (2018/7/7)
- 児倉徳和 AA 研共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における膠着性の諸相 —音韻・形態統語・意味の統合的研究—」第4回研究会(東京) (2018/7/7)
- 塩原朝子 “The 14th International Conference on Austronesian Linguistics (14 ICAL)” (マダガスカル) (2018/7/18)
- 塩原朝子 “The 14th International Conference on Austronesian Linguistics (14 ICAL)” (マダガスカル) (2018/7/17)
- 星泉 第55回野尻湖クリルタイ(日本アルタイ学会)(長野) (2018/7/15)
- 中山俊秀 “The 3rd International Conference on Documentary Linguistics – Asian Perspectives (DLAP-3)” (タイ) (2018/7/24)
- 山越康裕 “The 3rd International Conference on Documentary Linguistics – Asian Perspectives (DLAP-3)” (タイ) (2018/7/24)
- 星泉 AA 研共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて〜」第5回研究会(東京) (2018/7/26)
- 呉人徳司 “International Altay Communities Symposium- VII: Traditions-Customs-Morals and Laws” (モンゴル) (2018/8/7)
- 塩原朝子 NINJAL 国際シンポジウム「日本と北東アジアの消滅危機言語 —記述・ドキュメンテーション・復興—」(東京) (2018/8/8)
- 中山俊秀 NINJAL 国際シンポジウム「日本と北東アジアの消滅危機言語 —記述・ドキュメンテーション・復興—」(東京) (2018/8/8)
- 青井隼人 日本言語学会夏期講座 2018 ポスター発表(東京) (2018/8/20)
- 品川大輔 “The 9th Word Congress of African Linguistics (WOCAL9)” (モロッコ) (2018/8/25)
- 澤田英夫 日本言語学会夏期講座 2018(東京) (2018/8/23-8/25)
- 澤田英夫 “Association of Southeast Asian Studies 2018 (ASEASUK 18)” (イギリス) (2018/9/5)
- 中山俊秀 “International Workshop on Referentiality”(カナダ) (2018/9/8)
- 呉人徳司 第16回国際都市言語学会年会(ULS16) (大分) (2018/9/11)
- 呉人徳司 『元朝秘史』に関する国際学会(中国) (2018/9/14-9/21)
- 星泉 第4回キキソソチベットまつり(長野) (2018/9/15)
- 児倉徳和 国際シンポジウム「アジアにおける人の移動と人文学的変容」(福岡) (2018/9/21)
- 山越康裕 第97回 NINJAL コロキウム(東京) (2018/9/25)
- 倉部慶太 “The 51st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (ICSTLL51)” (京都) (2018/9/28)
- 澤田英夫 “The 51st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (ICSTLL51)” (京都) (2018/9/28)
- 児倉徳和 “The 2nd International Conference of Sibe Studies”(チェコ) (2018/10/4)
- 倉部慶太 「外国語と日本語との対照言語学的研究」第26回研究会(東京) (2018/10/6)

- ・ 塩原朝子 第2回国際ワークショップ “Varieties of Malayic Languages” / AA 研共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」第5回研究会(東京)(2018/10/13)
- ・ 塩原朝子 第2回国際ワークショップ “Varieties of Malayic Languages” / AA 研共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」第5回研究会(東京)(2018/10/14)
- ・ 星泉 チベット文学研究会(東京)(2018/10/15)
- ・ 安達真弓 The Ninth Annual Symposium of the Consortium for Asian and African Studies (CAAS) (フランス)(2018/10/19)
- ・ 星泉 TUFCS Cinema チベット映画特集『草原の河』(2018/10/26)
- ・ 星泉 福岡市民芸術祭「世界の詩を読もう」(福岡)(2018/10/28)
- ・ 星泉 チベットの作家ラシャムジャと話そう！～ガイブンキョウク特別編～(福岡)(2018/10/28)
- ・ 倉部慶太 SCOPIC Canberra Workshop 2018(オーストラリア)(2018/10/30)
- ・ 呉人徳司 Asian Seminar of the International Association for Mongolian Studies in 2018 “Mongols in the 20th Century” (東京)(2018/11/4)
- ・ 呉人徳司 上海外国語大学大学院アカデミックトレーニングキャンプ(中国)(2018/11/8)
- ・ 品川大輔 “Diversity of Cultures and Languages in Asia and Africa”(イギリス)(2018/11/8)
- ・ 倉部慶太 国立国語研究所共同研究プロジェクト「名詞修飾構文の対照研究」2018年第2回共同研究会(神戸)(2018/11/10)
- ・ 呉人徳司 上海外国語大学大学院アカデミックトレーニングキャンプ(中国)(2018/11/13)
- ・ 星泉 第6回チベット学情報交換会(東京)(2018/11/16)
- ・ 星泉 第66回日本チベット学会学術大会(東京)(2018/11/17)
- ・ 倉部慶太 日本言語学会第157回大会(京都)(2018/11/17)
- ・ 青井隼人 日本言語学会第157回大会(京都)(2018/11/17)
- ・ 安達真弓 第17回東京大学言語変異・変化研究会@駒場 (UTLVC@Komaba 17)(東京)(2018/11/26)
- ・ 中山俊秀 The 2018 Japanese/Korean Preconference Workshop "Multiplicity in Language and Multiple Grammars"(アメリカ)(2018/11/28)
- ・ 呉人徳司 "International Conference on Uralic, Altaic and Paleoasiatic languages in memory of A.P.Volodin"(ロシア)(2018/12/6-12/8)
- ・ 中山俊秀 AA 研共同利用・共同研究課題「文法の動的体系性を探る (1): 文法の多重性と分散性」第3回研究会(東京)(2018/12/9)
- ・ 星泉 ラシャムジャさん、星泉さんと『雪を待つ』について語ろう(東京)(2018/12/9)
- ・ 渡辺己 科研費「北方危機諸言語の形成プロセスの解明に向けたネットワーク強化」第1回研究会 / 日本北方言語学会設立大会(東京)(2018/12/9)
- ・ 塩原朝子 AA 研フォーラム: 全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」(東京)(2018/12/13)
- ・ 安達真弓 "International Conference on Vietnamese Studies 2018 (ICVS 2018)" (ベトナム)(2018/12/22)
- ・ 倉部慶太 AA 研フィールド言語学ワークショップ: 第14回文法研究ワークショップ: 動詞連続の諸問題(東京)(2019/1/12)

- ・ 青井隼人 “The NINJAL-SGRL-UHM Linguistics Workshop: Grammatical Descriptions of Endangered and Understudied Languages and Dialects in East Asia and Beyond” (アメリカ) (2019/1/13)
- ・ 安達真弓 "The Inaugural Conference on Asian Linguistic Anthropology (The CALA 2019)" (カンボジア) (2019/1/24)
- ・ 中山俊秀 みんなく言語学サークル第6回研究会(大阪) (2019/1/29)
- ・ 星泉 琉球大学島嶼地域科学研究所(RIIS)学内セミナー『島嶼地域科学研究所・研究資源データベースの構築に向けて』(沖縄) (2019/2/1)
- ・ 品川大輔 国際ワークショップ「言語研究の社会的インパクトについて考える」(東京) (2019/2/2)
- ・ 品川大輔・中山俊秀 国際ワークショップ「言語研究の社会的インパクトについて考える」(東京) (2019/2/3)
- ・ 倉部慶太 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」第3回合同研究発表会(東京) (2019/2/17)
- ・ 倉部慶太 情報資源利用研究センター(IRC)ワークショップ「危機言語アーカイブと言語ドキュメンテーション」(東京) (2019/2/20)
- ・ 中山俊秀 Workshop on Conservation and Revitalization of Community Language and Culture(沖縄) (2019/02/28)
- ・ 安達真弓 国際シンポジウム “Immigrant and Host Languages in Asia, Pacific and Europe: Facts behind Tidy Theoretical Constructs” /第20回東京移民言語フォーラム(東京) (2019/3/1)
- ・ 安達真弓 ベトナム語能力の評価およびベトナム語教育についての国際ワークショップ(台湾) (2019/3/8)
- ・ 星泉 第2回「チベット文学と映画制作の現在」国際シンポジウム(2019/3/16)
- ・ 星泉 第2回「チベット文学と映画制作の現在」国際シンポジウム(2019/3/17)
- ・ 児倉徳和 Social Cognition Parallax Interview Corpus (SCOPIC) Workshop 2019(東京) (2019/3/20)
- ・ 倉部慶太 Social Cognition Parallax Interview Corpus (SCOPIC) Workshop 2019(東京) (2019/3/20)
- ・ 児倉徳和 Social Cognition Parallax Interview Corpus (SCOPIC) Workshop 2019(東京) (2019/3/21)
- ・ 児倉徳和 2018年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会(京都) (2019/3/27)
- ・ 澤田英夫 2018年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会(京都) (2019/3/27)
- ・ 倉部慶太 2018年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会(京都) (2019/3/27)
- ・ 倉部慶太 科研(基盤 B)国際公開ワークショップ「チベット・ビルマ系言語の”方向”接辞」(東京) (2019/3/29)
- ・ 倉部慶太 科研(基盤 B)「ビルマの危機言語に関する緊急調査研究」2018年度研究会(東京) (2019/3/31)

#### <出版物刊行>

以下の出版物を刊行した。

- ・ 李林静, 山越康裕, 児倉徳和(編)『中国北方危機言語のドキュメンテーション:ヘジェン語/シベ語/ソロン語/ダダール語/シネヘン・ブリヤート語』(256pp.)三元社 2018/4/20
- ・ Sonja Riesberg, Asako Shiohara, Atsuko Utsumi (eds.) "Perspectives on information structure in Austronesian languages" (428pp.) Language Science Press 2018/8/23
- ・ NUSA 編集担当(編) "NUSA: Linguistic studies of languages in and around Indonesia Vol.65" (107pp.)

ILCAA, TUFS 2018/9/30(雑誌・オンラインジャーナル)

- ・ チベット文学研究会(星泉, 海老原志穂, 岩田啓介, 大川謙作, 三浦順子)(編)『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』Vol.6(208pp.) AA 研 2019/3/10
- ・ アジア・アフリカの言語と言語学編集担当(編)『アジア・アフリカの言語と言語学 13』(150pp.) AA 研 2019/3/31(オンラインジャーナル)
- ・ Daisuke Shinagawa, Yuko Abe (eds.) “Descriptive materials of morphosyntactic microvariation in Bantu” (439pp.) ILCAA, TUFS 2019/3/
- ・ Tokusu Kurebito (ed.) Alla Kerginto, Tokusu Kurebito (translate from Chukchi to Russian) “ILCAA Northeast Asian Studies No.6: ЛЫМҢЫЛТЭ Токэ (Folk tales of Toke)” (177pp.) ILCAA, TUFS 2019/3
- ・ Tokusu Kurebito (ed.) Alla Kerginto, Tokusu Kurebito (translate from Chukchi to Russian) “ILCAA Northeast Asian Studies No.7: ЛЫГЪОРАВЭТЛЪЭН ЛЫМҢЫЛТЭ БЕЛИКОВЫН (Chukchi folk tales in the recording of Belikov)” (309pp.) ILCAA, TUFS 2019/3

### 【調査・研究成果の資源化】

以下の研究未開発言語に関する調査資料、研究成果の分析、電子化、資源化を進めた:

- ・ アイヌ語
- ・ セイリツシュ語
- ・ モンゴル諸語

### 【言語ダイナミクス科学研究推進環境の整備】

言語ダイナミクス科学研究推進に必要な文献資料の整備をはかった。

### 【共同研究の推進】

#### <外国人研究員の受入>

言語ドキュメンテーションと言語多様性に関する研究を専門とする以下の外国人研究員を受入、共同研究にあたった。

- ・ Laxianjia(ラシヤムジャ)(中国チベット学研究センター): 青海チベットの半農半牧民の言語・文化の研究
- ・ Timothy Brickell (The University of Melbourne): マルチメディア言語コーパス分析のためのアノテーション手法の共同研究
- ・ Yingying Mu (Mahidol University): ペラ語及びロンウオー語の形態統語構造の比較研究
- ・ Lutz Marten (SOAS, University of London): バントゥ諸語の形態統語論的マイクロバリエーション
- ・ 賈越 (黒竜江大学): 満洲・ツングース諸語のケースシステムの比較研究
- ・ 其布尔哈斯 (内蒙古大学): ダグル語方言とその変容に関する研究

#### <AA 研共同利用・共同研究課題>

以下の共同利用・共同研究課題を組織し、共同研究を推進した。

- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容～ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて～」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」

- AA 研共同利用・共同研究課題「南西カラハリ・コエ語派の語彙の民族言語学的ドキュメンテーション」
- AA 研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究(フェーズ1)」
- AA 研共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における膠着性の諸相 ―音韻・形態統語・意味の統合的研究―」
- AA 研共同利用・共同研究課題「文法の動的体系性を探る (1): 文法の多重性と分散性」
- AA 研共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」
- AA 研共同利用・共同研究課題「モンゴル諸語における言語変容―外的要因と内的要因―」
- AA 研共同利用・共同研究課題「スワヒリ語諸変種にみられる多様性とダイナミズムへのアプローチ」
- AA 研共同利用・共同研究課題「アイヌ語現地調査資料のアーカイブズ構築にかんする学際的研究」

#### <外国人研究者の短期招へい>

国際シンポジウム、ワークショップ開催のため、次の外国人研究者を招へいし、短期共同研究を行った。

- Antoina Soriente (University of Naples “L’Orientale”)
- Aydin Özbek (Çanakkale Onsekiz Mart University)
- Bhim Lal Gautam (Tribhuvan University)
- Bidisha Bhattacharjee (Visva-Bharati University in Santiniketan)
- Binay Pattanayak (Jharkhand Rai University)
- Bradley McDonnell (University of Hawai’i at Mānoa)
- Dance Nawipa (ジャヤプラ第4高校)
- Danielle Barth (Australian National University)
- David Moeljadi (Nanyang Technological University)
- Eka Pratiwi (Sekolah Tinggi Bahasa Asing (STIBA) Saraswati Denpasar (College of Foreign Languages Saraswati Denpasar))
- Ekaterina Gruzdeva (University of Helsinki)
- Elisabetta Ragagnin (Free University of Berlin, Ca’ Foscari University of Venice)
- Faridah Noor Binti Mohd Noor (University of Malaya)
- Gastor Mapunda (University of Dar es Salaam)
- Gürol Aktaş (Sprach- und Integrationschule e.V. (SIS e.V.))
- Haiyoung Lee (Ewha Womans University)
- Huiying Nala Lee (National University of Singapore)
- Jargal Badagarov (Buryat State University / Heidelberg University)
- Jermy Imanuel Balukh (STIBA Cakrawala Nusantara Kupang)
- Jia Buqing (甘肅省瑪曲県藏族中学)
- Jixiang Lan (Jinan University)
- Juha Janhunen (University of Helsinki)
- Julius Taji (University of Dar es Salaam)
- June A. Jacob (Artha Wacana Christian University)
- Kartini Wahab (National University of Malaysia)
- Kevin Martens Wong (Kodrah Kristang)
- Madri Kakoti (University of Lucknow)

- Man Kumari Limbu (Tribhuvan University)
- Maseanakoena Mokoaleli (The University of Free State)
- Muhammad Zaman (Forum for Language Initiatives)
- Nantaijia (青海民族大学)
- Nazarudin (University of Indonesia)
- Nicholas Evans (Australian National University)
- Peter Austin (SOAS, University of London)
- Peter Hein (Sprach- und Integrationschule e.V. (SIS e.V.))
- Rohini Nag (Amity University, Madhya Pradesh)
- Stefanie Pillai (University of Malaya)
- Sumittra Suraratdecha (Mahidol University)
- Sun Hee Park (Ewha Womans University)
- Thanom Kongyilamai (黒タイコミュニティ)
- Thomas J. Conners (University of Maryland Center for Advanced Study of Language)
- Trisha Borgohain (Tezpur University)
- Vijay A. D'Souza (University of Oxford)
- Wandaïke (中央民族大学)
- Yanti (Atma Jaya Catholic University of Indonesia)
- Yingying Mu (Mahidol University)
- Zengbaodangzhou (中央民族大学)

#### 中東研究日本センター (JaCMES – Japan Center for Middle Eastern Studies)

- 2018年9月6日(木)～7日(金) AA 研にて共同研究課題 JaCMES 実施分 “Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies” 第5回研究会を実施した。
- 2018年11月28日(水) JaCMES にてラウンドテーブル “Migrants and Refugees Dynamics and Perception toward their Integration” を実施した。本ラウンドテーブルはノートルダム大学レバノン移民研究センター、KKLO、科研費基盤(B)「中東・ヨーロッパ諸国間の国際政策協調と移民／難民の移動に関する研究」(代表者・錦田愛子)との共催で開催された。
- 2018年11月30日(金)、12月1日(土) JaCMES にて第12回バイルート若手研究者報告会を開催した。
- 2019年3月1日(金)レバノンのバラマンド大学(The University of Balamand)にて共同研究課題 JaCMES 実施分 “Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies” 第6回研究会を同大学との共催にて実施した。
- 2019年3月19日(火)バイルート・アメリカン大学にて、同大学との共催にて公開講演会 “Examining Najeeb Saleeby as American Colonial Advocate and Educator” を筑波大学の鈴木伸隆准教授(AA 研共同研究員)を講師に迎えて実施した。
- JaCMES 常駐の特任研究員として篠田知暁博士が3月1日に着任し、3月15日にバイルートに到着、業務を開始した。

#### コタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO – Kota Kinabaru Liaison Office)

- ・ 2018年7月15日(日)にAA研にて共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)」枠により同年度の第1回ワークショップを実施した。
- ・ 2018年8月5日(日)AA研にて共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)」枠により同年度の第2回ワークショップをコタキナバルで実施した。
- ・ 2018年8月13日(火)～17日(土)にマレーシア・サバ大学においてサバ州の言語に関するワークショップを実施した。
- ・ 2018年9月10日(月)JICA フィリピン事務所においてフィリピン南部情勢に関する実務者・専門家会合を実施した。
- ・ 2018年11月28日にJaCMES-LERC –KKLO Joint Roundtable on Migrants and Refugees Dynamics and Perception toward their Integration をJaCMES で実施した。
- ・ 2019年2月11日(日)AA研にて共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)」枠により同年度の第3回ワークショップをAA研で実施した。
- ・ 2019年2月17日(土)国際交流基金ジャカルタ文化センターでインドネシアのイスラームに関する公開講演会を実施した。
- ・ 2019年2月19日(月)International Conference on Progressive Civil Society をジョクジャカルタのアフマド・ダーラン大学で実施した。
- ・ 2019年3月14日(月)にUMS-TUFS Exchange Lecture on Culture and Society of Asia をコタキナバルで実施した。

### II-3.3.2 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」

#### SCOPIC ワークショップ

2019年3月18日(月)～22日(金)

スピーカー: Nicholas EVANS (オーストラリア国立大学)、Danielle BARTH (オーストラリア国立大学)、Eka PRATIWI (College of Foreign Languages (STIBA) Saraswati Denpasar)、Yanti (AA研共同研究員、Atma Jaya Catholic University of Indonesia)、Heiko NARROG (東北大学)、倉部慶太 (AA研所員)、児倉徳和 (AA研所員)、木本幸憲 (学振特別研究員:名古屋大学)

参加者: Seongha RHEE (韓国外国語大学校)、大野仁美 (麗澤大学)、塩原朝子 (AA研所員)

内容: SCOPIC プロジェクトの成果発表とアノテーション実習を含むワークショップ

使用言語: 英語

基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」との共催

リンディフォーラム: Justin Watkins 教授講演会

2018年9月29日(土)

スピーカー: Justin Watkins (ロンドン大学 SOAS)

題目: “English and မြန်မာစကား\* in Myanmar: A Match Made in Heaven or an Unhappy Marriage?”

(\*ビルマ語で Burmese Language の意)

使用言語: 英語

基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」との共催

リンディフォーラム: リンディフォーラム: バントウ諸語マイクロ・バリエーション研究の最前線

2019年3月6日(水)

スピーカー: ルツ・マーティン (AA 研フェロー、ロンドン大学 SOAS)

題目: 「バントウ諸語形態統語論における変異, 分岐, 収束」

使用言語: 英語

基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」との共催

### II-3.3.3 科学研究費等によるその他の研究活動

【所員等が代表者の科学研究費補助金課題一覧(分担者中、下線が AA 研所員等)】

#### 新学術領域研究(研究領域提案型)

研究代表者: 床呂 郁哉

課題番号: 17H06341

課題名: 顔と身体表現の文化フィールドワーク研究

研究種目: 新学術領域研究(研究領域提案型)

研究分担者: 吉田ゆか子、塩谷もも、田中みわ子、西井涼子

期間(年度): 2017(H29)~2021(R3)

#### 基盤研究(A)

研究代表者: 近藤 信彰

課題番号: 15H01895

課題名: イスラーム国家の王権と正統性—近世帝国を視座として

研究種目: 基盤研究(A)一般

研究分担者: 高松洋一、秋葉淳、小笠原弘幸、二宮文子、清水和裕、真下裕之、後藤裕加子

期間(年度): 2015(H27)~2019(R1)

研究代表者: 西井 涼子

課題番号: 17H00948

課題名: 人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開: 危機を中心に

研究種目: 基盤研究(A)一般

研究分担者: 吉田ゆか子、深澤秀夫、箭内匡、高木光太郎、河合香吏、佐久間寛

期間(年度): 2017(H29)～2020(R2)

研究代表者: 西井 涼子

課題番号: 17H01648

課題名: グローバル化における権力編成の変動と新たなコミュニティ運動—東南アジア大陸部から

研究種目: 基盤研究(A)海外学術

研究分担者: 田辺繁治、久保忠行、斎藤紋子、古谷伸子、中田友子、高城玲、土佐桂子、阿部利洋

期間(年度): 2017(H29)～2020(R2)

#### 基盤研究(B)

研究代表者: 呉人 徳司

課題番号: 15H05155

課題名: 北東ユーラシア諸言語の語形成に関する地域類型的研究

研究種目: 基盤研究(B)海外学術

研究分担者: 風間伸次郎、江畑冬生

期間(年度): 2015(H27)～2018(H30)

研究代表者: 荒川 慎太郎

課題番号: 16H03414

課題名: 「方向接辞」からみたチベット・ビルマ語系言語の諸相

研究種目: 基盤研究(B)一般

研究分担者: 白井聡子、倉部慶太

期間(年度): 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者: 中見 立夫

課題番号: 16H03462

課題名: “帝国”周縁部における国勢調査・人口調査の比較研究

研究種目: 基盤研究(B)一般

研究分担者: 野田仁、青木雅浩

期間(年度): 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者: 小田 淳一

課題番号: 16H05671

課題名: インド洋フランス語系クレオール民話の口演の研究

研究種目: 基盤研究(B)海外学術

期間(年度): 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者: 渡辺 己

課題番号: 16H05672

課題名： 語の統合度と文の相関関係に関する研究－形態法の異なる言語の比較対照をとおして－

研究種目： 基盤研究(B)海外学術

研究分担者： 児倉徳和、山越康裕、沈力、清澤香

期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者： 峰岸 真琴

課題番号： 17H02331

課題名： 形態統語論と音声学からみた東南アジア諸語における情報構造の類型論

研究種目： 基盤研究(B)一般

研究分担者： 長屋尚典、鈴木玲子、降幡正志、上田広美、岡野賢二、ホワンヒョンギン、高橋康徳

期間(年度)： 2017(H29)～2020(R2)

研究代表者： 高松 洋一

課題番号： 17H02398

課題名： イスラーム圏における簿記史料の通時的・共時的研究

研究種目： 基盤研究(B)一般

研究分担者： 近藤信彰

期間(年度)： 2017(H29)～2020(R2)

研究代表者： 錦田 愛子

課題番号： 17H04504

課題名： 中東・ヨーロッパ諸国間の国際政策協調と移民／難民の移動に関する研究

研究種目： 基盤研究(B)海外学術

研究分担者： 森井裕一、高岡豊、今井宏平

期間(年度)： 2017(H29)～2019(R1)

研究代表者： 倉部 慶太

課題番号： 17H04523

課題名： ビルマの危機言語に関する緊急調査研究

研究種目： 基盤研究(B)海外学術

研究分担者： 新谷忠彦、澤田英夫、加藤昌彦、大塚行誠

期間(年度)： 2017(H29)～2019(R1)

研究代表者： 高尾 賢一郎

課題番号： 18H00613

課題名： 現代ムスリム社会における風紀・暴力・統治に関する地域横断的研究

研究種目： 基盤研究(B)一般

研究分担者： 中山紀子、高岡豊、和崎聖日、帯谷知可、辻上奈美江

期間(年度): 2018(H30)~2020(R2)

研究代表者: 新谷 忠彦

課題番号: 18H00663

課題名: タイ文化圏に関する言語事典の編纂に向けて

研究種目: 基盤研究(B)一般

研究分担者: 山田敦士

期間(年度): 2018(H30)~2022(R4)

研究代表者: 黒木 英充

課題番号: 18H03440

課題名: シリア内戦の比較研究—レバノン・旧ユーゴスラビアの内戦と戦後和解

研究種目: 基盤研究(B)一般

研究分担者: 佐原 哲也

期間(年度): 2018(H30)~2020(R2)

#### 基盤研究(C)

研究代表者: 床呂 郁哉

課題番号: 25370936

課題名: スーロー海域世界を中心とする真珠のグローバリゼーションに関する文化人類学的研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2013(H25)~2018(H30)

研究代表者: 塩原 朝子

課題番号: 15K02472

課題名: Malayo-Sumbawan 言語における定性標示と文構造との関係に関わる研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2015(H27)~2019(R1)

研究代表者: 野田 仁

課題番号: 15K02914

課題名: 露清帝国の西方境界における紛争と秩序形成

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2015(H27)~2018(H30)

研究代表者: 河合 香吏

課題番号: 15K03034

課題名: 共鳴する「五感」: 東アフリカ牧畜民における知覚の共同性に関する人類学的研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2015(H27)～2019(R1)

研究代表者: 福島 康博

課題番号: 16K01974

課題名: イスラームに基づく商品・サービスの規格化と地域・産業間比較研究: 東南アジアの例

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2016(H28)～2019(R1)

研究代表者: 勝畑 冬実

課題番号: 16K02177

課題名: エジプト映画における「イスラーム」表象の変遷とその分析

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2016(H28)～2019(R1)

研究代表者: 外川 昌彦

課題番号: 16K02602

課題名: 岡倉天心とタゴールの反響するアジアへのまなざしー植民地主義をめぐる日印の比較研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者: 品川 大輔

課題番号: 16K02630

課題名: 言語ドキュメンテーションに基づくバントゥ諸語のマイクロな類型的多様性の探究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者: 渡辺 己

課題番号: 16K02660

課題名: スライアモン・セイリッシュ語の焦点構文に関する研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者: 太田 信宏

課題番号: 16K03075

課題名: 植民地インドのマイスール藩王国における文芸と王権

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2016(H28)～2019(R1)

研究代表者： 椎野 若菜  
課題番号： 17K02002  
課題名： 東アフリカ都市におけるエリート・シングルとハウスガールの「同居家族」の研究  
研究種目： 基盤研究(C)  
期間(年度)： 2017(H29)～2019(R1)

研究代表者： 高島 淳  
課題番号： 17K02215  
課題名： インドにおける仏教の終焉の解明  
研究種目： 基盤研究(C)  
期間(年度)： 2017(H29)～2019(R1)

研究代表者： 伊藤 智ゆき  
課題番号： 17K02675  
課題名： 朝鮮語諸方言における複合語・派生語のアクセント研究  
研究種目： 基盤研究(C)  
期間(年度)： 2017(H29)～2019(R1)

研究代表者： 山越 康裕  
課題番号： 17K02714  
課題名： シネヘン・ブリアート語をはじめとしたモンゴル諸語の「文」の完結性に関する研究  
研究種目： 基盤研究(C)  
期間(年度)： 2017(H29)～2021(R3)

研究代表者： 吉村 貴之  
課題番号： 17K03044  
課題名： ソヴィエト体制を変容させた二つのアルメニア・ナショナリズム  
研究種目： 基盤研究(C)  
期間(年度)： 2017(H29)～2021(R3)

研究代表者： 吉田 ゆか子  
課題番号： 17K03277  
課題名： ジャカルタにおけるバリ芸能の民族誌—宗教間・民族間の交渉と相互理解を焦点に  
研究種目： 基盤研究(C)  
期間(年度)： 2017(H29)～2020(R2)

研究代表者： 呉人 徳司  
課題番号： 18K00569  
課題名： 動詞の他動性に関するチュクチ語とモンゴル語の比較対照研究

研究種目： 基盤研究(C)  
期間(年度)： 2018(H30)～2021(R3)

研究代表者： 深澤 秀夫  
課題番号： 18K01167  
課題名： マダガスカルにおける損失の回復をめぐる観念の歴史的過程と共時的生成の統合的研究  
研究種目： 基盤研究(C)  
期間(年度)： 2018(H30)～2021(R3)

研究代表者： 栗原 浩英  
課題番号： 18K11775  
課題名： 「同志性」からみたベトナム・中国関係の変容と展望に関する研究  
研究種目： 基盤研究(C)  
期間(年度)： 2018(H30)～2021(R3)

研究代表者： 中山 久美子  
課題番号： 18K00527  
課題名： スートカ語アハウザット方言の自然談話データベース構築およびテキスト集の作成  
研究種目： 基盤研究(C)  
研究分担者： 中山 俊秀  
期間(年度)： 2017(H29)～2020(R2)

#### **挑戦的研究**

研究代表者： 佐久間 寛  
課題番号： 17K18480  
課題名： 人類学的手法を取り入れた黒人文化総合誌『プレゼンス・アフリケーヌ』の複合的研究  
研究種目： 挑戦的研究(萌芽)  
研究分担者： 中村隆之  
期間(年度)： 2017(H29)～2019(R1)

研究代表者： 中村 恭子  
課題番号： 18K18478  
課題名： 芸術係数の論理的進化と実装  
研究種目： 挑戦的研究(萌芽)  
研究分担者： 郡司 幸夫  
期間(年度)： 2018(H30)～2020(R2)

#### **若手研究(A)**

研究代表者： 佐久間 寛

課題番号: 15H05385

課題名: サハラ南縁地域をめぐるモラル・エコノミー論的土地制度研究を通じた所有概念の再構築

研究種目: 若手研究(A)

期間(年度): 2015(H27)～2018(H30)

#### 若手研究(B)

研究代表者: 海老原 志穂

課題番号: 26770137

課題名: 東西方言から見たチベット語の基層の研究

研究種目: 若手研究(B)

期間(年度): 2014(H26)～2018(H30)

研究代表者: 苺谷 康太

課題番号: 15K16578

課題名: 18-19世紀の西アフリカ・ハウサランドにおけるムスリムと非ムスリムの境界

研究種目: 若手研究(B)

期間(年度): 2015(H27)～2018(H30)

研究代表者: 池田 昭光

課題番号: 15K16895

課題名: レバノン高齢社会の人類学的研究—親族・国外移民・家事労働者

研究種目: 若手研究(B)

期間(年度): 2015(H27)～2018(H30)

研究代表者: 早田 清冷

課題番号: 16K16819

課題名: 初期満洲語の格体系の研究

研究種目: 若手研究(B)

期間(年度): 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者: 熊倉 和歌子

課題番号: 17K13521

課題名: 中東・北アフリカ地域における黒死病前後の環境変動と疫病流行

研究種目: 若手研究(B)

期間(年度): 2017(H29)～2019(R1)

研究代表者: 岩本 佳子

課題番号: 17K13547

課題名: オスマン朝とクルド、テュルク系遊牧民の交流と対立の史的研究

研究種目： 若手研究(B)  
期間(年度)： 2017(H29)～2019(R1)

#### 若手研究

研究代表者： 安達 真弓  
課題番号： 18K12363  
課題名： ベトナム系移民の言語使用から見るコードスイッチング生起の言語的要因と社会的要因  
研究種目： 若手研究  
期間(年度)： 2018(H30)～2021(R3)

研究代表者： 児倉 徳和  
課題番号： 18K12364  
課題名： 人称標示・人称標識に注目したアルタイ諸言語の機能的類型論  
研究種目： 若手研究  
期間(年度)： 2018(H30)～2021(R3)

研究代表者： 篠田 知暁  
課題番号： 18K12518  
課題名： 初期近世西地中海地域の「境域」における異教徒間関係の形成  
研究種目： 若手研究  
期間(年度)： 2018(H30)～2020(R2)

研究代表者： 小倉 智史  
課題番号： 18K12519  
課題名： ムガル宮廷における翻訳活動—『ヨーガヴァーシシュタ』ペルシア語訳の研究  
研究種目： 若手研究  
期間(年度)： 2018(H30)～2020(R2)

研究代表者： 小森 真樹  
課題番号： 18K12533  
課題名： 20世紀後半アメリカ合衆国におけるミュージアムの文化史と近代的芸術観の形成  
研究種目： 若手研究  
期間(年度)： 2018(H30)～2020(R2)

#### 研究活動スタート支援

研究代表者： 青井 隼人  
課題番号： 17H06666  
課題名： 声門化子音の音響特性の記述と音韻論的解釈：北琉球沖縄語伊江方言の事例研究  
研究種目： 研究活動スタート支援

期間(年度): 2017(H29)~2018(H30)

#### 研究成果公開促進費

研究代表者: 河合 香吏

課題番号: 17HP5110

課題名: Others: The Evolution of Human Sociality

研究種目: 研究成果公開促進費

期間(年度): 2018(H30)

研究代表者: 海老原 志穂

課題番号: 18HP5081

課題名: アムド・チベット語文法

研究種目: 研究成果公開促進費

期間(年度): 2018(H30)

研究代表者: 岩本 佳子

課題番号: 18HP5105

課題名: 帝国と遊牧民

研究種目: 研究成果公開促進費

期間(年度): 2018(H30)

研究代表者: 熊倉 和歌子

課題番号: 18HP5110

課題名: 中世エジプトの土地制度とナイル灌漑

研究種目: 研究成果公開促進費

期間(年度): 2018(H30)

研究代表者: 竹村 和朗

課題番号: 18HP5124

課題名: 現代エジプトの沙漠開発

研究種目: 研究成果公開促進費

期間(年度): 2018(H30)

研究代表者: 若狭 基道

課題番号: 18HP6001

課題名: A Descriptive Study of the Modern Wolaytta Language

研究種目: 研究成果公開促進費

期間(年度): 2018(H30)

### 特別研究員奨励費

研究代表者： 高尾 賢一郎

課題番号： 16J01130

課題名： イスラームと社会統治に関する研究:ヒスバ制度を事例に

研究種目： 特別研究員奨励費

期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者： 杉江 あい

課題番号： 16J05363

課題名： イスラームのトランスナショナル・ネットワークとバングラデシュ村落社会の変動

研究種目： 特別研究員奨励費

期間(年度)： 2016(H28)～2019(R1)

研究代表者： 岩田 啓介

課題番号： 17J01093

課題名： 清朝のアムド支配からみたチベット仏教世界再編

研究種目： 特別研究員奨励費

期間(年度)： 2017(H29)～2019(R1)

研究代表者： 竹村 和朗

課題番号： 17J02475

課題名： 現代エジプトのワクフに関する人類学的研究

研究種目： 特別研究員奨励費

期間(年度)： 2017(H29)～2019(R1)

研究代表者： 大竹 昌巳

課題番号： 17J04094

課題名： 契丹語文法の記述的研究

研究種目： 特別研究員奨励費

期間(年度)： 2017(H29)～2019(R1)

### 国際共同研究加速基金

研究代表者： 伊藤 智ゆき

課題番号： 15KK0041

課題名： 韓国語慶尚道方言のアクセント研究(国際共同研究強化)

研究種目： 国際共同研究加速基金

期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者： 錦田 愛子

課題番号: 16KK0050  
課題名: ドイツのアラブ系移民／難民の移動と受け入れに関する学際的研究(国際共同研究強化)  
研究種目: 国際共同研究加速基金  
期間(年度): 2017(H29)～2018(H30)

研究代表者: 太田 信宏  
課題番号: 18KK0013  
課題名: 翻訳から見る近世南アジアの文化多元主義  
研究種目: 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))  
期間(年度): 2018(H30)～2021(R3)

研究代表者: 外川 昌彦  
課題番号: 18KK0024  
課題名: 現代バングラデシュの社会変動とイスラーム-地域研究の統合分析  
研究種目: 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))  
期間(年度): 2018(H30)～2022(R4)

**【東京外国語大学の AA 研以外の部局所属研究代表者の科学研究費補助金について、AA 研所員等が研究分担者となっている課題一覧(分担者中、下線が AA 研所員等)】**

#### **新学術領域研究(研究領域提案型)**

研究代表者: 松永 泰行 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授  
課題番号: 16H06547  
課題名: 国家と制度:固定化された関係性  
研究種目: 新学術領域研究(研究領域提案型)  
研究分担者: 鈴木 恵美、井上 あえか、増原 綾子、錦田 愛子、岩坂 将充、中山 裕美  
期間(年度): 2016(H28)～2020(R2)

#### **基盤研究(A)**

研究代表者: 青山 弘之 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授  
課題番号: 18H03622  
課題名: 東アラブ地域の非公的政治主体による国家機能の補完・篡奪に関する研究  
研究種目: 基盤研究(A)一般  
研究分担者: 末近 浩太、錦田 愛子、山尾 大、濱中 新吾、高岡 豊、今井 宏平、溝渕 正季  
期間(年度): 2018(H30)～2022(R4)

#### **基盤研究(B)**

研究代表者: 望月 源 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 准教授  
課題番号: 15H02794

課題名： 大規模会話コーパスの FS2vec 処理による CEFR Can-do 言語教材の開発  
研究種目： 基盤研究(B)一般  
研究分担者： 芝野 耕司、佐野 洋、藤村 知子  
期間(年度)： 2015(H27)～2018(H30)

研究代表者： 風間 伸次郎 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授  
課題番号： 15H05153  
課題名： アルタイ諸言語の語彙の総合的集成  
研究種目： 基盤研究(B)海外学術  
研究分担者： 児倉 徳和、山越 康裕  
期間(年度)： 2015(H27)～2019(R1)

研究代表者： 水野 善文 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授  
課題番号： 16H03410  
課題名： 南アジア多言語社会における複合文化のなかの文学伝承  
研究種目： 基盤研究(B)一般  
研究分担者： 太田 信宏、藤井 守男、萩田 博、丹羽 京子  
期間(年度)： 2016(H28)～2019(R1)

研究代表者： 藤村 知子 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授  
課題番号： 16H03432  
課題名： 大規模字幕コーパスを利用した Can-do リスト対応型 e ラーニング教材の研究  
研究種目： 基盤研究(B)一般  
研究分担者： 芝野 耕司、望月 源、佐野 洋、藤森 弘子  
期間(年度)： 2016(H28)～2019(R1)

研究代表者： 今井 昭夫 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授  
課題番号： 17H02229  
課題名： 近現代ベトナムにおける中国プレゼンスの諸相ー連環人文学的ベトナム地域研究  
研究種目： 基盤研究(B)一般  
研究分担者： 今村 宣勝、栗原 浩英、村上 雄太郎、野平 宗弘  
期間(年度)： 2017(H29)～2020(R2)

研究代表者： 富盛 伸夫 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 名誉教授  
課題番号： 18H00686  
課題名： アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究  
研究種目： 基盤研究(B)一般  
研究分担者： 拝田 清、矢頭 典枝、野元 裕樹、峰岸 真琴、南 潤珍、鈴木 玲子、降幡 正志、根岸

雅史、藤森 弘子、上田 広美、田原 洋樹、岡野 賢二、齋藤 スニサー

期間(年度): 2018(H30)~2020(R2)

#### 基盤研究(C)

研究代表者: 益子 幸江 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授

課題番号: 17K02676

課題名: 声調言語と非声調言語のリズムに関する研究

研究種目: 基盤研究(C)

研究分担者: 峰岸 真琴、鈴木 玲子、降幡 正志

期間(年度): 2017(H29)~2019(R1)

研究代表者: 野元 裕樹 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 准教授

課題番号: 18K00568

課題名: マレー語地域変種における受動文のマイクロ変異研究とコーパス・語彙資源開発

研究種目: 基盤研究(C)

研究分担者: 塩原 朝子、川村 よしこ

期間(年度): 2018(H30)~2021(R3)

【他大学の研究代表者の科学研究費補助金について、AA 研所員等が研究分担者となっている課題一覧(分担者中、下線が AA 研所員等)】

#### 新学術領域研究(研究領域提案型)

研究代表者: 吉田 憲司 国立民族学博物館 館長

課題番号: 16H06281

課題名: 地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化

研究種目: 新学術領域研究(研究領域提案型)

研究分担者: 中山 俊秀、園田 直子、丸川 雄三、高野 明彦、西尾 哲夫、野林 厚志、飯田 卓、卯田 宗平、寺村 裕史、平勢 隆郎、柳澤 雅之

期間(年度): 2016(H28)~2018(H30)

#### 基盤研究(S)

研究代表者: 松田 素二 京都大学文学研究科 教授

課題番号: 16H06318

課題名: 「アフリカ潜在力」と現代世界の困難の克服:人類の未来を展望する総合的地域研究

研究種目: 基盤研究(S)

研究分担者: 椎野 若菜、品川 大輔、武内 進一、阿部 利洋、太田 至、大山 修一、落合 雄彦、平野 美佐、宮地 歌織、遠藤 貢、重田 眞義、高橋 基樹、竹村 景子、永原 陽子、峯 陽一、目黒 紀夫、山越 言、山田 肖子

期間(年度): 2016(H28)~2020(R2)

研究代表者： 池田 巧 京都大学人文科学研究所 教授  
課題番号： 18H05219  
課題名： シナ＝チベット諸語の歴史的展開と言語類型地理論  
研究種目： 基盤研究(S)  
研究分担者： 大西 克也、林 範彦、星 泉  
期間(年度)： 2018(H30)～2022(R4)

#### 基盤研究(A)

研究代表者： 長澤 榮治 東京大学東洋文化研究所 教授  
課題番号： 16H01899  
課題名： イスラーム・ジェンダー学構築のための基礎的総合的研究  
研究種目： 基盤研究(A)一般  
研究分担者： 村上 薫、松永 典子、後藤 絵美、鳥山 純子、森田 豊子、黒木 英充、岩崎 えり奈、服部 美奈、岡 真理、臼杵 陽、山岸 智子、嶺崎 寛子、鷹木 恵子、小林 寧子、竹村 和朗  
期間(年度)： 2016(H28)～2019(R1)

研究代表者： 石井 香世子 立教大学社会学部 教授  
課題番号： 16H02737  
課題名： アジアの越境する子どもたちとトランスナショナル階層社会の出現に関する実証研究  
研究種目： 基盤研究(A)海外学術  
研究分担者： 床呂 郁哉、荻巢 崇世、酒井 千絵、陳 天璽、岩井 美佐紀、横田 祥子、工藤 正子  
期間(年度)： 2016(H28)～2019(R1)

研究代表者： 久間 泰賢 三重大学人文学部 准教授  
課題番号： 18H03569  
課題名： グプタ朝以降のインド仏教の僧院に関する総合的研究  
研究種目： 基盤研究(A)一般  
研究分担者： 加納 和夫、宮崎 泉、小倉 智史、苦米地 等流、望月 海慧、倉西 憲一  
期間(年度)： 2018(H30)～2021(R3)

研究代表者： 久保 智之 九州大学人文科学研究院 教授  
課題番号： 18H03578  
課題名： アルタイ諸言語を対象とした環境の変化と言語の変容に関する総合的研究  
研究種目： 基盤研究(A)一般  
研究分担者： 藤代 節、菅原 睦、江畑 冬生、林 徹、栗林 裕、山越 康裕、児倉 徳和、梅谷 博之、大崎 紀子  
期間(年度)： 2018(H30)～2020(R2)

研究代表者： 今村 真央 山形大学人文社会科学部 准教授  
課題番号： 18H03599  
課題名： ゾミア 2.0 :「東南アジア」と「南アジア」の境域における開発・民族・宗教  
研究種目： 基盤研究(A)一般  
研究分担者： 小島 敬裕、池田 一人、デスーザ ローハン、高田 峰夫、藤田 幸一、倉部 慶太、木村 真希子、大塚 行誠  
期間(年度)： 2018(H30)～2022(R4)

#### 基盤研究(B)

研究代表者： 鶴戸 聡 鹿児島大学法文教育学域法文学系 准教授  
課題番号： 26300021  
課題名： アラブ=ベルベル文学の比較地域文化的研究体制の構築  
研究種目： 基盤研究(B)海外学術  
研究分担者： 二村 淳子、石川 清子、酒井 佑輔、青柳 悦子、武内 句子、細田 和江、柳谷 あゆみ、茨木 博史  
期間(年度)： 2014(H26)～2018(H30)

研究代表者： 福嶋 伸洋 共立女子大学文芸学部 准教授  
課題番号： 15H03200  
課題名： ポスト世界文学に向けた比較詩学的共同研究の基盤構築  
研究種目： 基盤研究(B)一般  
研究分担者： 中村 隆之、中丸 禎子、鶴戸 聡、三枝 大修、細田 和江、奥 彩子、古川 哲  
期間(年度)： 2015(H27)～2018(H30)

研究代表者： 山中 弘 筑波大学人文社会系 教授  
課題番号： 16H03329  
課題名： ツーリズムにおける「スピリチュアル・マーケット」の展開の比較研究  
研究種目： 基盤研究(B)一般  
研究分担者： 外川 昌彦、岡本 亮輔、別所 裕介、安田 慎、鈴木 涼太郎、門田 岳久  
期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者： 藤代 節 神戸市看護大学看護学部 教授  
課題番号： 16H03417  
課題名： 「混成言語」から見なおすユーラシアの諸言語一言語接触と言語形成の類型を探る—  
研究種目： 基盤研究(B)一般  
研究分担者： 澤田 英夫、片山 修、岸田 文隆、岸田 泰浩、菅原 睦、早津 恵美子  
期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者： 桑原 尚子 早稲田大学法学学術院 その他(招へい研究員)

課題番号: 16H03538  
課題名: イスラーム圏における法現象の分析枠組構築に関する学際的研究  
研究種目: 基盤研究(B)一般  
研究分担者: 飯塚 正人、佐藤 やよひ、大河内 美紀、青柳 かおる、吉川 孝、辻上 奈美江  
期間(年度): 2016(H27)～2018(H30)

研究代表者: 菅原 由美 大阪大学言語文化研究科 准教授

課題番号: 16H05662  
課題名: ジャワ語文献にみるジャワのイスラーム化再考  
研究種目: 基盤研究(B)海外学術  
研究分担者: 宮崎 恒二、青山 亨  
期間(年度): 2016(H28)～2019(R1)

研究代表者: 川本 正知 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科 特任教授

課題番号: 16H05681  
課題名: ラシード・ウッディーン『歴史集成』写本のミニアチュールの総合的研究  
研究種目: 基盤研究(B)海外学術  
研究分担者: 大塚 修、杉山 雅樹、榊屋 友子、小倉 智史、松田 孝一、宇野 伸浩  
期間(年度): 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者: 櫻井 義秀 北海道大学文学研究科 教授

課題番号: 16H05712  
課題名: アジアの政教関係と新しい公共宗教論構築の地域比較研究  
研究種目: 基盤研究(B)海外学術  
研究分担者: 外川 昌彦、川田 進、矢野 秀武、藤野 陽平、高橋 沙奈美、滝澤 克彦、塚田 穂高  
期間(年度): 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者: 星埜 守之 東京大学大学院総合文化研究科 教授

課題番号: 17H02328  
課題名: 世界文化(資本)空間の史的編成をめぐる総合的研究: アフリカ・カリブの文学を中心に  
研究種目: 基盤研究(B)一般  
研究分担者: 眞島 一郎、中村 隆之、吉田 裕、小川 了、久野 量一、森本 庸介、佐久間 寛、佐々木 祐  
期間(年度): 2017(H29)～2020(R2)

研究代表者: 西尾 哲夫 国立民族学博物館グローバル現象研究部 教授

課題番号: 17H02330  
課題名: シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究

研究種目： 基盤研究(B)一般  
研究分担者： 小田 淳一、岡本 尚子  
期間(年度)： 2017(H29)～2021(R3)

研究代表者： 奥田 統己 札幌学院大学人文学部 教授  
課題番号： 17H02336  
課題名： アイヌ語現地調査資料の整理・分析および研究者アーカイブズの構築  
研究種目： 基盤研究(B)一般  
研究分担者： 中川 裕、山越 康裕  
期間(年度)： 2017(H29)～2021(R3)

研究代表者： 三浦 徹 公益財団法人東洋文庫研究部 研究員  
課題番号： 17H02381  
課題名： 寄進とワクフの国際共同比較研究:アジアから  
研究種目： 基盤研究(B)一般  
研究分担者： 林 佳世子、磯貝 健一、大河原 知樹、大月 康弘、岸本 美緒、高橋 一樹、近藤 信彰、  
五十嵐 大介  
期間(年度)： 2017(H29)～2020(R2)

研究代表者： 包 聯群 大分大学経済学部 准教授  
課題番号： 17H04524  
課題名： 消滅危機に瀕する満洲語の記録保護・教育と継承・再活性化への取り組み及び実態の解  
明  
研究種目： 基盤研究(B)海外学術  
研究分担者： 原 聖、児倉 徳和  
期間(年度)： 2017(H29)～2021(R3)

研究代表者： 杉田 映理 大阪大学人間科学研究科 准教授  
課題番号： 17H04539  
課題名： グローバルなアジェンダとなった月経のローカルな状況の比較研究  
研究種目： 基盤研究(B)海外学術  
研究分担者： 新本 万里子、小國 和子、菅野 美佐子、佐藤 峰、椎野 若菜、松尾 瑞穂、秋保 さや  
か  
期間(年度)： 2017(H29)～2019(R1)

研究代表者： 鈴木 亮子 慶應義塾大学経済学部 教授  
課題番号： 17KT0061  
課題名： 日常の相互行為における定型性:話し言葉を基盤とした言語構造モデルの構築  
研究種目： 基盤研究(B)特設分野

研究分担者： 遠藤 智子、中山 俊秀、横森 大輔、土屋 智行、柴崎 礼士郎  
期間(年度)： 2017(H29)～2020(R2)

研究代表者： 加藤 重広 北海道大学文学研究院 教授  
課題番号： 18H00661  
課題名： 研究職を離れた言語研究者が保持する言語データの適正再資源化のための基盤確立研究  
研究種目： 基盤研究(B)一般  
研究分担者： 中川 裕、塩原 朝子  
期間(年度)： 2018(H30)～2021(R3)

研究代表者： 舩田 善之 広島大学文学研究科 准教授  
課題番号： 18H00723  
課題名： 前近代中央ユーラシアの南北交通システムの総合的研究  
研究種目： 基盤研究(B)一般  
研究分担者： 鈴木 宏節、小沼 孝博、小倉 智史、中村 篤志、山本 明志、岩尾 一史  
期間(年度)： 2018(H30)～2021(R3)

研究代表者： 藤本 武 富山大学人文学部 教授  
課題番号： 18H03441  
課題名： アフリカ食文化研究の新展開：食料主権論のために  
研究種目： 基盤研究(B)一般  
研究分担者： 石山 俊、藤岡 悠一郎、小松 かおり、佐藤 靖明、石川 博樹  
期間(年度)： 2018(H30)～2021(R3)

### 基盤研究(C)

研究代表者： 包 聯群 大分大学経済学部 准教授  
課題番号： 16K02686  
課題名： 中国黒龍江省における危機に瀕するダグル語の社会言語学的研究  
研究種目： 基盤研究(C)  
研究分担者： 呉人 徳司  
期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者： 栗林 均 東北大学東北アジア研究センター 名誉教授  
課題番号： 18K00521  
課題名： 音声データベースに基づくモンゴル系諸言語の史的变化の研究  
研究種目： 基盤研究(C)  
研究分担者： 山越 康裕、佐藤 暢治  
期間(年度)： 2018(H30)～2020(R2)

研究代表者： 中村 美奈子 お茶の水女子大学基幹研究院 准教授  
課題番号： 18K02893  
課題名： モーションキャプチャデータの教師なし深層学習による舞踊特徴抽出と教育への応用  
研究種目： 基盤研究(C)  
研究分担者： 芝野 耕司  
期間(年度)： 2018(H30)～2020(R2)

### 挑戦的研究

研究代表者： 久保 智之 九州大学人文科学研究院 教授  
課題番号： 17H06182  
課題名： 満洲語の歴史社会言語学的研究—言語学と歴史学からの解明—  
研究種目： 挑戦的研究(開拓)  
研究分担者： 承 志、児倉 徳和  
期間(年度)： 2017(H29)～2021(R3)

研究代表者： 大沼 保昭 東京大学大学院法学政治学研究科 名誉教授  
課題番号： 17H06187  
課題名： 世界遺産の法・政治・歴史・建築学の視点からの解明：新たな学際研究への挑戦  
研究種目： 挑戦的研究(開拓)  
研究分担者： 赤松 加寿江、伊藤 毅、稲葉 信子、金 惠京、西海 真樹、小野寺 純子、川村 陶子、  
近藤 信彰、齋藤 民徒、久保庭 慧、石井 由梨佳、松田 法子  
期間(年度)： 2017(H29)～2020(R2)

研究代表者： 郡司 幸夫 早稲田大学理工学術院 教授  
課題番号： 17K18465  
課題名： 芸術に基盤を求める創造性志向型意識理論の構築  
研究種目： 挑戦的研究(萌芽)  
研究分担者： 中村 恭子  
期間(年度)： 2017(H29)～2019(R1)

### 挑戦的萌芽研究

研究代表者： 中谷 英明 龍谷大学 世界仏教文化研究センター 客員研究員  
課題番号： 16K12544  
課題名： インド古典のフレーズインデックス付き統合アーカイブ構築とフレーズ分析  
研究種目： 挑戦的萌芽研究  
研究分担者： 芝野 耕司  
期間(年度)： 2016(H28)～2019(R1)

研究代表者：野口 靖 東京工芸大学芸術学部 教授

課題番号：16K13128

課題名：ケニア都市部における人々の移動史と居住環境に関する民族誌デジタルアーカイブ研究

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究分担者：椎野 若菜

期間(年度)：2016(H28)～2019(R1)

#### 国際共同研究加速基金

研究代表者：乾 秀行 山口大学人文学部 准教授

課題番号：18KK0009

課題名：エチオピア諸語の記述とドキュメンテーション：ソーシャル・イノベーションにむけて

研究種目：国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))

研究分担者：池田 潤、高橋 洋成、中尾 周一郎、林 由香

期間(年度)：2018(H30)～2021(R3)

研究代表者：松里 公孝 東京大学大学院法学政治学研究科(法学部) 教授

課題番号：18KK0036

課題名：ロシアの軍事大国化と中東、環黒海地域

研究種目：国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))

研究分担者：小泉 悠、黒木 英充、大串 敦、錦田 愛子、今井 宏平

期間(年度)：2018(H30)～2021(R3)

## II-4 研究者コミュニティと一般社会に関わられた研究プラットフォームの構築

### II-4.1 若手研究者養成プログラム

#### II-4.1.1 言語研修の実施状況

##### ヨルバ語

期間:2018年8月16日(木)~2018年9月13日(木)

時間数:120時間

講師:塩田勝彦、Olagoke ALAMU(オラゴケ アラム)

場所:AA 研

受講者:4 (2)

修了者:3 (1)

##### メエ語(エカリ語)

期間:2018年9月3日(月)~2018年9月14日(金)

時間数:50時間

講師:塩原朝子、Nawipa Dance(ナウイパ ダンチェ)

場所:AA 研

受講者:10 (1)

修了者:10 (1)

##### 土族語

期間:2018年8月1日(水)~2018年8月31日(金)

時間数:120時間

講師:塩谷茂樹、何 菊紅(カ キクコウ)

場所:貸し会議室 日本研修センター十三

受講者:5 (0)

修了者:4 (0)

※受講者・修了者の( )内の数字は東京外国語大学学部・大学院履修生の数

#### II-4.1.2 フィールド言語学ワークショップ実施状況

##### 1. 文法研究ワークショップ(1件)

## 第14回 動詞連続の諸問題

日時:2019年1月12日(土)13:00~17:00

場所:AA研 304号室

発表者:倉部慶太(AA研)、山本恭裕(日本学術振興会/京都大学大学院)、伊藤雄馬(富山国際大学)、仲尾周一郎(AA研共同研究員、大阪大学)

## 2. テクニカル・ワークショップ(4件)

言語ドキュメンテーションのためのコンピューターソフトウェア

日時:2018年12月12日(水)14:00~16:00

場所:AA研 304号室

講師:Timothy Brickell 博士(AA研フェロー、メルボルン大学)

言語ドキュメンテーションのためのコンピューターソフトウェア

日時:2019年1月9日(水)14:00~16:00

場所:AA研 304号室

講師:Timothy Brickell 博士(AA研フェロー、メルボルン大学)

言語ドキュメンテーションのためのコンピューターソフトウェア

日時:2019年2月15日(金)14:00~16:00

場所:AA研 304号室

講師:Timothy Brickell 博士(AA研フェロー、メルボルン大学)

研究をみせる:科学コミュニケーションの理念と技

日時:2019年3月15日(金)10:00~16:00

場所:AA研 304号室

司会:青井隼人(AA研特任研究員)

登壇者:新永悠人(国立国語研究所)、金セツピョル(総合地球環境学研究所)、鴨川光(ジャパンGEMSセンター)

## 3. 言語フィールド調査ワークショップ@宮古島

日時:2018年12月16日(日)~23日(日)

場所:沖縄県宮古島市池間地域

講師:中山俊秀(AA研)、大野剛(アルバータ大学)

## II-4.1.3 中東☆イスラーム関連セミナー実施状況

### 中東☆イスラーム研究セミナー

期間:2018年12月22日~23日

場所:AA研マルチメディアセミナー室(306)

内容:博士論文執筆予定者を対象として、受講者による研究発表とそれを受けた議論を通して、研究のいっそうの深化と討論スキルの向上をはかる。

主催:AA 研;協賛:地域研究コンソーシアム

12 月 22 日(土)

・14:00-14:30 所長挨拶 事務連絡 日程説明 受講生自己紹介

・14:40-16:40 兼定愛(慶應義塾大学SFC研究所 上席所員)

「*Lā Tahzan*における悲しみの乗り越え方—クルアーンの現代的解釈の展開」

司会: 荻谷康太

・17:00-19:00 懇談会 [会場:大学会館 2 階 特別食堂]

12 月 23 日(日)

・13:30-15:30 坂田舜(九州大学大学院)

「トルコ共和国初期における「トルコ人女性」をめぐる思想の一事例」

司会: 高松洋一

・15:45-16:45 野田 仁 (AA研)

「私の博士論文」

司会: 熊倉和歌子

・17:00-18:00 感想・評価 修了証授与

### 中東☆イスラーム教育セミナー

期間:2018 年 9 月 13 日~16 日

場所:AA 研大会議室(303)

内容:大学院生を対象に、中東・イスラーム研究に関する講義などにより知識の幅を広げる。

主催:AA 研;協賛:地域研究コンソーシアム

9 月 13 日(木)

・13:00-14:10 所長挨拶 趣旨説明 日程説明 事務連絡 自己紹介

司会:近藤信彰

・14:20-15:30 <受講生発表1> 木下実紀(大阪大学大学院)

「ミールザー・ハビーブ・エスファハーニーによる翻案作品『ハージーバーバーの冒険』から見る近代批判精神の発露とその展開」

司会:近藤信彰

・15:45-17:45 [セミナー1] 藤井守男(東京外国語大学)

「神秘主義潮流の展開過程からみるペルシア文学の諸相」

司会:近藤信彰

・18:00-20:00 情報交換会 [会場:大学会館 2 階 特別食堂]

9 月 14 日(金)

・11:20-12:30 <受講生発表2> 今城尚彦(東京外国語大学大学院)

「イスラーム復興現象としてのアレヴィー復興—トルコ都市部におけるアレヴィーの実践に関する人類学的研究」

司会:高松洋一

・13:30-15:30 [セミナー2] 中村光男(千葉大学名誉教授)

「私のイスラーム開眼—半世紀の東南アジア研究者歴」

司会:床呂郁哉

・15:45-17:45 [セミナー3] 苅谷康太 (AA 研)

「西アフリカにおけるムスリムと非ムスリムの境界」

司会:野田仁

9月15日(土)

・10:00-11:10 <受講生発表3> 石田真夕 (Mount Allison University)

「異文化環境でのムスリムとジェンダー—カナダと日本の比較」

司会:黒木英充

11:20-12:30 <受講生発表4> 賀川恵理香 (京都大学大学院)

「ヴェールを纏う女性たちの語り—現代パキスタン都市部におけるパルダ実践を事例として」

司会:近藤信彰

・13:30-15:30 [セミナー4] 嶺崎寛子 (愛知教育大学)

「中東・イスラーム研究とジェンダー学と人類学—学際的研究のあり方を問う」

司会:飯塚正人

・15:45-17:45 [セミナー5] 黒木英充 (AA 研)

「レバノン・シリア移民研究の地平—移動する人間がつくり出す空間の意味」

司会:熊倉和歌子

9月16日(日)

・10:50-12:00 <受講生発表5> 佐々木啓介 (東京大学大学院)

「トルコ共和国による対外文化政策—TIKA (トルコ国際協力調整庁) を事例として」

司会:野田仁

・13:00-14:10 <受講生発表6> 岩田和馬 (東京外国語大学大学院)

「18世紀イスタンブルにおける炭流通と荷役組合」

司会:近藤信彰

・14:25-16:25 [セミナー6] 高松洋一 (AA 研)

「18世紀のオスマン朝における書物の収集・利用—マフムト1世の設立したアヤソフィヤ図書館を中心に」

司会:野田仁

・16:35-17:35 感想・評価 修了証授与

ポスター発表:

岡本多久実 (中央大学大学院); 高橋舞子 (筑波大学大学院); 奈須健 (近畿大学工業高等専門学校);

三橋咲歩 (奈良女子大学大学院)

### ペイルート若手研究者報告会

期間:2018年11月30日~12月1日

場所:Japan Center for Middle Eastern Studies, Beirut, Lebanon

内容:博士論文執筆予定の大学院生、ポスドク研究者を中心として若手研究者を対象に、中東・イスラ

ームに関する研究を英語で発表し、レバノン及び周辺国の専門研究者からのコメントを受けて討論する。  
主催:AA 研

Friday, November 30

•15:00-15:05 Welcome Address by Aiko Nishikida (Head, JaCMES / ILCAA)

Chair: Hidemitsu Kuroki (ILCAA)

•15:05-15:50 Manami Goto (Ph.D. Candidate, The University of Exeter)

*Changing attitude towards face masking: the case of Larak Island in the Persian Gulf*

Commentator: Prof. Livia Celine Wick (American University of Beirut)

•15:50-16:35 Yusuke Motani (Ph.D. Candidate, The University of Tokyo)

*Financial Administration in Syria under the Rule of Muhammad Ali*

Commentator: Prof. Samir Seikaly (American University of Beirut)

•16:35 -16:50 Coffee Break

•16:50-17:35 Hisashi Obuchi (Ph.D. Candidate, The University of Tokyo)

*Logic and the Conventionalist Ethics of Zayn al-Dīn al-Kaššī, the Disciple of Faḥr al-Dīn al-Rāzī*

Commentator: Prof. Paul Ballanfat (Galatasaray University)

Saturday, December 1

Chair: Nobuaki Kondo (ILCAA)

•10:30-11:15 Saki Yamamoto (Ph.D. Candidate, Ochanomizu University, Tokyo)

*Impact of Women-Owned Small Business on Familial Relations in Contemporary Algeria*

Commentator: Prof. Yusuf Sidani (American University of Beirut)

•11:15-12:00 Manami Ueno (Research Fellow of the Urban-Culture Research Center at Osaka City University)

*Reintroduction of Religious Education to Turkish Public Schools in the 1940s*

Commentator: Dr. Umut Azak (Istanbul Okan University)

•12:00-12:15 Coffee Break

•12:15-13:00 Shinwoo Kim (Ph.D. Candidate, Sophia University, Tokyo)

*The Social and Economic History of Regional Disparities in Tunisia*

Commentator: Dr. Seiko Sugita (UNESCO)

•13:00-13:05 Closing Remarks by Hidemitsu Kuroki (JaCMES/ ILCAA)

Observers: Pierre Azar (Saint Joseph University); Maram Daher (Lebanese University); Massoud Daher (Lebanese University); Hideaki Hayakawa (Lebanese University); Ai Odoriba (Embassy of Japan); Mitsuhiro Wada (Embassy of Japan)

ILCAA staffs: Hidemitsu Kuroki; Nobuaki Kondo; Aiko Nishikida

## オスマン文書セミナー

期間:2019年1月12日~13日

場所:AA 研大会議室(303)

内容:オスマン朝の公文書のうち、帳簿文書を用いた演習形式によるセミナー

主催:基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」;共催:共同研究課題「オスマン文書史料の基礎的研究」、科研費基盤 B「イスラーム圏における簿記史料の通時的・共時的的研究」(代表者:高松洋一(AA 研)、課題番号:17H02398)

1 月 12 日(土)

- ・14:00-14:15 趣旨説明 講師・自己紹介
- ・14:20-16:00 財政関係の文書とスィヤークト書体の概説
- ・16:20-18:00 文書の講読 1

1 月 13 日(日)

- ・13:00-14:40 文書の購読 2
- ・15:00-16:40 文書の購読 3
- ・17:00-18:00 総合討論

## II-4.1.4 文化／社会人類学研究セミナー実施状況

### 文化／社会人類学研究セミナー

日時:2018 年 11 月 17 日(土)13:00～19:00

会場:AA 研 304・306 室

共催:日本文化人類学会「次世代育成セミナー」

#### プログラム

第 1 部 挨拶(13:00～13:05)第 1 会場(304)

- ・開会の挨拶 松村圭一郎(岡山大学)

第 2 部 発表(13:05～17:45)

第 1 会場(304)

- ・游乃蕙(東京大学大学院)

「文化人類学からみる日本統治期台湾文学—佐藤春夫の『日月潭に遊ぶ記』『殖民地の旅』を中心に」

コメント:植野弘子(東洋大学)

- ・アルベルトゥス=トーマス・モリ(AA 研)

「華人キリスト者による『短期宣教』への一考察」

コメント:藏本龍介(東京大学)

- ・横田浩一(亜細亜大学)

「村の祭りと老人たち—中国広東省潮汕地域村落における民俗宗教と自律性」

コメント:片岡樹(京都大学)

第 2 会場(306)

- ・合地幸子(AA 研)

「インドネシア・ジャワの家族と高齢者ケア—見舞いから看取りまでの社会的動態を中心に」

コメント:鈴木七美(国立民族学博物館)

・川瀬由高(日本学術振興会／東京大学大学院)

「イスの坐りかた—中国の農民生活にみる予期された偶発性とアフオーダンス」

コメント:松村圭一郎(岡山大学)

・岩瀬裕子(首都大学東京大学院)

「協働的身体の知に関する試論—スペイン・カタルーニャ州、人間の塔の最下部を事例として」

コメント:菅原和孝(京都大学)

・講評:床呂郁哉(AA 研)、松村圭一郎(岡山大学) (17:50～18:00) 第1会場(304)

第3部 特別企画・挨拶(18:00～19:00) 第1会場(304)

・『文化人類学』、*Japanese Review of Cultural Anthropology* の編集委員に聞く執筆・投稿・査読に関わるあれこれ

情報提供:綾部真雄(首都大学東京);トム・ギル(明治学院大学)

・閉会の挨拶 西井涼子(AA 研)

## II-4.1.5 大学院教育の現在

大学院総合国際学研究科博士後期課程へのAA研教員の協力

荒川慎太郎

・アジア・アフリカフィールド言語学 1・2

飯塚正人

・中東言語文化論／アジア歴史文化論Ⅲ／アジア・アフリカフィールド地域研究 1・2

石川博樹

・アフリカ歴史文化論／アジア・アフリカフィールド地域研究 1・2

太田信宏

・アジア・アフリカフィールド地域研究 1・2

小田淳一

・アジア・アフリカフィールド地域研究 1・2

荻谷康太

・アジア・アフリカフィールド地域研究 1・2

河合香吏

・アフリカ歴史文化論／アジア・アフリカフィールド人類学 1・2

栗原浩英

・アジア歴史文化論Ⅱ／アジア・アフリカフィールド地域研究 1・2

呉人徳司

・言語基礎論／アジア・アフリカフィールド言語学 1・2

黒木英充

・アジア歴史文化論Ⅲ／アジア・アフリカフィールド地域研究 1・2

近藤信彰

- ・アジア歴史文化論Ⅲ／アジア・アフリカフィールド地域研究 1・2
  - ・アジア・アフリカフィールドワーク 1・2
- 澤田英夫
- ・東南アジア言語論／アジア・アフリカフィールド言語学 1・2
- 椎野若菜
- ・アフリカ言語文化論／アジア・アフリカフィールド人類学 1・2
- 塩原朝子
- ・アジア・アフリカフィールド言語学 1・2
- 品川大輔
- ・アジア・アフリカフィールド言語学 1・2
- 高島淳
- ・アジア・アフリカフィールド地域研究 1・2
- 高松洋一
- ・アジア歴史文化論Ⅲ／アジア・アフリカフィールド地域研究 1・2
- 外川昌彦
- ・比較社会論／アジア歴史文化論Ⅲ／アジア・アフリカフィールド地域研究 1・2
- 床呂郁哉
- ・文化人類学／アジア・アフリカフィールド人類学 1・2
- 中山俊秀
- ・言語基礎論／アジア・アフリカフィールド言語学 1・2
- 西井凉子
- ・アジア歴史文化論Ⅱ／アジア・アフリカフィールド人類学 1・2
- 野田仁
- ・アジア・アフリカフィールド地域研究 1・2
- 深澤秀夫
- ・文化人類学／アジア・アフリカフィールド人類学 1・2
- 星泉
- ・言語基礎論／アジア・アフリカフィールド言語学 1・2
- 峰岸真琴
- ・言語基礎論／アジア・アフリカフィールド言語学 1・2
- 山越康裕
- ・アジア・アフリカフィールド言語学 1・2
- 渡辺己
- ・言語基礎論／アジア・アフリカフィールド言語学 1・2
- 飯塚正人・石川博樹・太田信宏・苅谷康太・河合香史・栗原浩英・黒木英充・近藤信彰・椎野若菜・高島淳・高松洋一・外川昌彦・床呂郁哉・西井凉子・錦田愛子・野田仁・深澤秀夫
- ・比較社会論／アジア・アフリカフィールド地域研究 1・2
- 飯塚正人・苅谷康太・黒木英充・近藤信彰・高松洋一・錦田愛子・野田仁
- ・中東言語文化論／アジア歴史文化論Ⅲ／アジア・アフリカフィールド地域研究 2

## 大学院総合国際学研究所博士前期課程への AA 研教員の協力

飯塚正人

・アジア・アフリカフィールドサイエンス基礎 2

栗原浩英

・アジア・アフリカ政治経済論／アジア・アフリカフィールドサイエンス地域研究 1・2

近藤信彰

・アジア・アフリカ歴史文化論／アジア・アフリカフィールドサイエンス地域研究 1

塩原朝子

・アジア・アフリカフィールドサイエンス基礎 1

品川大輔

・アジア・アフリカフィールドサイエンス言語研究 2

澤田英夫

・アジア・アフリカフィールドサイエンス言語研究 1

中山俊秀

・修士論文修士研究ゼミ 1・2

西井涼子

・アジア・アフリカフィールドサイエンス実践研究 2

・修士論文修士研究ゼミ 1・2

深澤秀夫

・アジア・アフリカフィールドサイエンス実践研究 1

峰岸真琴

・アジア・アフリカフィールドサイエンス言語研究 1・2

山越康裕

・アジア・アフリカフィールドサイエンス言語研究 1

飯塚正人・苅谷康太・黒木英充・近藤信彰・高松洋一・錦田愛子・野田仁

・アジア・アフリカ歴史文化論／アジア・アフリカフィールドサイエンス地域研究 1

## II-4.1.6 研究機関研究員／特任研究員および日本学術振興会特別研究員

### 【特任研究員】

青井 隼人(あおい はやと)

「多言語・多文化共生に向けた循環型言語研究体制の構築」(Linguistic Dynamics Science 3: LingDy3)

任期: 2017.4.1 ～2020.3.31

研究主題: 琉球語学、音声学、音韻論

安達 真弓(あだち まゆみ)

「多言語・多文化共生に向けた循環型言語研究体制の構築」(Linguistic Dynamics Science 3: LingDy3)

任期: 2016.12.1～2019.3.31

研究主題: ベトナム語、語用論

高橋 洋成(たかはし よな)

情報資源利用研究センター

任期: 2018.2.1～2021.1.31

研究主題: ヘブライ語、セム諸語、アフロ・アジア諸語の言語学

中村 恭子(なかむら きょうこ)

任期: 2014.4.1～2018.9.30

研究主題: 美術(日本画)

\*2018年10月1日よりAA研フェロー

篠田 知暁(しのだ ともあき)

基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」

中東研究日本センター (Japan Center for Middle Eastern Studies, JaCMES)

任期: 2019.3.1～2022.2.28

研究主題: 北アフリカ史、境域

早田 清冷(はやた すずし)

情報資源利用研究センター

任期: 2018.9.1～2021.8.31

研究主題: 言語学、古典満州語

#### 【研究機関研究員】

池田 昭光(いけだ あきみつ)

任期: 2017.7.1～2019.3.31

研究主題: 人類学、中東地域研究(特にレバノン)

小山内 優子(おさない ゆうこ)

任期: 2017.2.1～2018.6.30

研究主題: 中期朝鮮語文法、朝鮮語史

吉田 優貴(よしだ ゆたか)

任期: 2017.12.1～2019.3.31

研究主題: 身体群の共振、手話、ヴィジュアル・メソッド、ケニア

石黒 芙美代(いしぐろ ふみよ)

任期: 2018.9.1～2019.8.31(ただし年度更新)

研究主題: 美術教育、アジアの文化・芸術

#### 【日本学術振興会特別研究員】

岩田 啓介(いわた けいすけ)

研究課題名: 清朝のアムド支配からみたチベット仏教世界再編

受入期間:2017.4.1～2020.3.31

受入教員:星 泉

**大竹 昌巳(おおたけ まさみ)**

研究課題名:契丹語文法の記述的研究

受入期間:2017.4.1～2020.3.31

受入教員:山越 康裕

**杉江 あい(すぎえ あい)**

研究課題名:イスラームのトランスナショナル・ネットワークとバングラデシュ村落社会の変動

受入期間:2016.4.1～2019.9.30

受入教員:外川 昌彦

**高尾 賢一郎(たかお けんいちろう)**

研究課題名:イスラームと社会統治に関する研究:ヒスバ制度を事例に

受入期間:2016.4.1～2019.3.31

受入教員:飯塚 正人

**竹村 和朗(たけむら かずあき)**

研究課題名:現代エジプトのワクフに関する人類学的研究

受入期間:2017.4.1～2020.3.31

受入教員:近藤 信彰

## II-4.2 国内連携研究活動

### II-4.2.1 地域研究コンソーシアム

コンソーシアム幹事組織として運営に関わり、先導的な役割を果たした。

### II-4.2.2 国内研究者の受け入れ(フェロー等)

#### 【フェロー】

**梅川 通久(うめかわ みちひさ)**

研究主題:定量的手法による東南アジア大陸部における社会的多階層構造の総合的分析法の確立

研究期間:2015.9.1～2018.8.31

受入教員:中山 俊秀

研究成果:

1. 口頭発表:「『テーマ適応性の高い自律的な研究人材』に関する一考察:博士人材追跡調査データの検討をもとに」, 研究イノベーション学会第33回年次学術大会, 2018.10.27, 東京大学本郷キャンパス.

## 受賞

文部科学省科学技術・学術政策研究所科学技術・学術政策研究所所長賞(2018.12.26)

海老原 志穂(えびはら しほ)

研究主題:現代方言と文献を用いたチベット語の通時的研究

研究期間:2018.4.1~2021.3.31

受入教員:星 泉

## 研究成果:

1. 著書:『アムド・チベット語文法』, 2019.2, ひつじ書房.
2. 論文:「アムド・チベット語の使役」, 『シナ=チベット系諸言語の文法現象 2 使役の諸相』(池田巧編), 1-14, 2019.3. (査読有)
3. 論文:“Linguistic Features of Tibetan Proverbs with a Focus on Amdo”, *Journal of Chiba University Eurasian Society*, 20, 47-70, 2018.12.
4. 論文:「チベット文学にみられるムラツツ」, 『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』(星泉, 海老原志穂, 岩田啓介, 大川謙作, 三浦順子編) 6, 82-83, 2019.3.
5. 論文:「チベット語絵本事情」, 『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』(星泉, 海老原志穂, 岩田啓介, 大川謙作, 三浦順子編) 6, 88-92, 2019.3.
6. 論文:「『ゲンボとタシの夢見るブータン』と三つの視点」, 『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』(星泉, 海老原志穂, 岩田啓介, 大川謙作, 三浦順子編) 6, 183-185, 2019.3.
7. 口頭発表:「『チベット語圏文学』の周辺 : シッキム、ラダック、ブータン におけるチベット語文学」, 第2回「チベット文学と映画制作の現在」国際シンポジウム, 2019.3.17, AA 研.
8. 口頭発表:“Reconsideration on Tibetan Word List Described by Nikolai Prejevalsky”, Workshop on Silk Road Languages from Chang’an to Istanbul (Istanbul University, Faculty of Letters Department of Modern Turkic Languages and Literatures), 2018.12.17, Uçhisar / Nevşehir, Cappadocia, Turkey.
9. 講演:「チベット牧畜文化辞典の活用・応用の事例」, 第66回日本チベット学会, 2018.11.16, 駒澤大学.

## 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 海老原 志穂

課題番号: 26770137

課題名: 東西方言から見たチベット語の基層の研究

研究種目: 若手研究(B)

期間(年度): 2014~2018

科研費:

研究代表者: 海老原 志穂

課題名: アムド・チベット語文法  
研究種目: 研究成果公開促進費  
期間(年度): 2018

岡崎 彰(おかざき あきら)

研究主題: 夢・笑い・分身・情動・想像に関する社会人類学的研究

研究期間: 2018.4.1～2021.3.31

受入教員: 深澤 秀夫

研究成果:

1. 論文: “Accommodating Nightmares: How to Cope with Anxieties in a Sudanese Refugee Community”, *International Symposium “Coping with Vertiginous Realities”, 6 October 2018* (ed. by Ryoko Nishii), 33-37, 2019.3, ILCAA.
2. 書評: “Commentary 1”, *Disability and Affect: Proceedings of Two International Symposiums about Art* (ed. by Yutaka Sakuma and Yukako Yoshida), 63-67, 2019, ILCAA.
3. 口頭発表: “Accommodating Nightmares: How to Cope with Anxieties in a Sudanese Refugee Community”, *International Symposium “Coping with Vertiginous Realities”, 2018.10.6, ILCAA.*
4. 口頭発表: 「ダンスと夢: 能動でも受動でもなく、文化でも自然でもなく、そして精神でも肉体でもなく」, 国立民族学博物館研究プロジェクト「音楽する身体間の相互作用を捉える: ミュージッキングの学際的研究」2018年度第4回研究会, 2019.2.23, 国立民族学博物館.

奥田 統己(おくだ おさみ)

研究主題: アイヌ語資料のアーカイブス化準備およびアイヌ語の記述的研究

研究期間: 2016.4.1～2019.3.31

受入教員: 山越 康裕

研究成果:

1. 論文: 「“地鎮祭”のアイヌ語: 呼称および祈詞の事例について」, 『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』4, 61-71, 2019.3. (査読有)
2. 論文: 「千歳地方の神謡の韻律的志向性」, 『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』4, 73-78, 2019.3. (査読有)
3. 口頭発表: 「千歳地方の神謡の韻律: アイヌ語における アクセント志向の韻律の地域的広がり」, 日本北方言語学会第1回研究会, 2018.12.9, AA 研.
4. 口頭発表: 「博物館展示とアイヌ語」, 2018年度アイヌ文化財専門職員等研修会, 2019.1.23, 北海道庁赤れんが庁舎.
5. 口頭発表: 「アイヌ語の韻律: 周辺諸民族との歴史的関係を見通して」, 第3回叙事詩研究会, 2019.3.25, 千葉大学.

木俣 美樹男(きまた みきお)

研究主題: 信仰環境とエコロジズムに関する比較研究

研究期間:2017.4.1～2020.3.31

受入教員:太田 信宏

**研究成果 :**

1. 論文:「九州・沖縄地方における雑穀農耕文化複合」,『民族植物学ノート』 11, 7-50, 2018.7.
2. 論文:「自分で日本国憲法を考える、第 2 報 憲法に書き加える環境原則」,『民族植物学ノート』 11, 51-55, 2018.7.
3. 論文:「信仰の個人主義を探る:発端:科学への妄信を越えるために」,『民族植物学ノート』 11, 56-62, 2018.7.
4. 論文:「先真文明時代への覚書 5. 文明の野蛮へ退行」,『民族植物学ノート』 12, 17-36, 2019.3.
5. 論文:「自分で日本国憲法を考える 3.民族植物学の視点から憲法に環境原則を加える提案のゆくえ」,『民族植物学ノート』 12, 37-57, 2019.3.
6. 口頭発表:「家族・地域・国レベルでの食料安全保障と環境」,環境文明 21 シンポジウム「憲法に環境(持続性)原則の導入を」,2018.11.6,衆議院第1議員会館.
7. 総説・解説:木俣美樹男「雑穀は世界を救う:従属ではなく、「共生」へ」『自然栽培』 18, 20-28, 2019.3.

**古谷 伸子(こや のぶこ)**

研究主題:タイにおける民間治療の社会的役割と潜在力に関する人類学的研究

研究期間:2017.5.1～2020.4.30

受入教員:西井 涼子

**研究成果 :**

1. 論文:「民間医療復興の地域的特徴について:東北タイ・サコンナコン県の事例から」,『哲学論集』 65, 23-37, 2019.2.(査読有)

**佐藤 公彦(さとう きみひこ)**

研究主題:近現代の内モンゴルの民族主義と日本:徳王の生涯とその漢族に対する自治運動を中心に

研究期間:2018.4.1～2021.3.31

受入教員:栗原 浩英

**芝野 耕司(しばの こうじ)**

研究主題:大規模字幕コーパスによる日本語話し言葉研究と深層学習研究とを基盤とする革新的日本語 eラーニングシステムの研究開発

研究期間:2018.4.1～2020.3.31

受入教員:黒木 英充

**競争的研究資金**

科研費:

研究代表者: 中村 美奈子

課題番号: 18K02893

課題名: モーションキャプチャデータの教師なし深層学習による舞踊特徴抽出と教育への応用

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2018～2020

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 藤村 知子

課題番号: 16H03432

課題名: 大規模字幕コーパスを利用した Can-do リスト対応型 e ラーニング教材の研究

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2016～2019

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 中谷 英明

課題番号: 16K12544

課題名: インド古典のフレーズインデックス付き統合アーカイブ構築とフレーズ分析

研究種目: 挑戦的萌芽研究

期間(年度): 2016～2018

\* 研究分担者として参加

科研費:

研究代表者: 望月 源

課題番号: 15H02794

課題名: 大規模会話コーパスの FS2vec 処理による CEFR Can-do 言語教材の開発

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2015～2018

\* 研究分担者として参加.

清水 昭俊(しみず あきとし)

研究主題: 日本における人類学の歴史的展開: 時代状況との応答

研究期間: 2018.11.5～2021.11.4

受入教員: 西井 涼子

新谷 忠彦(しんたに ただひこ)

研究主題: ビルマの危機言語に関する緊急調査研究

研究期間: 2018.4.1～2020.3.31

受入教員: 澤田 英夫

研究成果:

1. 著書: *Linguistic Survey of Tay Cultural Area No.117 The Makuri Language*, 2018. 6, ILCAA.

2. 著書:*Linguistic Survey of Tay Cultural Area No.118 The Sonkan Kayan Language*, 2018. 7, ILCAA.
3. 著書:*Linguistic Survey of Tay Cultural Area No.119 The Kokak Language*, 2018. 8, ILCAA.
4. 著書:*Linguistic Survey of Tay Cultural Area No.120 The Dosanbu Kayan Language*, 2018. 9, ILCAA.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 新谷 忠彦

課題番号: 18H00663

課題名: タイ文化圏に関する言語事典の編纂に向けて

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2018~2022

科研費:

研究代表者: 倉部 慶太

課題番号: 17H04523

課題名: ビルマの危機言語に関する緊急調査研究

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2018

\* 研究分担者として参加

#### スニサー・ウィタヤーパンヤーノン(齋藤)(サイトウ スニサー)

研究主題: タイ語会話の分析にもとづく日本人向けタイ語教材開発に関する研究

研究期間: 2018.4.1~2019.3.31

受入教員: 峰岸 真琴

#### 研究成果:

1. 著書:『タイ語駅伝らくらく文字マスター』, 2019.4, 三修社.
2. 口頭発表:「タイ語での一人称表現使用実態とタイ語教育への活用」, 「アジア諸語の言類型と社会・文化的多様性を考慮したCEFR能力記述方法の開発研究」第3回研究会, 2018.12.7, 東京外国語大学.
3. 口頭発表:「タイ語での一人称表現使用実態とタイ語教育への活用」, 外国語教育学会(JAFLE)第22回研究報告大会, 2018.12.15, 東京外国語大学.
4. 口頭発表:“Interpersonal Meaning Annotation for Asian Language Corpora: The Case of TUFS Asian Language Parallel Corpus (TALPCo)”, 言語処理学会第25回年次大会, 2019.3.14, 名古屋大学.

#### 中見 立夫(なかみ たつお)

研究主題: 清朝およびロシア帝国による内陸アジアにおける人口調査事業の研究

研究期間: 2017.4.1~2020.3.31

受入教員: 野田 仁

#### 研究成果:

1. 論文：“On Babujab and His Troops: Inner Mongolia and the Politics of Imperial Collapse, 1911–21”, *Russia's Great War and Revolution in the Far East: Re-Imagining the Northeast Asian Theater, 1914-22* (ed. by David Wolff, Shinji Yokote, and Willard Sunderland), 352-368, 2018, Slavica, Bloomington, Indiana, USA.
2. 書評:「中央ユーラシア」の境界, 『中央ユーラシア史研究入門』コラム 17, 208-209, 2018.4.
3. 書評:「ティフヴィンスキーロシア学士院会員の訃報と先生への想いで」, 『C e B e p (セーヴェル)』 [ハルビン・ウラジオストクを語る会]第 34 号[ロシア革命 100 周年記念号], 191-194, 2018.3.
4. 講演:「石濱純太郎のめざした「東洋学」:その学術活動と収書」, 関西大学東西学術研究所 石濱純太郎没後 50 年記念国際シンポジウム「東西学術研究と文化交渉」, 2018.10.27, 関西大学千里山キャンパス 以文館.

### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 中見 立夫

課題番号: 16H03462

課題名: "帝国" 周縁部における国勢調査・人口調査の比較研究

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2016~2018

中村 恭子(なかむら きょうこ)

研究主題:美術(日本画)

研究期間:2018.10.1~2021.9.30

受入教員:西井 涼子

研究成果:

1. 著書:『TANKURI 創造性を撃つ』, 2018.12, 水声社
2. 論文:“Entanglement of Art Coefficient, or Creativity”, *Foundations of Science*, 2019.2.23. DOI: <https://doi.org/10.1007/s10699-019-09586-8> (査読有)
3. 論文:“Dancing Chief in the Brain or Consciousness as an Entanglement”, *Foundations of Science*, 2019.2.18. DOI: <https://doi.org/10.1007/s10699-019-09585-9> (査読有)
4. 口頭発表:“Entanglement of Vision and the Outside, Its Painting Expression”, *Worlds of Entanglement 2019*, 2019.3.8, Instituto de Filosofía y Ciencias de la Complejidad, Santiago, Chile.
5. 口頭発表:“Subjective Non-locality in Cognitive System”, *Worlds of Entanglement 2019*, 2019.3.8, Instituto de Filosofía y Ciencias de la Complejidad, Santiago, Chile.
6. 招待講演:「花喰鳥を待つ」, 第 13 回内部観測研究会, 2019.3.15, 早稲田大学.

### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 中村 恭子

課題番号: 18K18478

課題名: 芸術係数の論理的進化と実装

研究種目： 挑戦的研究(萌芽)

期間(年度)： 2018～2020

科研費：

研究代表者： 郡司 幸夫

課題番号： 17K18465

課題名： 芸術に基盤を求める創造性志向型意識理論の構築

研究種目： 挑戦的研究(萌芽)

期間(年度)： 2018～2019

\*研究分担者として参加

**林 徹(はやし とおる)**

研究主題:ダイクシス表現における社会・文化的コンテクスト

研究期間:2018.4.1～2021.3.31

受入教員:児倉 徳和

**研究成果：**

1. 講演：“Fifteen Years in Kreuzberg : Change in Language Use and Attitudes among Turkish-German Bilingual Students”, Guest Lecture, Fachbereich Geschichtes- und Kulturwissenschaften, Freie Universität Berlin, 2019.2.6, Freie Universität Berlin, Berlin, Germany.
2. 口頭発表：“Between Two Languages: Responses to Questionnaire Surveys about Language Use and Language Mixing from Young Turkish-German Bilinguals in Berlin”, Core Project “Linguistic Dynamics Science 3 (LingDy3)”, ILCAA International Symposium “Immigrant and Host Languages in Asia, Pacific and Europe: Facts behind Tidy Theoretical Constructs”, 2019.2.28, ILCAA.
3. 講演(コメント):「英語(教育)の二面性」,日本学術会議シンポジウム「学術から見る英語教育問題」, 2019.3.23, 東京大学駒場キャンパス.

**福島 康博(ふくしま やすひろ)**

研究主題:イスラームに基づく商品・サービスの規格化と地域・産業間比較研究

研究期間:2017.5.1～2020.4.30

受入教員:床呂 郁哉

**研究成果：**

1. 著書:『Q&A ハラールを知る 101 問:ムスリムおもてなしガイド』, 2018.5, 解放出版社.
2. 論文:「イスラームと金融」, 『ハラールサイエンスの展望』(民谷栄一, 富沢寿勇編), 169-180, 2019.2, シーエムシー出版.
3. 口頭発表:「桐原翠氏報告『国際的なハラール産業の拡大とその背景:グローバル・ハラール・ムーブメントとマレーシアの戦略をめぐる考察』へのコメント・質問」, 2018 年度アジア政経学会秋季大会, 2018.11.24, 新潟大学五十嵐キャンパス.
4. 報道:「『ハラール』を知っていますか?」, 『月刊 倫風』, 78-83, 2018.10.

## 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 福島 康博

課題番号: 16K01974

課題名: イスラームに基づく商品・サービスの規格化と地域・産業間比較研究: 東南アジアの例

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2017.5.1~2020.4.30

細谷 幸子(ほそや さちこ)

研究主題: イラン・イスラーム共和国における選択的人工妊娠中絶: 障害者の生きる権利をめぐる

研究期間: 2016.4.1~2019.3.31

受入教員: 飯塚 正人

## 研究成果:

1. 著書: *Thalassemia and Three Iranian Patient Activists: Their Pursuit of Advocacy*, 2019.2, Sophia University, Tokyo, Japan.
2. 論文: 「イランにおける第三者がかかわる生殖補助技術の活用に関する倫理的議論と実践」, 『東洋学術研究』57 (1), 117-134, 2018.5.
3. 論文: 「NGO の活動と役割: 脊髄損傷者を対象とした NGO を例に」, 『現代イランの社会と政治: つながる人びとと国家の挑戦』(山岸智子編著), 114-137, 2018.11, 明石書店.
4. 書評: 「株本千鶴著『ホスピスで死にゆくということ: 日韓比較から見る医療化現象』」, 『アジア経済』59 (3), 45-48, 2018.9.
5. 口頭発表: 「イランで病をもって生きる」, 科研費基盤研究(A)「イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究」全体集会・公開シンポジウム, 2018.6.23, 東京大学東洋文化研究所.
6. 講演: 「中東の結婚・妊娠・出産の現状」, 立命館大学国際言語文化研究所「ジェンダー研究会」/ 科研費基盤研究(A)「イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究」公開講演会「中東の妊活事情: 家族・医療・イスラームの視点から」, 2019.2.24, キャンパスプラザ京都 2 階第1会議室.
7. 講演: “Home Care and Women’s Role”, Deputy Minister for Nursing/ Ministry of Health and Medical Education of Islamic Republic of Iran/ Sasakawa Peace Foundation/ Isfahan University of Medical Sciences School of Nursing and Midwifery/ Nursing and Midwifery Care Research Center: Palliative Care Seminar “With an Inter-professional Approach”, 2019.3.5, Zeytoon Hall, Isfahan University of Medical Sciences, Isfahan, Iran.

宮崎 恒二(みやざき こうじ)

研究主題: ジャワにおける時空間認識—暦および神話の分析—

研究期間: 2017.4.1~2020.3.31

受入教員: 床呂 郁哉

## 競争的研究資金

科研費:

研究代表者：菅原 由美  
課題番号： 16H05662  
課題名： ジャワ語文献にみるジャワのイスラーム化再考  
研究種目： 基盤研究(B)  
期間(年度)： 2018～2019  
\*研究分担者として参加

#### 【ジュニア・フェロー】

生駒 美樹(いこま みき)

研究主題：負債の民族誌—茶をめぐる生産者間の関係  
研究期間：2018.4.1～2019.3.31  
受入教員：西井 涼子

#### 研究成果：

1. 書評：櫻田涼子，稲澤努，三浦哲也編著『食をめぐる人類学：飲食実践が紡ぐ社会関係』（昭和堂，2017），『東南アジア：歴史と文化』47，148-152，2018.5.
2. 口頭発表：「チャをめぐる生産者の負債と関係：ミャンマーの茶生産を事例に」，「負債をめぐるポリティクス：東南アジア、オセアニア、アフリカの事例から」，2018.4.28，AA 研.
3. ポスター発表：「チャ摘みをめぐる農家と農業労働者の負債関係：ミャンマーの事例から」，AA 研海外学術調査フォーラム海外学術調査フェスタ，2018.6.16，AA 研.
4. 論文：「パトロン＝クライアント関係と負債：ミャンマーのチャ摘みの事例から」『白山人類学』22，17-37，2019.3. (査読有)

岩本 佳子(いわもと けいこ)

研究主題：公文書史料によるオスマン朝の遊牧民政策の研究  
研究期間：2018.4.1～2019.3.31  
受入教員：高松 洋一

#### 研究成果：

1. 著書：『帝国と遊牧民：近世オスマン朝の視座より』，2019.2，京都大学学術出版会.
2. 総説・解説：「トプカプ宮殿博物館附属図書館・文書館」，『世界の図書館から：アジア研究のための図書館・公文書館ガイド』（U-PARL：東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門編），173-179，2019.3，勉誠出版.
3. 総説・解説：「史料とフィールドが交差する時：バルカン半島にトルコ系遊牧民の足跡を求めて」，『FILEDPLUS』20，24-25，2018.7.
4. 口頭発表：“Tax Survey as a Reference Material: A Study on Tahrir Defteri Utilization in the Post-Classical Ottoman Empire”，2nd International Congress on Ottoman Studies (OSARK)，2018.10.18，Tirana International Hotel, Tirana, Albania.
5. 口頭発表：「租税調査台帳 Tahrir Defteri はいつ消滅したのか：オスマン朝における租税調査台帳の発展と衰退の研究」，AA 研共同利用・共同研究課題「オスマン文書史料の基礎的研究」2018 年度第

2 回研究会, 2019.2.27, AA 研.

### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 岩本 佳子

課題番号: 17K13547

課題名: オスマン朝とクルド、テュルク系遊牧民の交流と対立の史的研究

研究種目: 若手研究(B)

期間(年度): 2017~2019

科研費:

研究代表者: 岩本 佳子

課題名: 帝国と遊牧民

研究種目: 研究成果公開促進費

期間(年度): 2018

### 太田(塚田) 絵里奈(おおた(つかだ) えりな)

研究主題: 前近代アラブ社会における文民エリートと生存戦略: マムルーク朝末期官僚ザイン・アッ=ディーン・イブン・ムズヒルを例に

研究期間: 2018.4.1~2019.3.31

受入教員: 黒木 英充

### 研究成果:

1. 論文: “The Muzhir Family: Marriage as a Disaster Mitigation Strategy”, *Orient* 54, 127-144, 2019.3. (査読有)
2. 書評: Doris Behrens-Abouseif, *Practising Diplomacy in the Mamluk Sultanate: Gifts and Material Culture in the Medieval Islamic World* (London and New York: IB Tauris, 2014), 『イスラーム地域研究ジャーナル』 11, 155, 2019.3.
3. 口頭発表: 「後期マムルーク朝官僚名家の生存戦略: ムズヒル家を例に」, 2018 年度三田史学会大会, 2018.6.23, 慶應義塾大学.
4. 口頭発表: “Banū Muzhir and Marriage as a Family Strategy”, 2nd German-Japanese Workshop on Mamlukology (Waseda University and University of Bonn), 2019.12.2, Waseda University.

### 受賞

住友生命スミセイ女性研究者奨励賞(2019.3.5)

### 勝畑 冬実(かつはた ふゆみ)

研究主題: エジプト映画におけるイスラーム表象の変遷

研究期間: 2018.4.1~2019.3.31

受入教員: 飯塚 正人

### 研究成果:

1. 口頭発表:「エジプト映画における『イスラーム主義』の表象:1995年から2010年までの作品分析から」, 日本中東学会第34回年次大会, 2018.5.13, 上智大学.
2. 講演:「アムル・サラマ監督『エクスキューズ・マイ・フレンチ』(日本語字幕版)の上映と解説」, 日本学術振興会カイロ研究連絡センター2018年度第3回特別懇話会, 2018.12.25, 日本学術振興会カイロ研究連絡センター.

#### 小池 まり子(こいけ まりこ)

研究主題:現代バリの社会・宗教改革運動:バリヒन्दゥー教徒の親族集団組織を事例として

研究期間:2018.4.1~2019.3.31

受入教員:西井 涼子

#### 合地 幸子(ごうち さちこ)

研究主題:インドネシア・ジャワにおける高齢者ケアをめぐる家族・親族関係に関する研究

研究期間:2018.4.1~2019.3.31

受入教員:西井 涼子

#### 研究成果:

1. 論文:「老親扶養をめぐる規範を問い直す:インドネシア・ジャワにおける高齢者福祉施設を事例として」, 『東南アジアにおけるケアの潜在力:生のつながりの実践』(速水洋子編), 151-179, 2019.2, 京都大学学術出版会.(査読有)
2. 論文:「インドネシアの高齢者ケアを担う移住労働経験者」, 『比較家族史研究』33, 32-55, 2019.3.(査読有)
3. 口頭発表:「技能実習生・水産加工分野の生活実態:茨城県の事例から」, 第1回帰還移民研究会(科研費基盤研究(C)「インドネシア人帰還移民にみる社会経済的再統合:日・馬・台の就労地別の比較」(代表:間瀬朋子)), 2018.7.1, 東洋大学.
4. 口頭発表:「インドネシア・ジャワの家族と高齢者ケア:見舞いから看取りまでの社会的動態を中心に」, 2018年度日本文化人類学会次世代育成セミナー/AA 研基幹研究「人類学におけるミクロー・マクロ系の連関」文化/社会人類学セミナー, 2018.11.17, AA 研.
5. 口頭発表:「インドネシア人海外移住労働者が構築するネットワーク:日本の水産加工分野で働く女性たちに注目して」, インドネシア研究懇話会第1回研究大会, 2018.12.6, 京都大学稲盛財団記念館.

#### 東風谷 太一(こちや たいち)

研究主題:1840年代のバイエルン王国ミュンヘンで発生したビールをめぐる騒擾を都市の営業体制・権利概念・ビールと醸造業の視点から考察すること

研究期間:2018.4.1~2019.3.31

受入教員:佐久間 寛

#### 研究成果:

1. 論文:「ビールによって生きること:1844年ミュンヘンのビール騒擾」, 『思想』1138, 30-49, 2019.2.
2. 口頭発表:「ビールによって生きること:19世紀前半ミュンヘンの醸造業と民衆」, 歴史と人間研究会

第 264 回例会, 2018.10.27, 一橋大学.

3. 講演:「都市とビール醸造(業):19 世紀前半ミュンヘンを事例に」, 同志社大学人文科学研究所「生きるための環境をめぐるマニュアルの社会史」, 2019.2.17, 同志社大学.

#### 後藤 健志(ごとう たけし)

研究主題:財産所有をめぐる政治・経済／生態に関する人類学的研究

研究期間:2018.4.1～2019.3.31

受入教員:吉田 ゆか子

#### 研究成果:

1. 論文:「アマゾニア的園芸の蔓状ネットワーク」, 『くにたち人類学研究』 12, 1-19, 2018.6
2. 口頭発表:「アマゾン植民と国家の『判読能力』:中南米におけるフロンティアをめぐる先行研究」, 国立民族学博物館研究プロジェクト「統治のフロンティア空間をめぐる人類学:国家・資本・住民の関係を考察する」(代表:佐川徹)平成 30 年度研究会, 2019. 2. 2, 国立民族学博物館.

#### 小森 真樹(こもり まさき)

研究主題:現代アメリカ合衆国における科学館の再定義:博物館展覧会の利用実態の分析から

研究期間:2018.4.1～2019.3.31

受入教員:椎野 若菜

#### 研究成果:

1. 口頭発表:「遺体が芸術になるとき:医学・美術史・ミュージアム」, 民族藝術学会東京研究例会, 2018.12.1, 立教大学.

#### 競争的研究資金

科研費:

研究代表者:小森 真樹

課題番号: 18K12533

課題名: 20 世紀後半アメリカ合衆国におけるミュージアムの文化史と近代的芸術観の形成

研究種目: 若手研究

期間(年度): 2018～2020

#### 四條 真也(しじょう まさや)

研究主題:島嶼地域における伝統の再解釈:米国制度下のハワイにおける伝統的養取慣行に関する社会人類学的研究

研究期間:2018.4.1～2019.3.31

受入教員:深澤 秀夫

#### 研究成果:

1. 総説・解説:「海との絆:ハワイっ子とカヌーの今」, 『月刊奄美』(南海日日新聞社) 6, 2018.4.1. 2.
2. 総説・解説:「アロハ・オエ」, 『月刊奄美』(南海日日新聞社), 5, 2018.9.2.

3. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組制作協力):「世界は欲しいモノにあふれてる 一番新しいハワイスイーツ&ファッション」(NHK), 2018.5.24.

#### 受賞

武蔵大学 2018 年度ベストティーチャー賞(2019.2.2)

#### 澁谷 俊樹(しぶや としき)

研究主題:ベンガルの市場の生活世界をめぐる歴史人類学的研究

研究期間:2018.4.1~2019.3.31

受入教員:外川 昌彦

#### 研究成果:

1. 口頭発表:「19 世紀の『ヒンドゥイズム』から後景化されたもの:ベンガルの祭祀から」, 日本南アジア学会第 31 回全国大会, 2018.9.30, 金沢歌劇座.

#### 武田 祥英(たけだ よしひで)

研究主題:英国の中東委任統治政策再検討—19 世紀以後の中東政策との連続性の観点から

研究期間:2018.4.1~2019.3.31

受入教員:錦田 愛子

#### 西川 和孝(にしかわ かずたか)

研究主題:西南中国における漢族移民と経済活動の歴史について

研究期間:2018.4.1~2019.3.31

受入教員:澤田 英夫

#### 研究成果:

1. 論文:「雲南下層社会への漢字リテラシーの普及:明清代を中心として」, 『中国雲南の書承文化:記録・保存・継承』(山田敦士編), 178-190, 2019.2, 勉誠出版.
2. 口頭発表:“Migration and the Development of the Shipping Basin in the Ming and Qing Periods”, “Centering the Margin: Environmental Histories of Yunnan and China’s Southwestern Frontiers” (Institute of Historical Geography, Fudan University and School of Oriental and African Studies, University of London), 2018.5.26, Fudan University, Shanghai, PRC.

#### 平田 晶子(ひらた あきこ)

研究主題:境域における地域芸能の所有と共有をめぐる法の人類学的研究—タイ・ラオスの事例

研究期間:2018.4.1~2019.3.31

受入教員:吉田 ゆか子

#### 研究成果:

1. 論文:「イサーン文化復興再考:文化評価制度の確立と東北タイ・モーラム芸能者の関係性」, 『東南アジア研究』 56 (2), 185-214, 2019.1.(査読有)

2. 講演:「SNS で育まれる東北タイの芸能集団の保証システム」, 日本文化人類学会一般公開講演会「現在・未来の経済社会に向けた人類学的知の再構築:ブロックチェーンからシェアリング経済まで」, 2018.12.23, 立命館大学.
3. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組制作協力・出演:有):「Asia Insight 伝統音楽を変えた‘エレキピン’タイ東北部」(NHK), 2018.6.8-9.
4. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組制作協力・出演:有):「真相報道バンキシャ! タイ洞窟事件」(日本テレビ), 2018.7.12.
5. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組制作協力・出演:有):「Nスタ 外国の調理道具‘ビニール袋削減のため、お弁当を持っていこう!’」(TBS テレビ), 2018.8.31.
6. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組制作協力・出演:有):「Asia Insight ラオス北部バナナ栽培ドキュメンタリー」(NHK), 2018.7.13.
7. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組制作協力・出演:有):「クローズアップ現代プラス タイ野生動物密輸事件」(NHK), 2019.1.29.

松井(金子) 生子(まつい(かねこ) なるこ)

研究主題:カンボジアにおける結婚制度と人的つながりの形成:ベトナム人とクメール人の関係を中心に

研究期間:2018.4.1~2019.3.31

受入教員:椎野 若菜

## II-4.2.3 海外学術調査総括班の活動

I-3.2.4 海外調査専門委員会を参照

## II-4.2.4 四大学連合附置研究所長懇談会

2018 年度 実施

四大学連合附置研究所長懇談会(第 35 回)

日時:2018 年 6 月 21 日(木) 16:30-17:30

会場:東京工業大学 大岡山キャンパス西 1 号館 2 階会議室

懇談事項:①第 13 回四大学連合文化講演会について

②次回以降の四大学連合文化講演会について

四大学連合文化講演会(第 13 回)

日時:2018 年 11 月 22 日(木) 13:00~16:30

場所:一橋講堂(東京都千代田区一ツ橋 2-1-2)

主催:四大学連合(東京医科歯科大学・東京外国語大学・東京工業大学・一橋大学)

企画:四大学連合附置研究所

後援:お茶の水会、東京外語会、蔵前工業会、如水会

プログラム:

- 12:20 開場
- 13:00-13:10 開会挨拶 東京工業大学 学長
- 13:10-13:20 来賓挨拶 文部科学省研究振興局学術機関課
- 13:20-14:00 東京医科歯科大学 生体材料工学研究所 教授 位高 啓史  
「寝たきりを防ぐ: 遺伝子治療・再生医療の応用」
- 14:00-14:40 AA 研 教授 近藤 信彰  
「中東における宗派紛争: 歴史と現在」
- 14:40-15:00 休憩
- 15:00-15:40 東京工業大学 先導原子力研究所・所長 教授 竹下 健二  
「福島第一原子力発電所事故で発生した汚染土壌の浄化技術」
- 15:40-16:20 一橋大学 経済研究所 准教授 堤 雅彦  
「人口減少時代における経済的な安心・安全の確保」
- 16:20-16:30 閉会挨拶 東京医科歯科大学 学長

#### 四大学連合附置研究所長懇談会(第36回)

日時:2018年12月20日(木)16:30-17:30

会場:AA研マルチメディア会議室

懇談事項:①第13回四大学連合文化講演会について

②次回以降の四大学連合文化講演会について

(第14回四大学連合文化講演会について、次回当番機関について)

③四大学連合文化講演会の取組みについて

## II-4.2.5 シンポジウム等

【2018年】

4月21日(土)

公開シンポジウム「食と農が支えたナイル・エチオピア地域の歴史と文化」

アゴラ・グローバル プロメテウスホール

共催:AA研、東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター

4月28日(土)

負債をめぐるポリティクス—東南アジア, オセアニア, アフリカの事例から

AA 研 304

共催:AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクローマクロ系の連関 2」、科研費・基盤(A)「人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開:危機を中心に」(17H00948)

5月14日(月)

福島から学ぶ:上映会

AA研306

共催: 科研費・基盤(A)「人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開:危機を中心に」  
(17H00948)、AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の  
探究—人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関2」

5月17日(木)

AA研フォーラム

AA研304

主催:AA研

5月19日(土)

ワークショップ「身体的経験をめぐる人類学と現象学からのアプローチ—不完全な身体, 人種と身体, 妊  
娠期の身体の事例から」

AA研306

共催: 科研費・新学術領域研究(研究領域提案型)「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築—  
多文化をつなぐ顔と身体表現」(1901)、AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対  
する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関2」

5月28日(月)

弘前大学連携講座「地域文化振興実習」

弘前大学

共催: 国立国語研究所(NINJAL)、AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体  
制の構築」(LingDy3)

6月16日(土)

海外学術調査フォーラム

海外学術調査ワークショップ「フィールドサイエンスにおける生物・文化的多様性の危機と保護」

AA研303ほか

主催:AA研

6月21日(木)

AA研フォーラム

AA研304

主催:AA研

6月24日(日)

シンポジウム「50年後に振り返るベンガルの農村社会—故原忠彦教授の民族誌再訪」

東京外国語大学 研究講義棟 115 号

共催: 日本ベンガル・フォーラム、AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関 2」、AA 研共同利用・共同研究課題「南アジアにおけるムスリム社会の民族誌的研究」

6 月 30 日(土)

中東イスラーム研究拠点 政治変動研究会

本郷サテライト 3F 301

共催: AA 研中東イスラーム研究拠点、新領域研究「グローバル関係学」B02 班

7 月 7 日(土)

現代中東地域研究 政治変動研究会

本郷サテライト 3F 301

主催: AA 研中東イスラーム研究拠点(現代中東地域研究事業)

7 月 8 日(日)

シンポジウム「越境のダイナミズム」

本郷サテライト 3F 301

共催: AA 研中東イスラーム研究拠点、人間文化研究機構(現代中東地域研究推進事業)

7 月 21 日(土)

ワークショップ: 「情動」科研 2017 年度調査報告会

AA 研 306

共催: 科研費・基盤(A)「人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開: 危機を中心に」(17H00948)、AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関 2」

7 月 28 日(土)

FIELDPLUS café「アジアの越境する子どもたち」

ブックハウスカフェ(東京都千代田区神田神保町 2 丁目 5 北沢ビル 1F)

主催: 『FIELDPLUS』編集部

9 月 6 日(木)

AA 研フォーラム: 言語研修(メエ語)文化講演

AA 研 306

主催: AA 研

9 月 13 日(木)~9 月 16 日(日)

中東☆イスラーム教育セミナー

AA 研 303

主催:AA 研基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」(MEIS2);協賛:地域研究コンソーシアム

9月21日(金)

2018年度第1回 フィールドサイエンス・コロキウム『『環境変化とインダス文明』プロジェクトから』

AA 研 306

共催:AA 研フィールドサイエンス研究企画センター(FSC)、AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究?人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関 2」

10月20日(土)

シンポジウム「東日本大震災と生のかたち」

AA 研 306

共催:科研費・基盤(A)「人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開:危機を中心に」(17H00948)、AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求—人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関 2」

10月26日(金)

TUFS Cinema チベット映画上映会『草原の河』

東京外国語大学アゴラ・グローバル・プロメテウスホール

共催:東京外国語大学、AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

11月17日(土)

2018年度文化/社会人類学セミナー

AA 研 304、306

共催:AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関 2」、日本文化人類学会次世代育成セミナー

11月18日(日)

第2回フィールドサイエンス・コロキウム『『地域研究からみた人道支援』をめぐって』

AA 研 306

主催:AA 研

11月25日(日)

第3回公開シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」

AA 研 303

共催:科研費・新学術領域研究(研究領域提案型)「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築—多文化をつなぐ顔と身体表現」(1901)、AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対

する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関 2」

12月5日(水)

情報資源利用研究センター(IRC) DH ワークショップ「『30年後も使えるデータ』を目指す」

AA 研 304

主催: AA 研情報資源利用研究センター(IRC)

12月8日(土)~9日(日)

科学研究費補助金プロジェクト「北方危機諸言語の形成プロセスの解明に向けたネットワーク強化」

AA 研 304

共催: AA 研、科研費・基盤(B)「北方危機諸言語の形成プロセスの解明に向けたネットワーク強化」  
(18H00665)

12月13日(木)

全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」

AA 研 306

主催: AA 研

12月15日(土)

2018年度 現代中東地域研究推進事業(民博拠点・AA 研拠点)「現代ムスリム知識人の地域横断ネットワークに関する研究」

本郷サテライト 3F セミナー室

主催: AA 研中東イスラーム研究拠点(現代中東地域研究事業)

12月16日(日)~23日(日)

第5回「言語フィールド調査ワークショップ@宮古島」

沖縄県宮古島市池間地域

主催: AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

12月22日(土)~23日(日)

2018年度 中東☆イスラーム研究セミナー

AA 研 306

主催: AA 研基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」(MEIS2); 協賛: 地域研究コンソーシアム

【2019年】

1月12日(土)

フィールド言語学ワークショップ: 第14回文法研究ワークショップ「動詞連続の諸問題」

AA 研 304

主催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

1月13日(日)

『『危機』にふれる:レバノンとケニアのフィールドをめぐるふたつの著作から』

AA 研 306

主催:AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクローマクロ系の連関 2」

1月25日(金)

FIELDPLUS café 「『似ている言語』の多様性—アルタイ型言語の諸相」

東京外国語大学アゴラ・グローバル カフェスペース

共催:『FIELDPLUS』編集部、AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

1月26日(土)

2018年度フィールドネット・ラウンジ企画「西アフリカ・イスラーム研究の新展開」

AA 研 304

共催:AA 研、科研費・若手「独立直前の西アフリカにおけるリテラシーの社会的位置づけ:ハンパテ・バの活動から」(18K12532)

2月5日(火)~8日(金)

言語研修メエ語(エカリ語)フォローアップミーティング

AA 研 306

主催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

2月8日(金)

リンディフォーラム:何が文法知識を構成するか

AA 研 304

主催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

2月16日(土)

2018年度フィールドネット・ラウンジ企画「共同研究のすすめ:ブラジル地域研究における Cross-regionxCollaboration の実践を通じて」

AA 研 304

主催:AA 研;後援:神田外語大学イベロアメリカ言語学科

2月16日(土)~2月17日(日)

公開ワークショップ「中国西南諸民族の文字学」

AA 研 301

主催:AA 研共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築1:文字学に関する用語・概念の研究」

2月20日(水)

情報資源利用研究センター・ワークショップ「危機言語アーカイブと言語ドキュメンテーション」

AA 研 304

共催:AA 研情報資源利用研究センター(IRC)、AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

3月8日(金)

『シリーズ記述文法 1 南琉球宮古語伊良部島方言』刊行記念イベント:これから記述文法を執筆する人のために

AA 研 304

主催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

3月8日(金)

『シリーズ記述文法 1 南琉球宮古語伊良部島方言』刊行記念イベント:「文法を記述する」とは6次元(東京都杉並区上荻 1-10-3-2F)

主催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

3月9日(土)

科研費プロジェクト「アルタイ諸言語を対象とした環境の変化と言語の変容に関する総合的研究」第1回研究会

九州大学伊都キャンパス・イースト1号館 B-103 教室

共催:AA 研共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における膠着性の諸相 ―音韻・形態統語・意味の統合的研究―」、AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)、科研費・基盤(A)「アルタイ諸言語を対象とした環境の変化と言語の変容に関する総合的研究」(18H03578)

3月14日(木)

AA 研フォーラム

AA 研 304

主催:AA 研

3月15日(金)

フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「研究をみせる:科学コミュニケーションの理念と技」

AA 研 304

共催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)、ジャパン GEMS センター

3月21日(木)

フィールドネット・ワークショップ「地理情報から読み解く歴史：イスラーム史におけるGISの活用」

AA 研 304

主催：AA 研フィールドサイエンス研究企画センター (FSC)

3月28日(木)

基幹研究中東イスラーム (MEIS2) 研究会

AA 研 304

主催：AA 研基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」(MEIS2)

## II-4.3 国際連携研究活動

### II-4.3.1 国際シンポジウム等一覧

【2018年】

4月16日(月)

リンディフォーラム：インドネシアの言語と文化に関する講演

使用言語：英語

AA 研 306

主催：AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

4月28日(土)

セトラック・マヌーキアーン博士講演会

使用言語：英語

本郷サテライト 3F 301

共催：中東イスラーム研究拠点、国立民族学博物館現代中東地域研究拠点

5月24日(木)

リンディフォーラム：コミュニティの中での言語と文法の研究

使用言語：英語

AA 研 306

主催：AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

6月30日(土)

国際ワークショップ「10月6日事件と現在性－暴力と民主主義」

使用言語:英語

AA 研 306

主催:AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクローマクロ系の連関 2」

6月30日(土)~7月1日(日)

国際シンポジウム/公開研究会:共同利用・共同研究課題「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容(2) ジャワのイスラーム化再考」

使用言語:英語

大阪大学豊中キャンパス国際公共政策研究科会議室 1

主催:AA 研共同利用・共同研究課題「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容(2) ジャワのイスラーム化再考」

7月2日(月)~6日(金)

インドネシア NTT 州の言語のドキュメンテーションに関するセミナーとワークショップ

使用言語:英語、インドネシア語

Hotel on the Rock(インドネシア)

共催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)、デラウェア大学 (University of Delaware)

7月18日(水)

中央ユーラシア研究セミナー(David Brophy 氏講演会)

使用言語:英語

公益財団法人東洋文庫 7階会議室

共催:AA 研中東イスラーム研究拠点(人間文化研究機構「現代中東地域研究」事業)、東洋文庫・中央アジア研究班「近現代中央ユーラシアにおける出版メディアと政治・社会運動」研究グループ、中央ユーラシア研究会

7月21日(土)

中東イスラーム研究拠点国際ワークショップ「中央アジア知識人のモビリティ:中国新疆と中東のあいだの学術・宗教ネットワーク」

使用言語:英語

AA 研 304

共催:AA 研中東イスラーム研究拠点(人間文化研究機構「現代中東地域研究」事業)、AA 研共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)「トルキスタンからイスタンブルへ—自由を求めて:20世紀初頭の中央アジアにおける政治運動・知識人運動の比較研究」

7月22日(日)~27日(金)

チベット牧畜文化辞典編集会議

使用言語:日本語、チベット語

AA 研 501

主催:共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学の手  
法に基づいて〜」

7月23日(月)~25日(水)

国際会議「言語ドキュメンテーション研究:アジアの視点から」

使用言語:英語

マヒドン大学アジア言語文化研究所(タイ)

共催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)、マヒドン  
大学アジア言語文化研究所 (Research Institute for Languages and Cultures of Asia (RILCA),  
Mahidol University)

8月2日(木)

情報資源利用研究センター(IRC)国際ワークショップ「多文化社会におけるアーカイビングの意義」

使用言語:日本語、英語

AA 研 304

主催:AA 研情報資源利用研究センター(IRC)

8月5日(日)

東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する国際ワークショップ

使用言語:英語

Hotel Meridien Kota Kinabalu (マレーシア)

共催:AA 研共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三  
期)―紛争と共存のダイナミクス」、AA 研コタキナバル・リエゾンオフィス

8月5日(日)~8日(水)

シンポジウム「日本と北東アジアの消滅危機言語 ―記述・ドキュメンテーション・復興―」

使用言語:英語

国立国語研究所(NINJAL)

共催:国立国語研究所 機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメン  
テーションの作成」、AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構  
築」(LingDy3)、科研費・基盤(S)「言語系統樹を用いた琉球語の比較・歴史言語学的研究」  
(17H06115)

8月13日(月)~17日(金)

サバ州の言語に関する共同研究ワークショップ

使用言語:英語・マレー語

The Loft Imago KK Times Square (マレーシア)

共催:AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクローマクロ系の連関 2」、AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)、日本学術振興会 国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業「国際ネットワークを活かした危機言語・少数言語の調査研究を主体的にリードする研究者の育成」、科研費・基盤(C)「マレー語地域変種における受動文のミクロー変異研究とコーパス・語彙資源開発」(18K00568)

8月31日(金)～9月1日(土)

国際ワークショップ「ロシア東洋文献研究所コレクションにもとづく中央アジア歴史文献の研究」

使用言語:英語

AA 研 306

主催:AA 研既形成拠点アジア書字コーパス(GICAS)

9月10日(月)

フィリピン南部ムスリム社会に関する実務者・専門家ワークショップ

使用言語:日本語、英語

マニラ JICA オフィス(フィリピン)

主催:AA 研コタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO)

9月29日(土)

リンディフォーラム:Justin Watkins 教授講演会

使用言語:英語

AA 研 306

共催:日本学術振興会 国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業「国際ネットワークを活かした危機言語・少数言語の調査研究を主体的にリードする研究者の育成」、AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

10月1日(月)～5日(金)

言語ドキュメンテーションセミナー

使用言語:モンゴル語、英語

モンゴル国立大学(モンゴル)

共催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)、モンゴル国立大学

10月6日(土)

ILCAA International Symposium: “Coping with Vertiginous Realities”

使用言語:英語

AA 研 303

共催:科研費・基盤(A)「人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開:危機を中心に」

(17H00948)、AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求ー人類学におけるマイクロマクロ系の連関 2」、AA 研共同利用・共同研究課題「ダイナミズムとしての生一情動・思考・アートの方法論的接合」

10月6日(土)～7日(日)

Workshop: Indic Texts and Islamicate Culture from the Ghaznavid to the Sultanate Periods

使用言語:英語、日本語

東京外国語大学本郷サテライト5階セミナールーム

共催:AA 研共同利用・共同研究課題「近世南アジアの文化と社会:文学・宗教テキストの通言語的比較分析」、ペルソ・インディカ、研究グループ「南アジアにおける文化的接触のダイナミズム」

10月10日(水)～12日(金)

チベット牧畜文化辞典編集会議

使用言語:日本語、チベット語

AA 研 501

共催:AA 研共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容～ドキュメンタリー言語学的手法に基づいて～」、AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

10月15日(月)

チベット文学研究会

使用言語:日本語、チベット語

AA 研 302

共催:チベット文学研究会、AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

11月1日(木)～3日(土)

インドネシア NTT 州の言語のドキュメンテーションに関するワークショップ

使用言語:インドネシア語

ターパン アーサ ワチャナ カトリック大学(インドネシア)

主催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3);後援:  
Atma Jaya Catholic University of Indonesia

11月28日(水)

JaCMES-LERC-KKLO Joint Roundtable “Migrants and Refugees Dynamics and Perception toward their Integration”

使用言語:英語

中東研究日本センター(JaCMES)(レバノン)

共催:中東研究日本センター(JaCMES)、Lebanese Research Center for Migration and Diaspora Studies

(LERC), Notre Dame University-Louaize (NDU), AA 研コタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO)、  
科研費・基盤(B)「中東・ヨーロッパ諸国間の国際政策協調と移民／難民の移動に関する研究」  
(17H04504)

11月30日(金)～12月1日(土)

第12回 日本における中東・イスラーム研究の最前線(ベイルート若手研究者報告会)

使用言語:英語

中東研究日本センター(JaCMES)(レバノン)

主催:AA 研基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」(MEIS2)

12月12日(水)

フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「言語ドキュメンテーションのためのコンピューターソフトウェア」

使用言語:英語

AA 研 304

主催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

12月14日(金)

リンディフォーラム:イランおよびモンゴルにおける少数言語フィールドワーク

使用言語:英語

AA 研 304

主催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

12月15日(土)～16日(日)

国際シンポジウム:Kingship, Ideology, Discourse: Legitimation of Islamicate Dynasties

使用言語:英語

AA 研 304

共催:科研費・基盤(A)「イスラーム国家の王権と正統性」(15H01895)、AA 研基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」(MEIS2)

12月15日(土)～16日(日)

人間文化研究機構プログラム南アジア地域研究第10回国際研究集会「南アジアの包括的発展」

使用言語:英語

AA 研 303

主催:人間文化研究機構プログラム南アジア地域研究

12月19日(水)

リンディフォーラム:言語ドキュメンテーションのアウトプットを再考する

使用言語:英語

AA 研 306

主催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

【2019 年】

1 月 9 日(水)

フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「言語ドキュメンテーションのためのコンピューターソフトウェア」

使用言語:英語

AA 研 304

主催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

1 月 23 日(水)

ワークショップ:タンザニアの諸言語の記述と分析

使用言語:英語

AA 研 302

共催:日本学術振興会研究拠点形成事業(B. アジア・アフリカ学術基盤形成型)「アフリカにおける言語多様性とダイナミズムに迫るアフリカ諸語研究ネットワークの構築」、AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

1 月 29 日(火)

みんなく言語学サークル第6回研究会

使用言語:英語

国立民族学博物館 4073 大会議室

共催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)、みんなく言語学サークル

1 月 29 日(火)

東京アフリカ言語学研究会 2018 年度

使用言語:英語

AA 研 306

共催:東京アフリカ言語学研究会、AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)、国立国語学研究所「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」、東京外国語大学語学研究所

1 月 31 日(木)

研究講演会 “Uyghurs in Turkey: migration and skills”

使用言語:英語

国立民族学博物館 2F 第 6 セミナー室

共催:国立民族学博物館現代中東地域研究拠点、国立民族学博物館北東アジア地域研究拠点、AA 研

中東イスラーム研究拠点(人間文化研究機構「現代中東地域研究」事業)、科研費・研究活動スタート支援「テュルク系ディアスポラの多地域・多言語的ネットワークと20世紀世界史」(17H07174)

2月2日(土)

International Workshop “Syrian Civil War: Comparative Perspectives with Lebanese and Yugoslavian Civil Wars”

使用言語:英語

明治大学和泉キャンパス・和泉図書館ホール

共催:科研費・基盤(B)「シリア内戦の比較研究—レバノン・旧ユーゴスラビアの内戦と戦後和解」(18H03440)、明治大学大学院教養デザイン研究科、科研費・国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))「ロシアの軍事大国化と中東、環黒海地域」(18KK0036)、AA 研基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」(MEIS2)

2月2日(土)～3日(日)

国際ワークショップ「言語研究の社会的インパクトについて考える」

使用言語:英語

AA 研 304

主催:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

2月6日(水)

Special Lectures: The Arms Transfer and its Recycling Mechanisms in Contested Regions: The Case of the Balkans and the Middle East

使用言語:英語

明治大学駿河台キャンパス・グローバルフロント7階 C7 室

共催:科研費・基盤(B)「シリア内戦の比較研究—レバノン・旧ユーゴスラビアの内戦と戦後和解」(18H03440)、科研費・国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))「ロシアの軍事大国化と中東、環黒海地域」(18KK0036)、明治大学国際武器移転史研究所

2月8日(金)

映画会議 <アジアを知る>この地にわが墓所あり レバノン内戦の記憶と証言

使用言語:英語、日本語

東京大学東洋文化研究所

共催:科研費・基盤(B)「シリア内戦の比較研究—レバノン・旧ユーゴスラビアの内戦と戦後和解」(18H03440)、科研費・基盤(A)「イスラーム・ジェンダー学構築のための基礎的総合的研究」(16H01899)、中東映画研究会、東大東洋文化研究所班研究「中東の社会変容と思想運動」

2月9日(土)

Lecture Meeting: Post-Civil War Reconciliations and Challenges in Lebanon

使用言語:英語

AA 研 306

共催: 科研費・基盤 (B) 「シリア内戦の比較研究—レバノン・旧ユーゴスラビアの内戦と戦後和解」  
(18H03440)、AA 研基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」  
(MEIS2)

2月15日(金)

フィールド言語学ワークショップ: テクニカル・ワークショップ「言語ドキュメンテーションのためのコンピューターソフトウェア」

使用言語: 英語

AA 研 304

主催: AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

2月17日(日)

邦人向け公開講演会「現代インドネシアのイスラームを知る 2」

使用言語: 日本語

国際交流基金ジャカルタ日本文化センター、2nd Floor ホール(インドネシア)

共催: AA 研コタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO)、AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクロー・マクロ系の連関 2」

協力: 国際交流基金ジャカルタ日本文化センター、ジャカルタ・ジャパン・クラブ

2月19日(火)

International Conference on Progressive Civil Society

使用言語: 英語

Universitas Ahmad Dahlan(インドネシア)

共催: AA 研コタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO)、Universitas Ahmad Dahlan

2月19日(火)

国際シンポジウム “Islam with Adjectives and Islami as Adjectives”

使用言語: 英語

AA 研 303

主催: AA 研中東イスラーム研究拠点 (人間文化研究機構「現代中東地域研究」事業)

2月22日(金)~26日(木)

ReNeLDA 言語ドキュメンテーションセミナー

使用言語: 英語

ダルエスサラーム大学(タンザニア)

共催: 日本学術振興会研究拠点形成事業(B. アジア・アフリカ学術基盤形成型)「アフリカにおける言語多様性とダイナミズムに迫るアフリカ諸語研究ネットワークの構築」、AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

2月28日(木)~3月1日(金)

国際シンポジウム “Immigrant and Host Languages in Asia, Pacific and Europe: Facts behind Tidy Theoretical Constructs” / 第20回東京移民言語フォーラム

使用言語:英語

AA 研 303

主催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

3月4日(月)~8日(金)

言語ドキュメンテーションセミナー

使用言語:ロシア語、英語

イルクーツク大学(ロシア)

共催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」、イルクーツク大学(ロシア)

3月6日(水)

リンディフォーラム:バントゥ諸語マイクロ・バリエーション研究の最前線

使用言語:英語

AA 研 306

主催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

3月7日(木)

中世インドにおける寺院・僧院と政治権力

使用言語:英語

本郷サテライト5階セミナールーム

主催:AA 研研究グループ「南アジアにおける文化的接触のダイナミズム」

3月13日(水)

UMS-TUFS Exchange Lecture on Culture and Society of Southeast Asia

使用言語:英語

Universiti Malaysia Sabah (マレーシア)

共催:AA 研コタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO)、Universiti Malaysia Sabah

3月14日(木)

「南アジアとペルシア文学」研究会

使用言語:英語

大阪大学中之島センター・多目的室 608

共催:AA 研研究グループ「南アジアにおける文化的接触のダイナミズム」、科研費・国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))「翻訳から見る近世南アジアの文化多元主義」(18KK0013)

3月15日(金)～17日(日)

**第2回「チベット文学と映画制作の現在」国際シンポジウム**

使用言語:日本語・チベット語(日本語通訳あり)

AA 研 303

主催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

3月18日(月)～22日(金)

**SCOPIIC ワークショップ**

使用言語:英語

AA 研 306

共催:AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)、日本学術振興会・国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業「国際ネットワークを活かした危機言語・少数言語の調査研究を主体的にリードする研究者の育成」

3月19日(火)

**JaCMES-AUB Lecture Meeting: Examining Najeeb Saleeby as American Colonial Advocate and Educator**

使用言語:英語

Auditorium A, West Hall, American University of Beirut (ベイルート)

共催:中東研究日本センター(JaCMES)、AA 研基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」(MEIS2)、ベイルート・アメリカン大学

3月29日(金)～30日(土)

**科研(基盤B)国際公開ワークショップ「チベット・ビルマ系言語の“方向”接辞」**

使用言語:英語

AA 研 304、302

主催:科研費・基盤(B)「「方向接辞」からみたチベット・ビルマ語系言語の諸相」(16H03414)

3月30日(土)～31日(日)

**第38回イラン研究会**

使用言語:英語

AA 研 303

主催:イラン研究会

## II-4.3.2 外国人研究員招へい

I-4.3.3 外国人研究員招へいを参照。

また、2018年度中に招へい期間を終えた外国人研究員の業績は I-2.6.2 所員の研究業績一覧 外国人

研究員の項を参照。

なお、このうち共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)の詳細については I-2.3.3、業績は II-3.2.2 の項をそれぞれ参照。

### II-4.3.3 外国からの研究者受け入れ(フェロー等)

#### 【フェロー】

MU, Yingying(ムー インイン)

研究主題:ペラ語及びロンウォー語の形態統語構造の比較研究

研究期間:2018.9.1~2019.8.31

受入教員:中山 俊秀

#### 研究成果:

1. 口頭発表:“Social Impact of Sociolinguistics Research”, Social Impact of Linguistics Research Workshop, 2019.2.2, ILCAA

賈越(ジア ユエ)

研究主題:満洲・ツングース諸語のケースシステムの比較研究

研究期間:2018.10.1~2019.9.30

受入教員:山越 康裕

#### 研究成果:

1. 論文:「论满语书面语并列结构」,『满语研究』2018年第2期,11-14,2018.12.(査読有)

Mohamed Soliman(モハメド ソリマン)

研究主題:中世・イスラーム期エジプト遺跡の保護と文化遺産化に向けた実際的アプローチ——「資源」から文化財へ

研究期間:2018.10.1~2018.11.30

受入教員:熊倉 和歌子

#### 研究成果:

1. 口頭発表:“GeoRadar Survey for the Exploration of the Terrestrial Subsidence in Alexandria”, NARSS (National Authority for Remote Sensing & Space Sciences) in Collaboration with Alexandria University and Egyptian Company for Space Application & Remote Sensing, 2018.4.6, Alexandria University, Alexandria, Egypt.
2. 口頭発表:“Spatializing the Topography of Islamic Alexandria for Sustainable Development-Historic Maps via Remote Sensing, GPR and GIS”, 第60回オリエント学会年次大会,2018.10.14, 京都大学.
3. 講演:“Reconstructing the Islamic Water System in Alexandria during the Medieval Period”, 科研費・新

学術領域研究(研究領域提案型)「都市文明の本質:古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」研究集会, 2018.10.19, 東京大学.

4. 講演: “Egy-Jap. Innovation of the Heritage Water System: Alexandria and Edo in the Medieval Period”, Lecture in November, 2018.11.23, Embassy of Egypt in Japan-Egyptian Cultural Office, Tokyo, Japan.
5. 講演: “Reconstructing the Historical Topography of Alexandria for Sustainable Development”, “The Impact of Climatic Changes on the Monuments and Historic Sites 2018” (Le Centre Culturel du Patrimoine Arabe), 2018.12.16, Mena House Hotel, Cairo, Egypt.
6. 講演: “Laser Scanning Application in Heritage (Case Study: Historic Cairo)”, A Training Lecture within the Framework of Reviving the Cultural Heritage of Bayt el-Qady in Historic Cairo Context by Using Terrestrial Laser Scanner and GPS, 2019.3.7, NRIAG (National Research Institute of Astronomy and Geophysics), Cairo, Egypt.

Timothy Brickell(ティモシー ブリックケル)

研究主題: A Collaborative Investigation of Annotation Methods for Analyzing Multimedia Linguistic Corpora

研究期間: 2018.10.1.~2019.3.31

受入教員: 塩原 朝子

研究成果:

1. 論文: “Reduplication in Tondano and Tonsawang”, *NUSA: Linguistic Studies of Languages in and around Indonesia* 65, 81-107, 2018.9. (査読有)
2. 講演: “Introduction to ELAN”, Course of Workshop on “Software for Documentary Linguistics”, 2018.12.12, ILCAA.
3. 講演: “Introduction to FLEX”, Course of Workshop on “Software for Documentary Linguistics”, 2019.1.9, ILCAA.
4. 講演: “Using ELAN and FLEX Together”, Course of Workshop on “Software for Documentary Linguistics”, 2019.2.15, ILCAA.
5. 講演: “Manado Malay: Features, Contact, and Contrasts”, The Second International Workshop on Malay Varieties, 2018.10.13, ILCAA.

其布尔哈斯(チベルハス)

研究主題: ダグル語方言とその変容に関する研究

研究期間: 2018.11.1~2019.10.31

受入教員: 呉人 徳司

研究成果:

1. 論文: 「モンゴル語がダグル語のハイラル方言に与えた影響」, 『現代中国における言語政策と言語継承』(包聯群編) 4, 82-89, 2019.3, 三元社. (査読有)

Lutz Marten(ルツ マーティン)

研究主題:バントゥ諸語の形態統語論的マイクロバリエーション

研究期間:2019.1.21～2019.3.12

受入教員:品川 大輔

**研究成果 :**

1. 論文:“Foreword”, *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu* (ed. by Daisuke Shinagawa and Yuko Abe), v-viii, 2019.3, ILCAA.
2. 口頭発表:“Morphosyntactic Comparison of 19 East African Bantu Languages”, Workshop on Language Description and Analysis on Tanzanian Languages, 2019.1.23, ILCAA.
3. 口頭発表:“Structural Analysis and Social Impacts”, International Workshop on Social Impacts of Linguistic Research, 2019.2.2, ILCAA.
4. 口頭発表:“Variation, Divergence and Convergence in Bantu Morphosyntax”, LingDy Forum, 2019.3.6, ILCAA.

**【ジュニア・フェロー】**

Albertus-Thomas Mori(アルベルトウス＝トーマス・モリ)

研究主題:東南アジアの華人キリスト者を巡る人類学的研究

研究期間:2018.4.1～2019.3.31

受入教員:吉田 ゆか子

**研究成果 :**

1. 口頭発表:「聖俗両道:サラワクの華人キリスト者たちの社会形成」,立命館大学環太平洋文明研究センター文化人類学班研究会「環太平洋地域における人・自然・歴史」, 2018.10.5, 立命館大学末川記念会館.
2. 口頭発表:「華人キリスト者による『短期宣教』への一考察」, 2018 年度日本文化人類学会次世代育成セミナー/AA 研基幹研究「人類学におけるミクロ-マクロ系の連関」文化/社会人類学セミナー, 2018.11.17, AA 研.
3. 講演:「印尼華人基督徒的兩個起源與相互關係(インドネシアの華人キリスト者の二つのルーツ及びその相互關係について)」, 中原大学宗教研究所訪問学人講演会, 2018.12.12, 中原大学, 中華民国.

烏云高娃(ウユンゴワ)

研究主題:近代内モンゴル知識人の文化活動

研究期間:2018.4.1～2019.3.31

受入教員:山越 康裕

Andrew David Harvey(アンドリュー デビッド ハーヴィー)

研究主題:イハズ語(バントゥ系)の記述

研究期間:2018.10.1～2019.9.30

受入教員:品川 大輔

**研究成果 :**

1. 口頭発表:“Beyond Three: A Vision for Expanded Boasian Documentary Outcomes”, LingDy Forum, 2018.12.19, ILCAA.
2. 口頭発表:“Ihanzu: An Initial Profile of a Bantu Language of the Tanzanian Rift Valley”, Workshop on Language Description and Analysis on Tanzanian Languages (Japan Society for the Promotion of Science Core-to-Core Program “Establishment of a Research Network for Exploring the Linguistic Diversity and Linguistic Dynamism in Africa”), 2019.1.23, ILCAA.
3. 口頭発表(共同発表): Andrew David Harvey and Richard Griscom “The Tanzanian Rift Valley Area: A Prolegomenon for Research and a Network”, Rift Valley Network Webinar Series, 2019.3.20, Zenode (URL: <https://www.youtube.com/watch?v=DT1yO5MQh-Y>).

## II-4.3.4 研究未開発言語文化の調査事業

今年度は該当する派遣・招へいを行わなかった。

## II-4.4 研究成果と資料の公開

### II-4.4.1 出版

2018 年度に AA 研から刊行された出版物は下記の通りである。なお、電子出版物については「電子出版物」を参照のこと。書名の冒頭に出版目録掲載番号を付した。

#### 逐次刊行物

『アジア・アフリカ言語文化研究』Journal of Asian and African Studies

No.96 (2018.9)

No.97 (2019.3)

編集:AA 研編集委員会(委員長:西井涼子)

年に 2 回発行 <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/jaas/back-issue>

所外の研究者をふくむ編集専門委員会によって運営され、毎号、査読を経た水準の高い言語学・歴史学・文化人類学に関する論文を掲載。海外からの投稿も多数あり、国内外から高い評価を得ている。

『FIELDPLUS(フィールドプラス)』 <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/field-plus/back-issue>

No.20 (2018.7) 巻頭特集 アジアの越境する子どもたち 責任編集/石井香世子

No.21 (2019.1) 巻頭特集 「似ている言語」の多様性——アルタイ型言語の諸相 責任編集/山越康裕

多様な研究分野の垣根を超えて、世界のあらゆる地域をフィールドとする研究者たちの取り組みや経験を紹介する雑誌。年 2 回(1 月・7 月)刊行。高校生以上の若い世代をふくむ多くの読者を対象として、豊富なカラー写真や図を使い、フィールド研究の面白さを伝えていく。

『アジア・アフリカの言語と言語学』 Asian and African Languages and Linguistics/AALL

ISSN: 2188-0840 <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/aall>

Vol.13(2019.3) Special Feature: “Altaic-type” Languages

編集:AA 研『アジア・アフリカの言語と言語学』編集部

《No.8 より、オンラインジャーナル化》 <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/aall/back-issue/>

フィールドワークに基づく記述的言語研究の成果を発信するために 2006(平成 18)年に創刊された学術雑誌。AA 研の言語学分野の研究者が編集。本誌は、アジア・アフリカの言語を主な対象とし、一次データに基盤を置いた記述的研究の成果を共有することで、(i) 言語システムの実現形である個別言語の包括的な理解を深め、(ii) 人間言語の構造的多様性を明らかにし、(iii) 言語記述・理論研究にも貢献することを目的としている。

### アジア・アフリカ基礎語彙集

B293 『An Akan Vocabulary (アカン語語彙集)』 古閑恭子 ISBN 978-4-86337-293-1

### 言語研修テキスト

言語研修テキストは、2016 年度版から、著作権に関する許諾を得られたものを電子出版物として公開している。以下の「電子出版物」を参照のこと。 <https://publication.aa-ken.jp/>

### 地域・文化研究

1. 黒木英充 Kuroki, Hidemitsu (ed.)

B282 [SCI-107] [MEIS-23] *Human Mobility and Multiethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies 2: Tehran, Cairo, Istanbul, Aleppo and Beirut*. 2018. ISBN 978-4-86337-282-5

2. 新谷忠彦 Shintani, Tadahiko

L.A. B283 [LSTCA117] *The Makuri Language*. 2018.6.25. ISBN 978-4-86337-283-2

3. 近藤信彰 Kondo, Nobuaki

B284 [SCI-108][MEIS-24] *Dastur al-Moluk: Complete Edition The Makuri Language*. 2018.6.25. ISBN 978-4-86337-284-9

4. 新谷忠彦 Shintani, Tadahiko

L.A. B285 [LSTCA118] *The Sonkan Kayan Language*. 2018.7.14. ISBN 978-4-86337-285-6

5. 新谷忠彦 Shintani, Tadahiko

L.A. B286 [LSTCA119] *The Kokak Language*. 2018.8.20. ISBN 978-4-86337-286-3

6. 新谷忠彦 Shintani, Tadahiko

L.A. [LSTCA120] B287 *The Dosanbu Kayan Language*. 2018.9.20. ISBN 978-4-86337-287-0

7. 藤井光・田沼幸子・西井涼子・小田亮 Fujii, Hikaru, Sachiko Tanuma, Ryoko Nishii, and Makoto Oda

- B288 『『日本人を演じる』の衝撃—美術家の問い、人類学者の応答』 *Shock of “Playing Japanese”: Question by Artist, Responses by Anthropologists*. 2018.10.31. ISBN 978-4-86337-288-7
8. 家島彦一 Yajima, Hikoichi  
B289 [SCI-109][MEIS-25] *The Book of the Wonders of India* 『インドの驚異譚』 2018.7.14. ISBN 978-4-86337-289-4
9. 星泉・海老原志穂・岩田啓介・大川謙作・三浦順子(編) Hoshi, Izumi, Shiho Ebihara, Keisuke Iwata, Kensaku Okawa, and Junko Miura (eds.)  
B295 『チベット文学と映画製作の現在 SERNYA Vol.6』 *Tibetan Literature and Filmmaking Sernya Vol.6*. 2019.3.10. ISBN 978-4-86337-295-5
10. 野田仁・小野亮介 Noda, Jin, and Ryosuke Ono  
B296 [SCI-110] [MEIS-NIHU-1] *Emigrants/Muhacir from Xinjiang to Middle East during 1940-60s*. 2019.3.25. ISBN 978-4-86337-296-2
11. 品川大輔・阿部優子 Shinagawa, Daisuke, and Yuko Abe  
B298 *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu*. 2019.3.29. ISBN 978-4-86337-297-9
12. 呉人徳司 Kurebito, Tokusu  
B298 *Лыммуылтэ тожэн : сказки Токэ. запись Токэ Я. Николай, русский перевод Алла П. Кергинто, Токусу Курэбито, редактор* 『トケの民話』 2019.3.29. ISBN 978-4-86337-298-6
13. 呉人徳司 Kurebito, Tokusu  
B299 *Лыгъоравэтльэн лыммуылтэ беликовын: чукотские сказки в записи бэликова. Русский перевод Алла П. Кергинто, Токусу Курэбито, редактор* 『ベリコフが収録したチュクチの民話』 2019.3.29. ISBN 978-4-86337-299-3

## 電子出版物

著作権者からの許諾を得て 2018 年度に公開した電子出版物は下記の通りである。<https://publication.aaken.jp/>

1. Shirai, Satoko, and Mitsuaki Endo (eds.)  
*Studies in Asian Geolinguistics VIII*. 2018. ISBN 978-4-86337-279-5
2. Suzuki, Hiroyuki  
*Studies in Asian Geolinguistics, Monograph Series No. 3. 100 Linguistic Maps of the Swadesh Word List of Tibetic Languages from Yunnan*. 2018. ISBN 978-4-86337-290-0
3. Suzuki, Hiroyuki, and Mitsuaki Endo (eds.)  
*Studies in Asian Geolinguistics, Monograph Series No. 4. Papers from the Fourth International Conference on Asian Geolinguistics*. 2018. ISBN 978-4-86337-291-7
4. Iwasa, Kazue  
*Studies in Asian Geolinguistics, Monograph Series No.5: Remarks on Maps of the Yi Script Based on the Swadesh 100 Wordlist*. 2018. ISBN 978-4-86337-292-4
5. 塩谷茂樹・何菊紅 Shioya, Shigeki, and He Juhong  
B294 『平成 30 年度言語研修「土族語」研修テキスト 土族語文法』 *ILCAA Intensive Language*

## II-4.4.2 オンライン研究資源構築・公開状況一覧

2018年度にAA研で新規に構築・公開された各種オンライン研究資源は7件(【新規】と表示)、継続して発展させたものは7件(【継続】と表示)である。その他のオンライン研究資源も継続して運用ないし維持しており、これまでに127件を公開している。なお、ここでいうオンライン研究資源とは、電子出版を除く、オンラインで公開されている辞書・語彙集、言語資料、歴史資料、文化資料、地図、言語学習・語学教材、研究ツール、企画展アーカイブなどを指す。

2018年度のアクセス件数が1万件を超えるものについては具体的な件数を示した。

### 1. 辞書・語彙集

- (1) 【継続】チベット牧畜文化辞典(パイロット版)(星泉、海老原志穂、南太加ほか)  
<https://nomadic.aa-ken.jp/> [57,886 件/年]
- (2) 【継続】チュルク諸語対照基礎語彙(児倉徳和、風間伸次郎)  
<https://turkbv.aa-ken.jp/> [13,884 件/年]
- (3) 現代チベット語動詞辞典(星泉)  
<https://star.aa-ken.jp/vdic/> [68,546 件/年]
- (4) サンスクリット電子辞書(高島淳)  
<http://www.aa.tufts.ac.jp/~tjun/sktdic/index.html> [29,622 件/年]
- (5) 日本語マラヤーラム語電子辞書(高島淳、峰岸真琴、K. P. P. Nambiar)  
<https://www.aa-ken.jp/edic/jmd/>
- (6) カンナダ語英語日本語電子辞書(高島淳、内田紀彦、B. B. Rajapurohit, 町田和彦、峰岸真琴)  
<http://www.aa-ken.jp/edic/kej/>
- (7) ヒンディー語電子辞典(町田和彦)  
[http://www.aa.tufts.ac.jp/~kmach/mrd/mrd\\_top\\_j.htm](http://www.aa.tufts.ac.jp/~kmach/mrd/mrd_top_j.htm)
- (8) ウルドゥー語・古典ヒンディー語辞書(町田和彦)  
<http://irc2010-server.aa.tufts.ac.jp/FullTextSearch/09.html>
- (9) ゾンカ語・英語辞書電子化(町田和彦)  
<http://www.aa.tufts.ac.jp/~kmach/IRC/2011/Dzongkha2011.htm>
- (10) ハウサ語、 Yoruba 語電子辞書の作成と公開(塩田勝彦、町田和彦)  
[http://www.aa.tufts.ac.jp/~kmach/IRC/2013/Hausa\\_Yoruba/Hausa\\_Yoruba\\_dic.html](http://www.aa.tufts.ac.jp/~kmach/IRC/2013/Hausa_Yoruba/Hausa_Yoruba_dic.html)
- (11) サンタル語辞書・検索(峰岸真琴)  
<http://www.aa.tufts.ac.jp/~mmine/india/india-j.htm>
- (12) 近現代中東人名辞典(飯塚正人)  
<http://www.aa.tufts.ac.jp/~masato/biotable.htm>

### 2. 言語資料

#### 2.1 少数言語・危機言語資料のアーカイブ化

- (1) 【新規】カチン・ポータルサイトの構築(倉部慶太、澤田英夫、今村真央)  
<http://kachin.lagoinst.info>
- (2) 【新規】マレー言語語地図の作成とその元となるデータ収集のシステム開発(塩原朝子)  
[https://malayvarieties.aa-ken.jp/?page\\_id=136](https://malayvarieties.aa-ken.jp/?page_id=136) [10,370 件/年]
- (3) 【継続】モンゴル諸語対照基本語彙データベース(山越康裕)  
<https://mongolicbv.aa-ken.jp/index.htm> [30,884 件/年]
- (4) 【継続】アイヌ語音声資料の文字化テキスト対応づけと公開(奥田統己、山越康裕)  
<https://ainugo.aa-ken.jp/index.html> [16,914 件/年]
- (5) アイヌ語音声資料の文字化テキスト全文検索(奥田統己、山越康裕)  
<http://ainugo.mond.jp/>
- (6) インドネシア周辺の少数言語のリソース&情報センター: ヘロン語単語ウェブサイト構築(塩原朝子)  
<https://helong-bolok.aa-ken.jp/helong-bolok.html>
- (7) 故湯川恭敏所員の調査テープに残された言語データの電子化およびメタデータ公開(塩原朝子、品川大輔)  
[https://aflang-res.aa-ken.jp/?page\\_id=178](https://aflang-res.aa-ken.jp/?page_id=178) [16,140 件/年]
- (8) Center for Language resource and information of indigenous languages in and around Indonesia(塩原朝子、内海敦子、稲垣和也)  
<https://id-lang-rc.aa-ken.jp/> [42,274 件/年]
- (9) Language resource and information of indigenous languages in the Nusa Tenggara Timur Province in Indonesia (塩原朝子、内海敦子、稲垣和也)  
<https://ntt-lang.aa-ken.jp/>
- (10) オンライン・スライアモン語テキスト集(渡辺己)  
<https://sliammontexts.aa-ken.jp/>
- (11) ツングース諸語の言語データデジタル化およびオンライン公開(風間伸次郎、渡辺己)  
<http://coe.aa.tufs.ac.jp/tungus/home.html>
- (12) 北東ユーラシアの言語文化(呉人徳司)  
<http://hokuto-asia.aa-ken.jp/>
- (13) インド洋民話の DB 化(小田淳一)  
[http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/contes\\_ocean\\_indien.html](http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/contes_ocean_indien.html)
- (14) ソンガイ語テキスト集の電子化と公開(佐久間寛)  
<http://songhay.aa-ken.jp/>
- (15) インドネシアの民話データベース(塩原朝子)  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~asako/cerita/index.htm>
- (16) アクセントの研究と尾鷲弁(平田秀)  
<https://kishu.aa-ken.jp/>
- (17) Grammar of Shina Language and Vocabulary (Based on the dialect spoken around Dras) (B. B. Rajapurohit)  
[http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/shina/shina\\_j.html](http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/shina/shina_j.html)
- (18) 浅井タケ昔話全集 I、II(峰岸真琴)

[http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki\\_gen/murasaki/asai01.html](http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/murasaki/asai01.html)

## 2.2 諸文献の電子テキスト公開

- (1) Saiva Scriptures (高島淳)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/data/saiva/>

- (2) ヒンディー語テキストコーパス (町田和彦)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/txtsrchj.htm>

- (3) Premchand 2011 (町田和彦)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/hindi/premchand/mansarovar/mansarovar.htm>

- (4) モンゴル語文献資料の電子化利用の研究 (栗林均、町田和彦)

<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/staff/hkuri/project.html>

## 2.3 文字データベース

- (1) 『和翰名苑』仮名字体データベース (岡田一祐)

<https://kana.aa-ken.jp/wakan/> [90,394 件/年]

## 3. 歴史資料

### 3.1 貴重書のデジタル公開

- (1) 【新規】シャルダン『ペルシア旅行記』画像資料デジタル・ライブラリー構築 (近藤信彰)

<http://chardinperse.aa-ken.jp/>

- (2) 【継続】Matsya Project ヴィシヌヌ教関連マイクロフィルム of デジタル化 (小倉智史)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~ogura/project/matsya/>

- (3) トムソン写真集 (吉澤誠一郎)

<http://irc.aa.tufs.ac.jp/thomson/> [41,374 件/年]

- (4) 「モッラー・ナスレディーン」修復デジタル化プロジェクト (近藤信彰)

[http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr\\_al\\_din/index.html](http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr_al_din/index.html)

- (5) パレスチナ／イスラエルにおける共存を求める運動の記録 (岩崎稔、錦田愛子、武田祥英)

<https://otherisrael.aa-ken.jp/>

- (6) 『エジプト週報』のデジタル化と公開 (小田淳一)

<http://irc.aa.tufs.ac.jp/egypt/semaine/>

- (7) 20 世紀前半のインドネシア華人関連資料コレクション (津田浩司)

[http://www.aa.tufs.ac.jp/~tsuda/IRC/arsip\\_tionghoa/](http://www.aa.tufs.ac.jp/~tsuda/IRC/arsip_tionghoa/)

- (8) ムラユ語-外来語辞典 “Kitab VORTARO” (津田浩司)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tsuda/IRC/vortaro/>

- (9) 『マウリティウス・アウグストゥス・ドウ・ベニョフスキーの回想と旅行記』のデジタル化 (深澤秀夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/materials/book1/index.html>

- (10) ダヴィッド・ジョーンズ『英語—マダガスカル語辞典・マダガスカル語—英語辞典』のデジタル化 (深澤秀夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/materials/book2/index.html>

- (11) 『305 条法典』(1881 年) のデジタル化 (深澤秀夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/materials/book3/index.html>

(12) 『Sikidy 占い解説方法手稿』のデジタル化(深澤秀夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/materials/book6/index.html>

(13) 「小児錦」文字資料コーパス構築へむけた資料集とデジタル化(菅原純)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/xiaoerjin/index.htm>

### 3.2 文献・碑文の画像および電子化テキスト公開

(1) 【新規】『清文彙書』デジタル画像化(早田清冷)

<https://manjuisabuhabithe.aa-ken.jp/>

(2) 【継続】Old Tibetan Documents Online(星泉、岩尾一史ほか)

<https://otdo.aa-ken.jp/> [794,682 件/年]

(3) Javanese Documents Online(菅原由美、青山亨ほか)

<https://jvdo.aa-ken.jp/>

(4) インド・歴史書文献の電子データ化(高島淳)

[http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/irc/rajatarangini\\_p.html](http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/irc/rajatarangini_p.html)

(5) インド聖典データベース(高島淳)

[http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/data/gicas/ind\\_scripture.html](http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/data/gicas/ind_scripture.html)

(6) インド演劇論根本教典の電子データ化(高島淳)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/irc/engekiron.html>

(7) ホイアンの碑文(三尾裕子、澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/DAMCSR/insctop.html>

(8) 「ホイアン歴史民族誌」構築・公開プロジェクト(三尾裕子、澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/DAMCSR/hoian-ethn.html>

(9) チャム碑文検索(高島淳)

[http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/khmercham/cham\\_insc.html](http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/khmercham/cham_insc.html)

(10) チャム碑文画像データベース(澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/ODSEAS/chaminsc/chaminscindex.html>

(11) チャムの碑文(澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/ODSEAS/chaminsc.html>

(12) Bagan Concordance(澤田英夫)

<https://burminsc-conc.aa-ken.jp/>

(13) ビルマ文字の碑文・墨文(画像+転写)(澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/ODSEAS/burminsc.html>

(14) Sinai Rock Inscription(小田淳一)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/arbscript/arbimg.html>

### 3.3 地名データベース

(1) 中部ベトナム地名対応表(現在⇔『同慶地輿志』所収)(澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/gnames/gnames-viet.html>

(2) カチン州地名データベース(試験公開)(澤田英夫・梅川通久)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/gnames/gnames-kachin.html>

## 4. 文化資料

### 4.1 画像資料のデジタル公開

- (1) 【継続】オスマン演劇ポスター・音楽データベース(松本菜穂子)

<http://osmanlitiyatro-musik.aa-ken.jp/>

- (2) 【継続】オスマン演劇ポスター画像公開(江川ひかり)

<http://osmanlitiyatro.aa-ken.jp/>

- (3) オスマン演劇ポスターに関する情報の精度化(江川ひかり)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/osman/>

- (4) ヒンドゥーの神々の画像様相(高島淳)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/indspace/dcsidx.html>

- (5) ヒンドゥー教の神々(町田和彦)

[http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/hindu\\_gods/gods\\_top\\_j.htm](http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/hindu_gods/gods_top_j.htm)

### 4.2 写真資料のデジタル公開

- (1) 南アジア民俗写真データベース(外川昌彦) [22,280 件/年]

<https://southasianfolklore.aa-ken.jp/>

- (2) 環インド洋におけるマダガスカル歴史・文化・生業についての画像資料(深澤秀夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/slideimages/>

- (3) マダガスカル写真館～ツィミヘティ族の人びとの暮らし～(深澤秀夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/gallery/index.html>

- (4) Asian Photograph Selection(澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/asianphoto/>

- (5) 福建系漢民族の民間信仰データベース(福建編)(三尾裕子)

[http://www.aa.tufs.ac.jp/~ymio/cafe/hokkien/data\\_f.html](http://www.aa.tufs.ac.jp/~ymio/cafe/hokkien/data_f.html)

### 4.3 レコード音源のデジタル公開

- (1) スース地方(モロッコ)の吟遊詩人による 20 世紀前半の音源のデジタル化(小田淳一、堀内正樹)

[http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/chants\\_berberes.html](http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/chants_berberes.html)

### 4.4 情報集積データベース

- (1) Center for Asian and African Sign Languages (AASL)(星泉、亀井伸孝)

<http://aasl.aacore.jp/wiki/>

- (2) リアルタイムフィールドワーク報告システムの構築(梅川通久)

<https://rfr.aa-ken.jp/>

## 5. 地図

- (1) 多層ベースマップ(黒木英充)

<http://asp.netmap.jp/mebasemap/index.html>

- (2) オスマン古地図(jpeg データ)(黒木英充)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kuroki/map/frameM.html>

- (3) オスマン古地図(Zoom データ)(黒木英充)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/gis/ottomanmaps/index.html>

- (4) フィールド 3D マッピングプロジェクト: 歴史と文化の時空間表現(椎野若菜)

<http://aacore.cloc.jp/mosaic/>

## 6. 言語学習・語学教材

- (1) ベンデ語の語学教材("Tusahule Sibhende" (2015))のマルチメディア(Web)版の作成(阿部優子)

<https://bendeproject.aa-ken.jp/> [37,128 件/年]

- (2) ビルマ語学習のためのテキスト(澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/oldtexts-sjis.html>

- (3) ビルマ文字のローマ字転写方式(澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/burroman.pdf>

- (4) デーヴァナーガリー文字の発音と書き順(町田和彦)

[http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/grammatology/devanagari/dvngr\\_top\\_j.htm](http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/grammatology/devanagari/dvngr_top_j.htm)

- (5) ヒンディー語の文字転写規則(町田和彦)

[http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/dv\\_trans/dv\\_tr\\_j.htm](http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/dv_trans/dv_tr_j.htm)

- (6) こうすれば話せる CD ヒンディー語(町田和彦)

[http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/hindi/asahi/as\\_top\\_j.htm](http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/hindi/asahi/as_top_j.htm)

- (7) エキスプレスヒンディー語(町田和彦)

[http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/hindi/express\\_hindi/ex\\_top\\_j.htm](http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/hindi/express_hindi/ex_top_j.htm)

- (8) ヒンディー語オノマトペ(擬態語・擬声語)(町田和彦)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/onoma.htm>

- (9) ヒンディー語: 動物の名前とその鳴き声(町田和彦)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/onoma.htm>

- (10) チベット語会話(星泉)

<https://star.aa-ken.jp/kaiwa/>

## 7. 研究ツール

- (1) 【新規】Unicode 対応多言語テキストを簡単に作成する補助ツールの作成と公開(高橋洋成)

<https://easy-multiscript.aa-ken.jp/>

- (2) 【新規】モンゴル語および関連諸言語用ソフトキーボード(山越康裕)

[https://mongolicbv.aa-ken.jp/list\\_of\\_webkeyboard.html](https://mongolicbv.aa-ken.jp/list_of_webkeyboard.html)

- (3) アラビア文字紀年銘(クロノグラム)年代計算プログラムの公開(高松洋一)

<http://coe.aa.tufs.ac.jp/abjad/JP/> [19,172 件/年]

- (4) アラビア文字紀年銘変換プログラム(高松洋一)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/irc/tarih.html>

- (5) 全文検索システム(町田和彦)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/server/fts.htm>

- (6) 多重置換システムの構築(町田和彦)

[http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/\\_02.html](http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/_02.html)

- (7) ヒンディー語・ウルドゥー語の形態素自動解析(町田和彦、萩田博、萬宮健策)  
[http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/\\_08.html](http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/_08.html)  
[http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/\\_09.html](http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/_09.html)
- (8) ヒンディー語・ウルドゥー語の語彙属性自動解析(町田和彦、萩田博、萬宮健策)  
[http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/etym\\_hirdu/2016.htm](http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/etym_hirdu/2016.htm)
- (9) 「AjaxIME」(多言語・多文字文字入力システム)(町田和彦)  
[http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/AjaxIME/AjaxIME\\_09.html](http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/AjaxIME/AjaxIME_09.html)
- (10) 多言語入力用インプットメソッド(IME) AAA+(町田和彦)  
[http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/gicas/ASTI/AAA/info/info\\_j.htm](http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/gicas/ASTI/AAA/info/info_j.htm)
- (11) Workbench for Indic Scripts(町田和彦)  
[http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/gicas/ASTI/workbnch/cl\\_dn\\_pt.htm](http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/gicas/ASTI/workbnch/cl_dn_pt.htm)
- (12) AA 研辞書データベースの WebAPI 提供への試み(松田訓典)  
<https://ircdict.aa-ken.jp/>
- (13) 言語調査票のデジタル化(町田和彦)  
[http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/AA2000/AA\\_2000.html](http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/AA2000/AA_2000.html)
- (14) タミル語 2000 語(町田和彦)  
[http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/AA2000/AA\\_2000.html](http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/AA2000/AA_2000.html)
- (15) 言語調査票(峰岸真琴)  
[http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki\\_gen/query/aaquery-1.htm](http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/query/aaquery-1.htm)
- (16) Myanmar Text Converter(澤田英夫)  
<http://myanmarconv.aa-ken.jp/myanmarconv/>
- (17) ビルマ文字のローマ字転写方式(澤田英夫)  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/burroman.pdf>
- (18) GIS を用いた認知地図の解析の試み(河合香吏)  
[http://irc.aa.tufs.ac.jp/gis/gis\\_project.html](http://irc.aa.tufs.ac.jp/gis/gis_project.html)

## 8. 研究者情報

- (1) フィールドネット(フィールドサイエンス企画研究センター)  
<https://fieldnet.aa-ken.jp> [206,148 件/年]
- (2) 国際学術研究調査関係研究者データベース(海外学術調査総括班)  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~gistr/drosrp.html>

## 9. 企画展アーカイブ

- (1) 祈りにつながるイスラーム: エチオピア西部の信仰とその歴史  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/islam.ethiopia/index.html>
- (2) チベット牧畜民の仕事展(星泉ほか)  
<http://tibetanpastoralists.blogspot.jp/>
- (3) アジア諸文字のタイプライター展(荒川慎太郎)  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/asiatypewriter2015/>

- (4) カイロの肖像・19世紀(黒木英充)  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/kairo/>
- (5) 中東古地図遊覧(黒木英充)  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/mapex2013/index.html>
- (6) 静謐なる聖地(黒木英充)  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/paleb2014/>
- (7) スタジオ・フォトグラフィ・アズ・ア・ドリームマシン 夢を創る機械としてのスタジオ写真 ケニアのスタジオ写真家たち 1912-2001(椎野若菜、石川博樹)  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/dream-machine/>
- (8) 豊穡なる埃及絵画展 エジプト学者プリス・ダヴェンヌが描いたナイル流域の人びと(高松洋一、飯塚正人)  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/egypt/>
- (9) 中国古文字 図版にみる先秦漢字の芸術と歴史(陶安あんど)  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/komonji/>
- (10) 鮮烈なる阿富汗 一八四八 石版画にみるアフガニスタンの風俗と習慣(近藤信彰)  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/afghan/>
- (11) 好奇字展 漢字と東アジアの文字周遊(荒川慎太郎)  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/kanji/>
- (12) 写真展「古都バガン あまたなる仏塔の郷へ」(澤田英夫)  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/oldbagan/>
- (13) 臺灣資料: テキスト・音・映像で見る台湾 ～一九三〇年代の小川・浅井コレクションを中心として(三尾裕子ほか)  
<http://www.gicas.jp/taiwan/>
- (14) アラビア文字の旅(町田和彦)  
<http://www.gicas.jp/a-moji/index.html>
- (15) アサバスカンリバイバル(呉人徳司、中山俊秀ほか)  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/athabaskan/>
- (16) アジア文字曼陀羅～インド系文字の旅(町田和彦ほか)  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/I-moji/>

#### II-4.4.3 公開講座の実施、外部公開講座への講師派遣

講演: 「大学に見る壁とこれからの生き方」

講師: 中山俊秀

開催日: 2018.4.1.

会場等: 大学合格ガイダンス(英泉予備校)

講演: 「世界につながり広がっていく時代の生き方」

講師: 中山俊秀

- 開催日: 2018.4.11.  
会場等: 特別講義(布池外語専門学校)
- 講演: 「憎悪と殺戮の「聖地エルサレム」:ユダヤ教、キリスト教、イスラム教」  
講師: 飯塚正人  
開催日: 2018.5.19.  
会場等: 第44回栃木県オリエントセミナー(栃木県立博物館)
- 講演: 「イスラム情勢」  
講師: 飯塚正人  
開催日: 2018.6.6.  
会場等: 警察大学校警部任用科本課程第53期研修(警察大学校)
- 講演: 「言葉が失われるときに何が失われるのか:言語の大量消滅問題」  
講師: 中山俊秀  
開催日: 2018.6.1.  
会場等: 特別授業(英泉予備校)
- 講演: 「「研究者」というキャリアとこれからのキャリア作り」  
講師: 中山俊秀  
開催日: 2018.6.2.  
会場等: 東京都立国際高等学校キャリアガイダンス(東京都立国際高等学校)
- 講演: 「イスラム世界を理解する」  
講師: 飯塚正人  
開催日: 2018.7.6.  
会場等: 第65回法務省入国管理局関係職員特別科(難民調査官)研修(法務省法務総合研究所)
- 講演: 「イスラーム教徒の考え方と思いを知るために」  
講師: 飯塚正人  
開催日: 2018.8.10.  
会場等: 東進ハイスクール「大学・学部研究会」(TKP ガーデンシティ品川)
- 講演: 「意味の伝え合いの奇跡:言葉の不思議と楽しみ」  
講師: 中山俊秀  
開催日: 2018.8.5.  
会場等: 富士山のふもと文化祭(三島市民文化会館)
- 講演: 「イスラム情勢」

- 講師: 飯塚正人  
開催日: 2018.9.12.  
会場等: 警察大学校警部任用科本課程第 54 期研修(警察大学校)
- 講演: 「イスラム世界を理解する」  
講師: 飯塚正人  
開催日: 2018.10.30.  
会場等: 第 53 回法務省入国管理局関係職員高等科研修(法務省法務総合研究所)
- 講演: 「イスラム情勢」  
講師: 飯塚正人  
開催日: 2018.11.29.  
会場等: 警察大学校警部任用科本課程第 55 期研修(警察大学校)
- 講演: 「イブン・バットゥータとバーブルが伝えるインドの料理」  
講師: 小倉智史  
開催日: 2018.12.23.  
会場等: 中世インド宮廷料理研究会「中世インド料理復元の試み」(山食音)
- 講演: 『似ている言語』の多様性:アルタイ型言語の諸相」  
講師: 山越康裕  
開催日: 2019.1.25.  
会場等: FIELDPLUS café(東京外国語大学アゴラ・グローバル)
- 講演: 「イスラム世界を理解する」  
講師: 飯塚正人  
開催日: 2019.1.31.  
会場等: 第 16 回法務省入国管理局関係職員専攻科研修(法務省法務総合研究所)
- 講演: 「イスラム情勢」  
講師: 飯塚正人  
開催日: 2019.3.8.  
会場等: 警察大学校警部任用科本課程第 56 期研修(警察大学校)

## II-4.5 公共的利用

### II-4.5.1 共同利用スペース等の稼働状況

セミナー室(301)

【共同利用・共同研究課題研究会】

|                     |   |
|---------------------|---|
| 2018/5/18(金)        | 共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」2018年度第1回研究会    |
| 2018/6/1(金)         | 共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」2018年度第2回研究会    |
| 2018/6/23(土)        | 共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」2018年度第3回研究会    |
| 2018/7/6(金)         | 共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」2018年度第4回研究会    |
| 2018/7/20(金)～21(土)  | 共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」2018年度第5回研究会    |
| 2018/9/22(土)～23(日)  | 共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」2018年度第6回研究会    |
| 2018/10/5(金)～6(土)   | 共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」2018年度第7回研究会    |
| 2018/10/13(土)～14(日) | 共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容～ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて～」2018年度第3回研究会 |
| 2018/11/9(金)～10(土)  | 共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」2018年度第8回研究会    |
| 2018/11/24(土)       | 共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」2018年度第9回研究会    |
| 2018/12/7(金)        | 共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」2018年度第10回研究会   |
| 2018/12/15(土)       | 共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における膠着性の諸相 – 音韻・形態統語・意味の統合的研究 –」2018年度第2回研究会    |
| 2018/12/21(金)～22(土) | 共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」2018年度第11回研究会   |
| 2019/1/11(金)～13(日)  | 共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」2018年度第12回研究会   |
| 2019/2/1(金)～2(土)    | 共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」2018年度第13回研究会   |
| 2019/2/9(土)         | 共同利用・共同研究課題「文法の動的体系性を探る(1): 文法の多重性と分散性」2018年度第2回研究会               |

- 2019/2/10(日) 共同利用・共同研究課題「イスラーム聖者廟の財産管理に関する史料学的研究」2018年度第3回研究会
- 2019/2/16(土)～17(日) 公開ワークショップ「中国西南諸民族の文字学」／共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築1:文字学に関する用語・概念の研究」2018年度第3回研究会
- 2019/3/1(金)～2(土) 共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」2018年度第14回研究会

#### 小会議室(302)

##### 【共同利用・共同研究課題研究会】

- 2018/5/20(日)～5/21(月) 共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容～ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて～」2018年度第1回研究会
- 2018/6/3(日) 共同利用・共同研究課題「スワヒリ語諸変種にみられる多様性とダイナミズムへのアプローチ」2018年度第1回研究会
- 2018/6/9(土) 共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」2018年度第1回研究会
- 2018/7/22(日) 共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究(フェーズ1)」2018年度第1回研究会
- 2018/7/25(水)～26(木) 共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容～ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて～」2018年度第2回研究会
- 2018/10/13(土) 共同利用・共同研究課題「スワヒリ語諸変種にみられる多様性とダイナミズムへのアプローチ」2018年度第2回研究会
- 2018/10/20(土) 共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」2018年度第2回研究会
- 2018/11/10(土)～11(日) 共同利用・共同研究課題「イスラーム聖者廟の財産管理に関する史料学的研究:イラン・サファヴィー朝祖廟を事例として」2018年度第2回研究会
- 2018/12/22(土) 共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究(フェーズ1)」2018年度第2回研究会
- 2019/2/16(土) 共同利用・共同研究課題「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容(2)ジャワのイスラーム化再考」2018年度第3回研究会
- 2019/3/17(日) 共同利用・共同研究課題「南アジアにおけるムスリム社会の民族誌的研究」2018年度第2回研究会

##### 【シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他】

- 2018/10/15(月) チベット文学研究会
- 2019/1/23(水) ワークショップ:タンザニアの諸言語の記述と分析
- 2019/3/30(土) 科研(基盤 B)国際公開ワークショップ「チベット・ビルマ系言語の“方向”接辞」

#### 大会議室(303)

##### 【共同利用・共同研究課題研究会】

- 2018/9/6(木)～7(金) Workshop: Survival Strategies of Minority Groups (1)／共同利用・共同研究  
課題「中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究」  
2018 年度第 1 回研究会
- 2018/10/6(土) ILCAA International Symposium: “Coping with Vertiginous Realities”／共同  
利用・共同研究課題「ダイナミズムとしての生—情動・思考・アートの方法論  
的接合」2018 年度 2 回研究会
- 2019/1/12(土)～13(日) 第 11 回オスマン文書セミナー／共同利用・共同研究課題「オスマン文書史  
料の基礎的研究」2018 年度第 1 回研究会
- 2019/3/9(土)～10(日) 共同利用・共同研究課題「近世南アジアの文化と社会:文学・宗教テキストの  
通言語的比較分析」2018 年度第 2 回研究会

**【シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他】**

- 2018/6/16(土) 海外学術調査フォーラム
- 2018/9/13(木)～16(日) 中東☆イスラーム教育セミナー
- 2018/11/25(日) 第 3 回公開シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構  
築」
- 2018/12/15(土)～16(日) 人間文化研究機構プログラム南アジア地域研究第 10 回国際研究集会「南ア  
ジアの包括的発展」
- 2019/2/19(火) 現代中東地域研究推進事業(民博拠点・AA 研拠点)主催 国際シンポジウ  
ム “Islam with Adjectives and Islami as Adjectives”
- 2019/2/28(木)～3/1(金) 国際シンポジウム “Immigrant and Host Languages in Asia, Pacific and  
Europe: Facts behind Tidy Theoretical Constructs”／第 20 回東京移民言語フ  
ォーラム
- 2019/3/15(金)～17(日) 第 2 回「チベット文学と映画制作の現在」国際シンポジウム
- 2019/3/30(土)～31(日) 第 38 回イラン研究会

**マルチメディア会議室(304)**

**【共同利用・共同研究課題研究会】**

- 2018/5/19(土) 共同利用・共同研究課題「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容(2)ジャ  
ワのイスラーム化再考」2018 年度第 1 回研究会
- 2018/5/26(土)～27(日) 共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築1:文字学に関する用  
語・概念の研究」2018 年度第 1 回研究会
- 2018/6/2(土)～3(日) 共同利用・共同研究課題「イスラーム聖者廟の財産管理に関する史料学的  
研究:イラン・サファヴィー朝祖廟を事例として」2018 年度第 1 回研究会
- 2018/6/23(土) 共同利用・共同研究課題「東・東南アジアの越境する子どもたち——トランス  
ナショナル家族の子どもをめぐる文化・アイデンティティとローカル社会——」  
2018 年度第 1 回研究会
- 2018/6/30(土) 共同利用・共同研究課題「モンゴル諸語における言語変容—外的要因と内  
的要因—」2018 年度第 1 回研究会
- 2018/7/7(土) 共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における膠着性の諸相 —音韻・形

- 態統語・意味の統合的研究」2018 年度第 1 回研究会  
 2018/10/6(土)～7(日) 共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築1:文字学に関する用語・概念の研究」2018 年度第 2 回研究会  
 2018/10/13(土)～14(日) 共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」2018 年度第 2 回研究会  
 2018/12/22(土) 共同利用・共同研究課題「アイヌ語現地調査資料のアーカイブズ構築にかんする学際的研究」2018 年度第 2 回研究会  
 2018/2/9(土) 共同利用・共同研究課題「イスラーム聖者廟の財産管理に関する史料学的研究」2018 年度第 3 回研究会  
 2019/2/27(水) 共同利用・共同研究課題「オスマン文書史料の基礎的研究」2018 年度第 2 回研究会  
 2019/3/10(日) 共同利用・共同研究課題「文法の動的体系性を探る (1):文法の多重性と分散性」2018 年度第 3 回研究会  
 2019/3/23(土)～24(日) 共同利用・共同研究課題「『プレゼンス・アフリケーヌ』研究(2)テキスト・思想・運動」2018 年度第 3 回研究会

【シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他】

- 2018/4/28(土) 負債をめぐるポリティクス——東南アジア, オセアニア, アフリカの事例から  
 2018/5/17(木) AA 研フォーラム  
 2018/6/21(木) AA 研フォーラム  
 2018/7/21(土) 中東イスラーム研究拠点国際ワークショップ「中央アジア知識人のモビリティ:中国新疆と中東のあいだの学術・宗教ネットワーク」  
 2018/8/2(木) 情報資源利用研究センター(IRC)国際ワークショップ「多文化社会におけるアーカイブの意義」  
 2018/11/17(土) 2018 年度文化／社会人類学セミナー  
 2018/12/5(水) 情報資源利用研究センター(IRC) DH ワークショップ「『30 年後も使えるデータ』を目指す」  
 2018/12/8(土)～9(日) 科学研究費補助金プロジェクト「北方危機諸言語の形成プロセスの解明に向けたネットワーク強化」  
 2018/12/12(水) フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「言語ドキュメンテーションのためのコンピューターソフトウェア」  
 2018/12/14(金) リンディフォーラム:イランおよびモンゴルにおける少数言語フィールドワーク  
 2018/12/15(土)～16(日) 国際シンポジウム:Kingship, Ideology, Discourse: Legitimation of Islamicate Dynasties  
 2019/1/9(水) フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「言語ドキュメンテーションのためのコンピューターソフトウェア」  
 2019/1/12(土) フィールド言語学ワークショップ:第 14 回文法研究ワークショップ「動詞連続の諸問題」  
 2019/1/26(土) 2018 年度フィールドネット・ラウンジ企画「西アフリカ・イスラーム研究の新展開」

|                  |  |
|------------------|--|
| 2019/2/2(土)～3(日) | 国際ワークショップ「言語研究の社会的インパクトについて考える」  |
| 2019/2/8(金)      | リンディフォーラム:何が文法知識を構成するか   |
| 2019/2/15(金)     | フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「言語ドキュメンテーションのためのコンピューターソフトウェア」                     |
| 2019/2/16(土)     | 2018 年度フィールドネット・ラウンジ企画「共同研究のすすめ:ブラジル地域研究における Cross-region×Collaboration の実践を通じて」 |
| 2019/2/20(水)     | 情報資源利用研究センター・ワークショップ「危機言語アーカイブと言語ドキュメンテーション」                                     |
| 2019/3/8(金)      | 『シリーズ記述文法 1 南琉球宮古語伊良部島方言』刊行記念イベント:これから記述文法を執筆する人のために                             |
| 2019/3/14(木)     | AA 研フォーラム  |
| 2019/3/15(金)     | フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「研究をみせる:科学コミュニケーションの理念と技」                           |
| 2019/3/21(木)     | フィールドネット・ワークショップ「地理情報から読み解く歴史:イスラーム史における GIS の活用」                                |
| 2019/3/28(木)     | 基幹研究中東イスラーム(MEIS2)研究会  |
| 2019/3/29(金)     | 科研(基盤 B)国際公開ワークショップ「チベット・ビルマ系言語の“方向”接辞」  |

#### マルチメディアセミナー室(306)

##### 【共同利用・共同研究課題研究会】

|                     |  |
|---------------------|--|
| 2018/5/12(土)        | 共同利用・共同研究課題「ダイナミズムとしての生—情動・思考・アートの方法論的接合」2018 年度第 1 回研究会                 |
| 2018/6/2(土)         | 共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」2018 年度第 1 回研究会                                 |
| 2018/6/23(土)～24(日)  | 共同利用・共同研究課題「社会性の起原:ホミニゼーションをめぐる」2018 年度第 1 回研究会                          |
| 2018/7/8(日)         | 共同利用・共同研究課題「「わざ」の人類学的研究—技術, 身体, 環境(「もの」の人類学的研究(3))」2018 年度第 1 回研究会       |
| 2018/7/15(日)        | 共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)—紛争と共存のダイナミクス」2018 年度第 1 回研究会 |
| 2018/7/28(土)～29(日)  | 共同利用・共同研究課題「人類社会の進化史的基盤研究(4)」成果取りまとめ                                     |
| 2018/10/14(日)       | 共同利用・共同研究課題「ダイナミズムとしての生—情動・思考・アートの方法論的接合」2018 年度第 3 回研究会                 |
| 2018/11/10(土)～11(日) | 共同利用・共同研究課題「人類社会の進化史的基盤研究(4)」成果取りまとめ                                     |
| 2018/12/9(日)        | 共同利用・共同研究課題「文法の動的体系性を探る(1):文法の多重性と分散性」2018 年度第 1 回研究会                    |
| 2019/1/11(金)～12(土)  | 共同利用・共同研究課題「「わざ」の人類学的研究—技術, 身体, 環境(「も                                    |

- の」の人類学的研究(3)」2018年度第2回研究会  
 2019/2/11(月) 共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」2018年度第3回研究会  
 2019/2/16(土)～17(日) 共同利用・共同研究課題「社会性の起原:ホミニゼーションをめぐって」2018年度第2回研究会  
 2019/3/4(月) 共同利用・共同研究課題「「わざ」の人類学的研究ー技術、身体、環境」2018年度第3回研究会  
 2019/3/24(日) 共同利用・共同研究課題「ダイナミズムとしての生ー情動・思考・アートの方法論的接合」2018年度第5回研究会

【シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他】

- 2018/4/16(月) リンディフォーラム:インドネシアの言語と文化に関する講演  
 2018/5/14(月) 福島から学ぶ:上映会  
 2018/5/19(土) ワークショップ「身体的経験をめぐる人類学と現象学からのアプローチー不完全な身体,人種と身体,妊娠期の身体の事例から」  
 2018/5/24(木) リンディフォーラム:コミュニティーの中での言語と文法の研究  
 2018/6/30(土) 国際ワークショップ「10月6日事件と現在性ー暴力と民主主義」  
 2018/7/21(土) ワークショップ:「情動」科研2017年度調査報告会  
 2018/8/31(金)～9/1(土) 国際ワークショップ「ロシア東洋文献研究所コレクションにもとづく中央アジア歴史文献の研究」  
 2018/9/6(木) AA研フォーラム:言語研修(メエ語)文化講演  
 2018/9/21(金) 2018年度第1回 フィールドサイエンス・コロキウム『環境変化とインダス文明』プロジェクトから」  
 2018/9/29(土) リンディフォーラム:Justin Watkins 教授講演会  
 2018/10/20(土) シンポジウム「東日本大震災と生のかたち」  
 2018/11/17(土) 2018年度文化/社会人類学セミナー  
 2018/11/18(日) 第2回フィールドサイエンス・コロキウム『地域研究からみた人道支援』をめぐって」  
 2018/12/13(木) 全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」  
 2018/12/19(水) リンディフォーラム:言語ドキュメンテーションのアウトプットを再考する  
 2018/12/22(土)～23(日) 2018年度 中東☆イスラーム研究セミナー  
 2019/1/13(日) 『危機』にふれる:レバノンとケニアのフィールドをめぐるふたつの著作から」  
 2019/1/29(火) 東京アフリカ言語学研究会  
 2019/2/5(火)～8(金) 言語研修メエ語(エカリ語)フォローアップミーティング  
 2019/2/9(土) Lecture Meeting: Post-Civil War Reconciliations and Challenges in Lebanon  
 2019/3/6(水) リンディフォーラム:バントゥ諸語マイクロ・バリエーション研究の最前線  
 2019/3/18(月)～22(金) SCOPIC ワークショップ

研修室(405)

【共同利用・共同研究課題研究会】

2018/12/15(土) 共同利用・共同研究課題「モンゴル諸語における言語変容—外的要因と内的要因—」2018年度第2回研究会

IRC センター長室(501)

【シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他】

2018/7/22(日)～27(金) チベット牧畜文化辞典編集会議

2018/10/10(水)～12(金) チベット牧畜文化辞典編集会議

資料展示室

【シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他】

2018/4/23(月)～5/25(金) 企画展「祈りにつながるイスラーム:エチオピア西部の信仰とその歴史」

2018/6/1(金) 企画展「祈りにつながるイスラーム:エチオピア西部の信仰とその歴史」展示解説

本郷サテライト

【共同利用・共同研究課題研究会】

2018/6/24(日) 共同利用・共同研究課題「『プレザンス・アフリケーヌ』研究(2)テキスト・思想・運動」2018年度第1回研究会

2018/6/30(土)～7/1(日) 共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築:在来農業革命の視点から」2018年第1回研究会

2018/10/6(土)～7(日) Workshop: Indic Texts and Islamicate Culture from the Ghaznavid to the Sultanate Periods / 共同利用・共同研究課題「近世南アジアの文化と社会:文学・宗教テキストの通言語的比較分析」2018年度第1回研究会

2018/12/1(土) 共同利用・共同研究課題「エチオピア・ジンマ王国伝来イスラーム祈禱集研究」2018年度第1回研究会

2018/12/15(土) 共同利用・共同研究課題「ダイナミズムとしての生—情動・思考・アートの方法論的接合」2018年度第4回研究会

2019/3/2(土)～3(日) 共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築:在来農業革命の視点から」2018年度第3回研究会

2019/3/3(日) 共同利用・共同研究課題「エチオピア・ジンマ王国伝来イスラーム祈禱集研究」2018年度第2回研究会

2019/3/11(月) 共同利用・共同研究課題「近世南アジアの文化と社会:文学・宗教テキストの通言語的比較分析」第2回研究会

【シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他】

2018/4/28(土) セトラック・マヌーキアーン博士講演会

2018/6/30(土) 中東イスラーム研究拠点 政治変動研究会

2018/7/7(土) 現代中東地域研究 政治変動研究会

2018/7/8(日) シンポジウム「越境のダイナミズム」

|               |   |
|---------------|---|
| 2018/12/15(土) | 2018 年度 現代中東地域研究推進事業(民博拠点・AA 研拠点)主催「現代ムスリム知識人の地域横断ネットワークに関する研究」 |
| 2019/3/7(木)   | 中世インドにおける寺院・僧院と政治権力   |

## II-4.5.2 文献資料室の利用状況

2018 年度 来館数(単位: 人)

|          |          |          |         |        |        |          |
|----------|----------|----------|---------|--------|--------|----------|
| 4 月 176  | 5 月 162  | 6 月 249  | 7 月 163 | 8 月 79 | 9 月 86 |          |
| 10 月 197 | 11 月 184 | 12 月 153 | 1 月 124 | 2 月 76 | 3 月 62 | 総計 1,711 |

アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題  
2018年度年次報告書

---

2020年1月16日発行  
発行：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所  
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

---